鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　17

平成12年度発掘調査報告
（第２分冊）

平成13年３月

鎌倉市教育委員会

大倉幕府周辺遺跡群

大倉幕府周辺遺跡群

総　目　次

（第１分冊）

ごあいさつ……Ⅰ
例　言……Ⅱ
平成12年度調査の概観……Ⅲ

1　弁ヶ谷遺跡（No.249）材木座四丁目336番７地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……4
第２章　調査経緯とグリッド配置・基本土層……6
第３章　検出遺構と出土遺物……8
第４章　まとめ……24
2　長谷小路周辺遺跡（No.236）由比ガ浜三丁目254番15外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……40
第２章　調査の経過……40
第３章　検出した遺構……42
第４章　出土した遺物……50
第５章　まとめ……50
3　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目402番５地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……102
第２章　調査の経緯と経過……108
第３章　発見された遺構と遺物……113
第４章　まとめ……121
4　政所跡（No.247）雪ノ下三丁目989番４地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……135
第２章　調査の経緯と成果の概要……137
第３章　発見された遺構と遺物……140
第４章　分析……169
第５章　調査成果のまとめ……179
5　下馬周辺遺跡（No.200）由比ガ浜二丁目110番５地点
第１章　調査の概要……207
第２章　検出した遺構……209
第３章　出土遺物……216
第４章　まとめ……224
6　米町遺跡（No.261）大町二丁目2313番15地点
第１章　遺跡概観……243
第２章　検出した遺構と遺物……248

第３章　まとめ ……271
7　理智光寺跡（No.265）二階堂字理智光寺750番１地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……286
第２章　調査の経緯 ……291
第３章　発見された遺構と遺物 ……292
第４章　まとめ ……300

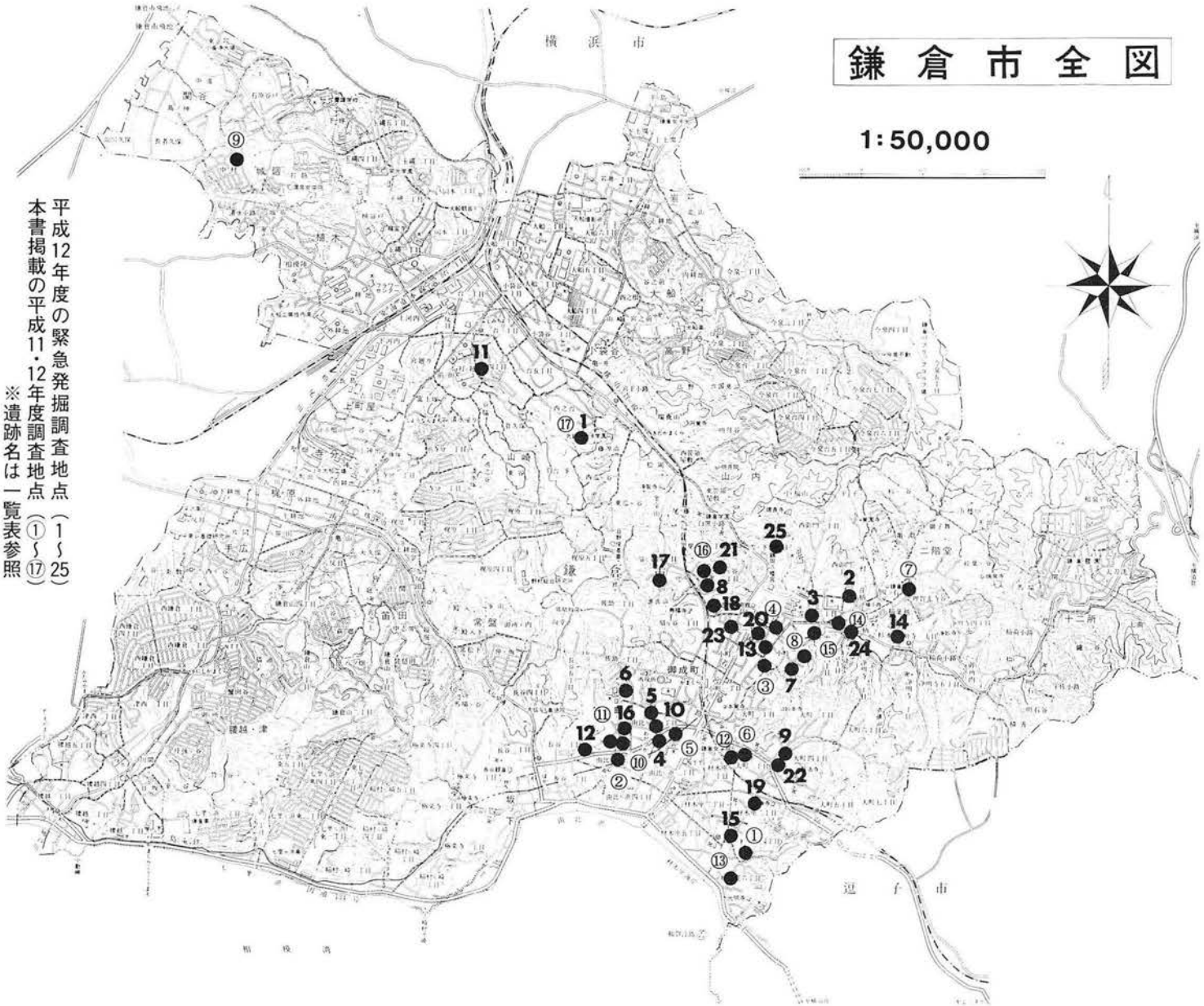
（第２分冊）

8　東勝寺跡（No.246）小町三丁目523番14地点
第１章　環境と立地……4
第２章　調査の概要……8
第３章　発見した遺構……10
第４章　出土した遺物……14
第５章　調査成果……16
9　玉縄城跡（No.63）城廻字中村473番８地点
第１章　玉縄城と調査地点……28
第２章　調査について……30
第３章　検出遺構……31
第４章　出土遺物……35
第５章　まとめ……36
10　笹目遺跡（No.207）笹目町285番１外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……50
第２章　調査の概要……52
第３章　確認された遺構と遺物……55
第４章　まとめ……62
11　笹目遺跡（No.286）笹目町286番１外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境……77
第２章　調査の経緯と堆積土層……78
第３章　確認された遺構と遺物……80
第４章　まとめ……85
12　米町遺跡（No.245）大町二丁目2308番１地点
第１章　遺跡外観……98
第２章　検出遺構と出土遺物 ……101
第３章　まとめ ……110
13　材木座町屋遺跡（No.261）材木座六丁目760番１地点
第１章　歴史的環境 ……122
第２章　調査について ……124
第３章　検出遺構 ……126
第４章　出土遺物 ……131

第５章　まとめ ……138
付編 ……149
14　大倉幕府周辺遺跡群（No.49）雪ノ下字大倉耕地562番16地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……165
第２章　調査の経過と層序 ……165
第３章　検出した遺構・遺物 ……170
第４章　まとめ ……197
15　大倉幕府周辺遺跡群（No.49）雪ノ下四丁目580番10外地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……220
第２章　調査の概要 ……222
第３章　検出遺構と出土遺物 ……224
第４章　まとめ ……266
16　武蔵大路周辺遺跡（No.194）扇ガ谷三丁目397番地点
第１章　遺跡の位置と歴史的 ……280
第２章　調査の経緯 ……284
第３章　発見された遺構と遺物 ……286
第４章　調査成果のまとめ ……303
17　台山遺跡（No.29）台字西の谷1718番３地点
第１章　遺跡の諸環境 ……317
第２章　調査の概要 ……320
第３章　調査成果 ……322
第４章　まとめ ……328

鎌倉市全図

1:50,000



平成12年度の緊急発掘調査地点（1～25）
本書掲載の平成11・12年度調査地点（①～⑰）
※遺跡名は一覧表参照

東勝寺跡（No.246）

とうしょうじ

小町三丁目523番14地点

例　　言

1．本報文は、東勝寺跡（神奈川県遺跡台帳№246）内、鎌倉市小町三丁目523番14地点に於ける個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が平成11年10月25日から同年11月20日まで実施した。調査対象面積は約90㎡。

3．調査及び整理作業の体制は以下の通り。

調 査 担 当　小林康幸

調　査　員　汐見一夫　山上玉恵

調査補助員　田畑衣理　渡邊美佐子

作　業　員　有田政夫　安斉進　奥山利平　中須洋二　星富蔵　町田義一　渡辺久夫

4．本報文に関わる整理作業及び執筆は、調査員及び調査補助員が分担して行った。執筆者名は各稿末に明記し、これを汐見が編集した。又、本報に使用した写真は図版１の全景写真をリモコン式高所撮影装置に拠り木村美代治が、他の遺構を汐見が、遺物は山上が撮影した。

5．出土遺物の内、舶載陶磁器は手塚直樹氏（鎌倉考古学研究所所長）に御教示を賜り、図９―16の石膏入れは小西さつき氏に依頼した。

6．現地調査から本報作成に至るまで、次の機関・各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。

(社)鎌倉市シルバー人材センター　東国歴史考古学研究所　鎌倉考古学研究所　工藤建設

7．本調査に係わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第１章　環境と立地……4
第２章　調査の概要……8
第３章　発見した遺構……10
第４章　出土した遺物……14
第５章　調査成果……16

挿図・表目次

図１　東勝寺跡の範囲と調査地点……4
図２　調査地点の位置と周辺の地形……6
図３　国土座標上の位置……8
図４　堆積土層……9
図５　１面全測図……10
図６　２面全測図……11
図７　２面の遺構……12
図８　２面の遺構（断面図）……13
図９　出土遺物……14
図10　北東支谷地形概念図……16
表１　出土遺物計測表……17
表２　出土遺物破片数表……17

写真図版目次

図版１　１面全景（北から）……21
２面礎石列（北東から）……21
２面礎石列（北から）……21
図版２　２面礎石列（南東から）……22
２面礎石列（東から）……22
２面炭層（南から）……22
図版２　２面褐釉壺出土状況（南から）……22
図版３　調査区南壁堆積土層……23
調査区東壁堆積土層……23
調査区北壁堆積土層……23
図版４　出土遺物……24

第１章　環境と立地

地理的・歴史的環境

本遺跡地は鎌倉市小町三丁目253番に所在する。鶴岡八幡宮前を東西に走行する横小路を東へ250m程進むと、その突き当たりに天台宗宝戒寺がある。この寺は東勝寺で自刃した北条高時の菩提を弔うために、高時邸址に後醍醐天皇が建立したという。その背後に、葛西ヶ谷と呼ばれる北西に開口した扇形の

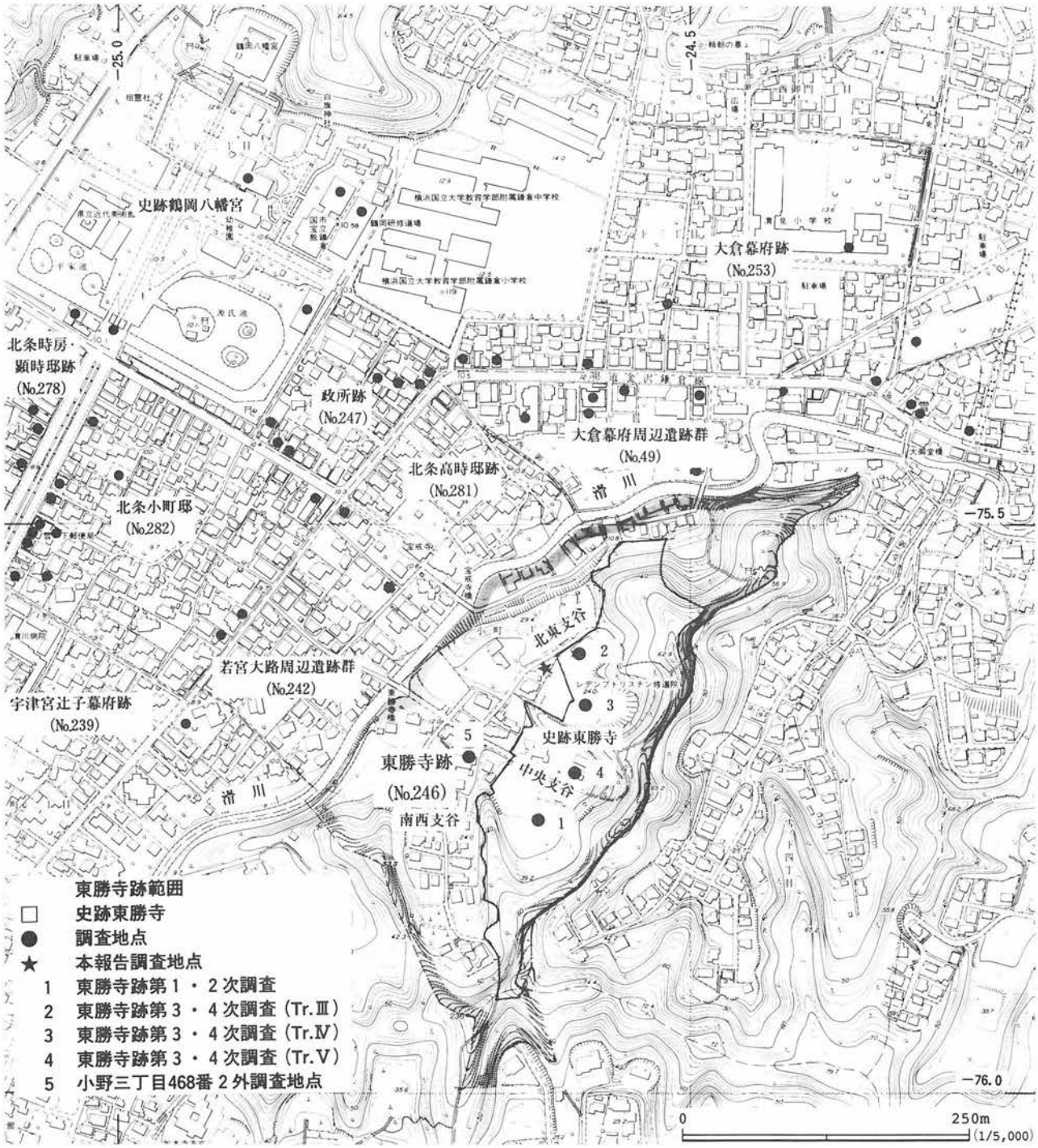


図１　東勝寺跡の範囲と調査地点

谷戸がある。谷戸は北東・中央・南西支谷の大きく3つに分けられ、それぞれ階段状に平場が広がる。葛西ヶ谷と他の支谷との境となる陵線はすべて馬の背状に狭く、この陵線の北西端は金沢路に向かって切崖となり、急激な傾斜で滑川に落ち込んでいる。滑川は十二所と二階堂の谷奥に源を発し、葛西ヶ谷の北西側前面を由比ヶ浜に向かって南下し、東側には屏風を立てたようだということから屏風山と呼ばれる山が聳えており、谷の内部を見通せないようになっている。これらの地形的要因から谷戸に入るには、現況でも宝戒寺から小町大路を南行して2本目の道を左折した先にある東勝寺橋からのみとなっている。また、葛西ヶ谷の山稜一筋を境とする東側には、源頼朝が文治元年(1185)父義朝の菩提を弔うために建立した寺跡(勝長寿院跡)と伝えられる大御堂ヶ谷、さらにその東側には北条泰時が元仁元年(1224)父義時追善供養のために建立した釈迦堂があったと伝える谷戸が開口している。

葛西ヶ谷という地名の由来は、頼朝の臣であった葛西清重の館があったことに由来している。この地には古くから東勝寺跡の伝承があり、寛永末から正保頃(1638～48)成立したとみられる『玉舟和尚鎌倉記』には、「一東勝寺法界寺ノ後也。平高時腹ノ寺也。今ハ礎モ無之。但高時ノ一門同時煮割腹ノ人々ノ塚アリト云フ。」と記されている。北条高時をはじめとする一族が自刃したという東勝寺跡は、今では「腹切りやぐら」があるのみとなっている。

東勝寺は山号を青龍山と号し、禅密兼修の寺院であった。開基は北条泰時、開山は栄西の弟子退耕行勇とするが、開創の時期は不祥である(『本朝高僧伝』)。東勝寺は十刹の一つに列せられ、元亨3年(1323)の貞時13年忌供養には諸寺のうち10番目に多い53人の僧衆が参加しており、当時の住持南山士雲が東勝寺で貞時の追善供養まで行っている(『北条貞時十三年忌供養忌』)。この史料と、東勝寺が北条氏代々の墳墓の地としていることから(『太平記』)みても、開基である泰時以来、北条氏と東勝寺は密接な関係であったといえる。元弘3年(1333)5月22日、『太平記』の高時並一門以下於東勝寺自害事の条には、「総ジテ其門葉タル人二百八十三人、(中略)此一所ニテ死スル者、総ジテ八百七十余人也」と北条一門の最後を記しており、この時に東勝寺は恐らく全焼したと考えられている。

その後の東勝寺は、復興・廃絶を何度も繰り返していることが五山の位次から推察できる。元弘3年以降に復興し、暦応5年(1342)には第5位、文和2年(1353)は第3位、最終的に五山の位次が改訂された至徳3年(1386)には関東十刹の第3位と、東勝寺が十刹に列せられている。また、義堂周信の『空華集』に「東勝の天章を賀す」という七言律詩があり、これは東勝寺の復興を祝賀した詩と考えられている。文明18年(1486)10月27日に万理集九が鎌倉に訪れた際には東勝寺が廃寺であったとし(『梅花無尽蔵』)、至徳3年から文明18年の間に再び廃絶していたことが、永正9年(1512)5月20日には、古河公方足利政氏は妙徳を東勝寺住持に任じ、政氏が東勝寺を再興している(『東山文庫記録』)。最終的に東勝寺がいつ廃絶したかは明確でないが、元亀4年(1573)の仏日庵所蔵「北条家政氏印判状」によると東勝寺領が建長寺九成僧菊に与えられており、このことから東勝寺は元亀4年には廃滅していたのであろう。同年の文書には「下地東勝寺分、只今明地之由」とあり、東勝寺の廃滅がこの時からあまり遠い時代のことではないことを示している。

東勝寺跡ではこれまでに4地点で発掘調査が行われている。第1・2次調査では石畳の坂道や石塁状の石垣といった城郭を思わせるような遺構が発見され、北条氏の家紋である三鱗文のついた瓦や舶載品を主体とした遺物が出土している。第3・4次調査では東勝寺の主要伽藍と思われる掘立柱建物が発見されている。これらの調査結果から東勝寺は寺院に違いはないものの、地形的要因も含めて北条高時の最後の砦としても機能していたと考えられ、あらためて東勝寺と北条氏の関係に深さを推察することができよう。現在東勝寺は第1次～第4次の調査結果を基に、史跡東勝寺として国指定されている。今回の調査は史跡東勝寺の周縁にあたる神奈川県遺跡台帳No.246の東勝寺跡内である。　(田畑衣理)

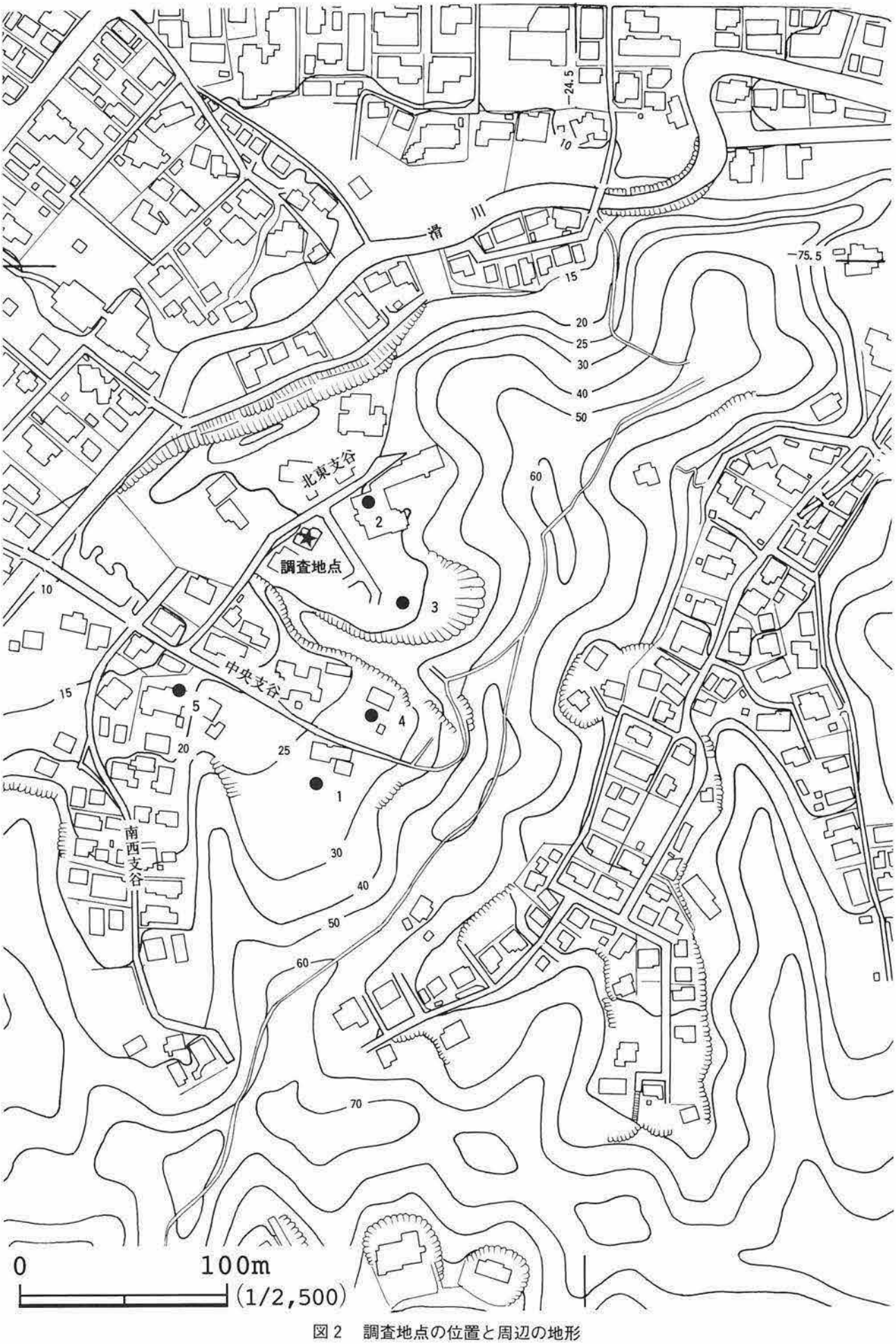


図２　調査地点の位置と周辺の地形

調査地点の立地

東勝寺跡とされる葛西ヶ谷は西側を南下する滑川に向って扇形に開き、南西・中央・北東の３つの支谷から成る。このうち北西に開口し最も広い中央支谷が旧状を良く留めていると思われ、平坦面は上下２段に分れる。現状では東勝寺橋から道路がそのほぼ中央を通り、この道路の南側が第１・２次調査、北側が第３・４次調査のTr.Ⅴ・Ⅵである。第１・２次調査では鎌倉石列や石敷参道、多数のピットや礎石、炭化物層等の遺構群の他、三ツ鱗文平瓦や舶載陶磁器・国内産陶土器類が出土し、往事を偲ばせる多大な成果を得て東勝寺跡調査の先駆けとなった。又、発見された遺構群と文献資料や周辺の地形を鑑み、東勝寺跡が鎌倉幕府終焉の地としての必然性や一寺院としての意義等、多くの事が指摘されている。この第１・２次調査の成果から、重要遺構の確認調査として実施された第３・４次調査のTr.Ⅴでは、掘立柱建物・区画溝・井戸・土壙・石組遺構等が発見されている。掘立柱建物は外縁に雨落ち溝が巡る梁間４間×桁行７間(以上)の総柱式建物で、各柱穴の検出状況や出土遺物から元弘三年(1333)に火災炎上した東勝寺の一宇である事が指摘され、北条氏を開基とする市内他寺院の伽藍配置から柿葺か檜皮葺の方丈である可能性が推定されている。出土遺物も舶載陶磁器から国内産陶土器類、嗜好品から日常雑記に至るまで多量に出土している。これら第１～４次調査の成果から、中央支谷を中心とした一帯が平成11年(1999)７月31日に国史跡指定された。

南西支谷は北向きに開口する。開発が進んで殆どが宅地化しているが、現況で平坦面は４段に分れている。尤も、南西支谷内では確認調査を含めて調査の記録が無く、現況の平坦面が中世期の東勝寺に関わる姿を留めているか否かは知る術はない。

今次調査地点が含まれる北東支谷は西向きに開口し、２段の平坦面に分れる北側小谷と、４段の平坦面に分れる南側小谷から成り、各小谷内の山裾では小規模な平場が在る。両小谷の境界である尾根は、移改築前の修道院建設の際に寸断され明瞭ではない。北側小谷は第３・４次調査のTr.Ⅰ・Ⅱの成果では、東西奥行約20m、南北幅約30mと推測され、元弘三年(1333)の東勝寺炎上に前後して建物が在り、その後然し足る期間を置かずに生活が営まれたことを発見された遺構から指摘されている。南側小谷では第３・４次調査の成果では、具体的な遺構配置は不明瞭ながらも岩盤や基盤層の削平・造成に拠る、ある程度共通した区画方法が採られていることが推定されている。又、谷開口部を埋立てる様な大規模な造成を伴う建物址を発見している。本調査地点は北東支谷内で、現況の地図上で観ると南北両小谷を境界する尾根の先端部分付近平坦面上に中ると考えられる。宗教法人レデントプトリスチン修道院が移改築し、付近が宅地造成された一角である。　　(汐見一夫)

【地点名と引用・参考文献】

地点１　1975年調査（第１次)。「19.東勝寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』　1983年　鎌倉市教育委員会。
1976年調査（第２次)。赤星直忠・大三輪龍彦他『東勝寺遺跡発掘調査報告書』　1977年　鎌倉市教育委員会。

地点２～４　1996～1997年調査。　菊川英政他　『東勝寺跡　―第３・４次遺構確認調査報告書―』　1998年　鎌倉市教育委員会

地点５　1999年調査。　『東勝寺跡発掘調査報告書　鎌倉市小町３丁目468番外』　2000年　東勝寺跡発掘調査団

貫達人・川副武胤　『鎌倉廃寺事典』　有隣堂　1980年

白井永二　『鎌倉事典』　東京堂出版　1976年

三浦勝男　『鎌倉の史跡』　かまくら春秋社　1983年

第２章　調査の概要

調査経緯・経過・結果の概要

本調査は地下室を伴う個人専用住宅の事前相談を受け、確認調査の結果を基に諸手続き及び協議を経て発掘調査を行うこととなった。調査対象面積は本来約90㎡であるが、残土を場内処理することや隣地が近接していることもあり、調査範囲と期間は縮小された。

海抜約20ｍを測る現況地表面から約２ｍを重機により除去し、調査に伴う残土置場を確保し調査区外と見なし、狭小な範囲での調査開始となった。第１面全景をリモコン式高所撮影装置にて撮影した後、残土山が安全上限界に達しようとしていた為、やむを得ず調査区を更に縮小した。第２面の調査中には、既に記録保存等の終了した範囲に残土を人力にて移動し、本来の調査対象範囲で遺跡の把握に努めたが、安全上及び調査期間の問題から果せなかった。実際の調査面積は第１面・第２面共に50㎡に満たない。第２面検出レベルで、ほぼ規定深度近くまで掘り下がった事もあり、記録保存終了後に関係各方面に調査終了の旨連絡し、出土遺物と器材を撤収し調査終了とした。

諸々限られた調査ではあったが、大型の建物遺構を思わせる礎石列の発見や、褐釉壷他の舶載陶磁器が出土する等、史跡範囲外での東勝寺を考える上での一定の成果を得られた。

国土座標上の位置

調査に際し、現況の敷地境界を網羅する方眼を本調査区の形状に合わせて任意に設定した。国土座標値は、本地点調査中に東勝寺跡発掘調査団(図２・地点５)の御協力に依り、Ｂ－２グリッドのＸ座標値(－75 624.000)・Ｙ座標値(－24 630.000)の値を得て、これを本報告全測図には示している。又、第１～４次調査の調査区及びグリッド配置を合成し図３に示した。図３は前掲地点２～４の報告書図３と机上で手作業にて計算し合成した為、本報告図５・６の国土座標値とは若干のずれが生じている。各グリッド名称には南西交点を用い、南西端Ａ－０を起点に東西方向はアルファベット、南北方向には算用数字を４ｍ毎に付した。尚、現地調査の際にはＢ－２が残土置場に埋没してしまう為、Ｃ－２を遺構実測の基準点としている。

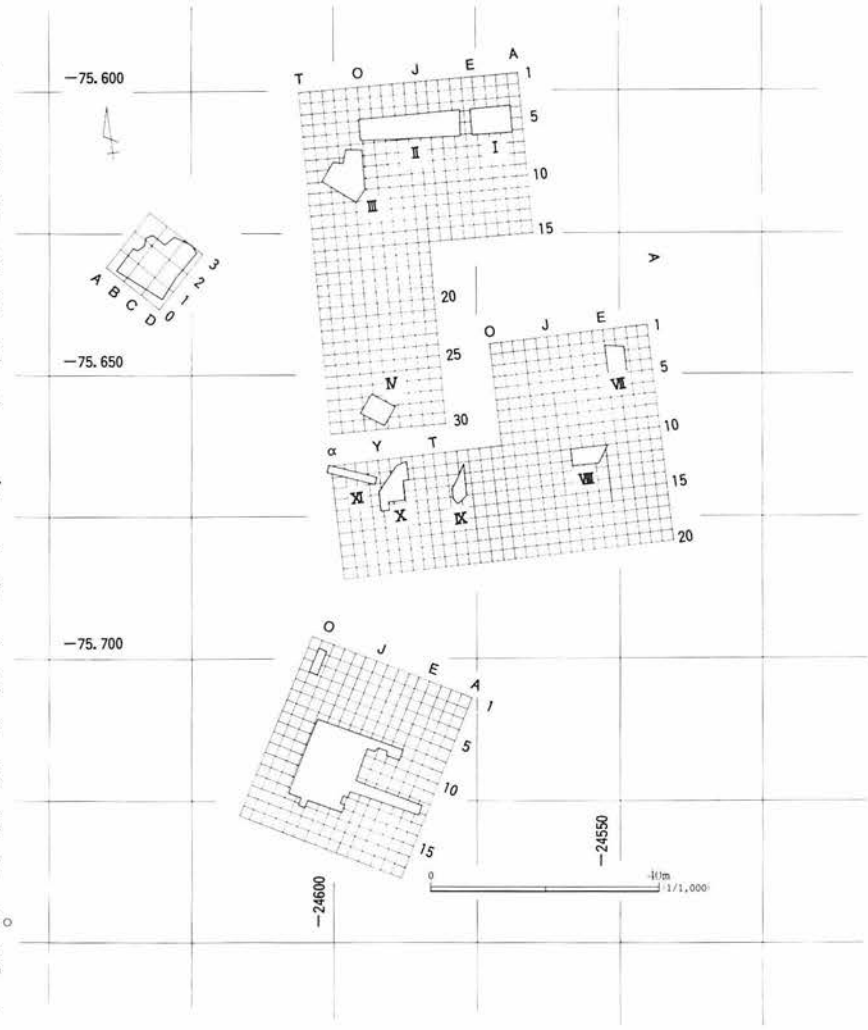
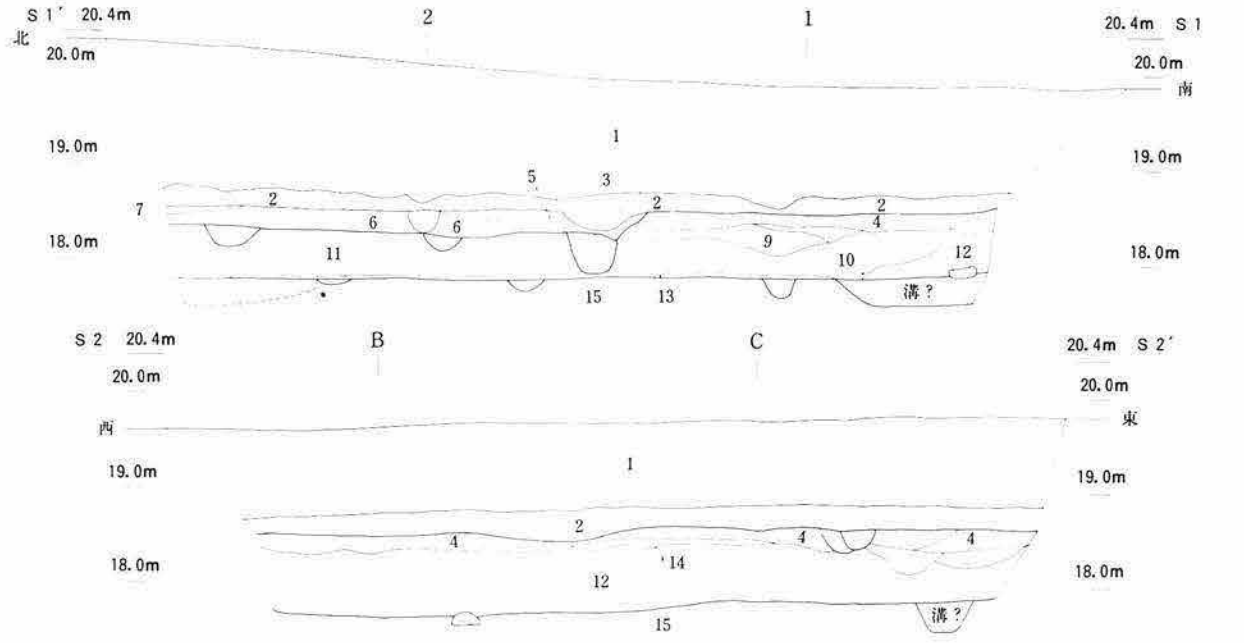


図３　国土座標上の位置



土層注記

1．近世以降の堆積土。
2．褐色粘質土　土丹粒・土器粒・炭を含む。
3．暗茶褐色粘質土。
4．茶褐色粘質土　上面は貝砂層が撒かれ、堅くしまる。
5．暗茶褐色粘質土　玉石礫を含む。
6．暗茶褐色粘質土。
7．灰茶褐色粘質土。
8．暗褐色粘質土。
9．黒褐色粘質土。玉石礫・炭を含む。
10．暗褐色砂質粘土 ＋ 大小土丹層。
11．黒褐色粘質土　多量の土丹粒を含む。
12．灰黄褐色砂礫層 ＋ 大型土丹層。
13．黒褐色粘質土　炭・焼土を含み、粘性がある。
14．茶褐色粘土　炭を含み、軟らかい。
15．土丹による地業硬化面。

図４　堆積土層

堆積土層

図４には、調査区東壁及び南壁の堆積土層図を現況地表面から示した。調査地点及び周辺では、第３・４次調査の後宅地造成が行われたこともあり、北東の一角を除きほぼ平坦化され旧地形は失われた状況であった。調査前の現況は海抜20m前後を測る。

１層は造成土及び近世以降の堆積土。２層はしまりの良好な褐色粘質土で、土丹粒・かわらけ粒・炭を全体に内包する。上面は海抜18.80m前後で、ほぼ水平に堆積する。確認調査の際にはこの２層上面を中世遺構面としたが、表土掘削時に一定範囲を精査したものの、顕著な遺構は発見されず出土遺物も疎らであった。この為調査期間を鑑み本層位も重機に依り除去し、遺物は表面採集できたものを中世遺物包含層出土として扱うこととした。

４層上面は調査開始面である。上面は海抜18.60m前後で、８～10層・12層で嵩上げされた上面を覆う様にほぼ水平に堆積する。全体に土丹粒を混交して堅くしまり、上面には化粧掛けの如く貝砂を撒いている。この貝砂層は調査区南北中央付近で緩やかに落込み、上面レベルを合わせる様に堆積するのが６層であり、その下層の上面海抜18.40m前後を測る11層と共に、しまり良くほぼ水平に堆積する。調査では捉えられなかったが、第２面廃棄後に土地利用の変化に伴う土砂の搬入と地業が行われ、６層・11層上面も利用する細かな生活面の更新が行われていた可能性がある。

15層上面は調査第２面で、大小土丹を叩き潰して平坦にした様な地業硬化面である。南北の石列が発見されたＣラインより東では隙間無く堅くしまり、上面レベル17.90m前後を測りほぼ水平で平坦、Ｃラインより西では地業はやや雑で、上面レベル17.75m前後で平坦とは言い難い。石列の確認の為一部で設定したトレンチでは、明確な堆積土の変化は認められなかった(図８参照)。第２面調査区南東端で発見された溝状遺構の底部は、性格不明乍も暗灰色でしまりの良い砂質土であった。　（汐見）

第３章　発見した遺構

本章では発見した遺構について、調査順に従い上層１面から述べる。以下の文章中では便宜上、挿図の天の方向を北とし、遺構番号は現地調査の際に付したものをそのまま使用している。実際の現地調査に於いては、残土を人力で移動しながら本来の調査対象面積の確保には努めたこともあり、調査区は不整形に成らざるを得ず、発見した遺構の確認レベルもまちまちである。本報文ではこれを限られた整理作業時間内で堆積土層の観察結果や覆土記録等から判断し、大きく１面・２面として報告する。

１面の遺構

前章堆積土層の項でも触れた通り、確認調査の際には現地表下1.2m（海抜18.80m）前後の褐色粘質土上面を１面としたが、調査期間や残土処理の問題から表土掘削時に重機に依り除去し搬出している。本土層中（図４の２層）の遺物は、調査の際には中世遺物包含層出土として採り上げ、多くのかわらけや舶載陶磁器片数点、常滑窯の製品も含まれるが図化できるものはなかった。

調査開始面は、現地表下1.4m（海抜18.60m）の堅くしまる茶褐色粘質土上に貝砂が撒かれた面とした。この貝砂は１～２ライン付近で北に落込み、図４の４層と上面レベルを合わせる様に図４の６層が堆積する。調査ではこの６層上面の精査で顕著な遺構が発見されなかったことから、

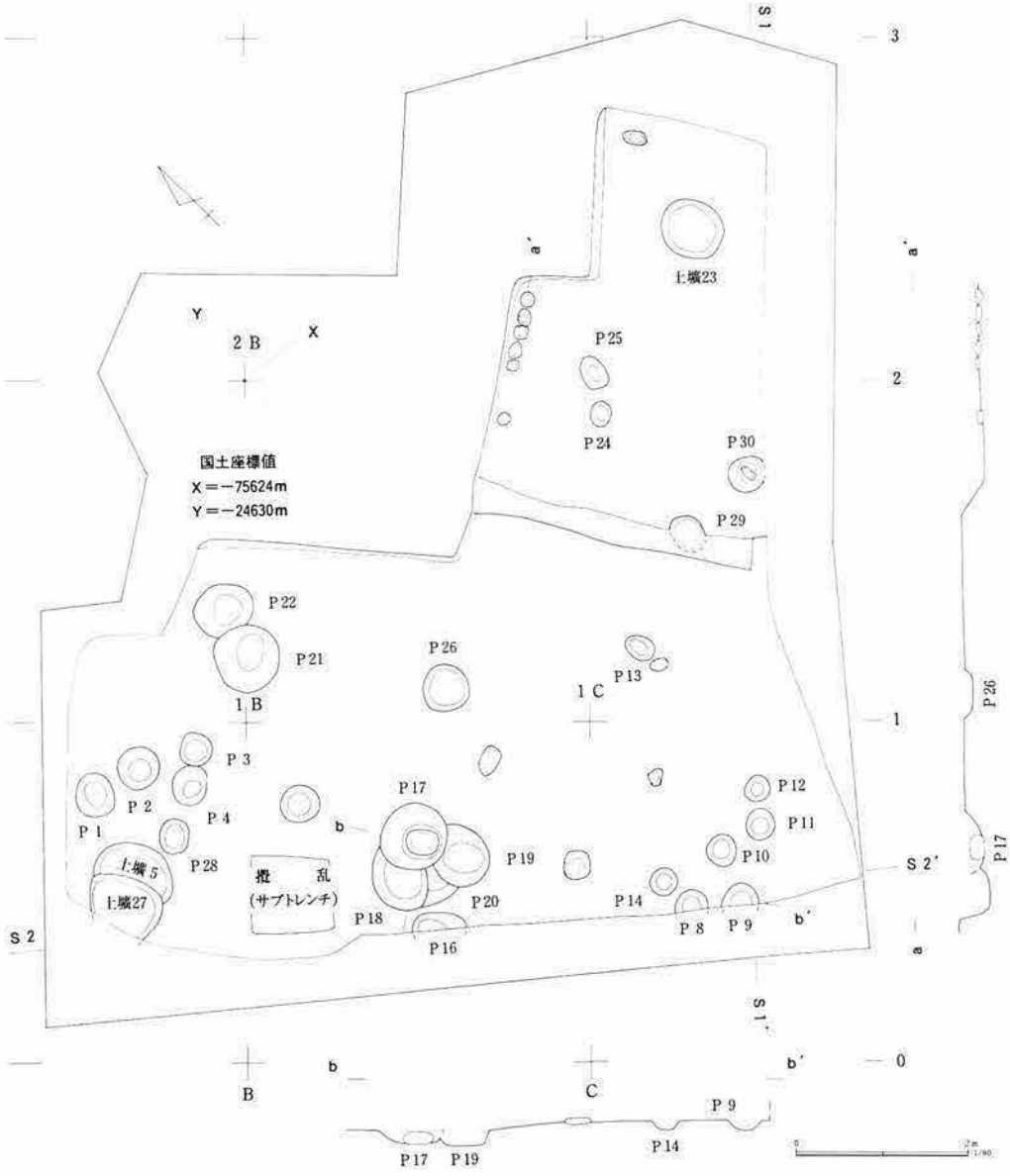


図５　１面全測図

貝砂の落込みなりに掘下げ、現地表下1.8m(海抜18.20m)でほぼ水平に堆積する11層上面を同時期の1面として把えた。掘下げた後の土層断面から、貝砂が落込む際に柱穴或は溝状の遺構断面が観察された。一方、4～6層中や11層から掘り込まれた遺構内出土遺物には殆ど年代差は認められない。これらのことから、後述する2面の廃棄後から調査で1面として把えた時期に前後するまでに、平面的な区割を踏襲しながらも短期間に土地利用の変化があったと推定される。

図5は調査で1面とした全測図で、大まかに調査区の南半が図4の4層上面レベル、北半が11層上面である。発見した遺構は小土壙やPit.併せて20余基と石列1カ所、不規則に点在する礫石上の鎌倉石・安山岩数個である。小土壙やPit.・面上に掘り込みを伴わずに点在する石からは規則的な配置は認められず、建物を推定するには至らない。調査区西端のかなり浅い遺構や覆土の異なるPit.17などは、上層2層から掘り込まれた遺構の残りである可能性が高い。小石列は下層2面の礫石列発見に及び調査区を無理矢理拡張した際に発見し、土層断面の観察から1面の遺構と判断している。北に向って落込む貝砂層の斜面にほぼ直行して、南北に5石と少し南に離れて1石、上面レベルは18.30～18.40m前後。11層上面に直接据えられ掘り込みは伴わず、被熱痕や柱材の圧痕は観察されなかった。

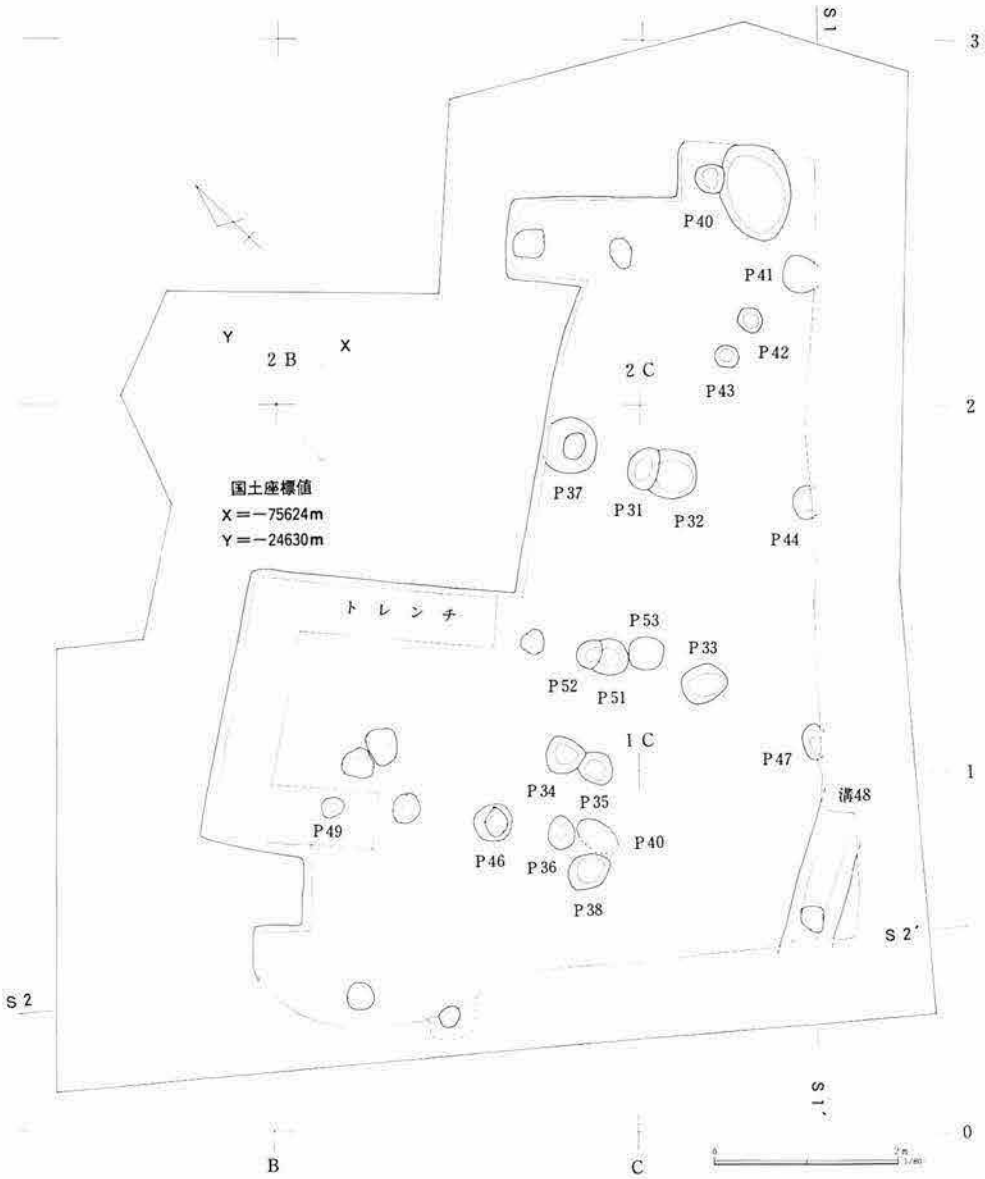


図6　2面全測図

2面の遺構

2面は現地表下約2.0m(海抜20m)前後の硬化面である。大小土丹の上面を叩き潰して平坦にした様な地業面で、Cラインより東ではより堅固、南北石列が発見された範囲より西では上面の地業がやや雑で、若干レベルが低い。発見した遺構はPit.18口、石列を構成する安山岩礫石8個、これと別に面上で発見された安山岩2個、溝1条、土壙とした掘り込み1基である。又、Cラインより東の地業硬化面上には炭と焼土を混交する粘質土が堆積するが、地業面上が赤変したり焼けた様な痕跡はなかった。

図6は2面の全測図、図7は石列の方向で図示し、礫石の表面に観察される柱材圧痕と思われる芯々距離を併せ記した。

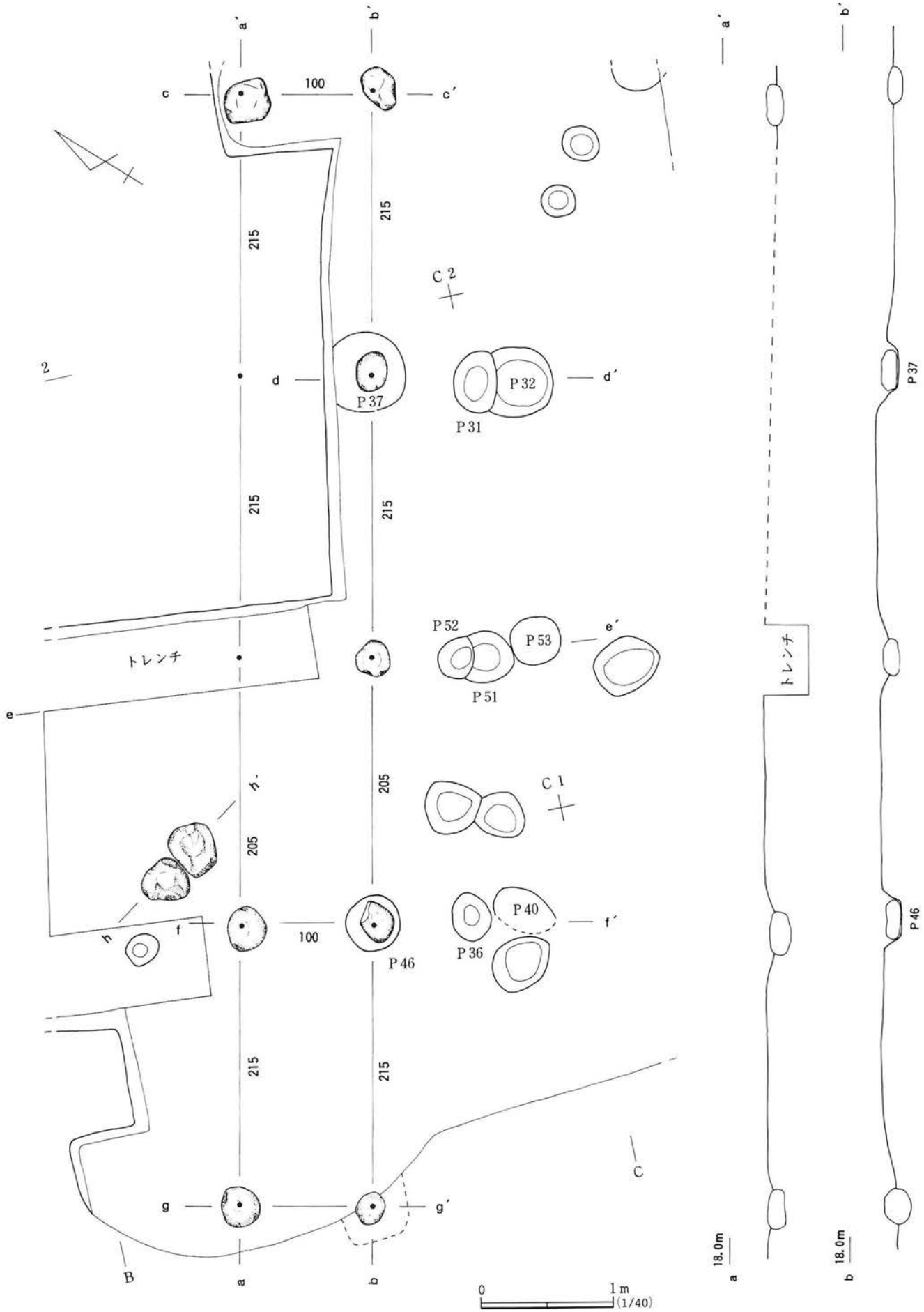

a´
b´
c
c´
100
215
215
C 2
2
d
d´
P 37
P 32
P 31
215
215
P 52
P 53
e´
P 51
トレンチ
e
205
C 1
205
P 40
f´
f
100
P 46
P 36
215
215
C
g
g´
B
a
b
0
1 m
(1/40)
18.0m
P 37
P 46

図７　２面の遺構

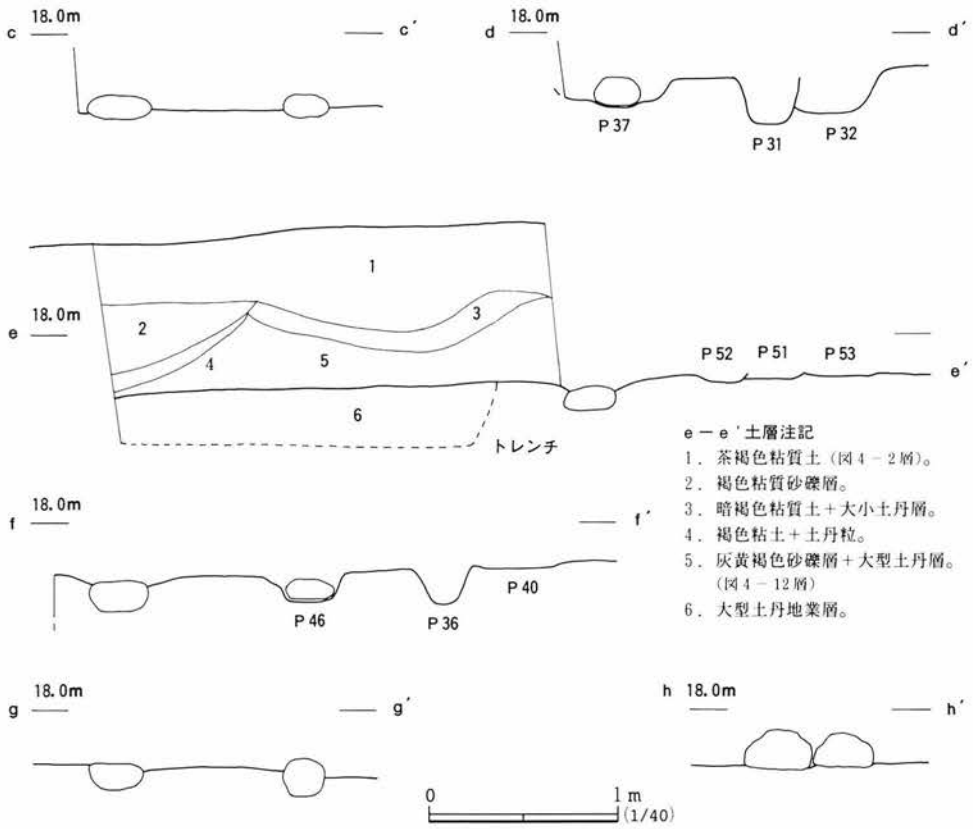


図8　2面の遺構（断面図）

礎石列は、調査区内列aで3石、列bで5石発見され、それぞれ調査区外へと延びる可能性がある。列dのPit.37と列fのPit.46は、据え方としての僅かな掘り込みを伴うのか、上部構造に因り沈下したものかは定かではない。列aの礎石は列bの礎石よりも一回り大きく、その間隔は柱材圧痕範囲ではほぼ100cm(3尺3寸か)を測る。同様に列c－d、列d－e、列f－gの間隔はほぼ215cm(7尺強)だが、列e－f間は205cm(6尺7寸 強)を測る。列bより東(南)では、列d・e・fの直行する延長線上にそれぞれPit.31・32、51・52、36・(40)が在るが礎石は発見されていない。列bより西(北)は2面調査段階では残土山となっていたが、礎石列の延長を掴む為に調査区東(南)端一帯を先行して記録保存を終了させ、その範囲に人力にて残土山を移動し更に2面まで掘下げた。この為に図示した2面全測図と同様の全景写真は撮影し得えなかった。列bより西の列e・f延長線上、図4の15層上面を改めて精査したが、礎石或は据え跡状のものは確認できなかった。更に列eの延長線上に下層確認のトレンチを設定して土層観察を行ったが、特に土層の乱れや変化はなく、列c～gが列aより西(北)に延びるか否かは不明と言わざるを得ない。hで示し15層上面で発見したひっくり返っている2石は、この礎石列に関わるものであろうが想像の域を出ない。本来の調査範囲で調査が進行していればと惜しまれるところではあるが、諸般の事情がそれを許さなかった。

多数発見されたPit.では、Pit.41・53・35の様な礎石の抜き跡かと思われるものも図示したが、先に触れたもの以外は礎石列の方向性で観ても特に規則的な配置は掴めていない。尚、Pit.49はトレンチを掘下げる前に発見した遺構である。

他に2面で発見した遺構には、調査区の東(南)端に溝状の遺構がある。方向は礎石列とほぼ同じくし、上幅約60cm、下幅約30cm、深さ30cm程の断面逆台形を呈し、覆土は粘質土に砂礫を混交する。土留めや杭等の構造物は確認していない。図示している石(鎌倉石)は覆土最上層のもので、特にこの溝や2面の遺構群とは関係ないと思われる。

調査区の北(東)端で発見された土壙39とした遺構は、1面調査の段階で下層観察のサブトレンチを設定したところ、底面で遺物が集中しているのが見えていた。2面を精査する際に、この遺物片(褐釉壷・図9－16)を出すために掘進む内に遺構の体を成した感がもある。遺構として図示するには不適切であったかもしれない。

第４章　出土した遺物

本章では出土した遺物について各層位毎に述べる。図９に図示した遺物の計測値及び図示し得なかった他の出土遺物については後章の表を参照されたい。

図９の１～５は１面上、概ね図４の４～６層上面精査の際の出土遺物。１～３は小型の糸切り底のかわらけ。器表は橙色乃至灰橙色を呈する。１は泥岩粒を多く含むが、胎土・焼成共に良好。１・２は体部中程の稜から内湾気味に立ち上がる。３は薄手で器高の高い碗型である。４・５は中型の糸切り底のかわらけ。４は泥岩粒を多く含む粗い胎土であるが、焼成は良好。体部は下方の稜から少し内湾気味に立ち上がる。５は胎土・焼成共に良好で、薄手丸深タイプに移行している。

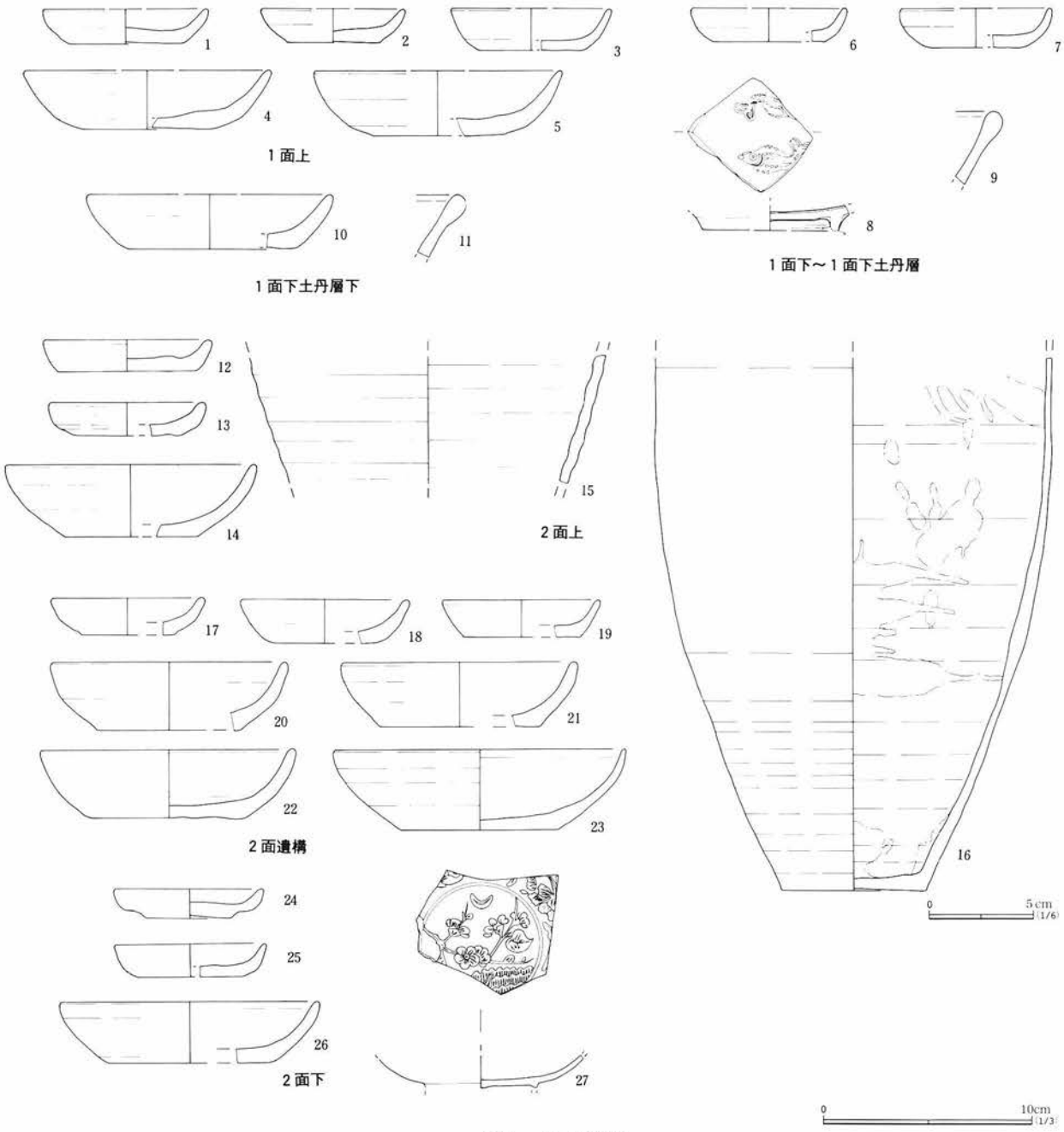


図９　出土遺物

6～8は1面下～1面下土丹層、1面記録保存終了後掘り下げた図4の4～12層中の出土遺物。6・7は小型の糸切り底のかわらけ。何れも器表は淡橙色を呈し、胎土・焼成共に良好である。6は体部下方の稜からゆっくり内湾する形である。7は薄手の碗型に近い側面観を示している。8は龍泉窯系青磁鉢。胎土は灰色を呈しやや粗く、釉は灰緑色で半透明。内底面に一対の魚文が貼り付けられる。9は常滑片口鉢Ⅰ類。胎土は不純物を含み粗く灰色を呈する。

10～11は1面下土丹層下からの出土遺物。図4の12層の大型土丹を掘り上げ、13層中と15層上面までの主に砂礫層中の出土遺物。10は糸切り底のかわらけ。器表は橙色を呈し胎土・焼成共に良好。器高が低く口径と底径の差が少ない。下層からの堀り上がりであろうか。11は常滑片口鉢Ⅰ類。胎土は灰色を呈し、しまりが良い。図示したかわらけは殆どが小片からの復元である。（山上玉恵）

12～16は2面上、概ね図4の15層上面精査の際の出土遺物。12～14は糸切り底のかわらけ。器表は13が暗橙色、他は橙色を呈し、胎土・焼成共に良好。15は青白磁梅瓶の胴部片と思われる。釉は不透明な水色を呈し、内面にも釉がかかる箇所がある。胎土は灰色を呈し、堅緻である。輪積み後、轆轤成形しており轆轤目が強く残る。13世紀中頃～14世紀前半。16は舶載品の褐釉壷。調査の際には土壙39の遺物かと考えたが遺構に据えられた状態ではなかった。又、図4の15層付近レベルから出土した多数の破片と接合したこともあり、遺構面の構廃に前後して廃棄された可能性が強く帰属する層位を2面上とした。恐らく肩部に縦耳が四個付く、南宋～元時代の四耳壷と思われる。褐釉が全体にかけられ、内面にもかかる箇所がある。一部内面にかけられた釉が横方向に流れているが、どのように釉がかけられたのか疑問である。胎土は灰色で挟雑物を含み、ロクロ目が残る。百数点の大小の破片を接合し、石膏で復元を試みながら実測をしているため若干器形に不安はある。鎌倉市内で出土している完形に近い褐釉壷を参考に実測し図示している(註)。尚、第3・4次調査で報告されている褐釉壷とは試みたが接合せず、残存部位等からの判断では別個体である可能性が高い。

17～23は2面検出遺構内からの出土遺物。17はPit.37、18～23はPit.31・32出土の糸切り底のかわらけ。器表は概ね橙色を呈し、胎土・焼成共に良好。

24～27は2面下、概ね図4の15層中で遺構確認のため部分的に拡張・掘り下げた際に出土した遺物。24～26は糸切り底のかわらけ。器表は24が灰橙色、他は橙色を呈し、胎土・焼成共に良好。27は白磁梅月文様碗の底部。内面に印花で梅・波・月が描かれている。釉は水色に近い白色を呈し、削り出し高台内までかけられている。胎土は白色で堅緻である。13世紀中頃～14世紀前半。

註：「43　伝安達泰盛邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報。昭和46年度～52年度』1983年　鎌倉市教育委員会　（田畑）

出土遺物の破片数表と図示について

出土遺物破片数表は、現地調査の際に出土した遺物を図4の層位に拠り接合前の単純破片数で数え、列項目に記載のない或は設けられていても数値が空欄のものは出土していない事を示している。但し、表中の数値が出土遺物の傾向や個体数をそのまま反映しているとは限らない。例えば本文出土遺物の項でも述べた通り、2面上のかわらけ破片数が突出するのは、粉々になって指先大より小さな破片を、調査の際に採り上げたままに数えると表記の数値になり、褐釉壷の様に遺構内及び遺構外で分けて採り上げても、接合すれば百数破片が一個体となる。本報文ではこうした実際の出土遺物数と図示したものとの実体差を、限られた整理期間と報文範囲内で極力提示したつもりではある。市内全域が遺跡と言っても過言ではない鎌倉市内域を数名の担当者で調査し報告する以上、そこに個人差から生じる図示・配置が異なるのは是非もないが、過去の例から1冊の報告書として纏められる度その差に違和感を感じるのは否めない。（汐見）

第５章　調査成果

本章では断片的乍も今次調査の成果を、第３・４次調査の成果と参照しながら地形的な観点を踏まえ、調査地点の年代観や発見された遺構について述べる。尚、以下の文章中では第３・４次調査のトレンチ番号と、同報告書第４章第２節の時期区分を引用する。

図10は調査地点付近地図から、北東支谷南側小谷内に関して現況の地表面と第３・４次調査及び今次調査の、調査開始面・中世層・岩盤それぞれのレベルを模式的に表したものである。今次調査は掘下げる深度規制もあり岩盤又は中世地山層は確認し得なかったが、史跡指定後の開発行為に因り現況レベルが変っているとしても、本調査地点が南側小谷内の最下段平場上に位置することは看取できようか。

出土遺物と層序から観ると、本調査地点では15世紀代の遺物は遺構や遺構面構成土からは出土していない。逆に上層から手捏ねかわらけが出土する等、付近で何らかの土砂の移動を伴う中世期の造成行為があったことは想像に難くはない。図示した数点に掘り上がりに因ると思われる若干の混在はあるものの、本調査地点の遺構内遺物で観れば１面・２面が、第３・４次調査TrⅣの２面～３面の時期に相当する東勝寺Ⅱ期と思われる。但し、同小谷内にあり建物を推定するに十分な礎石列がありながら、本調査地点では火災に遭った痕跡は殆ど無い。報文中でも触れた様に２面を構成する15層上面に焼土と炭が部分的に堆積し粉々になったかわらけが出土しているが、地業硬化面上が赤変している様な状況は認められず、寧ろこれらは火事場整理の堆積土との印象を拭えない。かといって、本調査２面の遺構内出土遺物は小片からの復元が多く、それらが東勝寺Ⅰ期に収める程の確証も現状では控えたい。

発見された遺構は、２面の礎石列は西(北)へどのように延びるかの疑問点を含みおいて、礎石建物の東(南)端縁の部分か或は建物間の回廊の一部かと推測できようか。礎石の上部構造については、火災或は堆積土質に因るのか本調査地点を含めて周辺でも建築部材は報告されて居らず、瓦の出土点数も少ないことから未だに不明の域を出ない。２面廃絶後は、削平を伴ったものか大量の土砂の搬入に依り嵩上げされながらも遺構の軸方向と区割は踏襲して、短期間に土地利用と範囲が変化している。東勝寺は至徳三年(1386)に関東十刹三位に列せられているが、本調査でも当該時期の遺構と遺物は発見されなかった。

史跡指定後に正に隣接する地点での調査に携りながら、諸般の事情で十分な調査が行えず、又、本書所収他の調査地点との関係を鑑みる時、第３・４次調査の多大な成果を生かしきれないことは筆者の力不足でもある。　　(汐見)

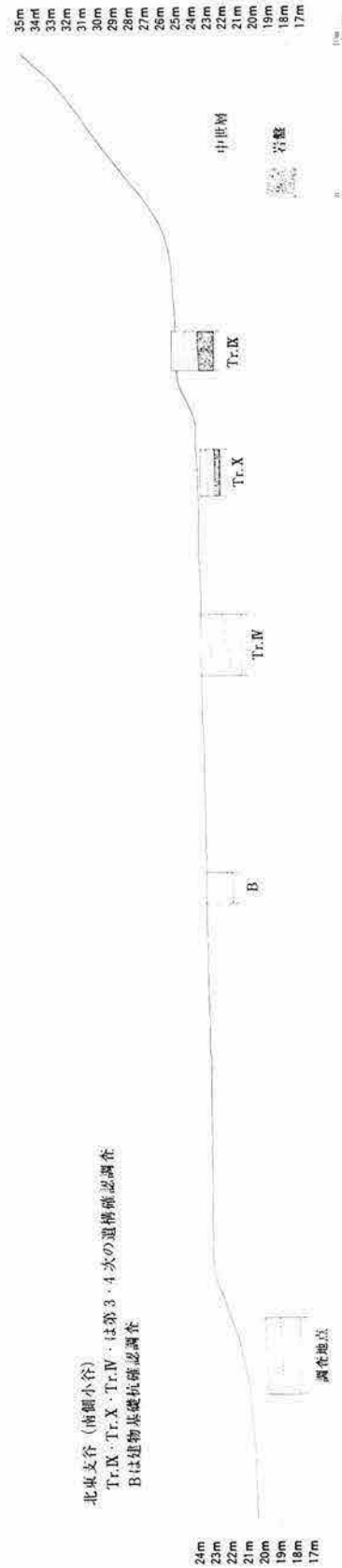


図10　北東支谷地形概念図

表1 出土遺物計測表

遺構・層位		遺物	製品名	遺物名	口径	底径	器高	備考
1面	1面上	1	土器類	かわらけ	(7.7)cm	(5.2)cm	1.7cm	
	1面遺構内	2	土器類	かわらけ	(6.7)cm	(4.5)cm	1.6cm	
		3	土器類	かわらけ	(7.5)cm	(5.0)cm	2.1cm	図版4
		4	土器類	かわらけ	(11.7)cm	(6.6)cm	2.8cm	
		5	土器類	かわらけ	(11.7)cm	(6.4)cm	3.2cm	図版4
	1面下	6	土器類	かわらけ	(7.3)cm	(5.4)cm	1.7cm	
	∫	7	土器類	かわらけ	(7.2)cm	(4.2)cm	1.9cm	
	1面下土丹層	8	龍泉窯	青磁 双魚文鉢	—	(6.6)cm	(1.2)cm	図版4 器高は残存値
		9	常滑	片口鉢Ⅰ類	—	—	—	
	1面下土丹層下	10	土器類	かわらけ	(11.6)cm	(7.8)cm	2.7cm	図版4
		11	常滑	片口鉢Ⅰ類	—	—	—	
2面	2面上	12	土器類	かわらけ	(8.4)cm	(6.8)cm	1.6cm	図版4
		13	土器類	かわらけ	(7.4)cm	(5.0)cm	1.6cm	
		14	土器類	かわらけ	(12.0)cm	(6.4)cm	3.5cm	
		15	舶載品	青白磁 梅瓶	—	—	—	図版4
		16	舶載品	褐釉 壺	—	—	(70.0)cm	図版4 器高は残存値
	2面遺構	17	土器類	かわらけ	(7.2)cm	(4.5)cm	1.8cm	
		18	土器類	かわらけ	(5.0)cm	(5.8)cm	2.1cm	図版4
		19	土器類	かわらけ	(7.6)cm	(5.6)cm	1.8cm	
		20	土器類	かわらけ	(11.2)cm	(7.0)cm	3.3cm	
		21	土器類	かわらけ	(11.2)cm	(7.7)cm	3.1cm	
		22	土器類	かわらけ	12.2cm	7.4cm	3.3cm	図版4
		23	土器類	かわらけ	(14.0)cm	(7.4)cm	4.0cm	
	2面下	24	土器類	かわらけ	(7.1)cm	(4.2)cm	1.4cm	
		25	土器類	かわらけ	(7.2)cm	(5.0)cm	1.6cm	
		26	土器類	かわらけ	(12.4)cm	(7.8)cm	3.0cm	
		27	定窯	白磁 梅月文碗	—	(5.4)cm	—	図版4 底径は高台残存値

表2 出土遺物破片数表

層位＼遺物種		かわらけ		舶載陶磁器				国内産諸窯		
		糸切り	手捏ね	青磁	白磁	青白磁	褐釉	瀬戸窯	常滑窯	渥美窯
1面	上層	163	3	1		2			5	
	1面上・1面遺構内	56	3			1			2	
	1面下～1面下土丹層	108	4	2					2	1
	1面下土丹層下	59				1			3	
2面	2面上	861		1		7	16		2	3
	2面遺構内	83				1	90			
	2面下	60			1	2	2		1	1
計		1,390	10	4	1	14	108	0	15	5
%		88.8%	0.6%	0.3%	0.1%	0.9%	6.9%	—	1.0%	0.3%

層位＼遺物種		土器	火鉢	瓦	古代	自然遺物	破片数計	%	備考
1面	上層			1			175	11.2%	実測可能遺物なし
	1面上・1面遺構内				1	4	67	4.3%	
	1面下～1面下土丹層		3				120	7.7%	
	1面下土丹層下					5	68	4.3%	
2面	2面上	1				2	893	57.1%	かわらけは指先大の極小破片を含む
	2面遺構内				1		175	11.2%	
	2面下						67	4.3%	
計		1	3	1	2	11	1,565		
%		0.1%	0.2%	0.1%	0.1%	0.7%		100.0%	

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成12年度発掘調査報告
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	汐見一夫　田畑衣理　山上玉恵
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうしょうじあと 東勝寺跡	かながわけん かまくらし こまち さんちょうめ 神奈川県鎌倉市小町三丁目523番14	204	№246	35° 19′04″	139° 33′44″	19991025 ～ 19991120	50㎡	個人専用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東勝寺跡	社寺	鎌倉時代	基壇状遺構 ピット 土壙 礎石列	かわらけ 白磁梅月文皿 褐釉壷	

写　真　図　版

◀ 1面全景（北から）

▲ 2面礎石列（北東から）

▶ 2面礎石列（北から）

図版 2

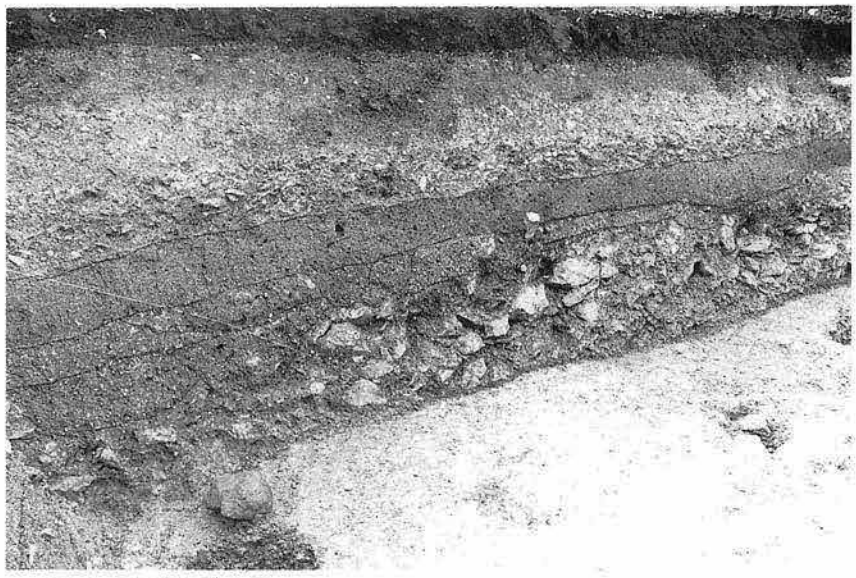
▲　2面礎石列（南東から）

▲　2面礎石列（東から）

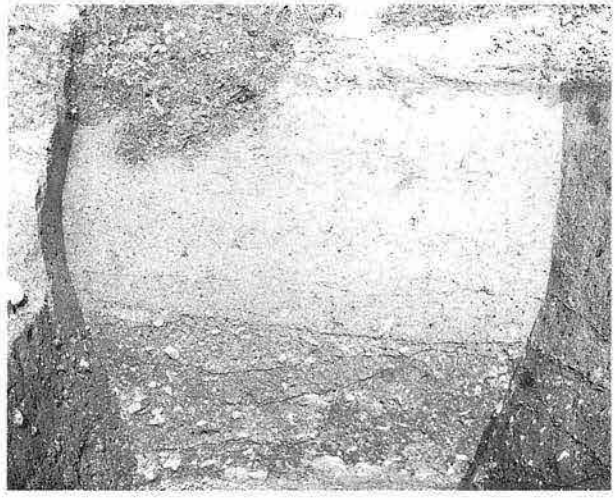
◀　2面炭層（南から）

▶　2面褐釉壺出土状況（南から）

▲　調査区南壁堆積土層



▲　調査区東壁堆積土層



▶　調査区北壁堆積土層

図版 4

10－3

10－5

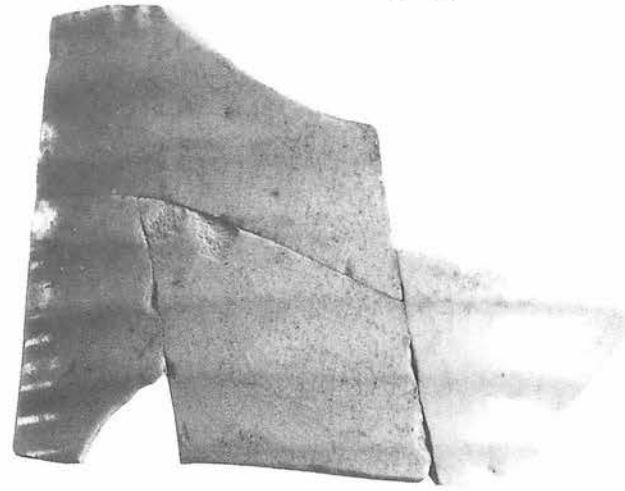
10－10

10－12

10－18

10－22

10－8



10－15

10－27

10－16

玉縄城跡（No. 63）

たまなわじょうあと

城廻字中村478番３地点

例　　言

1．本報は鎌倉市城廻字中村478番３に所在する玉縄城跡の発掘調査報告である。

2．調査は個人専用住宅に係わる基礎工事に先立って実施された。調査面積は60㎡である。

3．調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が1999年11月２日から22日まで行った。

4．本報の編集・執筆・図版作成は大河内勉、写真撮影は遺構を川又隆央、遺物を大河内、遺物実測・トレースは伊丹まどか、遺構トレースは辻きよ子が担当した。

5．調査体制は以下の通り。

主任調査員　大河内勉

調　査　員　伊丹まどか・川又隆央

調査補助員　辻きよ子

作　業　員　関卯之松・山崎一男・柴崎英輔・渡辺輝彦・寺島恵夫・沼上三代治・杉浦永章・藤枝正義・照井三喜・牛嶋道夫（鎌倉市シルバー人材センター）

6．本報作成に際して、藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）・田代郁夫（東国歴史考古学研究所）のご教示を賜った。

7．調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第１章　玉縄城と調査地点……28
第２章　調査について……30
第３章　検出遺構……31
第４章　出土遺物……35
第５章　まとめ……36

挿　図　目　次

図１　玉縄城と調査地点……29
図２　調査区設定状況……30
図３　全測図及び土層堆積図……32
図４　井戸１、トレンチ設定状況及び土層堆積図……33
図５　検出遺構……34
図６　出土遺物……35

図　版　目　次

図版１　１．調査地点現況　２．調査区設定状況……39
図版２　１．全景（東から）　２．同（西から）……40
図版３　１．全景（トレンチ設定後－東から）　2.同（トレンチ設定後－西から）……41
図版４　１．調査区南壁セクション　２．調査区西壁セクション……42
図版５　１．井戸１　２．同（セクション）　３．同（据え桶検出状況）　４．同（掘り方）
５．井戸２　６．同（セクション）　７．土壙１　8.同（セクション）……43
図版６　１．土壙２　２．同（セクション）　３．土壙３　4.同（セクション）
５．溝１　６．同（セクション）……44
図版７　出土遺物……45

第１章　玉縄城と調査地点

玉縄城は戦国大名後北条氏の有力支城の一つで、該期には東相模地域の領国経営を担っていた。北条早雲により永正９年（1512）に築城、豊臣秀吉の小田原討伐に伴い天正18年（1590）に開城している。近世には廃城後、城の南に松平氏の陣屋が置かれる。

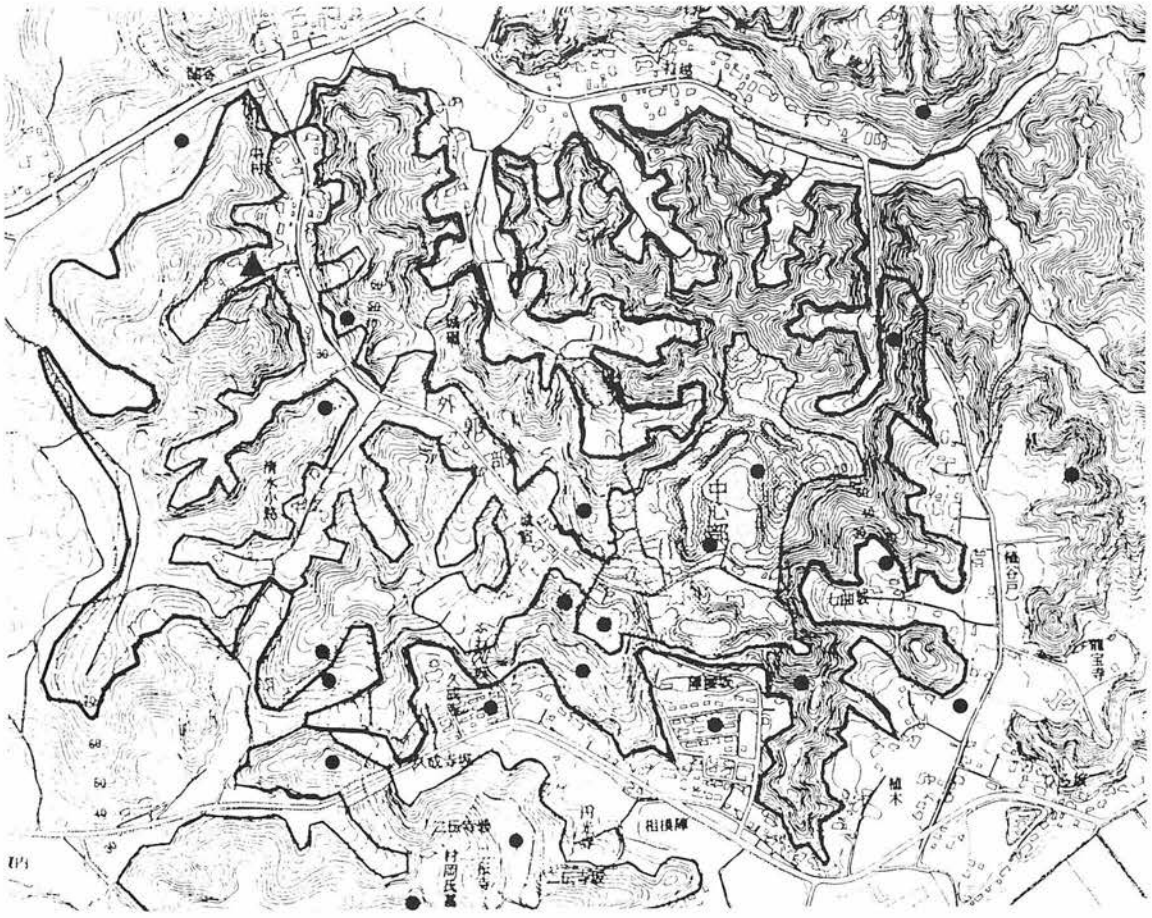
玉縄城の城主は代々「玉縄北条氏」として世襲されており、氏時・為昌・綱成・氏繁・氏舜・氏勝の６代続いたと見られている。氏時は早雲の子で、大永６年（1526）には鎌倉に侵入した安房の里見実堯と戸部川（柏尾川）辺りで戦を交えている。為昌は享禄４年（1531）から天文11年（1542）まで城主であったとされる。鶴岡八幡宮の再興に関わっていたことが知られる。綱成は城主となった時期ははっきりしないが、元亀３年（1572）まで在任していたとされ、最も長く城主を勤めている。武勇の誉れが高い。氏繁は玉縄ばかりでなく、広く関東に足跡を残している。氏舜は天正５年（1577）から同８年（1580）頃に城主であったと見られる。氏勝は最後の城主で、天正18年（1590）豊臣秀吉の軍勢を前に開城している。また、玉縄に拠った後北条氏の家臣は「玉縄衆」と呼ばれ、「小田原衆所領役帳」に玉縄城主とその家臣の名が挙げられている。主要な家臣としては間宮豊前守と行方与次郎がいる。

玉縄城は鎌倉市域の北西端に位置し、稜線や谷戸が入り組んだ海抜50～80ｍほどの低丘陵に築かれている。現在では学校建設・宅地開発・マンション建設などによって、あまり旧状を留めてはいない。城域は図１に示した太線範囲が該当すると思われるが、さらにその周辺地域も城と密接な係わりを有していたと考えられ、広大な範囲に及んでいる。城域自体は東寄りに位置する中心部と西側に展開する外郭部に分けられ、さらに周辺地域には城下や砦が点在していた。城の中心部には本丸をはじめとする多くの曲輪や土塁・堀が築かれているのに対し、外郭部は大小の谷戸で形成されている。また、城下域には農地が存在し、それとともに家臣の居宅や寺院が点在して、職人・商人が集住して常設ないし定期的な市が設けられ、ある程度の町が形成されていたと思われる。砦には二伝寺砦・高谷砦・おんべ山砦・長尾砦・天神山がある。

玉縄城周辺では今次調査地点を含めて現在までに、23個所で発掘調査が実施されている。図１では●が調査地点、▲が今次調査地点を示す。個々の調査について取り上げることはできないが、玉縄城期の遺構では曲輪・平坦面・切岸・土塁・堀切・縦堀・道路・通路状遺構・建物址・柱穴列・井戸・溝・土壙・ピット・などが、遺物では中国製陶磁器（青磁・白磁・染付）・国産陶磁器（瀬戸・美濃・常滑）・かわらけ・鉄製品（釘・銭貨）・石製品（石臼・砥石・つぶて石）・漆器・木製品などが検出され、廃城後の城割りも確認されている。ただし一部の地点を除くと、遺構・遺物の密度はかなり低く（特に遺物）、玉縄城関連の遺構・遺物が全く発見されないケースも少なくない。

今次調査地点は城内の外郭部に該当し、外郭部を北西－南東に貫通する谷戸から派生する支谷内に位置する。現在では周辺は大規模に宅地造成されているため、調査地点の旧状を正確に知ることは難しいが、支谷は南西に伸び、奥行き約150ｍ、幅約30ｍ程度の規模を有していたと見られ、切岸が確認される。調査地点はこの支谷の中央付近にあたり、かろうじて旧状を留めている。

※本章は大河内勉「玉縄城跡－城廻字清水小路673番10地点－」（『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15所収－1999年３月）を加筆・修正したものである。



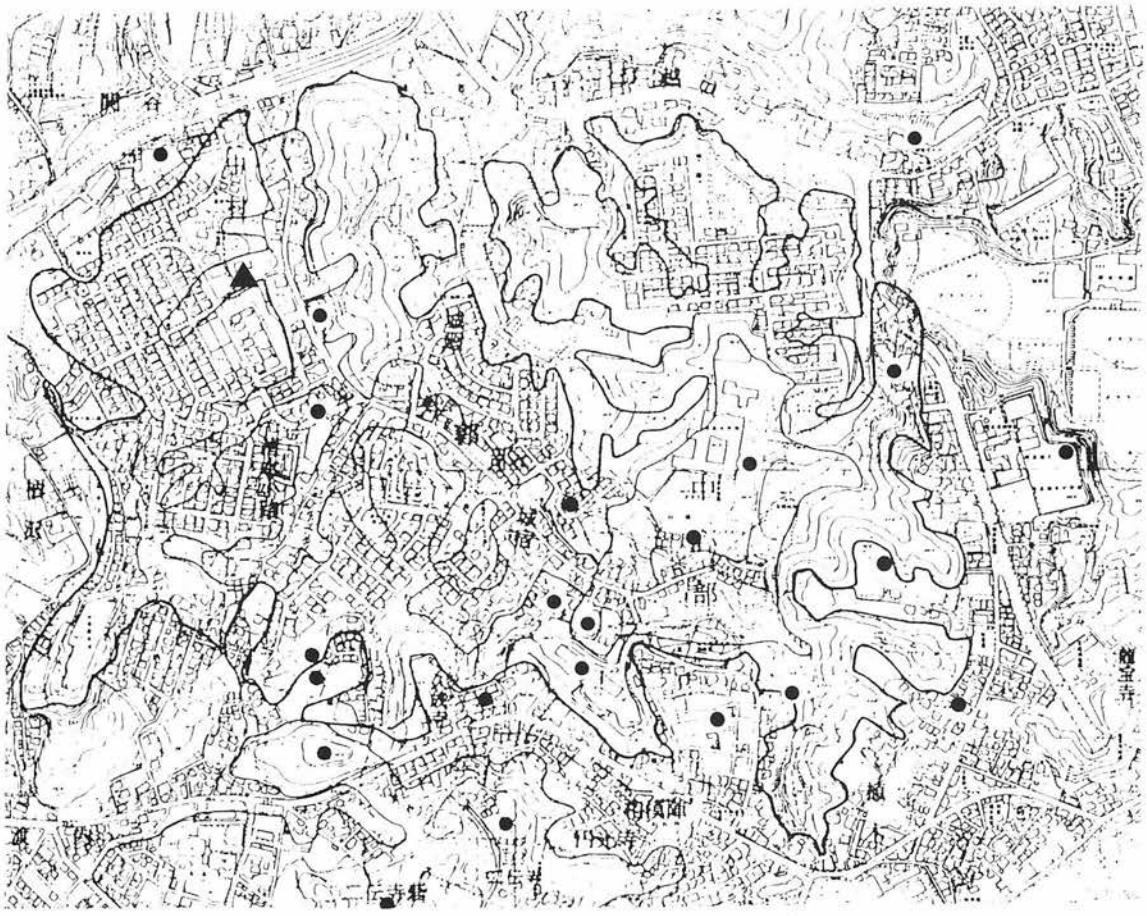


図1　玉縄城と調査地点(1/10,000)

第２章　調査について

1999年９月16～18日に実施された試掘調査の成果を受けて、同年11月２日から22日まで本調査を行った。調査地点は支谷内の中程に位置し、段築状に造成された平坦面となっている。支谷の奥側（調査地点の西側）は近年の宅地造成で旧状を失っている。調査地は現在、旧家の前庭で菜園として利用されている。

調査は新設建物範囲を対象とする予定であったが、廃土置き場を確保するため予定より調査範囲を縮小した。発掘にあたっては表土掘削から埋め戻しまですべて手掘りで行った。

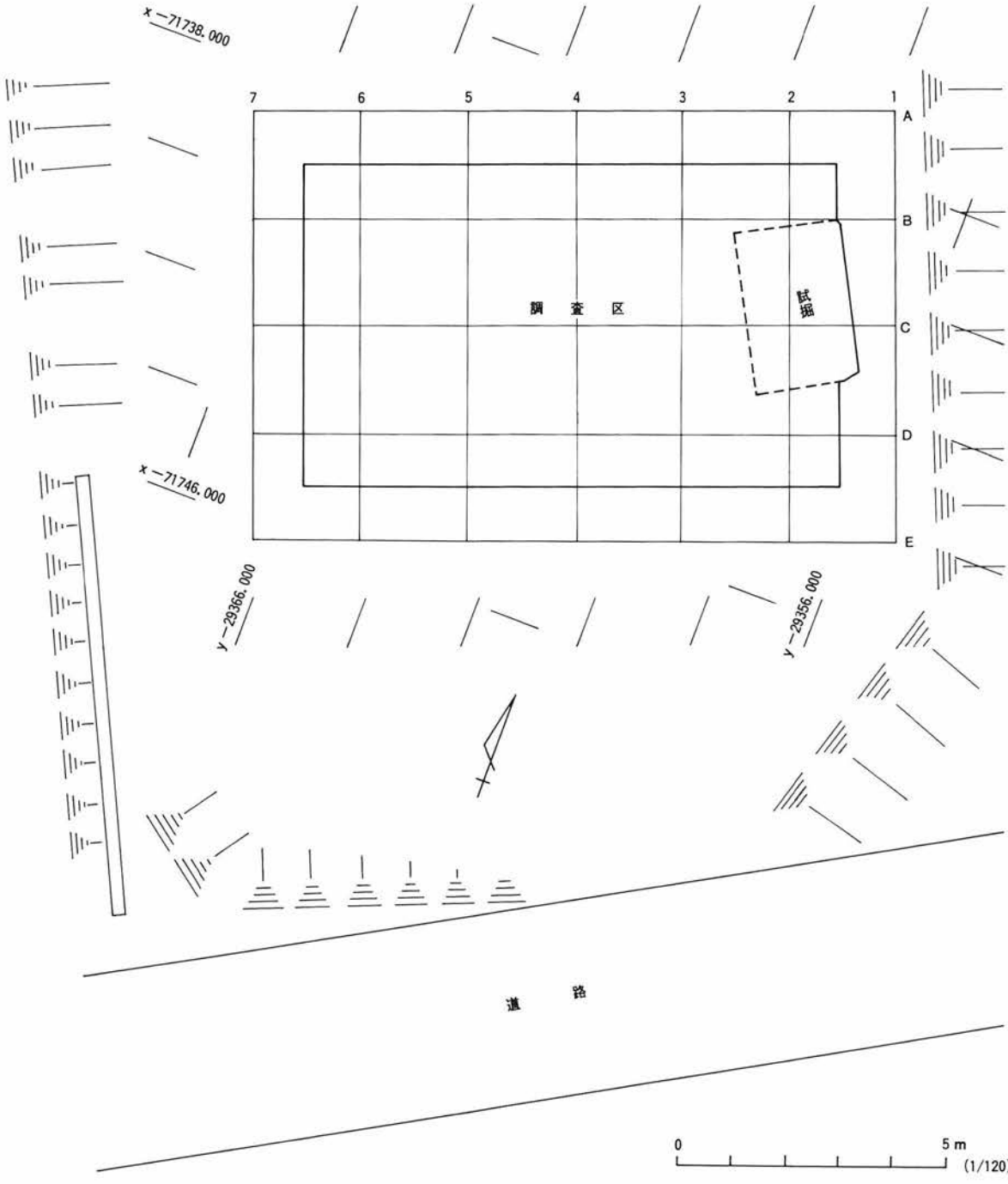


図２　調査区設定状況

グリッドは２ｍ方眼で、北東角を起点に南に向かってアルファベット、西に向かって数字を付した。また、調査区とグリット及び国土座標上の位置は図２に示した。

現地調査の経過は概ね次の通り。

1999年11月２日～６日　遺構確認面まで掘り下げ。
　　11月８日～10日　遺構検出。実測図作成。写真撮影。
　　11月11日～17日　トレンチ掘り下げ。遺構検出。実測図作成。写真撮影。
　　11月18日～20日　埋め戻し。
　　11月22日　撤収。

第３章　検出遺構（図３～５、図版２～６）

調査では、試掘調査で確認された地表下約90ｃｍに存在する生活面の可能性がある暗褐色土上面付近まで全体的に掘り下げて、遺構を検出した。調査後さらに、西壁と南壁際に幅１ｍのトレンチを設け、約30cm掘り下げて、だめおしを行った。その際、プランが不明瞭であった井戸１を検出し、調査した。

現地表から遺構面までは近世以降の堆積土で、灰褐色土・灰黄色ないし灰褐色土・茶褐色土・暗褐色粘質土などである。また、生活面上には部分的に土丹粒による地業層？が見られた。生活面以下には暗褐色粘質土・黒褐色粘質土などが認められた（だめおしトレンチ）。

調査で検出されたのは井戸２基、土壙４基、溝１～２条、ピット40口で、近世に属するものと思われる。遺構の密度は高くはない。以下に、主要な遺構を取り上げる。

井戸１

南側は調査区壁に接しており、全体を明らかにすることはできなかったが、大部分は検出することができた。外周部、中心部ともプランは円形と思われ、規模は外周部が東西2.5m（上端）、中心部が直径1.0m（同）を測る。深さは確認面から2.0m（掘り方まで）。二段に掘り込まれていて、上部（外周部）は確認面から約40cmの所で一旦平坦面を形成する。中心部はそれからさらに掘り込まれており、底部には底を抜いた木桶が逆位に据えられていた。中心部は井戸内北西寄りに設けられている。桶は掘り方底部より15～20cm上の位置に逆さまに置かれ、木桶の下、掘り方の底には径３～10cmの玉石・砂利が敷かれている。掘り方の底には小ピットが見られたが、完掘できなかった。木桶の周りには暗褐色粘質土が充填され、その上部（据え桶の上端付近）には土丹塊が配されている。桶は口径、高さとも約55cmを測り、「改詰」の焼き印が見られた。たがは上下に２条巻かれていたが、遺存状態は良くない。井戸の覆土は茶褐色粘質土・褐灰色粘質土・暗灰褐色粘質土などである。本址内南東側の壁際に溝状の遺構が一部検出されたが、詳細は不明。なお、本址の中心部分と土壙１は位置的に重複しており、関係があるかもしれない。

井戸２

井戸１の北側に存在する。円形を呈する素掘りの井戸である。上端径約1.1m、底径約0.85m、深さ約1.5mを測る。覆土は暗褐色粘質土・暗褐色粘土などで、底面上層には玉石が見られた。

土壙１

楕円形を呈し、大きさは1.4m×1.1m、深さ25cmを測る。底面は比較的平坦である。覆土は灰褐色粘質土など。なお、本址は井戸１の中心部分と位置的に重複しており、関係があるかもしれない。

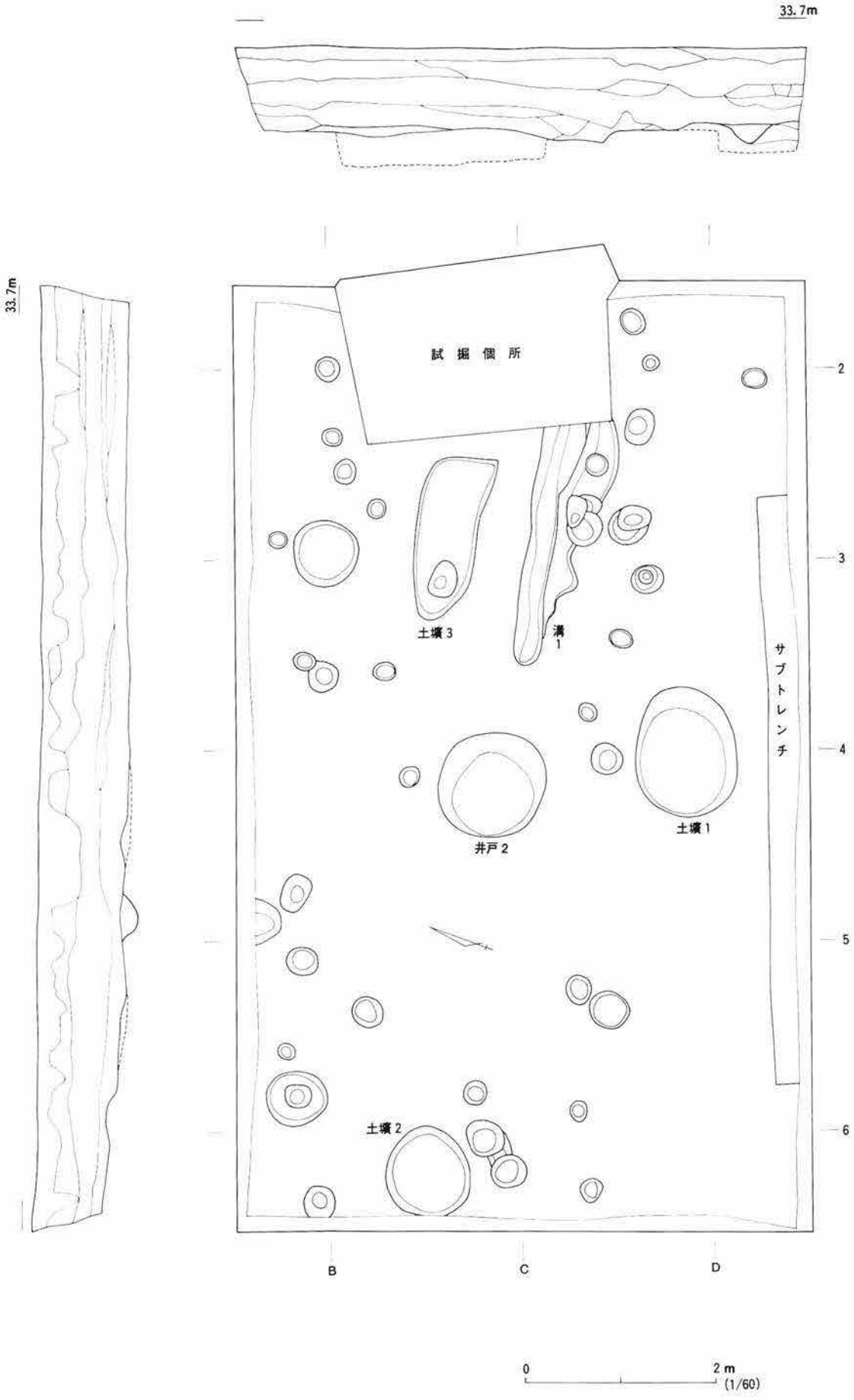


図3　全測図及び土層堆積図

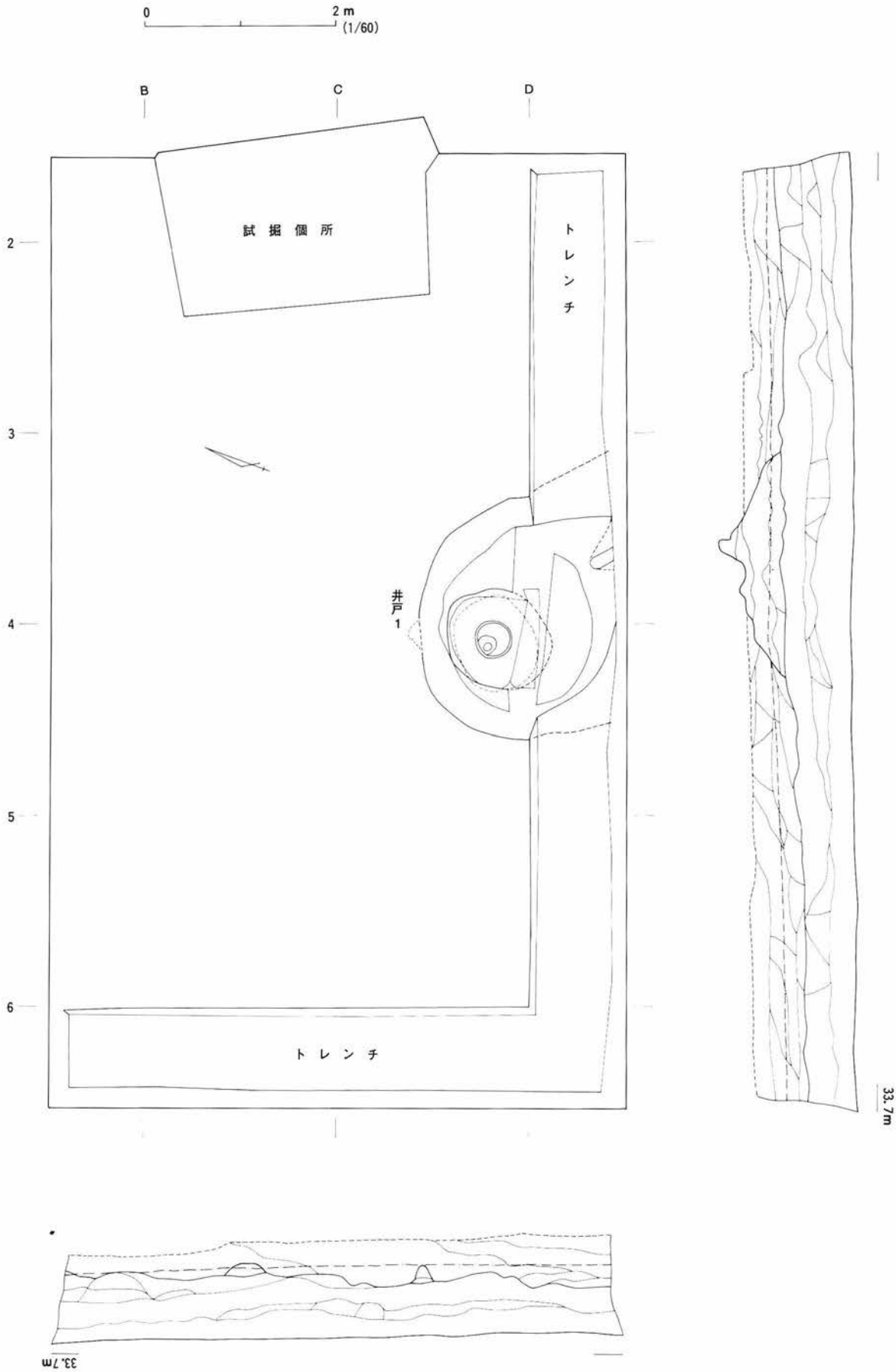


図4　井戸1、トレンチ設定状況及び土層堆積図

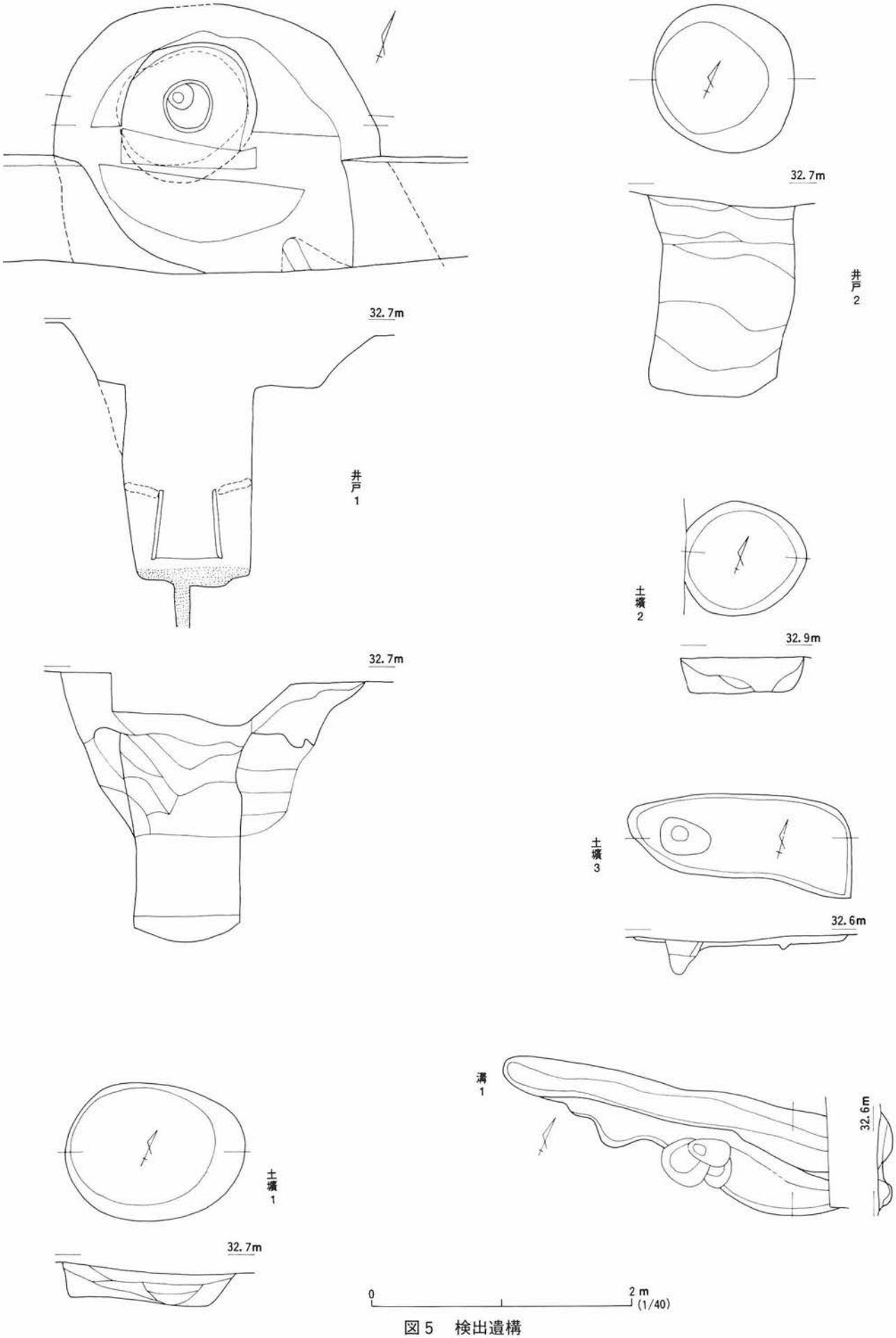

32.7m
井戸1
32.7m
井戸2
土壙2
32.9m
32.7m
土壙3
32.6m
土壙1
32.7m
溝1
32.6m
0
2 m
(1/40)

図5　検出遺構

土壙２

調査区西壁に接して検出された。円形を呈し、径約90cm、深さ約25cm。掘り過ぎたために、底面はフラットになっている。覆土は暗褐色粘質土などである。

土壙３

不整形を呈し、大きさは約1.75m×0.65m、深さは約５cm。底面は平坦。覆土は暗褐色粘質土。ピットが１個重複している。

溝１

東端は試掘トレンチに切られている。東西方向に２条重複して延びていて、約2.6m検出された。幅は北側の溝が25～45cm、南側が15～40cm、深さはともに５～10cm。覆土は灰褐色粘質土などである。

第４章　出土遺物（図６、図版７）

遺物はテンバコで１箱分出土した。表土から生活面まで掘り下げる途中で出土したものが多かった。図示したものでは、１・17が井戸１、７が井戸２、その他は遺構外出土。３・14～16は中世後期に遡る可能性があるが、他は近世の所産である。

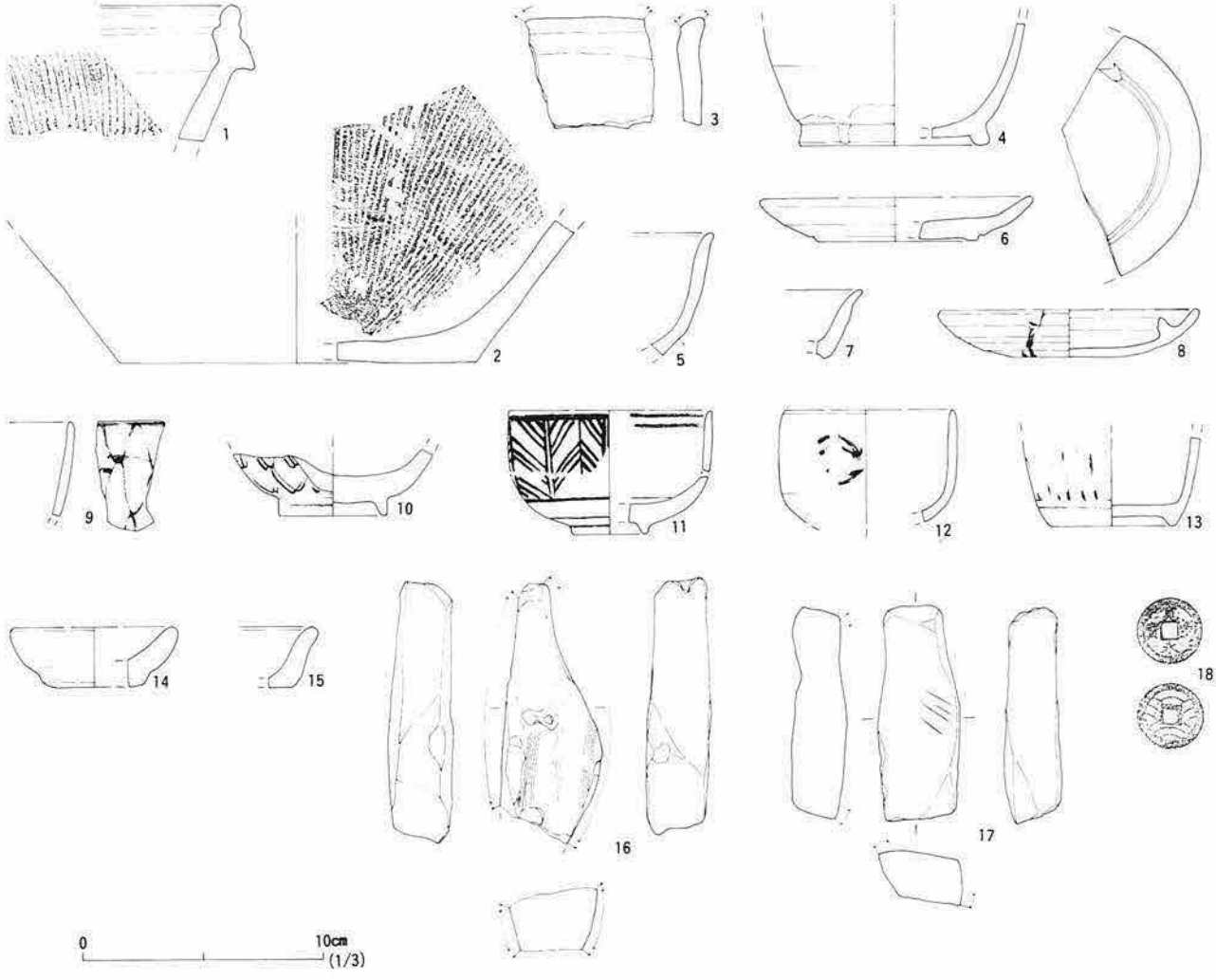


図６　出土遺物

1～13は陶磁器。1～3は擂り鉢。2は備前系で、内面は一部磨耗している。3は瀬戸・美濃系で、16～17世紀。口縁部は擦られている。4は美濃の有耳壷。外面に灰釉が掛けられている。18世紀後葉。5は瀬戸・美濃系の端反碗で、黒釉が施される。17世紀中頃。6も瀬戸・美濃系で、志野皿。17世紀中頃。7も瀬戸・美濃系で、反り皿。17世紀中頃。8は美濃の灯明皿（鉄釉）。煤が付着している。19世紀前半。9～13は肥前の染付。9～12は碗、13はそば猪口。9・10は網目文で、9は1本線、10は2本線で描かれる。11は復元して実測したものである。

14・15はかわらけ。轆轤成形の小型品であろう。いずれも器壁が分厚く、白色針状物質を含む。

16・17は砥石。16は不整形を呈し、両側面が利用されている。上面と下面の一部には条痕が見られる。17は上面と右側面が利用されている。砥面は波打っている。

18は「寛永通宝」。

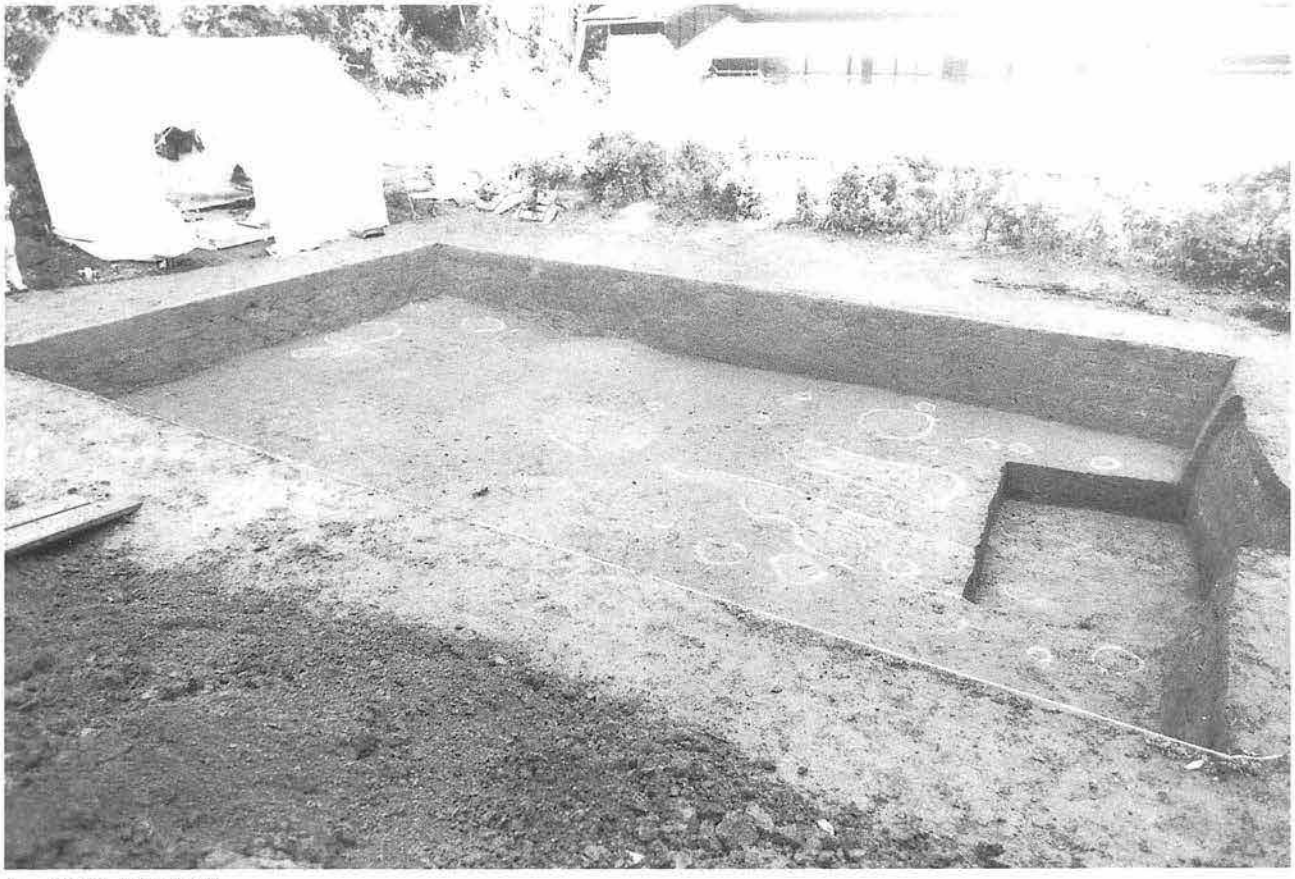
第5章　まとめ

今回の調査地点は玉縄城の中でも外郭部の谷戸内に位置しており、調査前には予想では、戦国時代の玉縄城に伴う家臣屋敷などの検出が期待されていた。しかしながら、調査で検出されたのは近世に属する遺構・遺物が大半を占めた。過去に行われた玉縄城周辺の発掘調査でも、玉縄城関連の遺構・遺物が発見されないケースが少なくなく、今回も致し方ないことであろう。玉縄城は地域の中核的な城郭ではあるが、遺構・遺物の密度は鎌倉都市遺跡と比べると、格段に低いということが知られる訳である。

今次調査では近世に帰属すると思われる井戸2基、土壙4基、溝1～2条、ピット40口などの遺構と、陶磁器、土器、石製品、木製品などの遺物が発見された。遺構の密度は高くはなく、遺物の出土量も多いとはいえない。これだけでは断定はできないが、本調査地点周辺には近世にやや財力のある農家あるいは手工業者の存在していた景観が想起される。あるいは本地点の地主であった旧家の石井家に係わる可能性もあろう。

写　真　図　版

1　調査地点現況

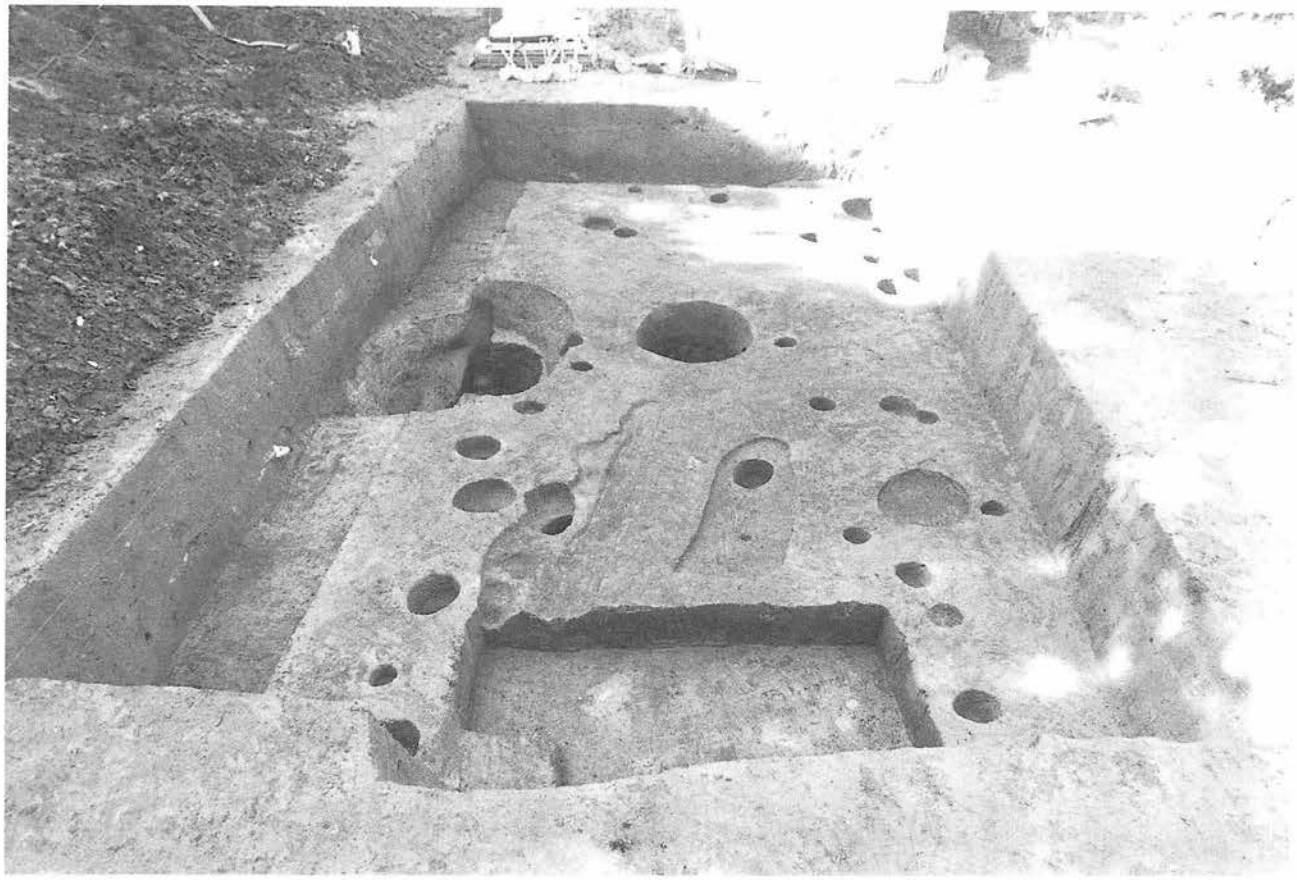


2　調査区設定状況

図版 2

1　全景（東から）

2　同（西から）

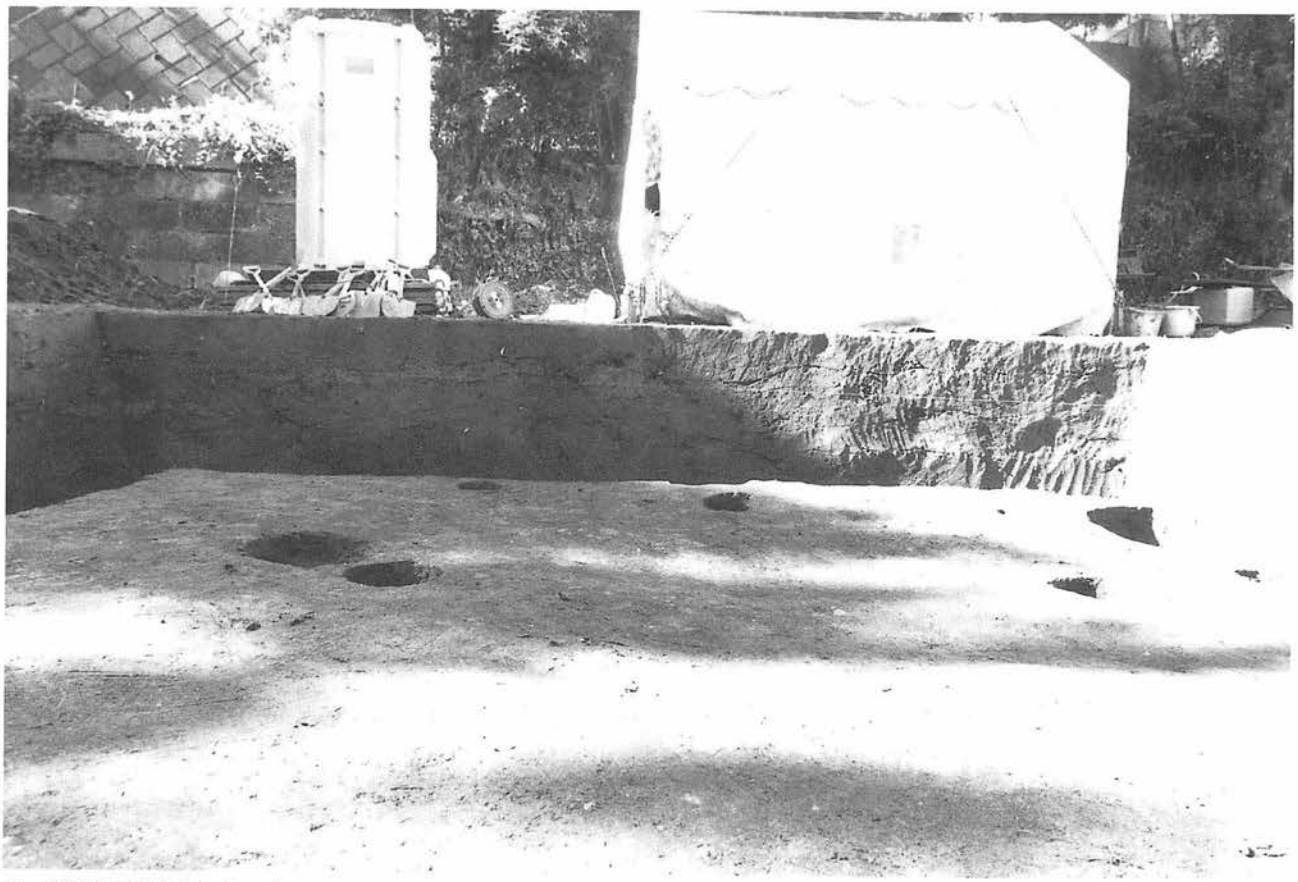


1　全景（トレンチ設定後ー東から）

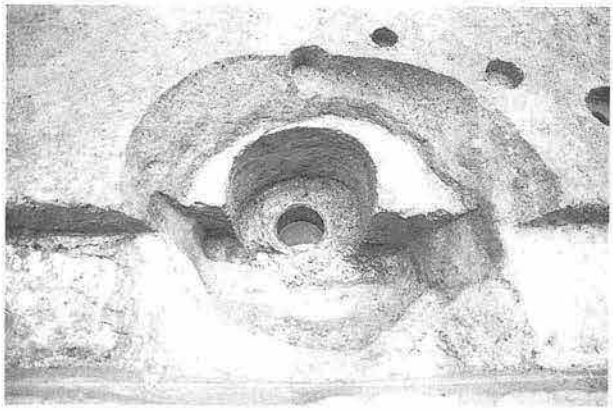
2　同（トレンチ設定後ー西から）

図版 4

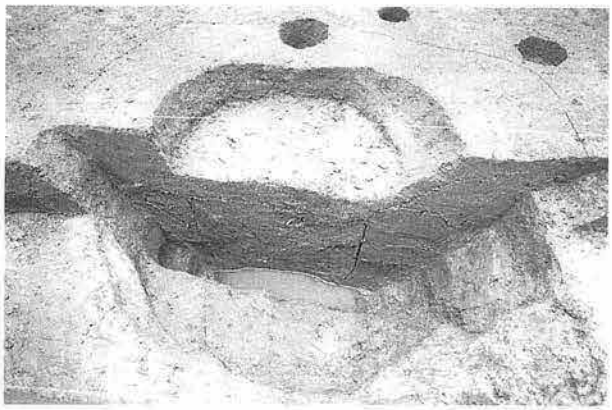
1　調査区南壁セクション



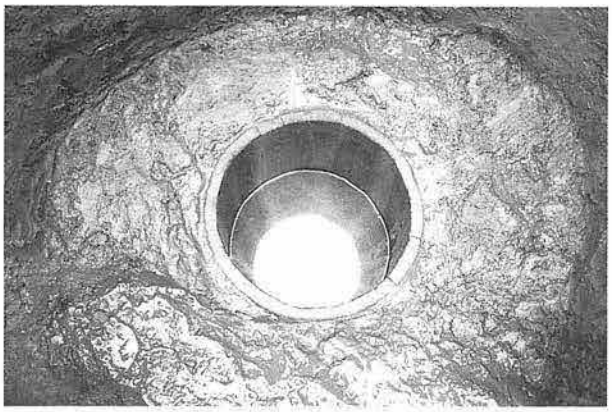
2　調査区西壁セクション



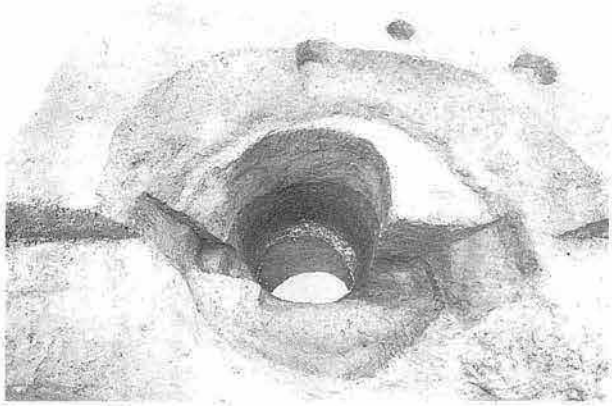
1　井戸 1



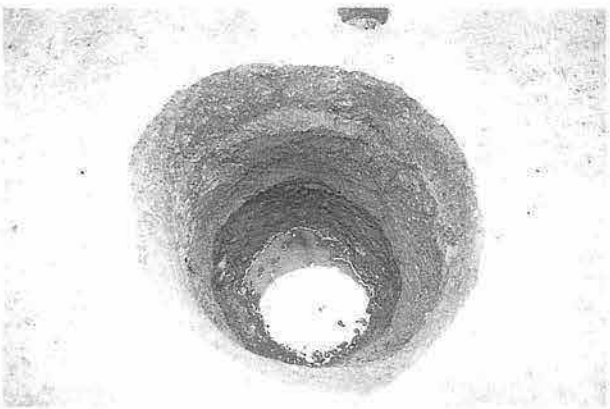
2　同（セクション）



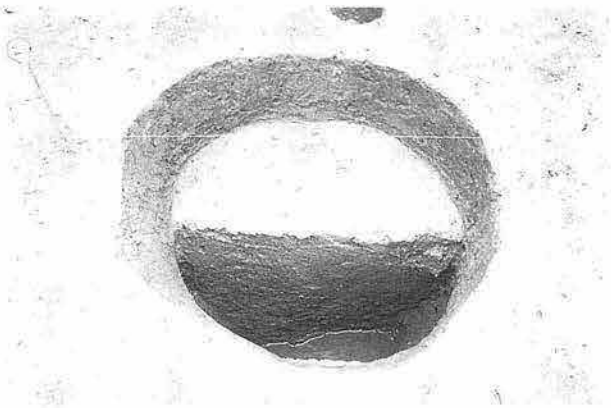
3　同（据え桶検出状況）



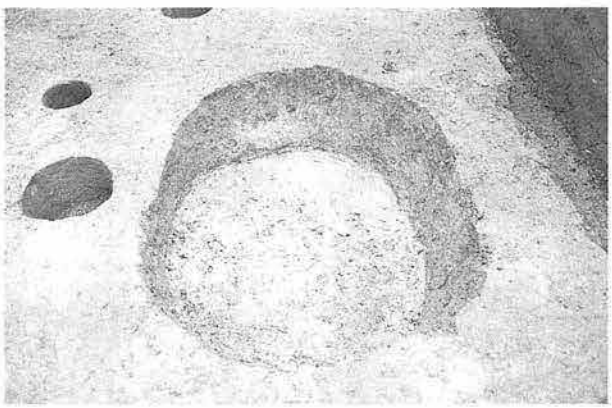
4　同（掘り方）



5　井戸 2



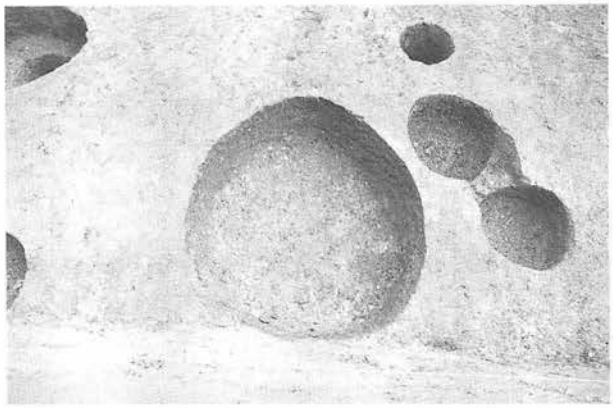
6　同（セクション）



7　土壙 1

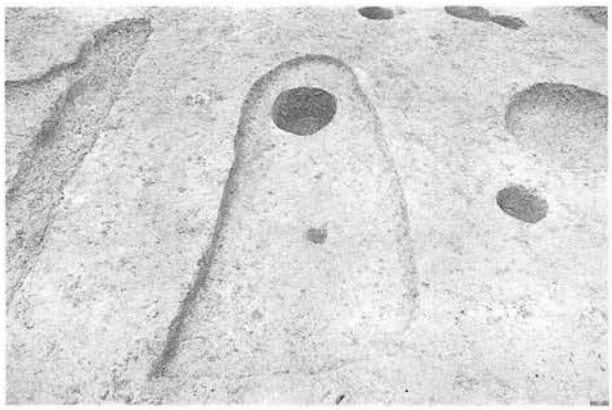
8　同（セクション）

図版 6



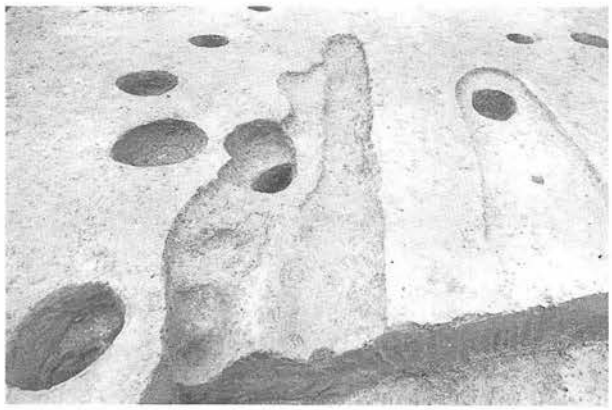
1　土壙 2

2　同（セクション）



3　土壙 3

4　同（セクション）



1　溝 1

6　同（セクション）

1

2

3

5

6

8

4

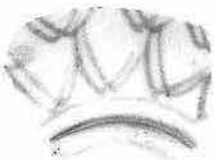
7

9

11

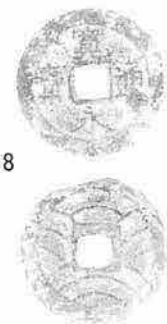
12

13


10

16

17


18

14

15

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成12年度発掘調査報告
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大河内勉
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たまなわじょうあと 玉縄城跡	かながわけん かまくらししろめぐりあざなかむら 神奈川県鎌倉市城廻字中村478番3	14204	No.63			19991102 ～ 19991122	60	個人専住宅に係わる基礎工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉縄城跡	城館	近世	井戸　2基 土壙　3基 溝　1～2条	陶磁器	

笹目遺跡（No. 207）

笹目町285番１外地点

例　　言

1　本編は、鎌倉市笹目町285番１外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2　発掘調査は個人住宅の建設にともなう国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会によって平成11年11月29日から12月25日にかけて実施された。

3　調査体制は以下の通りである。

調査主体　　鎌倉市教育委員会
調査担当　　小林康幸
調査員　　伊丹まどか　松田理枝
調査補助員　　石元道子
調査参加者　　奥山利平　中須洋二　沼上三代治　渡辺輝彦　星富蔵　有田正夫　寺島恵夫
　　関卯之松（以上、鎌倉市シルバー人材センター）

4　本編の執筆は伊丹が行ない、編集は伊丹と松田が行なった。

5　本編の図版作成に関わる作業は伊丹・松田が行ない、本編で使用した写真は遺構を伊丹が、遺物を松田が撮影した。また、全景写真は（株）フジテクノがラジコンヘリを使用して撮影した。

6　本編の凡例は以下の通りである。

1）　挿図縮尺　　全体図　1／80　　遺構個別図　1／60　　出土遺物　1／3

2）　挿図中の水糸レヴェルは海抜高を示し、スクリーントーン等は必要に応じてその都度注釈を加えた。

3）　遺物実測図中の←――→は使用痕の範囲、←　→は加工工具痕―・―・―は施釉の限界、黒色に塗りつぶしてある部分は油煙痕・煤痕の範囲を示す。

4）　かわらけは、実測できなかった破片を大・小に選別し、それぞれの総重量を測った。本来ならば、それぞれの総重量を検出した大・小の完形品のかわらけの平均値で割って個対数をだすのだが、指標となる完形品の数量が不足であったため、重量のみを示した。

5）　遺構に付した番号は、調査時に確認した遺構のプランに対して付してあり、遺構の新旧・形状を表していない。

7　出土遺物、図面、写真などの資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

8　本編作成に際して、下記の方々から多大なご教示を賜った。（敬称略）
大河内勉・菊川英政・斎木秀雄・瀬田哲夫・汐見一夫・宮田眞・森孝子・野本賢二
また、瀬戸窯製品に関しては藤沢良祐氏（瀬戸市埋蔵文化財センター）、舶載品に関しては手塚直樹氏（鎌倉考古学研究所）、砥石の産地同定に関しては汐見一夫氏よりご教示、ご指導賜った。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……50
第２章　調査の概要……52
　第１節　調査の経緯と経過……52
　第２節　国土座標上の位置とグリッド配置……52
　第３節　土層……52
第３章　検出した遺構と遺物……55
　第１節　第１面……55
　第２節　第２面……56
　第３節　第３面……59
第４章　まとめ……62
　法量表……64

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図……51
図２　第１面全体図・土層堆積図……53
図３　第２面・第３面全体図……54
図４　第１面遺構（遺構６・11・14・15・19）……56
図５　第２面・遺構７……56
図６　第２面遺構（遺構21・22）……57
図７　第２面・遺構12……58
図８　第３面遺構（遺構43・44・49・68）……60
図９　第１～３面　各面上出土遺物……61
図10　表土・撹乱層出土遺物……61

図　版　目　次

図版１　第１面・第２面全景・……67
図版２　第３面全景・遺構12・21土層堆積状況……68
図版３　第１～３面遺構出土遺物……69
図版４　遺構12出土遺物……70
図版５　表土撹乱層・１～３面上遺構出土遺物……71

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は、鎌倉市笹目町285番１外に所在し、笹目ヶ谷（佐々目谷）(註1)と呼ばれる支谷の開口部に位置する。笹目ヶ谷は比較的大きな支谷であり、『玉船和尚鎌倉記』では、鎌倉七谷の一つとして数えられている。谷戸内では、中世に行なわれたと思われる尾根裾の掘削、造成の痕跡が確認され、２ヵ所の古代の横穴群が確認されている(註2)。現在は住宅地の広がる谷戸内であるが、中世には遺身院(註3)・長楽寺(註4)・西方寺(註5)と言う三寺院があったとされる。調査地の北西約580mに位置する甘縄神明社付近には安達盛長以降、安達氏一族の屋敷や御家人の屋敷があった(註6)とされ、千葉胤宗、甘縄顕実、北条政長の屋地も近辺であった(註7)。中世において「甘縄辺」(註8)と呼称される地域が、若宮大路、由比ヶ浜、下馬、佐々目谷を含む広大な一帯であり、現在の甘縄神明社付近は甘縄と呼ばれた地域の外れであったという指摘もある(註9)。何れにしても、調査地の周辺が鎌倉幕府を形成する重要な御家人の居住する一帯であったことが伺える。遺跡地の南を走る、長谷小路（現国道134号線）は鎌倉の中央部を南北に走る若宮大路の下馬から、長谷観音・大仏を経て藤沢方面に東西に抜けている。長谷小路を本調査地より東に約100m程行くと、由比ヶ浜の海岸から、佐助ヶ谷に通じる稲村ヶ崎路と交差する十字路(辻)があり、塔の辻と呼ばれ、石塔２基が現在でも置かれている。長谷小路の南側一帯は、由比ヶ浜の後背地に形成された砂丘帯が広がり、これまでに多くの発掘調査が実施され、古代・中世の遺構・遺物が検出、確認されており、中世以前の平安期には葬送の地であった様相や、中世期に入り、葬送の地としての性格を引き継ぎつつも、道路で区画された敷地内に方形竪穴建築址が立ち並び、坩堝、とりべ、鋳型、鞴の羽口、加工途中の骨製品等の出土から、鋳物師等の工人の存在が広く確認されている。

註

（註１）　「笹目（佐々目）」という地名は、『吾妻鏡』、『金沢文庫古文書』の鎌倉期の文書等に記載がある。中世期には「佐々目」と記され、近世期では「佐々目」と「笹目」が併用される。現在は「笹目」。

（註２）　赤星直忠「鎌倉及び周辺地域の末期横穴」『鎌倉市史』考古編　1959年　吉川弘文館

（註３）　『金沢文庫文書』　1964年　神奈川県立金沢文庫
『鎌倉廃寺事典』　1980年　有隣堂

（註４）　『鎌倉廃寺事典』　1980年　有隣堂
『日本歴史地名体系・神奈川県の地名』　1987年　平凡社

（註５）　『日本歴史地名体系・神奈川県の地名』　1987年　平凡社

（註６）　白井永二編『鎌倉事典』　1976年　東京堂出版

（註７）　『見聞私記』に「永仁五年(1297)閏十月七日未時、自佐々目谷口火出来、甘縄等焼亡、千葉（胤宗カ）屋形巳下兵部大輔（甘縄顕実）、駿河守（北条政長）、近江守（？）等屋形悉焼了」の記載。

（註８）　『吾妻鏡』建長三年(1251年)二月十日条に「甘縄辺焼亡、（中略）東若宮大路、南由比ヶ浜、北中下馬橋、西佐々目谷、相模右近将監時定、相模八郎時隆等第以下、数箇所災い云々」の記述がある。

（註９）　高橋慎一郎　『中世の都市と武士』　吉川弘文館　1966年

1 本調査地点
2 笹目遺跡(笹目町285番1外地点)
3 笹目遺跡
4 笹目谷斎藤邸内横穴群
5 由比ヶ浜三丁目194番25他地点
6 由比ヶ浜三丁目194番24地点
7 由比ヶ浜三丁目199番1地点
8 長谷小路南遺跡
9 由比ヶ浜三丁目258番8地点
10 由比ヶ浜三丁目258番1地点
市立御成中学
笹目町
駐車場
駐車場
吉屋信子記念館
北浜
江ノ島電鉄

図1　調査地点位置図

第２章　調査の概要

第１節　調査の経緯と経過

本地点は、鎌倉市笹目町285番１外（№207）地点における個人住宅建設に伴う事前調査として、平成11年11月29日から12月25日にかけて鎌倉市教育委員会が埋蔵文化財調査を実施した。対象面積は87.46㎡である。本報告書に収められた「笹目ケ谷遺跡（鎌倉市笹目286番１外）」(以後地点２）とは、同じ敷地内に調査地が所在するため、調査は並行して行なわれた。

調査地の現在の海抜高は11.4m前後を測り、調査前の確認調査の結果から現地表下約100cmは近現代の遺物を含む客土層である事を確認していたため、重機による表土掘削を行ない、その後人力による掘削、遺構の検出、記録保存、写真撮影を行なった。

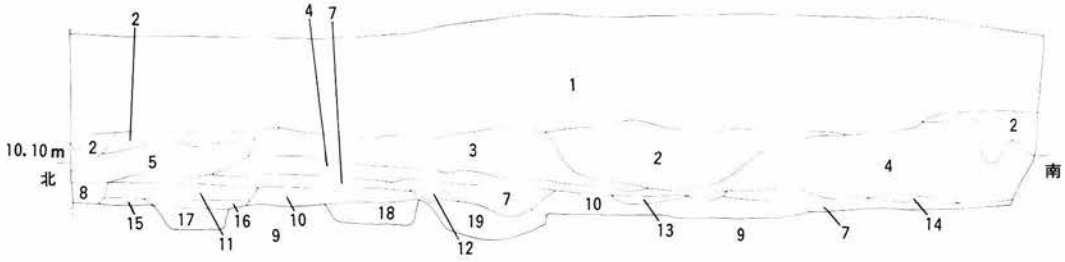
調査の結果、３面の遺構検出面を確認。検出した遺構は方形竪穴建築址２軒、土壙30基、ピット49穴、竪穴状遺構２基である。３面に遺構検出面を分けてはいるが、地業、整地層としては希薄であり、３期にわたる生活面であるとは考えにくいが、本報告では遺構の切り合い、検出した層序を考慮し３面に分けて示した。遺物は、天箱数にして12箱を数え、舶載磁器、国内産陶器、かわらけ、石製品、金属製品の他、土師器、須恵器などの古代の製品を確認している。

第２節　国土座標上の位置とグリッド配置（P80. Fig 2）

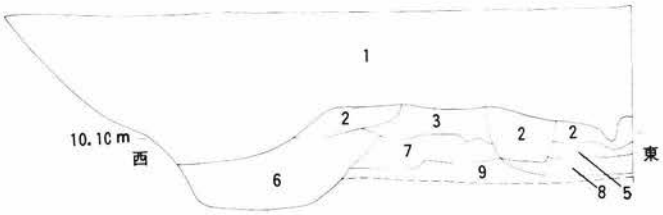
調査を地点２と並行して行なった都合から、グリッドは両調査地に共通する設定をした。
グリッドの設定は調査区西側の道路上に設置されている鎌倉市４級基準点を用いて行なった。まず４級基準点２点を結ぶ軸を基準にして、任意の角度で調査区内に仮原点を作り、そこからグリッドの基本となる２本の基準杭を作り、この２本の基準杭を軸にグリッドを配置した。なお本遺跡で使用したグリッド南北軸は真北から19°51′10″東に傾く。
グリッド配置と４級基準点の関係は地点２の報告にて図で示してある。

第３節　土層

調査地の調査前海抜高は11.4mであった。最上層の第１層は現代の撹乱と調査前に建造されていた建築物の地業層であり、大型の土丹を含む灰褐色砂で約100cmの厚さである。第１面は第１層を取り除いた時点で確認した面である。地業層、整地面としてはやや希薄であったが、土壙、ピット等の遺構を検出、確認している。第１面と第２面の間層は炭化物、土丹を含む灰褐色砂質土である。約40cmの厚さである。第２面は比較的締まりのある黒褐色砂質土で、土壙、ピット、方形竪穴建築址等の遺構を確認した。第２面と第３面の間層は炭化物、土丹粒を含む褐色砂質土が約30cmの厚さで堆積しているが、調査区の北側では中世の基盤層である黄褐色砂の堆積が確認され、部分的にではあるが調査区の西側では、周辺の調査によって確認されている中世の基盤層以前の堆積と考えられる黒褐色弱粘質土の堆積が確認された。第３面は第９層の中世基盤層である黄褐色砂を掘り込んだ形で遺構を確認しているが、遺構から検出した遺物に中世遺物を殆ど含まない様相や、間層で確認した黒褐色弱粘質土の堆積からみて地業層、整地面としては捉えられず、上層の遺構によって、撹乱されていると思われる。

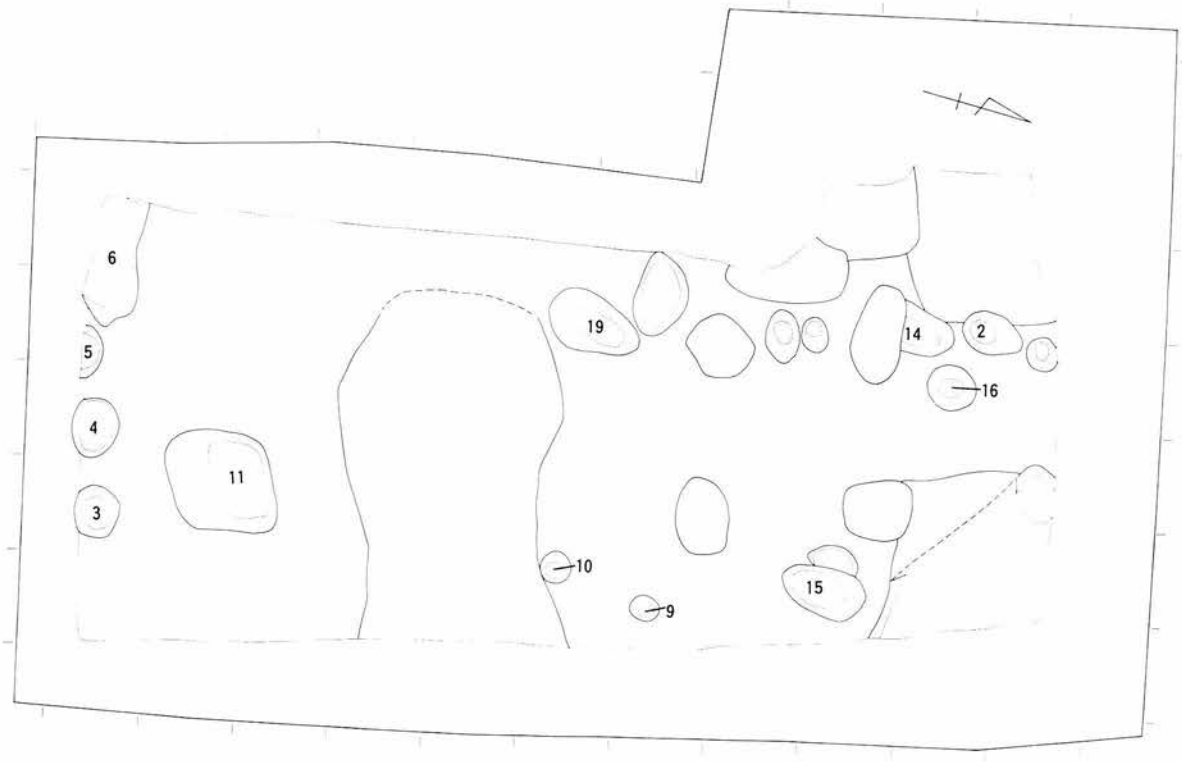


〈調査区　東壁土層堆積図〉



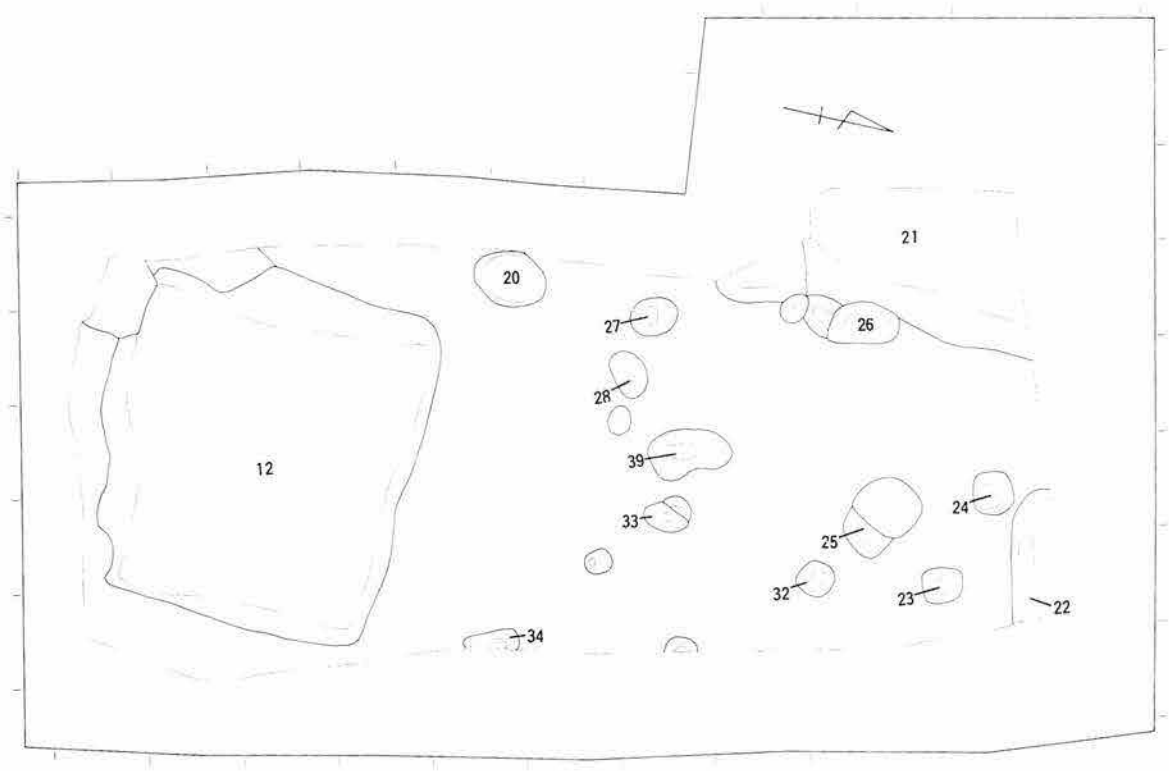
〈調査区　北壁堆積土層図〉

1　現代埋土・攪乱
2　攪乱
3　灰褐色砂質土　（第１面）
4　灰褐色砂質土　粗砂
5　暗褐色砂質土　炭化物　貝、しまりあり、遺構７覆土
6　灰黄色砂質土　炭化物　貝、土丹（1.0～2.5cm大）
　　遺構21覆土
7　黒褐色砂質土　炭化物　軽石、土丹（第２面）
8　灰褐色砂質土　炭化物、しまりあり、遺構22覆土
9　黄褐色砂　中世基盤層（第３面）
10　暗褐色砂質土　炭化物、細砂
11　褐色砂質土
12　褐色砂質土　炭化物
13　褐色砂質土　しまりあり、遺構34覆土
14　褐色砂質土　しまりあり
15　暗褐色砂質土
16　暗褐色砂質土　粗砂、貝粒子
17　暗褐色砂質土　炭化物、土丹（0.5～１cm）
18　暗褐色砂質土　炭化物
19　暗褐色砂質土　炭化物、細砂

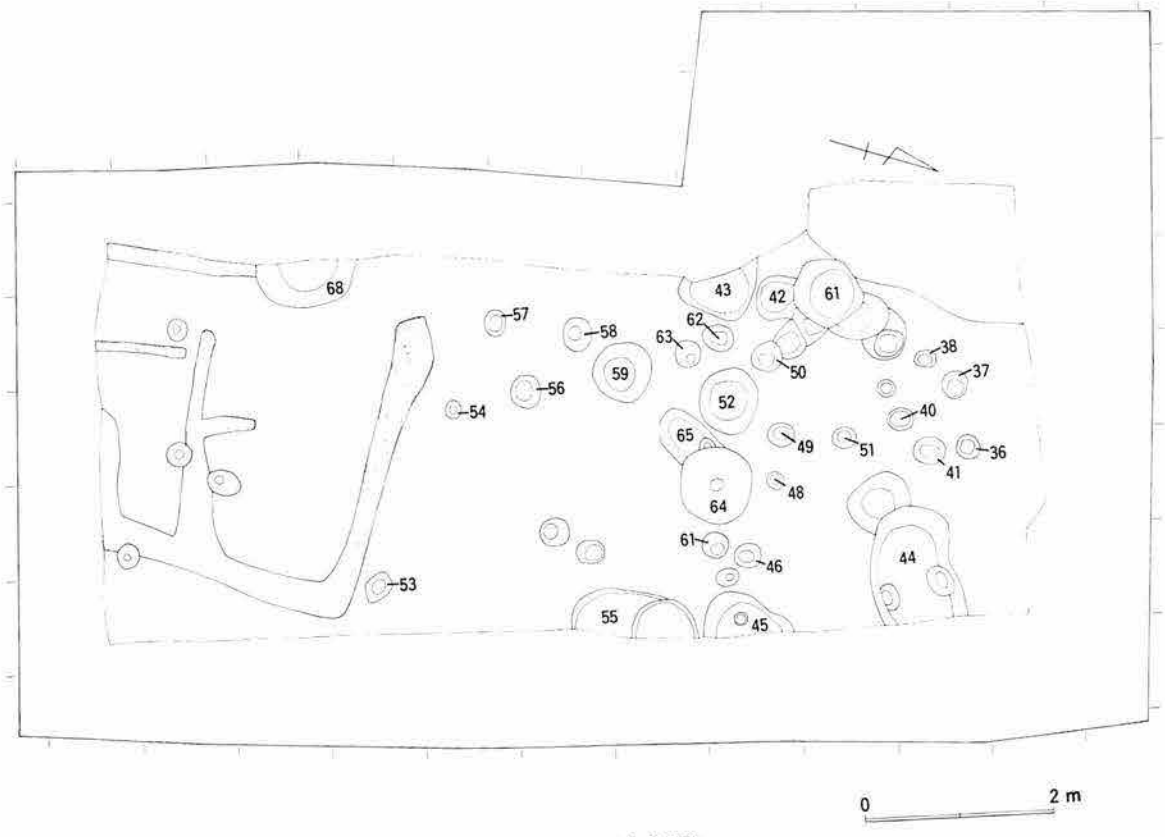


〈第１面全体図〉

図２　第１面全体図・調査区壁土層堆積図



〈第２面全体図〉



〈第３面全体図〉

図３　第２・３面全体図

第３章　検出した遺構と遺物

第１節　第１面（図２）

人力による表土掘削の後、現地表より約100cm下（海抜10.4m前後）で中世の遺物包含層を確認した。地業層、整地面として捉えることは出来ないが、土壙６基、ピット10穴を検出したため、第１面として報告している。第１面は現代の撹乱による影響を受けており、特に調査区の中央では、大型土丹塊を主体とする現代の撹乱により大きく削平されていた。

以下、各面ごとに遺物の出土を確認した遺構のみ、遺構と遺物の説明を述べる。

遺構６（図４）

調査区の南西隅で検出した土壙である。遺構が調査区域外に広がるため、正確な形状、規模は確認できなかったが、平面形は長方形を呈すると思われる。検出した規模は長軸で136cm、短軸で53cm、深さ19cmを測る。

出土遺物（図４）

１はロクロ成形のかわらけ。底部回転糸切り、内底ナデあり。口唇部内外面に僅かに油煙痕残る。２は鉄製品釘。

この他に図示できなかった遺物は、ロクロ成形のかわらけ大25ｇ、小30ｇ。常滑窯甕。人骨片。鉄製品。土師質土器。

遺構11（図４）

調査区南側で検出した土壙である。検出した規模は東西106cm、南北110cm、深さ26cmを測り平面方形を呈する。

出土遺物（図４）

３はロクロ成形のかわらけ。底部回転糸切り、内底ナデあり。４は常滑窯甕、口縁部断面。

この他に図示できなかった遺物は、ロクロ成形のかわらけが大135ｇ、小50ｇ。青磁折縁皿。常滑窯甕。山茶碗窯系捏ね鉢。

遺構14（図４）

調査区中央で検出した土壙である。撹乱に切られてしまっていたため正確な形状は確認できなかったが、平面楕円形を呈すると思われる。確認した規模は長軸54cm、短軸52cm、深さ27cmを測る。

出土遺物（図４）

５は鉄製品釘。６は鉄製品鋏。

この他に図示できなかった遺物は、ロクロ成形のかわらけが大35ｇ、小25ｇ。てづくね成形のかわらけ。白かわらけ。常滑窯甕。山茶碗窯系捏ね鉢。鉄製品釘。滑石。

遺構15（図４）

調査区北東で検出した土壙である。確認した規模は長軸93cm、短軸48cm、深さ21cmを測る。平面楕円形を呈する。

出土遺物は図示できなかったが、てづくね成形のかわらけが出土している。

遺構19（図４）

調査区中央で検出した土壙である。長軸102cm、短軸65cm、深さ20cmを測る。平面楕円形の土壙。

この他に図示できなかった遺物は、ロクロ成形のかわらけが大10ｇ、小20ｇ．瓦器質手焙り。

1面面上出土遺物（図9）

1・6・7・9はロクロ成形のかわらけ。底部回転糸切り、内底ナデあり。6は内外面ともに器壁が剥離し、口唇部に煤痕が残る。9は内折れかわらけ。底部回転糸きり、内底ナデあり。

図示できなかった遺物は、ロクロ成形のかわらけが大1380ｇ、小280ｇ。てづくね成形のかわらけ。産地不明かわらけ。内折れかわらけ。瀬戸内系かわらけ。青磁蓮弁文碗。青白磁梅瓶。白磁口兀皿。常滑窯甕、捏ね鉢。山茶碗窯系捏ね鉢。瓦器質輪花型手焙り。土器質手焙り。鉄製品。獣骨。貝。

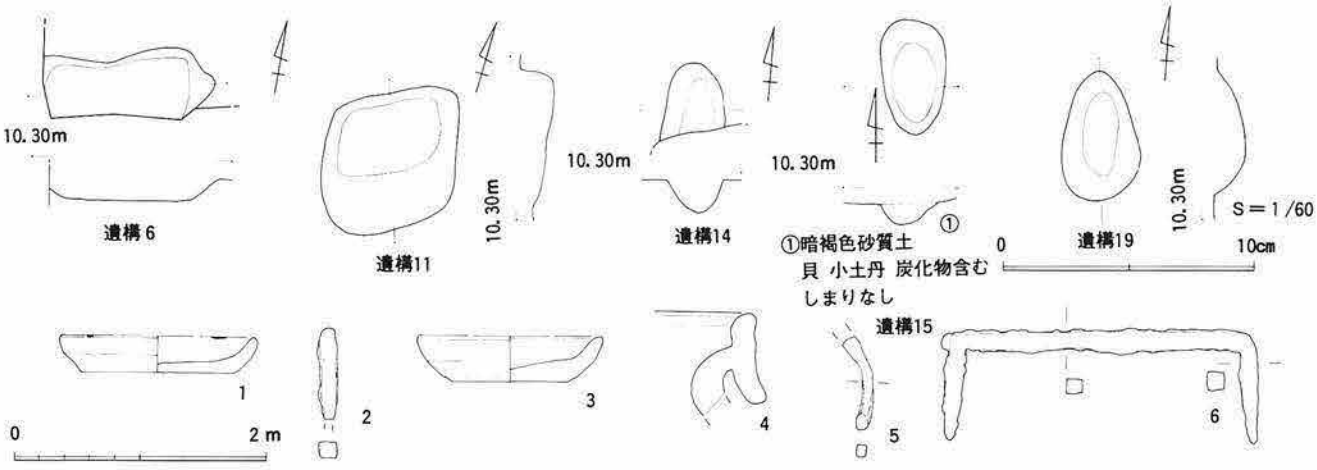


図4　第1面遺構

第2節　第2面（図3）

第2面は締まりのある黒褐色砂質土の上面で検出、確認をした。上層の撹乱、中世遺構による削平を受けている箇所も若干見受けられたが、比較的良好に遺構が検出できた。第2面では土壙9基、ピット9穴、竪穴状遺構2基、方形竪穴建築址1軒を確認した。

遺構7（図5）

調査区の北東隅で検出した竪穴状遺構である。遺構が調査区域外に伸びていた事や、撹乱による削平を受けていたため、正確な形状は不明であるが、調査区北壁で確認した土層の堆積から竪穴状に掘り込まれた遺構であると考えられる。底面は平坦でやや締まりがあった。

出土遺物（図5）

1～3はロクロ成形のかわらけ。底部回転糸切り、内底ナデあり。4・5は鉄製品釘。6は鉄製品掛け金具。

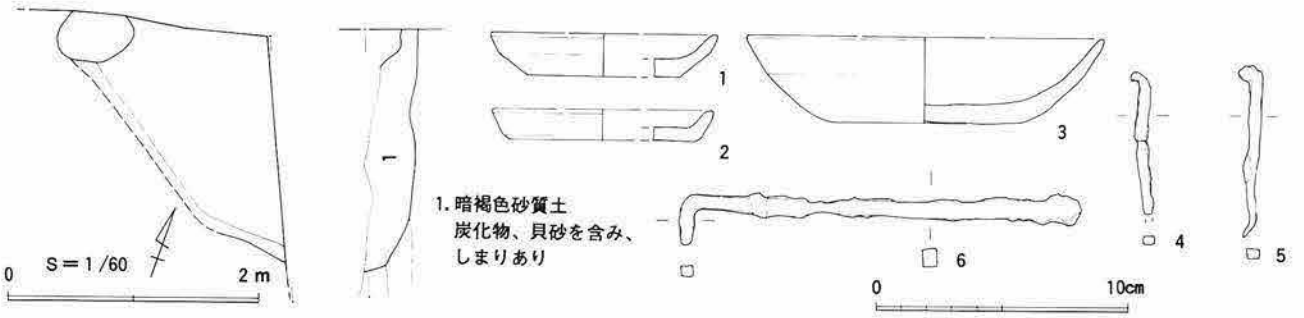


図5　遺構7

この他に図示できなかった出土遺物は、ロクロ成形のかわらけ大160ｇ、小315ｇ。内折れかわらけ。瀬戸窯壷。常滑窯甕。山茶碗窯捏ね鉢。凸部布目痕、凹縄目痕の残る男瓦。須恵器甕。土師器甕。瓦。鉄製品釘。

遺構21（図６）

調査区北西隅で検出した、竪穴状遺構である。遺構の大半が調査区域外に伸びていた事や上層を撹乱により大きく削平を受けていたため正確な形状は不明である。確認できた規模は南北255cm、東西154cm、側壁は若干開き気味に立ち上がり高さ75ｃｍを測った。底面は平坦でやや硬くしまっていた。

出土遺物（図６）

１・２は鉄製品釘。

図示できなかった遺物はロクロ成形のかわらけが破片個体数で大250ｇ、小20ｇ。てづくね成形のかわらけ・青磁蓮弁文碗・常滑窯甕・常滑窯捏ね鉢・土師器甕・鉄製品。

遺構22（図６）

調査区北東隅で検出した土壙である。遺構の大半が調査区域外に伸びていたため正確な形状は不明である。覆土は灰褐色砂質土。確認した規模は東西136cm、南北42cm、深さ20cmを測る。

出土遺物（図６）

３は鉄製品釘。

図示できなかった遺物はロクロ成形のかわらけが破片個体数で大25ｇ。てづくね成形のかわらけ。

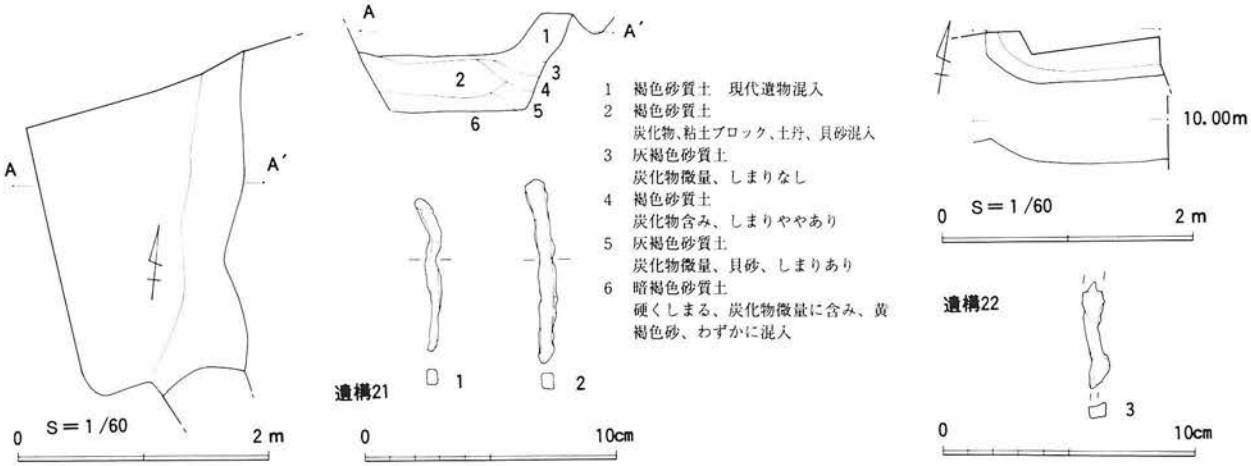


図６　遺構21・22

遺構12（図７）

調査区の南で検出した方形竪穴建築址である。遺構上面でプランを確認した時点では１軒の方形竪穴建築址として考えていたが、南北、東西に遺構の中心にベルトを残し土層の堆積状況を確認した結果、上面で確認したプランと東壁を共有するもう１軒の方形竪穴建築址を下層で確認したため、確認した遺構をＡ・Ｂに分けた。遺構12Ｂについては、第３面にて詳しく説明を述べる。又、遺構12Ｂは、底面部分のみが僅かに確認できた遺構のため、掘りあげる段階で確実に遺物を分けることはできず、出土遺物は一括して遺構12Ａ出土の遺物として提示した。

遺構12Ａ（図７）

確認した規模は、東西375cm、南北332cmを測り、平面方形を呈する。側壁はやや開き気味に立ち上がり、最大で50cmの高さを確認した。底面規模は、東西296cm、南北265cmを確認し底面レヴェルは海抜9.6ｍである。底面にはこの遺構の構造を推し測れるような痕跡は無かった。

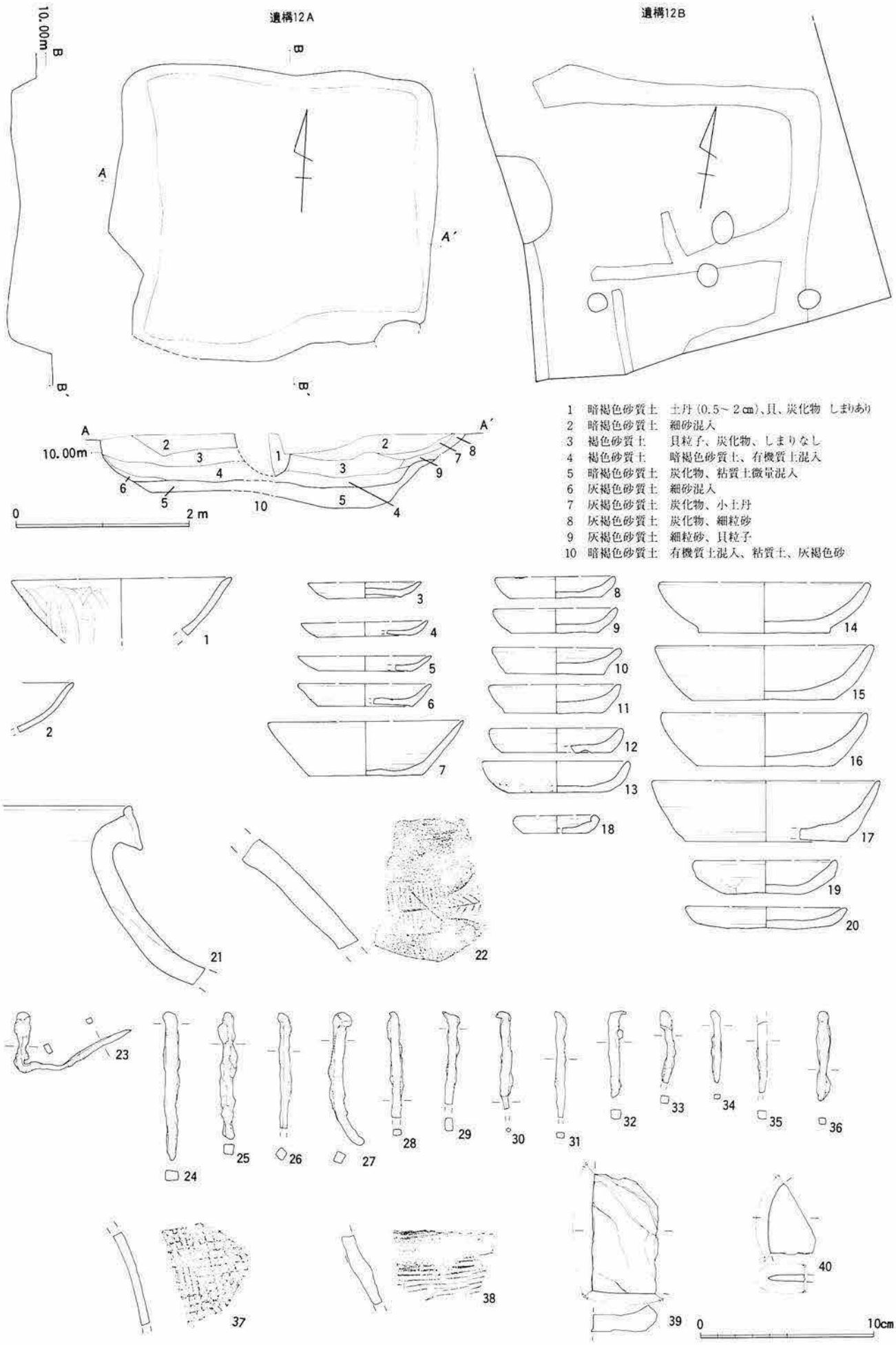

遺構12A
遺構12B
10.00m
B
B'
A
A'
1 暗褐色砂質土 土丹（0.5～2㎝）、貝、炭化物 しまりあり
2 暗褐色砂質土 細砂混入
3 褐色砂質土 貝粒子、炭化物、しまりなし
4 褐色砂質土 暗褐色砂質土、有機質土混入
5 暗褐色砂質土 炭化物、粘質土微量混入
6 灰褐色砂質土 細砂混入
7 灰褐色砂質土 炭化物、小土丹
8 灰褐色砂質土 炭化物、細粒砂
9 灰褐色砂質土 細粒砂、貝粒子
10 暗褐色砂質土 有機質土混入、粘質土、灰褐色砂
0
2 m
0
10cm

図7 遺構12

出土遺物　（図７）

遺構12Ａと遺構12Ｂは出土遺物を分けて採集することが出来なかったため一括して取り上げている。

１は龍泉窯青磁蓮弁文碗。２は産地不明瓦器碗。３～18はロクロ成形のかわらけ。３～７は器壁が薄く、外反して立ち上がり、小型の器形は器高が低い。底部回転糸切り、内底ナデが施される。胎土は明褐色を呈し硬質で精良である。産地は不明であり、他所から搬入されたかわらけであると思われる。８～13は小型のかわらけである。13は底部および外側面半ばまで煤痕が残る。14は内折れかわらけ。15～18は大型のかわらけ。16は底部回転糸切りの整形痕をナデて消している。19・20はてづくね成形のかわらけである。胎土赤褐色を呈する。21・22は常滑窯甕。21は胎土灰褐色を呈し、長石粒、0.5～0.8cm前後の小石粒を含みやや粘性の強い精良な胎土である。中野６ａ形式の年代観が与えられる。23～36は鉄製品、釘。37は須恵器甕断面。38は須恵器甕とも思われるが、五領期の叩き甕の可能性もある。39・40は石製品。39は硯と思われる。40は用途不明品であるが、砥石として使用した残滓かもしれない。

この他に図示できなかった出土遺物はロクロ成形のかわらけ大8200ｇ、小910ｇ。てづくね成形のかわらけ。内折れかわらけ。産地不明かわらけ。青磁無文碗。白磁口兀皿。瀬戸窯製品。亀山窯甕。常滑窯甕・壷。山茶碗窯系捏ね鉢。瓦器質手焙り。石製品硯。

第２面上出土遺物（図９）

第２面の上層で検出した遺物である。　２～５・８はロクロ成形のかわらけ。８は硬質で精良な胎土、器壁は外反して立ち上がる。産地不明のかわらけである。

図示できなかった遺物はロクロ成形のかわらけが大330ｇ、小50ｇ。てづくね成形のかわらけ・青磁蓮弁文碗・青磁劃花文碗・青磁壷・白磁壷・常滑窯甕、捏ね鉢、壷・山茶碗窯系捏ね鉢・山茶碗・滑石・土師器甕、杯・須恵器甕・鉄製品釘・貝・骨・軽石。

第３節　第３面　（図３）

第３面は中世の基盤層である黄褐色砂層上で検出し確認しているが、黄褐色砂層を確認したレベルが約20cm調査区の北側より南側が低く、平坦な堆積が見られなかったことや、調査区の中央付近では中世の基盤層以前の堆積と考えられる黒褐色弱粘質土が部分的にではあるが確認される点から、全てが第３面に帰属するものでは無く第２面に帰属する遺構も含まれると考えている。第３面で検出した遺構は土壙15基、ピット30穴、方形竪穴建築址１軒である。

遺構12Ｂ（図７）

遺構12Ｂは遺構12Ａの底面下層を掘り下げて根太痕を検出し、土層の堆積状況から東側の壁の立ち上がりを僅かであるが確認した。東壁は、遺構12Ａとほぼ同じ位置で立ち上がるが、北・西・南側の底面は遺構12Ａの底面よりも広がって根太痕を検出しており、側壁の立ち上がりを確認する事は出来ず、さらに大きな規模をもっていたと推察される。底面の規模は根太痕の範囲で確認した限りで、東西318cm、南北340cmを測り、底面レヴェルは9.4ｍであった。

遺構12Ｂは、第３面遺構として報告しているが、前述したように確実な掘り込み面を確認することは出来ておらず、遺構12Ａのベルトセクションに表れていた東壁の立ち上がりと、検出底面レベルを考慮にいれ、第３面遺構として報告している。

遺構43　（図８）

調査区北西で検出した土壙である。遺構が調査区域外に伸びているため正確な形状は不明であるが、不正円形を呈すると思われる。確認した規模は長軸72cm、短軸54cm、深さ63cmを測る。

図示できなかった出土遺物は、てづくね成形のかわらけ・青磁櫛掻き文碗・土師器甕。

遺構44　（図８）

調査区北東隅で検出した土壙である。遺構が調査区域外に伸びているため正確な形状は確認できなかったが、長軸125cm、短軸88cm、深さ30cmを測る、楕円形を呈する土壙である。

出土遺物　（図８）

１は不明土器である。胴部外側面に粘土帯で文様が貼り付けされた痕跡が残る。硬質で精良な胎土をもち、硬く焼きしまっている。２はてづくね成形のかわらけ。口縁断面は四角形を呈し外側面に弱く稜が入る。

図示できなかった遺物はてづくね成形のかわらけ。

遺構49　（図８）

調査区北で検出したピットである。長軸28cm、短軸26cm、深さ37cmを測る。平面円形を呈する。

出土遺物　（図８）

３・４は瀬戸内系かわらけと思われる。断面三角形の高台を粘土貼り付けにより整形しているが、非常に雑な造りである。胎土は精緻で硬く焼きしまっている。

遺構68　（図８）

調査区南西で検出した土壙である。調査区域外に遺構が伸びており正確な形状は不明だが、確認した規模は長軸106cm、短軸48cm深さ43cmを測り、平面円形を呈すると思われる。

出土遺物　（図８）

５はてづくね成形のかわらけ。口縁断面は四角形を呈し、胴部外側面にやや強い稜が２段に入る。

図示できなかった遺物はてづくね成形のかわらけ、土師器甕。

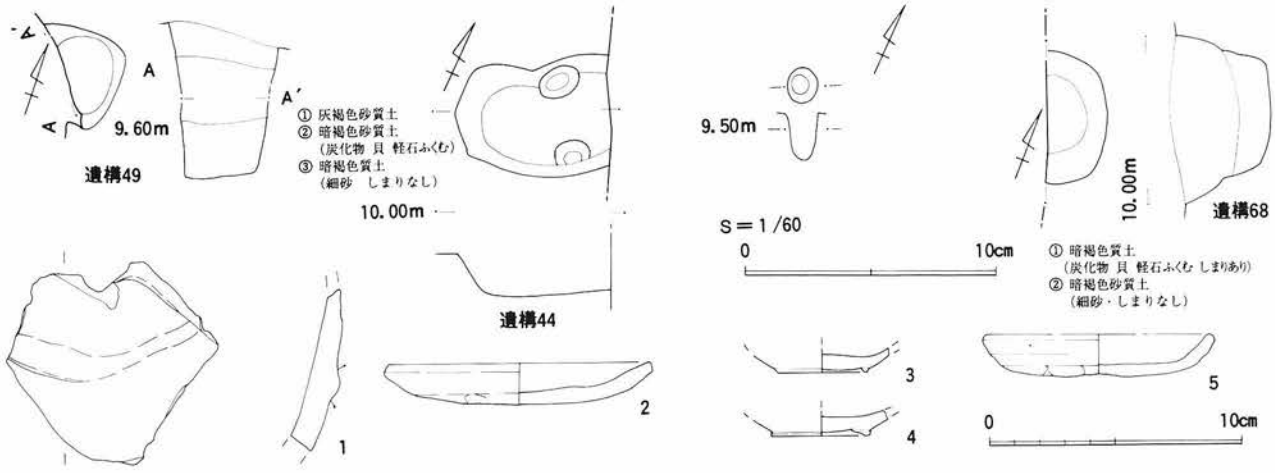


図８　遺構43・44・49・68

第３面上出土遺物　（図９）

第３面上層で検出した遺物である。10・11はてづくね成形のかわらけ。10は口唇端部は丸く、外側面に稜が弱く入る。胎土赤褐色を呈し、内底ナデの後見込みナデが施される。11は口唇部断面形は四角形を呈し、胎土は粒子が細かく、薄手で硬く焼きしまっている。外側面上位の横ナデが強く、やや強く稜が入る。13は土師器甕。相模型の長胴甕。８世紀前半の年代観が与えられる。

図示できなかった遺物はロクロ成形のかわらけ大30ｇ、てづくね成形のかわらけ、青磁櫛描文椀、常滑窯甕、須恵器甕、土師器甕。

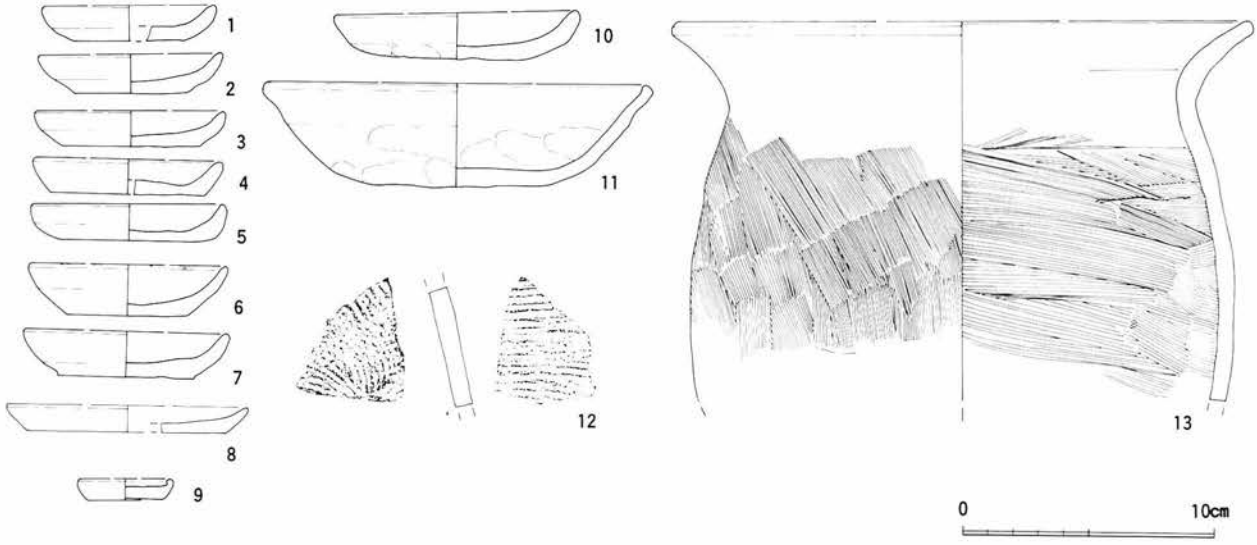


図９　第１～３面上出土遺物

表土・撹乱層出土遺物

１～７はロクロ成形のかわらけ。５は胎土褐色を呈し、器壁を２ヵ所ほぼ対面している位置を内欠けている。６は硬質な胎土。器壁は薄く外反する。７は内折れかわらけ。底部回転糸きり、内底ナデあり。

８は常滑窯甕断面。９～12は砥石。９は鳴滝産仕上げ砥。両側面に切り取り痕が残る。10・11は鳴滝産仕上げ砥。12は産地不明荒砥。側面に切り取り痕が残る。13は鉄製品、釘。

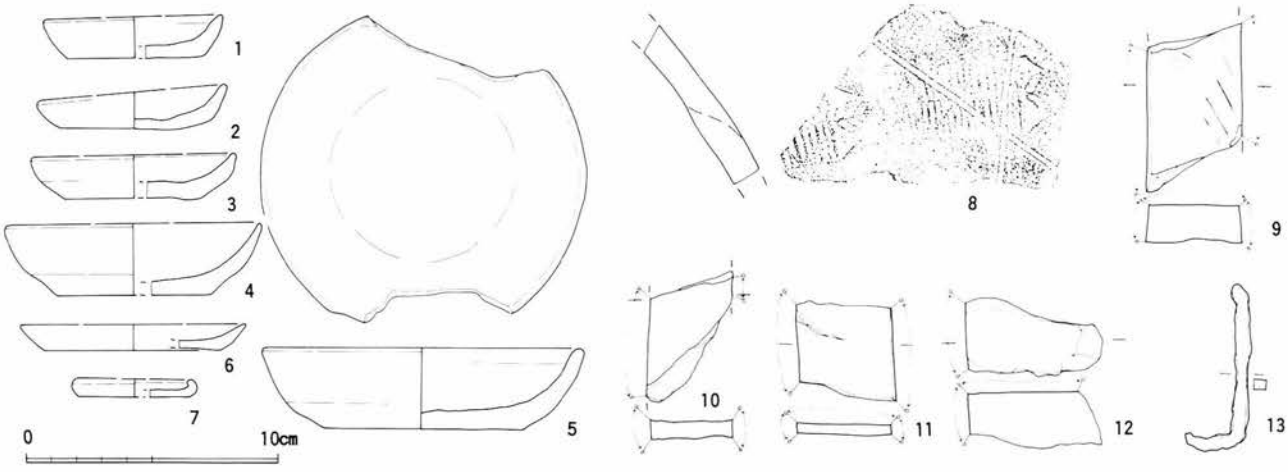


図10　表土・撹乱層出土遺物

第4章　まとめ

本報告では、本調査地点のまとめを述べると共に、並行して行なった地点2の調査成果を合わせて、遺跡の性格・年代・遺物の出土状況について、若干の考察を加える事とする。

笹目ヶ谷の谷戸の開口部に位置する本遺跡は、東は滑川西岸、西は長谷観音付近まで広がり、現在では狭小となった由比ヶ浜の海浜に形成された海岸砂丘の高台の北際に位置する。この砂丘周辺の中世以前の様相は明らかではないが、これまでの調査成果からこの砂丘の北から西にかけて、中世の遺構が形成される基盤砂層下に、弥生時代末から、古墳時代前期、古代（奈良・平安時代）の遺物を含む「後背湿地（黒褐色弱粘質砂層）」が堆積し、竪穴住居址・集落跡・祭祀遺構・土壙墓を含む墓址等の古墳時代前期以降の遺構が検出、報告されている。その後、この「後背湿地」は海岸からの飛砂の堆積を繰り返し、中世の基盤層が形成される。この砂丘帯一帯は、中世鎌倉において「前浜」と称され、都市鎌倉の周縁の地として、工人の工房あるいは倉としての機能を持つと考えられる方形竪穴建築址を検出し、工人の存在を裏付ける、鍋鋳型・鞴の羽口・鏡の鋳型・模鋳銭の鋳型・鉄滓・銅滓・栗型などの骨加工途中の製品が出土し、生活の営みを窺える遺構・遺物が検出されている。又、人骨、土壙墓等の検出により、葬送の地としての性格も引き継いでいたと考えられる事が、これ迄の調査成果によって明らかになっている。

検出した遺構・遺物

本遺跡地で検出した遺構は、方形竪穴建築址2軒・土壙30基・ピット49穴・竪穴状遺構2基である。出土した遺物は、かわらけ（ロクロ成形・てづくね成形・白かわらけ・産地不明かわらけ・瀬戸内系かわらけ）・舶載磁器（青磁・青白磁・白磁）・国産陶磁器（瀬戸窯・常滑窯・山茶碗窯・亀山窯）・手焙り・瓦・石製品・鉄製品・滑石・人骨片・獣骨・貝。中世以前の遺物は須恵器・土師器等である。これらの遺構・遺物は調査地の南に広がる砂丘帯上で確認、報告された遺構・遺物と同様の傾向を示す。

2軒の方形竪穴建築址が確認されたが、いづれも上層からの削平を受けており、造営された当初の形状を正確に留めてはいない。第2面で確認した方形竪穴建築址遺構12Aは、比較的良好に検出された。側壁はやや開き気味に立ち上がり、底面は平坦で柱穴などの痕跡はなく、比較的小型である。遺構12Aの底面下層で確認した遺構12Bは遺構12Aに上層を削平されていたが、東・北壁の立ち上がりを土層堆積の観察により確認し、底面上には根駄の痕跡が明確とは言えないが遺存していることを確認した。方形竪穴建築址は、これまでの調査成果から、底面上に土台石、あるいは角材を配し、さらに床板を張った構造である事が確認され、調査によって検出した底面が、そのまま床面にはならないことがわかっている。当初、上面で確認したプランの状況から、1軒の方形竪建築址の床面部分と掘り方底面とになるのではないかと考え調査をすすめていたが、遺構12Aの西壁の立ち上がりよりもさらに西に遺構12Bの底面が広がることがわかったため、2軒の方形竪建築址として報告している。当初、1軒の方形竪建築址として考えていたため遺物を分けて採集することが出来ず、遺物からそれぞれの年代を分けて推察することは出来なかった。また、覆土内出土の遺物はこの遺構が廃絶される過程で周囲から流入、廃棄されたものが大半であり、時代幅に広がりがあるが、一括して採集した出土遺物を観察すると、小片ではあるが出土したてづくねかわらけの器形は、稜が弱く入り、扁平な器形を呈し、13世紀第4四半期に相当すると思われる。又、出土したロクロ成形のかわらけや国産陶磁器の組成を観察すると14世紀前半台

に相当すると考えられる。これは、第２面上で検出した遺物と同様の傾向を示しており、第２面は概ね14世紀前半の年代が与えられる。第３面は上層を第２面の遺構による削平を受けており、整地・地業面としては希薄であるが、出土した遺物は、ロクロ成形のかわらけは小片で、数量も少なく、てづくね成形のかわらけが主体であった。国産陶磁器も常滑窯甕が１点、舶載磁器は櫛描文の青磁椀が１点であった。

出土したロクロ成形のかわらけの内、硬質で精良な胎土を持ち、器壁がやや外反して立ち上がる産地不明のかわらけ〔註１〕が見られる。本調査地では、生活面を分けて遺構を検出することが出来なかったため、明確な年代観を与えることが出来ず、報告例も無く、鎌倉で出土したかわらけの編年観に照らし合わせる事が出来なかった。しかし、器形から見て中世以前のかわらけの性格を受け継いでいるのではないかとの指摘もあり〔註２〕、今後の調査事例を重ねることを期待したい。

遺跡の変遷

本調査地点で遺構は確認できなかったが、第３面上で、中世の基盤層下に堆積する黒褐色弱粘質砂層の堆積を部分的に確認している。隣接する地点２では、仰臥伸展葬の葬位を持つ土壙墓を検出している。この土壙墓は上層を大きく削平を受け、遺物が出土していないため明確な年代は不明だが葬位と検出状況から見て、中世以前の遺構と考えられる。国道134号線を挟んで南接する「長谷小路周辺遺跡」の報告でも、仰臥伸展葬の土壙墓を確認しており、調査地周辺が中世以前には墓域に近い状況であったのであろう。又、本報告では遺構検出面を３面に分けて報告している。それぞれの検出面は上層からの削平を受けており、生活面を分けて考えることは出来なかったが、出土した遺物の観察から13世紀後半から14世紀前半にかけて構築された遺構群であると考えられる。周辺の遺跡で確認される工人の存在を裏付ける様な遺物・遺構は検出されなかった。

＜註＞

〔註１〕　遺構12出土（図７・３～７）。第２面出土（図９・８）表土・撹乱層出土（図10・６）

〔註２〕　鎌倉遺跡調査会の斎木秀雄氏よりご指摘を頂いた。

＜参考文献＞

「由比ヶ浜三丁目194番25外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』　1989年３月

『由比ヶ浜三丁目194番25外遺跡発掘調査報告』　1990年３月

「長谷小路周辺遺跡（鎌倉市由比ヶ浜三丁目258番１地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』　1990年

「長谷小路周辺遺跡（鎌倉市由比ヶ浜三丁目194番24地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７』　1991年

『長谷小路南遺跡』（鎌倉市由比ヶ浜３丁目202番２外）　1992年２月

『長谷小路周辺遺跡』（鎌倉市由比ヶ浜三丁目258番１地点）　1995年

『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』（由比ヶ浜３丁目２番200地点）　1997年９月

遺構6，11，14，15，19出土遺物（図4）

1	かわらけ	口径 7.5　高さ 1.4　底径 6.2	2	鉄製品・釘	長さ(3.6)　幅(0.6)　厚さ(0.6)
3	かわらけ	口径(7.2)　高さ 1.8　底径 4.6	4	常滑窯甕	
5	鉄製品・釘	長さ(3.7)　幅(0.4)　厚さ(0.5)	6	鉄製品・鎹	長さ12.2　幅 0.6　厚さ 0.6

遺構7出土遺物（図5）

1	かわらけ	口径(8.8)　高さ 1.7　底径 6.0	2	かわらけ	口径(8.8)　高さ 1.2　底径 7.4
3	かわらけ	口径(14.0)　高さ 3.4　底径 7.4	4	鉄製品・釘	長さ(5.7)　幅(0.4)　厚さ(0.3)
5	鉄製品・釘	長さ(6.8)　幅(0.5)　厚さ(0.4)	6	鉄製品・掛金具	長さ(15.0)　幅 0.5　厚さ 0.7

遺構21，22出土遺物（図6）

1	鉄製品・釘	長さ(6.0)　幅(0.4)　厚さ(0.6)	2	鉄製品・釘	長さ(7.3)　幅(0.5)　厚さ(0.6)
3	鉄製品・釘	長さ(4.3)　幅(0.7)　厚さ(0.4)			

遺構12出土遺物（図7）

1	青磁蓮弁文碗	口径(12.6)	2	瓦器質碗	
3	かわらけ	口径(6.6)　高さ 0.9　底径 4.2	4	かわらけ	口径(7.4)　高さ 0.8　底径 5.4
5	かわらけ	口径(7.8)　高さ 0.9　底径 5.4	6	かわらけ	口径(7.6)　高さ 1.3　底径 5.4
7	かわらけ	口径(11.3)　高さ 3.1　底径 6.6	8	かわらけ	口径(6.8)　高さ 1.2　底径 5.3
9	かわらけ	口径(7.0)　高さ 1.4　底径 5.2	10	かわらけ	口径(7.3)　高さ 1.5　底径 5.7
11	かわらけ	口径(7.5)　高さ 1.6　底径 5.6	12	かわらけ	口径(7.6)　高さ 1.4　底径 6.2
13	かわらけ	口径 6.4　高さ 1.8　底径 5.9	14	かわらけ	口径(12.0)　高さ 2.9　底径 7.6
15	かわらけ	口径(12.5)　高さ 3.1　底径 8.2	16	かわらけ	口径(11.8)　高さ 3.1　底径 7.8
17	かわらけ	口径(13.0)　高さ 3.5　底径 9.4	18	内折れかわらけ	口径(4.4)　高さ 1.0　底径 3.8
19	手捏ねかわらけ	口径(8.2)　高さ 1.9	20	手捏ねかわらけ	口径(9.2)　高さ 1.2
21	常滑窯甕		22	常滑窯甕	
23	鉄製品・釘	長さ(11.0)　幅(0.6)　厚さ(0.4)	24	鉄製品・釘	長さ(8.5)　幅(0.7)　厚さ(0.6)
25	鉄製品・釘	長さ(7.3)　幅(0.6)　厚さ(0.5)	26	鉄製品・釘	長さ(6.6)　幅(0.5)　厚さ(0.6)
27	鉄製品・釘	長さ(8.0)　幅(0.5)　厚さ(0.6)	28	鉄製品・釘	長さ(6.1)　幅(0.5)　厚さ(0.3)
29	鉄製品・釘	長さ(5.4)　幅(0.4)　厚さ(0.8)	30	鉄製品・釘	長さ(5.6)　幅(0.2)　厚さ(0.2)
31	鉄製品・釘	長さ(6.1)　幅(0.5)　厚さ(0.4)	32	鉄製品・釘	長さ(5.0)　幅(0.5)　厚さ(0.5)
33	鉄製品・釘	長さ(5.1)　幅(0.5)　厚さ(0.4)	34	鉄製品・釘	長さ(4.2)　幅(0.4)　厚さ(0.2)
35	鉄製品・釘	長さ(4.1)　幅(0.5)　厚さ(0.5)	36	鉄製品・釘	長さ(5.1)　幅(0.4)　厚さ(0.4)
37	須恵器甕		38	須恵器甕	
39	石製品・硯		40	石製品	

遺構43，44，49，68出土遺物（図8）

1	不明土器		2	手捏ねかわらけ	口径10.4
3	瀬戸内系土器	底径(3.6)	4	瀬戸内系土器	底径(4.2)
5	手捏ねかわらけ	口径(8.8)　高さ 1.6			

1～3面出土遺物（図9）

1	かわらけ	口径(6.8)　高さ 1.4　底径 4.2	2	かわらけ	口径(7.3)　高さ 1.6　底径 4.6
3	かわらけ	口径(7.4)　高さ 1.4　底径 5.4	4	かわらけ	口径(7.4)　高さ 1.4　底径 6.1
5	かわらけ	口径 7.5　高さ 1.5　底径 6.4	6	かわらけ	口径(7.8)　高さ 2.0　底径 4.8
7	かわらけ	口径(8.0)　高さ 1.8　底径 5.4	8	かわらけ	口径(9.6)　高さ 1.1　底径 8.0
9	内折れかわらけ	口径(3.6)　高さ 0.9　底径 3.0	10	手捏ねかわらけ	口径 9.1　高さ 1.8
11	手捏ねかわらけ	口径(15.0)　高さ 4.1	12	須恵器甕	
13	土師器甕	口径(22.6)			

表土・撹乱層出土遺物（図10）

1	かわらけ	口径(7.0)　高さ 1.6　底径 5.4	2	かわらけ	口径 7.4　高さ 1.5　底径 6.0
3	かわらけ	口径(8.0)　高さ 1.7　底径 5.4	4	かわらけ	口径(10.0)　高さ 2.8　底径 6.0
5	かわらけ	口径12.7　高さ 3.0　底径 8.2	6	かわらけ	口径(2.9)　高さ 4.7　底径 7.0
7	内折れかわらけ	口径(4.4)　高さ 0.7　底径 4.4	8	常滑窯甕	
9	石製品・砥石	長さ(4.8)　幅(3.6)　厚さ(1.3)	10	石製品・砥石	長さ(3.8)　幅(3.3)　厚さ 0.7
11	石製品・砥石	長さ(3.6)　幅 3.7　厚さ 0.4	12	石製品・砥石	長さ(2.9)　幅(4.7)　厚さ(2.2)
13	鉄製品・釘	長さ(8.1)　幅(0.5)　厚さ(0.4)			

法量表

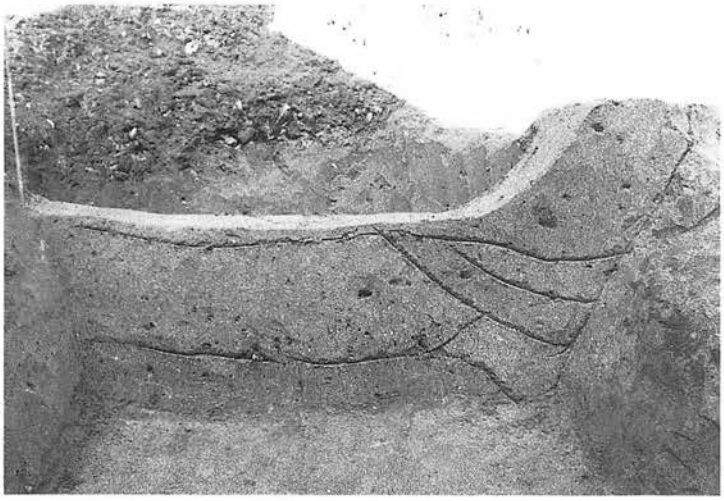
写　真　図　版

▲ 第 1 面全景

▶ 第 2 面全景

図版 2

▲ 第 3 面全景



◀ 遺構21土層堆積状況

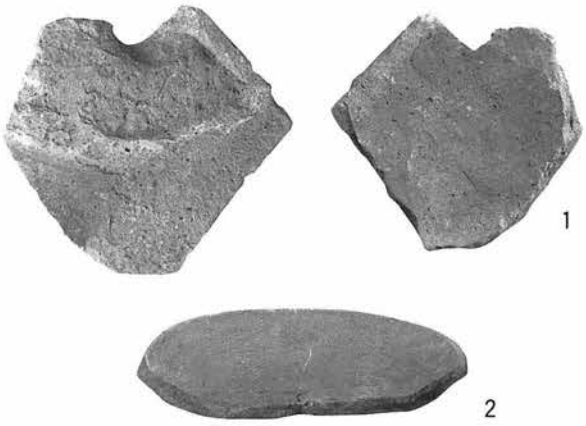
▶ 遺構12A・B土層堆積状況

遺構７出土遺物（図５）

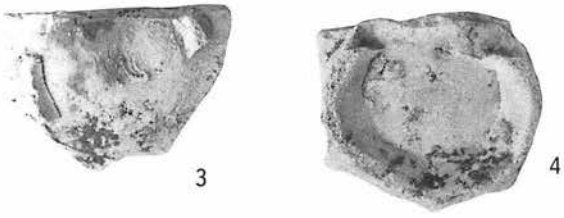
遺構11出土遺物（図４）

遺構14出土遺物（図４）

遺構21出土遺物
（図７）



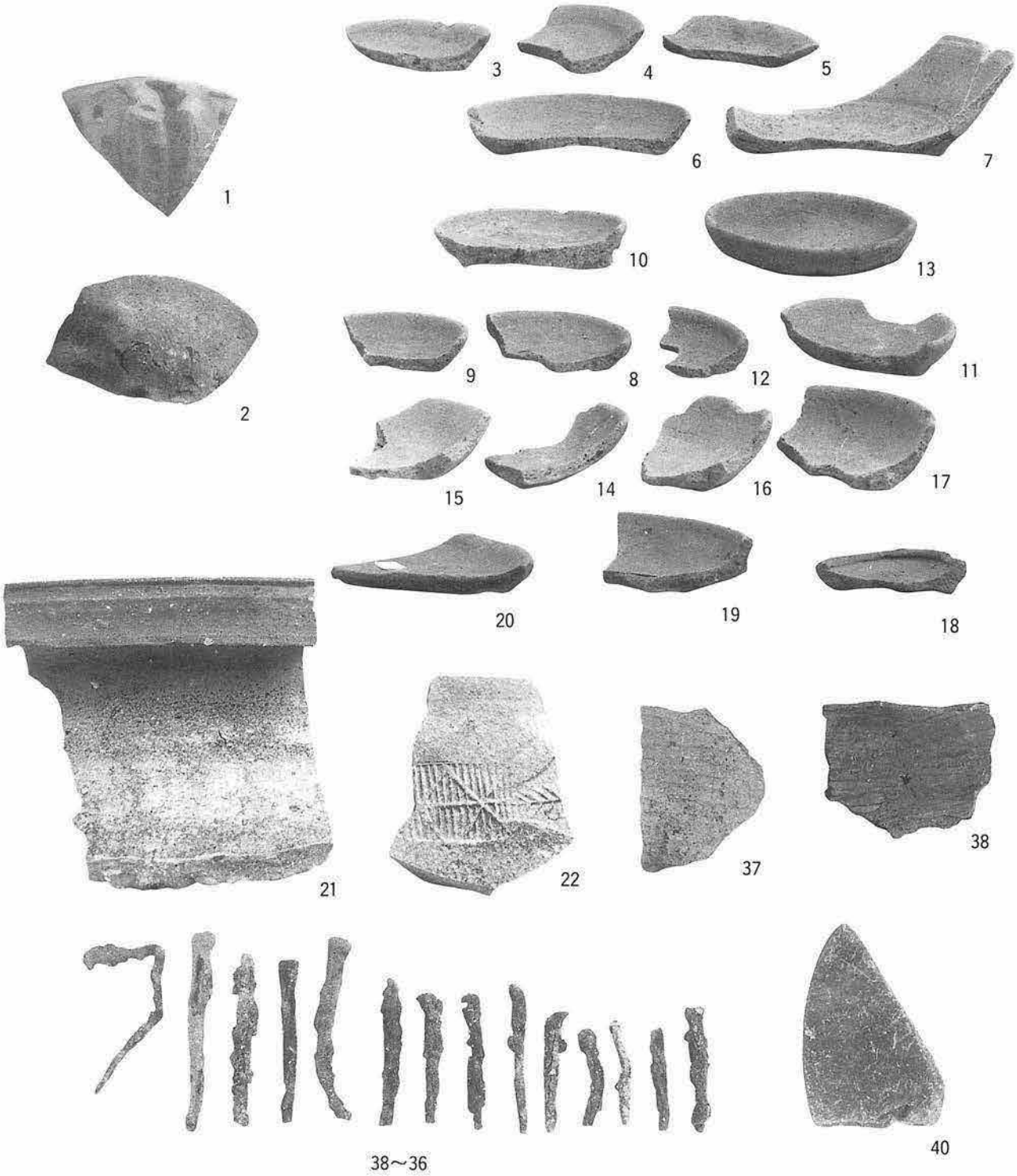
遺構44出土遺物（図８）



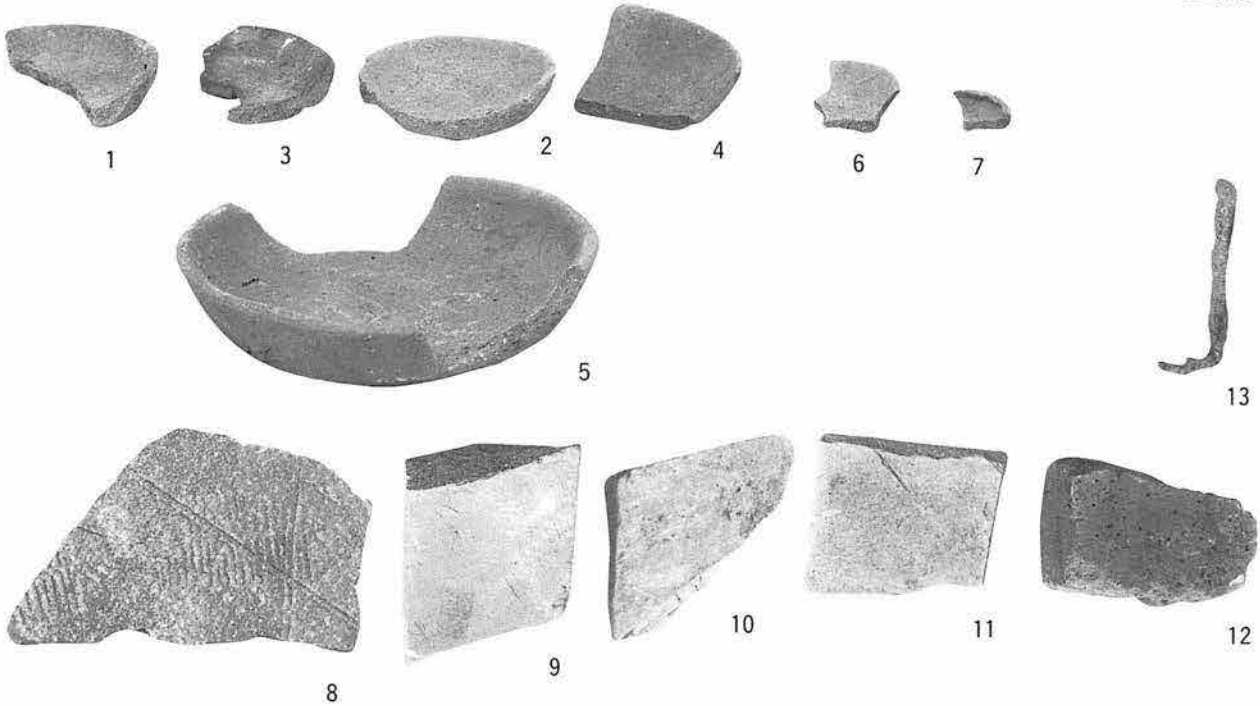
遺構49出土遺物（図８）

遺構68出土遺物（図８）

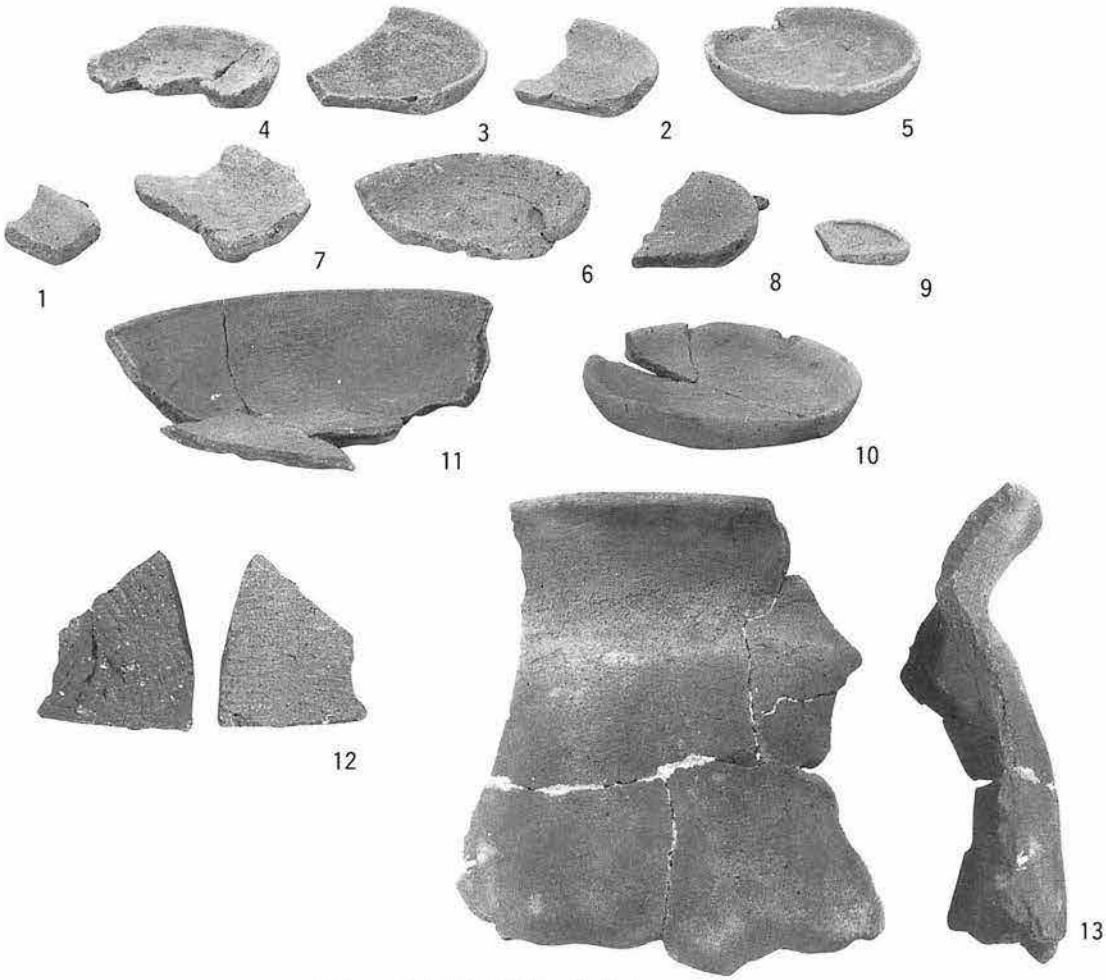
図版 4



遺構12A・B出土遺物（図6）



表土・撹乱層出土遺物（図10）



第１～３面上出土遺物（図９）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成12年度発掘調査報告
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊丹まどか・松田理枝
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ささめいせき 笹目遺跡	かながわけん かまくらしささめちょう 神奈川県鎌倉市笹目町285番1外	14204	№207			19991129 ～ 19991225	87.46	個人専用住宅 （地下室）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
笹目遺跡	都市	中世	方形竪穴建築祉 土壙 ピット	陶磁器、土器、石製品、人骨、貝	

笹目遺跡（No. 207）

笹目町286番１外地点

例　　言

1　本編は、鎌倉市笹目285番１他地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2　発掘調査は個人住宅の建設に伴う国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会によって平成11年11月29日から12月17日にかけて実施された。

3　調査体制は以下の通りである。

調 査 主 体　鎌倉市教育委員会

調 査 担 当　小林康幸

調　査　員　伊丹まどか　松田理枝

調査補助員　石元道子

調査参加者　奥山利平　中須洋二　沼上三代治　渡辺輝彦　星富蔵　有田正夫　寺島恵夫　関卯之松（鎌倉市シルバー人材センター）

4　本編の執筆は第１章を伊丹が、第２章～第４章を松田が行い、編集は両者で行った。

5　本編の図版作成に関わる作業は伊丹、松田がこれを行い、本編で使用した写真は遺構、遺物ともに松田が撮影した。

6　本編の凡例は以下の通りである。

・　挿図縮尺　全体図１／80　遺構個別図　１／60・１／30　出土遺物　１／３

・　挿図中の水糸レベルは海抜高を示し、スクリーントーン等は必要に応じてそのつど注釈を加えてある。

・　遺物実測中の←――→は使用痕の範囲、←　→は加工工具痕、―・―・― は施釉の限界、黒色に塗りつぶしてある部分は油煙痕、煤痕の範囲を示す。

・　遺構番号は形状に従って付してあり、遺構の新旧は表していない。

7　本遺跡に関する発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

8　本編作成に関して、下記の方々より多大な御教示を賜った。（敬称略）

斎木秀雄、大河内勉、宮田眞、菊川英政、瀬田哲夫、森孝子、汐見一夫、野本賢二、川又隆央

砥石の産地同定に関しては汐見一夫氏より御教示、御指導いただいた。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……77
第２章　調査の経緯と堆積土層……78
　１．調査の経緯……78
　２．堆積土層……78
第３章　検出された遺構と遺物……80
　１．方形竪穴建築址１……80
　２．方形竪穴建築址2.3……80
　３．土壙墓……83
　４．確認面および表土・攪乱層出土遺物……84
　５．中世遺構出土の古代遺物……84
第４章　まとめ……85

挿　図　目　次

Fig 1　調査地点および周辺遺跡分布図……76
Fig 2　グリッド設定図……78
Fig 3　遺構全体図と基本土層……79
Fig 4　方形竪穴建築址１……81
Fig 5　方形竪穴建築址２・３……82
Fig 6　土壙墓……83
Fig 7　表土・攪乱層出土遺物……84
Fig 8　確認面出土遺物……84
Fig 9　中世遺構出土の古代遺物……84

写真図版目次

図版１　調査区全景、方形竪穴建築址１……88
図版２　方形竪穴建築址２、３、土壙墓……89
図版３　出土遺物（Fig４～６）……90
図版４　出土遺物（Fig6.7）……91
図版５　出土遺物（Fig7.9）……92

Fig 1　調査地点および周辺遺跡分布図

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は、鎌倉市笹目町285番１外に所在し、笹目ヶ谷（佐々目谷）(註1)と呼ばれる支谷の開口部に位置する。笹目ヶ谷は比較的大きな支谷であり、『玉船和尚鎌倉記』では、鎌倉七谷の一つとして数えられている。谷戸内では、中世に行なわれたと思われる尾根裾の掘削、造成の痕跡が確認され、２ヵ所の古代の横穴群が確認されている(註2)。現在は住宅地の広がる谷戸内であるが、中世には遣身院(註3)・長楽寺(註4)・西方寺(註5)と言う三寺院があったとされる。調査地の北西約580ｍに位置する甘縄神明社付近には安達盛長以降、安達氏一族の屋敷や御家人の屋敷があった(註6)とされ、千葉胤宗、甘縄顕実、北条政長の屋地も近辺であった(註7)。中世において「甘縄辺」(註8)と呼称される地域が、若宮大路、由比ヶ浜、下馬、佐々目谷を含む広大な一帯であり、現在の甘縄神明社付近は甘縄と呼ばれた地域の外れであったという指摘もある(註9)。何れにしても、調査地の周辺が鎌倉幕府を形成する重要な御家人の居住する一帯であったことが伺える。遺跡地の南を走る、長谷小路（現国道134号線）は鎌倉の中央部を南北に走る若宮大路の下馬から、長谷観音・大仏を経て藤沢方面に東西に抜けている。長谷小路を本調査地より東に約100ｍ程行くと、由比ヶ浜の海岸から、佐助ヶ谷に通じる稲村ヶ崎路と交差する十字路（辻）があり、塔の辻と呼ばれ、石塔２基が現在でも置かれている。長谷小路の南側一帯は、由比ヶ浜の後背地に形成された砂丘帯が広がり、これまでに多くの発掘調査が実施され、古代・中世の遺構・遺物が検出、確認されており、中世以前の平安期には葬送の地であった様相や、中世期に入り、葬送の地としての性格を引き継ぎつつも、道路で区画された敷地内に方形竪穴建築址が立ち並び、坩堝、とりべ、鋳型、鞴の羽口、加工途中の骨製品等の出土からから、鋳物師等の工人の存在が広く確認されている。

註

（註１）　「笹目（佐々目）」という地名は、『吾妻鏡』、『金沢文庫古文書』の鎌倉期の文書等に記載がある。中世期には「佐々目」と記され、近世期では「佐々目」と「笹目」が併用される。現在は「笹目」。

（註２）　赤星直忠「鎌倉及び周辺地域の末期横穴」『鎌倉市史』考古編　1959年　吉川弘文館

（註３）　『金沢文庫文書』　1964年　神奈川県立金沢文庫
『鎌倉廃寺事典』　1980年　有隣堂

（註４）　『鎌倉廃寺事典』　1980年　有隣堂
『日本歴史地名体系・神奈川県の地名』　1987年　平凡社

（註５）　『日本歴史地名体系・神奈川県の地名』　1987年　平凡社

（註６）　白井永二編『鎌倉事典』　1976年　東京堂出版

（註７）　『見聞私記』に「永仁五年(1297)閏十月七日未時、自佐々目谷口火出来、甘縄等焼亡、千葉(胤宗カ）屋形已下兵部大輔（甘縄顕実)、駿河守（北条政長)、近江守（？）等屋形悉焼了」の記載。

（註８）　『吾妻鏡』建長三年(1251年)二月十日条に「甘縄辺焼亡、(中略）東若宮大路、南由比ヶ浜、北中下馬橋、西佐々目谷、相模右近将監時定、相模八郎時隆等第以下、数箇所災い云々」の記述がある。

（註９）　高橋慎一郎　『中世の都市と武士』　吉川弘文館　1966年

第２章　調査の経緯と堆積土層

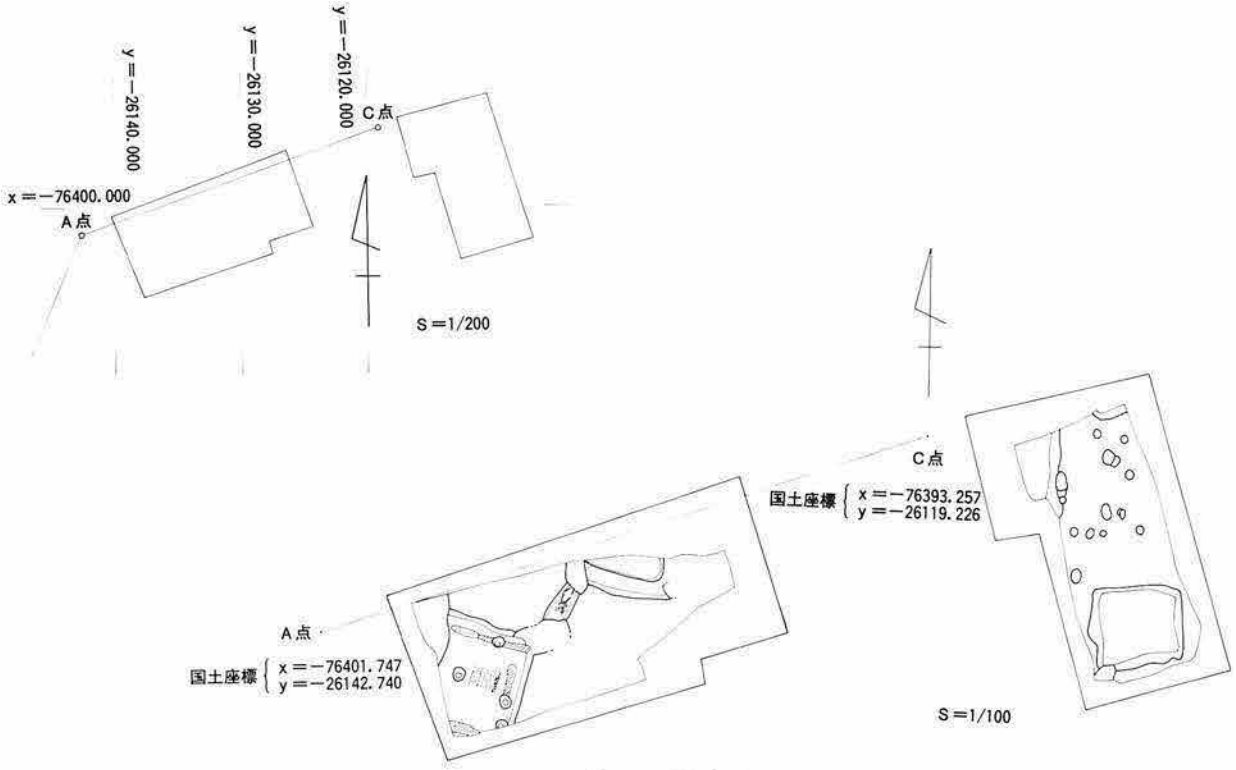


Fig 2　グリッド設定図

１．調査の経緯とグリッド配置

本調査は、個人専用住宅建設に伴う事前調査として、平成11年11月29日から12月17日にかけて行われた。調査対象面積は134.56㎡である。調査は試掘調査の成果を踏まえ、表土の掘削に重機を用いて現地表面から100cmをすきとり、この後手掘りで調査を行った。

グリッドは、同時に調査進行している東隣の笹目遺跡１地点と共用した。グリッドの設定は調査区西側の道路上に設置されている鎌倉市４級基準点を用いて行った。まず４級基準点２点を結ぶ軸を基準にして、任意の角度で調査区内に仮原点を作り、そこからグリッドの基本となる２本の基準杭を作った。この２本の基準杭を軸にグリッドを配置した。なお本遺跡で使用したグリッド南北軸は真北から19°51′10″西に傾く。

２．堆積土層

調査地点は由比ヶ浜海浜部に形成された砂丘の頂点付近に相当すると思われるが、後世にかなりの削平を受けており、中世基盤層となる白黄褐色砂層およびその下の古代遺物包含層である茶色粘質土層は、ほとんど残存していない。遺跡内の堆積土層は大別して５層に分割できるが、攪乱されていない層は３層より下層である。（模式図 Fig３）当初調査は２層と３層との間を確認面として調査を開始したが、近世以降の攪乱以外に明確な遺構プランが得られなかったため、３層と４層との間まで確認面を下げて調査を行った。

１層は表土。２ａおよび２ｂ層は中世から近世の遺物を包含したかなり攪乱された層。３層は黄灰色砂層で、遺物は出土していない。４層は３層と基本的には同じ層だが、白褐色を呈しやはり遺物は出土していない。５層は貝砂を主体に構成される層。

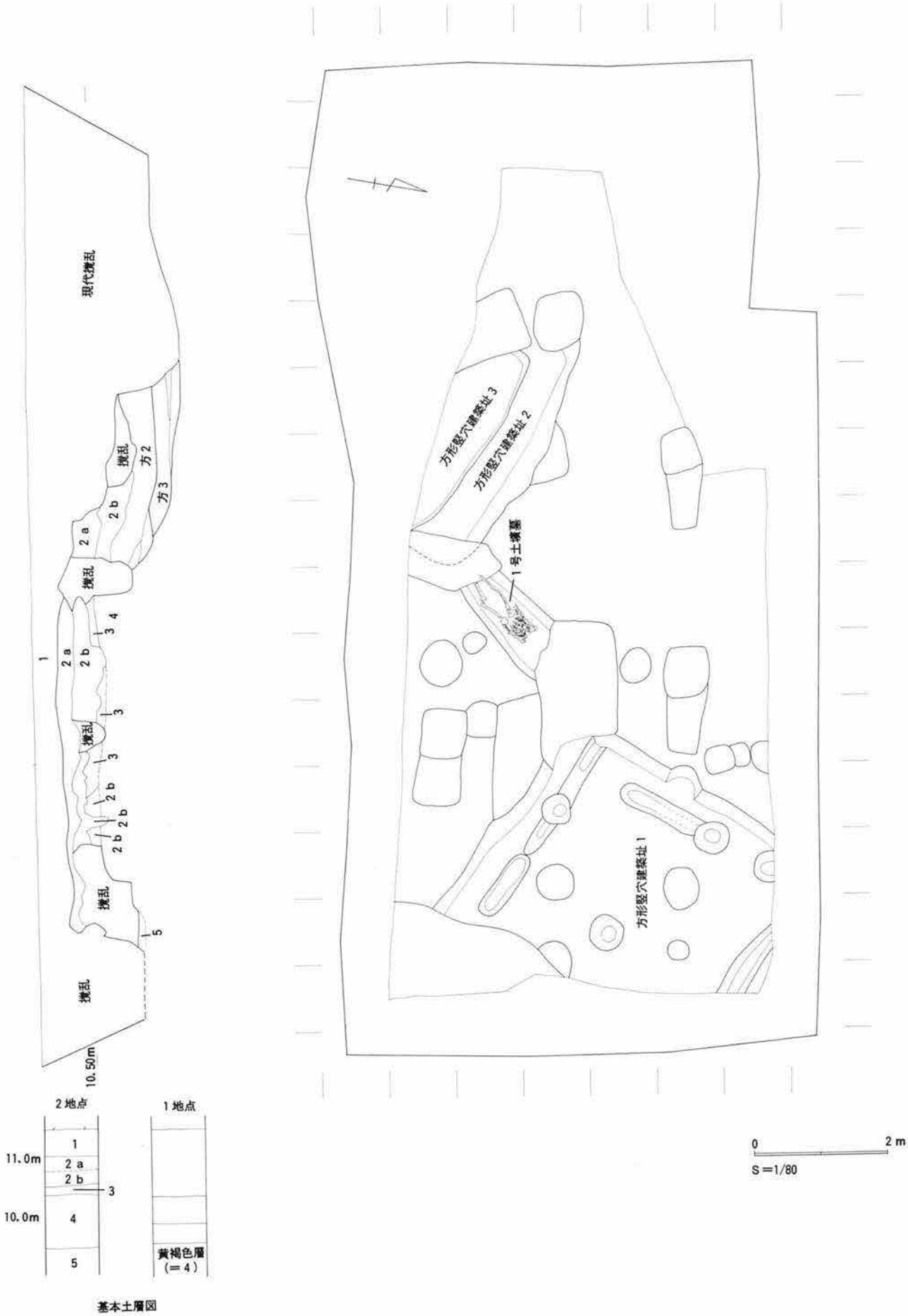


Fig 3　遺構全体図と基本土層

第３章　確認された遺構と遺物

前章で述べた通り、本調査地点では中世飛砂層が削平を受け、また近接する他地点で存在を確認されている古代遺物包含層も見られなかったため、更に下層の黄灰色砂層を確認面として調査を行った。確認面の海抜は、10.45m前後である。調査区は、東側に現代の大攪乱坑が、また全域に渡り近世以降の攪乱坑が開いているために、遺構の検出は限られたものとなったが、方形竪穴建築址３基と、土壙墓１基を確認した。

方形竪穴建築址１（Fig.4）

調査区西側に位置する。東北隅以外の隅は調査区外に位置するため、形状、規模などの全体の様相は不明である。確認し得た最大値において、東西およそ4.7m、南北およそ3.4mを測る。確認面の海抜は10.2m付近。確認面からの深さは44cm。底面の海抜は9.58～9.71m。平面形は方形を呈し、壁は床からやや開いて立ち上がる。遺構底面では根太の痕跡と浅い凹み状のピットを確認した。このピットは、土台石をおいた痕跡とも考えられる。主軸方位はほぼ真北方向である。

方形竪穴建築址出土遺物１（Fig.4）

１～20は糸切り底のかわらけである。５は粗胎で、口縁端がやや反り返る。10～12は外面中程に稜を持つ。12～19は精胎で薄手。15は口縁がやや反り返る。20は底厚。21は穿孔かわらけ。22は内折れかわらけ。23は土器質手焙り。丸浅鉢形。口縁は内外に張り出している。口縁下に穿孔。胎土は淡茶灰色で白色小粒が目立ち、硬く焼き締まる。内面に火熱を受けている。24は土錘。25～27は鳴滝産の仕上げ砥。28～35は鉄製品・釘。

細片のため図示不可能なその他の出土遺物は次の通り。青磁蓮弁文碗、手捏ね成形のかわらけ、かわらけ灯明皿、土錘、瓦器質手焙り、常滑。

方形竪穴建築址２（Fig.5）

調査区東側において攪乱の底面付近から確認された。遺構の北半分以上は調査区外に位置し東側壁及び上面を攪乱に切られる。確認範囲の規模は、東西で約3.92m、南北で約1.72mを測る。平面形は方形を呈し、壁はやや開きながら立ち上がる。確認面の海抜は10.4m付近で、確認面からの深さは80～100cm。底面の海抜は9.50～9.70m。底面に根太の痕跡や柱穴などは見られない。３号方形竪穴建築址を切る。主軸方位はN-40°-W。

方形竪穴建築址３（Fig.5）

２号方形竪穴建築址の底面で確認された。上面を２号方形竪穴建築址に切られ、北半分以上が調査区外に位置する。確認範囲において東西約3.1m、南北約0.96mを測る。底面の海抜は9.30～9.40m。平面形は方形を呈す。壁の立ち上がりや構造については不明。主軸方位はほぼ真北方向である。

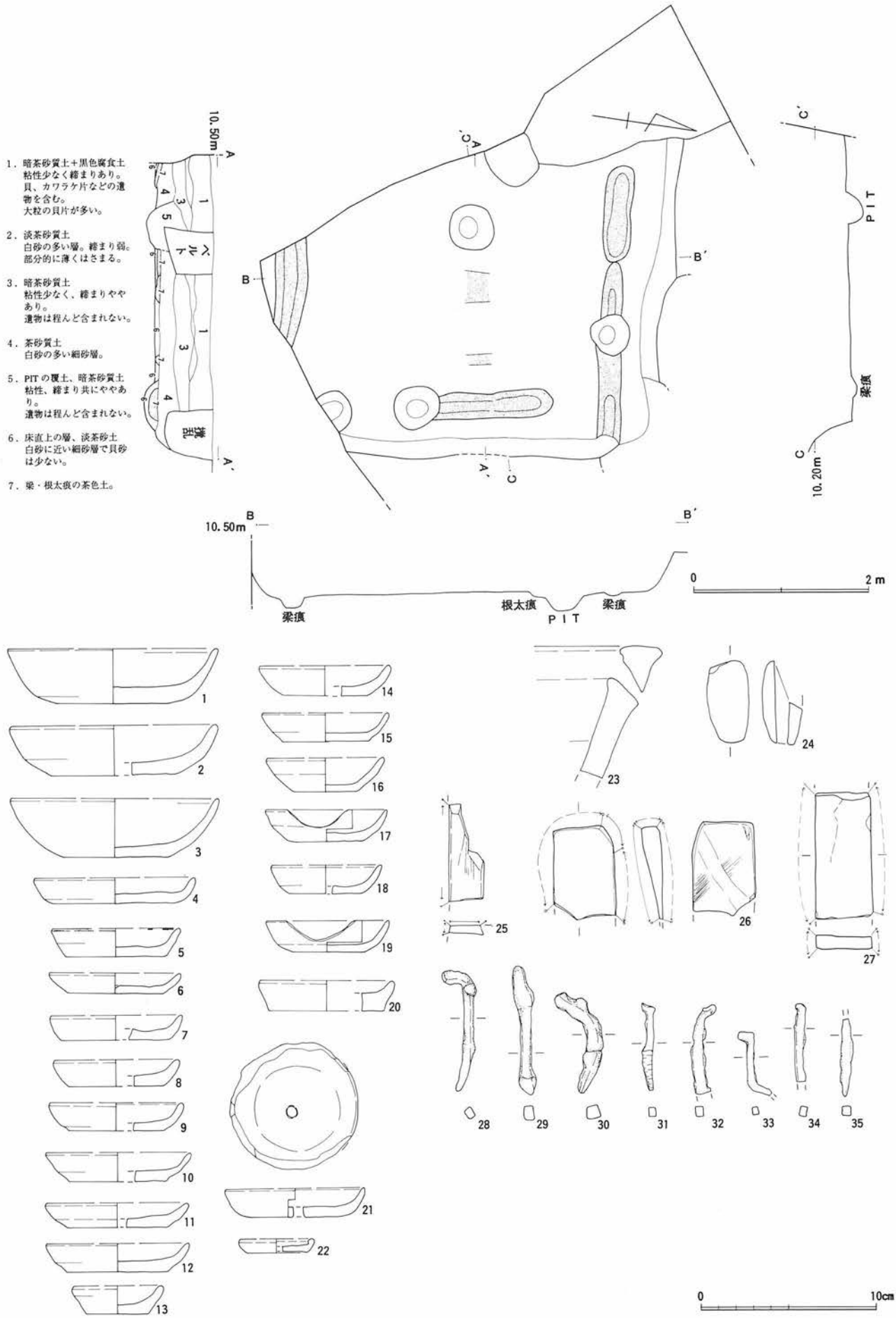


Fig 4　方形竪穴建築址 1

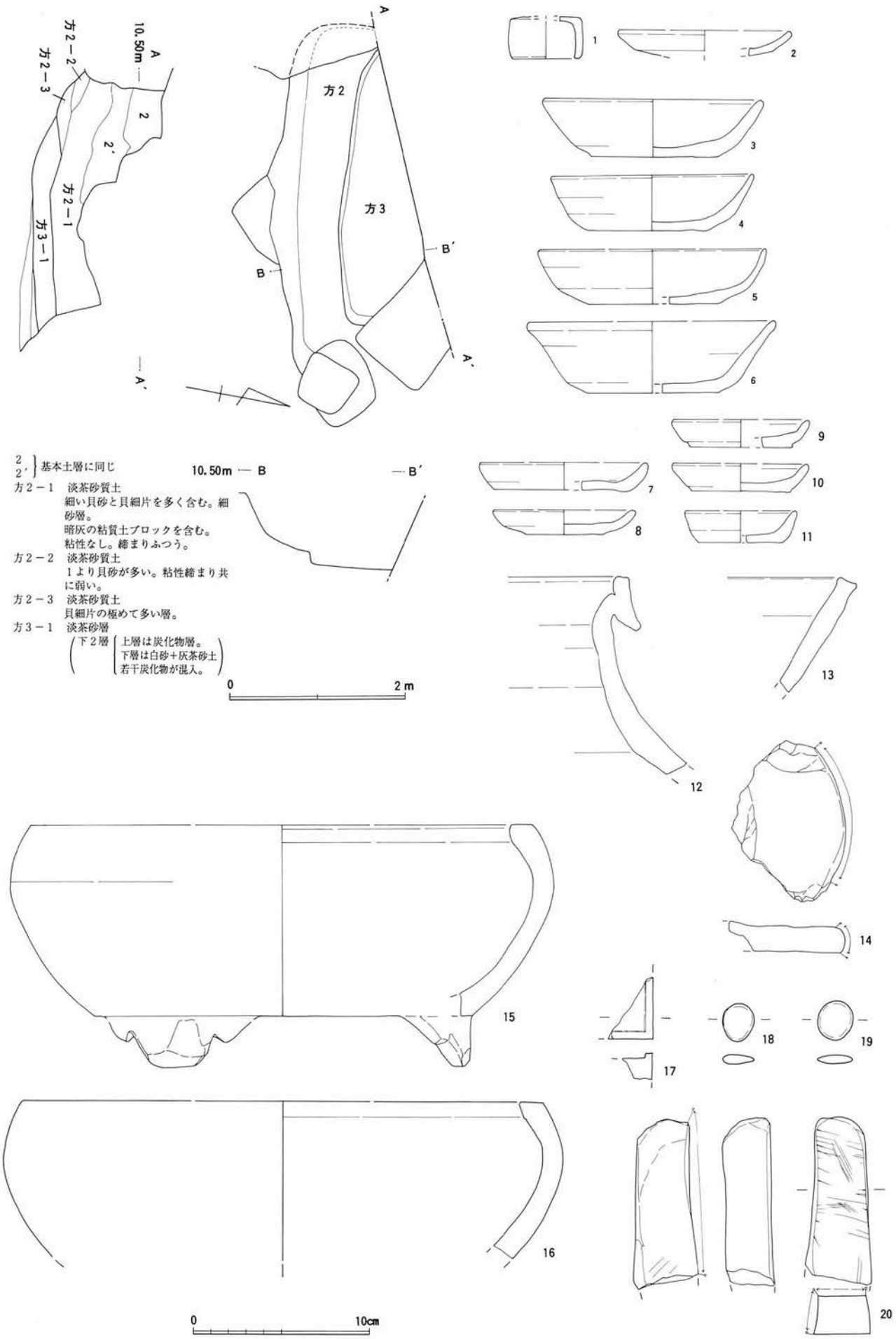


Fig 5　方形竪穴建築址２・３

方形竪穴建築址２・３出土遺物（Fig. 5）

遺物はセクション図における方2-1層、及び方3-1層から出土しているが、遺構確認時に同一遺構として確認していたため、一括で取り上げた。

１は青白磁梅瓶の蓋。頂に放射状文が入る。13世紀中～14世紀前。２は手捏ね整形のかわらけ。外体部に稜を持たず、器肉は比較的薄い。３～11は糸切り底のかわらけである。５は外面に稜が目立ち、口縁が外反する。12は常滑甕口縁。中野６ａ～ｂ形式にあたるか。13は常滑捏鉢口縁。中野７～８形式。14はすり常滑。15、16は瓦器質手焙り。扁球形の胴部と肘木風の飾りの付く脚を持つ。15の表面は黒色研摩されている。15、16共に、胎土は小粒の礫を多く含む。17は赤間石の硯。18、19は碁石。20は天草産の中砥。

細片のため図示不可能なその他の出土遺物は次の通り。青磁蓮弁文碗、青磁折縁盤。これは内面に劃花文があるタイプだが残っていない。青磁無文碗、白磁口兀皿、山茶碗窯系捏鉢、手捏ね成形の大型のかわらけ、鉢型手焙り、土師器片。

土壙墓１（Fig.6）

調査区の中央やや東に位置する。長軸方向の両端を攪乱に切られているため平面形および規模について正確には分からないが、おそらく長楕円形を呈していたと思われる。短軸は0.87mで、長軸は確認範囲における最大値で1.80mを測る。確認面の海抜は10.40m付近。底面の海抜は9.90m。埋葬形態は仰臥伸展葬。足部は攪乱された際に欠損したと思われる。遺物を伴わない。主軸方位はN-48°-E。なお、遺骸は頭部を南東に向けて埋地されていたが、遺構は肩部東に頭骨を残すだけの余地を持っているにも拘らず、頭骨が検出されなかったことは、埋葬する時点で既に失われていたとも考えられる。

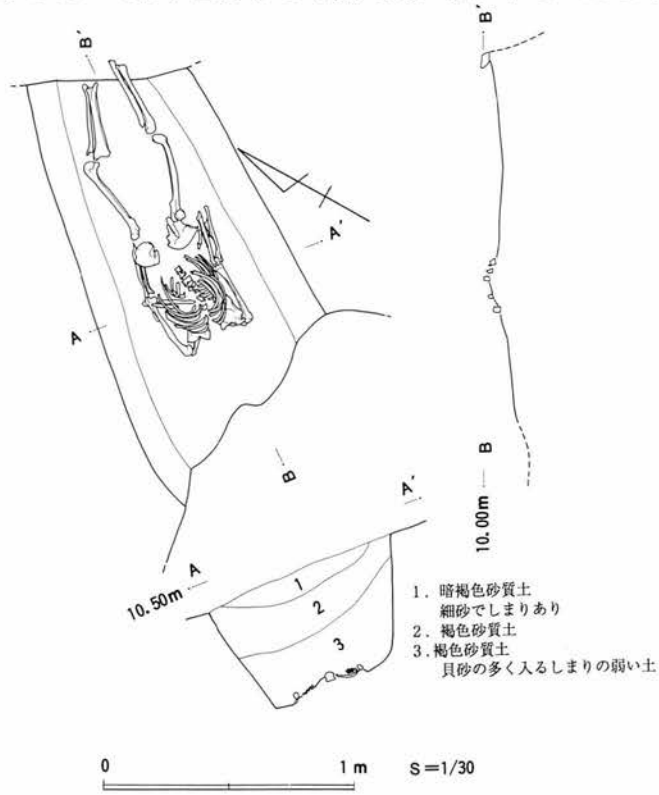


Fig 6　土壙墓１

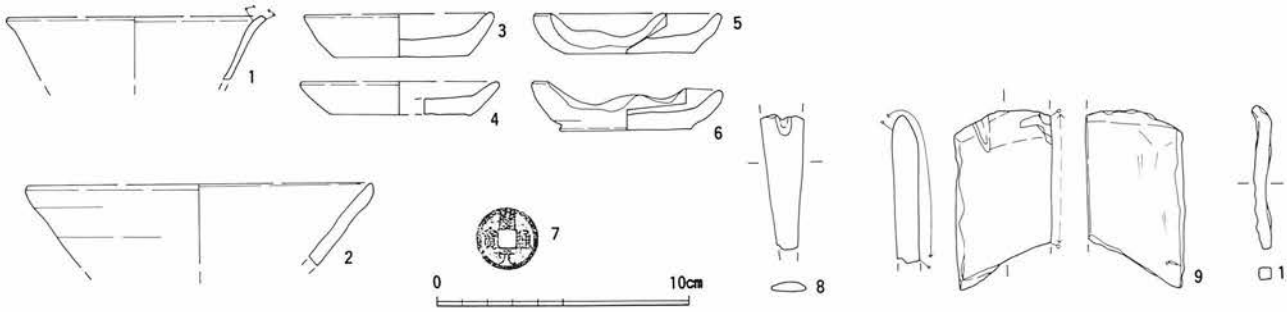


Fig 7　表土・攪乱層出土遺物

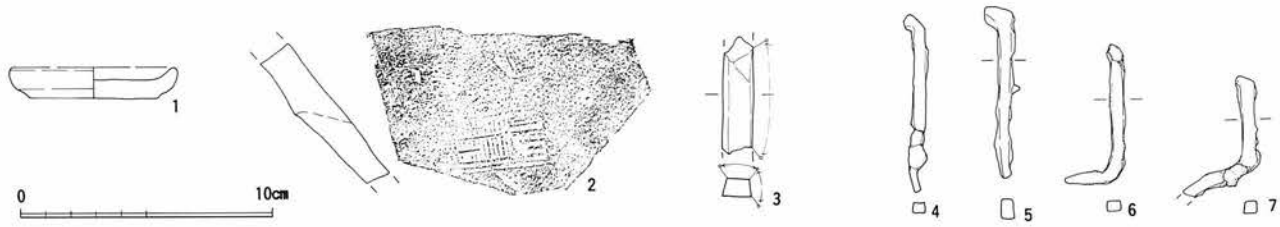


Fig 8　確認面出土遺物

攪乱層出土遺物（Fig. 7）

1は白磁口兀碗。2は山茶碗。3～6は糸切り底のかわらけで、5、6には打欠いた痕跡がある。7は開元通寶。8は骨製の笄。9は鳴滝産の仕上げ砥。10は鉄釘。

確認面出土遺物（Fig. 8）

1は糸切り底のかわらけ。2は常滑甕の胴部片。外面に叩き目を有する。3は鳴滝産の仕上げ砥。4～7は鉄釘。

中世遺構出土の古代遺物（Fig. 9）

ここで提示する古代遺物は、方形竪穴建築址1の覆土下層に混入していたものである。
1は須恵器甕胴部、2は五領期の高坏もしくは器台の脚部。2ケ所の穿孔が残る。脚部外面は縦位のヘラミガキ、裾部外縁は横位のヘラミガキが施される。内面はヨコナデ調整。

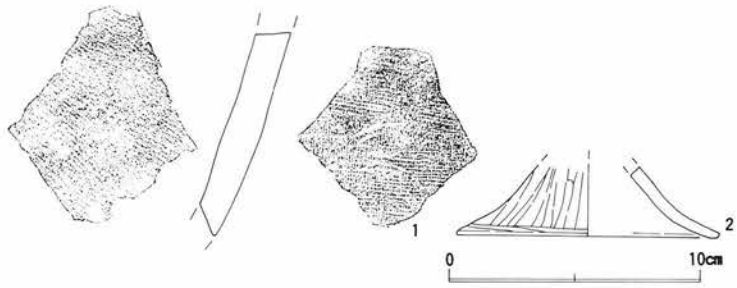


Fig 9　中世遺構出土の古代遺物

第4章まとめ

今回の調査は、隣合う笹目遺跡1地点と並行する形で行われたため、ここでは簡略なまとめにとどめ、両遺跡を合わせたまとめ及び遺跡の性格などについては、1地点を参照されたい。

2地点においては、中世基盤層となる飛砂層および古代遺物包含層を大幅に削平されているために、生活面は確認できず、確認面は土層堆積図における4層付近（黄灰色砂層）からとしたが、この確認面より、方形竪穴建築址3軒および土壙墓1基を検出した。遺物は古代から15世紀にかかるものが出土している。以下、出土遺物により、遺構の年代観を考察したい。

古代

古代では五領期の器台もしくは高坏の脚部が出土している他、須恵器片、土師器片などが出ている。これらは全て、中世遺構の覆土に混入しており、量は決して多くない。土壙墓については、仰臥伸展葬であることから中世以前の遺構と捉えて差し支えなかろう。

中世

中世の遺物はそのほとんどが遺構から出土している。13世紀中頃の手捏ね整形のかわらけや糸切り底のかわらけは数が少ないながらも出土しているが、これを遡る物はみられなかった。出土量が大幅に増加するのは13世紀後半になってからであり、この時期から14世紀半頃にかけてのかわらけはかなりまとまった量の出土が見られた。14世紀後半から15世紀以降の物については出土量が減少する。瀬戸は本調査地点では細片が少量出土したのみである。常滑は甕の口縁部片より13世紀後半から14世紀に比定されるものが比較的多い。舶載陶磁器は13世紀半頃から14世紀後期（なかでも13世紀後期から14世紀前期）に比定される遺物が大半を占める。本調査地点の遺構の年代観もほぼこれらに即すものと考えられ、13世紀後半から14世紀前半を中心とした時期に営まれていたものと考えられる。これは周辺の遺跡と比較しても大きな時期差は感じられない。

3軒の方形竪穴建築址は、出土遺物から考察すると時期的に大幅な食い違いは見られない。うち方形竪穴建築址1は13世紀後期から14世紀中頃にかけての遺物が多く、方形竪穴建築址2,3は、ややばらつきはあるが14世紀初頭から中頃の物が多い。また方形竪穴建築址1は底面に根太および土台石を置いたと思われる痕跡が残る。根太の痕は建物の四周と中央付近に明瞭に残っていた。残り2軒の方形竪穴建築址からは構造をうかがえる痕跡を検出する事はできなかった。

今回の調査においての確認面は海抜10.4mと、他の周辺遺跡よりかなり高い位置であったが、実際に検出された方形竪穴建築址の底面の海抜は平均9.5m前後、古代の土壙墓は9.9mと遺構自体も近隣の遺跡より高い海抜値を示す。また1地点においては検出された方形竪穴建築址の底面の海抜値に大差はないが本調査地点の確認面より60～80cmほど低い海抜で中世飛砂層と、部分的にではあるが古代遺物包含層を確認していることから自然地形においては2地点の方がやや高い位置にある事がうかがわれる。他遺跡では一番近い、長谷小路の南側に位置する河合ビル用地（Fig.1-地点6）で検出されている方形竪穴建築址群及び古代土壙墓より、1m以上高い位置にある事が確認された。明確な中世基盤層を確認し得なかった本地点ではあるが、従来この付近一帯が砂丘の最高部付近に相当することを示唆する事例となり得るのではないか。

写　真　図　版

図版１

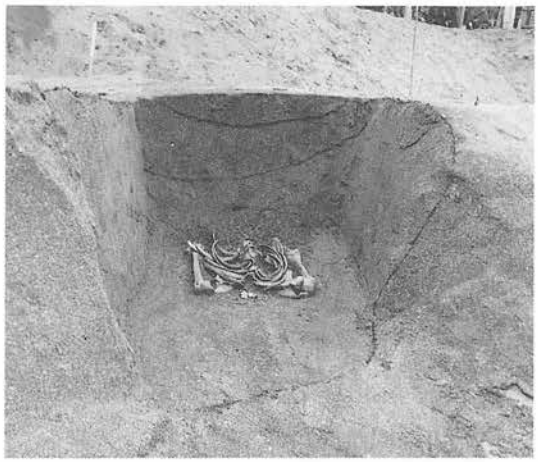
調査区全景（西から）

方形竪穴建築址１（根太検出状況）（西から）

方形竪穴建築址１（西から）

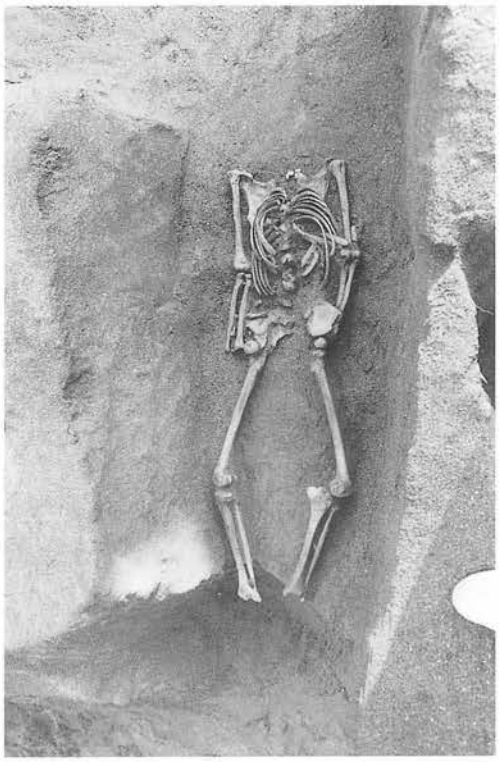
方形竪穴建築址 2 ・ 3 （西から）

土壙墓セクション（南から）



土壙墓（北から）

土壙墓



図版 3

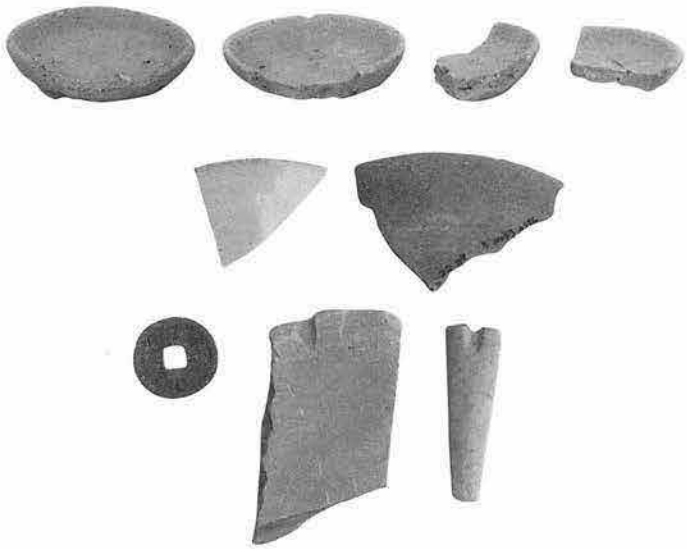
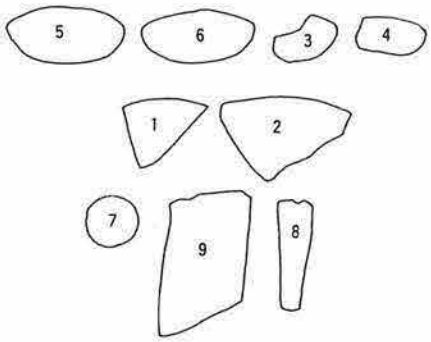


Fig 4



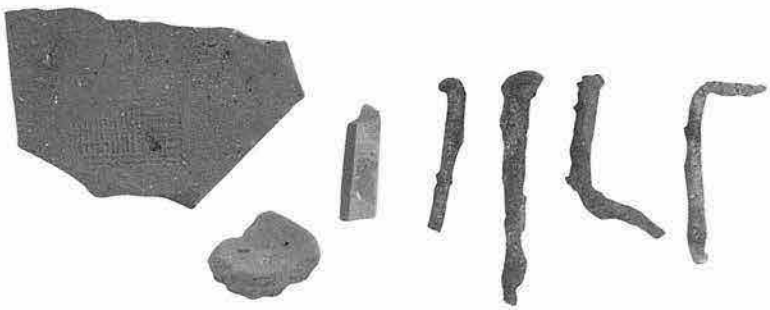
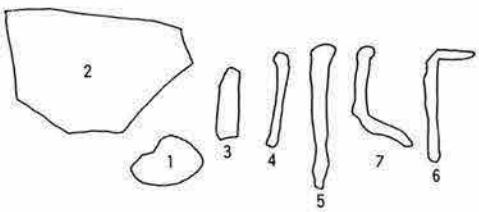


Fig 5



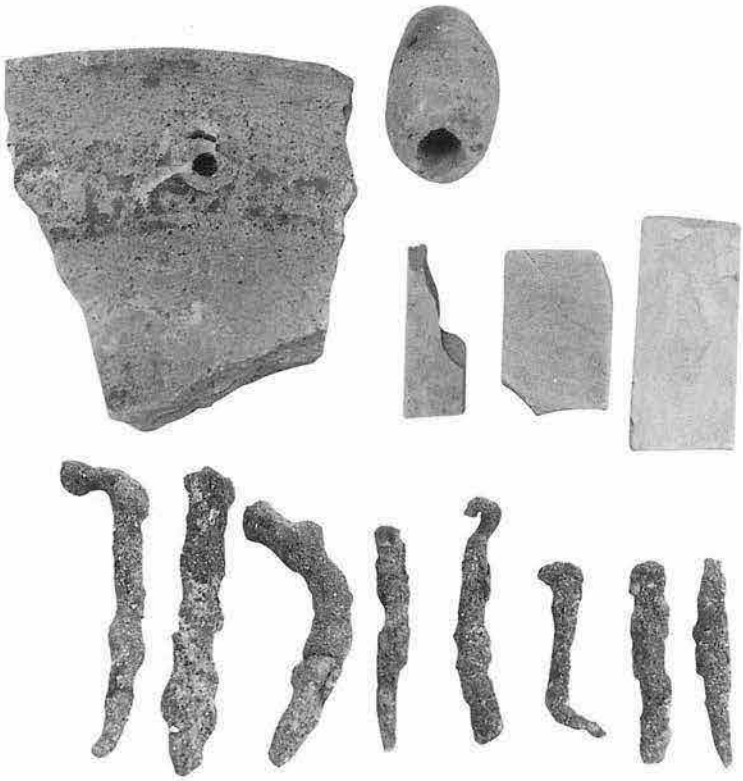
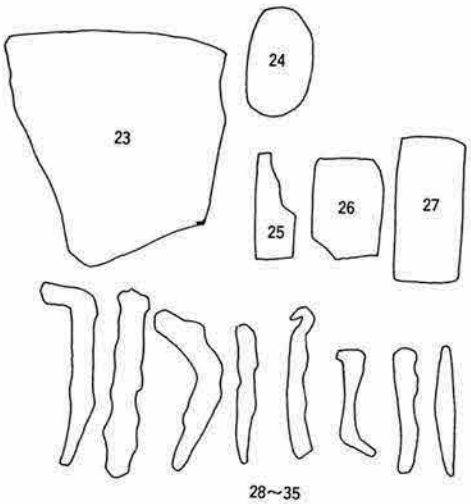


Fig 6



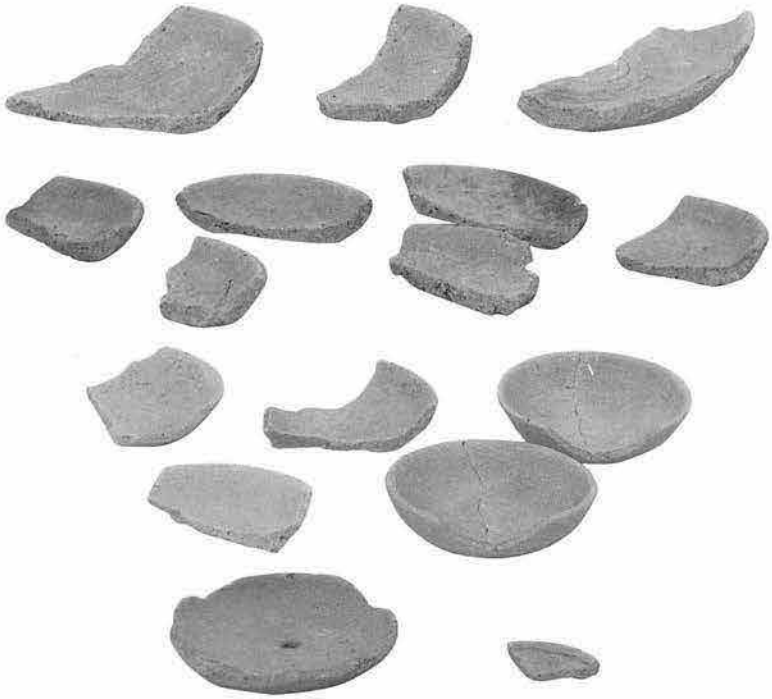
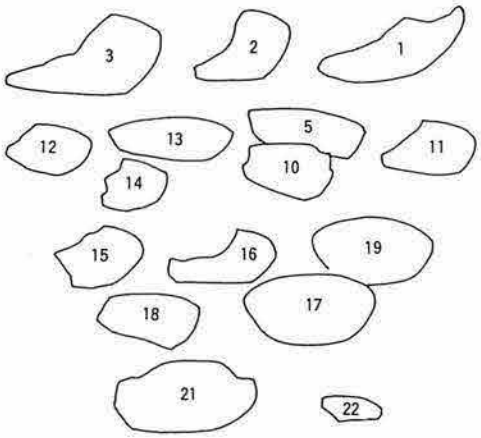


Fig 6



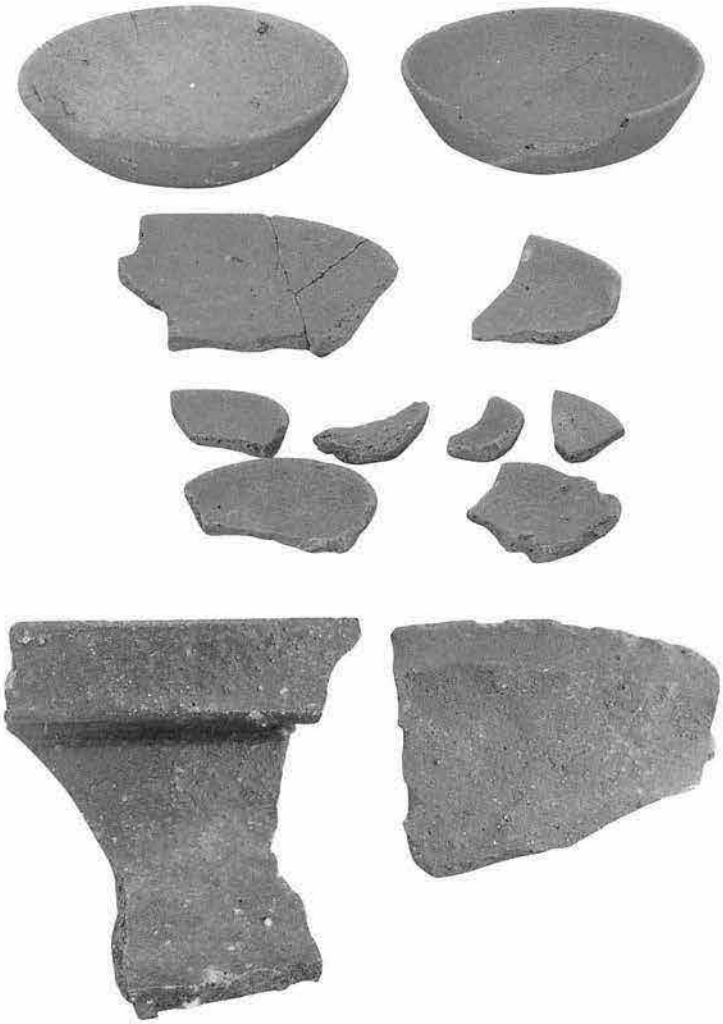
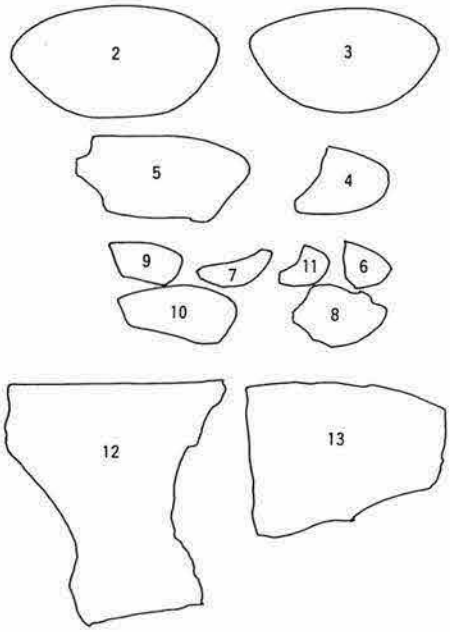


Fig 7



図版 5

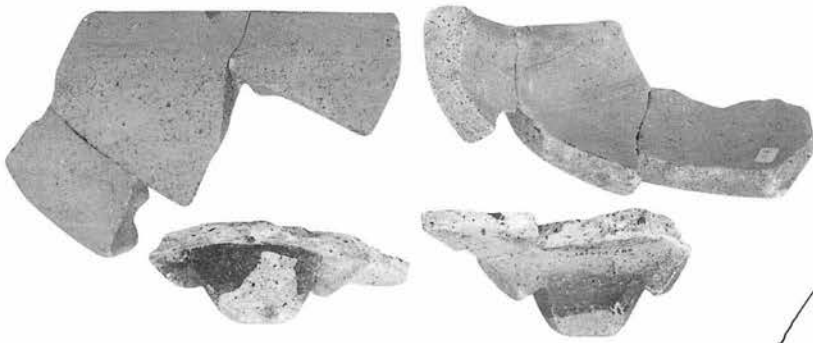
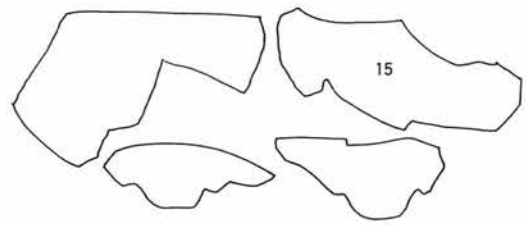
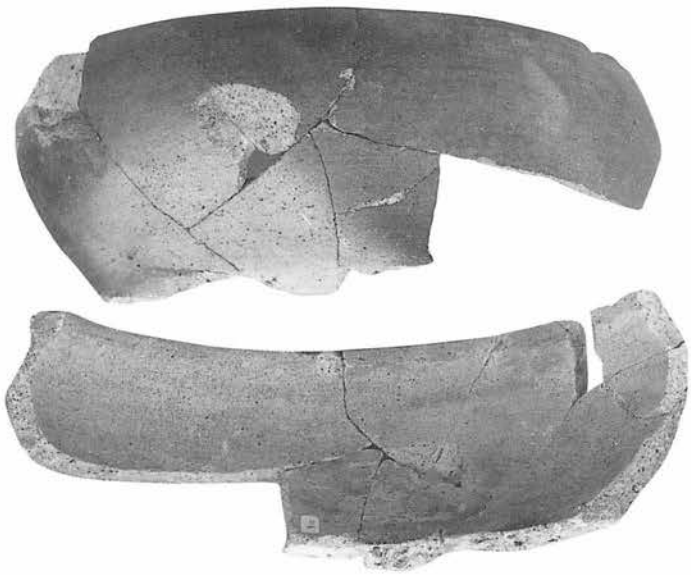
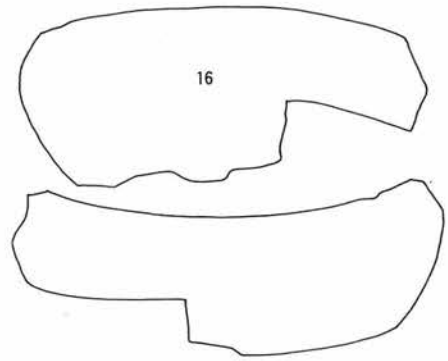
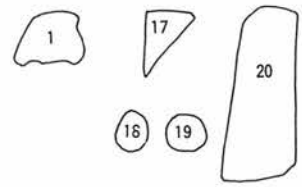


Fig 7









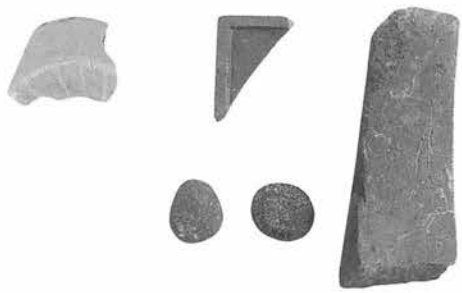
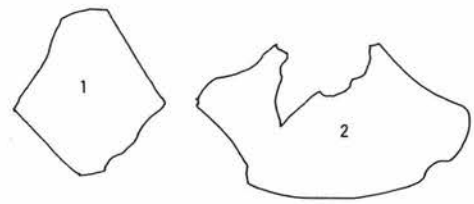


Fig 9



方形竪穴建築址１（Fig. 4）

1	かわらけ	口径(11.7)　器高 2.8　底径 7.2	2	かわらけ	口径(11.7)　器高 3.3　底径 6.0
3	かわらけ	口径(11.9)　器高 3.1　底径 6.4	4	かわらけ	口径(9.0)　器高 1.4　底径 7.0
5	かわらけ	口径(7.2)　器高 1.7　底径 4.9	6	かわらけ	口径(7.0)　器高 1.5　底径 5.5
7	かわらけ	口径(7.4)　器高 1.4　底径 6.2	8	かわらけ	口径(8.0)　器高 1.6　底径 5.8
9	かわらけ	口径(7.5)　器高 1.6　底径 5.5	10	かわらけ	口径(8.0)　器高 1.4　底径 5.7
11	かわらけ	口径(7.1)　器高 1.6　底径 5.7	12	かわらけ	口径(8.2)　器高 1.7　底径 5.6
13	かわらけ	口径(7.2)　器高 1.6　底径 5.0	14	かわらけ	口径(7.4)　器高 1.2　底径 5.4
15	かわらけ	口径(6.6)　器高 1.9　底径 3.6	16	かわらけ	口径(6.2)　器高 1.6　底径 4.2
17	かわらけ	口径(5.0)　器高 1.6　底径 3.6	18	かわらけ	口径(7.5)　器高 1.7　底径 6.6
19	かわらけ	口径(7.0)　器高 1.8　底径 4.1	20	かわらけ	口径(6.9)　器高 1.8　底径 4.0
21	穿孔かわらけ	口径(7.9)　器高 1.6　底径 5.4	22	内折かわらけ	口径(4.1)　器高 0.8　底径 3.4
23	土器質 手焙り		24	土製品 土錘	長さ 4.6　:径 2.3
25	石製品 砥石	長さ(5.5)　幅(3.6)　厚さ(1.0)	26	石製品 鳴滝産砥石	長さ(5.2)　幅(3.6)　厚さ 1.0
27	石製品 鳴滝産砥石	長さ(7.2)　幅(2.0)　厚さ(0.4)	28	鉄製品 釘	長さ(3.7)　幅(0.6)　厚さ(0.6)
29	鉄製品 釘	長さ(4.4)　幅(0.5)　厚さ(0.8)	30	鉄製品 釘	長さ(5.2)　幅(0.7)　厚さ(0.7)
31	鉄製品 釘	長さ(4.5)　幅(0.4)　厚さ(0.6)	32	鉄製品 釘	長さ(5.1)　幅(0.4)　厚さ(0.5)
33	鉄製品 釘	長さ(5.8)　幅(0.3)　厚さ(0.4)	34	鉄製品 釘	長さ(7.4)　幅(0.4)　厚さ(0.6)
35	鉄製品 釘	長さ(6.9)　幅(0.5)　厚さ(0.6)			

方形竪穴建築址２・３（Fig. 5）

1	青白磁 梅瓶・蓋	口径(3.7)　天井高 2.4　頂径(4.0)	2	手捏ねかわらけ	口径 9.6
3	かわらけ	口径 14.0　器高 3.3　底径 7.5	4	かわらけ	口径 11.3　器高 3.1　底径 6.7
5	かわらけ	口径(12.7)　器高 3.1　底径 7.4	6	かわらけ	口径(13.8)　器高 4.0　底径 7.5
7	かわらけ	口径(9.3)　器高 1.6　底径 7.3	8	かわらけ	口径(7.8)　器高 1.4　底径 4.4
9	かわらけ	口径(7.6)　器高 1.6　底径 5.8	10	かわらけ	口径(7.5)　器高 1.6　底径 5.6
11	かわらけ	口径(6.2)　器高 1.8　底径 4.7	12	常滑 甕	
13	常滑 捏鉢		14	磨りとこなめ	長さ 9.0　幅 6.4　厚さ 1.5
15	瓦器質 手焙り	口径(28.6)　器高 1.9　底径 13.8	16	瓦器質 手焙り	口径(29.8)
17	石製品 硯		18	石製品 碁石	径 2.1　厚さ 0.5
19	石製品 碁石	長さ 2.2　厚さ 0.4	20	石製品 砥石	長さ(9.4)　幅(3.2)　厚さ(2.1)

表土・撹乱層出土遺物（Fig.7）

1	白磁 口兀皿	口径(10.1)	2	山茶碗	口径(11.5)
3	かわらけ	口径 7.5　器高 1.8　底径 5.4	4	かわらけ	口径(7.3)　器高 1.6　底径 5.1
5	かわらけ	口径(7.8)　器高 1.4　底径 5.6	6	かわらけ	口径(7.4)　器高 1.7　底径 5.3
7	銅銭	開元通寶	8	骨製品 笄	長さ 5.4　幅 1.4　厚さ 0.4
9	石製品 砥石	長さ(6.0)　幅(3.5)　厚さ(0.5)	10	鉄製品 釘	長さ 5.8　幅(0.5)　厚さ(0.5)

確認面精査時出土遺物（Fig.8）

1	かわらけ	口径(6.4)　器高 1.3　底径 5.1	2	常滑 甕	
3	石製品 砥石	長さ(4.5)　幅(1.2)　厚さ(0.7)	4	鉄製品 釘	長さ 7.2　幅(0.6)　厚さ(0.4)
5	鉄製品 釘	長さ 6.7　幅(0.5)　厚さ(0.8)	6	鉄製品 釘	長さ 5.5　幅(0.5)　厚さ(0.4)
7	鉄製品 釘	長さ(4.7)　幅(0.5) 厚さ(0.5)			

中世遺構出土の古代遺物（Fig.9）

1	須恵器 甕		2	土師器 高坏	裾径(10.4)

法量表

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成12年度発掘調査報告
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	松田理枝・伊丹まどか
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ささめいせき 笹目遺跡	かながわけん かまくらしささめちょう 神奈川県鎌倉市笹目町286番1外	14204	№207			19991129 ～ 19991217	134.56	個人専用住宅 （地下室）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
笹目遺跡	都市	中世	方形竪穴建築祉 土壙 ピット 土壙墓	陶磁器、土器、石製品、人骨、貝	

米町遺跡（No.245）

こめまちいせき

大町二丁目2308番1

例　　言

1．本報は神奈川県鎌倉市大町二丁目2308番１に所在する米町遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は個人専用住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査として実施した。

3．調査期間は平成11年12月６日～12月17日である。

4．調査体制は以下の通りである。

調査主体　鎌倉市教育委員会

調査担当　瀬田哲夫

調査員　　小林重子

作業員　　(社)鎌倉市シルバー人材センター

5．資料整理及び報告書作成は瀬田、小林が行った。

6．本報に使用した写真は遺構を小林が、遺物を瀬田が撮影した。

7．本報の執筆、編集は瀬田が行った。尚、出土遺物に関しては小林が記載したものを瀬田が加除筆している。

8．発掘調査、及び出土品整理にあたっては、次の諸氏に御教示を賜った。

瀬戸古窯製品分類　　藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）

貿易陶磁分類　　手塚直樹（鎌倉考古学研究所）

動物骨分類　　宗臺富貴子（鎌倉考古学研究所）

石材（砥石・硯）分類　　汐見一夫（鎌倉考古学研究所）

9．本報の凡例は以下の通りである。

・図版縮尺　　遺　構　１／60

　　全体図　１／200

　　遺　物　１／３

・遺構図版　　水糸高は海抜標高値を示す。

・遺物図版　　←・→は使用痕の範囲、－・－は釉薬の範囲を示す。

　　油煙の範囲は黒塗り表示である。

10．本報告に関わる出土品等の記録は一括して鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本 文 目 次

第１章　遺跡概観……98
　第１節　遺跡の位置と環境……98
　第２節　調査の経緯と経過……98
　第３節　堆積土層……100
第２章　検出した遺構と遺物……101
　第１節　トレンチ１……101
　第２節　トレンチ２……102
　第３節　トレンチ３……103
　第４節　トレンチ４……105
　第５節　トレンチ５……106
　第６節　トレンチ６……108
第３章まとめ……110

挿 図 目 次

Fig. 1　調査地点位置図……98
Fig. 2　調査地点周辺図……99
Fig. 3　グリット割付図……100
Fig. 4　トレンチ１堆積土層図……101
Fig. 5　トレンチ１出土遺物……102
Fig. 6　トレンチ２堆積土層図……102
Fig. 7　トレンチ２出土遺物……103
Fig. 8　トレンチ３堆積土層図……103
Fig. 9　トレンチ３出土遺物……104
Fig. 10　トレンチ４堆積土層図……104
Fig. 11　トレンチ４出土遺物……105
Fig. 12　トレンチ５堆積土層図……106
Fig. 13　トレンチ５出土遺物……107
Fig. 14　トレンチ６堆積土層図……108
Fig. 15　トレンチ６出土遺物……109
Fig. 16　土層概念図……110

写真図版目次

PL. 1　１．調査地点（南西から）……115
　２．魚町橋より逆川を望む。(西から)…115
　３．トレンチ１（北から）……115
　４．トレンチ２（北から）……115
　５．トレンチ３（北から）……115
　６．トレンチ４（北から）……115
　７．トレンチ５（北から）……115
　８．トレンチ６（北から）……115
PL. 2　出土遺物（１）……116
PL. 3　出土遺物（２）……117

第１章　遺跡概観

第１節　遺跡の位置と環境（Fig.1）

本調査地は市内中心部から名越方面へ向かう国道134号線の南側、大町四ッ角から南東へ約50mの距離にある逆川の西岸に立地している。逆川はその源流を名越ヶ谷に発し、南流した後、谷の開口部で西に向きを変える。川はやがて緩やかに北上し、逆川橋を過ぎたところで大きく流れを西に変え、魚町橋を過ぎ、徐々に南に向きを変え上河原橋付近で滑川に合流する。本遺跡は逆川橋と魚町橋との間の逆川左岸、東側に突出した西岸に位置している。現在の地番は鎌倉市大町二丁目2308番１である。

本遺跡地は台帳の上では米町遺跡（№245）の範囲に含まれている。文献資料等から「米町」の範囲は若宮大路と大町四ッ角との間、延命寺橋の東側の大町大路沿いと考えられ、大町四ッ角の東は「魚町」と指摘されている（註）。米町は穀町とも記され、建長三年（1251）、及び文永二年（1265）に商売を営んでもよい町屋免許地のひとつに挙げられ、活発な商業活動が展開された地域と考えられる。

（註）馬淵和雄1995「3.米町遺跡（№131）大町二丁目2315番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』鎌倉市教育委員会　59～60頁

第２節　調査の経緯と経過（Fig.２・３）

本調査は鎌倉市大町二丁目2308番１地点における個人専用住宅建設に伴う事前調査として、平成11年12月６日～17日にかけて実施された。調査は住宅独立基礎が建設される部分に限定し、敷地内に２m×２mのトレンチを６ヶ所設定し、現地表下2.5mまでを調査対象とした。調査対象面積は24.0㎡である。調査着手以前は駐車場として使用されており、調査はまず、重機により現地表下約1.2m堆積する近代・現代の盛土を除去し、以下は人力により掘削を行った。狭いトレンチ内での調査のため、遺構の面的

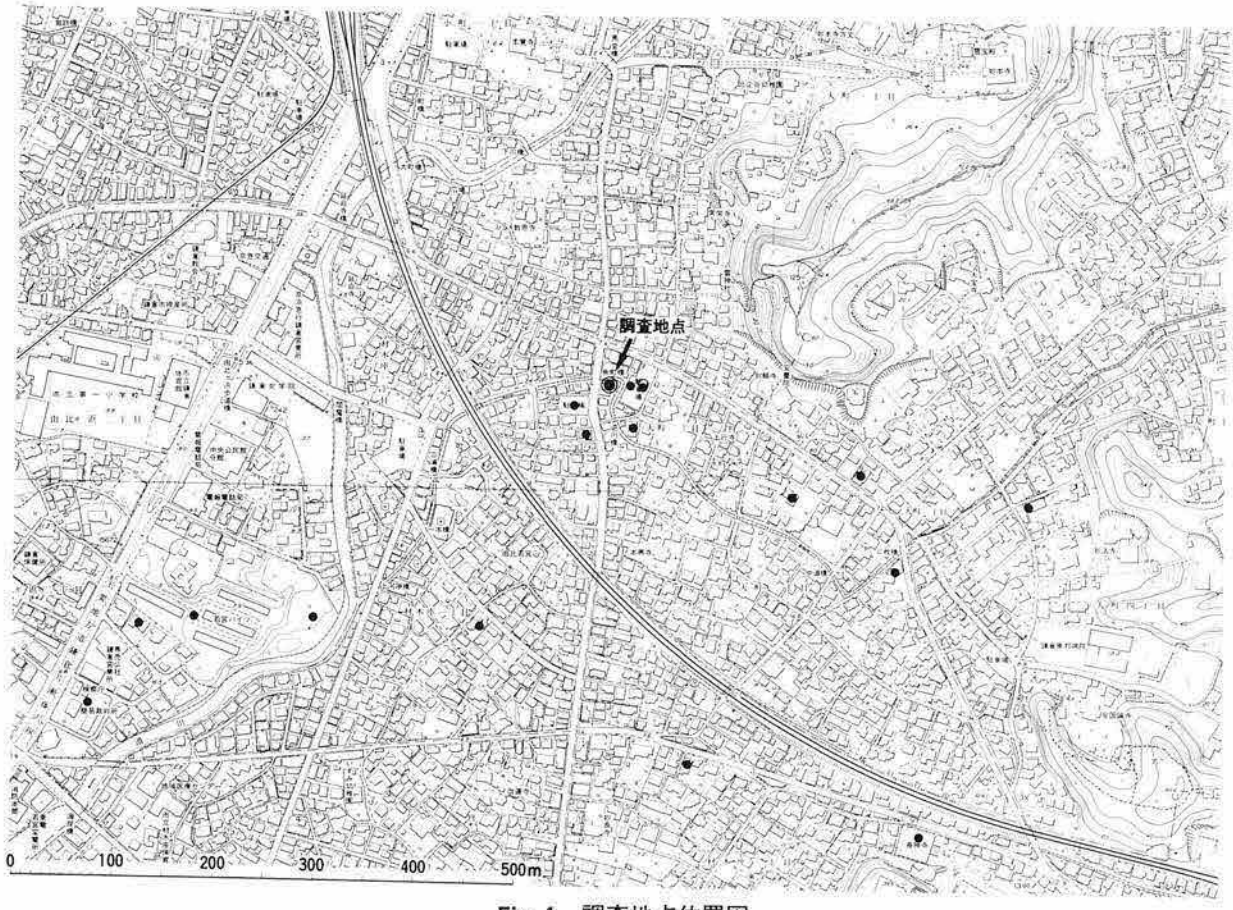


Fig.1　調査地点位置図

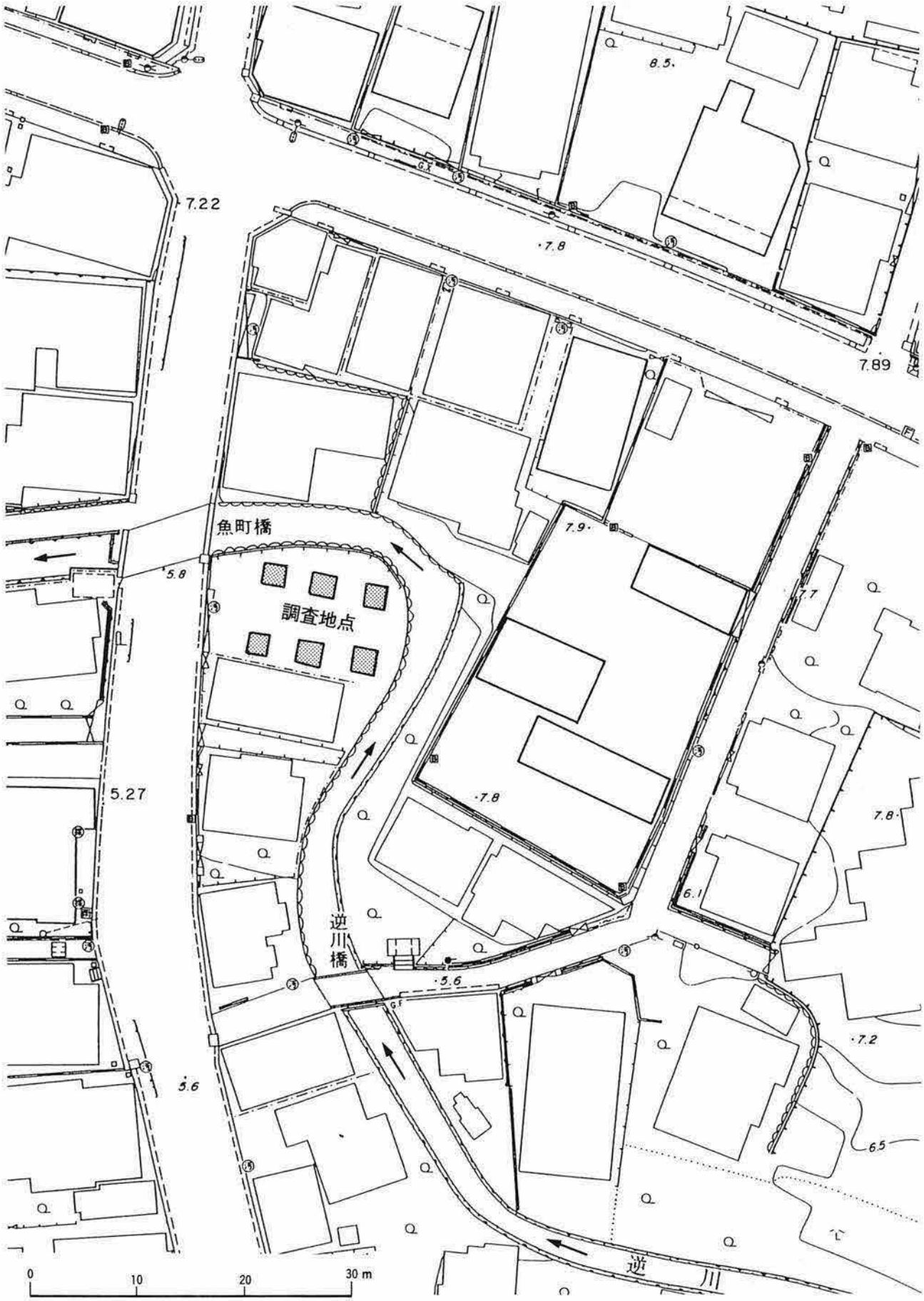


Fig. 2　調査地点周辺図

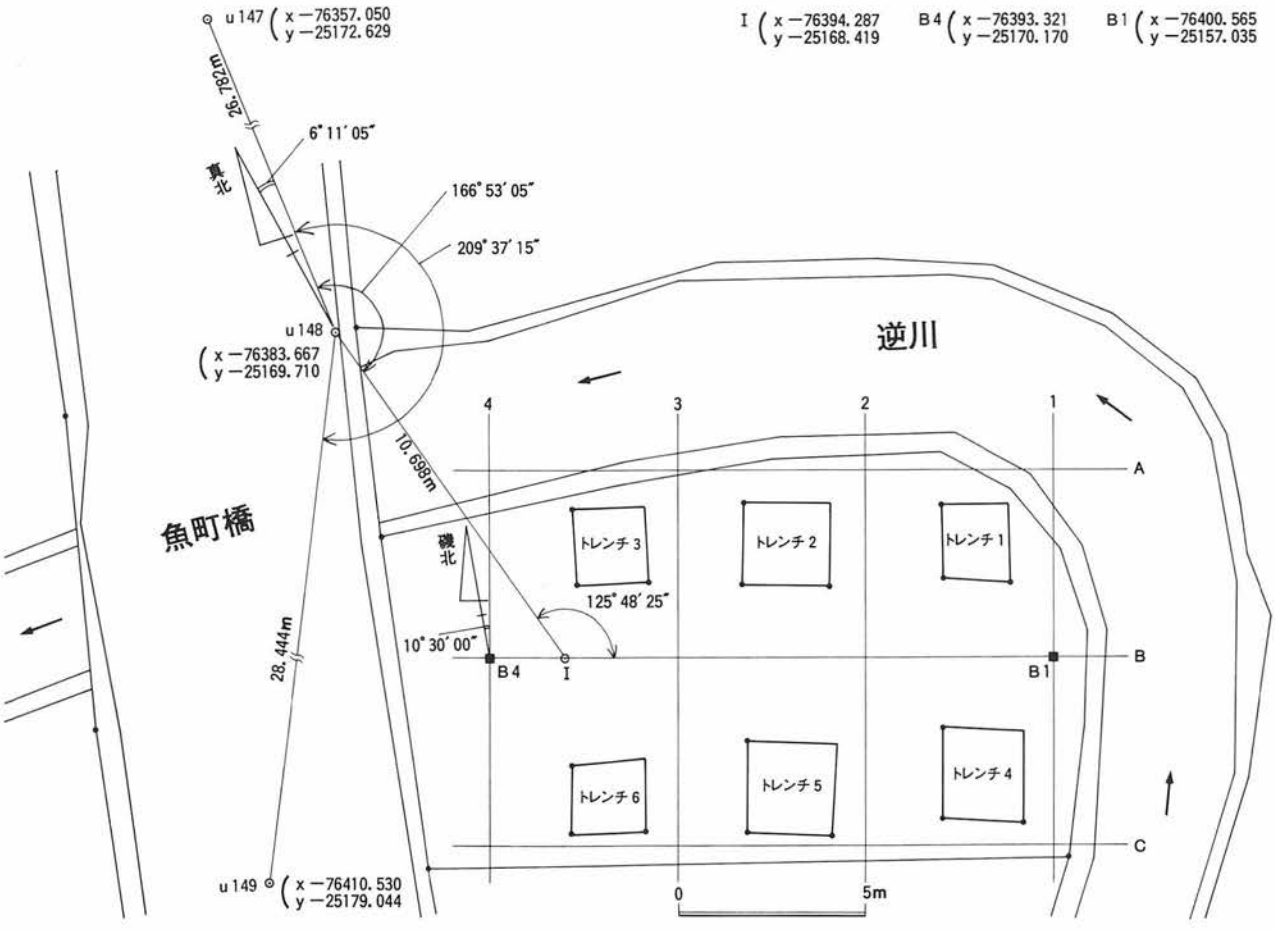


Fig. 3　グリッド割付図

な広がりを確認することは困難であり、土層断面の観察に調査の主眼を置いた。検出されたのは河川の一部であり、逆川の埋没過程を示している。出土した遺物は14世紀後半から15世紀代にかけてのものが主体であり、該期の遺構が周辺区域に展開すると考えられる。

本調査にあたり、測量用に任意の基準点Ｉを設け、調査敷地内に5.0mの方眼を設定した。東西軸、及び南北軸には北から南へアルファベット（Ａ～Ｔ）を、東から西へアラビア数字を付し、それぞれの方眼区画（グリット）の呼称には北東角の軸線交点を充てた。さらに、この方眼基準点と国土座標系との関係を、平面直角座標系 AREA 9 に属する鎌倉市四級基準点（U147・U148・U149）を基に測量・算出したところ、Ｂ－１はX－76400.565, Y－25157.035、Ｂ－４はX－76393.321, Y－25170.170の国土座標値を得ている。尚、グリット南北軸は磁北に対して10° 30′ 00″、真北に対して６° 11′ 05″ 東に傾いている。また、標高の記載については、鎌倉市三級基準点である№53402よりレベル移動を行い、海抜レベルを使用している。

第３節　堆積土層

調査地は逆川が北上し、西へと流れを変える舌状に突出した左岸に立地している。魚町橋、逆川橋周辺は、国道134号線の大町四ツ角辺りから、南に向かい急激に低くなり、山麓平野から砂質低湿地へと移行する地形の変換点となっている。遺跡の現地表は海抜5.7m前後を測り、逆川を挟んだ北、東隣と比較すると2.0m前後低くなっている。調査地の現況は駐車場として使用されており、現地表下0.5～1.５mはこの駐車場に関わる現代の盛土が堆積している。以下、各トレンチにより様相は若干異なるが、基本的には海抜4.0m前後までは近代以降の盛土、海抜3.5m前後は戦国～近世の遺物を含む砂質土、海抜3.1～3.4mで岩盤が検出され、岩盤上には20～30cm程の厚さで、戦国時代の遺物を含む川砂が堆積している。詳細は次章を参照されたい。

第２章　検出遺構と出土遺物

本章では各トレンチにおいて確認された堆積土層と、出土した遺物について記載していく。出土遺物の取り上げは、土層区分のまとまりから上層、中層、下層、最下層に分類し、それぞれに対応する土層番号は、トレンチごとに記載した。

ａ．トレンチ１（Fig.４・５）

調査敷地の北東部、Ａ－１グリットに設定した。現地表は5.7ｍを測り、以下、約1.0ｍは駐車場造成時の盛土である１層が堆積する。２・３層は土丹粒子・炭粒・木片等を含む灰褐色砂質土である。４層は黒褐色粗粒砂で炭粒・灰を混入する。５～７層は灰褐色砂質土を主体としており、土丹の混入がみられる。現地表下2.0ｍ前後、海抜3.6ｍで10層である灰褐色粗粒砂が検出される。また、南壁の一部では土丹粒をまばらに含む灰褐色砂質土である８・９層が検出され、東に向かい緩傾斜を示している。以下、海抜3.4ｍで締まりのない灰褐色粗粒砂、海抜3.1～3.2ｍで岩盤を検出し、トレンチ内では北、東に傾斜している。10・11層は河砂であり、水磨した土丹、遺物を含んでいる。１層～３層は上層、４層～６層は中層、７層～10層は下層、そして11層は最下層として遺物を取り上げている。

トレンチ１からは総数125点の遺物が出土している。上層からは27点出土しており、その内訳は近現代の磁器染付類10点、近世かわらけの口縁部１点、瀬戸・美濃大窯の錆釉擂鉢体部１点、瀬戸古窯灰釉四耳壺の口縁部１点、常滑窯甕の胴部８点、ロクロ成形かわらけの大皿口縁部２点、底部３点、石製品では砥石１点である。図示できたのはFig.5－１の砥石である。残長7.0cm、幅2.1cm、厚さ2.1cmを測り、産地は伊予で、中世の所産とみられる。中層からは35点が出土しており、その内訳は近現代陶磁器類５点、近世美濃窯では鉄釉灯明油皿１点、灰釉筒形香炉の口縁部１点、山茶碗窯系捏鉢の口縁部１点、常滑窯の甕胴部10点、ロクロ成形のかわらけ小皿底部14点、自然遺物ではヒトの脊髄１点、大型魚類の脊髄１点、中型魚類の脊髄１点である。実測できたのはFig.5－２に示した近世美濃窯の鉄釉灯明油皿１点のみで、口径10.3cm、底径4.0cm、器高2.2cmを測る。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。外底面は回転ヘラ切りで、内底面に重ね焼き痕がみられる。下層からは30点が出土しており、その内訳は瀬戸大窯の錆釉擂鉢体部１点、常滑窯の甕胴部４点、ロクロ成形かわらけの中・小皿口縁部４点、底部18点、石製品では石臼１点、自然遺物では魚類の脊髄１点、魚類の棘１点である。図示し得たのはFig.5－３の石臼である。直径31.0cm、厚さ6.7cm、高さ8.0cmであり、ほぼ中央に穿たれた孔の直径は2.8cmを測る。最下層からは33点の遺物が出土しており、その内訳は瀬戸古窯、或いは大窯の錆釉擂鉢体部２点、瀬戸古窯の灰釉柄付片口口縁部１点、常滑窯の甕胴部９点、土器質火鉢の胴部１点、ロクロ成形かわらけでは大皿の底部５点、中・小皿の口縁部４点、極小皿の口縁部４点、手づくね成形かわらけでは小皿

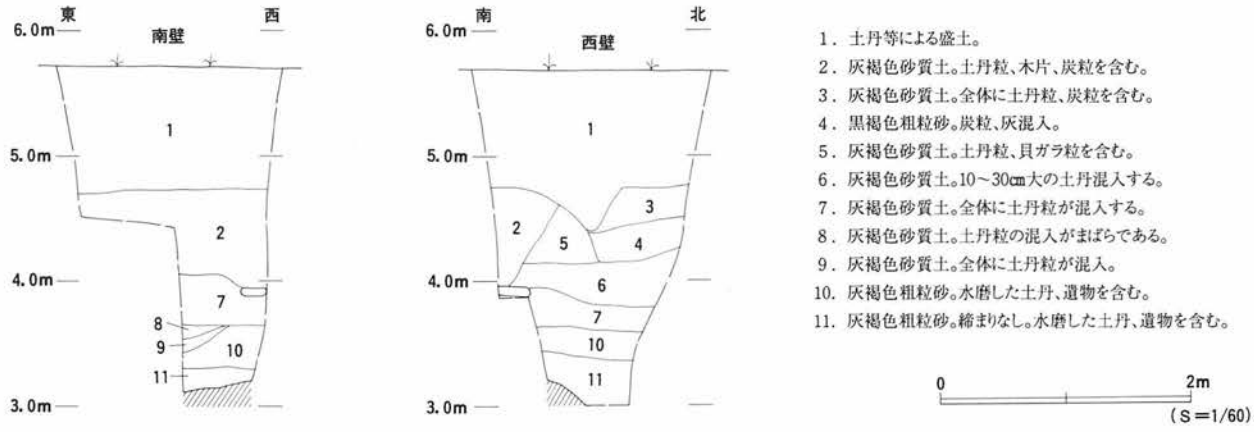


Fig4.　トレンチ１　堆積土層図

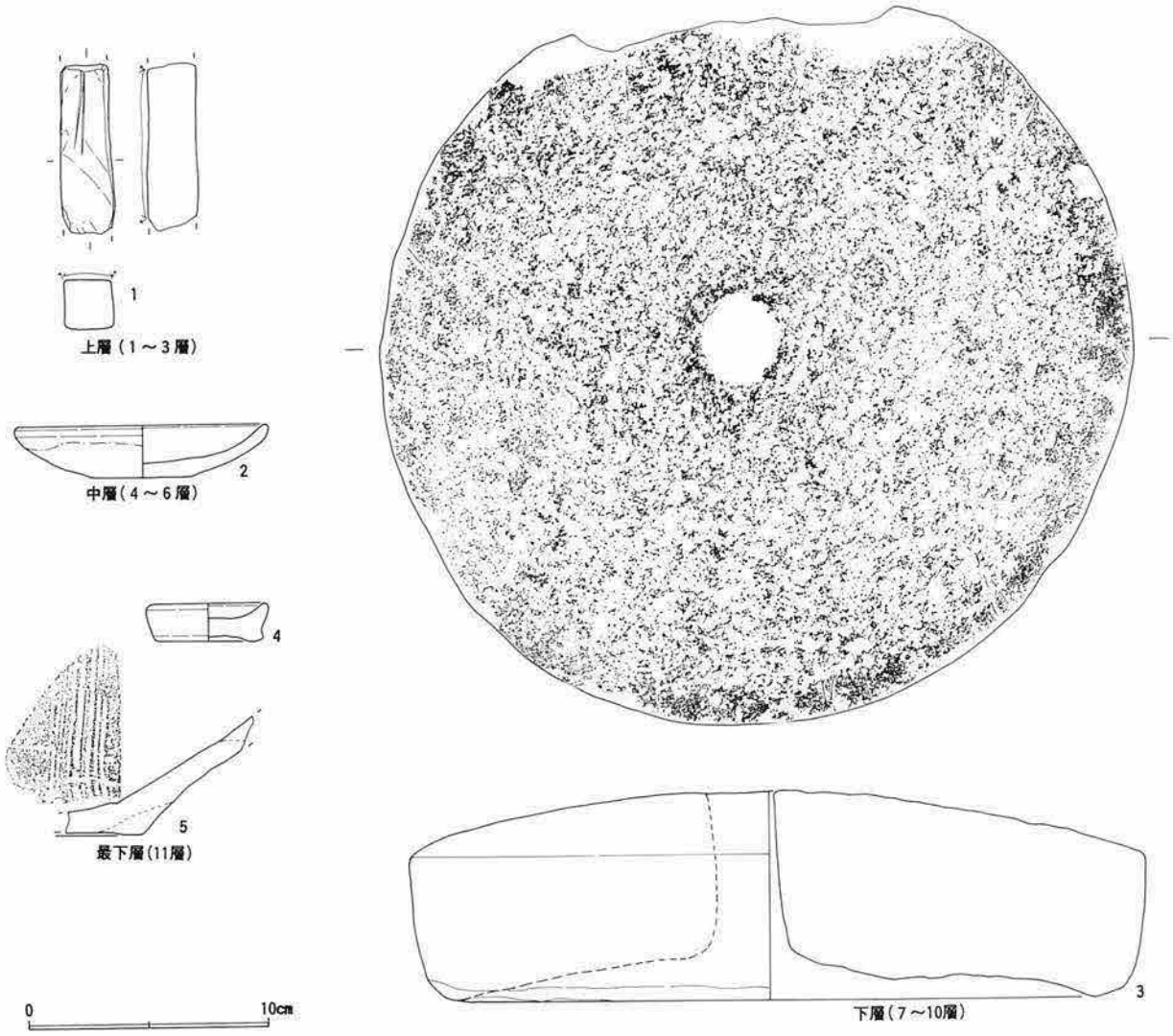


Fig. 5　トレンチ1　出土遺物

の口縁部1点、底部1点、自然遺物ではウシ or ウマの右四肢骨1点、イヌの左四肢骨1点、アカニシ1点、サザエ2点である。図示し得たのはFig.5－5に示した瀬戸古窯、或いは大窯の錆釉擂鉢体部である。体部内面の擂目は11本一組で、外底に回転糸切り痕を有する。

b．トレンチ2（Fig.6・7）

調査敷地の北部、A－2グリットに設定した。現地表は5.7mを測り、以下、1.0～1.5mは駐車場造成時の盛土である1層が堆積する。2層は玉砂利・土丹粒子・炭粒を含む灰褐色粘質土、3層は土丹粒子を含む褐色粘質土、4層は少量の土丹粒子・貝殻粒子、多量の粗砂を含む暗褐色砂質土、5層は土丹

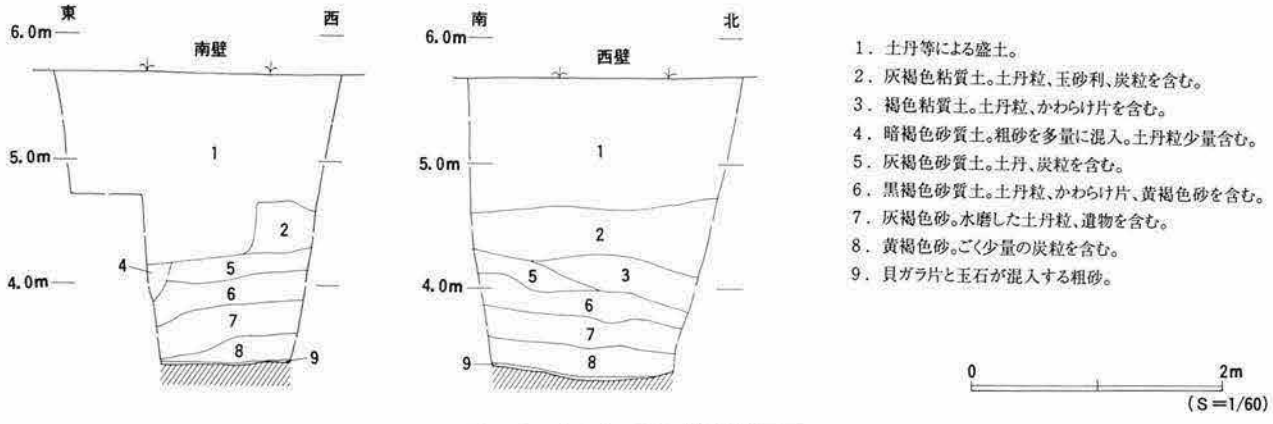


Fig. 6　トレンチ2　堆積土層図

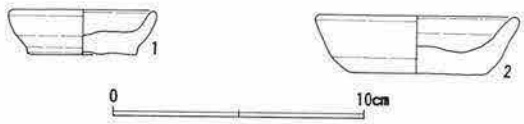


Fig. 7　トレンチ2　出土遺物

・炭粒を含む灰褐色砂質土、6層は少量の土丹粒子・炭粒、多量の黄褐色砂を含む黒褐色砂質土である。現地表下1.8～2.0m、海抜3.7～3.9mで水磨した土丹粒子、遺物を含む灰褐色砂を主体とした7層を、海抜3.5～3.6mでごく少量の炭粒を含む黄褐色砂である8層を検出する。8層の下には貝殻片、玉石を混入する粗砂である9層が3cmの厚さで検出され、海抜3.3～3.4mで岩盤となる。3層以下は北、東に向かい緩やかに傾斜している。1層～2層は上層、3層～6層は中層、7層は下層、そして8層・9層は最下層として遺物を取り上げている。

トレンチ2からは総数108点の遺物が出土している。上層からは近現代の陶磁器5点、常滑窯の甕胴部2点が、中層からは近現代陶磁器25点、常滑窯の甕胴部4点が出土しているが、図示できるものはない。下層からは58点の遺物が出土しており、その内訳は舶載品では同安窯系青磁櫛描文碗の口縁部1点、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文鉢の口縁部1点、瀬戸古窯では灰釉壺胴部1点、灰釉水注の把手部1点、ロクロ成形かわらけでは中・小皿の口縁部15点、底部35点、極小皿の口縁部1点、自然遺物ではイヌの肋骨1点、イヌの脊髄1点、鯨類の顎骨1点であり、この顎骨には解体痕が認められる。Fig.7－1・2に示したロクロ成形のかわらけは全て下層出土である。1は口径5.6cm、底径4.3cm、器高1.8cmの極小皿、2は口径7.9cm、底径5.5cm、器高2.3cmの小皿である。最下層からは14点の遺物が出土し、その内訳は瀬戸古窯の灰釉卸皿口縁部1点、常滑窯の甕胴部2点、ロクロ成形かわらけでは大皿の底部1点、中・小皿の口縁部2点、底部5点、小皿の口縁部1点、底部1点、手づくね成形かわらけでは大皿の口縁部1点であり、図示できるものはない。

C．トレンチ3（Fig.8・9）

調査敷地の北西部、A－3グリットに設定した。現地表は5.7mを測り、以下、0.8～1.3mは駐車場造成時の盛土である1層が堆積する。2層は全体に土丹粒子を含む灰褐色砂質土、3層は破砕した鎌倉石・土丹を含む褐色砂質土である。現地表下1.8～2.0m、海抜3.7～3.9mで土丹を含む褐色砂質土である4層を、海抜3.6～3.8mで5～10cm大の土丹を含む褐色砂質土を主体とした5層を、海抜3.5m前後で土丹の混入が目立つ褐色砂質土である6層が確認される。以下、海抜3.4m前後で水磨した遺物等を含む灰褐色粗砂を主体とした7層が検出されるが、掘削深度規定である海抜3.2mまでに岩盤は確認されていない。狭い範囲の確認ではあるが、4層・5層は北に向かい緩やかに傾斜し、6層・7層はほぼ水平な堆積といえる。1層は上層、2層・3層は中層、4層～6層は下層、そして7層は最下層として遺物を取り上げているが、最下層出土の遺物はない。

トレンチ3からは総数は80点の遺物が出土している。上層からは5点の遺物が出土しており、その内

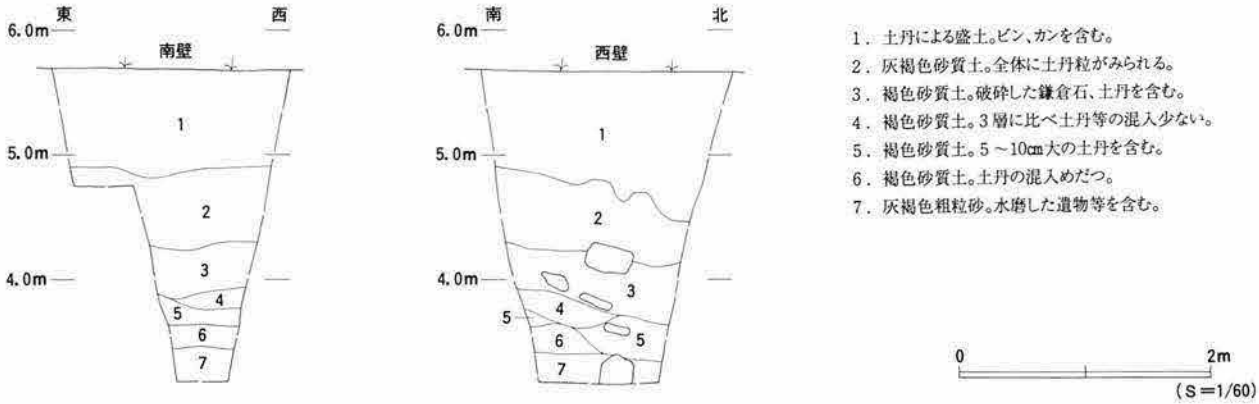


Fig. 8　トレンチ3　堆積土層図

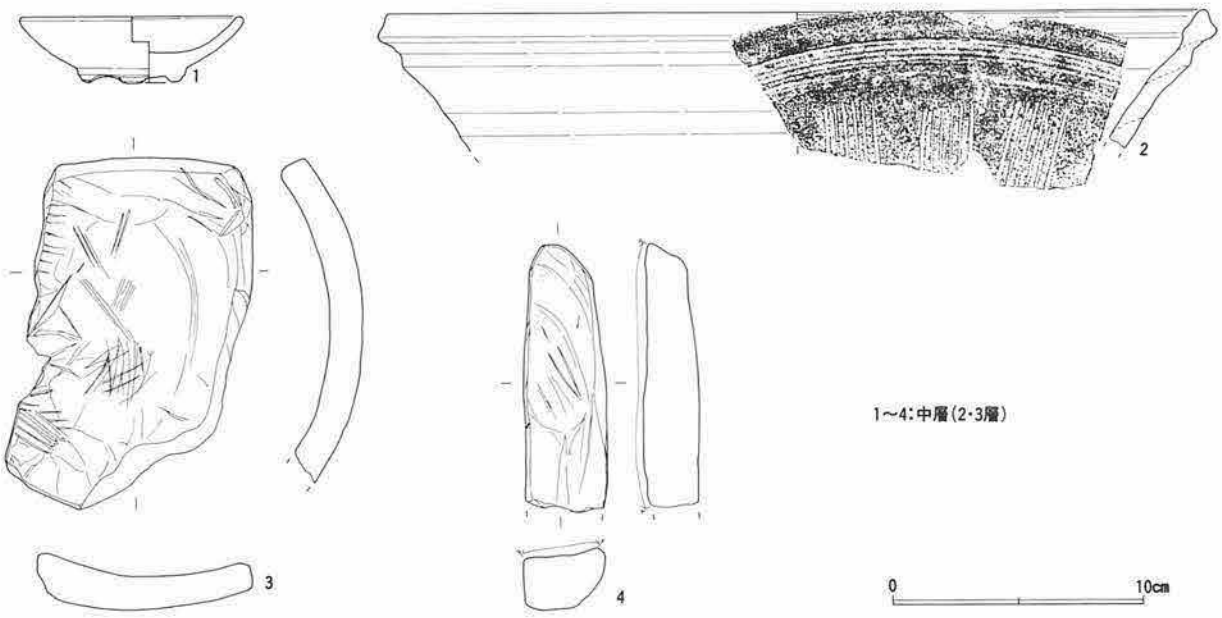


Fig. 9　トレンチ3　出土遺物

訳は近現代の陶磁器１点、肥前系の磁器染付け猪口底部１点、近世美濃窯の鉄釉灯明油皿口縁部１点、舶載の白磁口兀皿口縁部１点、常滑窯の甕胴部１点であり、図示できるものはない。中層からは36点が出土しており、その内訳は近現代の陶磁器４点、舶載の白磁高台付皿口縁部１点、丹波窯の擂鉢口縁部１点、常滑窯の甕口縁部１点、胴部14点、底部１点、山茶碗窯系の片口鉢口縁部１点、ロクロ成形かわらけでは中・小皿の口縁部２点、底部９点、石製品では滑石製品１点、砥石１点である。図示できた中層出土遺物はFig.9－１～４に示した。１は舶載の白磁高台付皿である。釉は全体に施され、胎土は黄色味を帯びた灰色である。口径8.8ｃｍ、高台径3.9ｃｍ、器高2.6ｃｍを測り、高台部には弧状の抉り込みを有し、内底面には重ね焼きの目跡が残る。断面には漆による補修痕がみられる。２は丹波窯の擂鉢である。器表は褐色、胎土は灰～灰橙色を呈し、白色粒子・長石・石英に富む。体部内面の擂り目は６本を一単位としている。復元口径32.3ｃｍである。３は滑石製品。滑石鍋の転用品であり、温石として使用されたものであろうか。４は砥石。残長10.5ｃｍ、幅3.3ｃｍ、厚さ2.2ｃｍを測る。近世の上野砥である。下層からは39点が出土しており、その内訳は常滑窯では甕の胴部15点、底部１点、片口鉢の口縁部１点、土器質火鉢の口縁部１点、ロクロ成形のかわらけでは中・小皿の口縁部２点、底部12点、小皿の口縁部１点、手づくね成形かわらけでは大皿の底部１点、自然遺物ではヒトの左橈骨１点、イヌの脊髄１点、同左大腿骨１点、同骨盤１点、サメの左下顎骨１点である。いずれも小片であり、図示できるものはない。

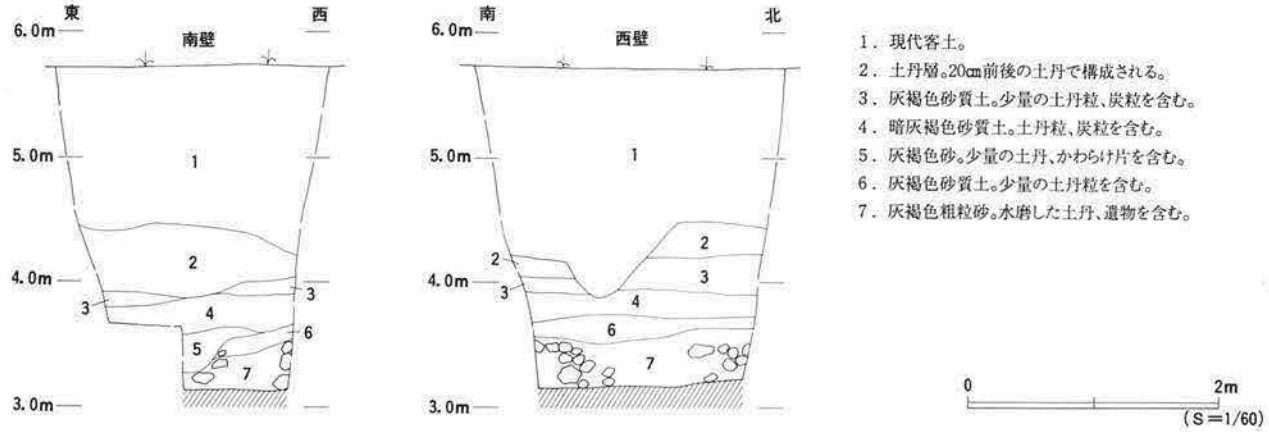


Fig. 10　トレンチ4　堆積土層図

d．トレンチ４（Fig.10・11）

調査敷地の南東部、Ｂ－１グリットに設定した。現地表は5.7mを測り、以下、1.2～1.5mは駐車場造成時の盛土である１層が堆積する。２層は20cm前後の土丹で構成される。３層は少量の土丹粒・炭粒を含む灰褐色砂質土、４層は土丹粒・炭粒を含む暗灰褐色砂質土である。海抜3.6～3.7mで少量の遺物片、土丹を含む灰褐色砂を主体とした５層、少量の土丹粒を含む灰褐色砂質土である６層が検出される。海抜3.4～3.6mで水磨した土丹・遺物等を含む灰褐色粗砂を主体とした７層が検出され、海抜3.2m前後で岩盤が確認された。狭い範囲の確認ではあるが、５層～７層は東に向かい緩やかに傾斜している。１層は上層、２層～４層は中層、５層・６層は下層、そして７層は最下層として遺物を取り上げている。尚、河砂層とは最下層である７層のことである。

トレンチ４からは237点の遺物が出土している。上層からは５点が出土しており、その内訳は近現代の染付碗底部１点、近世美濃窯では鉄釉灯明皿１点、鉄釉灯明油皿１点、常滑窯の甕胴部２点である。図示できた上層出土遺物はFig.11－１・２で、ともに近世美濃窯の製品である。１は鉄釉灯明皿で口径7.1cm、底径3.3cm、器高1.8cmを測る。２は鉄釉灯明油皿で口径10.5cm、底径4.8cm、器高1.9cmである。中層からは７点が出土しており、内訳は肥前系の磁器染付碗底部１点、常滑窯の甕胴部５点、ロクロ成形かわらけの大皿底部１点であり、図示できるものはない。下層からは72点の遺物が出土している。内訳は明治以降の磁器染付け丸碗口縁部１点、舶載の白磁口兀皿口縁部１点、瀬戸・美濃大窯では鉄釉擂鉢の口縁部１点、底部１点、瀬戸古窯の灰釉折縁深皿口縁部１点、常滑窯では甕の胴部18点、底部１点、片口鉢の口縁部１点、ロクロ成形かわらけの中・小皿口縁部７点、底部32点、石製品では砥石２点、自然遺物ではヒトの四肢骨３点、ウシ or ウマの肋骨１点、ネコの寛骨１点、魚類の脊髄１点である。図示できたのはFig.11－３～６である。３・４は瀬戸・美濃大窯の鉄釉擂鉢で、３は復元口径31.0cm、４は復元底径10.5cmを測る。４の体部内面の擂り目は14本を一単位としている。５は中世の仕上げ砥で鳴滝産。残長4.5cm、幅3.5cm、厚さ1.1cm。６は近世の中砥で上野産である。残長6.9cm、幅2.8cm、厚さ1.5cm。最下層からは80点の遺物が出土しており、その内訳は瀬戸古窯では灰釉折縁深皿の底部１点、灰釉卸皿の口縁部１点、灰釉平碗の口縁部１点、常滑窯では甕の口縁部１点、胴部28点、底部１点、片口鉢の底部４点、山茶碗窯系の片口鉢口縁部１点、底部１点、渥美窯の甕頚部１点、ロクロ成形かわらけでは中・小皿の口縁部13点、底部25点、極小かわらけ１点、自然遺物ではイヌの右肋骨１点が出土し

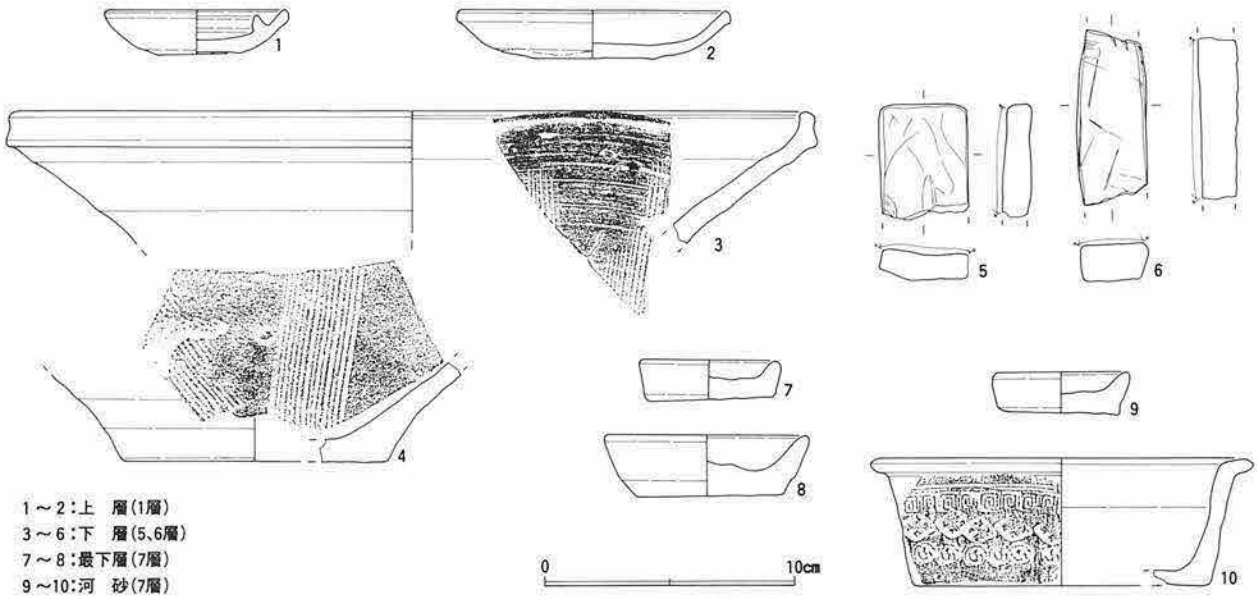


Fig.11　トレンチ４　出土遺物

ている。図示し得たのはFig.11－7・8のロクロ成形かわらけである。7は口径5.3cm、底径4.9cm、器高1.6cmの極小皿、8は口径8.0cm、底径5.9cm、器高2.4cmの中小皿で、いずれも完形品である。河砂層からは73点の遺物が出土している。その内訳は瀬戸古窯の灰釉直縁大皿口縁部1点、渥美窯の甕口縁部1点、常滑窯では甕の胴部22点、底部2点、片口鉢の口縁部1点、底部1点、山茶碗窯系の片口鉢底部3点、瓦質香炉の口縁部1点、ロクロ成形かわらけでは中・小皿の口縁部4点、底部34点、極小皿1点、フイゴの羽口2点が出土している。実測し得たのはFig.11－9・10である。9はロクロ成形かわらけで口径5.2cm、底径4.4cm、器高1.6cmを測る極小皿で、ほぼ完形品である。10は瓦質の香炉で復元口径14.5cm、復元底径11.8cmである。外底には脚の剥離痕がみられ、3ヶ所に脚が付くものであろう。体部外面には上部から下部にかけて雷文、華菱文、巴文がスタンプにより連続施文されている。

e．トレンチ5（Fig.12・13）

調査敷地の南部、B－2グリットに設定した。現地表は5.7mを測り、以下、0.8～1.6mは駐車場造成時の盛土である1層が堆積する。2層は土丹粒・砂粒を含む灰褐色粘質土、3層は土丹粒子を含む暗褐色土、4層は3cm前後の土丹粒を多量に含む灰褐色砂質土である。海抜4.3～4.5mで5層である少量の土丹粒を混入する灰褐色砂質土を、海抜4.2m前後で6層である暗褐色砂質土を検出し、全体に土丹を混入している。海抜3.7～3.9mで黒褐色砂質土である7層、10cm前後の土丹を含む灰褐色砂質土主体の9層を検出し、7層の下には暗黄褐色砂である8層が、9層の下には5cm程の土丹を含む灰褐色砂である10層が堆積する。以下、海抜3.7mで11層である土丹・炭粒を含む灰褐色砂、12層である水磨した土丹を含む灰褐色粗砂が検出された。海抜3.5～3.7mで13層である黄褐色細砂を検出し、海抜3.3～3.4mで岩盤が確認された。狭い範囲の確認ではあるが、7層～9層は東に向かい緩やかに傾斜している。1層～4層は上層、5層・6層は中層、7層～10層は下層、11層～13層は最下層として遺物を取り上げている。

トレンチ5からは317点の遺物が出土している。上層からは22点が出土しており、その内訳は近現代の陶磁器類5点、銅銭1点、常滑窯では甕の胴部13点、片口鉢の口縁部1点、ロクロ成形かわらけの小皿底部2点が出土している。図示し得たのはFig.13－1の銅銭「寛永通寶」である。所謂「新寛永」で、背面上部に「文」の字を鋳出す「文銭」である。寛文8年（1668）～天和3年（1683）鋳造とされている。中層からは88点の遺物が出土している。その内訳は近世美濃窯の灰釉丸皿口縁部1点、瀬戸・美濃大窯の灰釉端反皿口縁部1点、常滑窯では甕の胴部12点、片口鉢の口縁部2点、ロクロ成形かわらけでは大皿の口縁部8点、中・小皿の口縁部40点、底部13点、極小皿の口縁部10点、自然遺物ではイヌの肋骨1点である。実測し得たものはFig.13－2～15である。2～12はロクロ成形のかわらけで、2

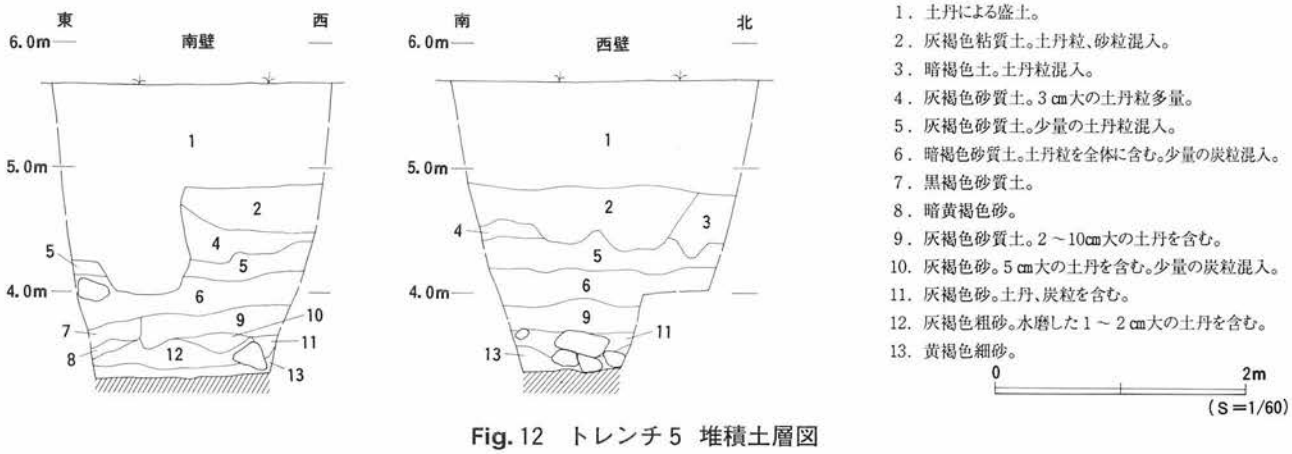


Fig.12　トレンチ5　堆積土層図

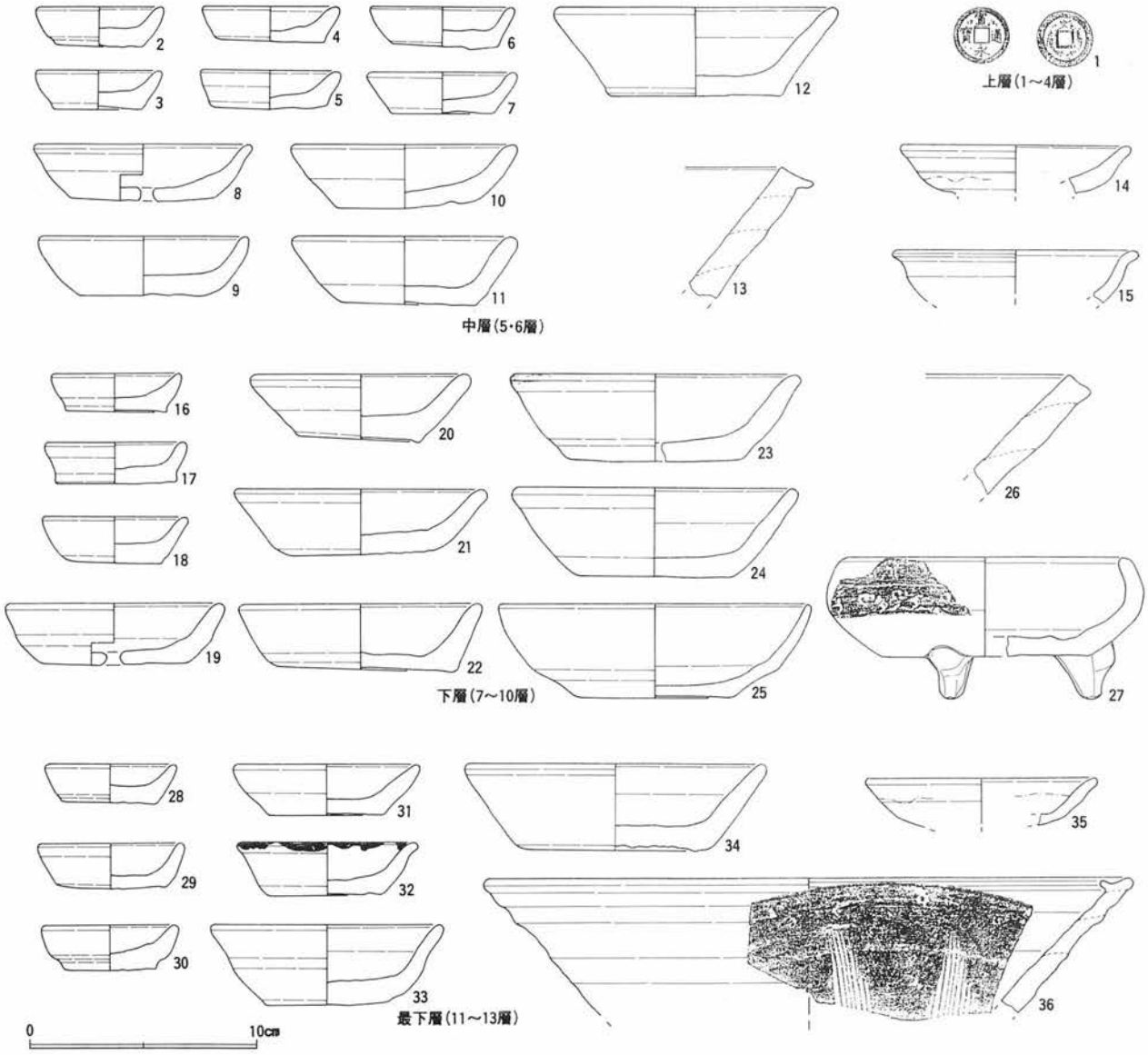


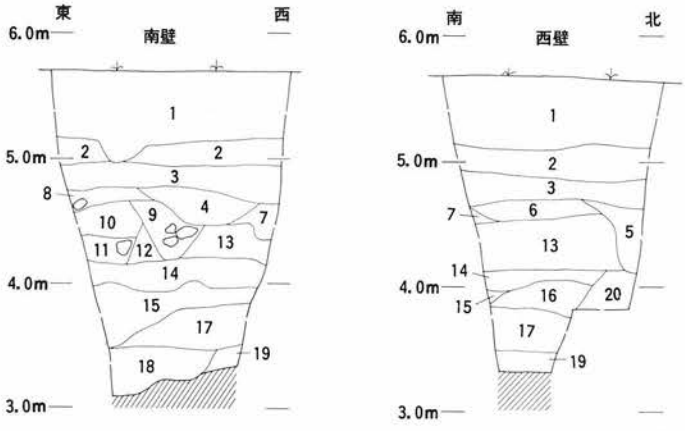
Fig. 13　トレンチ５　出土遺物

～７は極小皿、８～11は中・小皿、12は大皿で、８・11・12以外はいずれも完形、もしくはほぼ完形品である。以下、法量を記していく。２は口径5.3cm、底径3.9cm、器高1.7cm。３は口径5.3cm、底径3.9cm、器高1.7cm。４は口径5.8cm、底径4.7cm、器高1.5cm。５は口径5.9cm、底径5.1cm、器高1.7cm。６は口径5.3cm、底径3.9cm、器高1.7cm。７は口径6.3cm、底径4.4cm、器高1.8cm。８は復元口径9.3cm、底径6.3cm、器高2.4cmで底部中央に径0.6cmの孔が穿たれている。９は口径8.9cm、底径5.5cm、器高2.6cm。10は口径9.7cm、底径6.3cm、器高2.8cm。11は復元口径9.4cm、底径5.9cm、器高2.9cm。12は復元口径11.9cm、底径7.3cm、器高3.9cmである。13は常滑窯の片口鉢口縁部である。口縁端部は、外方へ強く引き出されている。14は近世美濃窯の灰釉丸皿口縁部で、復元口径9.8cm。15は瀬戸・美濃大窯の灰釉端反皿口縁部で、復元口径10.3cmを測る。下層からは85点の遺物が出土している。内訳は常滑窯では甕の口縁部１点、胴部８点、片口鉢の口縁部２点、底部１点、瓦質香炉の口縁部１点、ロクロ成形かわらけでは中・小皿の口縁部34点、底部28点、極小皿の口縁部４点、底部２点、自然遺物では哺乳類の右下顎骨１点、大型魚類の脊髄１点、中型魚類の脊髄１点、魚類の棘１点である。実測し得た遺物は Fig.13－16～27である。16～25はロクロ成形かわらけで、16～18は極小皿、19～22は小・中皿、23～25は大皿である。18・19・23・24・25以外は完形品である。以下、法量を記していく。16は口径5.5cm、底径4.4cm、器高1.6cm。17は口径6.1cm、底径5.3cm、器高1.8cm。18は復元口径6.2cm、底径4.1cm、器高2.0cm。

19は復元口径9.3cm、底径6.4cm、器高2.7cmを測り、底部中央に径0.6cmの孔が穿たれる。20は口径9.2cm、底径5.4cm、器高2.8cm。21は口径10.6cm、底径6.6cm、器高2.9cm。22は口径10.3cm、底径7.8cm、器高2.8cm。23は復元口径12.2cm、底径7.6cm、器高3.8cmを測り、口縁端部に薄く煤が付着する。24は復元口径12.1cm、底径6.8cm、器高3.8cm。25は復元口径13.4cm、底径6.8cm、器高4.0cm。26は常滑窯の片口鉢口縁部である。端部は角張り、外方に小さく突出する。27は瓦質香炉である。復元口径11.9cm、底径9.1cm、器高6.2cmを測り、３本の脚を有するものである。体部外面中位にスタンプによる花文（菊花文？）を連続して配している。最下層からは122点の遺物が出土している。内訳は瀬戸古窯では鉄釉擂鉢の口縁部１点、鉄釉縁釉小皿の口縁部１点、灰釉折縁深皿の口縁部１点、舶載の青白磁合子蓋１点、常滑窯では甕の口縁部１点、胴部19点、片口鉢の口縁部３点、底部１点、山茶碗窯系の片口鉢口縁部１点、体部１点、伊勢系土鍋の胴部１点、ロクロ成形かわらけでは大皿の口縁部１点、中・小皿の口縁部35点、底部38点、極小皿の口縁部９点、自然遺物ではアカニシ１点、ヒトの脊髄１点、イヌの右指骨１点、イヌの脊髄１点、小型哺乳類の肋骨２点、魚類の脊髄１点、魚類の棘１点である。実測し得た遺物はFig.13－28～36である。28～34はロクロ成形のかわらけで、28～30は極小皿、31～33は中・小皿、34は大皿で28・30・32は完形である。以下、法量を記していく。28は口径5.5cm、底径4.1cm、器高1.7cm。29は復元口径5.8cm、底径4.0cm、器高2.0cm。30は口径6.2cm、底径4.8cm。31は復元口径8.0cm、底径5.1cm、器高2.2cm。32は口径7.6cm、底径5.1cm、器高2.3cmを測り、口唇部に煤が付着する。33は復元口径9.8cm、底径5.4cm、器高3.5cm。34は復元口径12.8cm、底径8.0cm、器高3.7cmである。35・36は瀬戸古窯の製品である。35は鉄釉縁釉小皿で、復元口径9.8cm、36は鉄釉擂鉢で、復元口径28.0cmを測る。36の体部内面の擂り目は７本を一単位としている。

f．トレンチ６（Fig.14・15）

調査敷地の南西部、Ｂ－３グリットに設定した。現地表は5.7ｍを測り、以下、0.6ｍは駐車場造成時の盛土である１層が堆積する。２層～12層は黒褐色粘質土を主体とし、土丹、土丹粒、炭粒等を混入するものである。４層・５層・９層は遺構覆土となる可能性もあるが、近現代の所産と考えている。海抜4.6ｍで土丹粒・遺物を含む暗黄灰褐色砂質土である13層が、海抜4.2ｍで細砂を混入する暗褐色砂質土である14層、土丹・貝を含む黄褐色粘質土である20層が、海抜4.0ｍ前後で黒褐色砂質土である15層、暗黄褐色粘質土である16層が検出される。以下、海抜3.5～3.8ｍで暗灰褐色粗砂である17層、海抜3.5ｍ前後で18層である玉砂利を含む灰褐色中粒砂、19層である５cm大の土丹を含む灰褐色細砂が検出され、海抜3.1～3.3ｍで岩盤となる。狭い範囲の確認ではあるが、15層以下の堆積土と岩盤面は、東に向かい緩やかに傾斜している。トレンチ６は大部分を試掘坑と重複するため１層～12層は上層、13層～20層は



1．暗褐色土。現代盛土
2．暗褐色粘質土。土丹粒、貝ガラ粒混入。
3．土丹層。少量の貝ガラ粒、炭粒混入。
4．黒褐色粘質土。土丹粒混入。
5．黒褐色粘質土。土丹、土丹粒混入。
6．明褐色粘質土。土丹、貝ガラ粒、細砂混入。
7．黒褐色粘質土。土丹、橙色粒子混入。
8．黒褐色粘質土。土丹、土丹粒、砂粒混入。
9．黒褐色粘質土。15cm大の土丹、貝ガラ粒含む。
10．黒褐色粘質土。貝ガラ粒、炭粒混入。
11．黒褐色粘質土。10cm大の土丹含む。
12．黒褐色粘質土。
13．暗黄褐色砂質土。5cm大の土丹、貝、かわらけ含む。
14．暗褐色砂質土。土丹粒、かわらけ片、炭粒、細砂混入。
15．黒褐色砂質土。5～10cm大の土丹、貝、炭粒を含む。
16．暗黄褐色粘質土。3～10cm大の土丹、貝片多し。炭粒少量。
17．暗灰褐色粗砂。3cm大の土丹、貝片、かわらけ片含む。
18．灰褐色中粒砂。玉砂利、かわらけ粒を含む。
19．灰褐色細砂。5cm大の土丹を含む。
20．黄褐色粘質土。3～5cm大の土丹、貝を含む。

0　2m
（S＝1/60）

Fig.14　トレンチ６　堆積土層図

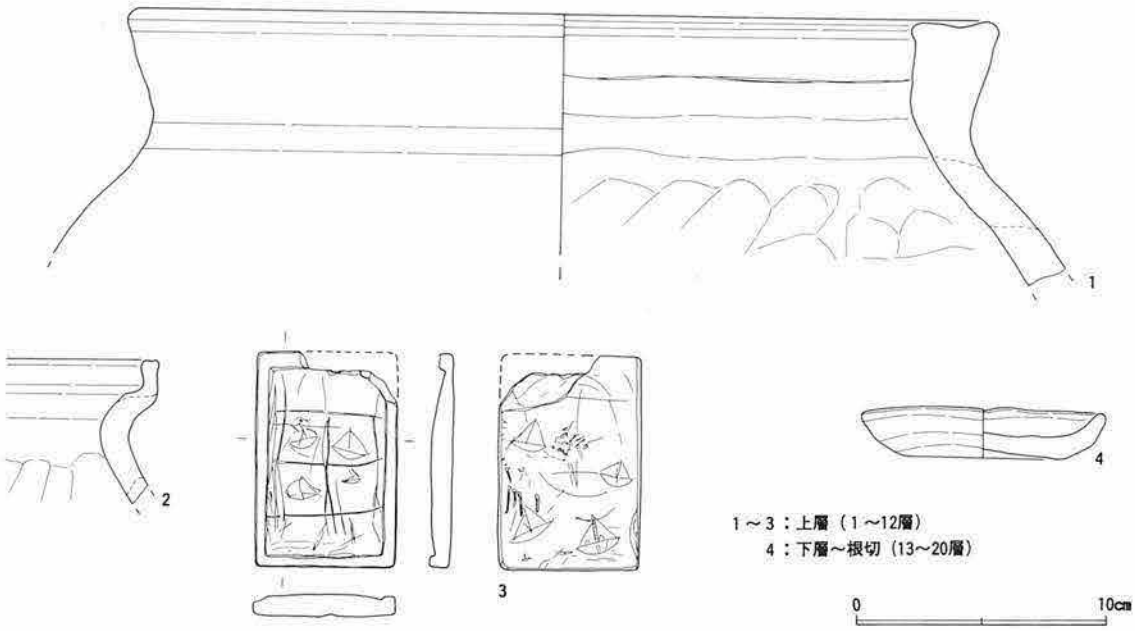


Fig. 15　トレンチ6　出土遺物

下層～根切として遺物を取り上げている。

トレンチ6からは162点の遺物が出土している。上層からは126点が出土し、その内訳は近現代の陶磁器1点、常滑窯では甕の口縁部2点、胴部19点、底部1点、備前窯の擂鉢口縁部1点、ロクロ成形かわらけでは大皿の口縁部14点、底部35点、小皿の口縁部4点、底部8点、手づくね成形かわらけでは大皿の口縁部7点、底部24点、小皿の口縁部2点、石製品では硯1点、自然遺物ではアカニシ1点、アワビ1点、ハマグリ1点、サルボウガイ1点、イヌの肋骨1点、イヌの脊髄2点である。実測し得たのはFig. 15－1～3である。1は常滑窯の甕口縁部で、復元口径は34.0cmを測る。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。2は常滑窯の甕口縁部で、端部は受け口状を呈する。器表は褐色、胎土は灰橙色を呈する。3は硯で長辺8.5cm、短辺5.5cm、厚さ0.9cmを測る。内・外面に帆掛け舟らしき線刻がみられる。下層～根切では36点の遺物が出土している。内訳は常滑窯の甕胴部1点、ロクロ成形かわらけ大皿の口縁部9点、底部20点、小皿の口縁部1点、底部2点、手づくね成形かわらけの大皿口縁部2点、自然遺物ではアカニシ1点が出土している。図示し得たのはFig. 15－4のロクロ成形のかわらけ小皿である。口径9.4cm、底径6.2cm、器高1.9cmを測る完形品で、全体に歪んでいる。

第３章　まとめ (Fig. 16)

本調査地点は逆川橋と魚町橋との間の逆川左岸、東側に突出した西岸に位置し、地形的には山麓平野から砂質低湿地へ移行する変換点に立地している。遺跡の現地表は海抜5.7m前後を測り、逆川を挟んだ北、東隣と比較すると2.0m前後程低くなっており、逆川の氾濫源というべき場所といえる。今回は２ｍ×２ｍのトレンチを６ヶ所という、狭い範囲内での調査のため、遺構の平面的な確認は不可能であった。しかし、堆積土層の観察により、逆川の埋没過程の一端を確認し得たと考えている。

第二章に示したトレンチ１～６の堆積土層図を概念的に並べたものがFig. 16の土層概念図である。いずれのトレンチからも中世地山と考えられる砂層は検出されず、また、明確な遺構の掘り込みも確認されていない。各トレンチで上層としたものは駐車場に関わる現代の盛土であり、現地表下に0.5～1.5m程堆積している。以下の様相は各トレンチにより異なるが、中層としたものは海抜4.0m前後で確認される砂質土を主体とした堆積土で、土丹粒子、炭粒等の混入が目立ち、主に近現代の陶磁器等を出土している。下層としたものは海抜3.5m前後で検出された褐色砂質土を主体とした堆積土で、一部、近世遺物を含むが、主体となるのは瀬戸・美濃大窯の製品、及び戦国タイプのかわらけが出土している。岩盤面は海抜3.1～3.4mで検出され、最下層とした川砂層は岩盤上に20～30cmほどの厚さで堆積する。最下層出土の遺物は瀬戸・美濃大窯製品、及び戦国タイプのかわらけを主体としているが、トレンチ６では戦国タイプのかわらけはみられず、時期的に古い様相を呈しているようだ。以上のことから、本地点における旧逆川の埋没は15世紀末葉頃には始まったことと考えられようか。

本遺跡からはテンバコ４箱分の遺物が出土している。その内訳については各トレンチ毎に記載してきたが、ここでは全体の遺物構成について記していきたい。尚、各遺物の出土点数については便宜上、破片数を使用し、かわらけに関しては重量も記載した。

今回の調査では965点（100%）の遺物が出土し、そのうち49点（5.08%）が動物骨、貝類等の自然遺物で、残り916点（94.92%）が土器、陶磁器等の製品である。土器、陶磁器等では時期別にみると近現代が34点（3.52%）、近世が12点（1.24%）、中世が870点（90.16%）出土しており、近世では肥前系の碗１点、猪口１点、美濃窯の皿４点、香炉１点、丹波窯の鉢１点、かわらけ１点(５ｇ)、砥石２点、及び「寛永通寶」１点が出土している。

中世遺物で最も多く出土したのはかわらけで、615点（63.73%）を数え、39点（4.04%）が手づくね成形、576点（59.69%）がロクロ成形である。ロクロ成形のうち452点（46.84%）が所謂、戦国タイプ

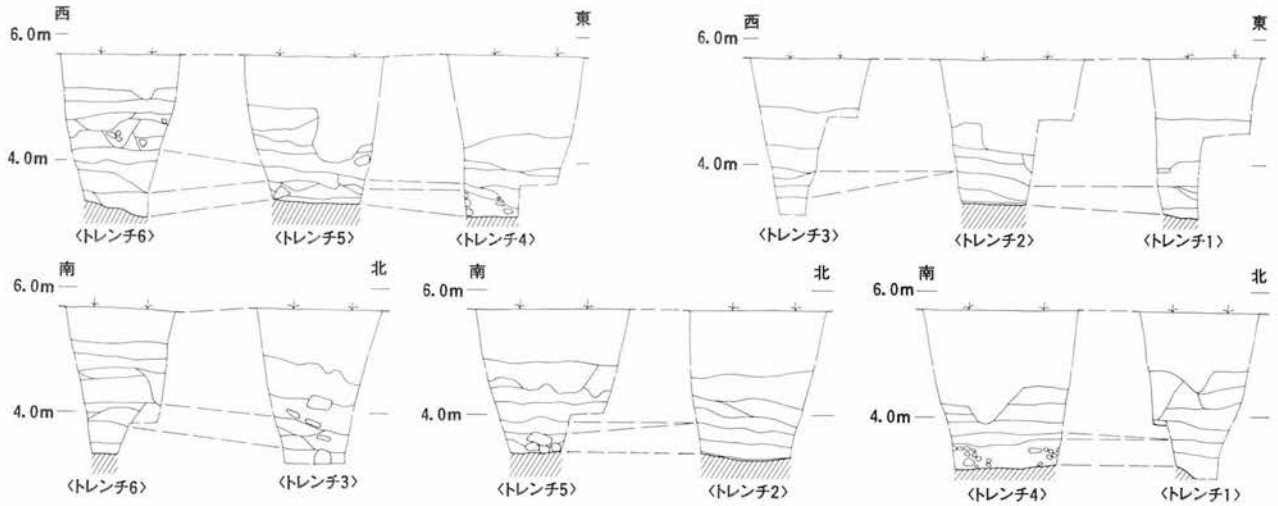


Fig. 16　土層概念図

全体構成（総数 965 点）

	貿易陶磁	国産陶磁	瓦質	かわらけ	土器	土製品	石製品	近世	近現代	貝・骨
点　数(点)	6	238	2	615	3	2	4	12	34	49
構成比(%)	0.63	24.66	0.21	63.73	0.31	0.21	0.41	1.24	3.52	5.08

かわらけ構成（総数 616 点）

		近世ﾀｲﾌﾟ	戦国ﾀｲﾌﾟ	ロクロ成形	手づくね成形
大皿	点数	1	9	90	35
	%	0.16	1.46	14.61	5.68
中小	点数		411	34	4
	%		66.73	5.52	0.65
極小	点数		32		
	%		5.19		

表　遺物計数表

であり、大皿９点（670ｇ）、中・小皿411点（6,140ｇ）、極小皿32点（720ｇ）を数える。他のロクロ成形かわらけでは大皿90点（945ｇ）、小皿34点（410ｇ）、手づくね成形かわらけでは大皿35点（550ｇ）、小皿４点（50ｇ）が出土している。

国産陶磁器は238点（24.66%）出土している。最も多いのは常滑窯の製品で215点（22.28%）を数え、瀬戸古窯13点（1.35%）、瀬戸・美濃大窯７点（0.73%）、渥美窯２点（0.21%）、備前窯１点（0.10%）が出土している。常滑窯では甕195点、片口鉢Ⅰ類６点、片口鉢Ⅱ類14点、瀬戸古窯では皿７点、碗１点、鉢２点、壷２点、水注１点、瀬戸・美濃大窯では鉢６点、皿１点で、渥美窯では甕２点、備前窯では鉢１点が出土している。

貿易陶磁器は６点（0.63%）出土し、青磁２点、白磁３点、青白磁１点である。その内訳は同安窯系青磁櫛描文碗１点、龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗１点、白磁高台付皿１点、白磁口兀皿２点、青白磁合子蓋１点である。

瓦質製品では香炉２点（0.21%）、土器質製品では火鉢２点（0.21%）、かわらけ以外の土器では伊勢系土鍋１点（0.10%）が出土している。また、土製品では鋳造に関わるフイゴの羽口２点（0.21%）、石製品は４点（0.41%）が出土しており、石臼１点、砥石２点、滑石製品１点がみられる。

自然遺物のうち貝類は12点（1.24%）出土しており、アカニシ、アワビ、ハマグリ、サルボウガイ、サザエがみられる。また、動物骨はヒトを含め37点（3.84%）が出土しており、ウシ、ウマ、イヌ、ネコ等の哺乳類の他、鯨類、魚類がみられ、鯨類の顎骨には解体痕を有するものもみられた。

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成12年度発掘調査報告
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	瀬田哲夫
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こめまちいせき 米町遺跡	かながわけん かまくらし おおまち にちょうめ 神奈川県 鎌倉市大町 二丁目 2308番1	204	№245			1999年 12月6日 ～ 12月17日	24㎡	個人専用住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
米町遺跡	中世都市遺跡	中世～近世	河川	中・近世陶磁器、かわらけ、石製品、銭	

写　真　図　版

▲1　調査地点（南西）から

▲2　魚町橋より逆川を望む（西から）

▲3　トレンチ1（北から）

▲4　トレンチ2（北から）

▲5　トレンチ3（北から）

▲6　トレンチ4（北から）

▲7　トレンチ5（北から）

▲8　トレンチ6（北から）

PL. 2

Fig. 5— 2

Fig. 11— 1

Fig. 13—36

Fig. 13—14

Fig. 13—27

Fig. 9— 1

Fig. 11—10

Fig. 9— 4

Fig. 5— 1

Fig. 11— 6

Fig. 11— 5

Fig. 15— 3

Fig. 5— 3

Fig. 13— 6

Fig. 13— 7

Fig. 13— 5

Fig. 13— 2

Fig. 13— 3

Fig. 13—16

Fig. 13—17

Fig. 13—29

Fig. 13—28

Fig. 11— 7

Fig. 11— 9

Fig. 7— 1

Fig. 15— 4

Fig. 11— 8

Fig. 13—32

Fig. 13— 9

Fig. 13—10

Fig. 13—20

Fig. 13—22

Fig. 13—21

Fig. 13—33

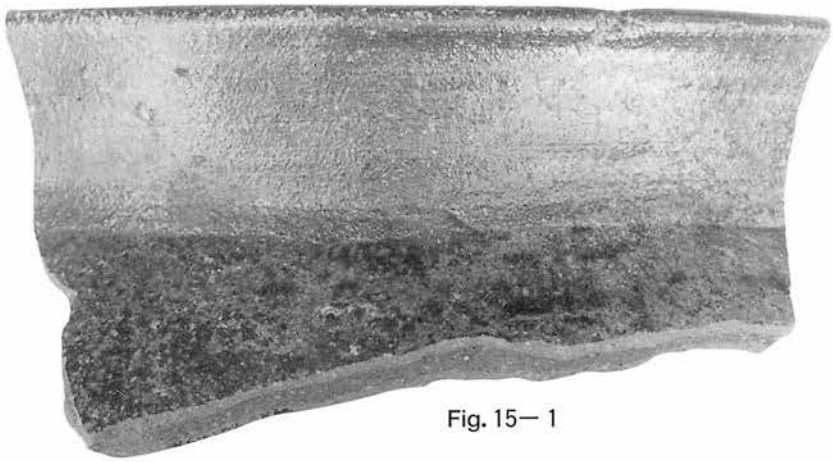


Fig. 15— 1

Fig. 13—26

材木座町屋遺跡（No. 261）

材木座六丁目760番１地点

例　　言

1．本報は鎌倉市材木座六丁目760番１に所在する材木座町屋遺跡の発掘調査報告である。

2．調査は個人専用住宅に係わる表層改良工事に先立って実施された。調査面積は56.31㎡である。

3．調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成11年年１月６日から２月15日まで行った。

4．本報の編集は大河内勉、執筆は大河内・伊丹まどか・押木弘己、写真撮影は遺構を押木弘己、遺物を大河内、図版作成・トレース・遺物実測は伊丹が担当した。

5．調査体制は以下の通り。

主任調査員　大河内勉

調　査　員　伊丹まどか・押木弘己・松田理枝

調査補助員　山口朋子・土谷晴美

作　業　員　星富蔵・河原龍雄・町田義一・柴崎栄輔・山崎一男・田口康雄・北島清一・渡辺久夫・沼上三代治・荻野勲・渡辺輝彦（鎌倉市シルバー人材センター）

6．本報作成に際して、松島義章（鎌倉市文化財専門委員）・藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）のご教示を賜った。

7．調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第１章　歴史的環境 ……（大河内　勉）……122
第２章　調査について ……（伊丹まどか）……124
第３章　検出遺構 ……（押木　弘己）……126
第４章　出土遺物 ……（伊丹まどか）……131
第５章　まとめ ……（大河内　勉）……138
付編　材木座町屋遺跡の花粉化石 ……（鈴木　茂）……149

挿　図　目　次

図１　調査地点周辺図 ……123
図２　調査区設定状況 ……125
図３　第１面全測図 ……126
図４　第２面全測図 ……127
図５　第３面全測図 ……128
図６　第４面全測図及び土層堆積図 ……129
図７　検出遺構 ……130
図８　表土・撹乱層出土遺物 ……131
図９　第１面遺構出土遺物 ……132
図10　第２面上包含層出土遺物 ……133
図11　第２面上出土遺物 ……134
図12　第２面遺構出土遺物 ……134
図13　第３面上包含層出土遺物 ……135
図14　第３面上出土遺物 ……135
図15　第３面遺構出土遺物 ……136
図16　第４面上包含層出土遺物 ……137
図17　第４面遺構出土遺物 ……137

図　版　目　次

図版１　第１面全景　１．東区（北から）　２．西区（北から） ……141
図版２　第２面全景　１．東区（北から）　２．西区（北から） ……142
図版３　第３面全景　１．東区（北から）　２．西区（北から） ……143
図版４　第４面全景　１．東区（北から）　２．西区（北から） ……144
図版５　検出遺構　１．第１面　遺構73（西から）　２．第２面　遺構10　側板検出状況
３．第２面　遺構10（西から）　４．第２面　遺構74・76（南から） ……145
図版６　出土遺物 ……146
図版７　出土遺物 ……147
図版８　出土遺物 ……148

第１章　歴史的環境（図１）

調査地点は、三方を丘陵で囲まれた鎌倉平野の南東端に位置し、材木座海岸より北東約100mほどの所に所在する。東側は少し離れて丘陵が迫っていて、北東側には弁ヶ谷と呼ばれる谷戸が広がる。調査地点はこの弁ヶ谷の開口部と海岸線の中間地点にあたる。また、弁ヶ谷から流れる豆腐川に近接している。調査地点の25mほど南西には、鎌倉から逗子の小坪方面に向かって海岸沿いに走る道路（小坪路）が存在し、調査地点はこの道路の一本裏側の路地に面している。

現在残る調査地点周辺の旧跡としては、南方約500mの海中に和賀江島が、南東約100mに光明寺が、北方約100mに補陀洛寺が、同じく北方約250mに九品寺が存在し、周辺には「材木座」をはじめ、「飯島」、「高御倉」、「蔵屋敷」の地名も知られる。

本地点の遺跡名「材木座町屋遺跡」とは、滑川東岸の沖積低地を含むかなり広い地域を指し、今次調査地点はその中で南東端に位置している。なお、調査地点周辺は現在、過密な住宅地となっていて、海抜は４～５ｍである。

中世期には、本地点を含む鎌倉の海浜地域は「前浜」、「由比ガ浜」などと呼ばれ、商人・職人等が多く集住していたと考えられている。特に本地点周辺は、鎌倉唯一の港湾である和賀江島に隣接した地域であり、また鎌倉街中への物資輸送の幹線となっていた小坪路から小町大路に続く道路沿いにあり、商人の行き交った繁華な地であったと思われる。『海道記』(1223年）は「東南角の一道は舟楫の津、商人のあきびとは百族満ちにぎはひ」と記す。

和賀江島は貞永元年（1232)、勧進聖人の往阿弥陀仏の発意により造られた築港で、北条泰時の尽力があった。鎌倉時代中～後期以降は、極楽寺が管理していたことが知られる。現在は、用材として使われた大量の石が海中に認められる。飯島は和賀江島の陸側の地域で、和賀江島と一体で機能する商業地区を形成し、関所も設けられていた。建長３年（1251）には、小町屋免許の地の一つに「和賀江」があげられている。

光明寺は浄土宗の大本山。開創の年代は不詳だが、もと佐助ヶ谷にあった蓮華寺が移転、改名したものと伝える。開基は北条経時、開山は然阿良忠。境内（地点１）と裏側の谷戸（地点２）で発掘調査が実施されており、地点１では13世紀中頃から15世紀前半頃の、礎石建物・地鎮遺構（多量の一括遺物共伴）・土丹積遺構などが、地点２では13世紀中頃から15世紀頃の、掘立柱建物址・溝・土壙などが検出されている。

弁ヶ谷は幾つもの支谷で形成される谷戸で、近世には鎌倉七谷の一つに挙げられている。中世期には新善光寺・崇寿寺・最宝寺・最福寺等の寺院や武家屋敷のほか、「高御倉」があった。新善光寺は鎌倉時代に盛んであった善光寺信仰に係わるものと考えられるが、創建・廃寺年代や宗旨ははっきりしない。本願は北条泰時。当寺に関係すると思われるやぐらの発掘調査が実施されていて（地点４)、コ字区画遺構からは火葬墓（蔵骨器・写経石を伴う）や宝篋印塔などが発見されている。このほか、弁ヶ谷内では数地点で発掘調査が行われている。崇寿寺は元亨元年（1321）北条高時の開創。臨済宗。開山は南山士雲。応永31（1424）までは存続していたことが知られる。高御倉は本谷戸の開口部付近の東側にあったらしい。名称からして、幕府あるいは北条氏に係わる高床式の倉庫と考えられる。

補陀洛寺は開基源頼朝、開山文覚上人と伝える。古義真言宗。中興は鶴岡八幡宮供僧の頼基。九品寺は開基新田義貞、開山風航順西（1341年没）と伝える。浄土宗。蔵屋敷に所在する。

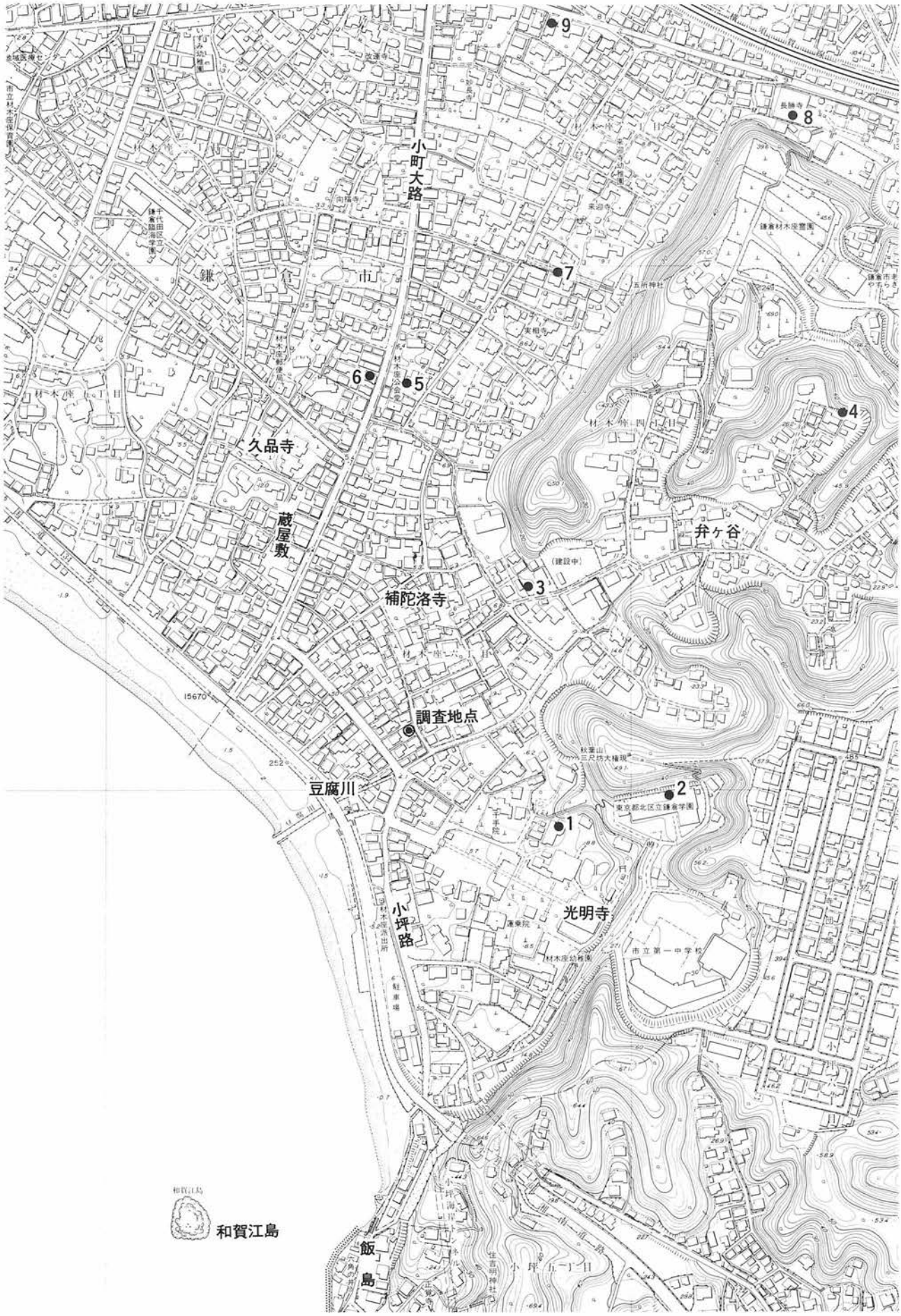


図1　調査地点周辺図（1/5,000）

材木座町屋遺跡では既に７～８個所で発掘調査が実施されているが、ここでは今次調査地点に比較的近い、地点５と６を概略紹介する。両者は小町大路を挟んで対峙する位置にある。地点５では15世紀前後の、方形竪穴建築址・方形土壙・土壙・溝などが、地点６では13世紀中葉～14世紀前半を主体として、竪穴建物・方形土壙・土壙・ピットなどが発見されている。

高柳光寿『鎌倉市史』総説編　1959年10月　吉川弘文館

貫達人他『鎌倉市史』社寺編　1959年10月　吉川弘文館

白井永二編『鎌倉事典』　1976年５月　東京堂出版

貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』　1980年12月　有隣堂

鈴木棠三・鈴木良一監修『神奈川県の地名』(「日本歴史地名大系」14)　1984年２月　平凡社

鎌倉市教育委員会編『としよりのはなし』　1971年12月

阿部正道「『鎌倉』の古道」『鎌倉国宝館論集』２　1958年６月

斉木秀雄『天照山蓮華院光明寺』　1986年３月　光明寺境内遺跡発掘調査団

斉木秀雄・河野真知郎他『光明寺裏遺跡』　1980年３月　北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団

原廣志他『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書』　1988年３月　新善光寺跡内やぐら発掘調査団

田代郁夫「材木座町屋遺跡－材木座四丁目260番１外－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』６　1990年３月　鎌倉市教育委員会

馬淵和雄「材木座町屋遺跡－材木座三丁目364番１外地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13　1997年３月　鎌倉市教育委員会

第２章　調査について

個人専用住宅新築工事に伴う建築申請を受け、鎌倉市教育委員会文化財課が行なった確認調査の結果、新築工事に先行して平成12年１月６日～２月10日（15日）まで埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。対象面積は56、31㎡である。調査に伴う排土を敷地内で処理しなければならなかったため、調査対象域を東西に二分し、人力による表土掘削及び残土の移動を行なった。現地表下80～90cmで中世遺物を含む粘性の低い暗褐色弱粘質土を確認したが、地業層として希薄なため、遺構の確認の出来た海抜2.８～3.0mまで掘り下げ、第１面とした。以下、手掘りにて掘り下げを行ない各遺構面毎に記録保存を行なった。途中第１面終了の時点で調査区内の湧水が激しい状況や安全を考慮し、調査区壁際から50cm強幅の犬走り状の段差を設けて掘り下げ、海抜2.0m前後で確認した青灰色砂層上面を最終遺構面（第４面）とし東区を１月24日に終了した。１月25日より調査の終了した東区を埋め戻す作業とともに西区の表土掘削を人力により行ない、１月27日に第１面を確認した。東区と同様に第１面終了の時点で犬走り状の段差を設け、手掘りによる掘削、各面毎に遺構の検出、記録保存を行なった。最終遺構面（第４面）終了後２月８日に自然科学分析を行ない、２月10日に器材・出土遺物を撤収し調査終了とした。日を置き、２月15日西区の埋め戻しを行ない、すべての作業を終了した。

調査地の調査前地表海抜高は約４ｍであった。調査地の北東に面する道路面よりも約50cm高く嵩上げされていた。土層の堆積状況は西区の西壁、東区と西区の北壁の断面で観察した（図６参照）。

最上層は、調査前に建築されていた家屋のための盛土である。約１ｍの堆積を確認した。第９・11層は遺物包含層である。上層の盛り土により削平を受け、遺構の確認はできなかった。第14層上面を第１面とした。第14層は地業層としては、やや希薄であったが、0.5～３cm大の土丹・砂質土をブロック状に含むなど、やや堆積にしまりがあったことや、土壙・ピットなどの遺構を確認したため第１面とした。

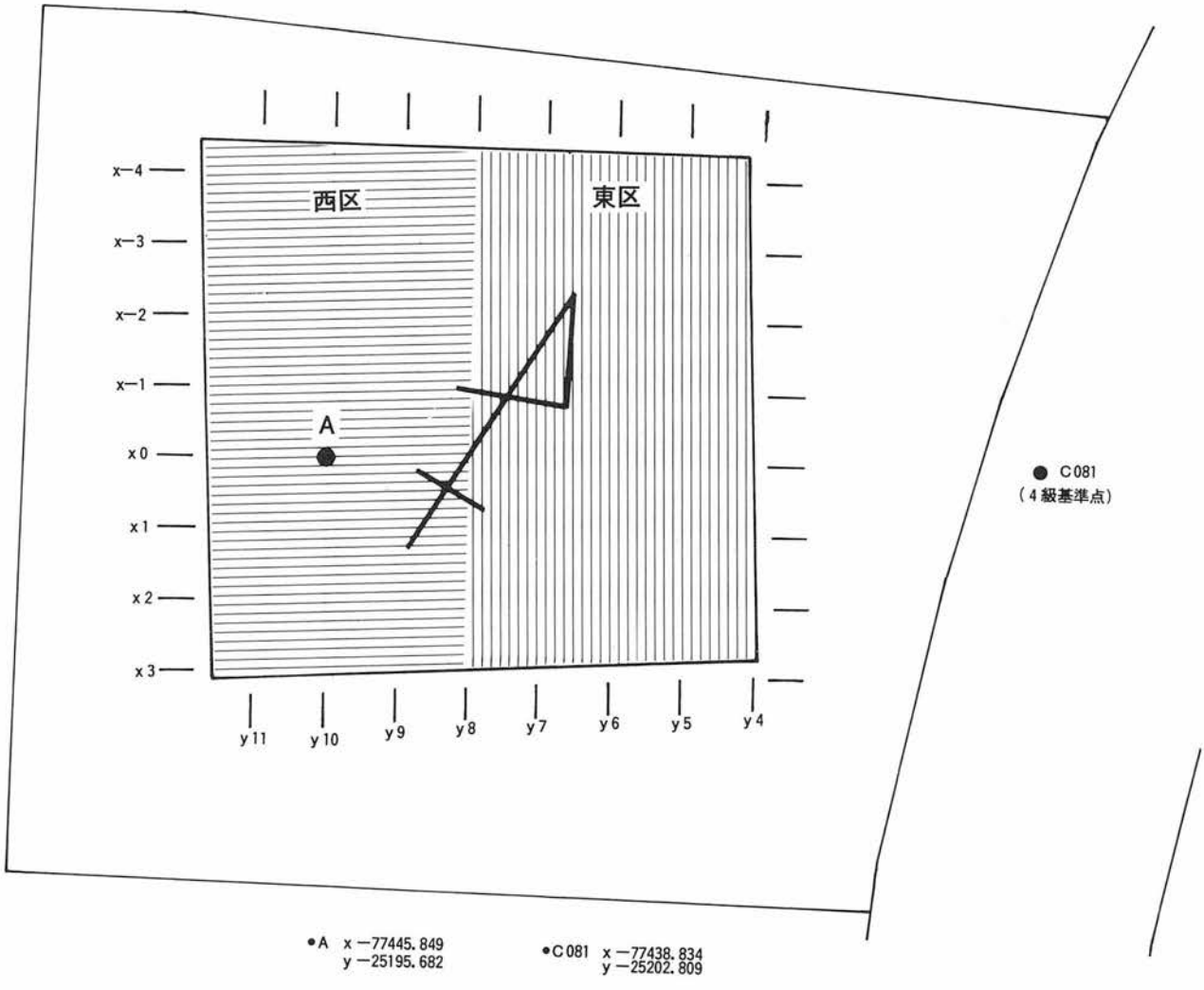


図２　調査区設定状況

第２面上包含層は土丹粒・炭化物を含む黒褐色弱粘質土の堆積で、厚さは約30ｃｍであった。第１面検出以下は湧水のため遺構の検出、確認が困難であったため、東区に比べ、西区の遺構確認レベルが、やや下がる結果となってしまった。第21層上面を第２面とした。第21層は土丹・砂質土をブロック状に含み、東区の北側では、僅かながらしっかりとした地業の痕跡が残っていた。第３面上包含層は粘性の強い茶褐色粘質土を多く含む黒褐色粘質土が約30～60cm堆積していた。第41層上面を第３面とした。第42層は茶褐色砂質土に、やや大きめの土丹が混入し、しまりのある堆積土層である。第４面上包含層は炭化物・土丹粒含む茶褐色粘質土が約20cmの厚さで堆積していた。第４面は地山面である。自然堆積と思われる粗い貝砂を含み硬く締まった青灰色砂が堆積していた。

調査に際して、調査区の形にそった基準軸を設定し、これを調査測量に用いた。今回、調査地が狭小なこともあって特にグリッドは設けず、敷地前の任意点を調査基準点（ｘ０・ｙ０）として実測作業にあたった。この基準軸は国土座標軸には準じていないため、鎌倉市４級基準点２点間（Ｃ083・Ｃ084）の関係からトラバース測量を行って国土軸との偏差を求めた。偏差はＮ－32°－Ｗを示す。また、同測量成果から基準点ほかに国土座標値を算出して求めた（図２）。

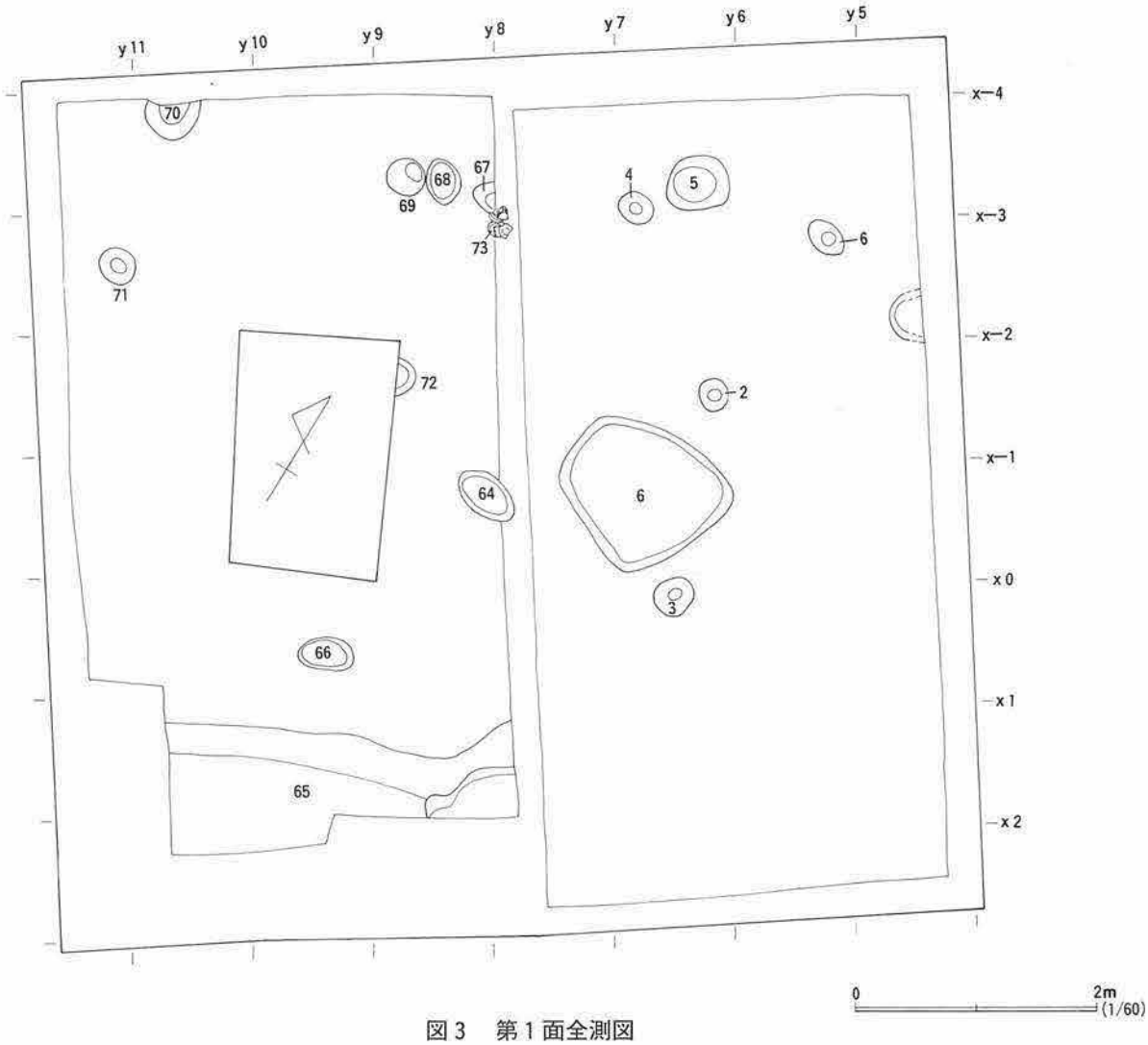


図３　第１面全測図

第３章　検出遺構

第１面の遺構（図３、図版１）

表土掘削の後、現地表下約50cmにかわらけなど中世期の遺物を含む暗褐色粘質土層を検出した。層厚は40～50cmほどあり、これを取り除いたところで黒褐色粘質土層を検出した。この上面で精査を行ったところピット・土坑状のプランが確認されたため、これを第１面とした。検出面の海抜は2.8～3.0m前後を測る。

第１面で検出した遺構は少なく、土坑１基・ピット13口・溝状の落ち込み１条・かわらけ集中１個所が全てである。遺構６は平面が台形状を呈する土坑で、長軸125cm・短軸110cm・深さ20cmの規模をもつ。図９－１に出土したかわらけの小皿１点を図示した。遺構65は東西に軸をもつ緩い落ち込みで、調査区の西・南へ続くために全体の規模や形状は不明である。先行して調査を行った東区では明瞭に確認できなかった。遺構73（図７、図版５－１）は第１面から第２面に掘り下げる際に検出した。かわらけが10個体、正位で出土したが、これに伴う掘り込みは確認されていない。

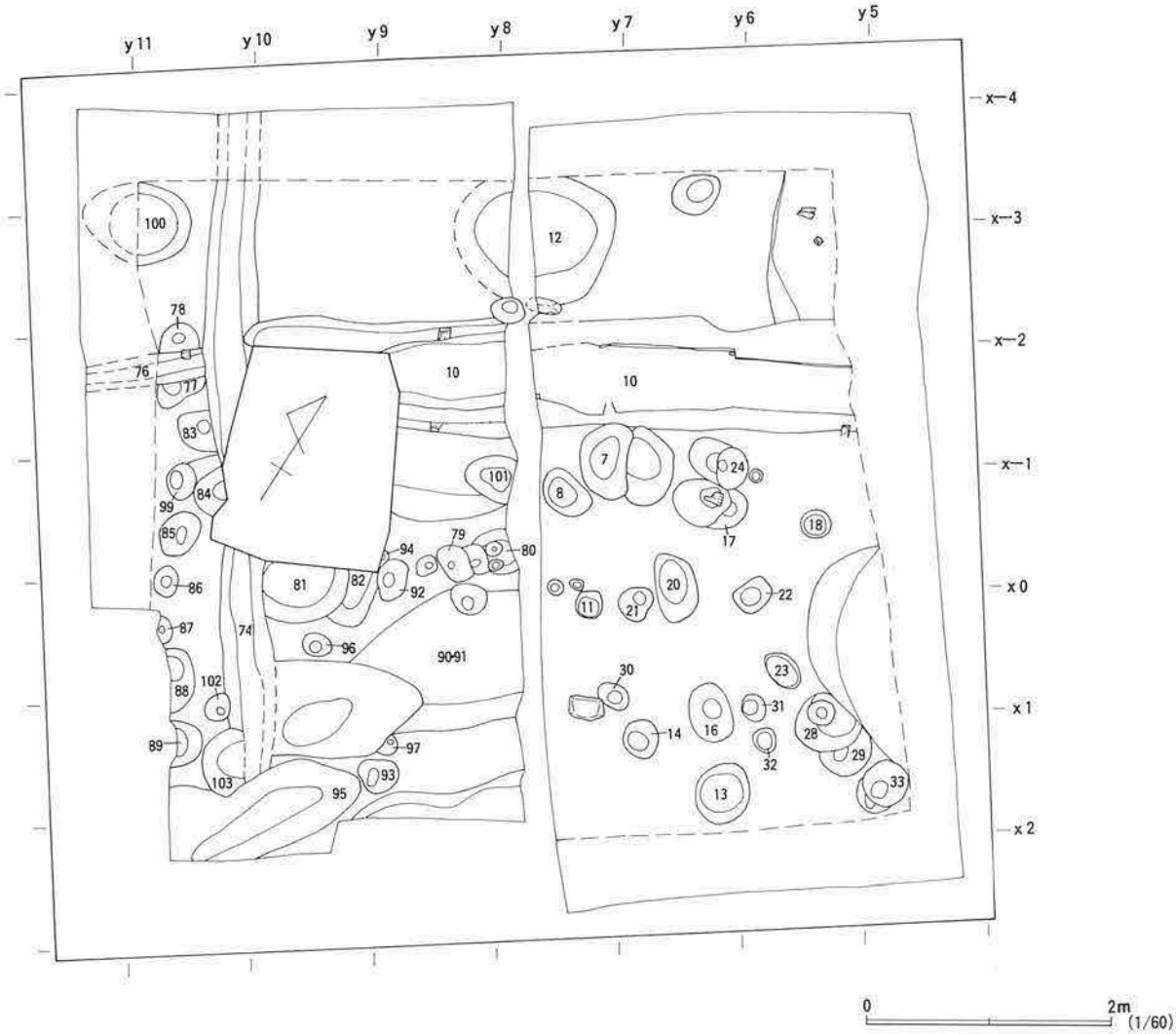


図４　第２面全測図

第２面の遺構（図４、図版２）

海抜2.5～2.7m、褐色粘質土層上面で遺構多数を検出し、第２面とした。本面では溝３条・土坑６基・ピット50口・溝状の落ち込み４条を確認した。遺構の配置としては東西に溝（遺構10）が走り、その南側に遺構が比較的密に展開している。ピットの並びには溝10の主軸方向に規制を受けたとみられる個所もあったが、建物跡を確認するには至らなかった。調査区の南西側には形状の不明瞭で浅い土坑、溝状の落ち込みが多数検出しているが、地形上の要因による堆積層の落ち込みかとも考えられる。

以下、主な遺構について説明する。

溝は東西軸の遺構10・76と南北軸の遺構74を掲げた（図７）。遺構10（図版５－２・３）は遺存状況が良くないものの杭と横板による木組み構造をもち、断面形は箱形を呈する。木組みは幅20cmほどの横板と４～５cm角の杭を止め材として用いている。杭の間隔は一定でない。上幅は木組み部分が40～50cm、掘り方が約90cmを測る。遺構74によって切られ、以西へは続かない。また、東は調査区外へ延びるため全長は不明であるが、4.8mまでの長さを確認した。深さ15～20cm、底面海抜は2.2～2.3mを測り、西方へ緩やかに下がる。主軸方位はN－59°－Eを指す。

遺構76は西区で検出した。断面形はU字形、上幅約25cmの小規模のものである。遺構74に切られ、また調査区西に続くため極めて部分的な検出となった。遺構10とほぼ同じ軸方向を指す。

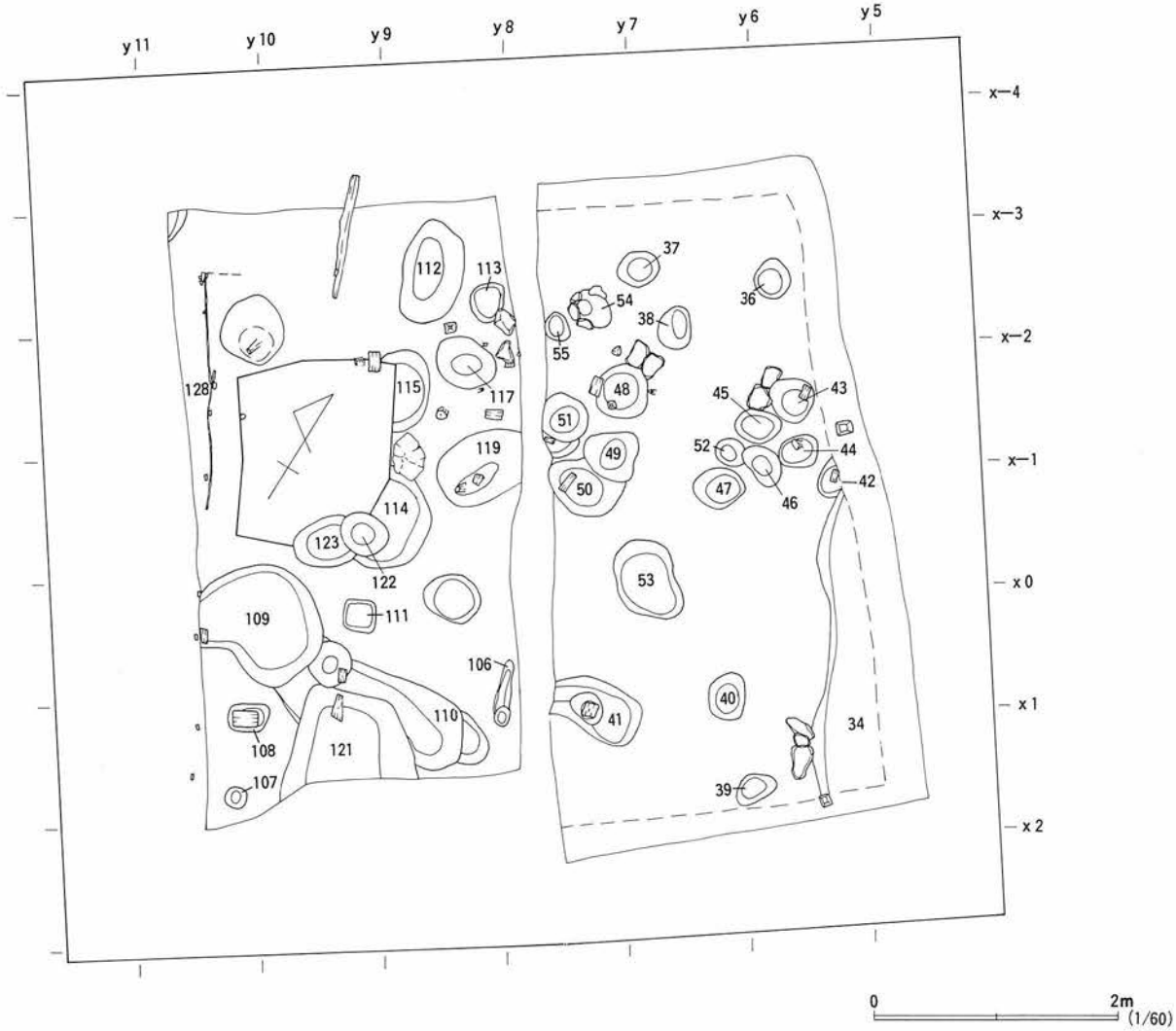
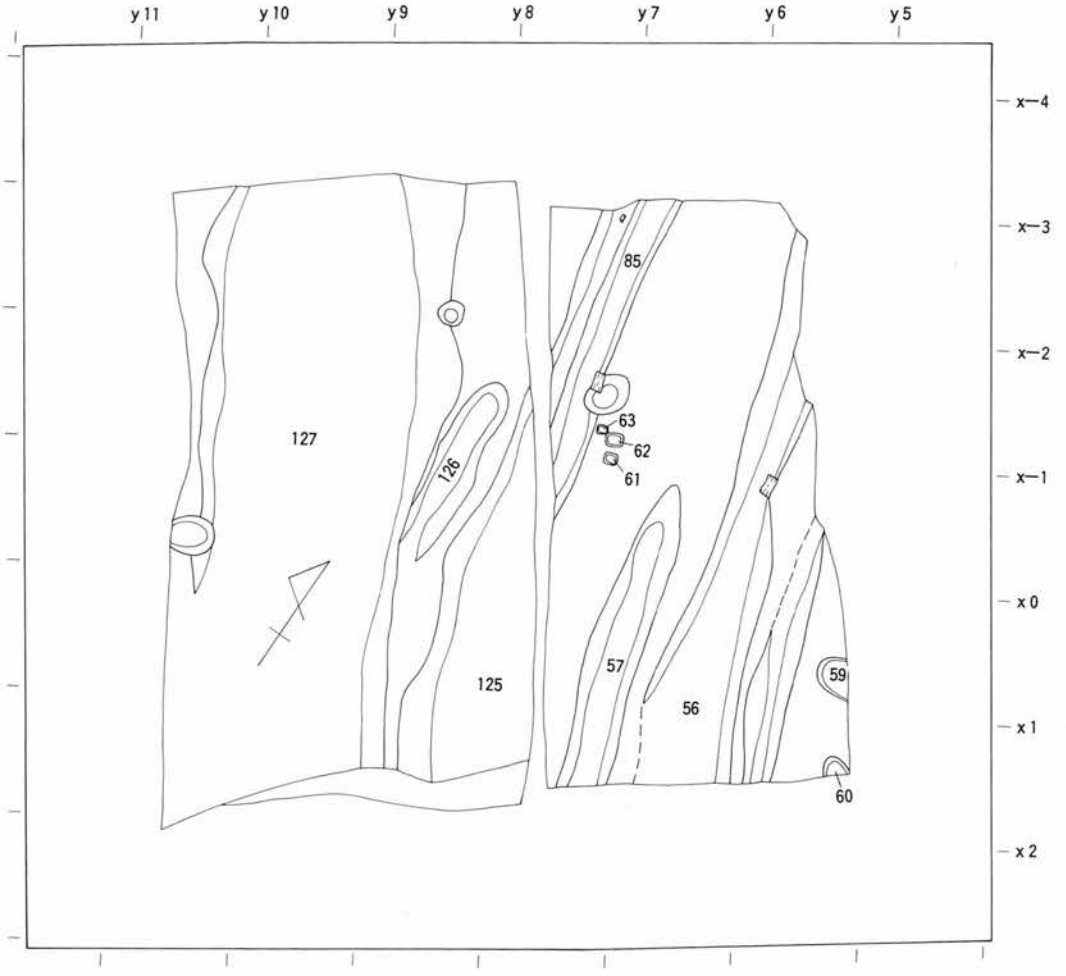


図５　第３面全測図

遺構74（図版５－４）も西区で検出した。東西溝の遺構10・76と重複し本址が新しい。U字形の断面形を呈し、上幅は約40cmを測る。南・北ともに調査区外に続き全長は不明。検出に及んだ限りでは4.6ｍまでの長さを確認した。深さ15ｃｍ、底面海抜は2.40～2.45ｍを測り、南側が若干低い。主軸方位はN－34°－Wを指す。これら溝跡については立地上から見て用排水の機能を有していたものかと考えられるが、既述の通りピットの並びの中には規則性が若干見て取れることから、地割等何らかの区画性をもっていた可能性もある。いずれにせよ、限られた検出範囲のため、遺構がどういった展開を示すものかは判然としない。

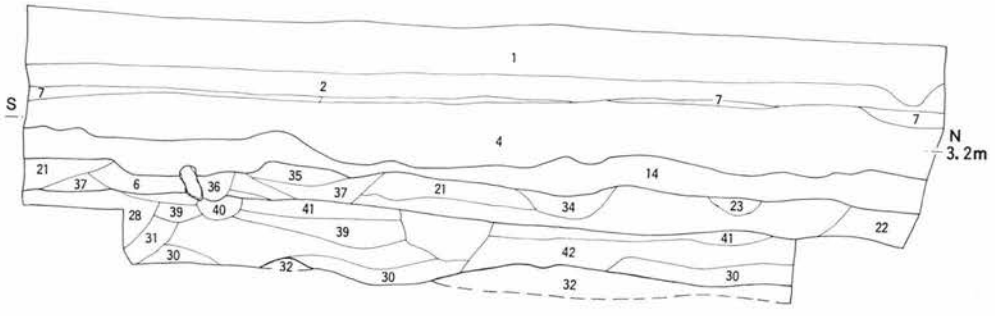
遺構12（図７）は調査区の北側で検出された、隅丸方形のプランを呈する土坑である。遺構の西半は調査時に排水用の溝を設けたため、上場を削失することとなった。また北側の一部が調査区外に続くこともあり全体の規模は不明。深さ約40cm、底面の海抜は約2.0ｍを測る。覆土は水平堆積を見せており、中層には腐食植物のような有機質の土が、その下に炭層の堆積がみられた。

ピットには底面に礎版の据えられているもの（遺構17）もみられ、建物跡の存在を示唆している。また幾つかには並びが見て取れるものの、狭い調査範囲でもあり、本報では復元建物の想定をしていない。

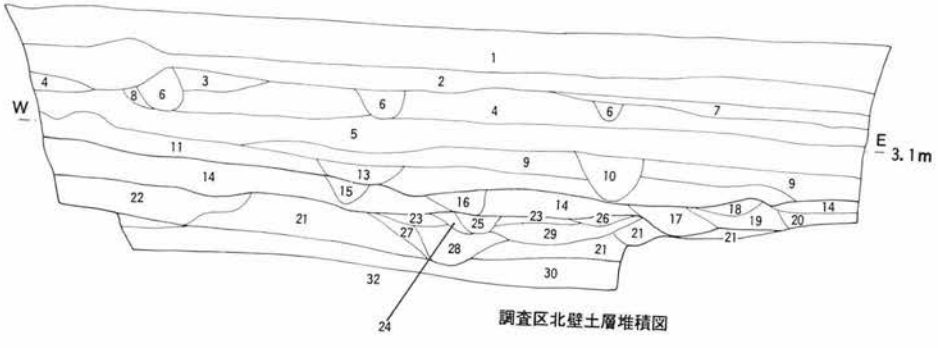


第4面全測図

0 2m (1/60)



調査区西壁土層堆積図



調査区北壁土層堆積図

1 現代埋土
2 撹乱
3 暗褐色弱粘質土
4 暗褐色弱粘質土
5 暗褐色弱粘質土
6 土丹層
7 土丹層
8 茶褐色砂質土
9 暗褐色弱粘質土
10 茶褐色弱粘質土
11 暗褐色弱粘質土
12 茶褐色弱粘質土
13 暗褐色砂質土
14 黒褐色弱粘質土
15 暗褐色砂質土
16 暗褐色砂質土
17 黒褐色弱粘質土
18 青灰色砂
19 黒褐色弱粘質土
20 黒褐色弱粘質土
21 茶褐色砂質土
22 茶褐色砂質土
23 灰褐色砂質土
24 黒色粘質土
25 暗褐色砂質土
26 灰褐色砂
27 灰褐色砂質土
28 褐色砂質土
29 褐色砂質土
30 土丹層
31 暗褐色砂質土
32 青灰色砂
33 黒褐色弱粘質土
34 黒褐色弱粘質土
35 暗褐色砂質土
36 黒褐色弱粘質土
37 暗褐色砂質土
38 暗褐色砂質土
39 黒褐色弱粘質土
40 暗褐色砂質土
41 褐色粘土
42 茶褐色粘質土

図6　第4面全測図及び土層堆積図

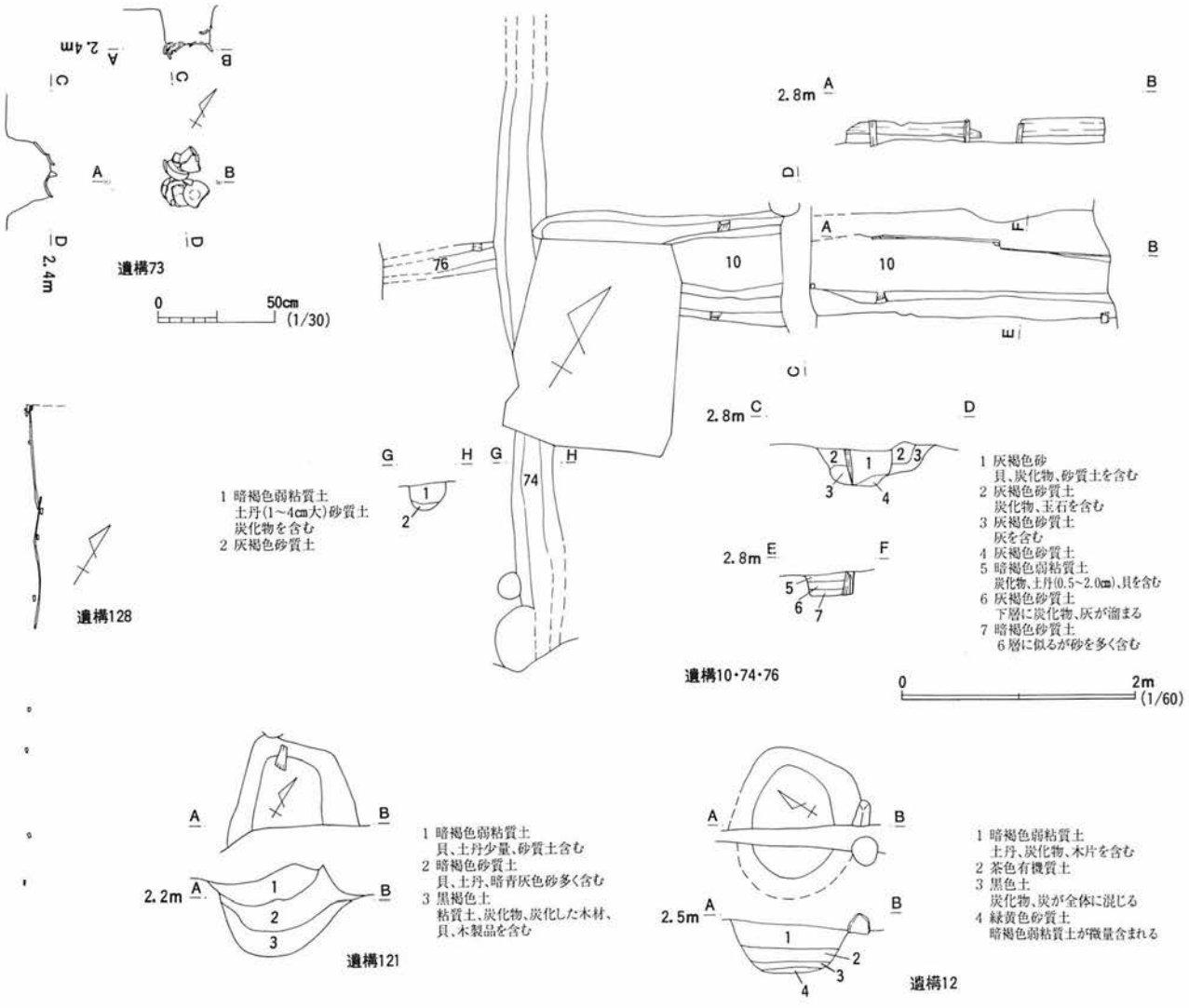


図７　検出遺構

第３面の遺構（図５、図版３）

第３面は海抜2.2～2.3m、褐色砂質土上で検出された。本面では土坑９基、ピット29口、溝状遺構１条、木組み遺構２個所を確認した。第２面に比べて遺構数は減少し、調査区の北東よりにピットがやや目立つ程度である。

ピットの幾つかには礎板が据えられたものもあったが、明瞭な並びは確認できなかった。

土坑は調査区の南東側に多くみられたが、確認面から浅く、立ち上がりが不明瞭なものが目立った。地形的要因による堆積の違いである可能性も考えられる。

遺構121（図７）は本面を確認面とするが、土層断面の観察により第２面から掘り込まれ、少なくとも70cmの深さがあることが確認された。南側が調査区壁に掛かるため、全体の規模・形状は不明。プランは明瞭なコーナーを持ち、長方形、もしくは長台形を呈するものと思われる。暗褐色・黒褐色の砂質土、および粘質土を覆土とし、下層には炭化物がややまとまって混入していた。

木組み遺構は２個所で検出した。いずれも部分的な検出で、これに伴う掘り込みは確認されなかった。木組みは２例とも横板と抑えとなる杭材からなる。遺構128（図７）は主軸方向が上面で検出した遺構74と一致するが、若干側壁から外れるので別遺構として扱った。南北に軸をもち、材は殆ど遺存していなかったものの、北端部分から東へ折れる。

第４面の遺構（図６、図版４）

海抜2.0m前後で検出された。基盤となる青灰色砂層は自然堆積層で、遺構の検出状況からも生活面とは見做しがたい。本面上には人頭大の泥岩塊が部分的にまとまって堆積していることから、本調査地の土地利用が始まるのは第３面の時期になってからであろうと考えられる。

第４面ではピット８口、溝状遺構６条が検出された。

ピットはおそらく、上面で明瞭に確認しえなかったものであろう。杭穴と思しき方形の小穴も幾つか認められた。

溝状遺構は全て南北方向に軸をもち、底面は南へ向け僅かに下がる。いずれも確認面から浅く、断面形は緩やかな立ち上がりを見せる。形状、及び覆土の堆積状況からみて、自然流路である可能性が高い。主軸方位は遺構127がＮ－29°－Ｗ、その他は概ねＮ－14°－Ｗを指す。

第４章　出土遺物

表土、撹乱層出土遺物（図８）

１～４はロクロ成形のかわらけ。底部回転糸切り、内底ナデあり。５は瀬戸。天目茶碗。後期Ⅰ。６は瀬戸。平椀。後期。７は瓦。８は土錘。９は砥石。産地不明、四面使用している。

第１面遺構出土遺物（図９）

１は遺構６出土。ロクロ成形のかわらけ、内外口唇部に油煤痕残る。２～11は遺構73出土。ロクロ成形のかわらけ。ほぼ同一の器形が重なりあって、一括して出土した。10は口唇部を一ヶ所打ち欠いている。

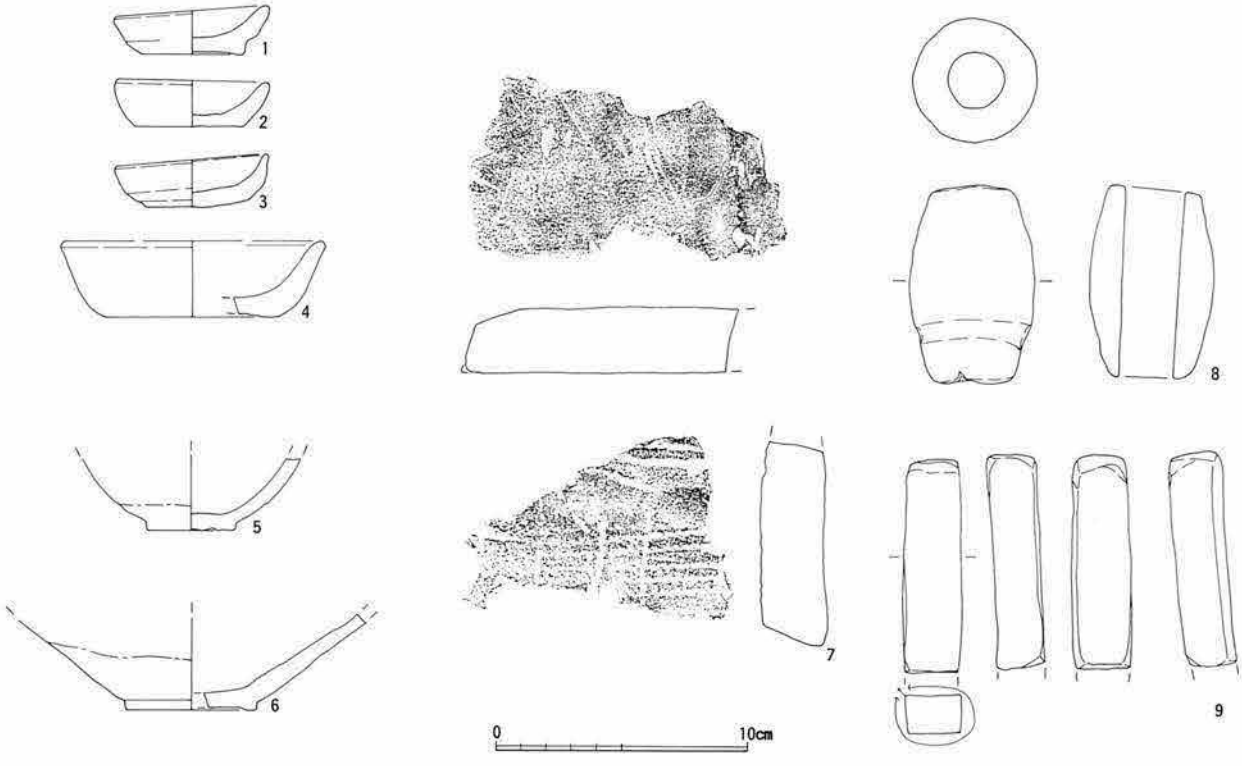


図８　表土、撹乱層出土遺物

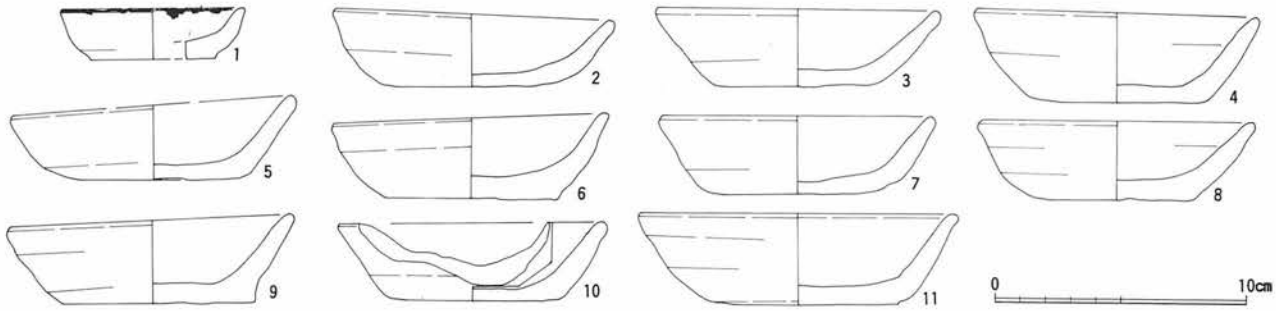


図９　第１面遺構出土遺物

第２面上包含層出土遺物（図10）

第１面上出土遺物と、第１面調査終了後第２面検出までに出土した遺物である。１は第１面上出土遺物。その他は第２面上包含層出土遺物である。

１～20はロクロ成形のかわらけ。３は底部に直径1.0cmの穿孔があけられ、側面内外に火だすき痕が残る。５は内外口唇部に僅かに煤痕が残る。６は側面内外に強く油煤痕が残り、側面二ヶ所を打ち欠いている。その内一ヶ所には断面にも煤痕が付着していた。７は側面一ヶ所を打ち欠いている。８は底部に直径0.4～0.6cmの穿孔が残る。焼成後にあけられている。10・11は器形の歪みが激しく、外側面に水ひきの稜が強く残る。20は底部しか遺存していなかったが、底径12cmを測り大形の特注品のようである。21は瀬戸・折縁小皿。後期Ⅰ～Ⅱ。22は瀬戸・折縁小皿。後期Ⅲ。23は瀬戸・縁釉小皿。後期Ⅱ。24は瀬戸・縁釉小皿。後期Ⅲ。25は女瓦。凹部布目痕が顕著に残る。凸部模骨痕あり。胎土褐色を呈し小石粒の混じる粗い胎土。26は常滑窯捏ね鉢。27は鍔釜。口縁部内傾し端部のみ肥厚する。遺存する鍔部分に２穴と１穴の穿孔が約12cmの間隔を空けてあいていた。28は瓦器質手焙り。２本の沈線の間に菊花のスタンプが押印される。29は鉄製品釘。30～34は石製品砥石。30は鳴滝産系産仕上げ砥。表面のみ使用痕が残る。31は鳴滝産仕上げ砥。片面のみ使用痕が残る。小口、側面両面に産地での出荷時の加工痕が残る。32は産地不明の荒砥。使用痕は一面のみ遺存するが、原形を留めているかどうかは不明。33は滑石製の砥石である。汐見氏のご教示によると蛇文岩系の鉱脈の辺りで産出する石ということで、北関東の栃木辺りが産地ではないかとのこと。一面のみ使用痕が残り、側面加工痕が残る。34は上野産中砥。四面に使用痕が残る。35は石製品硯である。石材は高島産の硯に酷似しているが、通常長方形を呈する高島産の硯と異なり、平面台形を呈しており、産地は不明。海・陸の一部分のみ遺存。36は石臼。

第２面上出土遺物（図11）

１～７はロクロ成形のかわらけ。１～４は口唇部に油煤痕が残り、灯明皿として使用したものと思われる。８～12は瀬戸窯製品。８は縁釉小皿。後期Ⅰ。９は卸皿。10は尊式華瓶。11は天目茶碗。12は平椀。13は瓦器質香炉。２条の沈線の間に16弁の菊花の押印あり。14は土錘。

第２面遺構出土遺物（図12）

１～10は遺構10出土。１～３はロクロ成形のかわらけ。１は口唇部内外に僅かに油煤痕残る。４はかわらけ底部片。穿孔が空けられていた痕跡が残る。内底見込み部分が火熱を受けたためか、剥離している。５は瀬戸・卸皿。中期Ⅰ。６は瀬戸・華瓶。中期Ⅰ～Ⅱ。７は女瓦。凹面ハガレ砂付着。凹面模骨痕が残る。側縁ヘラ削り。８は瓦器質手焙り。２本の沈線の間に唐草文のスタンプが押印される。表面黒色研磨される。９は常滑窯甕断面。10は鉄製品釘。11～13は遺構７出土。11はロクロ成形のかわらけ。底部回転糸切り、口唇部内外に僅かに油煤痕が残る。12は吉備系の土師器皿か。胎土灰白色で硬質、高

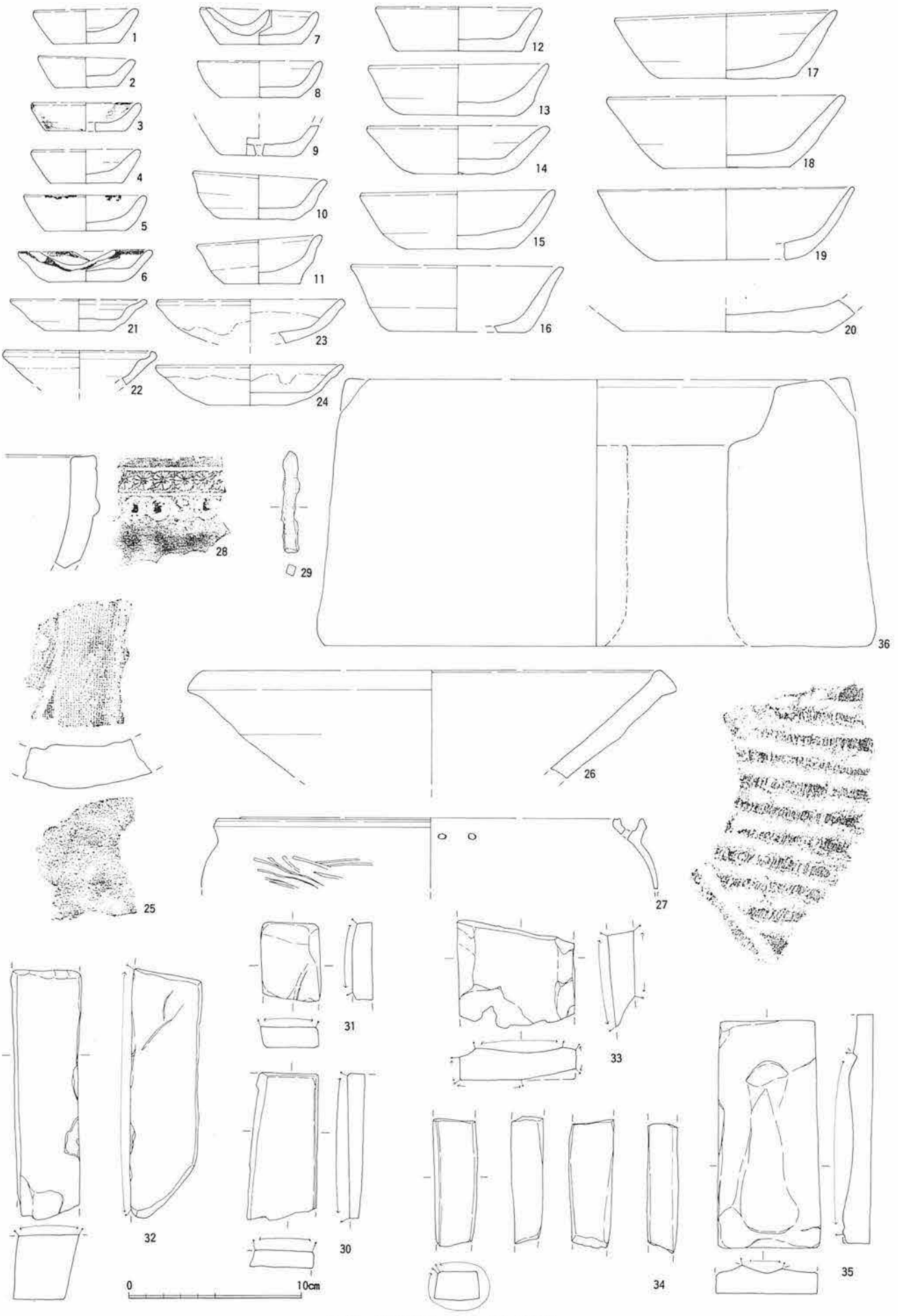


図10　第２面上包含層出土遺物

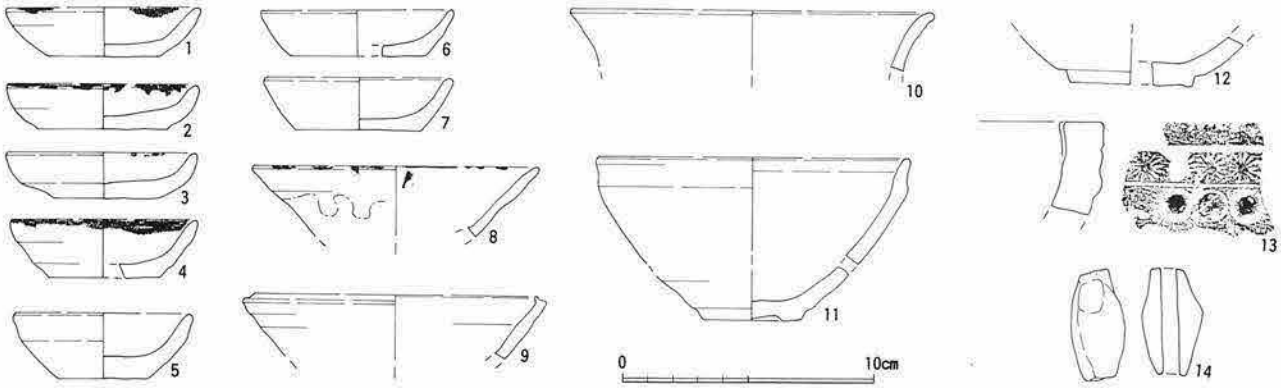


図11　第２面上出土遺物

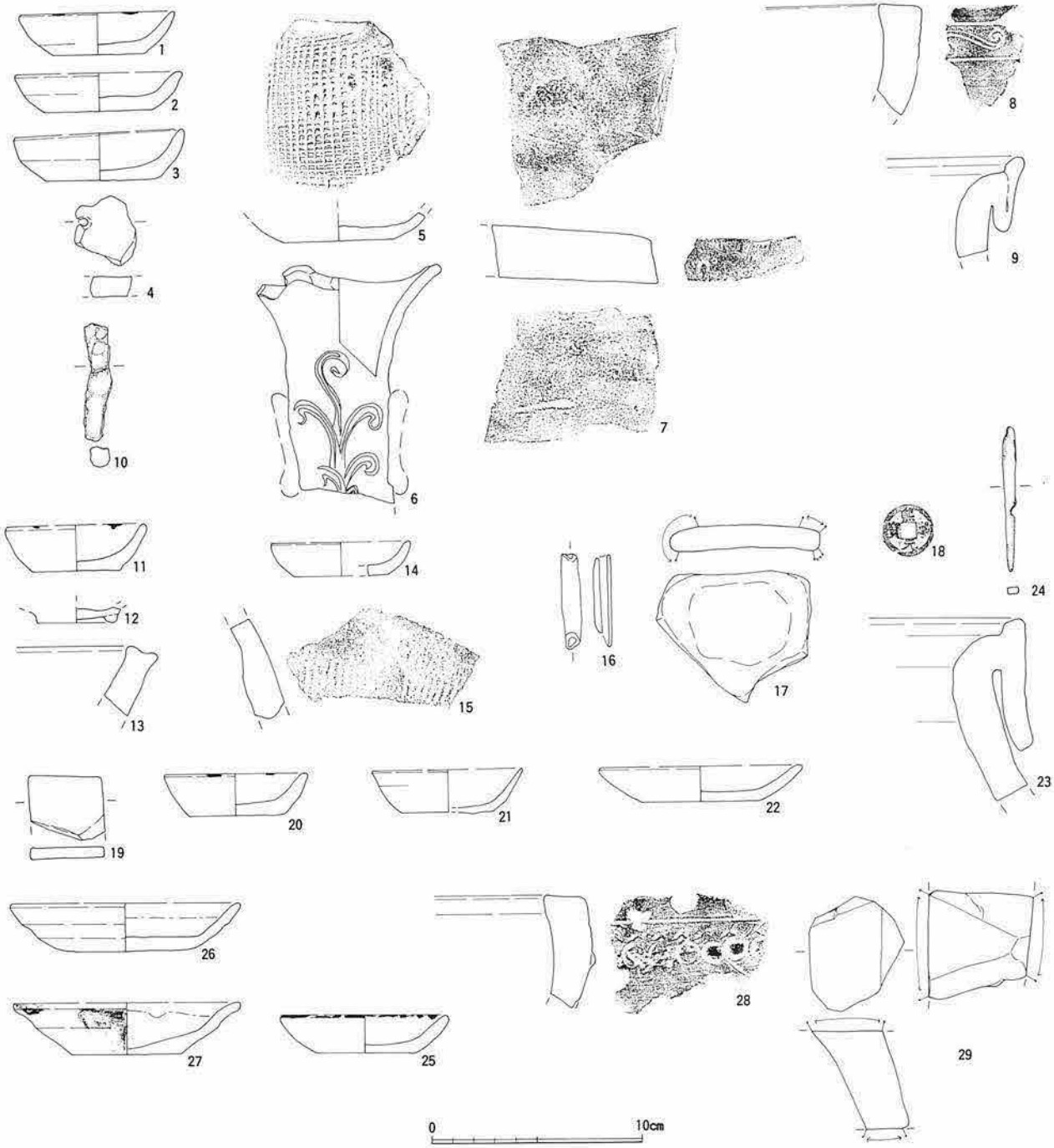


図12　第２面遺構出土遺物

台部は粘土貼り付けで整形されている。13は常滑窯捏ね鉢断面。粘性が低く白色粒の混じる粗い胎土。14・15は遺構20出土。14はロクロ成形のかわらけ。15は常滑窯甕断面・拓影。16は遺構30出土、土錘。17・18は遺構25出土。17は常滑窯甕の転用品。幅広の面の両端が磨耗している。18は銭。「熙寧元宝」。19は遺構77出土。砥石。側面、小口に切り出し痕が遺存していたが、表面の使用痕は石材が剥離したためか不明であった。20は遺構84出土。ロクロ成形のかわらけ、口唇部内外に僅かに油煤痕残る。21は遺構88出土。瀬戸・入れ子。胎土精良で粘性低い。前期Ⅲ～中期Ⅱ。22は遺構99出土。ロクロ成形のかわらけ。器壁は外反して立ち上がり、胎土精良で焼き締まっている。23は遺構92出土。常滑窯捏ね鉢断面。24は遺構74出土。鉄製品釘。25は遺構91出土。ロクロ成形のかわらけ。26～29は遺構90・91出土。26は瀬戸・縁釉小皿。後期Ⅱ。底部に粘土塊が残る。27は瀬戸・縁釉小皿。後期Ⅲ。側面内外に煤痕が残る。28は瓦器質、表面研磨の手焙り。外側面上方に沈線と連珠貼り付け文の間に菱形文様のスタンプが押印される。29は砥石。九州大村産の荒砥である。両面使用している（産地でも15世紀からの傾向しか追えない）。

第３面上包含層出土遺物（図13）

１は白磁口兀皿。２は青磁蓮弁文碗。３は魚住窯捏ね鉢。４は備前窯摺り鉢断面。条痕の単位は７本。５は常滑窯甕の口縁部片断面。６は瀬戸・折縁深皿。７は砥石。鳴滝産仕上げ砥。両面に使用痕が残る。

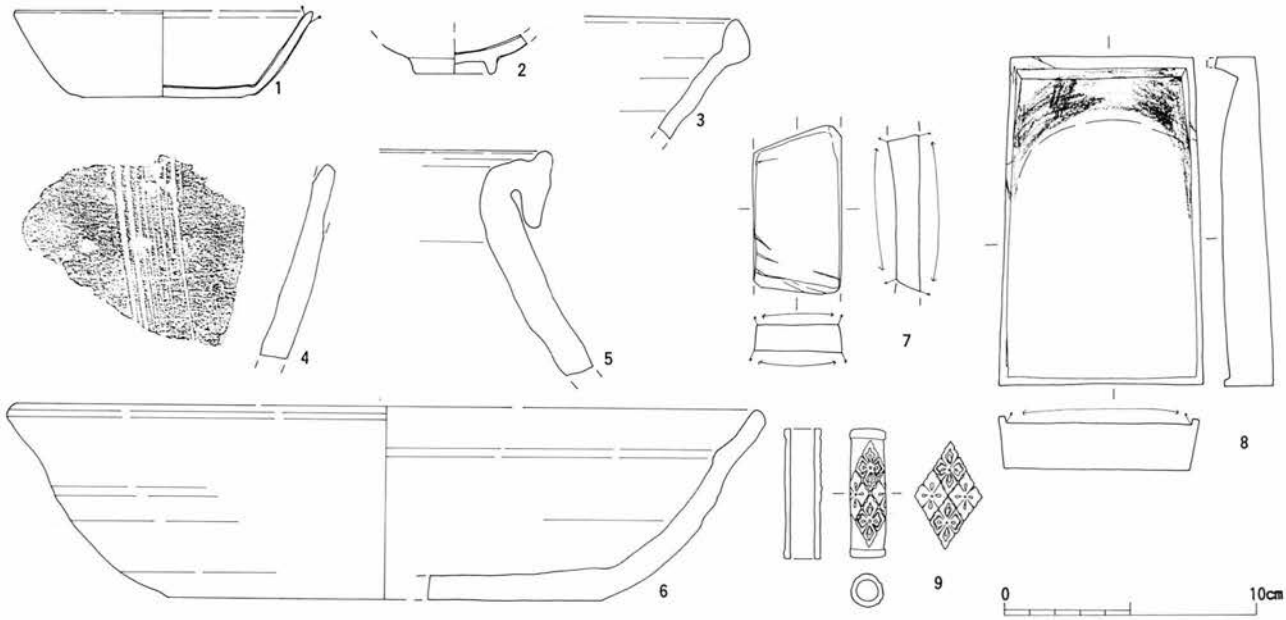


図13　第３面上包含層出土遺物

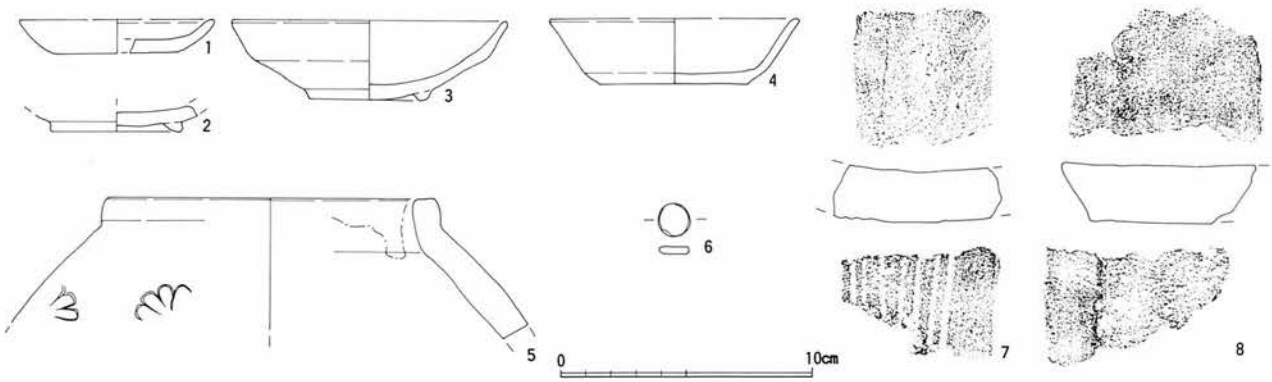


図14　第３面上出土遺物

両側面に出荷時の加工痕が残る。8は硯。赤間石。料紙彫の硯である。海の部分に墨痕が残る。9は骨製品。軸か。花菱文が彫られている。

第3面上出土遺物（図14）

1はロクロ成形のかわらけ。2・3は吉備系土師器皿か。胎土精良で硬質。高台部粘土貼り付けによる整形。4は白磁口兀皿。5は瀬戸・広口壺。壺肩部に菊花の押印あり。中期Ⅰ。6は碁石。7は女瓦。側縁部僅かに残る。凹部ハガレ砂付着。凸部縄目痕が残る。8は女瓦。凸・凹面ハガレ砂付着。胎土、小石粒貝粒子の混じる粗い土。側面ヘラ削りによる整形痕が残る。

第3面遺構出土遺物（図15）

1は遺構34出土。瀬戸、瓶子。前期Ⅲ～中期Ⅱ。胎土灰白色を呈する。2は遺構38出土。ロクロ成形のかわらけ。胎土明褐色を呈し小石粒が混じる。3は遺構45出土。吉備系土師器皿か。胎土灰白色を呈し硬質で精良。高台部粘土貼り付けにより整形。5は遺構119出土。ロクロ成形のかわらけ。胎土は粗く小石粒・雲母が混じる。6は遺構120出土。ロクロ成形のかわらけ。胎土白色針状物質を多く含み、赤褐色を呈する。7は遺構108出土。吉備系土師器皿か。胎土灰白色を呈し硬質。4・8・9は遺構115出土。4は褐釉壺。高台部粘土貼り付けによる整形のため高台部の幅は一定しない。8はかわらけ底部片転用品。円盤状製品。9はてづくね成形の白かわらけ。薄手で均質な胎土をもつ。10～14は遺構117出土。10はロクロ成形のかわらけ。11～13は鉄製品釘。14は山茶碗窯捏ね鉢。胎土白色粒が多く混じり、粘性低い。15～17は遺構121出土。15はかわらけ質土器。口唇部内側をヘラで削りとっている。16は女瓦。凹面

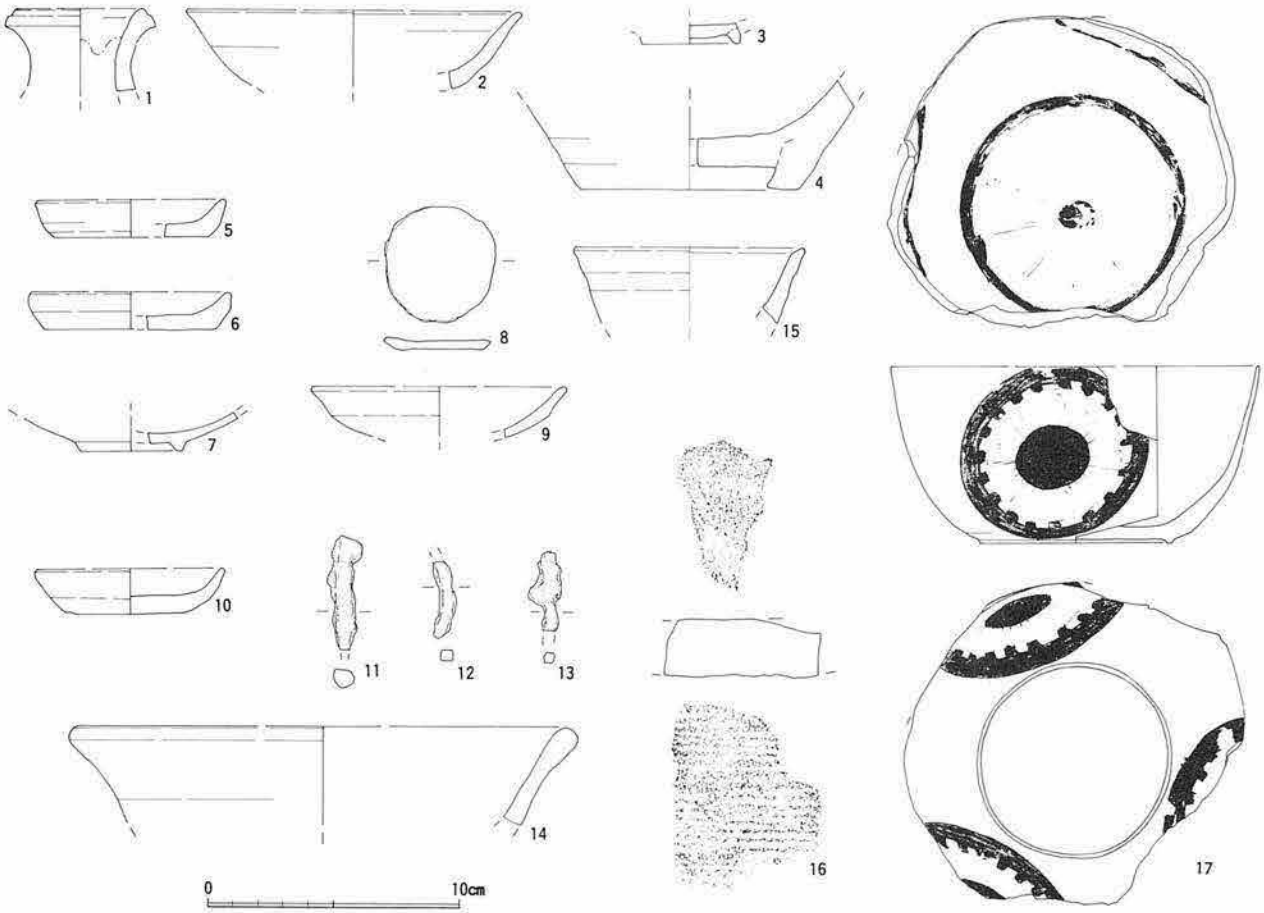


図15　第3面遺構出土遺物

ハガレ砂付着、凸面縄目痕が残る。胎土灰白色を呈し小石粒の混じる粗い土。17は漆器椀。内外面黒色系漆を髹漆し赤色系漆を用いて手描きで文様を施文している。内面見込みに大きく御所車が描かれ、内、外側面3ヵ所にも御所車の施文が配されている。輪高台、高台形断面四角形を呈する。

第4面上包含層出土遺物（図16）

1は青磁蓮弁文碗。2は吉備系土師器皿か。胎土精良で硬質。高台部粘土貼り付けによる整形。3～13はロクロ成形のかわらけ。7は外面口唇部と内側面に煤痕が付着していた。9は火熱を受けたためか、全体的に器壁が剥離している。口唇部内外側面に煤痕付着。10・11は器壁がほぼ直立して立ち上がる。10は胎土赤褐色を呈し、器形の歪みが著しい。11は胎土に小石粒が混じる。13は内底部分のみ器壁が剥離していた。14は瀬戸・折縁深皿。中期。15は滑石製鍋。16はかわらけの底部を転用して円盤状に加工している。17は土丹を整形して円盤状に加工したものである。18は土錘。

第4面遺構出土遺物（図17）

すべて遺構127出土。1～3はロクロ成形のかわらけ。2は内外面全体に油煤痕が残り底部にも部分的にではあるが油煤痕が残る。4は白磁口兀皿。5は青磁蓮弁文碗。6は舶載の褐釉壷。外面肩部に1条の沈線がめぐる。灰白色を呈し粘性が強く精良。7は山茶碗窯捏ね鉢。

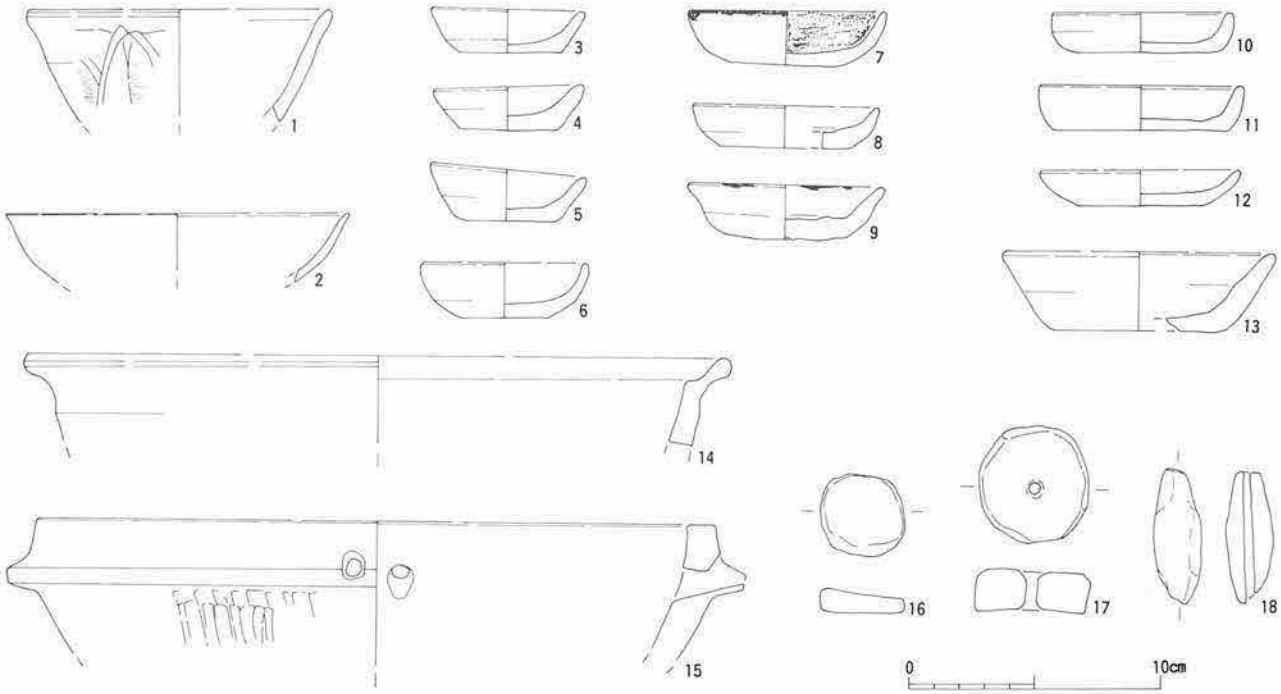


図16　第4面上包含層出土遺物

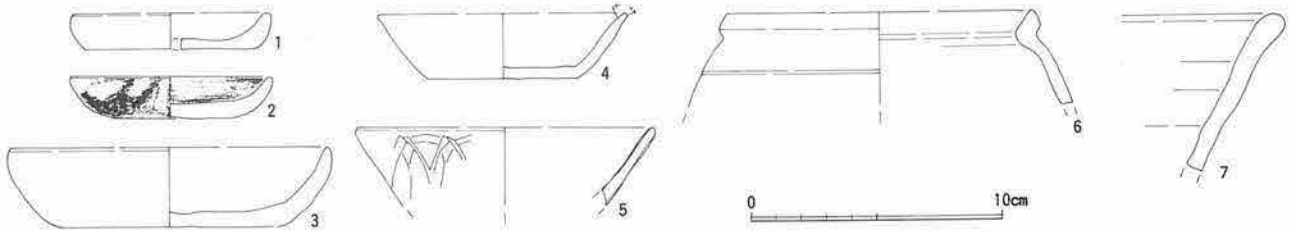


図17　第4面遺構出土遺物

第5章　まとめ

今次調査地点付近では今までに発掘調査は実施されておらず、小坪路周辺域での考古学的に貴重な成果が得られた。調査では海抜約2.0mから3.0mまでの間で4枚の遺構面が検出され（現地表は約4.0m）、生活空間としては鎌倉ではかなり低地に立地する遺跡である。

調査では、溝・木組み遺構・土壙・ピットなどの遺構のほか、各種の遺物が発見された。遺構は第2面と第3面でまとまって検出されたものの、第1面と第4面は密度が低い状況であった。特に第4面は地山面であるが、生活面として使われていたものかはっきりしない。

遺跡の営まれた年代は、遺物の層位的な出土状況に混乱が見られるようであり、各面ごとの実年代提示は難しい。全体的には14世紀～15世紀前半頃に比定され、13世紀代がみられなかったことと15世紀前半頃まで衰えずに存続していたことは、予想外の知見であり、興味深い事象である。

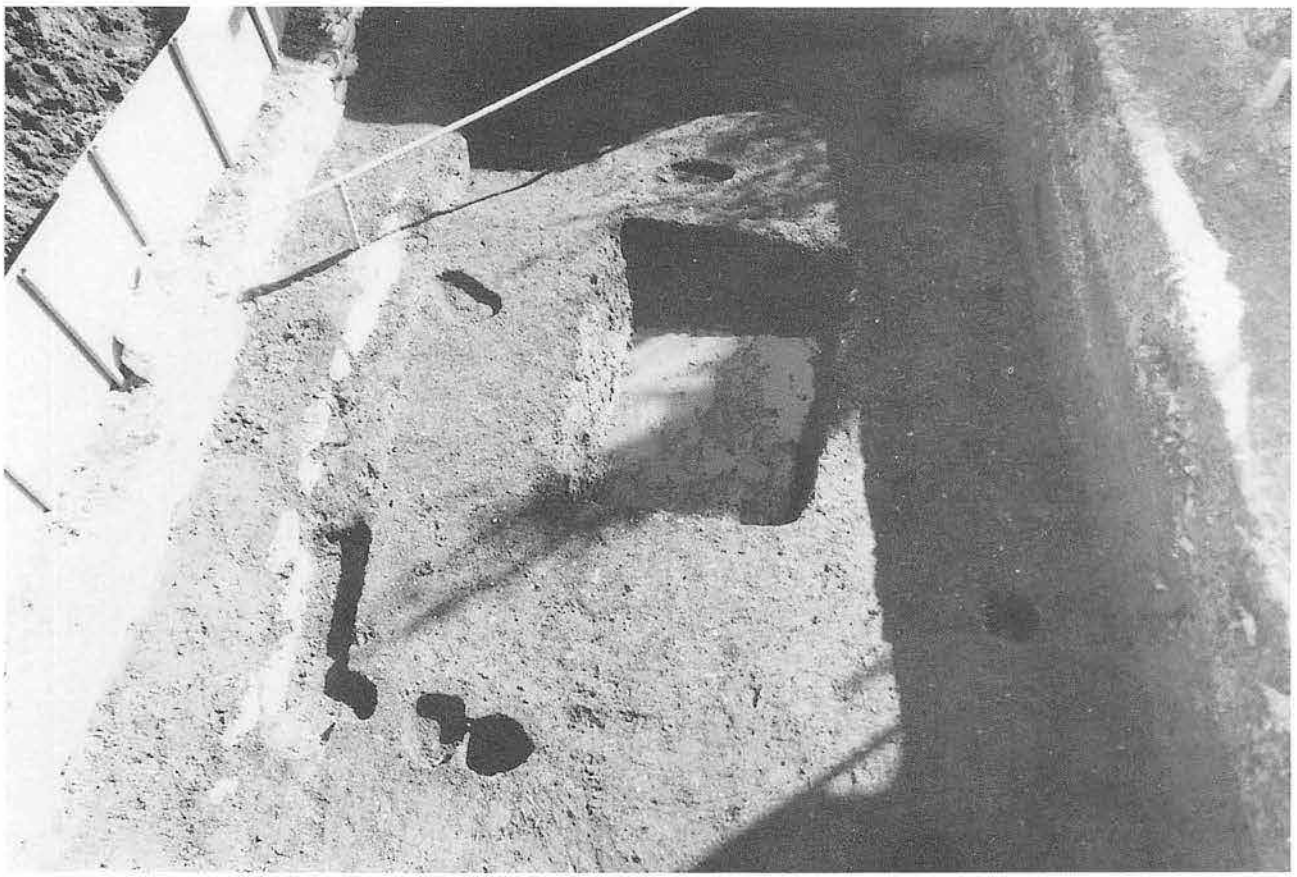
本地点は地理的あるいは周辺の歴史的な環境から推察して、商業的ないし町屋的な景観が予想されていたが、検出された遺構や遺物からは、それを裏付ける積極的な成果は得られなかった。調査面積も僅少であり、本遺跡の性格を特定するのは困難と言わざるを得ない。今次調査成果で特徴的なこととしては、出土遺物の中で灯明皿が多かったこと、瓦や火鉢類が目に付くこと、華瓶・碗・皿など瀬戸窯の製品が目立つことが挙げられる。これらのことから推測すると、寺院的な景観も浮かんでくるが、性格を同定するには今後の周辺域での発掘調査事例の増加を待ちたい。もし寺院に係わりがある地域とすると、光明寺あるいは補陀洛寺に関係していたのであろう。

今回の調査で注目される点として、15世紀代の遺物（特に瀬戸やかわらけ）の存在がある。この時期の瀬戸窯製品のまとまった出土は、鎌倉市街地では珍しいといえよう。また、13世紀代がみられなかった点については、遺跡の立地が海抜約2.0mという低地のため、近接する豆腐川の氾濫原となっていて、生活空間として利用できなかったとも考えられるのではなかろうか。

写　真　図　版

図版1　第1面全景

1　東区（北から）



2　西区（北から）

図版2　第2面全景

1　東区（北から）

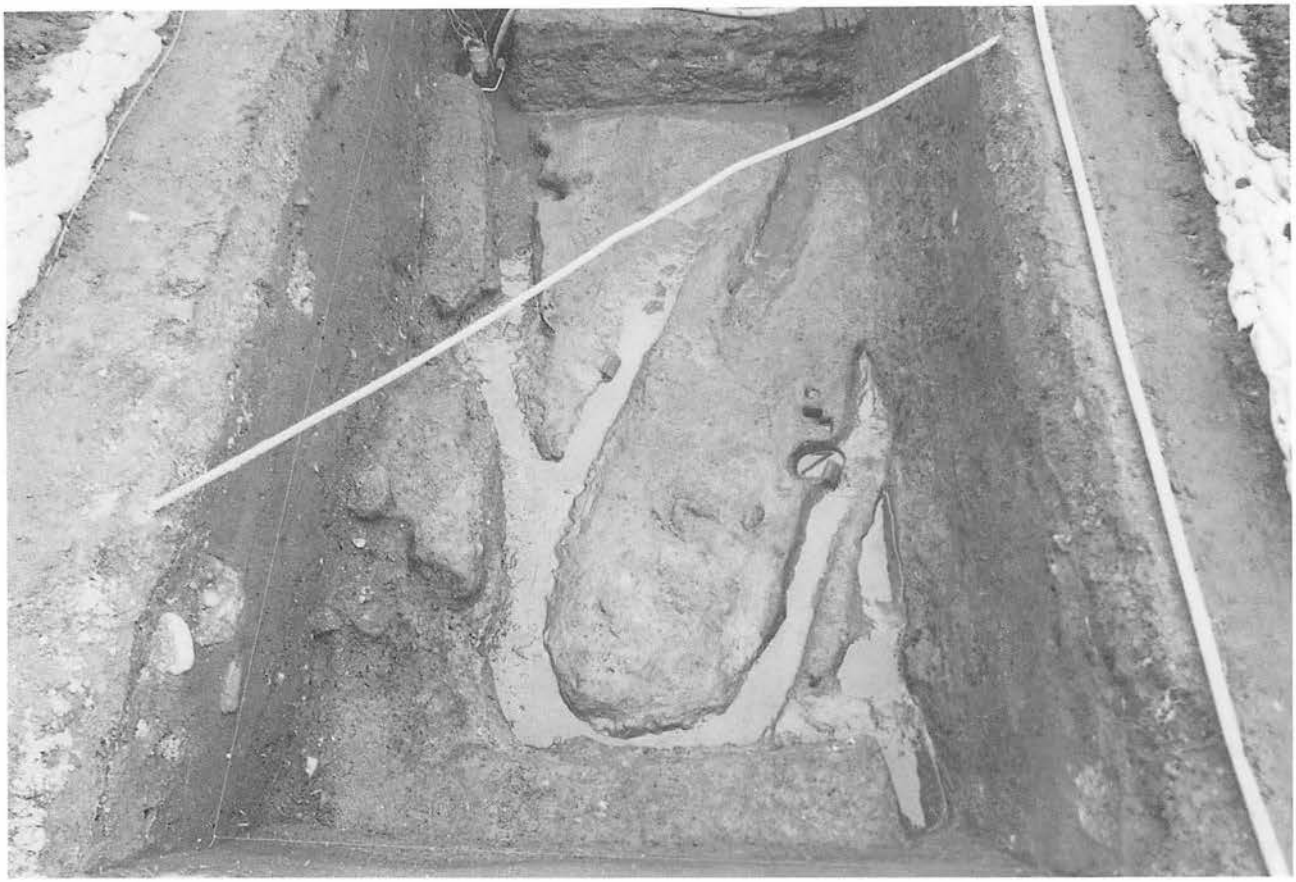
2　西区（北から）

図版3　第3面全景

1　東区（北から）

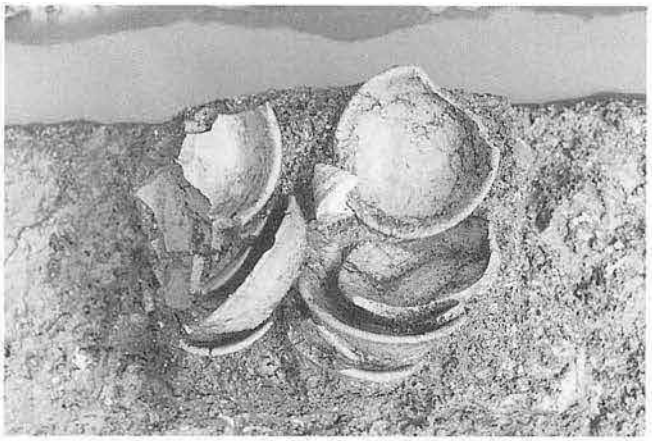
2　西区（北から）

図版4　第4面全景

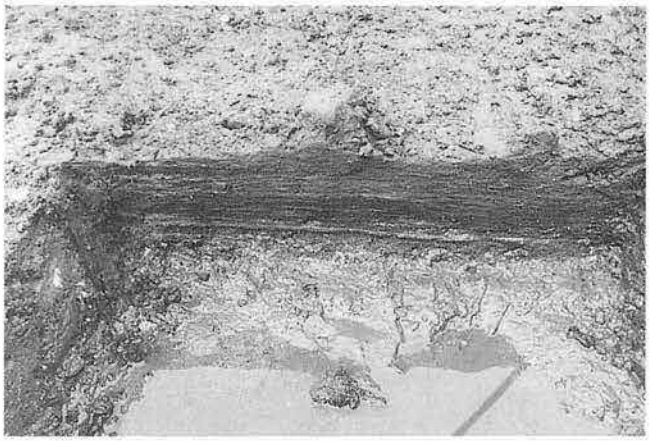


1　東区（北から）

2　西区（北から）



1　第１面　遺構73（西から）



2　第２面　遺構10　側板検出状況

3　第２面　遺構10（西から）

4　第２面　遺構74・76（南から）

図版6　出土遺物

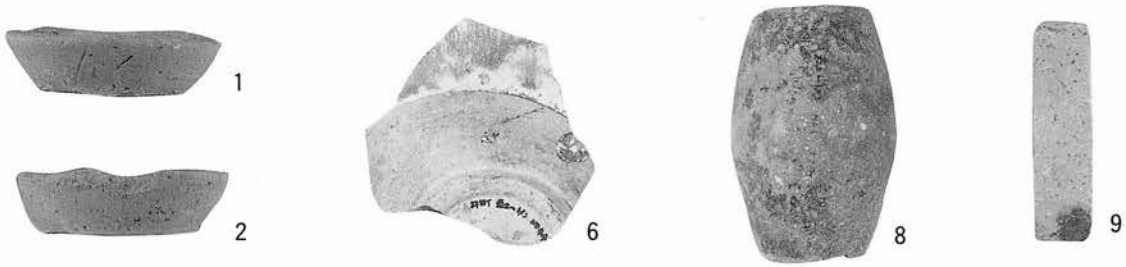


図8　表土・攪乱層出土遺物

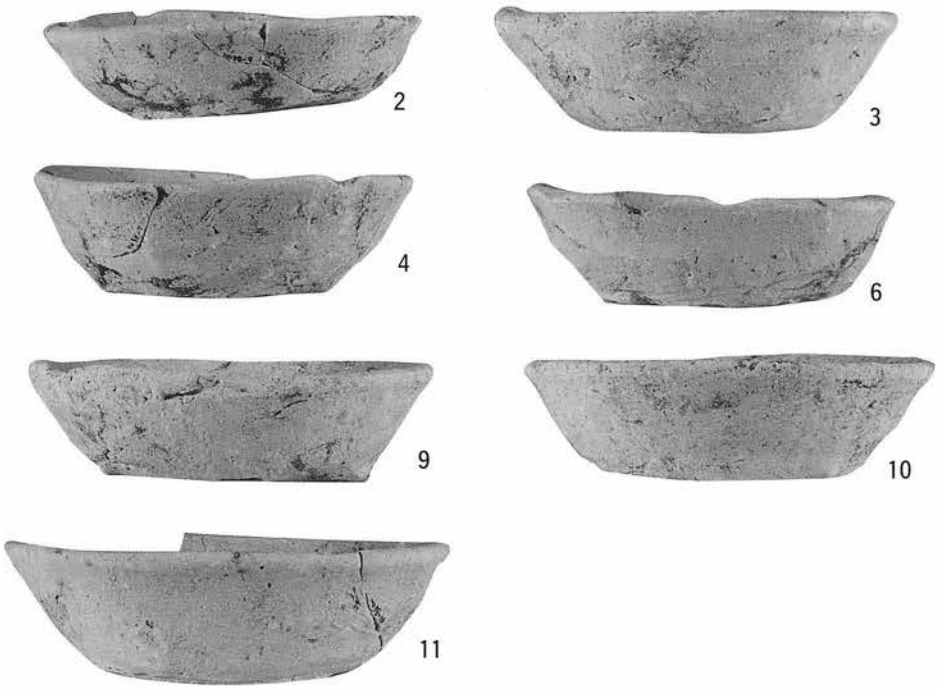


図9　第1面遺構出土遺物

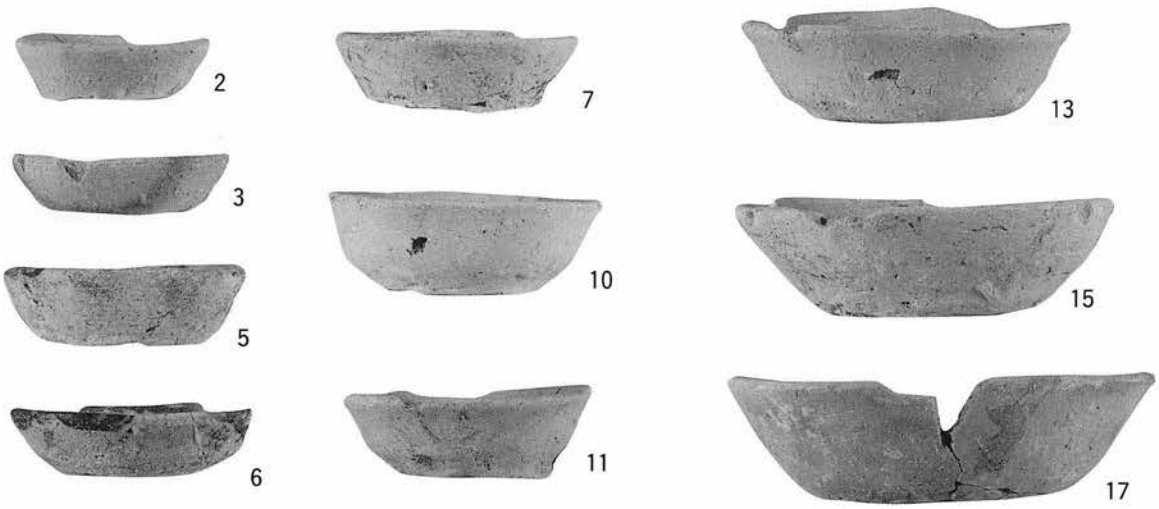


図10　第2面上包含層出土遺物

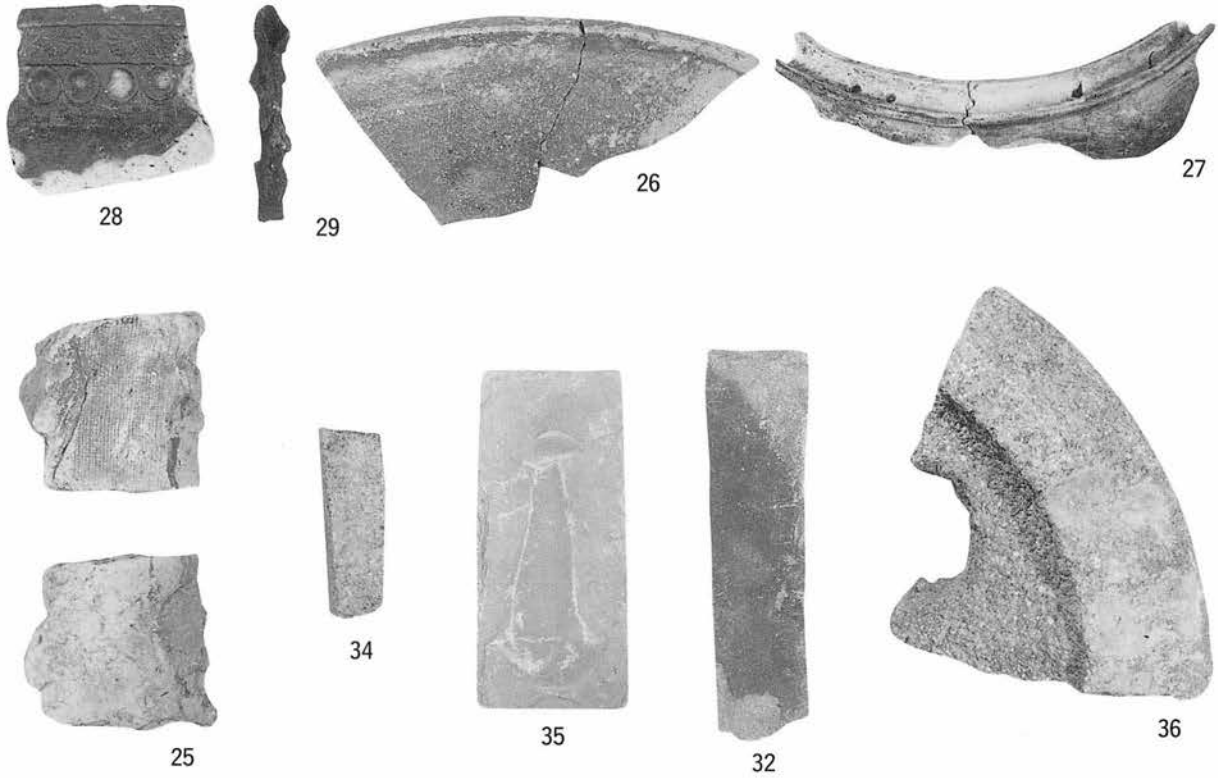


図10　第２面上包含層出土遺物

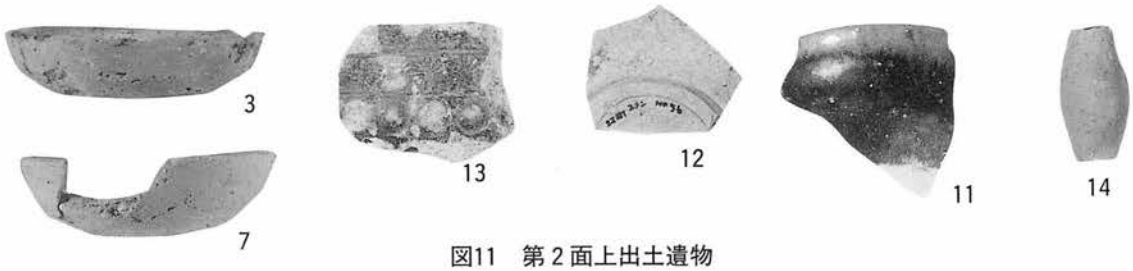


図11　第２面上出土遺物

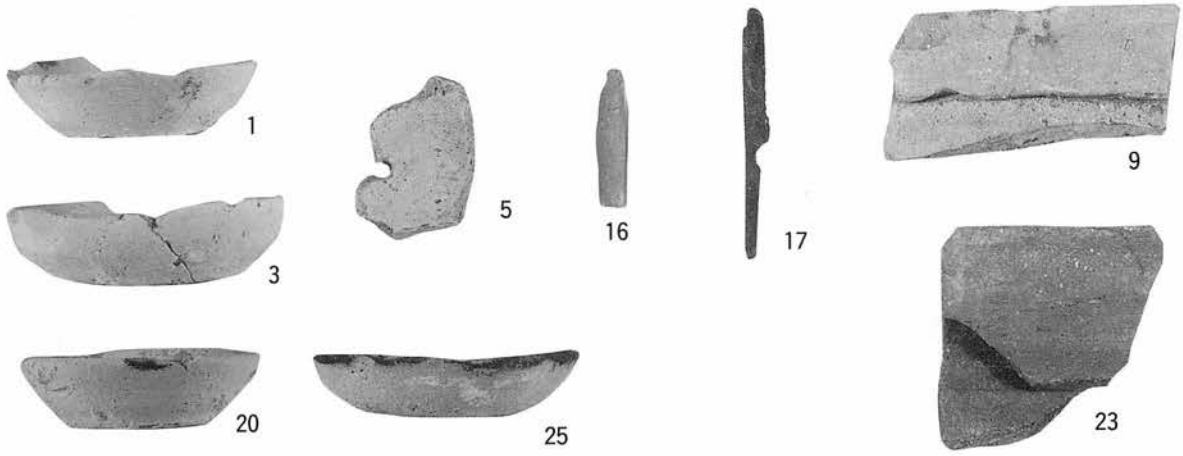


図12　第２面遺構出土遺物

図版８　出土遺物

図13　第３面上包含層出土遺物

図14　第３面上出土遺物

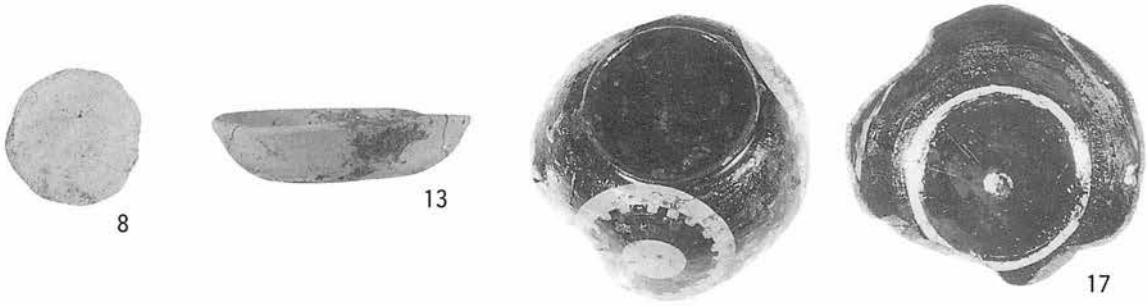


図15　第３面遺構出土遺物

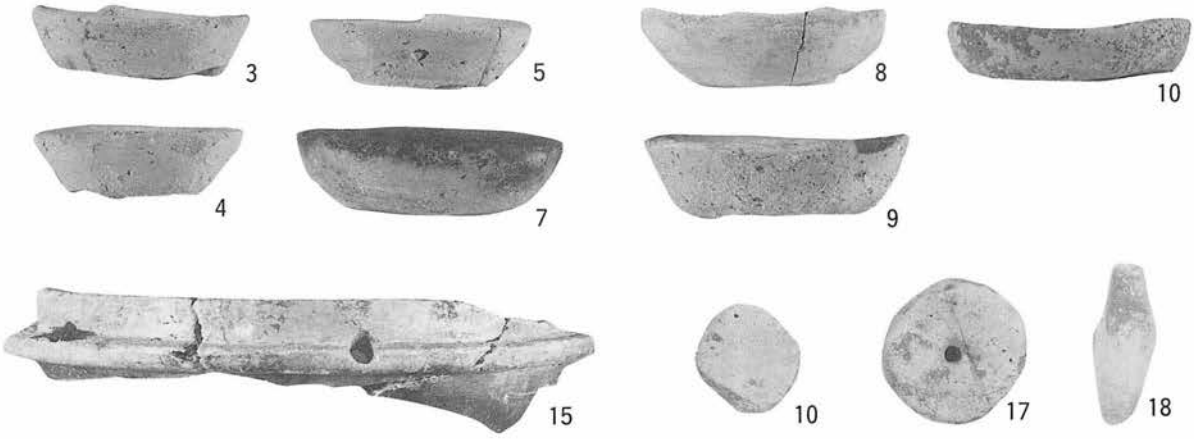


図16　第４面上包含層出土遺物

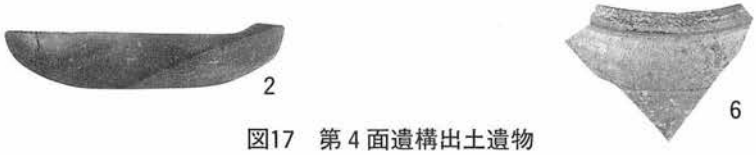


図17　第４面遺構出土遺物

付　編

材木座町屋遺跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

材木座町屋遺跡（鎌倉市材木座六丁目760番１）において行われた発掘調査で、14世紀初から15世紀前半頃の遺構・遺物が検出されている。調査地点は材木座海岸に隣接しており、調査地点土層の下部は干潟環境下での堆積層ではないかと考えられている。鎌倉においてはこれまで市内各地で花粉分析を行ってきたが海岸部においてはほとんど調査例が無い。本調査地点の土層は砂が卓越しているものの比較的有機質であり、良好な状態で花粉化石が保存されている可能性が高いと考えられた。こうしたことから主に遺構部より採取した土壌について花粉分析を行い、14世紀から15世前半頃の遺跡周辺の古植生や古環境について検討した。なお、材片がいくつか認められており、松葉（パレオ・ラボ）が樹種同定を行っている。

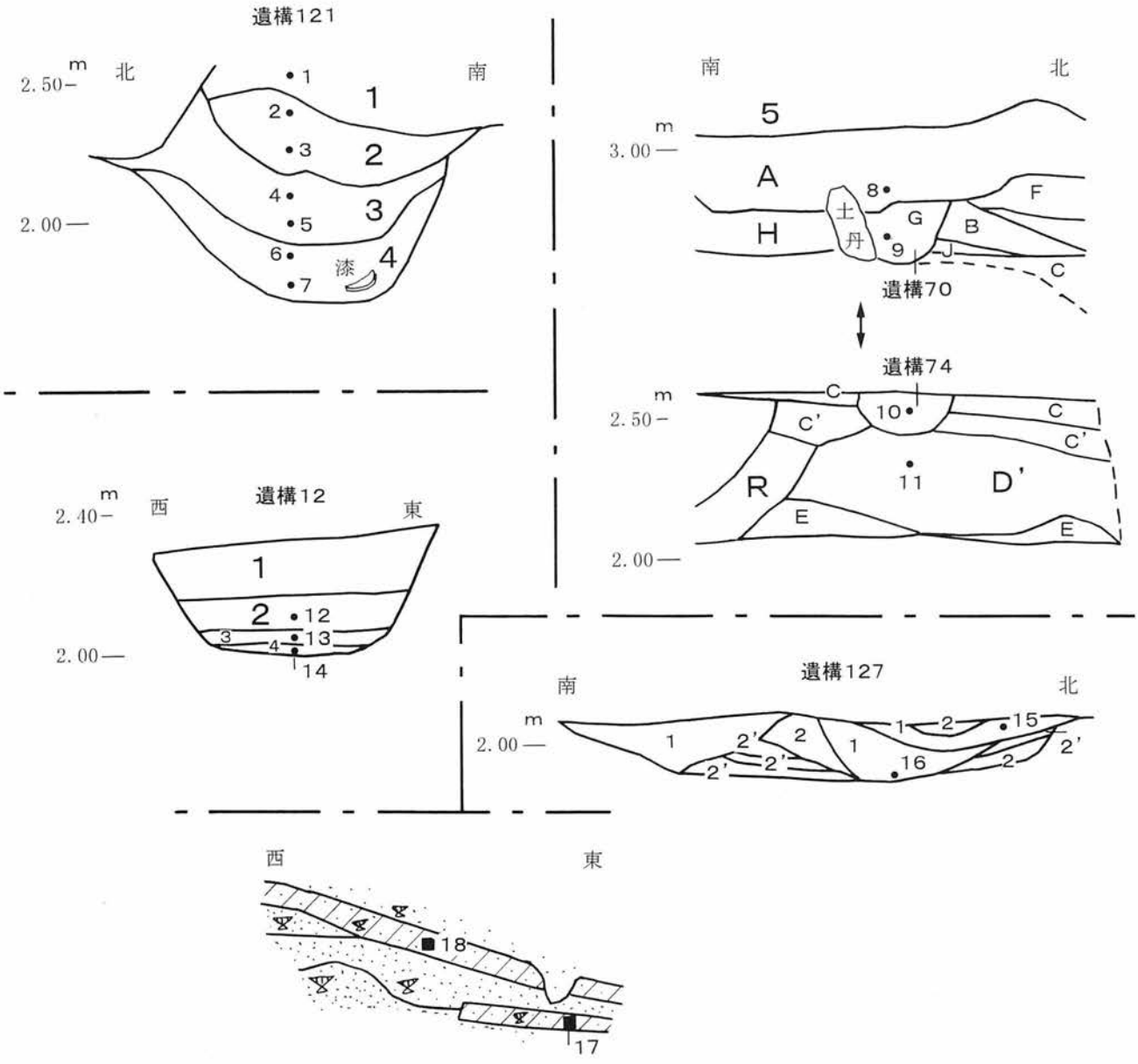
１．試料

試料は遺構121（調査区東壁），遺構70・74地点（調査区西壁），遺構12（調査区北壁），遺構127（調査区内南北断面西壁）および調査区内東西断面北壁より採取された18点である（図１）。以下に各試料について遺構ごとに簡単に記す。なお各遺構の層名に対応関係は無い。

遺構121：試料１（１層）は褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土～粘土質砂で、土丹片が散在し、貝片が点在している（第１面覆土）。試料2,3（２層）は褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土で、土丹片，貝片，炭片が点在している。試料4,5（３層）も褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土～粘土質砂で、土丹片，貝片，炭片が点在しており、中央部10ｃｍは黄灰色の砂が多く混入している。試料６（４層上半部）はやわらかい黒色の砂質粘土で、ハシ（スギ）などの材片が多く認められる。試料７（４層下半部）は黒灰色の砂質粘土～粘土質砂で、灰白色の砂が下部ほど多く認められる。この４層下半部では角材片（コウヤマキ）やハシなどの材片も認められる。また漆器の椀（図15－17参照）も検出され、材組織の観察が行われた。観察の結果、この材は小形で丸い道管が単独あるいは数個複合して均一に分布する散孔材で、道管は単穿孔板をもち、内壁に螺旋肥厚が有るが本標本では確認できない。放射組織は単列ですべて平伏細胞と１細胞高の方形細胞の縁辺部からなるが、接線断面において層階状に配列している。道管放射組織間壁孔は小形で密であるが、ヤナギ属のように蜂の巣状を呈す事はなく、このような特徴から漆器の椀はトチノキ（*Aesculus turbinata Blume Hippocastanaceae*）と同定される。以上２～４層が遺構121の覆土（第３面）で、下位の地山は細粒が主体の灰白色砂である。

遺構70・74地点：試料８（Ａ層）は褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土で、土丹が散在しており、角レキも認められる（近現代埋土）。その上位５層も褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土であるがやや明るく、土丹が散在しており、炭片が点在している。試料９（Ｇ層：遺構70覆土）および試料10（遺構74覆土）も褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土で、貝片，土丹，カワラケ片が点在している（第１面および第２面覆土）。試料11は暗褐灰色の粘土混じり砂で、貝片が散在している。また上半部には炭片が散在しており、土丹やカワラケ片も認められる（第３面覆土）。その下位は酸化して堅くしまった黄褐色の細粒砂で、微小貝片が多量に混入している。

遺構12：試料12は褐色の植物遺体層（２層）で、その上位１層は土丹片や炭片が認められる暗褐色の粘土である。試料13（３層）は黒色の炭層で、下部は褐色の植物遺体の薄層が認められる。試料14（４層）は黒灰色の粘土質砂で、これら１～４層が遺構12（第３面）の覆土である。また地山は暗灰色の砂で、微小貝片が多量に混入している。



遺跡内東西断面北壁模式図

図1　試料採取地点付近の土層断面図と試料採取層準

遺構127（第4面）：試料15（1層）は黒褐色有機質土が混じる黄褐灰色砂で、その上位2層は微小貝片が多量に入る黄褐灰色砂である。試料16（1層）は黒褐色粘土で、ハシ（スギ）などの材片が点在している。その下位の地山は微小貝片が多量に入る黄灰色砂である。

遺構内東西断面：試料18は有機質土混じりの黄灰色砂で、微小貝片が多く混入している。この試料18層の上・下部は微小貝片を多量に含む黄灰色砂層で、西側にはラミナの発達した砂層が観察される。さらに下位の試料17層も有機質土混じりの黄灰色砂で、微小貝片が多く混入しており、ハシ（スギ）などの材片も認められる。さらに下位は締まった砂層となっている。なお、試料17は遺構127と同層準と考えられ、試料18はそれよりも下位と推測される。なお、模式図は2試料の関係をみるにとどめて頂きたい。

2．分析方法

上記した18試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約４～６ｇ）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

3．分析結果

検出された花粉・胞子・寄生虫卵の分類群数は、樹木花粉29、草本花粉31、形態分類を含むシダ植物胞子３、寄生虫卵４の総計67である。これら花粉・シダ植物胞子・寄生虫卵の一覧を表１に、分布を図２（遺構121)，図３（遺構70,74地点)，図４（遺構12)，図５（遺構127)，図６（調査区内東西断面）に示した。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検境の結果、樹木花粉の占める割合は全体に低い結果となった。以下に各地点ごとにその特徴について示す。

遺構121（図２）：草本花粉の産出傾向から下位より花粉化石群集帯Ⅰ，Ⅱを設定した。

花粉帯Ⅰ（試料４～７）は少ない樹木花粉のなかでマツ属複維管束亜属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が最下部を除き１%を越えて検出されている。その他モミ属、スギ、サワグルミ属－クルミ属が連続して得られ、ツガ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す)、コナラ属アカガシ亜属もほぼ連続して観察されている。草本類ではアカザ科－ヒユ科が多産しており、出現率は60%～90%弱を示している。イネ科が10%前後を示して次いで多く、アブラナ科は上部に向かい増加している。また、寄生虫卵の鞭虫卵が上部に向かい急増しているが、最上部の試料４では激減している。

花粉帯Ⅱ（試料１～３）は草本類のアカザ科－ヒユ科の激減が特徴的であり、出現率は20%前後にとどまっている。反対にアブラナ科がⅠ帯より引き続き増加しており、イネ科やタンポポ亜科も出現率を上げている。木本類ではやはりニヨウマツ類が目立って検出され、その他、ハンノキ属，ブナ，コナラ属コナラ亜属が連続して観察される。寄生虫卵はⅠ帯で多産していた鞭虫卵はさらに減少する傾向がみられるものの連続して得られている。

遺構70,74地点（試料８～11）：やはり検出数が少ない樹木花粉のなかで最上部ではニヨウマツ類，スギ，ハンノキ属，ブナ，アカガシ亜属が１%を越える出現率を示している。これらに加えサワグルミ属－クルミ属，コナラ亜属，ニレ属－ケヤキ属が全試料より検出されている。草本類ではアブラナ科が30%前後の出現率を示し最も多く、次いでイネ科（20%前後)，タンポポ亜科（10%強)，アカザ科－ヒユ科（10%前後）となっており、最上部よりソバ属が検出されている。またベニバナ属が試料9,10より１個体づつであるが得られている。寄生虫卵は最下部を除き鞭虫卵が若干検出されている。なお、最下部の試料11は花粉化石の検出数が少なく、分布図としては示すことができなかった。

遺構12（試料12～14）：本地点においてはイネ科の多産が特徴的であり、出現率は60%弱～90%弱を

表1　産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
樹木																			
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
モミ属	*Abies*	-	2	-	1	1	1	1	-	1	1	-	-	-	-	-	2	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	-	-	-	1	1	1	-	1	-	-	-	-	-	1	2	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	1	1	3	12	21	12	5	5	-	-	-	3	15	8	16	12	-	4
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	2	3	5	8	12	1	1	10	6	2	3	2	1	6	2	1	1	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	-	-	2	8	3	1	2	6	1	-	2	2	-	4	3	4	5	3
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	1	-	1	1	2	1	1	1	3	1	-	-	-	-	-	1	-	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	3	-	-	2	-	-	-	1	1	2	-	-	-	1	-	1	-	-
ハシバミ属	*Corylus*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	*Betula*	-	-	2	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	1	4	1	1	-	2	-	4	2	6	4	2	1	-	-	-	-	-
ブナ	*Fagus crenata* Blume	4	2	1	1	-	-	-	3	2	1	3	-	-	1	1	-	1	-
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	2	1	2	3	-	-	1	4	2	1	1	-	1	4	1	1	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	2	2	-	2	6	-	2	4	2	1	1	1	1	3	4	1	3	1
クリ属	*Castanea*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	-	1	1	2	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	2
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	3	2	1	1	-	-	2	2	3	1	-	1	-	-	1	2	-
ハリゲヤキ属	*Hemiptelea*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フウ属	*Liquidamber*	-	1	2	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
草本																			
ガマ属	*Typha*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	29	62	41	71	89	43	119	40	76	19	13	437	81	123	176	285	134	209
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	4	6	1	3	4	-	1	-	3	-	5	2	4	3	3	2	3
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	2	2	2
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2	-	1	1	-	4	5
イブキトラノオ節	*Polygonum* sect. Bistorta	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-	1	1	-
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ソバ属	*Fagopyrum*	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	22	104	33	453	326	471	672	17	36	36	8	1	2	27	156	45	38	106
スベリヒユ科	*Portulaca*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	2	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	2	2	1	2
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	4	1	-	-
タケニグサ属	*Macleaya*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	48	102	32	69	35	8	3	57	83	97	5	4	4	20	7	11	5	7
ユキノシタ科近似種	cf. Saxifragaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1	2	1	-
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	2	1	-	-
ナス属	*Solanum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	1	-
ベニバナ属	*Carthamus*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	2	3	1	6	7	1	5	2	2	6	2	14	3	4	17	16	9	14
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	1	3	1	2	-	-	2	-	-	-	1	-	1	-	2	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	23	34	32	12	8	-	1	29	52	44	18	7	-	5	2	2	-	1
シダ植物																			
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	2	1	2	1	1	1	1	2	3	3	1	-	-	1	1	2	-	-
単条型胞子	Monolete spore	8	5	8	2	2	1	1	17	12	15	2	-	1	2	6	-	2	2
三条型胞子	Trilete spore	1	1	1	-	3	-	-	1	1	3	1	1	-	2	5	3	-	-
回虫	*Ascaris*	-	-	3	4	9	4	2	-	-	-	-	1	-	31	28	15	18	24
鞭虫	*Trichuris*	1	1	6	15	126	57	34	2	1	3	-	1	2	318	353	216	76	163
肝吸虫	*Clonorchis*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3	12	5
横川吸虫	*Metagonimus*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
樹木花粉	Arboreal pollen	18	22	21	44	54	21	16	40	29	19	16	12	19	28	33	33	15	13
草本花粉	Nonarboreal pollen	128	313	148	617	470	529	804	152	256	209	46	475	92	187	383	382	204	353
シダ植物胞子	Spores	11	7	11	3	6	2	2	20	16	21	4	1	1	5	12	5	2	2
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	157	342	180	664	530	552	822	212	301	249	66	488	112	220	428	420	221	368
不明花粉	Unknown pollen	7	14	7	11	8	1	1	14	11	5	7	0	1	4	4	4	2	2

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

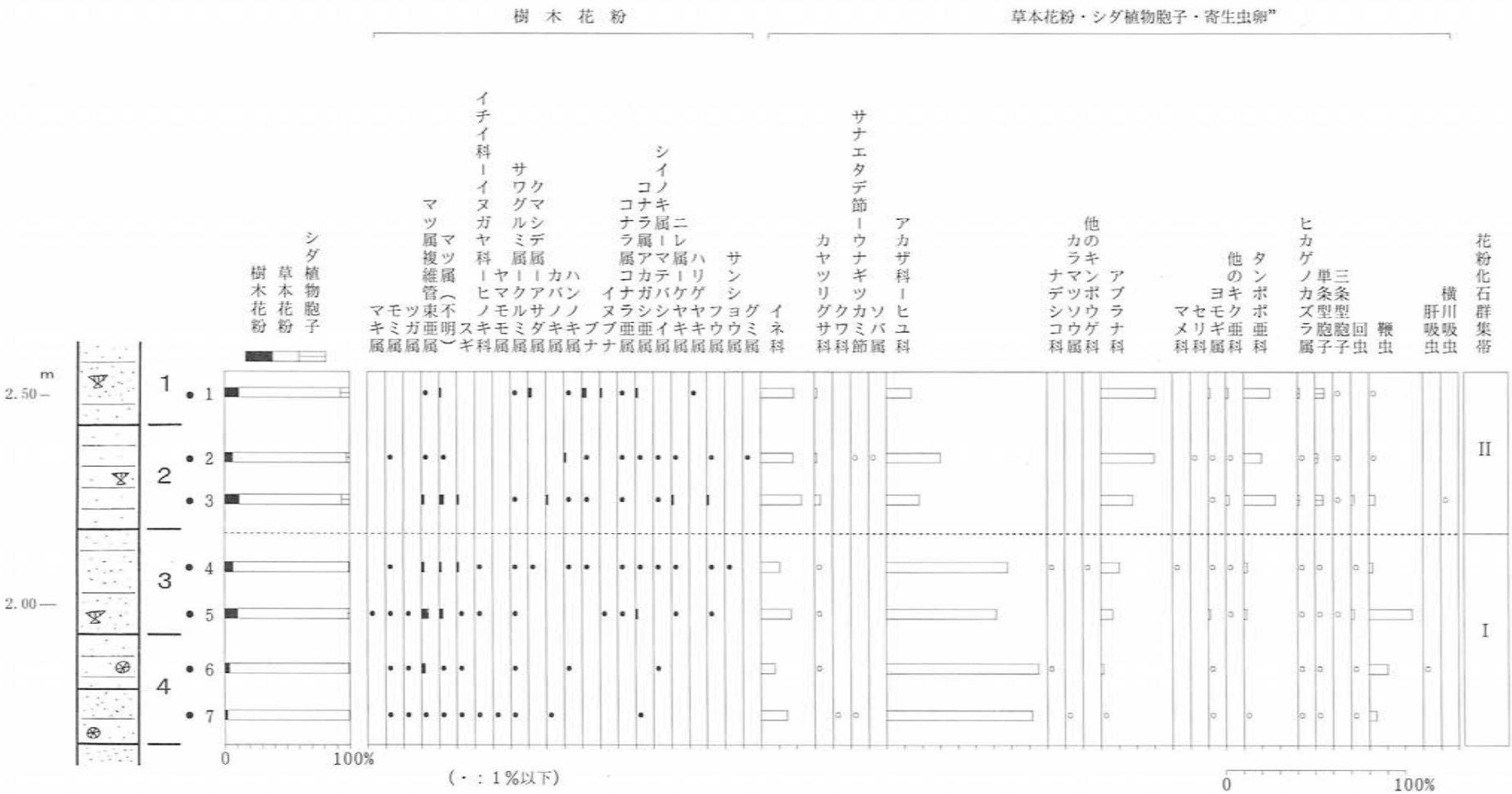


図２　遺構121の花粉化石分布図
（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

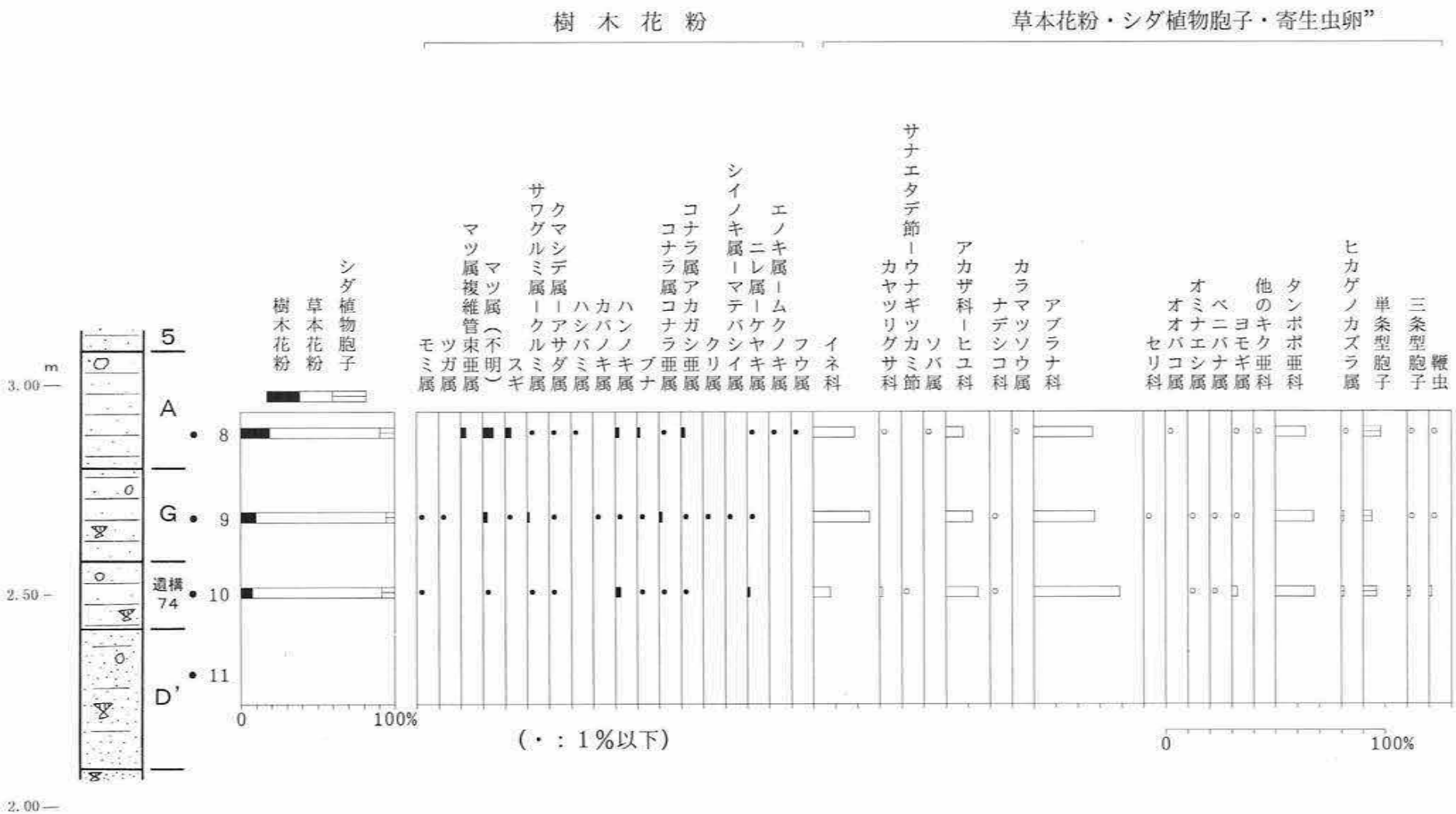


図3　遺構70・74地点の花粉化石分布図
（出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

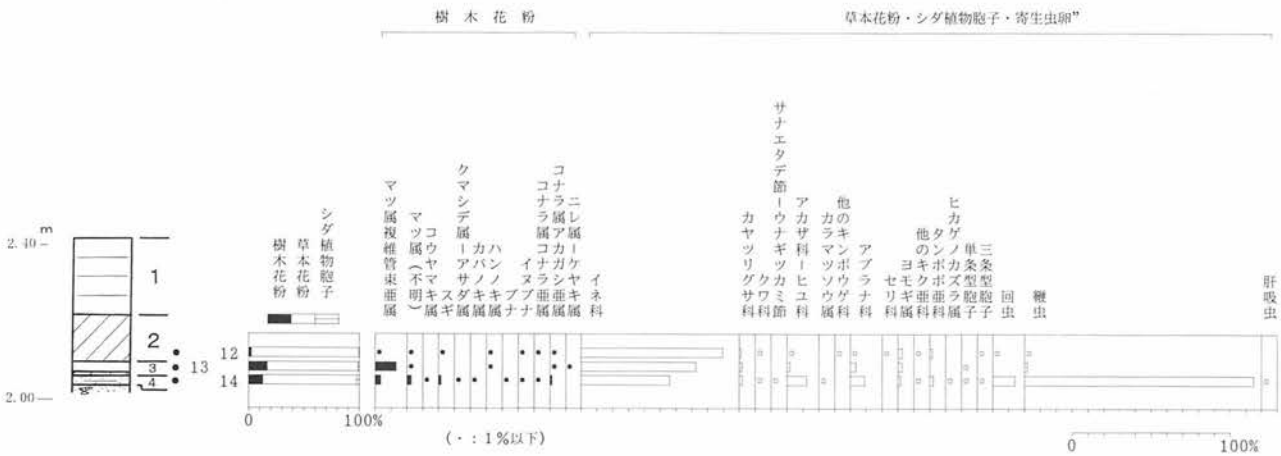


図4　遺構12の花粉化石分布図
(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

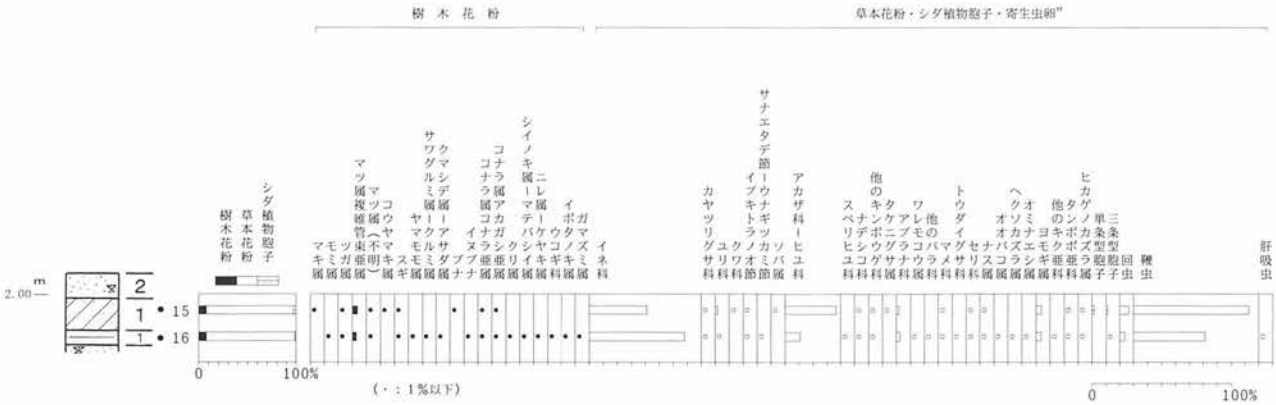


図5　遺構127の花粉化石分布図
(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

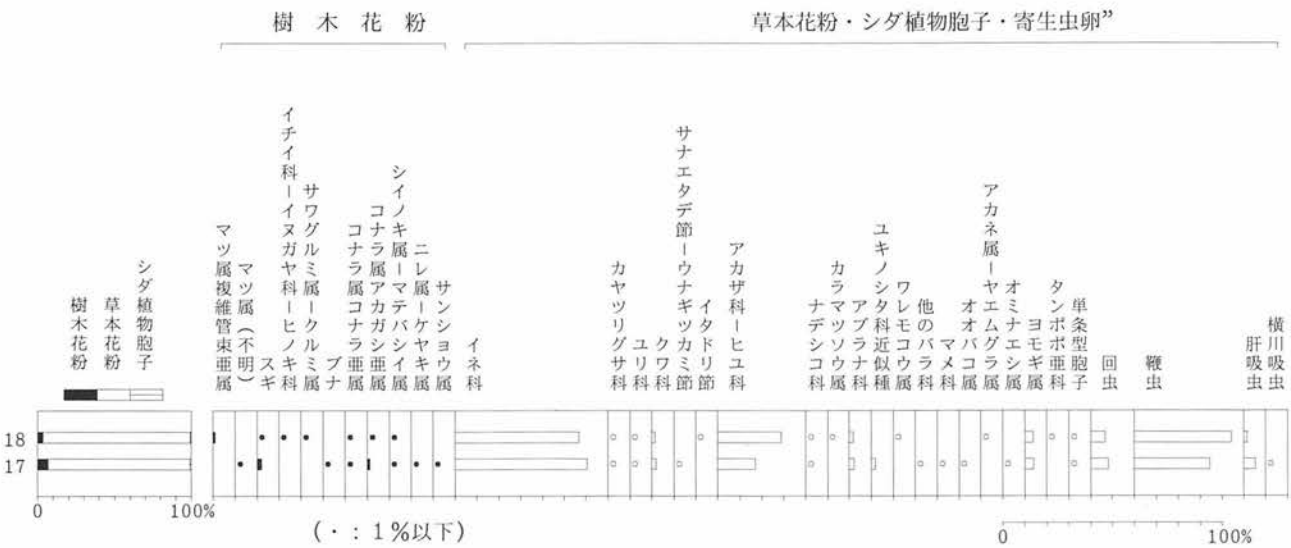


図6　遺跡内東西断面試料17,18の花粉化石分布図
(出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

示している。その他では試料14においてアカザ科－ヒユ科が10%を越え、次いでアブラナ科が10%弱の出現率を示している。木本類では試料13においてニヨウマツ類が10%を越えて検出されており、試料14ではこのニヨウマツ類に加え、スギとアカガシ亜属が１%を越えて観察されている。寄生虫卵は最下部の試料14で多産しており、回虫卵は約14%を示し、鞭虫卵は約145%と高い出現率を示している。

遺構127（試料15,16）：本地点ではイネ科とアカザ科－ヒユ科の多産が特徴であり、イネ科は試料16で70%弱、アカザ科－ヒユ科は試料15で約36%を示している。その他、アブラナ科とヨモギ属が２試料とも１%を越えている。木本類ではニヨウマツ類も１%を越えて検出されており、その他ツガ属，スギ，コナラ亜属，アカガシ亜属がこの２試料とも観察される。本地点においても寄生虫卵が多く検出されており、鞭虫卵は試料15で約82%、試料16で約51%を示している。また回虫卵も５%前後得られている。

遺構内東西断面（試料17,18）：やはり本地点においてもイネ科とアカザ科－ヒユ科の多産が特徴であり、イネ科は60%弱を、アカザ科－ヒユ科は20%前後を示している。その他、クワ科，アブラナ科，ヨモギ属が２試料とも１%を越えている。木本類の占める割合が小さく10%に達していない。そのなかで最下部の試料17においてスギとアカガシ亜属が１%を越える出現率を示している。本地点においても寄生虫卵が多く検出されており、鞭虫卵は40%前後、回虫卵は10%弱を示している。

４．遺跡周辺の古植生

近現代試料８を除き他の試料は第１面～第４面の14世紀初～15世紀前半と出土遺物から考えられており、この時期における材木座町屋遺跡周辺の古植生について検討した。

最下部試料と推測される試料17においてはスギとアカガシ亜属が木本類では目立って検出されている。鎌倉市内で行われた花粉分析の結果から鎌倉時代における植生変遷が明らかになってきており、13世紀中頃を境にスギ林や照葉樹林からニヨウマツ類の二次林への交代が認められてきている（鈴木　1999）。よって試料17の堆積期においてはスギ林や照葉樹林の影響が残る植生が遺跡周辺丘陵部に成立していたとみられる。その上位試料においては試料13で出現率が10%を越えているようにニヨウマツ類が目立つ植生が存在していたとみられる。これはスギ林や照葉樹林からニヨウマツ類の二次林への交代が本遺跡周辺においても行われたことを示していると考えられる。しかしながら木本類花粉の占める割合が小さいことから、ニヨウマツ類の二次林を含め遺跡周辺の森林は疎林であった可能性が高い。

草本類についてみるとイネ科，アカザ科－ヒユ科，アブラナ科，タンポポ亜科に多産する試料が認められる。そのうちイネ科について、遺構12では植物遺体の密集層である試料12において90%弱と非常に高い出現率を示しており、イネ型の単細胞が観察される下位の炭層（３層）を含め植物遺体はイネと推測される。アブラナ科は遺構70,74,121で多産しており、ソバ属を含め栽培種によることが推測される。アカザ科－ヒユ科やタンポポ亜科については遺跡周辺の砂堆などにヨモギ属を交えて生育し、一部イネ科やアブラナ科を含め草地を形成していたことが推察される。また、寄生虫卵が多産していることから鎌倉時代の人たちは寄生虫に悩まされていたことが容易に推測される。こうしたことからアカザ科－ヒユ科は薬として利用され、その結果として堆積物中にその花粉が多量に供給されたことも考えられる。これはタンポポ亜科についても同様であり、わずかに検出されているベニバナ属も含め薬として用いられた結果ではないかと思われるが、これについては今後の課題としたい。

以上のように、材木座町屋遺跡周辺では主に砂堆上を中心にイネ科，アカザ科－ヒユ科，アブラナ科，ヨモギ属，タンポポ亜科などの草地が広がっていたと推測される。また、これらは人間に利用されたあ

と遺構内に一部供給されたことも考えられ、これについては今後の課題である。一方、周辺丘陵部にはニヨウマツ類の二次林を主体とした森林が成立していたとみられるが、この森林は疎林状態であったと推測される。

5．寄生虫卵について

鞭虫卵を主体とした寄生虫卵が多く検出されている。特に遺構12の最下部試料14においては約145%に達しており、遺構127の試料15でも約90%を示している。そのうち遺構12は上部に炭層や植物遺体層が堆積しており、トイレとして利用された後これに蓋をするかたちで植物遺体が捨てられたことも考えられ、遺構の形状を含めさらに検討が必要であろう。

また、最下部と推測される試料17においても寄生虫卵が多産している。この試料は干潟環境での堆積が考えられており、寄生虫卵が多量に含まれる汚れた水域の存在が推測される。これは上記したトイレ遺構などから洪水などにより供給されたものと考えられ、同様の環境は下馬周辺遺跡(鈴木ほか　1997)や由比ケ浜南遺跡（印刷中）にも認められている。このように遺跡周辺では寄生虫卵に汚染されたかなり汚い環境であったことが推測され、同様の環境が他の地域にも存在していたようである。

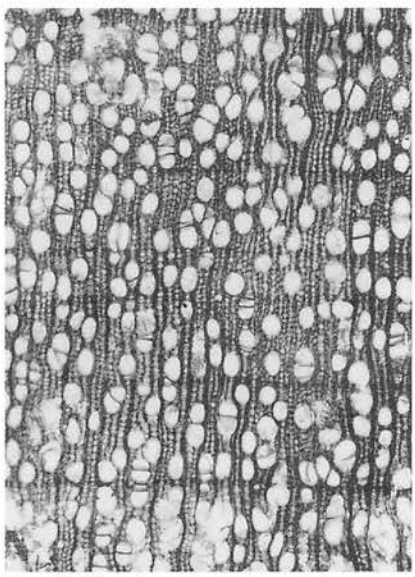
引用文献

鈴木　茂（1999）神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊．国立歴史民俗博物館研究報告第81集，p.131－139.

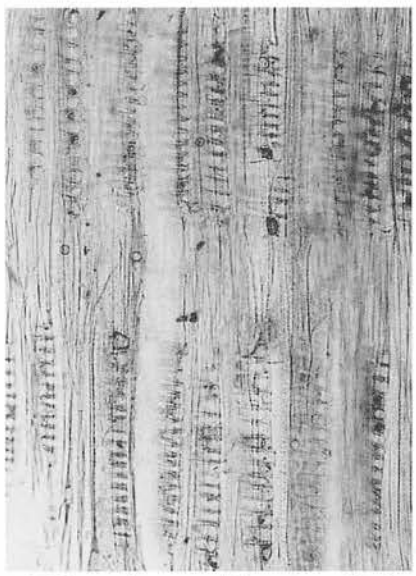
鈴木　茂（印刷中）由比ケ浜南遺跡の古環境.

鈴木　茂・藤根　久・古橋美智子(1997)下馬周辺遺跡の花粉化石．鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13　平成８年度発掘調査報告（第２分冊），鎌倉市教育委員会，p.180－196.

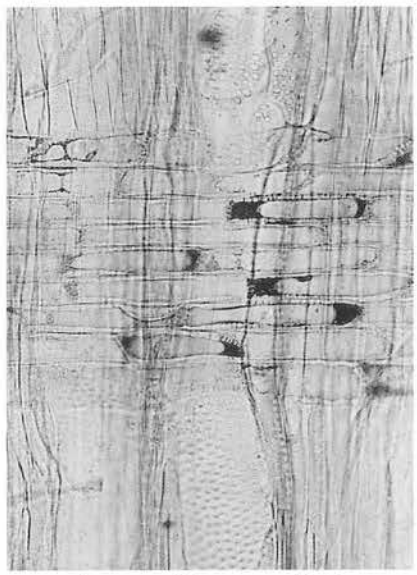
図版１　材木座町屋遺跡出土木材組織顕微鏡写真　　Bar：



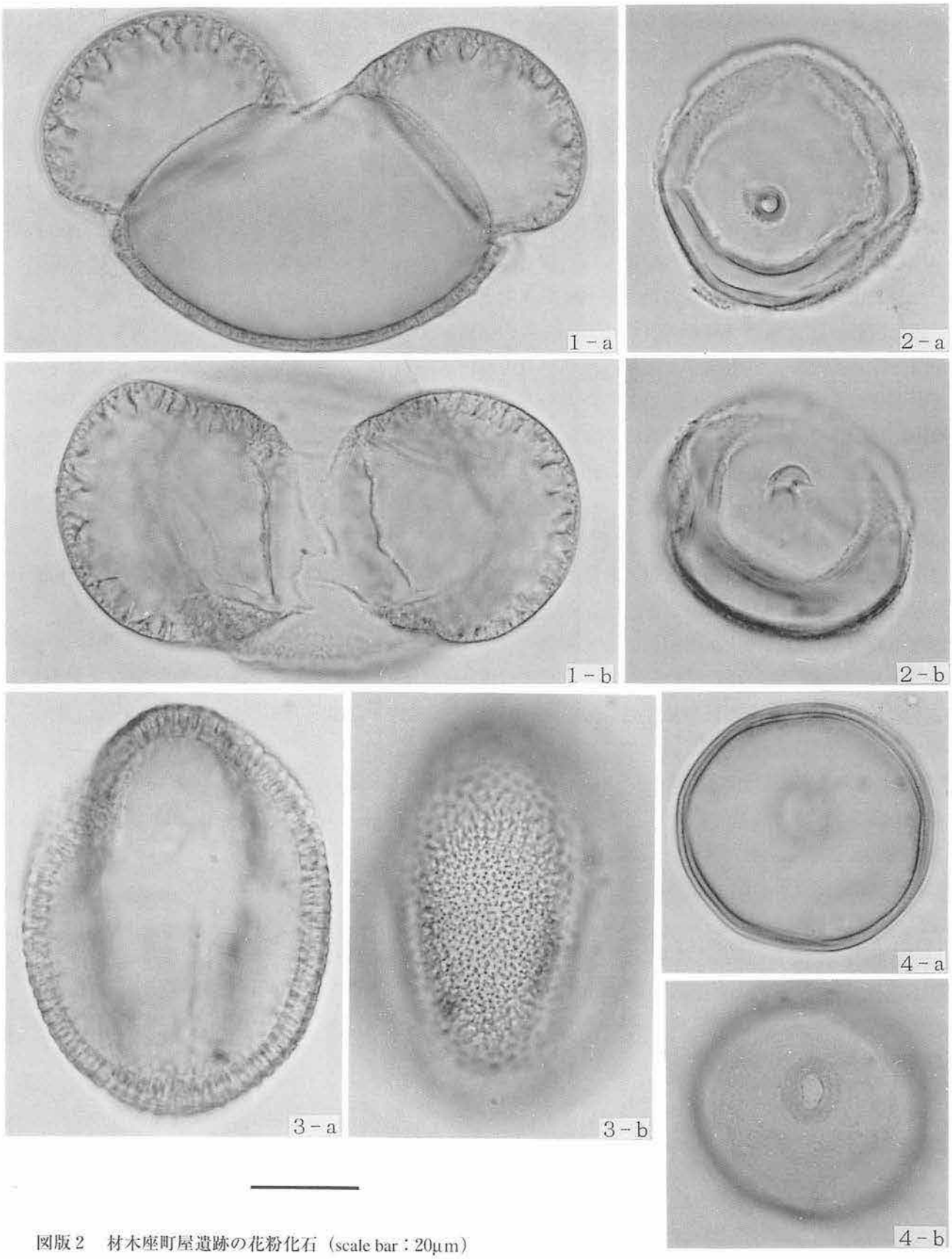
１ａトチノキ　bar：1mm　KAN1462



１ｂ　同　bar：0.4mm



１ｃ　同　bar：0.2mm



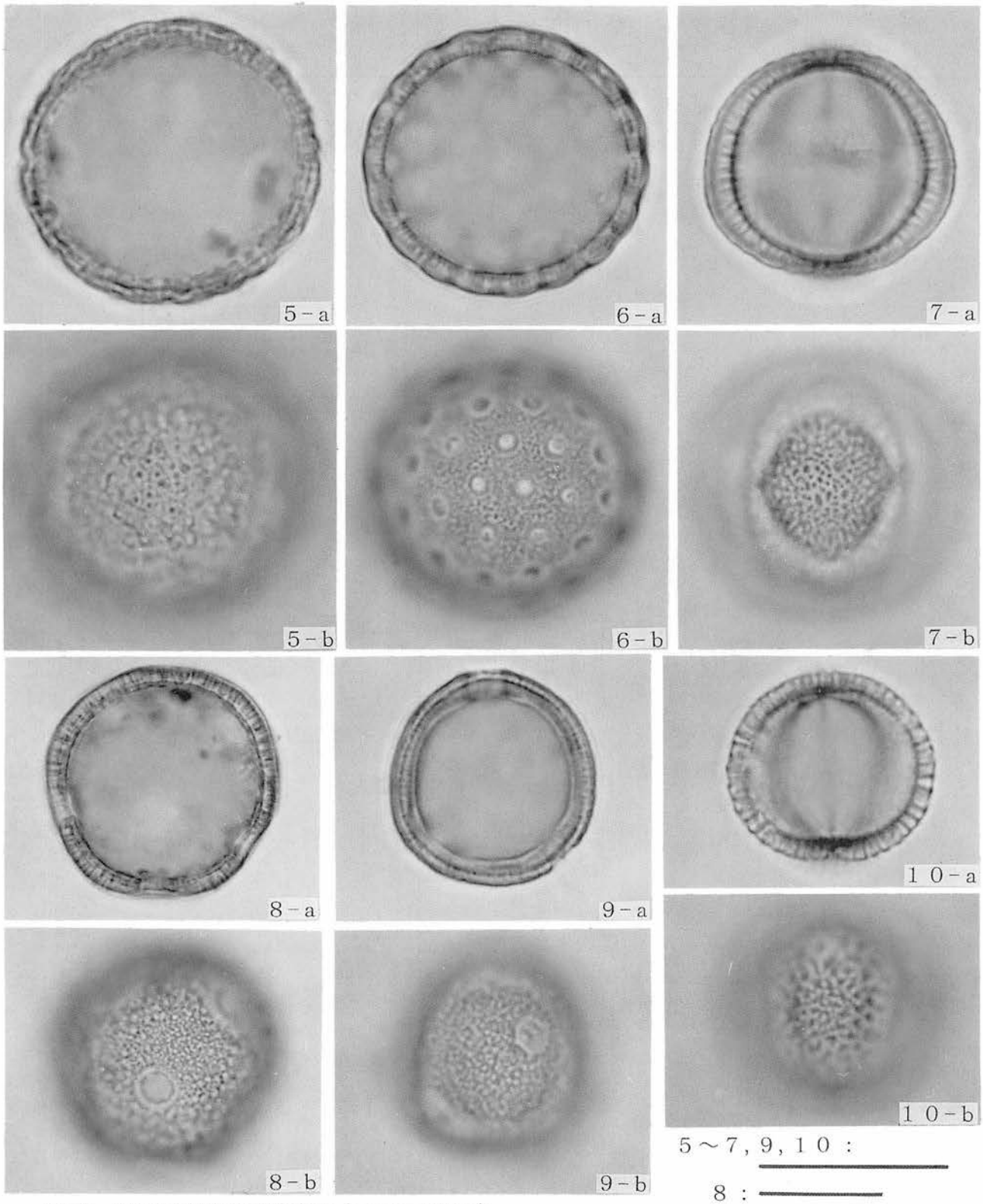
図版２　材木座町屋遺跡の花粉化石（scale bar：20μm）

１：マツ属複維管束亜属　PLC.SS　2940　No. 5

２：スギ　PLC.SS　2945　No.15

３：ソバ属　PLC.SS　2952　No.15

４：イネ科　PLC.SS　2941　No.12



図版3　材木座町屋遺跡の花粉化石（scale bar：20μm）

5：キンポウゲ科　PLC.SS　2942　No.12

6：アカザ科タイプ　PLC.SS　2951　No.15

7：ヨモギ属　PLC.SS　2943　No.12

8：ナデシコ科　PLC.SS　2948　No.15

9：タケニグサ属　PLC.SS　2949　No.15

10：アブラナ科　PLC.SS　2950　No.15

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成12年度発掘調査報告
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大河内勉・伊丹まどか・押木弘己・鈴木茂
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ざいもくざ まちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけん かまくらし ざいもくざ 神奈川県鎌倉市 材木座六丁目 760番1	14204	№261			20000106 ～ 20000215	56.31	個人専用住宅に係わる表層改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
材木座町屋遺跡	都市	中世	溝 土壙 ピット	陶磁器、土器、石製品	

大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

おおくらばくふしゅうへんいせきぐん

雪ノ下字大倉耕地562番16

例　　言

1．本報は、大倉幕府周辺遺跡群（№49）内の鎌倉市雪ノ下字大倉耕地562番16の個人専用住宅の新築に先だって行われた緊急発掘調査の報告である。

2．発掘調査は平成12年１月31日から３月15日まで、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。体制は以下のとおりである。

主任調査員　福田誠（鎌倉市教育委員会嘱託）
調査員　　菊川泉　神山晶子　須佐仁和　早坂伸市
調査補助員　本城裕　兼行佐江　松原康子　栂岡けいと　佐伯玲魚
中島理恵　鈴村真理子　鈴木弘太　古田土俊一　猿田功一　渡部賢史　長友純子（鶴見大学文学部文化財学科）
久保田裕美（明治大学文学部史学地理学科）
鈴木一功（立正大学文学部史学科）
作業員　　（社）鎌倉市高齢者事業団シルバーセンター

3．本文は菊川泉が執筆した。遺物実測は調査員・調査補助員が分担して行った。トレースは兼行・神山が、図版作成は菊川・兼行・栂岡・長友が、遺物観察表作成は菊川・兼行が行った。

4．使用した写真のうち高所全景写真は（株）シン技術コンサルが撮影した。その他の遺構写真は福田・菊川が撮影した。また遺物写真は菊川が撮影した。

5．出土遺物・記録図面・写真等の資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

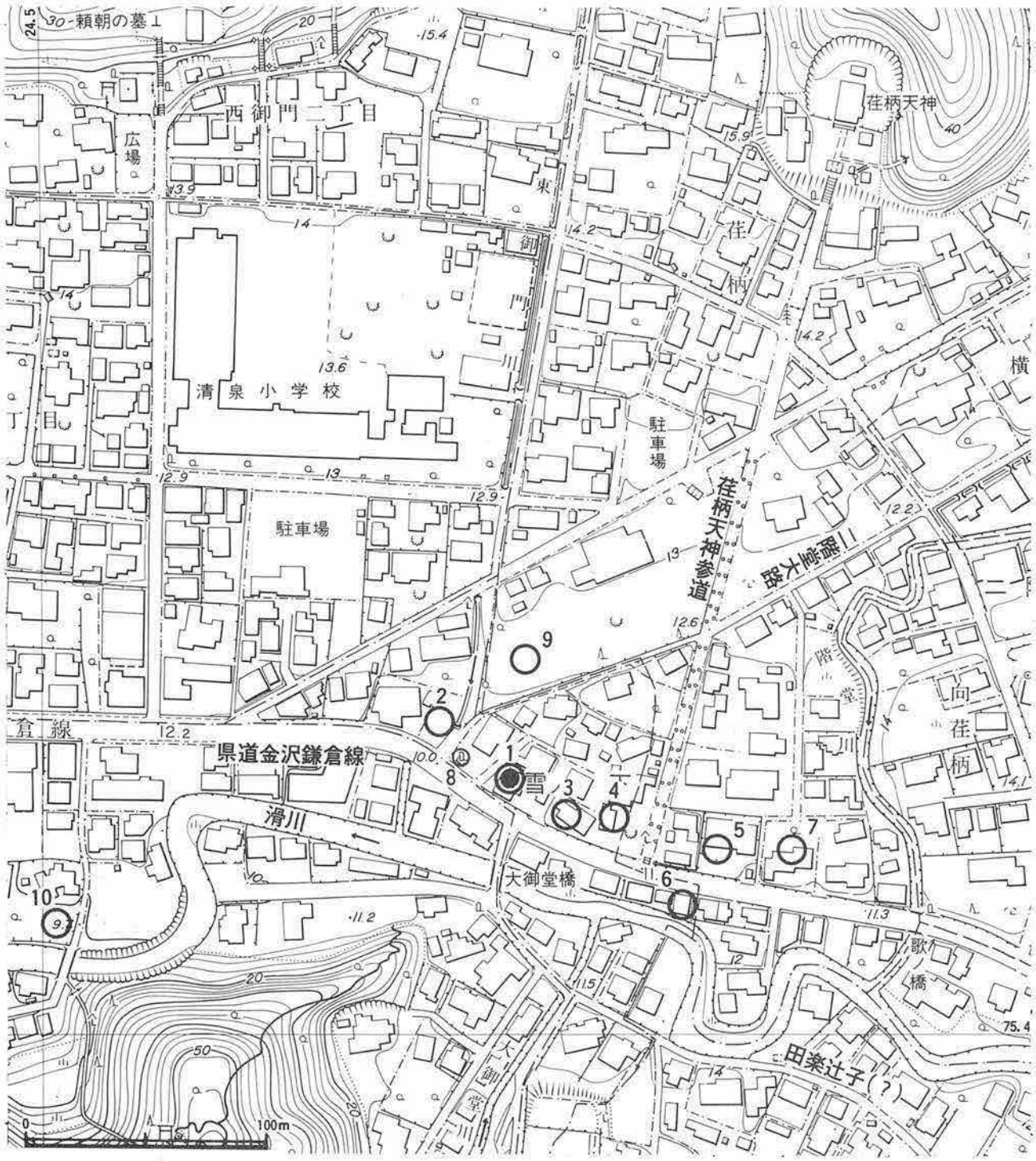
第１章　調査区の位置と歴史的環境 ……165
第２章　調査の経過と層序 ……165
第３章　検出した遺構・遺物 ……170
第４章　まとめ ……197

挿　図　目　次

図１　調査地周辺図 ……164
図２　調査区位置図 ……166
図３　第１面全体図 ……167
図４　第２面全体図（落ち込み遺構Ｂ面） ……168
図５　第２面全体図（落ち込み遺構最下層） ……169
図６　１区東壁セクション図 ……170
図７　南壁・落ち込み遺構セクション図 ……171
図８　２区第１面包含層の遺物 ……172
図９　１区第１面井戸１上層の遺物 ……173
図10　１区第１面井戸１の遺物 ……174
図11　１区第１面井戸２の遺物（１） ……176
図12　１区第１面井戸２の遺物（２） ……177
図13　１区第１面土壙１の遺物 ……177
図14　１区第１面土壙７・土壙４・第２面ピット５の遺物 ……178
図15　１区第２面包含層・溝１・第１面土壙３・土壙６の遺物 ……179
図16　２区第１面構成土の遺物 ……180
図17　２区第１面遺構・トレンチの遺物 ……181
図18　１区落ち込み遺構の遺物 ……182
図19　２区落ち込み遺構Ｃ面まで・布堀の遺物 ……183
図20　２区落ち込み遺構最下層の遺物 ……184
図21　周辺調査地点の遺構 ……196
遺物観察表 ……185

写真図版目次

図版１　調査区全景　調査地点近景 ……200
図版２　１区全景　溝１ ……201
図版３　１区落ち込み遺構　セクション ……202
図版４　２区第１面全景　落ち込遺構　セクション ……203
図版５～13　遺物 ……204



1．調査地点
2．大倉幕府周辺遺跡（雪ノ下字大倉耕地569番1地点）
3．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下字天神前562番29地点）
4．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下字大倉耕地565番4地点）
5．横小路周辺遺跡（二階堂字荏柄10番6外地点）
6．横小路周辺遺跡（雪ノ下五丁目557番1地点）
7．横小路周辺遺跡（二階堂字荏柄9番1地点）
8．関取場碑
9．大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄38番1地点）
10．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下四丁目580番10外）

図1　調査地周辺図

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡は鎌倉市雪ノ下字大倉耕地562番16に所在し、大倉幕府周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳№49）の南東の一角にある。南側には東西方向に六浦路（別称金沢道、現県道金沢鎌倉線）が走り、Ｔ字路を成して南に向かう道は滑川にかかる「大御堂橋」を渡り、勝長寿院のあった大御堂が谷、釈迦堂が谷に分岐する。

この辺りは「天神前」という旧字名で、その字名の由来となる荏柄天神は北東約300ｍにある。その参道が南に直線に延び、調査地の南東約60ｍの地点で、調査地の南を走る県道金沢鎌倉線に突き当たる。

荏柄天神は、社伝によれば、長治元（1104）年８月25日天神の霊がこの地に降臨したので奉斉、後に鎌倉幕府の鬼門の鎮守の社として崇められたという。（『鎌倉事典』昭和51年　東京堂出版）鎌倉幕府草創以前からあった社寺として注目できる。ただしその参道がいつ頃現在のかたちになったのかは不明である。

遺跡の名称にもなっている「大倉幕府」は治承４（1180）年頼朝が鎌倉に入り最初に構えた幕府（将軍の館）で、嘉禄元（1225）年宇津宮辻子に移転するまでのおよそ45年間、将軍の住居となっていた。『鎌倉市史総説編』（高柳光寿　昭和34年　吉川弘文館）の推定する大倉幕府の位置は遺跡の西部で、西大路・東大路に挟まれ六浦路を南限とする地帯である。現在では西御門・東御門の地名があり、清泉小学校を中心として一帯は住宅地となっている。また、『吾妻鏡』健保元（1213）年４月２日条には「相州（北条義時）、（和田）胤長が荏柄の前の屋地を拝領せられ、すなはち（金窪）行親・（安藤）忠家に分ち給ふの間、前給人和田左右衛門尉義盛が代官久野谷弥次郎を追い出し、おのおの卜居するところなり。」という記事が見られる。この事件をきっかけに和田合戦が勃発し、頼朝挙兵当初から御家人として権威をふるっていた和田一族が滅ぶこととなる。注目したいのは「荏柄の前の屋地」という語である。この記述のみではその位置や範囲を知るこはできないが、この辺りが鎌倉初期から屋地として使われていたことは読みとれる。

調査地の南を走る県道金沢鎌倉線は古くは「六浦道」と呼ばれており、『吾妻鏡』では仁治２（1241）年、造営を決めた北条泰時自身が監督し、自分の馬で土石を運んだという記事を載せている。前掲『市史総説編』では、この六浦道の工事というのは朝比奈の切り通しであろうとしている。先に述べた荏柄天神はじめ、この道沿いには鎌倉最古の霊場と伝えられる杉本寺・頼朝が建立した勝長寿院などの寺院等が点在することを考えると、妥当な推論であろう。調査地点南を通る道は古くからあり、物資輸送のため六浦につながる朝比奈の切り通しが泰時の時代に確保されたということになろう。

六浦までの道が確保されたことでその沿線は栄えたと考えられ、二階堂大路との交差点大倉辻や、鶴岡八幡宮の東に接する須地賀江橋（筋替橋）の辺りは商業地域となった。（前掲『市史』）

後北条氏の時代になると、小田原城主北条氏康が荏柄天神社の再興・造営のために関所を設け、六浦道を通る商人などから関銭をとった。この付近は「関取場」とも称した。これに由来する「関取橋」跡に、現在は、昭和６年、鎌倉町青年団によって建てられた「関取場跡」の碑が存在する。

第２章　調査の経過と層序

本調査は鎌倉市雪ノ下562番16に計画された専用住宅建設範囲約78㎡を対象に、鎌倉市教育委員会が実施した。

調査にあたっては、六浦道の方向を意識して測量用の方眼を設定した。市４級基準点のうちＥ176

（X＝-75,385.716・Y＝-24,330.990）とE177（X＝-75,372.314・Y＝-24,361.135）を用いて調査原点（X＝-750,390.473・Y＝-24,303.142）を設置した。また、市3級基準点（No.53,209）の海抜（12.086m）を移動し、仮水準点（12.094m）を調査区の脇に設けた。設定した方眼の南北軸線はN-57°02′08″-Eである。調査地点の経緯は東経139°33′57″・北緯35°19′11″である。

廃土の置き場を確保するため、設定した調査範囲を東西にほぼ半分に分割して調査することを決め、平成12年1月31日、範囲の東半分（1区）から開始した。

表土からおよそ60～80cm下に人頭大の土丹を敷き詰めた面があるのを確認し、これを第1面として掘り広げた。面は西に向かってゆるく傾斜する。この面では2基の井戸といくつかの土壙を検出したが、井戸の側面を観察した際、第1面下の地山面と、地山面を切る大きな落ち込みを確認した。

その後、第1面の下の第2面（地山面）を検出し、浅い溝、ピット等の遺構と前述の落ち込みの肩を確認した。セクションベルトを残して、この落ち込み遺構の覆土を掘り下げ、途中に遺構を伴う締まりの弱い面が存在することを確認した。さらに覆土を掘り下げ、地山面を検出。この面直上でかわらけ・渥美甕片等の遺物を検出し、この地業が間違いなく中世のものであることを確認した。この段階でラジコンヘリコプターによる全景撮影を行った。

1区を埋め戻した後、2月26日、西半分（2区）の調査を開始した。この調査区は第1面の下は全て1区で検出した落ち込み遺構の覆土となる可能性が高かったので、第1面検出後は、トレンチを設定し、この範囲で落ち込み遺構覆土の堆積状況を把握し、地山面を検出することに主眼をおいて調査を続けた。

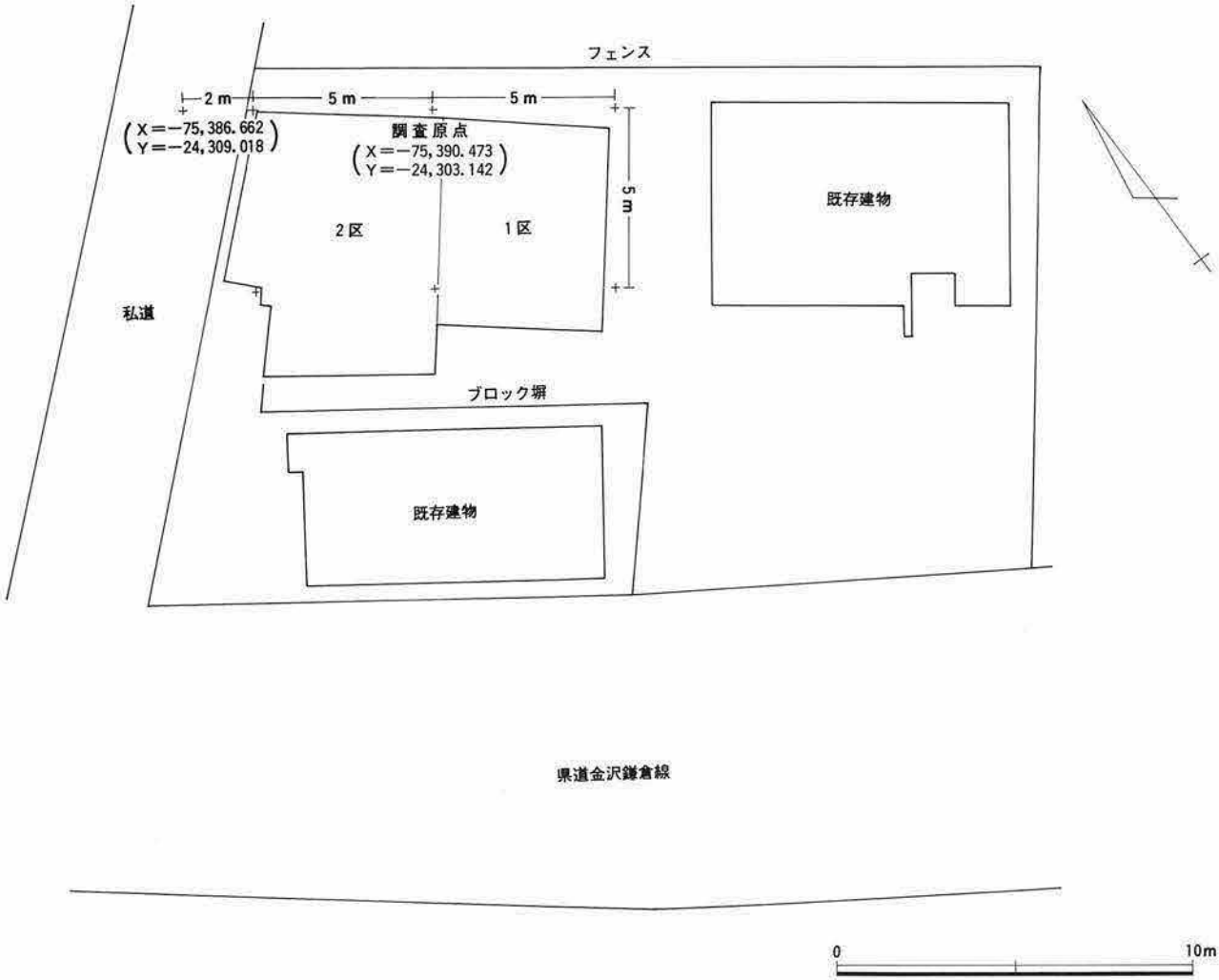


図2　調査区位置図

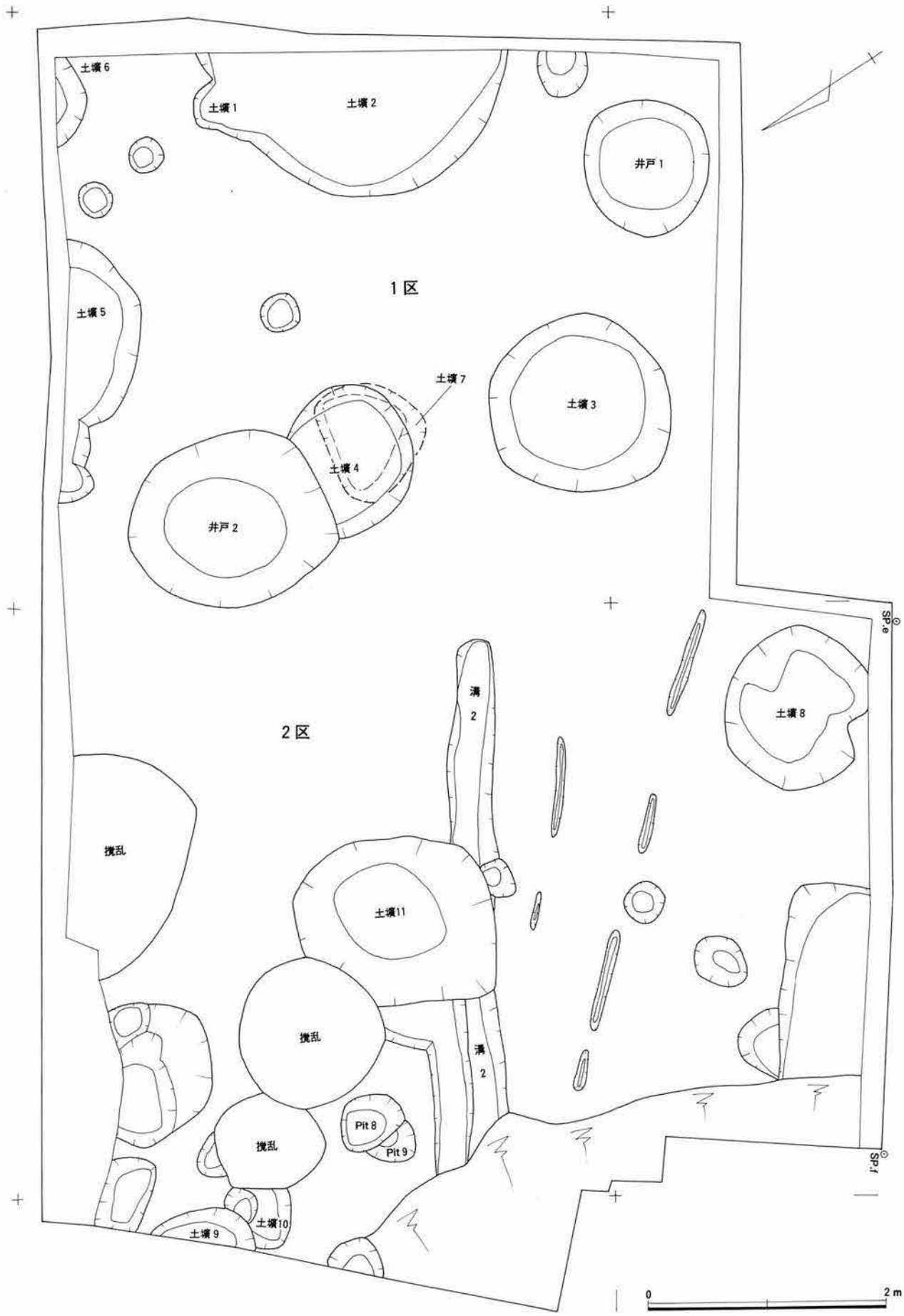

土壙6
土壙1
土壙2
井戸1
1区
土壙5
土壙7
土壙3
土壙4
井戸2
溝2
2区
土壙8
撹乱
土壙11
撹乱
溝2
撹乱
Pit 8
Pit 9
土壙10
土壙9
Sp.e
Sp.f
0
2 m

図3　第1面全体図

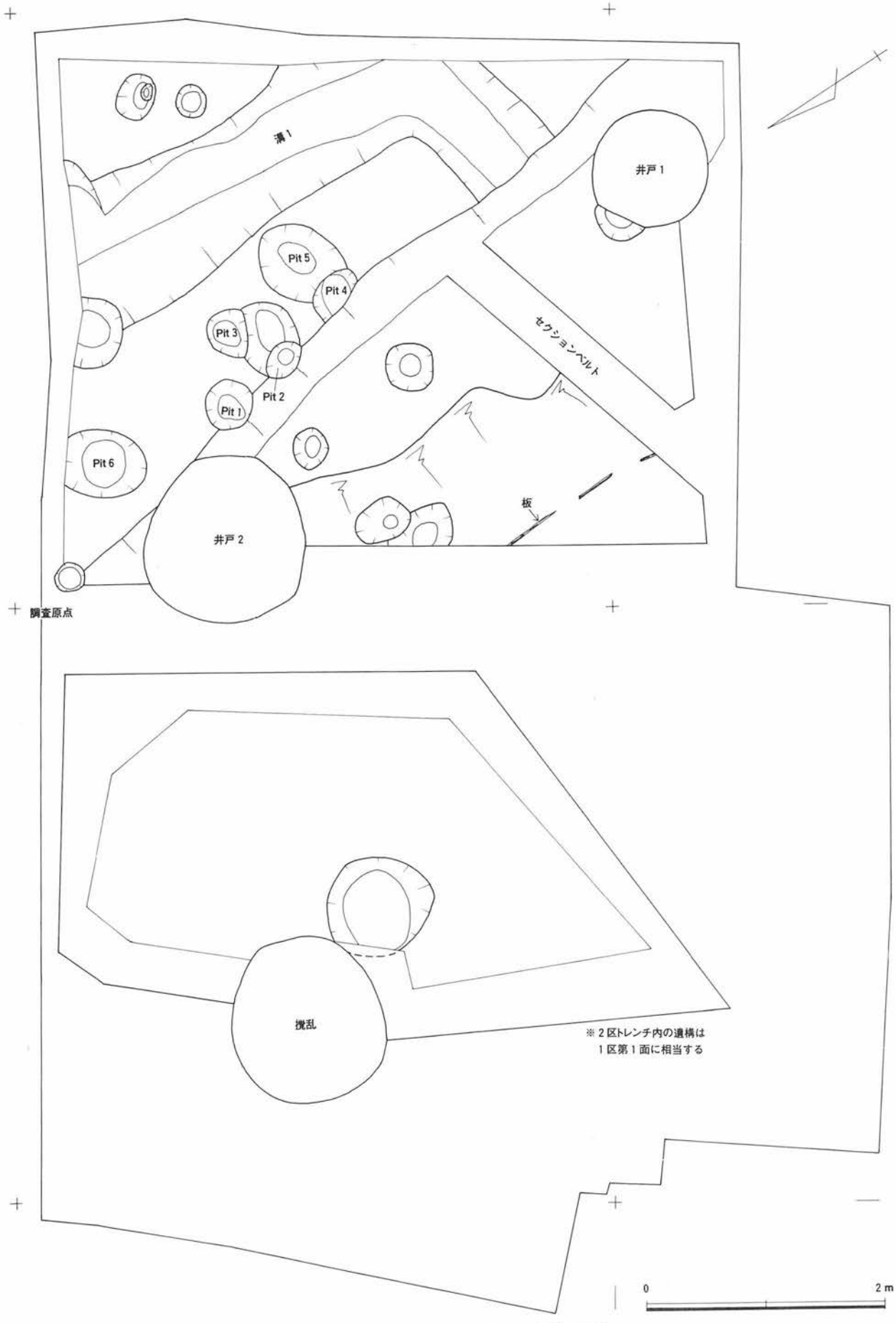


図4　第2面全体図（落込み遺構B面）

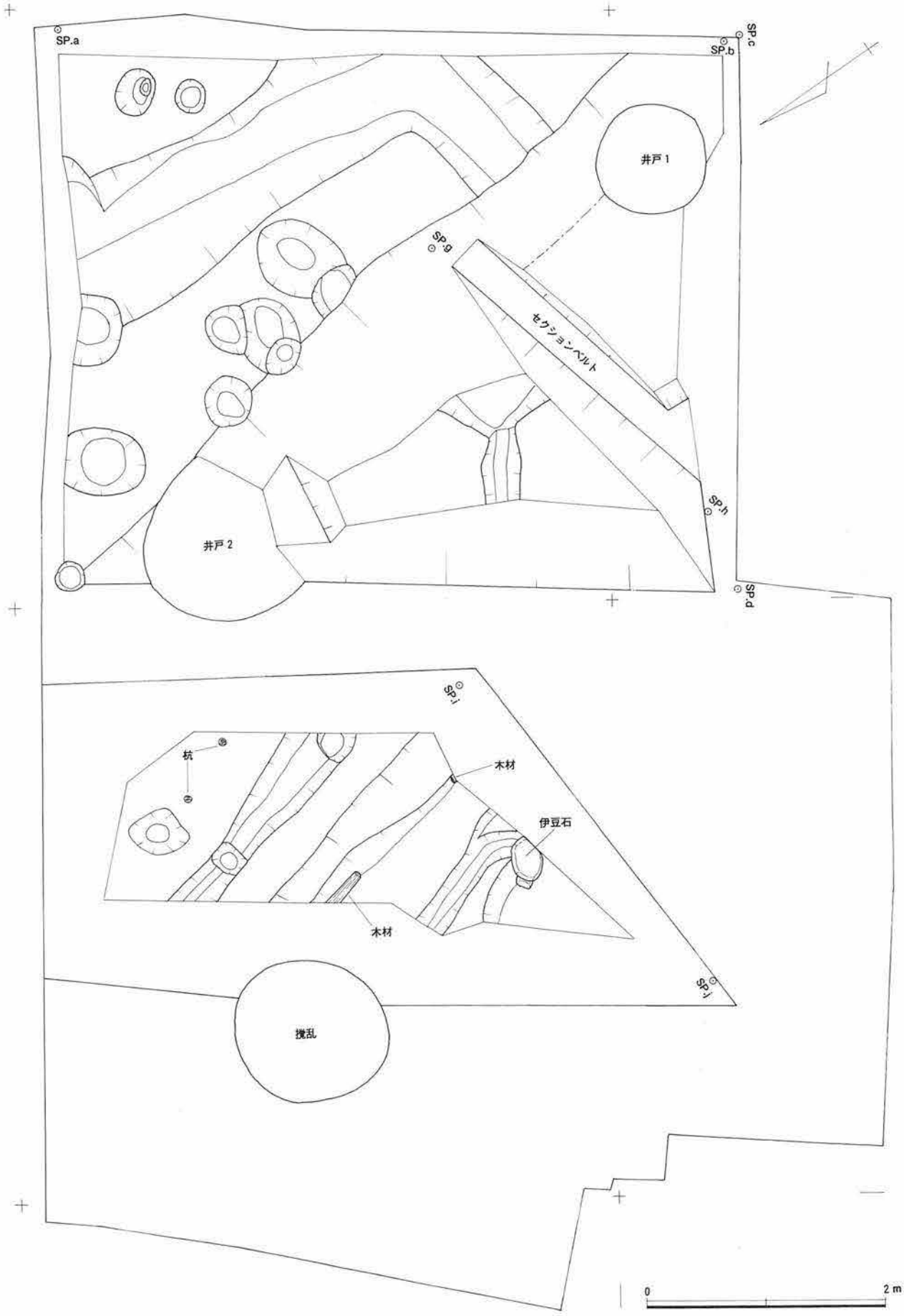


図5　第2面全体図（落込み遺構最下層）

1.淡茶灰色砂質土　2.土丹地業層　3.細かい土丹ブロック密　5大きな土丹塊密　6.暗茶褐色粘質土
7.淡黄灰色粘質砂　8.大きな土丹塊密　9.茶灰色粘質土　10.細かい土丹密　11.砂質土　12.茶灰色粘質土
13.黒灰色粘質土炭化物粒を含み、絞まり良し　14.大きな土丹塊密　15.灰色粘質土細かい土丹粒を多く含む
16.大きな土丹密　17.黒灰色粘質土炭化物粒を少量含む　18.黒灰色粘質土炭化物粒を含む、絞まり悪し　18.砂が多い
19.茶灰色粘質土土丹粒炭化物粒を少量含む　20.明茶灰色粘質土土炭粒少量含む　21.茶灰色粘質土細かい土炭粒密絞まり良し
22.暗茶褐色粘質土土丹粒密　23.灰色粘質土　24.灰色粘質土と土丹　25.黒色粘質土　26.明茶色粘質土
27.腐食土植物遺体多し　28.灰色粘質土と黒色粘質土の混在　29.黒色粘質土木片・植物遺体多く含む
30.暗茶褐色粘質土炭化物・植物遺体、砂を含む　31.腐食土植物遺体、木器を多く含む　32.暗褐色粘質土土丹粒、砂、腐食土混入
33.比較的粗い砂の流れ込み　34.暗茶褐色粘質土しまり悪し　35.黒色粘質土土丹粒炭化物木片を少量含むしまり良し
36.黒色砂質土土丹ブロック混入　37.玉砂利、砂、かわらけ片　38.明茶色粘質土絞まり悪し　39.茶灰色粘質土炭化物を含む

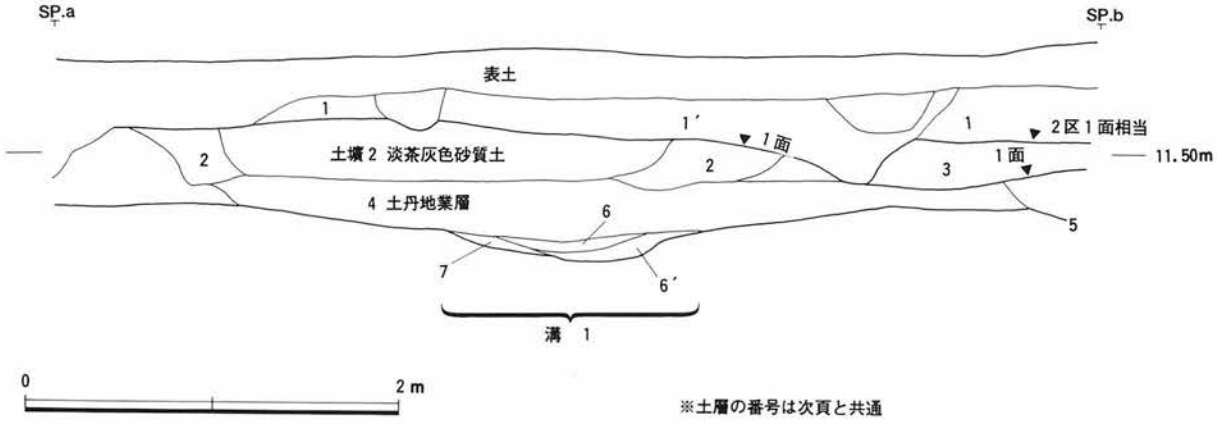


図6　1区東壁セクション図

落ち込み遺構には調査範囲内では西側に立ち上がりが見つからなかった。この遺構が溝とすれば実に幅広となる。あるいは意図的に西側を低く削り急激な段差を作ったものとも考えられる。その場合現在の六浦道道路面の高さが近年の削平でない可能性も生じる。調査地の南に既存建物があるが、これはその高さをある程度踏襲している可能性もあることを確認した。

落ち込み遺構の最下面を検出したところで再度ラジコンヘリコプターによる全景撮影を行い、3月15日に調査を終了した。

第3章　検出した遺構・遺物

第1面は、1区では地表からおよそ60cm下で検出された。大きな土丹を敷き詰めた面で、西に向かってゆるく傾斜する。2区ではこの傾斜の上に、やはり土丹を積んだ面が認められ、これを第1面とした。後述するが1区側は後世の削平によって2区の1面に相当する層が失われたものと推測できる。

第1面包含層で遺物は図8に示した。かわらけ・陶磁器・石製品など多種にわたる遺物が出土している。手捏ねのかわらけや常滑甕の口縁部片等、時代をさかのぼるものも混然と含まれる。肥前の香炉が年代的には最も下る15世紀の製品と見られ、この時期が第1面が埋められた時期と考えられよう。

なお、図15に示した遺物は2区で検出したものであり、1区では出土した遺物の量はいたって少なく、図化できるものがほとんど無かった。

図16・図17－8～17は2区トレンチ中、図7の土層3から11で検出された遺物である。2区の1面を構成するこの層位が、1区第1面覆土に相当する。手捏ねかわらけ・縄目の叩きを有する瓦等も検出されているが、15世紀の製品とおぼしき遺物も見られる。しかし井戸1からは16世紀にもかかるかと見ら

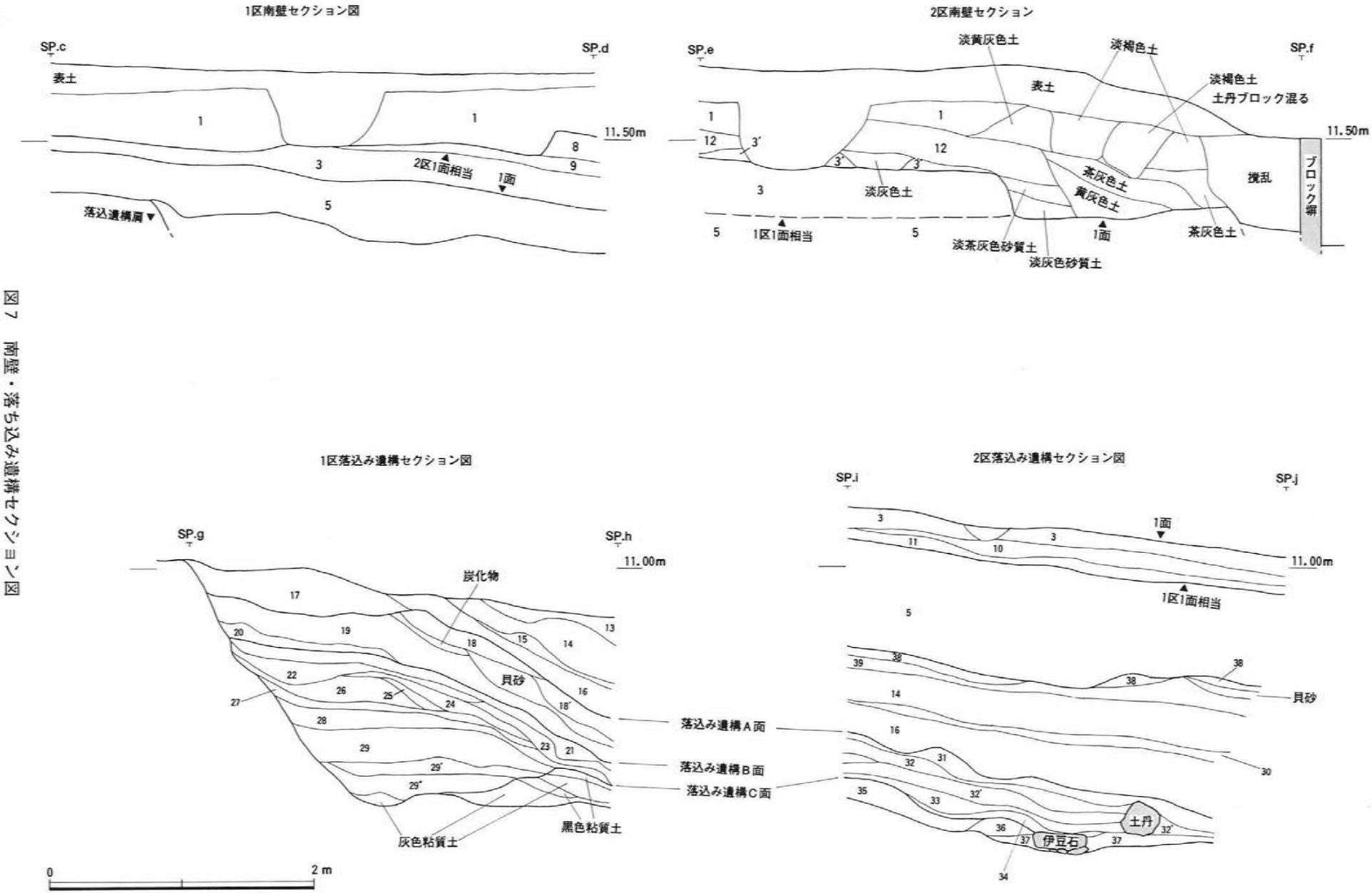


図7　南壁・落ち込み遺構セクション図

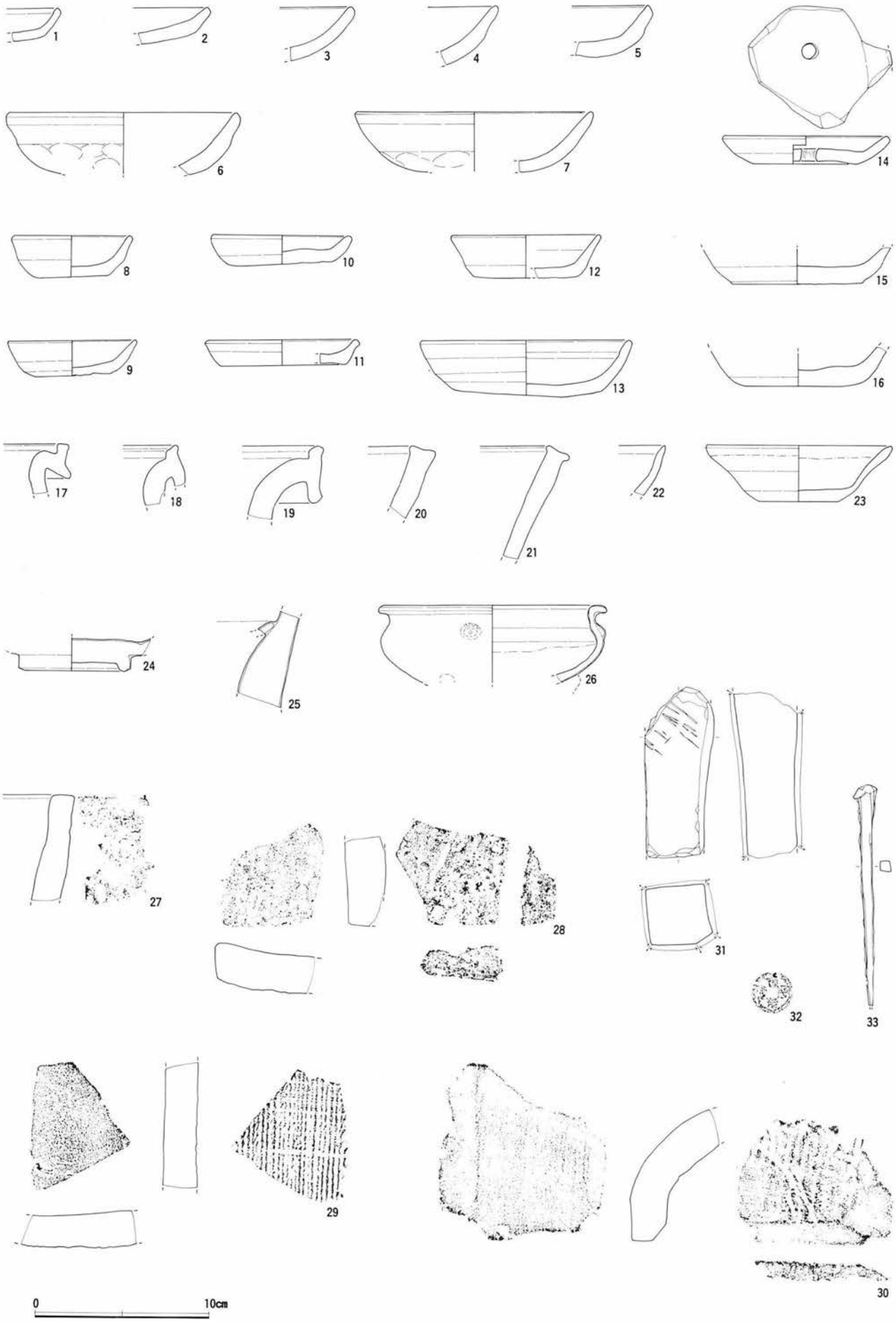


図８　２区１面包含層の遺物

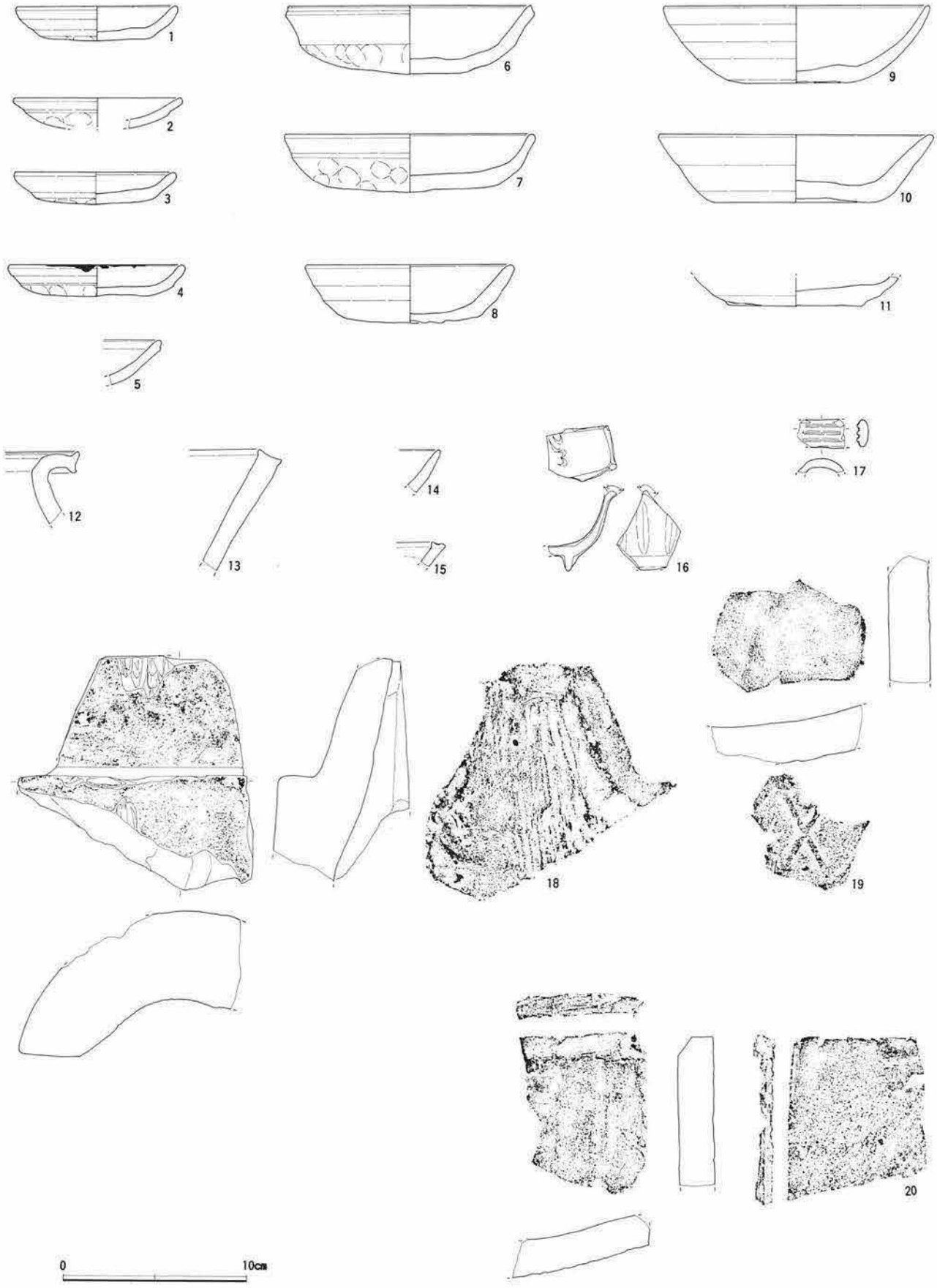


図９　１区第１面井戸１上層の遺物

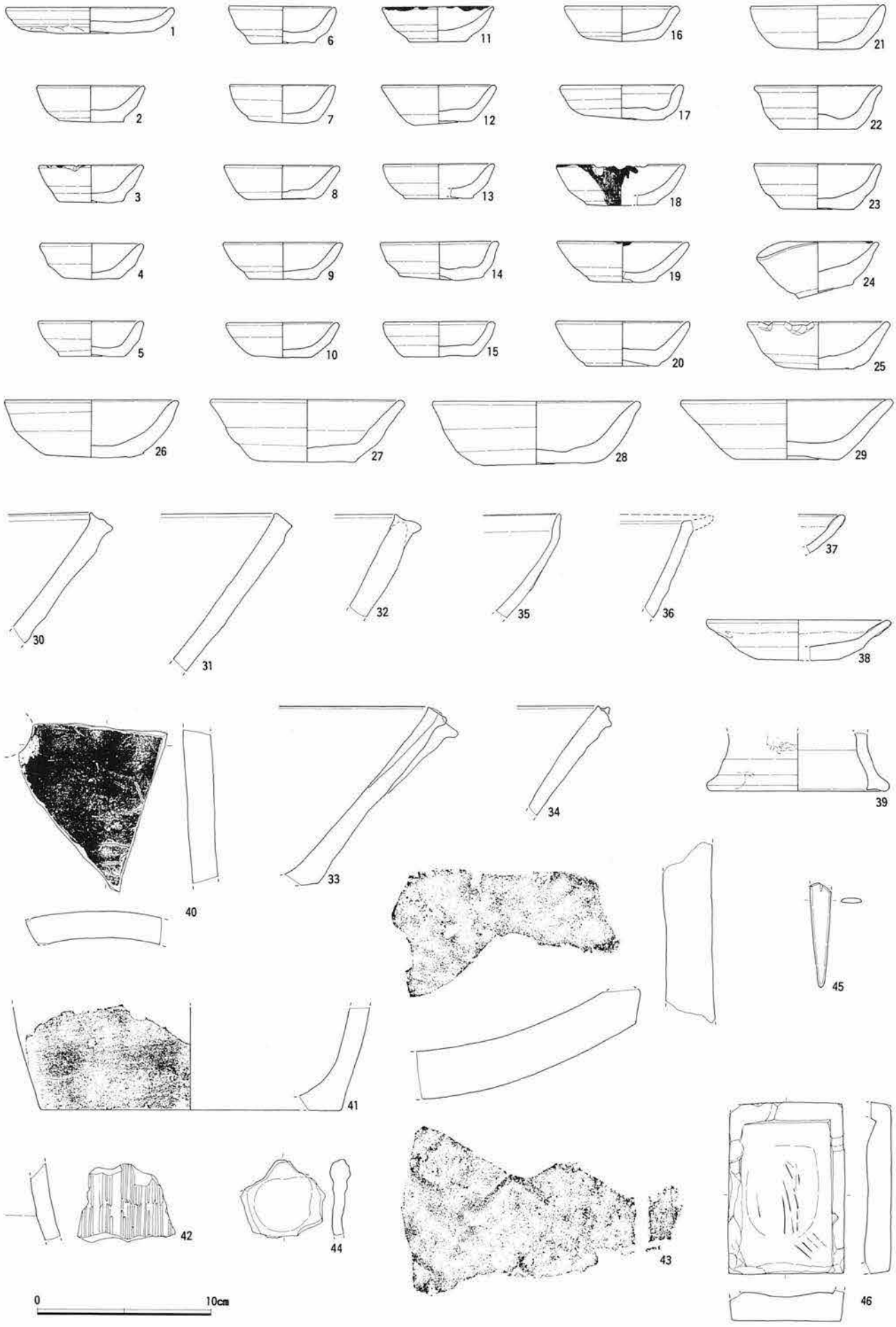


図10　1区第1面井戸1の遺物

れるかわらけが出土している。遺構の掘り込み面は本来は第１面より上層であったが、１区の部分では15世紀末以降に削平を受けた可能性が高い。

第１面で検出した遺構は主に次のとおりである。

１区井戸１　調査区の南東すみで検出した。第１面からの深さはおよそ1.6m。検出面での径がおよそ1.1mのほぼ円形で、内側の木枠等は残っていなかった。裏込めの痕跡も確認できない。

覆土から検出した遺物は、図９・10に示した。上層（図９）では手捏ねのかわらけやなど中世初頭の遺物が多く見られるが、下層（図10）では体部から口縁部にかけてラッパ状にひらく厚手のかわらけが多く含まれる。器高が深く底面が狭い特徴を持ち、小型のものは口径が6.5～７cmと小振り。年代は15世紀末～16世紀初頭か。これより年代を下る遺物は見つからず、井戸の廃棄された年代はこの時期と考えられる。

１区井戸２　１区の北西で検出した。１面からの深さはおよそ２m。検出面での径は1.4～1.7mのほぼ円形で、井戸１と同様、木枠等は残らず、裏込めの痕跡も確認できなかった。覆土からはやはりかわらけ片が多く出土しているが、最も新しい遺物は15世紀後半の製品と考えられる。

遺物は図11・12に示した。井戸１の場合と同じく古い年代の遺物も混入し、とくに瓦は鎌倉初期のものが含まれる。かわらけは井戸１のものに似るが、口縁端部を薄くつまみ出した特徴をもつものが主流となる。瀬戸の平碗なども含めて、井戸１より若干年代の上がる15世紀中頃～後半という年代が考えられよう。

１区土壙１　１区東壁近くで検出した比較的小さな土壙。土壙２に切られる。遺物はかわらけ片などの他に、銅製の仏像（図13）が出土している。体長約４cmの観音立像で、後背があったと見られるが欠損している。光背は一箇所を鋲で固定している。

１区土壙２　１区東壁にかかって検出した。調査区壁面にかかるところで幅は約2.6m。深さは10cm程度と浅い。土壙１を切る。

１区土壙３　１区の南西で検出した。径およそ1.5mのほぼ円形で、深さは約15cm。底面は比較的平ら。遺物は（図15－18・19）轆轤成形のかわらけで、いずれも器高が低く底面が狭い。

１区土壙４　井戸２の南で検出した。井戸２に切られる。径およそ1.2mのほぼ円形。深さは約20cm。底面は比較的平ら。遺物は図14－４～29。第２面検出時にこの下でほぼ同じプランを持つ土壙７を検出した。これは後述する落ち込み遺構Ａ面の更に上から掘られた遺構と見られるが、土壙４の下層である可能性も残る。遺物は図14－１～３。

２区溝２　２区のほぼ中央で東西に検出した。幅はおよそ30～40cm、深さは10cm足らずと小規模な溝である。第１面が西に向かって落ちる傾斜をもち、この溝も同じ傾斜をとる。土壙11に切られ、土壙11以南は平行して北側に若干深い溝が走る。遺物は図17－１～４。

２区土壙11　溝２を切って第２区のほぼ中央で検出した。径1.4～1.8mの不整円形で、深さはおよそ１m。

その他の遺構　上記以外にもいくつかの土壙・ピット等を検出している。並び方に規則性が見出せるものではなかった。また２区では東西方向に走る轍状の浅い溝を検出した。

第２面包含層（１区で検出した第１面を構成する層位）の遺物は１区が図15－１～15、２区が図17－18～30である。２区トレンチの土層５も同じ層位に該当し、その土層５～39で検出した遺物が図17－18～30である。（土層38・39は、落ち込み遺構の覆土に当たるものか、面構成土に当たるものか判別できない。）かわらけは図15－10のように径が小型、比較的深く体部の立ち上がりが丸みを持つ特徴の轆轤

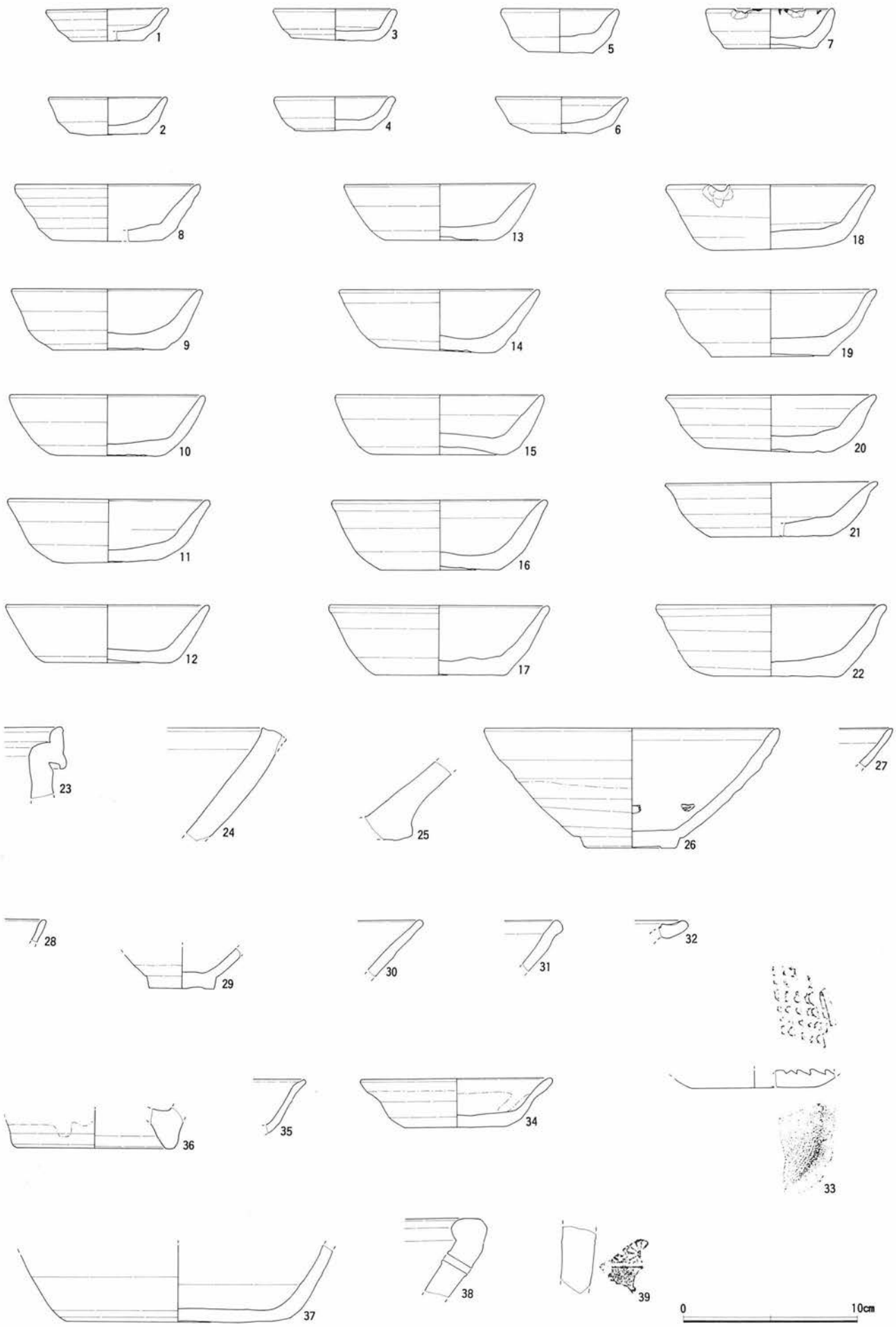


図11　1区第1面井戸2の遺物（1）

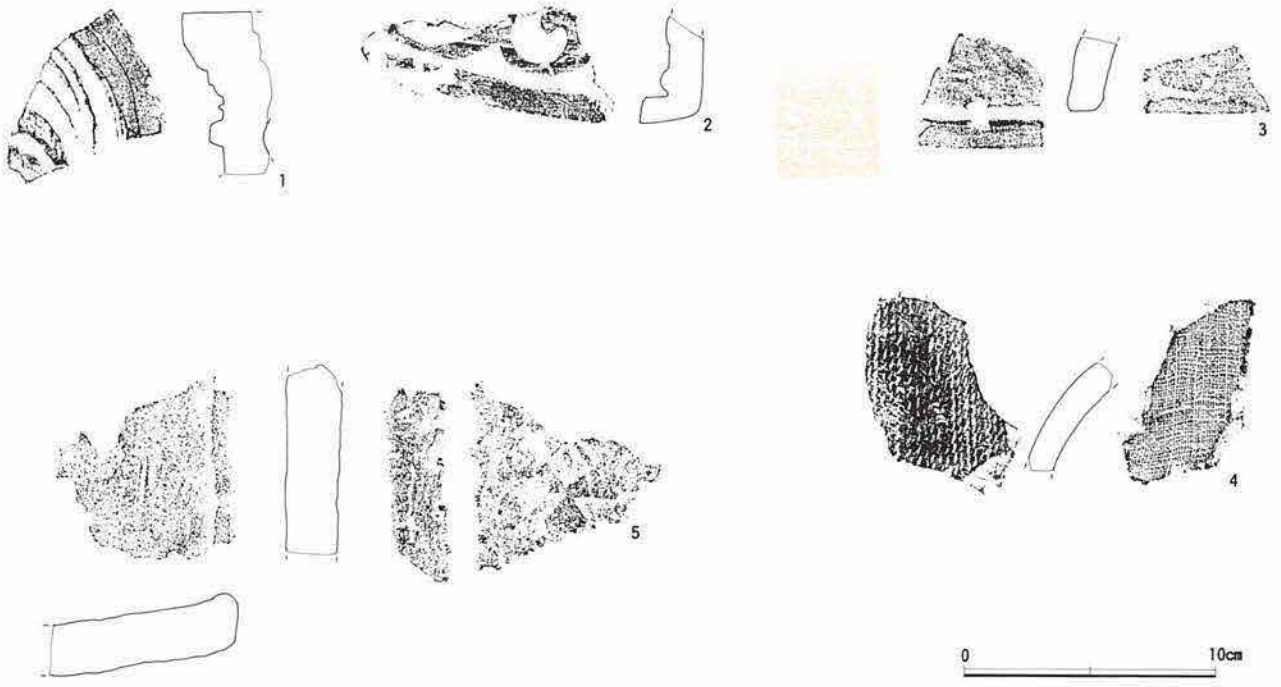


図12　1区第1面井戸2の遺物（2）

成形のかわらけが、図示したなかでは比較的新しいものと考えられる。（概ね13世紀前葉のものか。）図15－11のように体部断面が三角形を呈する轆轤成形のかわらけも混入するが、手捏ね成形のかわらけも多く、その器形も口縁部の特徴等にばらつきが見られる。かわらけ以外の遺物では青磁劃花文碗、渥美の甕の胴部片・縄目の叩きを有する女瓦片等、中世初期の組成が認められる。これらのことから、2面が使われた13世紀の早い段階からで、2面が埋められ1面が構築されるまでにはかなりの時間的幅があったと考えることができる。

第2面は第1面の下で検出した中世地山面である。検出した主な遺構は次のとおりである。

1区溝1　調査区東よりを走る浅い溝で、途中から西にほぼ90°曲がり大落ち込みの肩に切られる。幅は広いところで約1.2m。西に曲がると幅がやや狭まり0.8m程となる。勾配はほとんどない。深さは20cm程度。南に向かってやや浅くなる。この遺構の覆土で検出した遺物は少なく、図15－16・17に示したものの他、かわらけの小片が数点あっただけである。

落ち込み遺構　井戸の壁面を観察することにより、1区を斜めに横断するかたちで壁プランを確認した。確認面からの深さは約1.9mとなった。一見溝状であるが、調査した範囲で対応する対岸の立ち上がりを見つけることができなかった。さらに第2区もトレンチを設けた範囲は全てこの遺構の覆土となり、立ち上がりはなかった。溝と仮定すれば、その幅は6mを越える大規模なものということになる。最下層では底面にさらに溝状のくぼみが設けられている。覆土の下層は自然堆積を伺わせる遺物を含んだ腐植土が幾層か重なっていたが、この遺構が完全に埋まるまでの間、途中何時期かにわたってこの落ち込み遺構の中に面が構築されている。自然堆積によってできた土層と人為的に構築された面を見極めるのは難しかったが、明らかに土壙やピットなどの遺構が掘り込まれている面が少な

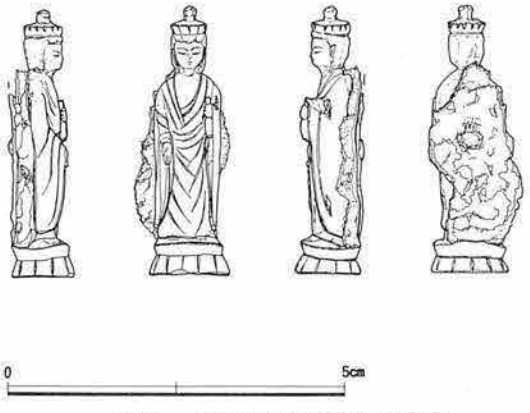


図13　1区第1面土壙1の遺物

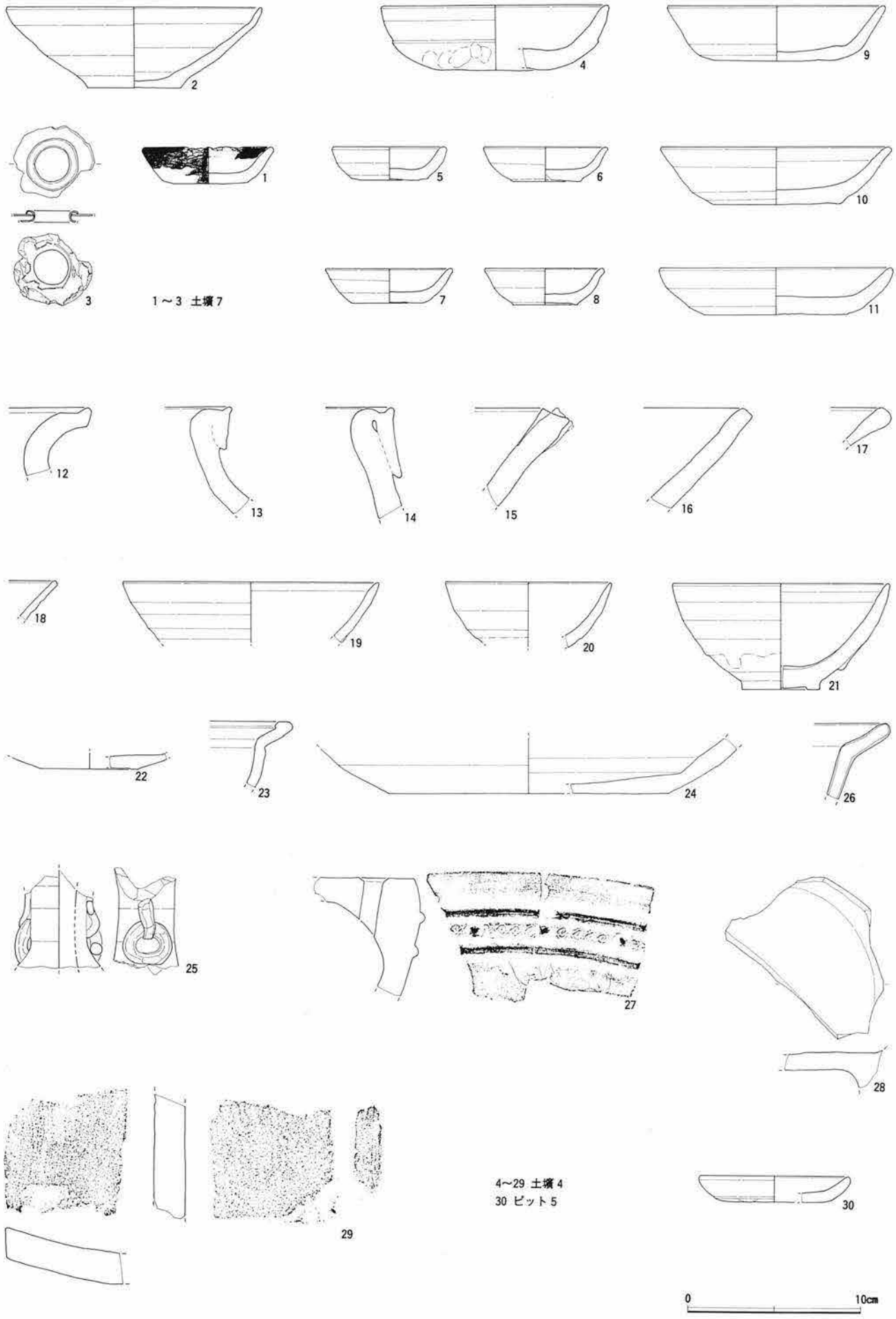


図14　1区第1面土壙7・土壙4・第2面ピット5の遺物

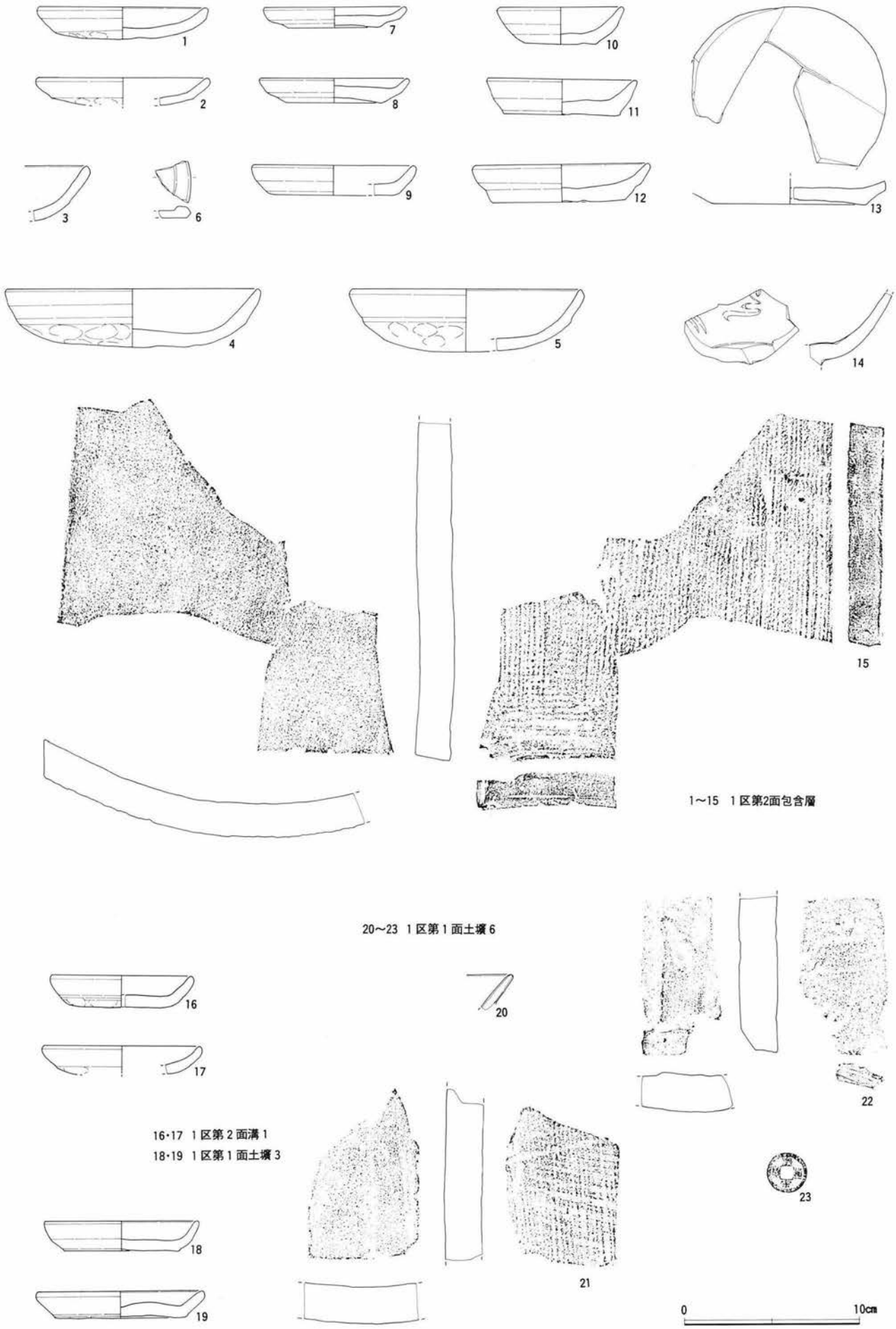


図15　1区第2面包含層・溝1・土壙3・土壙6の遺物

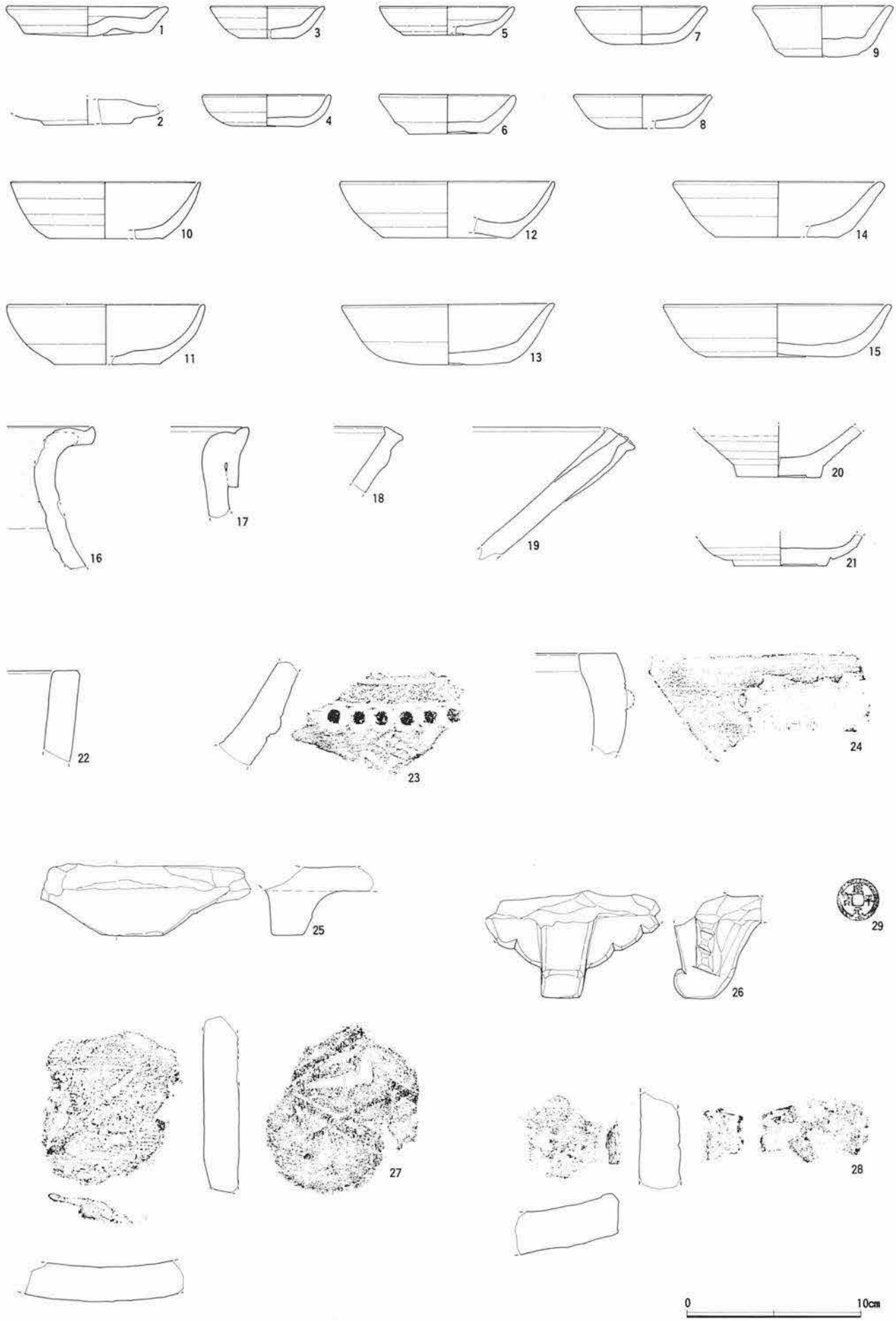


図16　2区第1面構成土の遺物

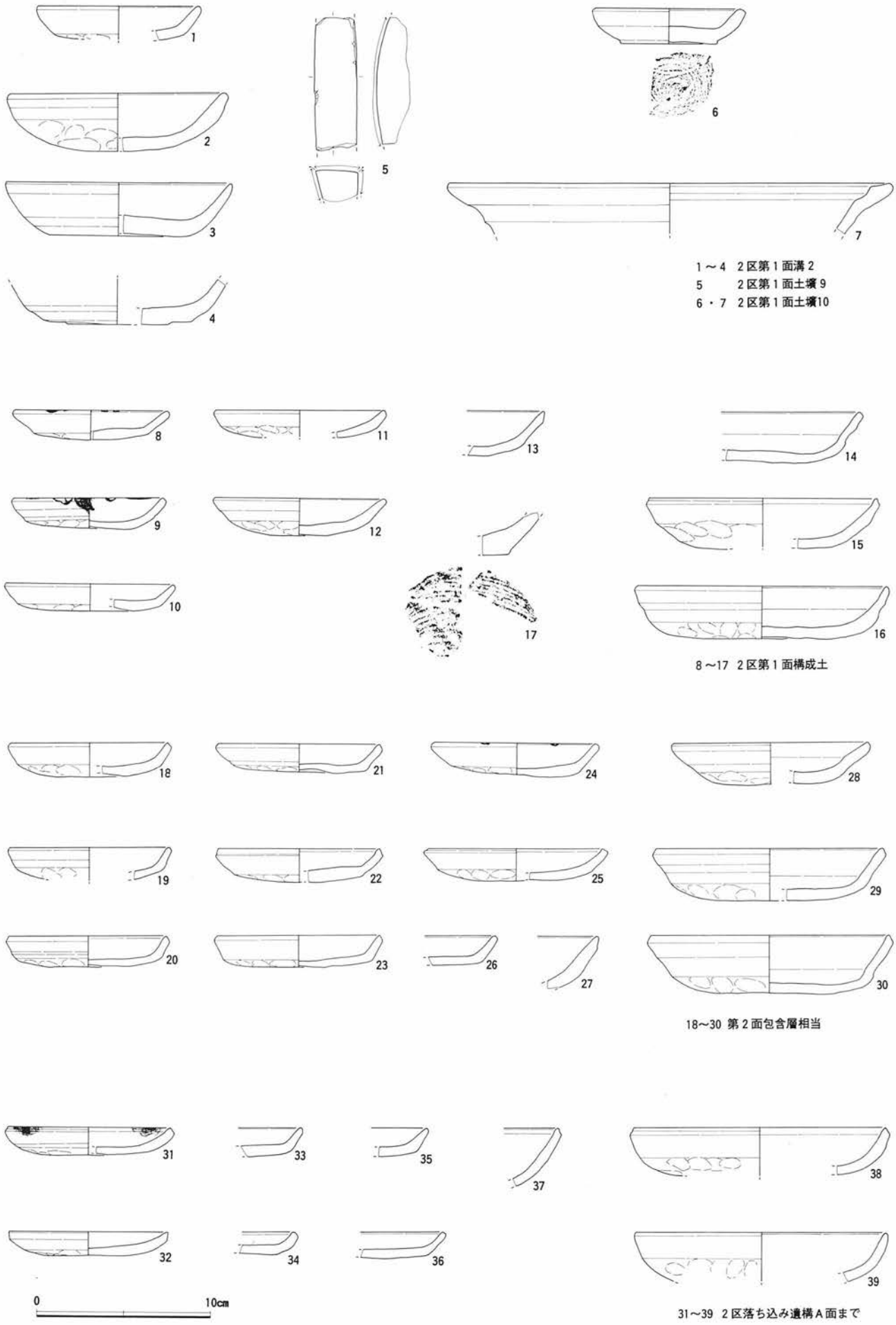


図17　2区第1面遺構・トレンチの遺物

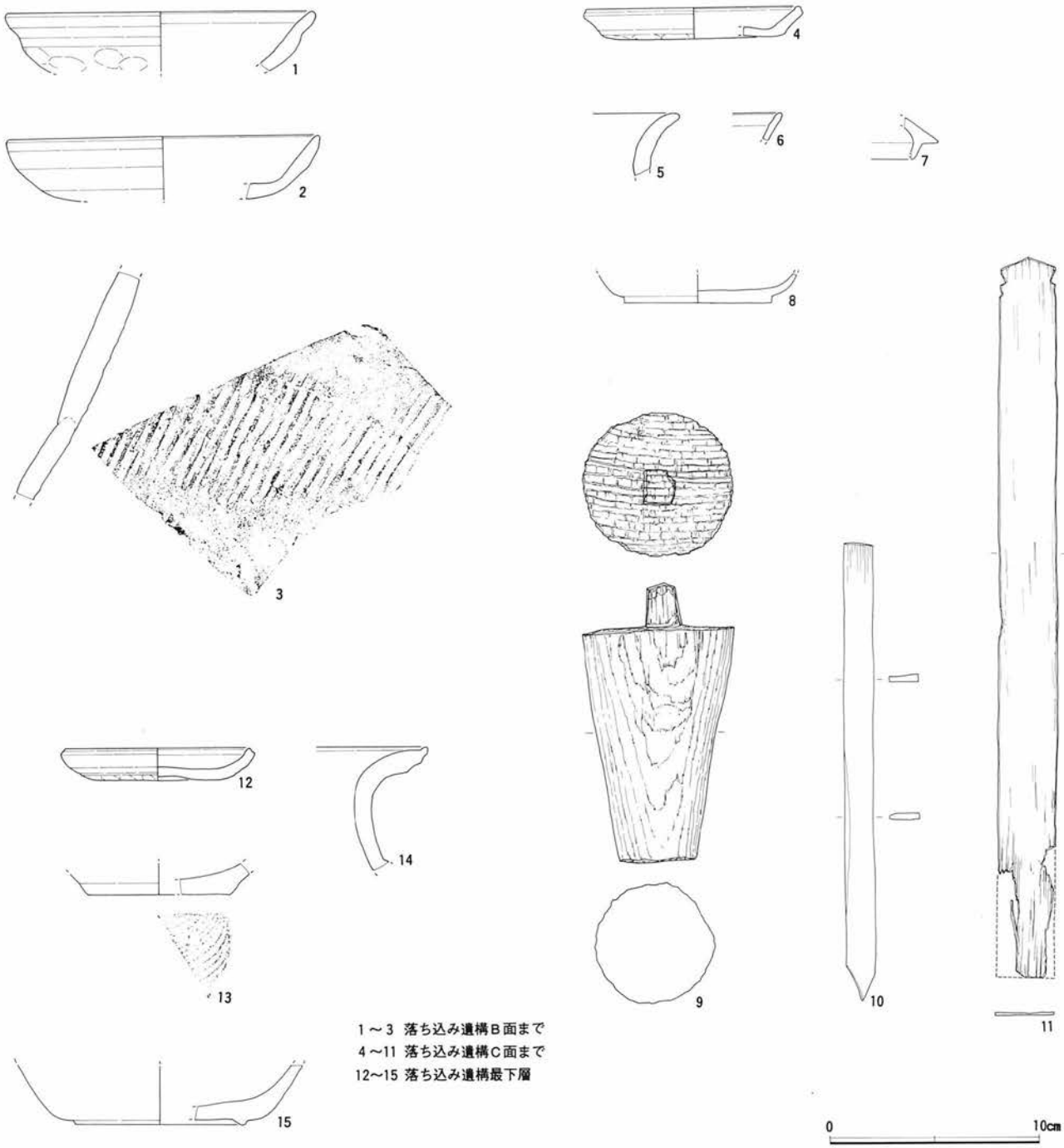


図18　1区落ち込み遺構の遺物

くとも3面あることを確認した。これらの面を、便宜上上層からA面・B面・C面と呼ぶこととした。

【A面】　第1区で掘り込み面から壁を追って掘り下げ、約30cm下で検出される茶灰色粘質土で構成される面。この面でピットを検出した。面の構成土自体は西にむかって傾斜し、セクションを観察する限り西に向かって異質の土を積み増している。自然堆積か面として使われていたか層かは確認できなかった。2区で設けたトレンチで純粋に落ち込み遺構の覆土と言える層位は、図7に表した土層38または14以下ということになるが、図17－31～39が土層14及び30（図7参照）で検出した遺物である。手捏ねかわらけが大半を占める。その特徴にはばらつきがあるものの、器高が低く、口縁部の断面が四角形を呈するものが多くみられる。

【B面】　A面を30cmほど掘り下げたところで検出した細かい土丹粒で構成される面。1区ではピット・南北に土留め状に渡された細い木材などが検出された。2区ではこれに該当する面は見られなかった。

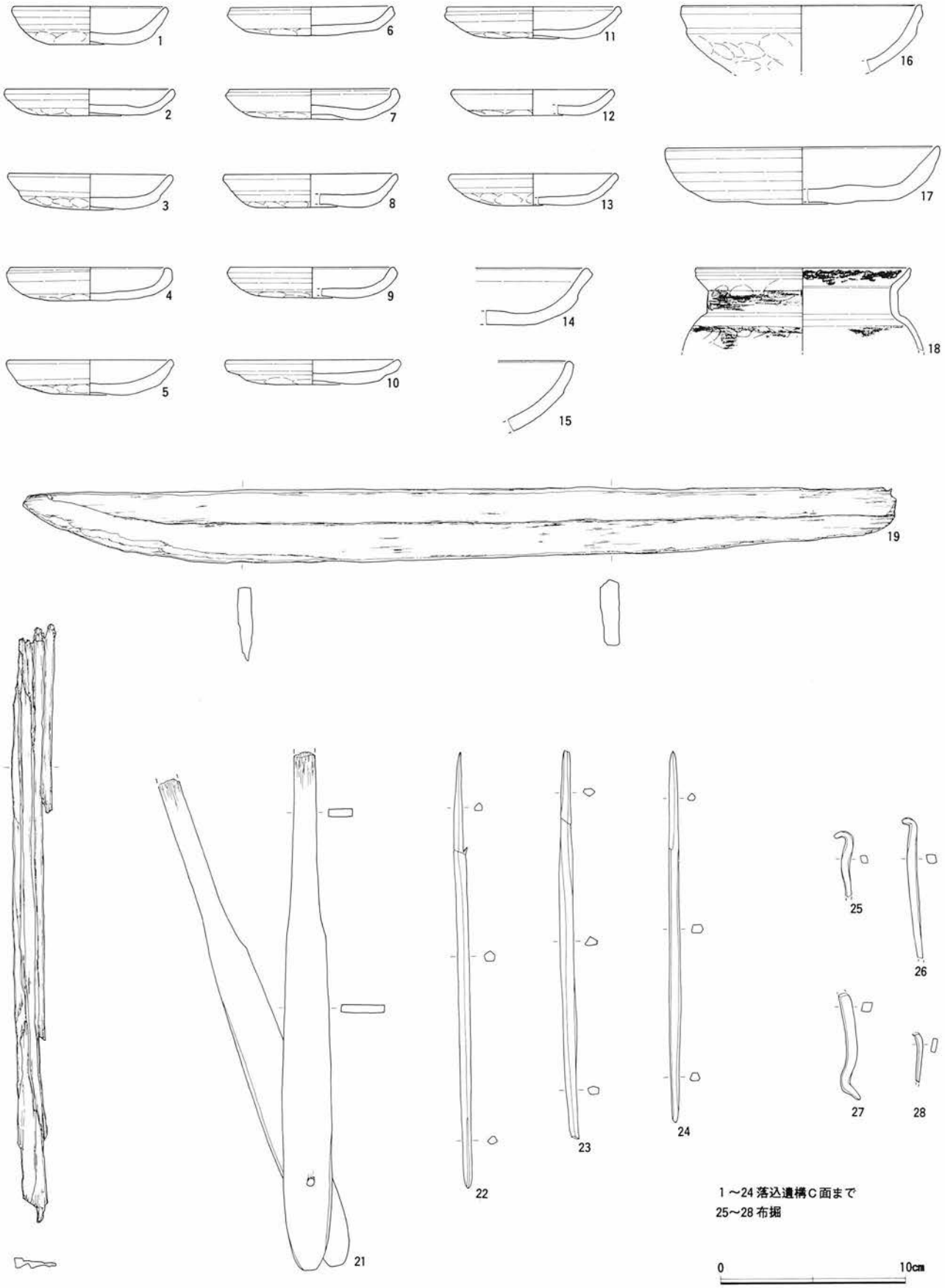


図19　2区落ち込み遺構C面まで・布掘りの遺物

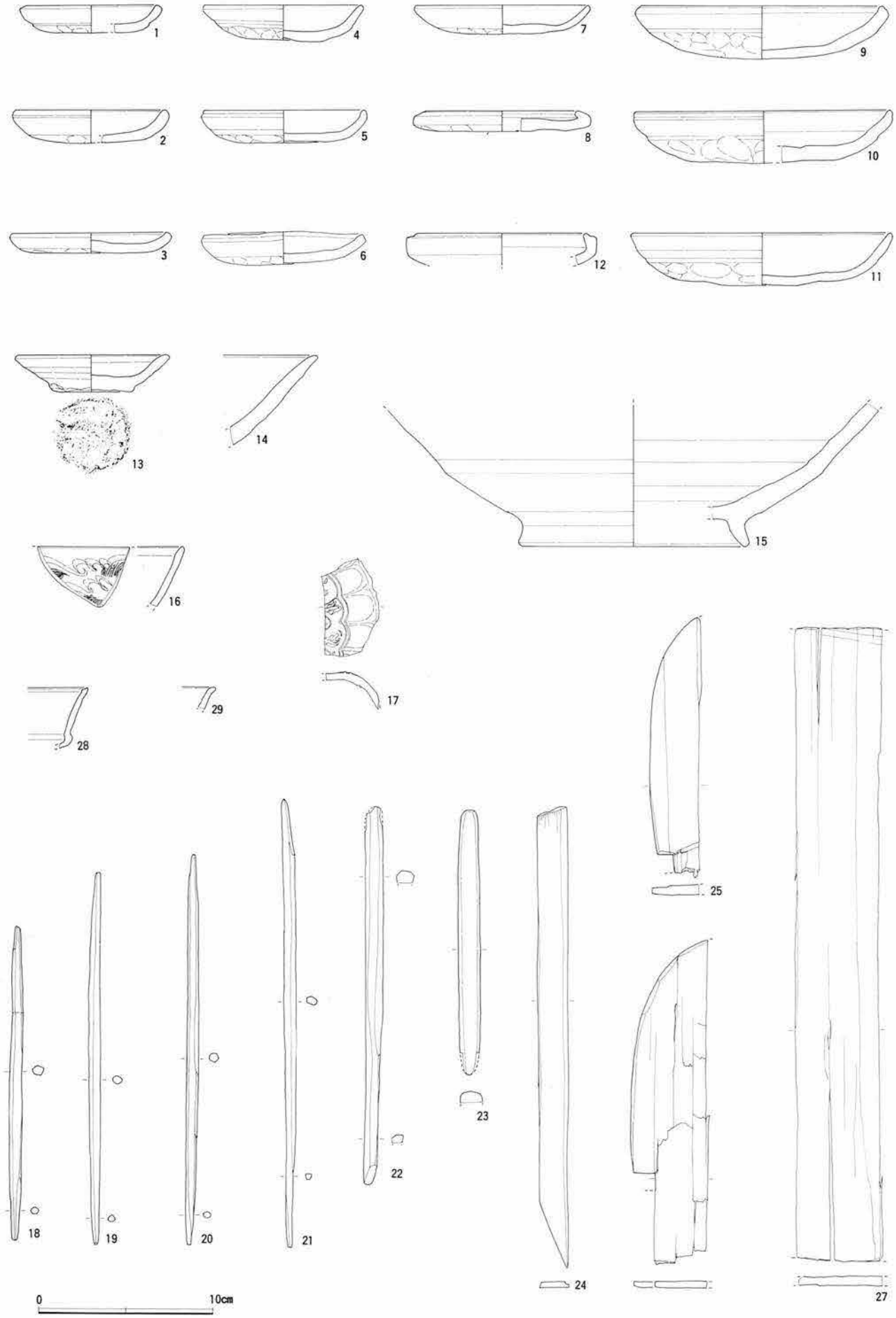


図20　２区落ち込み遺構最下層の遺物

遺物観察表

図８　２区第１面包含層　　単位はcm（　）は復元数値

番号	種別・器種	口径	底径	器高	成　形　・　特　徴　等
1	かわらけ	－	－	－	手捏ね　口縁部片
2	かわらけ	－	－	－	手捏ね　口縁部片
3	かわらけ	－	－	－	手捏ね　口縁部片
4	かわらけ	－	－	－	手捏ね　口縁部片
5	かわらけ	－	－	－	手捏ね　口縁部片
6	かわらけ	(12.9)	－	－	手捏ね
7	かわらけ	(13.2)	－	－	手捏ね
8	かわらけ	6.6	4.3	2.4	轆轤
9	かわらけ	7.3	4.4	2.0	轆轤
10	かわらけ	7.7	6.0	1.7	轆轤
11	かわらけ	8.5	7.2	1.5	轆轤
12	かわらけ	(8.4)	(6.0)	2.5	轆轤
13	かわらけ	11.8	8.4	3.1	轆轤
14	かわらけ	(9.2)	6.2	1.6	轆轤　底部中心に径0.9cmの穿孔あり
15	かわらけ	－	(7.4)	－	轆轤
16	かわらけ	－	(6.8)	－	轆轤
17	常滑甕	口縁部片　浅くN字状に折れ曲がる口縁の形態　６形式			
18	常滑甕	口縁部片　口縁は下部が欠損するが、N字状に折れ曲がる　７形式			
19	常滑甕	口縁部片　口縁はN字状に折れ曲がり、幅のある縁帯をなす　７形式か			
20	常滑捏ね鉢	口縁部片　７形式か			
21	常滑捏ね鉢	口縁部片　10形式か			
22	瀬戸天目碗	口縁部片　胎土は灰白色　釉は褐釉（黒釉の上に二度掛けしたものか）			
23	瀬戸縁釉皿	口径（10.4）　底径（4.4）　器高3.2　胎土は灰白色　釉は褐釉			
24	青磁　碗	龍泉窯　底径（5.7）　釉は緑青色透明　釉層はごく薄い			
25	青磁酒会壺	底部に近い胴部片　龍泉窯　外面は幅の狭い蓮弁文　胎土は灰白色堅緻 釉は明緑灰色不透明　粗い貫入あり　貼り付けた底部の一部が残存 明代（15世紀）のものか			
26	青磁　香炉	肥前（有田）　口径12.4　釉は水青色透明　肩部に貼り付け菊花文 胴下部に脚の剥がれ痕あり			
27	瓦質手焙り	口縁部片　胎土は黄灰白色　胎芯は赤白色砂粒・白色粒を含む 口縁部直下沈線間に菊花文帯　その下に珠文帯			
28	女　瓦	小片　厚さ2.3　粗胎　凸面叩き目は不鮮明　永福寺Ⅱ期			
29	女　瓦	小片　厚さ1.8　精良な胎土　凸面は縄目叩き　鎌倉初期			
30	男　瓦	厚さ2.3　精良な胎土　焼成はやや弱く比較的軟質　表面は燻べ状　鎌倉初期			
31	砥　石	残存長9.9　幅3.6　厚さ3.4　群馬県上野産の中砥　砥面は４面			
32	銭	治平元寶　北宋　初鋳1064年　篆書			
33	鉄　釘	残存長12.7　幅0.55　厚さ0.6			

図9　1区第1面　井戸1上層

番号	種別・器種	口径	底径	器高	成　形　・　特　徴　等
1	かわらけ	8.6	−	1.9	手捏ね
2	かわらけ	(9.0)	−	−	手捏ね
3	かわらけ	8.6	−	1.7	手捏ね
4	かわらけ	(9.3)	−	1.7	手捏ね　口縁部にタール付着　灯明皿か
5	かわらけ		−	−	手捏ね
6	かわらけ	13.1	−	3.7	手捏ね
7	かわらけ	(13.4)	−	3.1	手捏ね
8	かわらけ	11.0	7.3	3.2	轆轤
9	かわらけ	(14.2)	(7.2)	4.2	轆轤
10	かわらけ	14.7	8.6	3.2	轆轤
11	かわらけ	(7.2)	−	−	轆轤
12	常滑　甕	口縁部片　N字状の断面を呈する　6形式　口縁部に降灰釉			
13	常滑捏ね鉢	口縁部片　胎土は橙灰色やや大粒の白色粒・砂粒含む			
14	瀬戸　平碗	口縁部片　胎土は灰色　釉は灰釉、淡緑灰色半透明			
15	瀬戸　卸皿	口縁部片　胎土は黄灰白色　釉は灰釉、淡緑色透明			
16	青　磁 折縁鉢	胴部〜底部片　龍泉窯　素地は灰白色で緻密　釉薬は青緑色半透明　釉層は厚い 外面に単弁の蓮弁文　見込みに劃花文			
17	白磁四耳壺	横付けの耳部分　型による成形で3条の条線を凸型につくる　素地は灰色 釉は灰白色不透明			
18	男　瓦	玉縁部片　玉縁長7　残存厚3.5　粗胎　部分的に燻べ状に黒灰色を呈する 永福寺Ⅱ期（13世紀半ば）			
19	女　瓦	小片　厚さ2.3　精良な胎土　凸面は叩き目は斜格子　水殿瓦窯産と見られ永福寺 Ⅱ期			
20	女　瓦	小片　厚さ2.0　精良な胎土　胎土色は灰白色だが表面は燻べ状黒色　叩き目は不 鮮明　粗い離れ砂付着　厚さ・胎土から見て13世紀後半のものか			

図10　1区第1面　井戸1

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成形
1	かわらけ	9.5	−	1.5	手捏ね
2	かわらけ	6.	3.7	2.1	轆轤
3	かわらけ	5.8	3.65	2.2	轆轤　口縁部にタール付着　灯明皿か
4	かわらけ	(5.7)	(3.1)	2.1	轆轤
5	かわらけ	5.8	3.75	2.	轆轤
6	かわらけ	6.	3.6	2.1	轆轤
7	かわらけ	5.9	3.9	2.1	轆轤
8	かわらけ	6.5	3.9	2.	轆轤
9	かわらけ	6.6	3.9	2.1	轆轤
10	かわらけ	6.2	3.4	2.	轆轤

11	かわらけ	6.3	3.2	2.0	轆轤　口縁部にタール付着　灯明皿か
12	かわらけ	6.4	3.7	2.2	轆轤
13	かわらけ	(6.3)	(3.8)	2.0	轆轤
14	かわらけ	6.6	4.5	3.2	轆轤
15	かわらけ	6.2	4.0	2.0	轆轤
16	かわらけ	(6.4)	(3.8)	2.0	轆轤
17	かわらけ	6.8	4.5	1.9	轆轤
18	かわらけ	7.2	3.9	2.4	轆轤
19	かわらけ	7.4	3.7	2.4	轆轤
20	かわらけ	7.5	4.2	2.6	轆轤
21	かわらけ	7.6	4.6	2.5	轆轤
22	かわらけ	(7.0)	4.4	2.5	轆轤
23	かわらけ	(7.2)	(4.3)	2.6	轆轤
24	かわらけ	7.0	3.2	3.0	轆轤
25	かわらけ	7.9	4.3	2.7	轆轤
26	かわらけ	9.5	4.9	3.3	轆轤
27	かわらけ	10.8	5.7	3.6	轆轤
28	かわらけ	11.8	7.1	3.6	轆轤
29	かわらけ	(12.0)	(6.0)	3.4	轆轤
30	常滑捏ね鉢	口縁部片　内面摩滅が顕著　胎土は赤橙色　白色粒・黒色粒　石英を含む			
31	常滑捏ね鉢	口縁部片　胎土は暗赤茶色　長石粒を含みしまり良い　内面は摩滅			
32	常滑捏ね鉢	口縁部片　胎土は赤灰色　白色粒を多量に含む			
33	常滑捏ね鉢	口縁～胴部片　胎土は赤橙色　白色粒　黒色粒・石英を含む　砂底			
34	常滑捏ね鉢	口縁～胴部片　胎土は暗赤茶色　微細な長石粒を含む			
35	瀬戸天目碗	口縁部片　胎土は灰白色堅緻　釉は黒釉　口縁部に褐釉を二度掛けする			
36	瀬戸深皿	口縁部片　胎土は灰黄色　釉は灰釉ハケ塗り			
37	瀬戸縁釉皿	口縁部片　胎土は灰白色　釉は灰釉			
38	瀬戸縁釉皿	口径（10.3）　底径（4.8）　器高2.3　胎土は灰色　釉は灰釉			
39	瀬戸灯明台	脚部片　底径（10.1）　胎土は灰白色精良　外体部に褐釉を施すがむらがあり露胎部が目立つ			
40	土風呂	胴部片　胎土は赤灰色　白色粒　砂粒を含む　外面は黒色処理を施し、横方向のみがき			
41	瓦質手焙り	底径（17.2）　胎土は灰白色　白色粒・黒色粒・雲母を含む　外面はみがき			
42	瓦質灯明台	胴部片　胎土は赤灰色　多量の白色粒・赤色粒を含む　外面は黒色処理を施し縦方向にのみがきを施す			
43	女　瓦	厚さ2.8　粗胎　凸面は斜格子の叩き　二次焼成を受ける　永福寺Ⅱ期			
44	鉄製品	残存長4.4　残存幅4.8　最大厚1.1　錆に覆われており原型も使用目的も不明			
45	笄	骨製　残存長6.0　幅1.2　厚さ0.2			
46	硯	長さ9.9　幅6.6　残存厚1.4　石材は黒色粘板岩　全体に剥離している			

図11　1区第1面　井戸2（1）

番号	種別・機種	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	(6.8)	(4.0)	1.9	轆轤
2	かわらけ	6.6	4.5	2.1	轆轤
3	かわらけ	6.8	4.7	1.8	轆轤
4	かわらけ	6.7	4.4	1.9	轆轤
5	かわらけ	6.6	3.7	2.5	轆轤
6	かわらけ	(7.4)	(3.4)	2.1	轆轤
7	かわらけ	7.2	5.4	2.2	轆轤
8	かわらけ	10.4	6.3	3.3	轆轤
9	かわらけ	10.7	6.4	3.5	轆轤
10	かわらけ	(11.0)	(6.6)	3.5	轆轤
11	かわらけ	11.3	6.3	3.6	轆轤
12	かわらけ	(11.5)	(7.2)	3.3	轆轤
13	かわらけ	(10.8)	(6.4)	3.2	轆轤
14	かわらけ	11.3	6.6	3.5	轆轤
15	かわらけ	(11.8)	(7.5)	3.4	轆轤
16	かわらけ	(12.2)	(6.9)	4.0	轆轤
17	かわらけ	12.4	7.9	4.0	轆轤
18	かわらけ	11.7	8.0	3.7	轆轤
19	かわらけ	11.9	6.7	3.8	轆轤
20	かわらけ	11.8	7.6	3.2	轆轤
21	かわらけ	(11.8)	(7.5)	3.4	轆轤
22	かわらけ	13.0	7.4	4.	轆轤
23	常滑　甕	口縁部片　7形式　色調は暗褐色　胎土は微砂粒を含む　口縁部に若干の降灰			
24	常滑捏ね鉢	口縁部片　7形式　色調は淡赤褐色　胎土は砂粒　長石粒　石英　小石粒を含む			
25	常滑捏ね鉢	底部片　色調は内面灰褐色　外面淡橙色　芯部は黄橙色　甕の可能性もあり			
26	瀬戸平碗	口径16.8　底径5.0　器高6.8　胎土は灰橙色　釉は灰釉 重ね焼きの目跡が内底面に5カ所			
27	瀬戸平碗	口縁部片　胎土は灰黄色　やや軟質　釉は灰釉			
28	天目碗	口縁部片　中国産か　胎土は暗灰色堅緻　釉は黒釉に褐釉を二度掛け			
29	瀬戸天目碗	底径3.8　胎土は灰色　砂粒が多い　釉は黒釉　削り出し高台			
30	瀬戸　鉢	口縁部片　胎土は灰白色　釉は灰釉ハケ塗り			
31	瀬戸　鉢	口縁部片　胎土は灰黄色で微砂粒を少量含む　釉は灰釉ハケ塗り			
32	瀬戸深皿	口縁部片　胎土は黄灰色　釉薬は灰釉漬け掛け　緑灰色			
33	瀬戸卸皿	底径7.4胎土は灰色堅緻　内定部は釉が付着しない　外底部は回転糸切り			
34	瀬戸縁釉皿	口径（10.8）　底径（5.8）　器高2.8　胎土は灰黄色　釉は褐釉			
35	白磁口兀皿	口縁部片　素地は灰白色　微砂粒を少量含む緻密土　釉は灰白色透明			
36	青白磁梅瓶	底部片　景徳鎮窯　底径（8.8）　胎土は灰白色　釉は水青色半透明			

37	瓦質香炉	底径12.8　胎土は灰白色　砂粒　白色粒を含みキメ粗い　色調は内外面ともに灰黒色　内面と外側面はみがき
38	瓦質手焙り	口縁部片　胎土は灰色で砂粒・雲母を含む　色調は黒灰色
39	瓦質手焙り	胴部片　胎土は灰白色で砂粒・小石粒含む　色調は黒灰色　菊花スタンプ文を巡らす

図12　1区第1面　井戸2（2）

1	鐙　瓦	巴文瓦当部片　周縁をへらで削る　精良な胎土で堅緻　胎土・文様から見て鎌倉初期のものか
2	宇　瓦	唐草文瓦当部片　精良な胎土　永福寺Ⅰ期（鎌倉初期）
3	男　瓦	小片　精良な胎土　残存部分の最大厚1.5　鎌倉初期のものか
4	男　瓦	小片　厚さ1.3　精良な胎土　鎌倉初期のものか
5	女　瓦	小片　厚さ2.3　粗胎　凸面は三鱗と花菱の叩き　永福寺Ⅲ期（13世紀後半）

図13　1区第1面　土壙1

	銅製仏像	体長8.0　観音立像　光背欠損

図14　1区第1面　土壙7

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	7.3	4.4	2.1	轆轤
2	不明土器	口径14.6　底径5.4　器高4.6　胎土は雲母少量細かい小石粒を多量に含む　色調は黄灰色　器肉は究めて薄く焼成は良好			
3	銅製品	径4.6　内径2.0　高さ0.65　厚さ0.1　環状の薄い板中央に筒状の金具をとおし、上下をつぶした鳩目状の製品　片面は部分的に鍍金が残る　構造上は兜の頂部に付く八幡座に似るが用途不明			

1区第1面　土壙4

4	かわらけ	13.0	－	3.7	手捏ね
5	かわらけ	6.4	4.4	1.9	轆轤
6	かわらけ	7.0	3.8	2.0	轆轤
7	かわらけ	7.1	4.2	2.0	轆轤
8	かわらけ	(6.7)	(3.6)	2.1	轆轤
9	かわらけ	12.5	7.2	3.2	轆轤
10	かわらけ	13.1	7.8	3.4	轆轤
11	かわらけ	13.2	8.3	2.7	轆轤
12	常滑　甕	口縁部片　口縁端部を若干上部に引き上げている　4形式　色調は明茶色			
13	常滑　甕	口縁部片　やや幅をもつ縁帯を口縁部に巡らせる　10形式か　色調は暗褐色			
14	常滑　甕	口縁部片　口縁部に広い縁帯を貼りつける　9形式か　色調は暗赤褐色			
15	常滑捏ね鉢	口縁部片　7形式か　色調は橙色			
16	常滑捏ね鉢	口縁部片　口縁の形状は細く断面が丸形　6ａ形式　色調は暗赤褐色			

17	山茶碗窯系 捏ね鉢	口縁部片　胎土は灰色　砂粒・白色粒含む
18	瀬戸平碗	口縁部片　胎土は灰黄色　釉は灰釉漬け掛け
19	瀬戸平碗	口縁部片　口径（14.6）胎土は灰色　釉は灰釉漬け掛け
20	瀬戸天目碗	口径（9.5）胎土は灰白色　比較的粗胎　釉は黒釉　口縁内部に褐釉を二度掛け
21	瀬戸天目碗	口径12.4　底径4.5　器高6.1　胎土は灰白色堅緻　釉は鉄釉　口縁部に褐釉二度掛け
22	瀬戸小皿	底径（5.6）　外底部は回転糸切り　胎土は灰白色堅緻　外面は露胎　内体部は一部に灰釉が見られる
23	瀬戸深皿	口縁部片　胎土は灰白色　口縁は玉縁状の形態　釉は灰釉ハケ塗り
24	瀬戸深皿	底径（16.0）　胎土は灰黄色　釉薬は灰釉ハケ塗り
25	瀬戸花瓶	頸部片と不遊環　胎土は淡灰橙色　白色粒を僅かに含む　釉薬は褐釉
26	青磁折縁鉢	口縁部片　龍泉窯の大型　外体面は単弁の蓮弁文　胎土は灰白色で精緻 釉は灰緑色半透明で釉層が厚い　粗い貫入あり
27	瓦質手焙り	口縁部片　復元口径40　胎土は灰白色　砂粒　白色粒を含む　色調は赤灰色 外面はヘラミガキ　口縁部直下に巡らせた条線区画に連珠文と雷文を押印 １区２面包含層より同一個体の破片が出土
28	瓦質香炉	底部片　胎土は灰白色　微砂粒を含む　色調は淡橙色　内面はナデ 外面はヘラミガキ　三足と思われる
29	女　瓦	厚さ1.9　東海地方窯産　精良な胎土だが焼成は若干弱い　長石粒を多く含む離れ砂が付着叩き目は不鮮明　鎌倉初期

１区第２面　ピット５

30	かわらけ	8.5	－	－	手捏ね

図15　１区第２面包含層

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	9.4	－	1.8	手捏ね
2	かわらけ	(9.6)	－	－	手捏ね
3	かわらけ	－	－	－	手捏ね　口縁部片
4	かわらけ	14.2	－	3.3	手捏ね
5	かわらけ	(13.0)	－	2.9	手捏ね
6	かわらけ	－	－	－	手捏ね　口縁部片　コースター型
7	かわらけ	(8.0)	5.0	1.1	轆轤
8	かわらけ	8.4	5.4	1.4	轆轤
9	かわらけ	(9.1)	(6.9)	1.7	轆轤
10	かわらけ	6.9	4.1	2.1	轆轤
11	かわらけ	(8.4)	(6.6)	2.0	轆轤
12	かわらけ	9.8	7.5	2.2	轆轤
13	かわらけ	－	－	8.6	轆轤　底部を残し切断面を磨き、円盤状に加工したもの

14	青磁　碗	胴部片　龍泉窯　内面劃花文　素地は灰色　釉は緑灰色透明　釉層は薄い
15	女　瓦	厚さ2.0　精良な胎土で焼成ごく良好　凸面は縄目叩き　鎌倉初期

1区第2面　溝1

16	かわらけ	7.9	−	1.8	手捏ね
17	かわらけ	8.9	−	−	手捏ね

1区第1面　土壙3

18	かわらけ	8.6	6.4	1.7	轆轤
19	かわらけ	9.3	7.2	1.5	轆轤

1区第1面　土壙6

20	青磁　碗	口縁部片　龍泉窯　残存部は無文　胎土は灰色　釉は灰緑色透明 釉層はごく薄い
21	女　瓦	厚さ2.2　精良な胎土　焼成ごく良好　凸面は縄目叩き　鎌倉初期
22	女　瓦	厚さ2.2　東海地方窯産　精良な胎土　粗い長石粒の多い離れ砂付着　凹面は縦方向にヘラナデ　凸面は糸切りの痕跡が認められる　叩き目は不鮮明　鎌倉初期
23	銭	皇宋通宝　北宋　初鋳1039年　篆書

図16　2区第1面構成土

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	9.1	−	1.7	手捏ね
2	かわらけ	−	−	(5.0)	轆轤
3	かわらけ	(6.5)	(3.2)	1.9	轆轤
4	かわらけ	(7.2)	(4.2)	1.9	轆轤
5	かわらけ	(7.7)	(5.0)	1.6	轆轤
6	かわらけ	7.5	4.6	2.3	轆轤
7	かわらけ	7.4	4.0	2.2	轆轤
8	かわらけ	(7.7)	(4.9)	2.0	轆轤
9	かわらけ	7.7	4.3	2.9	轆轤
10	かわらけ	(10.8)	(6.4)	3.3	轆轤
11	かわらけ	(11.2)	(6.0)	3.5	轆轤
12	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.1	轆轤
13	かわらけ	12.0	7.1	3.4	轆轤
14	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.2	轆轤
15	かわらけ	(12.9)	(8.2)	3.0	轆轤
16	常滑　甕	口縁部片　口縁先端がL字状に上部に持ち上げられる　5形式 外面に厚めの灰釉がかかる			
17	常滑　甕	口縁部片　胎土は暗灰色　白色粒・黒色粒を多量に含む			
18	常滑捏ね鉢	口縁部片　7形式　胎土は白色粒を多量に含む　色調は赤褐色			
19	常滑捏ね鉢	口縁部片　胎土は明赤褐色　白色粒・長石を多量に含む			

20	瀬戸天目碗	底径（4.9）　胎土は灰白色堅緻　釉は黒釉　高台は削り出し
21	瀬戸平碗	底径（5.4）　胎土は灰白色　微砂粒を僅かに含む　釉は灰釉ハケ塗り 浅い削り出し高台
22	瓦質手焙り	口縁部片　胎土は淡褐色　白色粒多く含む　色調は黒灰色
23	瓦質手焙り	口縁部片　胎土は橙灰色　砂粒・白色粒を多く含む　色調は黒灰色 口縁部直下２条の沈線の間に珠文を巡らす
24	瓦質手焙り	胴部片　胎土は灰白色　白色粒　砂粒を多く含む　色調は黒灰色 胴部に花菱文を押印　下位に向けて珠文を巡らせ２条の沈線間に四弁花文を押印
25	瓦質手焙り	脚部片　胎土は灰白色　小石を多く　砂粒含む　色調は灰色
26	瓦質手焙り	脚部片　胎土は橙色　白色粒を多量に　スコリアを微量含む　色調は黒灰色
27	女　瓦	厚さ2.0　精良な胎土　凸面は斜格子叩き　水殿瓦窯産のものと見られ永福寺Ⅱ期
28	女　瓦	厚さ2.4　粗胎　胎土色は灰白色だが表面は燻べ状　凸面は三鱗文叩き　13世紀後半のものか
29	銭	治平元寶　北宋　初鋳1064年　楷書

図17　２区第１面　溝２

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	(9.2)	－	－	手捏ね
2	かわらけ	(12.2)	－	3.3	手捏ね
3	かわらけ	(12.8)	8.0	3.0	轆轤
4	かわらけ	－	(8.4)	－	轆轤

２区第１面　土壙９

5	砥　石	残存長7.6　幅2.4　残存厚1.8　群馬県上野産の中砥　砥面は３面

２区第１面　土壙10

6	かわらけ	8.3	7.4	2.0	轆轤
7	瀬戸深皿	(25.2)			胎土は灰白色緻密　灰釉をハケ塗り

２区第１面　構成土

8	かわらけ	(8.6)	－	1.7	手捏ね
9	かわらけ	8.5	－	1.7	手捏ね　口縁部にタール付着　灯明皿か
10	かわらけ	(9.6)	－	1.5	手捏ね
11	かわらけ	(9.6)	－	－	手捏ね
12	かわらけ	(9.7)	－	1.5	手捏ね
13	かわらけ	－	－	－	手捏ね　口縁部片
14	かわらけ	－	－	－	手捏ね　口縁部片
15	かわらけ	(13.0)	－	－	手捏ね
16	かわらけ	(14.2)	－	3.0	手捏ね
17	かわらけ	－	－	－	轆轤　底部片　静止糸切りか

２区第２面　包含層

18	かわらけ	(9.6)		1.5	手捏ね

19	かわらけ	(9.1)	−	−	手捏ね
20	かわらけ	(9.0)	−	1.7	手捏ね
21	かわらけ	9.2	−	1.6	手捏ね
22	かわらけ	9.3	−	1.9	手捏ね
23	かわらけ	(9.4)	−	1.8	手捏ね
24	かわらけ	9.2	−	1.8	手捏ね
25	かわらけ	(10.0)	−	1.8	手捏ね
26	かわらけ	−	−	−	手捏ね　口縁部片
27	かわらけ	−	−	−	手捏ね　口縁部片
28	かわらけ	(11.0)	−	−	手捏ね
29	かわらけ	(12.8)	−	3.0	手捏ね
30	かわらけ	13.6	−	3.3	手捏ね

2区　落ち込み遺構A面まで

31	かわらけ	9.2	−	1.6	手捏ね　口縁部にタール付着　灯明皿か
32	かわらけ	(8.9)	−	1.3	手捏ね
33	かわらけ	−	−	−	手捏ね　口縁部片
34	かわらけ	−	−	−	手捏ね　口縁部片
35	かわらけ	−	−	−	手捏ね　口縁部片
36	かわらけ	−	−	−	手捏ね　口縁部片
37	かわらけ	−	−	−	手捏ね　口縁部片
38	かわらけ	(14.3)	−	−	手捏ね
39	かわらけ	(14.2)	−	−	手捏ね

図18　1区　落込み遺構B面まで

番	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	(14.7)	−	−	手捏ね
2	かわらけ	(14.8)	(9.0)	−	轆轤
3	渥美　甕	胴部片　下体部のあたりか　平行叩きを巡らす			

1区　落込み遺構C面まで

4	かわらけ	(10.1)	−	1.4	手捏ね
5	土師器　甕	口縁部片　胎土は灰橙色　器表は淡橙色　赤色粒・白色粒・微砂粒含む			
6	須恵器　坏	口縁部片　胎土は灰色　白色粒含む			
7	須恵器坏蓋	口縁部片　胎土は赤紫褐色　器表は灰黒色　古墳時代後期(5・6とも)			
8	木　椀	底径7.0			
9	木製品	高さ13.2　最大径7.3　用途不明　逆円錐形で頂部に角柱形のほぞ状突起あり			
10	木製品	長さ21.7　幅1.4　厚さ0.3　用途不明　板材で先端を鋭利に尖らす			
11	木製品	長さ34.1　幅2.8　厚さ0.15　墨痕があるが文字は不鮮明			

1区　落込み遺構最下層

12	かわらけ	8.8	−	1.5	手捏ね

13	かわらけ	－	－	8.8	轆轤　底部は静止糸切り
14	常滑　甕	口縁部片　警部が比較的高く口縁先端は斜め上方につまみ上げられる　4形式か			
15	木　椀	－	8.2	－	土圧による変形顕著　下体部が厚みをもつ

図19　2区　落込み遺構C面まで

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	(8.2)	－	2.1	手捏ね
2	かわらけ	(9.0)	－	1.4	手捏ね
3	かわらけ	8.6	－	1.9	手捏ね
4	かわらけ	8.3	－	1.8	手捏ね
5	かわらけ	8.7	－	1.9	手捏ね
6	かわらけ	8.7	－	1.5	手捏ね
7	かわらけ	8.9	－	1.6	手捏ね
8	かわらけ	(9.3)	－	1.8	手捏ね
9	かわらけ	(8.8)	－	1.6	手捏ね
10	かわらけ	(9.2)	－	1.3	手捏ね
11	かわらけ	9.2	－	1.7	手捏ね
12	かわらけ	8.6	－	1.4	手捏ね
13	かわらけ	(8.7)	－	1.7	手捏ね
14	かわらけ	－	－	－	手捏ね口縁部片
15	かわらけ	－	－	－	手捏ね口縁部片
16	かわらけ	(12.7)	－	－	手捏ね
17	かわらけ	(14.6)	(10.4)	3.1	轆轤
18	土師器　壺	口縁部から頸部片　胎土は淡赤灰色微砂粒含む　外面は口縁部直下に沈線　肩部ヘラケズリ　内面屈曲部に沈線　内外面ともスス付着　古墳時代前期			
19	木製刀形	長さ47.1　最大幅3.9　最大厚1.0			
20	木製品	残存長32.2　残存幅2.3　厚さ0.5　表面に幅0.5～0.6cmの溝が彫刻的に彫られる　用途不明			
21	木製扇骨	残存長28.1　最大幅2.6　最大厚0.4　同じものが2枚出土			
22	木製品　箸	長さ23.6　幅0.6　厚さ0.5			
23	木製品　箸	長さ20.9　幅0.9　厚さ0.5			
24	木製品　箸	長さ20.1　幅0.6　厚さ0.4			

2区　落込み遺構内布堀

25	鉄　釘	残存長3.6　幅0.4　厚さ0.4
26	鉄　釘	残存長7.6　幅0.5　厚さ0.5
27	鉄　釘	残存長5.8　幅0.5　厚さ0.5
28	鉄　釘	残存長2.8　幅0.7　厚さ0.2

図20　2区　落込み遺構最下層

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	7.4	−	1.5	手捏ね
2	かわらけ	8.6	−	1.9	手捏ね
3	かわらけ	8.8	−	1.1	手捏ね
4	かわらけ	9.0	−	2.0	手捏ね
5	かわらけ	9.0	−	1.05	手捏ね
6	かわらけ	9.0	−	1.9	手捏ね
7	かわらけ	9.9	−	1.6	手捏ね
8	かわらけ	8.5	−	1.2	手捏ね　内折れ型
9	かわらけ	(13.8)	−	3.0	手捏ね
10	かわらけ	14.6	−	3.0	手捏ね
11	かわらけ	(14.7)	−	3.0	手捏ね
12	かわらけ	9.4	−	−	轆轤
13	渥美　山皿	口径8.4　底径4.6　器高2.1　胎土は灰色堅緻　砂粒・長石粒含む			
14	渥美捏ね鉢	口縁部片　胎土は赤褐色堅緻　色調は暗赤褐色			
15	山茶碗窯系 捏ね鉢	底径（12.8）　下体部に幅5cm程の回転ヘラ削りを巡らす 胎土に粗い長石粒混入　内面は自然降灰　摩滅が顕著			
16	青　磁 劃花文碗	口縁部片　龍泉窯　素地は暗灰色　微砂粒を含み堅緻 釉はオリーブ色透明（米色）			
17	青白磁 合子　蓋	頂部～口縁部片　景徳鎮窯　型作り　素地は灰白色　微砂粒含む 釉は水青色透明			
18	木製品　箸	長さ18.0　幅0.7　厚さ0.6			
19	木製品　箸	長さ21.3　幅0.6　厚さ0.5			
20	木製品　箸	長さ22.4　幅0.7　厚さ0.6			
21	木製品　箸	長さ25.7　幅0.7　厚さ0.5			
22	木製品	長さ21.6　幅1.0　残存厚0.7　やや太めの箸状			
23	木製品	長さ15.2　幅1.3　残存厚0.6　ヘラ状			
24	木製品	長さ26.5　幅1.8　残存厚0.3　板状　先端を鋭角に切る			
25	木製品 草履芯	残存長14.8　残存幅2.8　厚さ0.6			
26	木製品 草履芯	残存長18.4　残存幅4.4　厚さ0.4			
27	木製品	長さ36.3　残存幅4.8　厚さ0.6　板状			
28	土師器　坏	口縁部片　胎土は橙色　微砂粒・雲母・白色針状物質含む			
29	須恵器　坏	口縁部片　胎土は灰色　黒色粒・白色粒含む			

（註）瓦に関する年代・編年に関しては、次のものを参考にした。
『永福寺跡－国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書－平成8年度』福田誠他
鎌倉市教育委員会　平成9年3月
常滑の形式・編年等に関しては次のものを参考にした。
「常滑焼編年作業と今後の課題」中野晴久　考古学ジャーナル396　1995年11月
『概説中世の土器・陶器』中世土器研究会編　真陽社　1995年12月

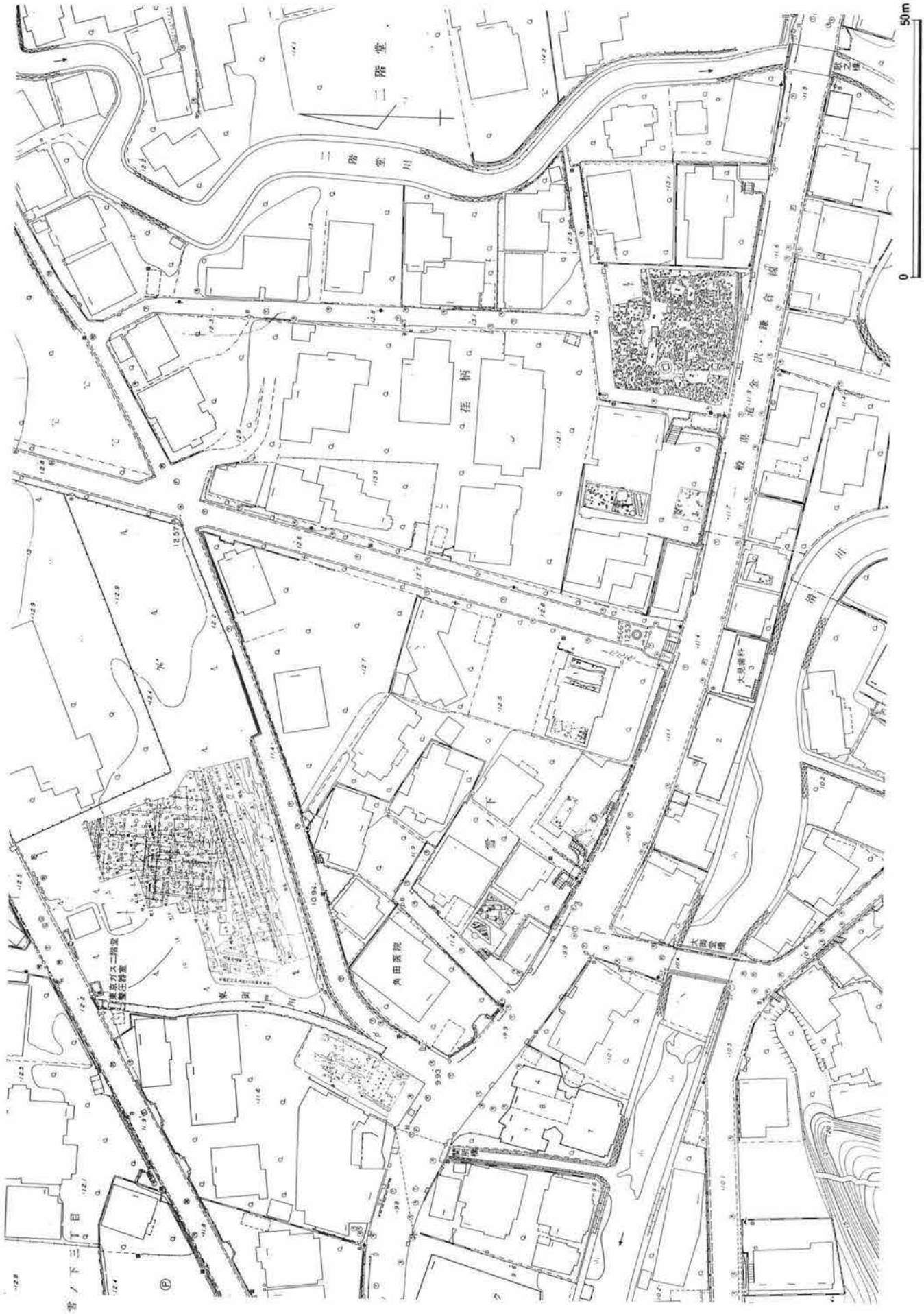


図21　周辺調査地点の遺構

１区では落ち込み遺構を掘り下げる際、この面までの遺物を一括して取りあげた。図18－１～３がその遺物である。口縁部が細く引き上げられる手捏ねかわらけと、渥美の甕の胴部片である。この層の下では植物遺体の流れ込んだような腐植土の堆積が見られた。この層には多くの木製品や腐食した木端が含まれており、水流による短い期間での堆積と見られる。

【Ｃ面】　１区では地山を検出するまでの間に若干の遺構を築いている面を検出した。地山を埋めるように西に浅い肩を築いているが、その土質は地山を構成する土にいたって似ており、浅い溝として使っている時期は地山を削って落ち込み遺構を設けた時期とさしてあかないと見られる。図18－４～11はＢ面を掘り下げ地山の上に築かれたこの面まで（土層21から29″）で検出した遺物である。土師・須恵などの古代の遺物が混入しているのがひとつの特徴と言えるだろう。２区ではＢ面に相当する面が明瞭ではなく、最下層も部分的に水流によって堆積した粗い砂が混ざる。セクションから判断して、土層31から34がほぼ同じ層位に相当する。この層位で検出した遺物が図19－１～24である。かわらけはいずれも手捏ね成形によるものであるが、特徴はややばらつきが見られ、器高の深いものが混入する。

この面を掘り下げると、地山となる。図18－12～15・図20は地山直上の遺物。これらが出土した層位は、１区では灰色粘質土と黒色粘質土の互層（図18）、２区では土層35から37（図20）である。

最終的に検出した地山では、第２区において、落ち込み遺構本来の肩に平行して布掘り状の溝を検出した。この溝中に２箇所のピットがあった。ここでは釘（図19－25～28）が出土している。また溝に平行して東側に丸太杭の痕跡を２箇所確認することができた。溝に伴う土留め等の存在を考えることができよう。さらにこの溝に平行して西側が落ち、土留め状の丸太を検出した。また伊豆石が出土している。自然堆積と思われる砂利を多く含んだ砂層に埋もれており、石の上面が平らで、土丹や小石を根石状に並べているのが観察できた。掘方を持たないが、何らかの礎石として用いられた可能性もある。これらのことから、この落ち込み遺構の中に橋などの構築物があったと見ることができよう。

手捏ねかわらけや口縁部先端を上方にわずかにつまみ上げた常滑甕片（図18－14）・水摩した男瓦片（図なし）を含んでいる。これらは鎌倉市内の中世遺跡の比較的下層で見られる古い遺物の組成に近く、鎌倉初期から13世紀はじめのものと考えられる。また土師・須恵等の古代遺物の破片も混入する。この遺構はおそらく鎌倉初期に設けられたものと考えらる。上層の遺物の年代観から見て下層の遺物と大きな年代差は認められず、13世紀前葉頃、この落ち込み遺構はさほど時間をおかない間に、数段階を経て埋め立てられたと見られる。

なお、個々の遺物の種類・特徴・法量に関しては185～195ページの遺物観察表に示した。

第４章　まとめ

遺跡の年代は上層（第１面）では15世紀の遺構（井戸など）が検出され、足利時代にもこの地が何らかのかたちで頻繁に使われたことを伺わせる。ただし、井戸２などは15世紀末から16世紀にかかる製品も含まれている。第１面の上は削平を受けており、本来上面から掘り込まれた遺構が残ったとも考えられるだろう。また２区で検出した第１面（土丹面）は正確には１区で検出した第１面のさらに上にかぶ

第２面は中世地山で、１区の半分、２区の全面を落ち込み遺構が占める。調査区を斜めに切るこの遺構の方向は推定される二階堂大路にほぼ直行する。二階堂大路は大倉の辻から東北の方向にある永福寺に向かう道で、その築かれた年代は、記録にはないが、永福寺創建の時期と考えられる。この方向性を踏襲していると考えれば、落ち込み遺構の設けられた時期も鎌倉期初頭ということになろう。実際、最下層で検出したかわらけ鎌倉で出土するタイプのものとしては最も古い形式のものである。その年代に

関しては諸説分かれるところだが、最も古く考えているものでは鎌倉幕府草創期と解釈している。（註1）また、図示しなかったが永福寺Ⅰ期男瓦（註2）の水磨したものが一緒に出土している。

六浦路沿いのこれまでの発掘調査では、六浦路に接する部分で、炭化物・土師片が混入する中世地山が報告されている（註3）が、その状況は本遺跡での落ち込み遺構覆土に極めて似ており、実は中世地山はその更に下にあったのではという、これまでの調査に対する反省も生じてきた。おそらく落ち込み遺構は現在の荏柄天神参道をまたいで、さらに東に続いていたものと考えられる。かなり大がかりな溝（または段差）が六浦路に沿って造られていたということになる。前述のように、この遺構が築かれたのは鎌倉時代初期と考えられ、段階的に埋められていったものと見られる。この遺構が埋まったのが13世紀前葉と考えられる。

鎌倉時代初期の、六浦路と北側地域（おそらく屋地）とが接する部分の具体的様相が、この調査から見えてきたと言えるだろう。

参考までに、図21に周辺調査地点の成果を示した。検出した面のうち下層のものを取り上げたが、調査地点によって発掘条件はまちまちで、遺構の残存状態や調査可能な深度はそれぞれ異なっている。したがって、図に示した遺構は、すべてが同時代の遺構として一元的にとらえられるものではない。しかし、六浦路・荏柄天神参道・二階堂大路・東御門川などに添う方向の遺構（建物跡・溝等）が複数確認されている。この地域の中世の姿がかなりつかめてきたと言えるだろう。

（註1）宗臺秀明他『横小路周辺遺跡　二階堂字横小路110番3地点』1196年　横小路周辺遺跡発掘調査団

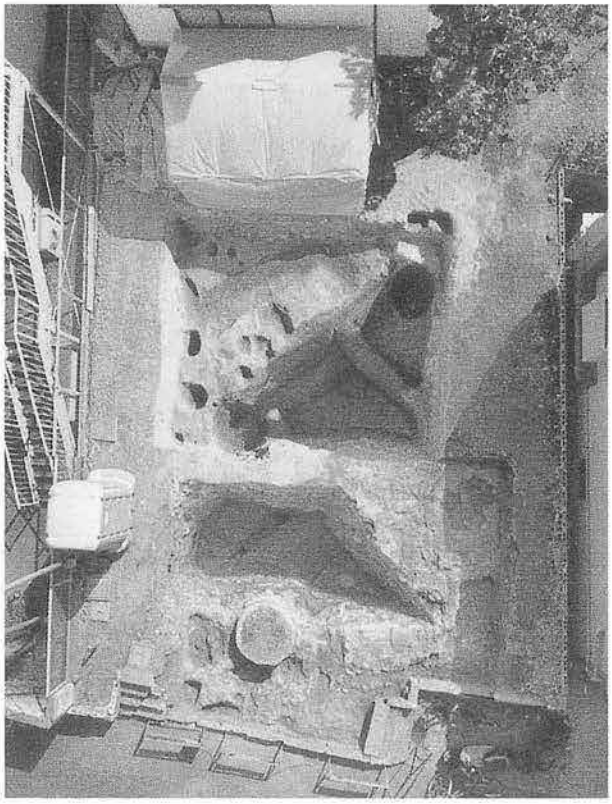
（註2）1194年に完成した堂舎に葺かれていたと考えられる瓦で、その後、文暦～宝治年間頃（1235～1248年）に堂舎の改修が行われるまで葺かれていたと考えられる。この改修で瓦が葺き替えられたか、あるいは補充されたかは不明である。

（註3）福田誠他　横小路周辺遺跡（二階堂字荏柄10番6外地点）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告16』平成12年3月　鎌倉市教育委員会

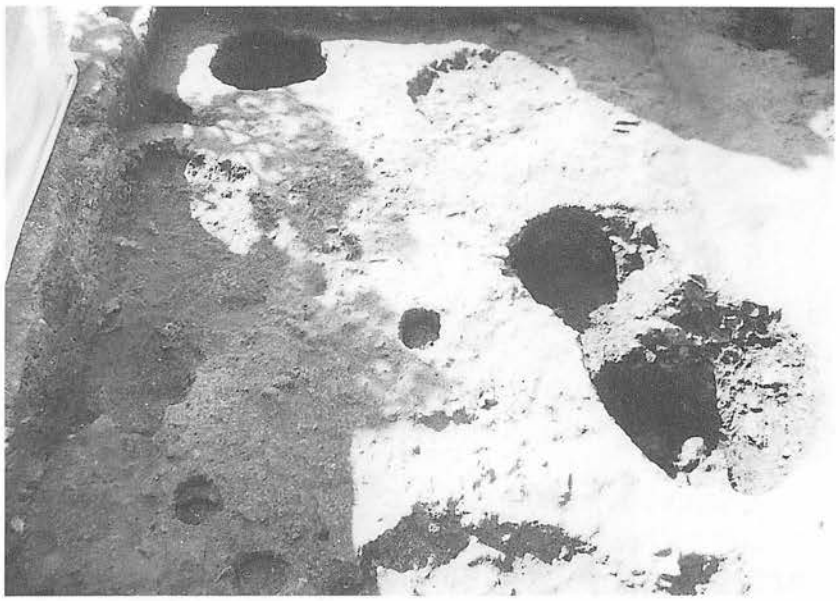
写　真　図　版

図版 1

調査区全景▶
（1区・2区の合成）



▼調査地点近景遺跡より東を望む
（右は県道金沢・鎌倉線
左奥に荏柄神社の鳥居）

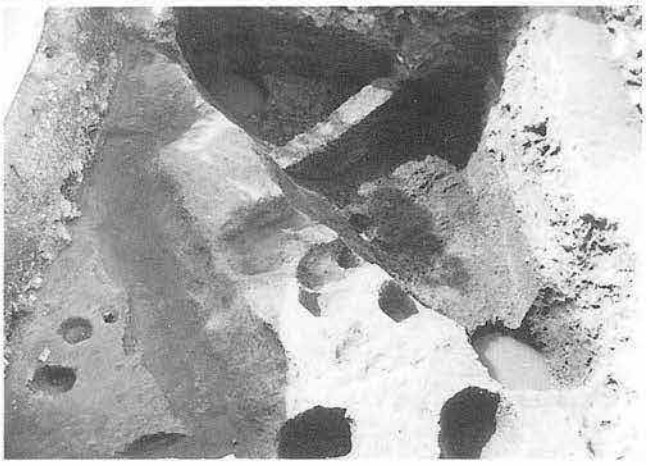


▲1区第1面全景　北より

▲1区第2面全景(落ち込み遺構A面)　南より

▲1区第2面溝1　南より

図版 3



▲1区第2面全景(落込遺構B面下)　北より

▼1区落ち込み遺構最下層 北より

▲1区落ち込み遺構セクション　北より

▼1区落ち込み遺構東肩

▲2区第1面　南より

▼2区落ち込み遺構セクション(南壁)

▲2区落ち込み遺構最下層　西より

▼2区トレンチ（1区の第1面相当）　北より

図版 5

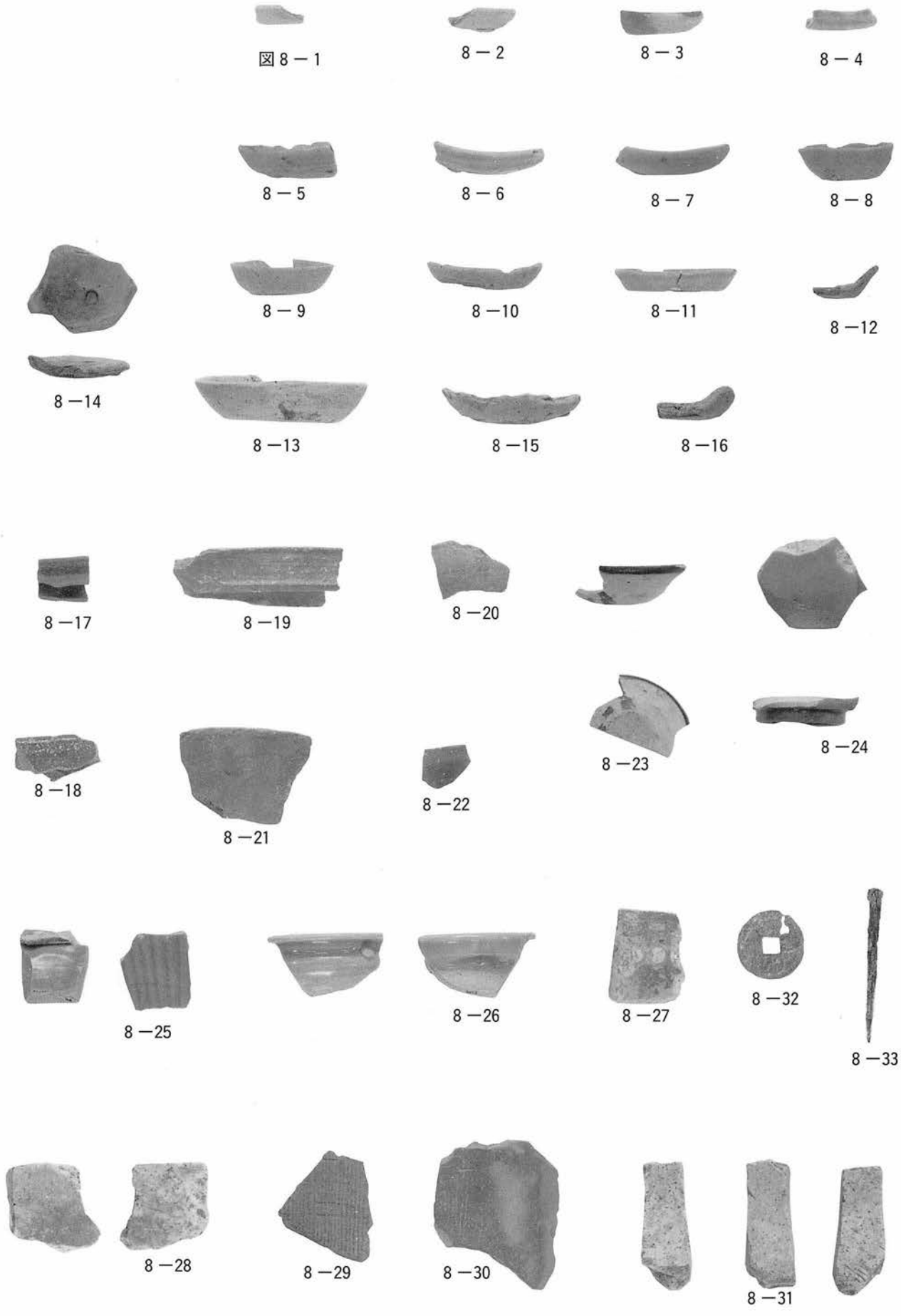
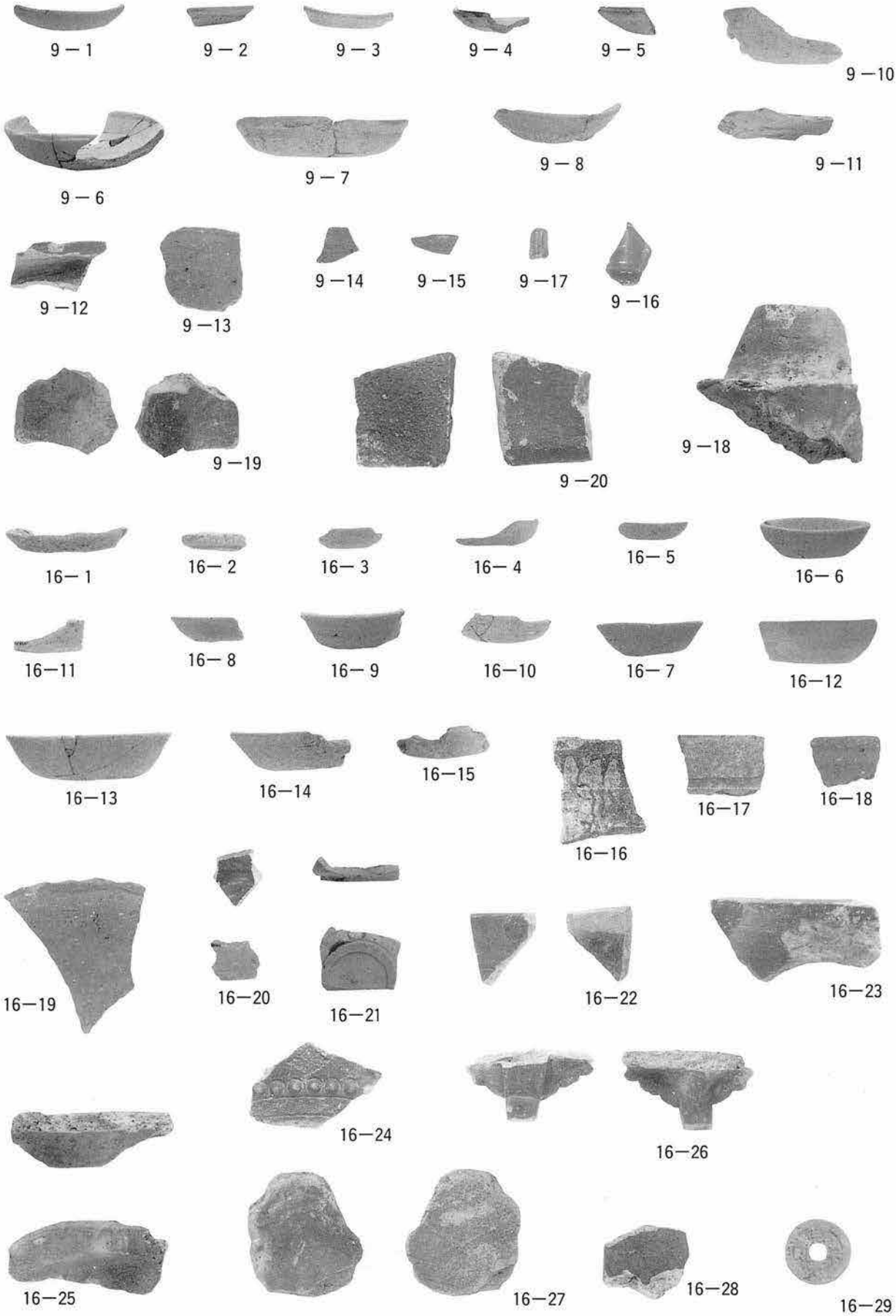
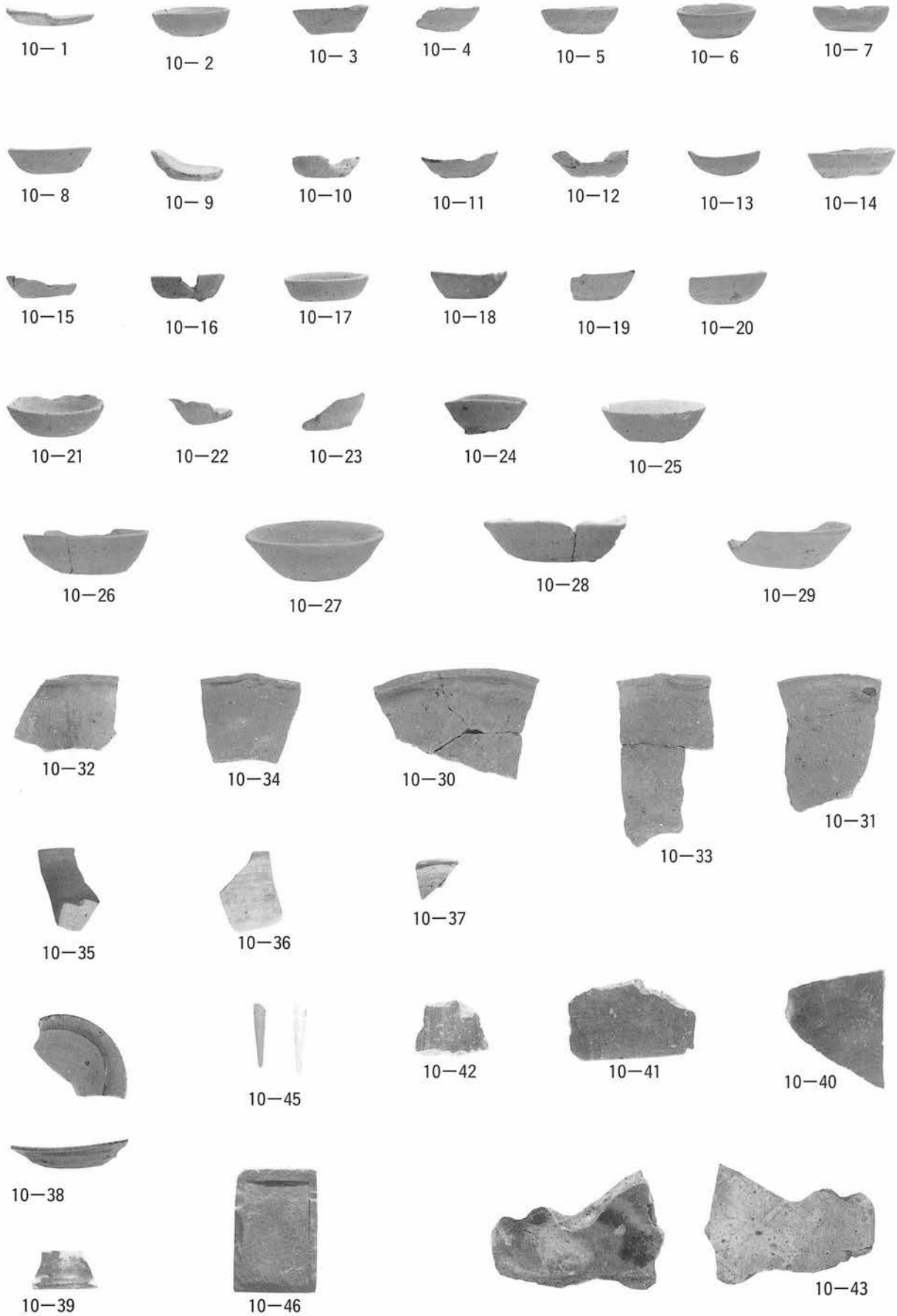
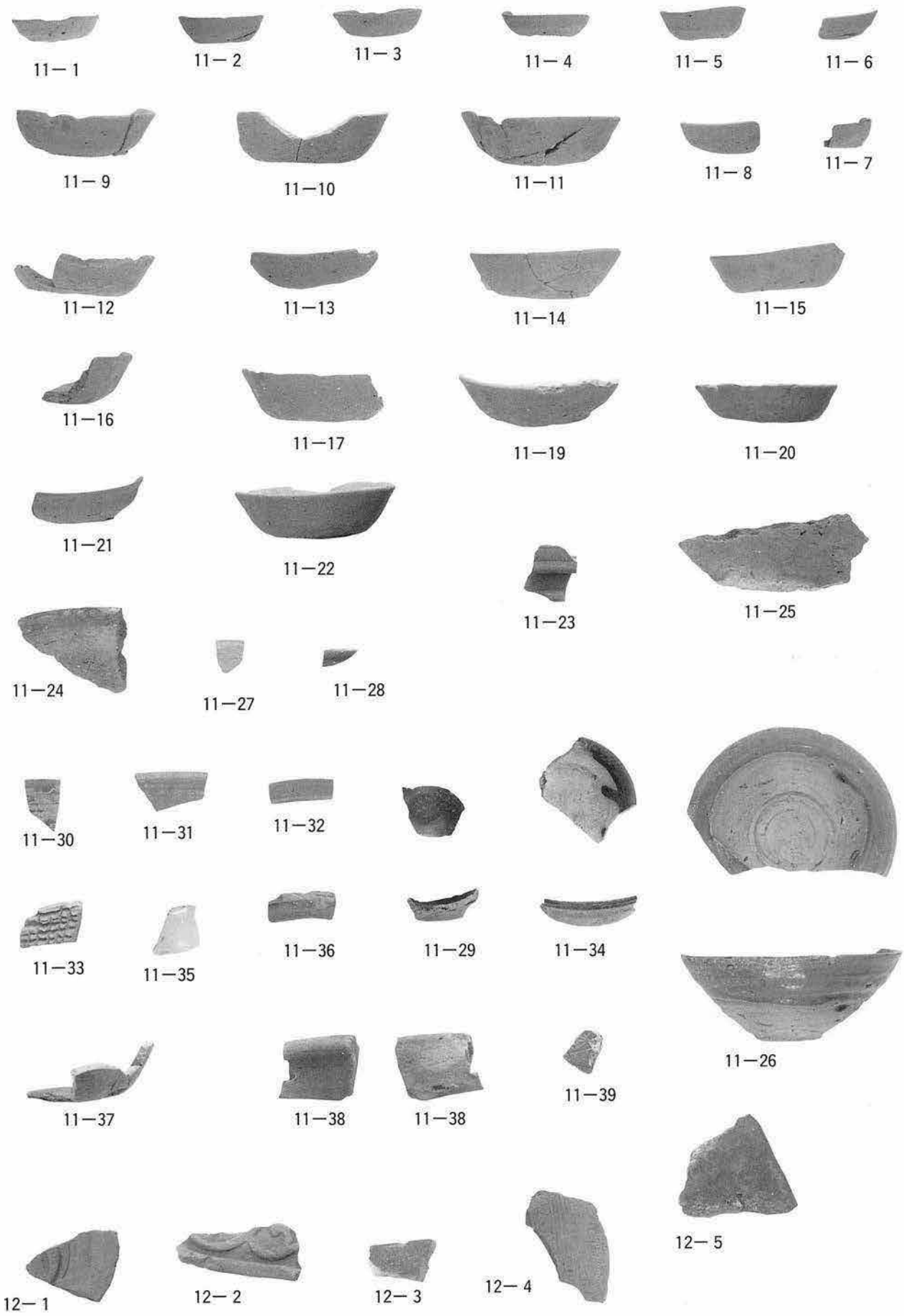


図8－1
8－2
8－3
8－4
8－5
8－6
8－7
8－8
8－9
8－10
8－11
8－12
8－14
8－13
8－15
8－16
8－17
8－19
8－20
8－18
8－21
8－22
8－23
8－24
8－25
8－26
8－27
8－32
8－33
8－28
8－29
8－30
8－31


9－1
9－2
9－3
9－4
9－5
9－10
9－6
9－7
9－8
9－11
9－12
9－13
9－14
9－15
9－17
9－16
9－19
9－20
9－18
16－1
16－2
16－3
16－4
16－5
16－6
16－11
16－8
16－9
16－10
16－7
16－12
16－13
16－14
16－15
16－16
16－17
16－18
16－19
16－20
16－21
16－22
16－23
16－24
16－26
16－25
16－27
16－28
16－29

図版 7


10－1
10－2
10－3
10－4
10－5
10－6
10－7
10－8
10－9
10－10
10－11
10－12
10－13
10－14
10－15
10－16
10－17
10－18
10－19
10－20
10－21
10－22
10－23
10－24
10－25
10－26
10－27
10－28
10－29
10－32
10－34
10－30
10－33
10－31
10－35
10－36
10－37
10－45
10－42
10－41
10－40
10－38
10－39
10－46
10－43


11－1
11－2
11－3
11－4
11－5
11－6
11－9
11－10
11－11
11－8
11－7
11－12
11－13
11－14
11－15
11－16
11－17
11－19
11－20
11－21
11－22
11－23
11－25
11－24
11－27
11－28
11－30
11－31
11－32
11－33
11－35
11－36
11－29
11－34
11－26
11－37
11－38
11－38
11－39
12－5
12－1
12－2
12－3
12－4

図版 9

15－1

15－2

15－3

15－4

15－5

15－6

15－7

15－8

15－10

15－11

15－14

15－9

15－13

15－15

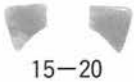
15－12

15－16

15－17

15－18

15－19


15－20

15－23

15－21

15－22

図－13

14－1

14－4

14－5

14－6

14－2

14－7

14－8

14－9

14－3

14－10

14－11

14－12

14－13

14－14

14－15

14－16

14－17

14－18

14－19

14－20

14－22

14－23

14－26

14－25

14－21

14－30

14－29

14－28

14－27

図版11

17－1

17－2

17－3

17－4

17－5

17－6

17－7

17－8

17－9

17－10

17－11

17－12

17－13

17－14

17－15

17－16

17－17

17－18

17－19

17－20

17－21

17－22

17－23

17－24

17－25

17－26

17－27

17－28

17－29

17－30

17－31

17－32

17－33

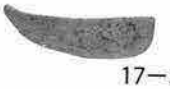
17－34

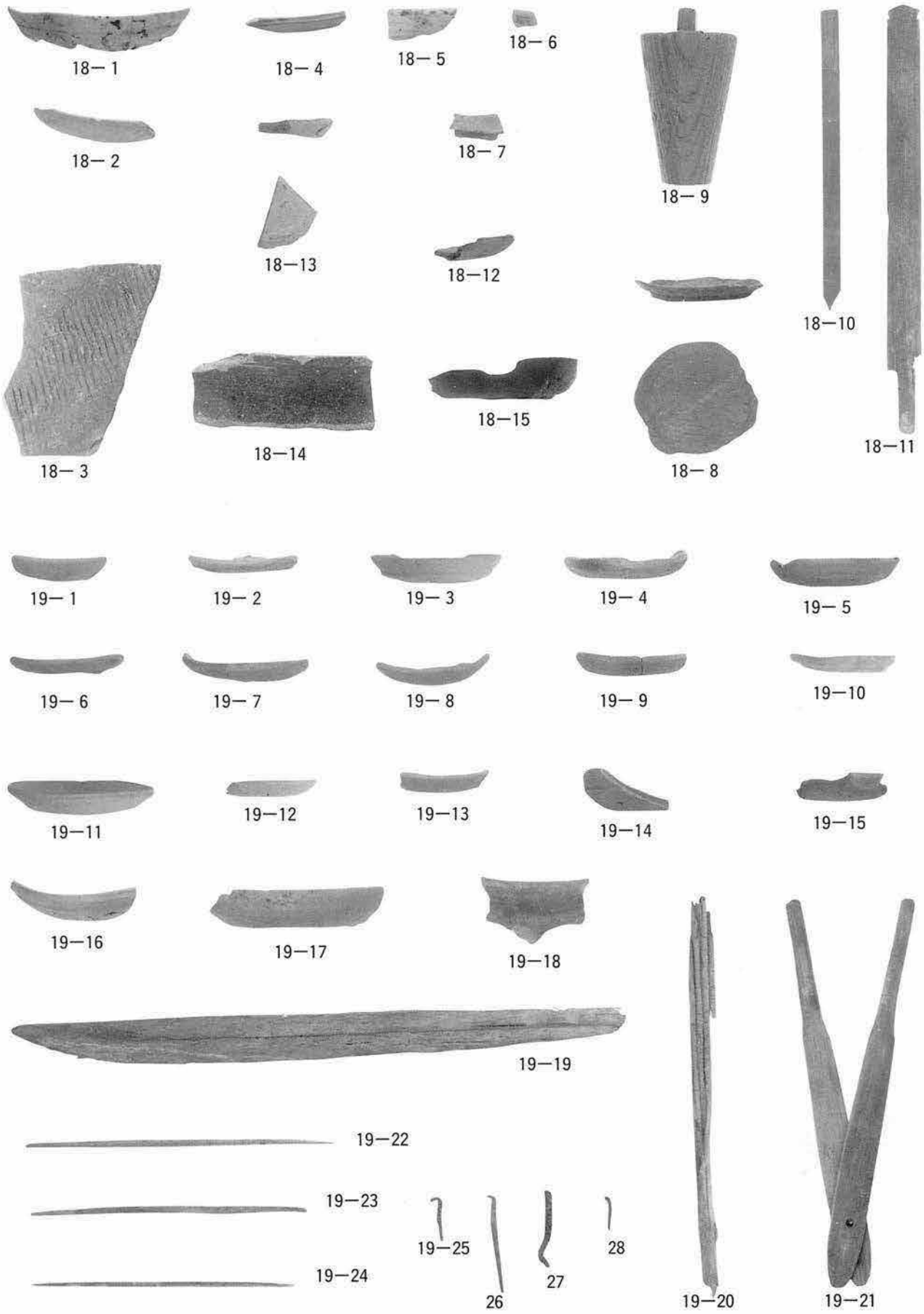
17－35

17－36

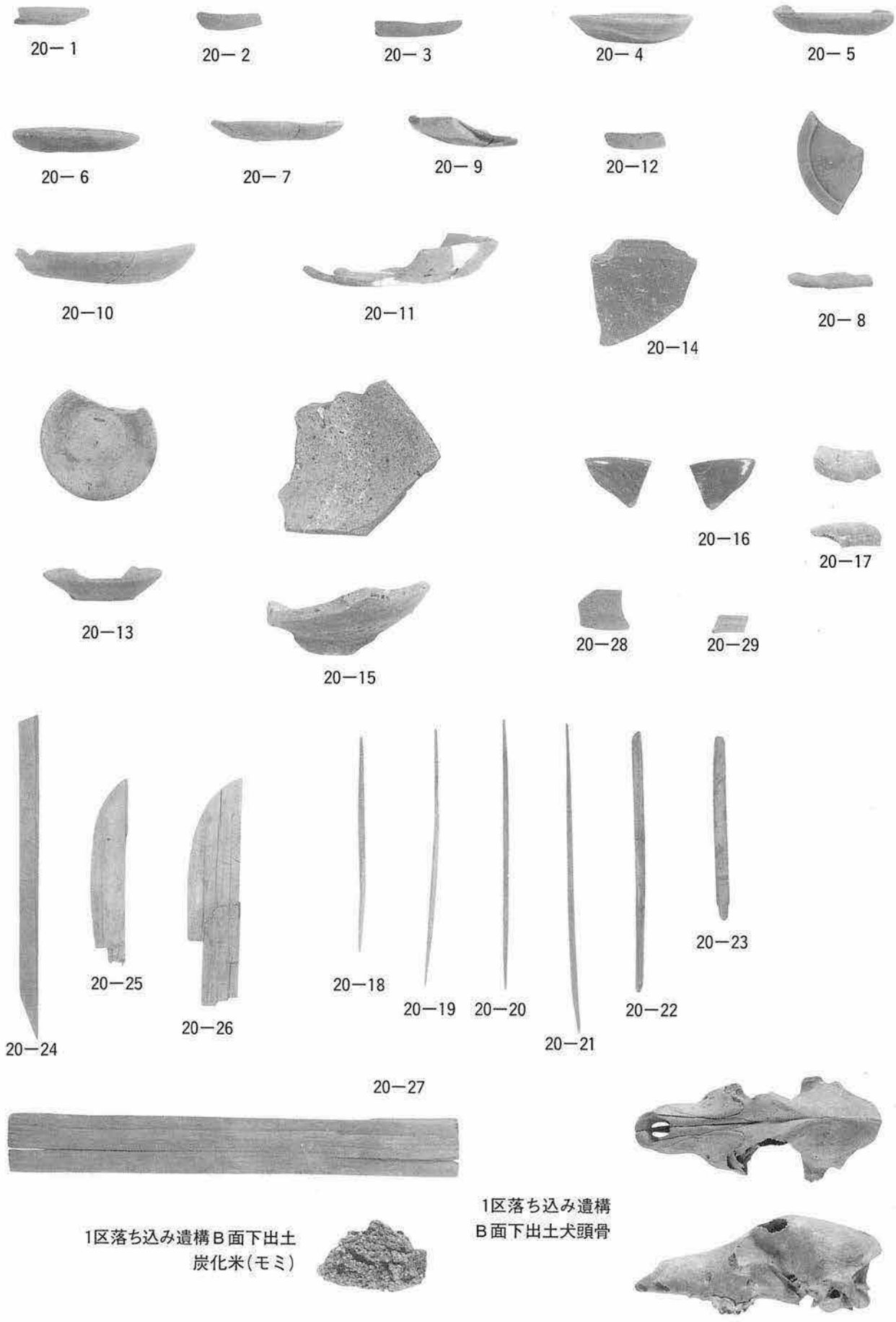
17－37

17－38


17－39


18－1
18－4
18－5
18－6
18－2
18－7
18－9
18－13
18－12
18－10
18－3
18－14
18－15
18－8
18－11
19－1
19－2
19－3
19－4
19－5
19－6
19－7
19－8
19－9
19－10
19－11
19－12
19－13
19－14
19－15
19－16
19－17
19－18
19－19
19－22
19－23
19－24
19－25
26
27
28
19－20
19－21

図版13



1区落ち込み遺構Ｂ面下出土
炭化米（モミ）

1区落ち込み遺構
Ｂ面下出土犬頭骨

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	菊川 泉 福田 誠
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686 鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	平成13年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大倉幕府 周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 雪ノ下字大倉 耕地562番16	14204	49	35° 19′ 11″	139° 33′ 57″	20000131 ～ 20000315	78㎡	住宅建設

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大倉幕府 周辺遺跡群	中世都市 遺跡	鎌倉時代 ～ 室町時代	溝 井戸・土壙		

大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

おおくらばくふしゅうへんいせきぐん

雪ノ下四丁目580番10外地点

例　　言

1．本報は、大倉幕府周辺遺跡群（No.49）の所在する遺跡内の鎌倉市雪ノ下四丁目580番10外地点における緊急発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、個人専用住宅の地下室にあたる調査面積129.08㎡を対象に平成12年２月１日から同年３月20日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査体制は、以下の通りである。

調査担当者　原　廣志

調　査　員　木村美代治・須佐直子・秋山哲雄・須佐仁和・早坂伸市・兼行光代・小西さつき

調査補助員　古田土俊一・猿田功一・鈴木弘太・渡辺賢史（鶴見大学）・鈴木一功（立正大学）

協力機関名　㈱鎌倉市シルバー人材センター・㈱高橋組・鎌倉考古学研究所

4．本報の執筆は、第一章を秋山、第二章・第三章３を須佐（直）。その他を原が分担執筆し、編集も行った。資料整理作業は執筆者の他、兼行・須佐（仁）・早坂があたった。

5．本報掲載の写真は、遺構を須佐（直）・原が、遺物を早坂があたった。全景撮影の一部はポール撮影を木村美代治に、空中撮影を㈱朝日航洋にそれぞれ依頼した。

6．花粉・樹木分析については、㈱パレオ・ラボ鈴木　茂氏に依頼した（第三章４に掲載）。

7．発掘調査における出土遺物・図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

8．現地調査及び資料整理を通じて、多くの方々や機関から助言・援助を賜った。

石井　進・大三輪龍彦・岡　陽一郎・小野正敏・河野眞知郎・小林康幸・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・玉林美男・継　実・手塚直樹・比毛君男・福田　誠・藤原良章・松方宣方・馬渕和雄・宮田　真・桃崎良輔（五十音順）

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……220

１．遺跡の位置

２．歴史的環境

第２章　調査の概要 ……222

１．調査の経過

２．測量軸の設定

第３章　検出遺構と出土遺物 ……224

１．近世・近代河川

２．中世河川

ａ．上層河床

ｂ．中層河床

ｃ．下層河床

３．縄文時代

４．大倉幕府周辺遺跡の花粉化石

第４章　まとめ ……266

挿図目次

図1　調査地点周辺図 ……219
図2　グリット配置図 ……223
図3　上層河床 ……224
図4　近世・近代河川(1)……226
図5　近世・近代河川(2)……227
図6　上層河床出土遺物(1)……229
図7　上層河床出土遺物(2)……230
図8　中層河床 ……231
図9　中層河床出土遺物(1)……232
図10　中層河床出土遺物(2)……233
図11　中層河床流路出土遺物 ……234
図12　Aトレンチ出土遺物(1)……235
図13　Aトレンチ出土遺物(2)……236
図14　Bトレンチ出土遺物(1)……237
図15　Bトレンチ出土遺物(2)……238
図16　下層河床 ……238
図17　土層堆積図 ……239
図18　下層河床出土遺物(1)……240
図19　下層河床出土遺物(2)……241
図20　下層河床出土遺物(3)……242
図21　下層河床出土遺物(4)……243
図22　縄文時代の自然流木 ……244

表目次

表1　近世・近代河川出土遺物(1)……245
表2　近世・近代河川出土遺物(2)……245
表3　上層河床出土遺物(1)……246
表4　上層河床出土遺物(2)……248
表5　中層河床出土遺物(1)……248
表6　中層河床出土遺物(2)……250
表7　中層河床流路出土遺物(1)……250
表8　Aトレンチ出土遺物(1)……251
表9　Aトレンチ出土遺物(2)……253
表10　Bトレンチ出土遺物(1)……253
表11　Bトレンチ出土遺物(2)……254
表12　下層河床出土遺物（1）……255
表13　下層河床出土遺物(2)……257
表14　下層河床出土遺物(3)……258
表15　下層河床出土遺物(4)……258

図版目次

図版1 A.調査地点遠景……269
B.調査地点近景
図版2 A.近世・近代河川……270
B.Aトレンチ拡張部
C.Dライン拡張部
D.Bトレンチ拡張部
図版3 A.下層河床全景（西から）……271
B.下層河床北側
C.中層河床検出状況
D.中層河床流路出土の銅製笄
E.瀬戸瓶子出土状況
図版4 A.下層河床北側……272
B.調査区東壁土層堆積
C.縄文時代の自然流木
図版5 A.近世・近代河川……273
B.上層河床
C.中層河床
D.中層河床の流路内
図版6 A.Aトレンチ……274
B.Bトレンチ
C.下層河床
D.貝類

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

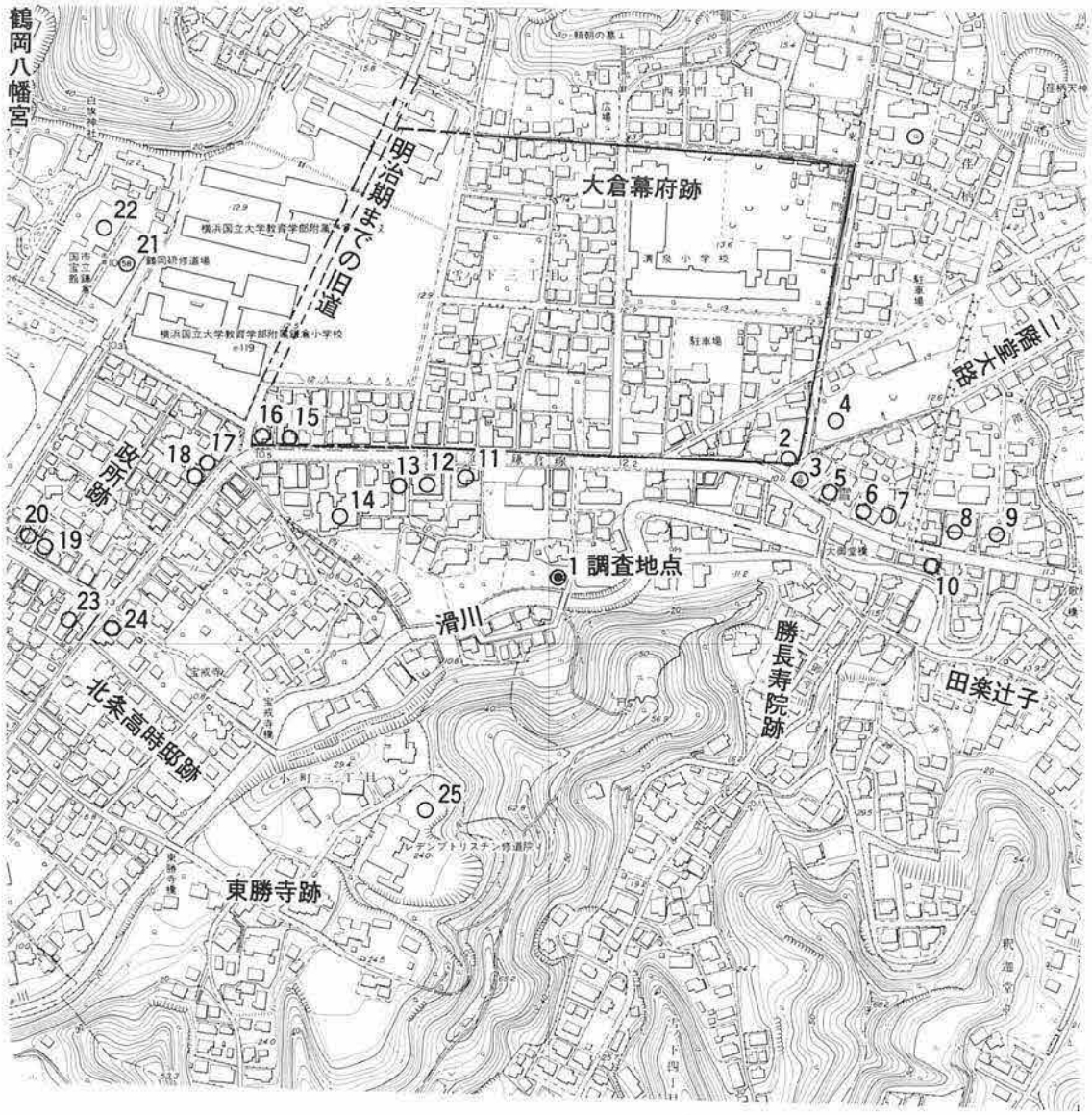
本遺跡は、神奈川県遺跡台帳では「大倉幕府周辺遺跡群」という名称を与えられた遺跡地に含まれており、鎌倉市街の東方、滑川中流域の左岸に位置し、ＪＲ鎌倉駅から東方に約1000メートルの距離にある。滑川は南北の低丘陵の谷間を西に流れ、本調査地点の周辺で何度か六浦道（近世は金沢往還、現在の県道金沢鎌倉線。以下では六浦道で統一する）と交差して鎌倉市内に流れ込み、由比ヶ浜に注ぐ。本調査地点は六浦道から約50メートルほど南に位置している。

六浦道は、文字どおり武蔵国六浦へと通じる道であり、水路で房総半島にまで到るという東海道の一部であった。この道は頼朝入部以前からの鎌倉における主要道路であり、現在の寿福寺にあったとされる頼朝の父義朝の館は、六浦道と、武蔵国府へ向かう現在の今小路との交差点という要地を占めていたと考えられている。[①] また、今小路の西側の今小路西遺跡では、十世紀中頃まで存続する鎌倉郡衙が検出されており、[②] 古代以来、今小路も重要な道であった。この今小路とつながる六浦道沿いには、参道が六浦道とほぼ直角に交わる荏柄社や、道に面して位置する杉本寺など、頼朝以前からの存在が想定される寺社があった。

２．歴史的環境

荏柄社は本調査地点から北東に約500メートル離れた地にある。平安時代の承和年中（931～938）に作成され、当時の行政地名とその読みを現在に伝える『和名類聚抄』には鎌倉郡のうちに「荏草郷」が見え、「エカラ」と読まれている。荏柄社は、当時荏草郷と呼ばれたこの地域に創建されたのであろう。ちなみに社伝では、長治元年（1104）の創建とする。この当否は措くとしても、荏柄社が頼朝以前から六浦道に向かって建てられていたことは確実であろう。一方で杉本寺は、本調査地点からほぼ東に約700メートル離れた地にある。天平六年（734）に開基を藤原房前、開山を行基として開創されたという伝説を持つ。鎌倉幕府時代の記録である『吾妻鏡』には「大倉観音」として登場するが、文治五年（1189）の火[③]事に際して、本尊が杉の木の本で焼けずに立っていたことから、杉本観音と称するようになったという。その後、頼朝の庇護を受けて再興された。

頼朝が鎌倉に入ると、当時はこの一帯が「大倉郷」と呼ばれていたようで、頼朝は「大倉郷」に御所をおいた。[④] 南北朝期頃の成立とされる『保暦間記』[⑤] には治承四年（1180）十月十五日に「相模国小坂郡鎌倉ニ始メテ館ヲ搆ヘタリ。是ハ源頼義朝臣ノ屋敷。」とあり、史料的な信憑性はやや落ちるものの、頼朝の五代前に当たる源頼義の頃から大倉に邸宅を持っていたことが記されている。頼朝の御所は大倉幕府と呼ばれ、この時に御家人達の屋敷も周辺に建てられた。[⑥] 本調査地点も、そうした御家人の屋敷内であった可能性は低くない。本調査地点の周辺にその邸宅地が比定されるのは、畠山重忠、八田知家、大江広元、北条時房らである。畠山重忠の邸宅は、正治元年に「南御門宅」として記録に登場し、[⑦] 八田知家の邸宅は、文治三年（1187）、頼朝・頼家親子の御行始の行き先に指定され、「南御門ノ宅」と表現されている。[⑧] いずれも、大倉幕府の南にあたる「南御門」と記されていることから、大倉幕府跡の南に位置する本調査地点周辺に比定できる。建保元年（1213）に起きた大倉御所周辺の火事では、八田知家・大江広元・北条時房の邸宅が全焼している[⑨]ので、知家のほかに、大江広元・北条時房の邸宅も本遺跡周辺にあったと考えられよう。本遺跡周辺だけでなく、その東には、六浦道沿いに北条義時や和田胤長、梶原景時の屋敷跡という伝承の残る地があり、その真偽は措くとしても、御家人クラスの人間が居館を



1．調査地点
2．大倉幕府周辺遺跡（雪ノ下字大倉耕地569番1地点）
3．関取場碑
4．大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄38番1地点）
5．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下五丁目562番16地点）
6．大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄天神前562番29地点）
7．大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄天神前565番4地点）
8．横小路周辺遺跡（二階堂字荏柄10番6外地点）
9．横小路周辺遺跡（二階堂字荏柄9番1地点）
10．横小路周辺遺跡（雪ノ下五丁目557番1地点）
11．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下四丁目620番5地点）
12．大倉南御門遺跡A地点
13．大倉南御門遺跡B地点
14．大倉南御門遺跡C地点
15．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下三丁目607番外地点）
16．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下三丁目606番1地点）
17．政所跡（雪ノ下三丁目965番地点）
18．政所跡（雪ノ下三丁目966番1地点）
19．政所跡（雪ノ下三丁目987番1・2地点）
20．政所跡（雪ノ下三丁目988番地点）
21．鶴岡八幡宮（研修道場用地）
22．鶴岡八幡宮（鎌倉国宝館用地）
23．北条小町邸跡（雪ノ下一丁目395番地点）
24．北条高時邸跡（小町三丁目426番3地点）
25．東勝寺跡（小町三丁目）

図1　調査地点周辺図

構えていたであろうことは疑いない。以上のように、頼朝入部以前も、そして頼朝が大倉に幕府を構えた頃も、六浦道を中心に邸宅が建てられており、六浦道が鎌倉の機軸線だったのである。

嘉禄元年(1225)に将軍の御所が大倉から若宮大路周辺へと移転したことで政治的な中心はそちらへ移動する。[10] 将軍に代わって幕政の実権を掌握しつつあった北条氏も若宮大路周辺に邸宅を持ち、[11] 大倉幕府周辺にあった御家人の宿館も若宮大路周辺に新設されたと推測されている。[12] ただし、残された史料はほとんどが『吾妻鏡』であり、同書が北条氏に近い立場の人物によって編纂されたと考えれば、[13] 北条氏の邸宅のある若宮大路周辺の記録が自然と多くなり、一方で大倉周辺の規則が減少したという可能性もあり、一概には断定できない。平地が貴重である鎌倉において、おそらく当時は人口が増え続けていたであろうから、本遺跡周辺の邸宅は、その持ち主が代わったり、多少分割されたりこそすれ、廃棄されて荒野に帰することはなかったであろう。『吾妻鏡』建長三年(1251)十二月三日条や、同文永二年(1265)三月三日条に見える、鎌倉幕府が商業地域を指定した法令といわれる史料には、小町、大町などと並んで「大倉辻」が登場しており、大倉が鎌倉の政治的な中心からは外れながらも「町屋」と呼ばれる商業地域として栄えていたことが分かる。つまり、嘉禄元年（1225）の御所移転後の大倉は、幕府とその周辺に御家人の邸宅が立ち並ぶ政治的な空間から、「町屋」と呼ばれる商業地域に指定されるような空間へと変化を遂げたのである。もちろん六浦道は、鎌倉の外港六浦へとつながる要路であり続けていた。六浦道から50メートル南に入った地点にあった本調査地点周辺も、あるいは「町屋」的な様相を呈していたのかもしれない。

鎌倉幕府が滅びると、関東公方のいる鎌倉府は、大倉幕府よりも東、現在の浄妙寺周辺におかれ、若宮大路周辺は鎌倉時代のような政治的中心ではなくなる。当然ながらその鎌倉府周辺には公方に仕える武士達の居館があったことが推定され、政治的な中心が再び六浦道沿いの地域に戻ってきたといえる。つまり、頼朝以前と源氏三代将軍の頃には東西に走る六浦道が鎌倉の機軸であり、御所が若宮大路周辺に移転した嘉禄元年（1225）から幕府滅亡までは南北に走る若宮大路が鎌倉の機軸であったのが、南北朝期以降は再び六浦道が機軸となったのである。[14] 関東公方を支える関東管領の上杉氏も、鎌倉府に近接する犬懸・宅間に邸宅を持っており、本調査地点周辺も鎌倉府推定地の浄妙寺からは多少離れてはいるが、公方に関わる武士の邸宅があったとしても不思議ではない。また上杉氏は、山内・扇谷にも居館を持っていた。山内は今小路が北へ延びて武蔵国府へと向かう道に沿った地域であり、扇谷は寿福寺のある亀ガ谷に近接していることを考慮すれば、室町時代の鎌倉における要地が六浦道沿いと武蔵国府に向かう道沿い・扇谷周辺にあったと考えることができる。この状況が、今小路と六浦道の交差点である亀ガ谷に館を構えた義朝の頃と似ていることから、室町期の鎌倉の構造は、義朝の頃のような自然発生的な本来あるべき鎌倉の姿に回帰したものであるといえよう。逆に鎌倉時代の鎌倉は、本来土地利用のしにくい若宮大路周辺をあえて都市の機軸に据えた、極めて人為的な構造を持つ「都市」だったと考えられる。

以上のように、鎌倉は、当初は六浦道を東西の機軸としていたが、嘉禄元年（1225）の御所移転後は若宮大路を南北の機軸とするようになり、鎌倉府設置以降は、多少中心が東にずれるものの、再び六浦道が東西の機軸となったのである。そのなかで本調査地点は、鎌倉時代の初期までと鎌倉府設置以降に機軸となった六浦道に近く、頼朝に仕える御家人の邸宅地域から、「町屋」と呼ばれる商業地域を経て、鎌倉府に関わる武士の邸宅地域へと変化していったと想定することができるであろう。

註

①馬渕和雄「武士の都鎌倉－その成立と構想をめぐって－」馬渕和雄（網野善彦・石井進編『中世の風

景を読む－２』(新人物往来社　1994）参照。

②河野眞知郎他『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会　1990。なお、今小路という名称自体は、比較的新しいものであるが、ここでは便宜上この名称を用いた。

③『吾妻鏡』文治元年（1189）十一月廿三日条。

④『吾妻鏡』治承四年（1180）十二月十二日条。なお『鎌倉市史総説編』では記録に登場する邸宅を網羅している。

⑤『保暦間記』(『群書類従』雑部)。なお、『保暦間記』の作者・成立時期、ともに不明な点が多いが、武家側に立った記述が多く、また記録の終わる暦応二年（1339）とは遠くない時期に成立したものと考えられている。『保暦間記』については、益田宗「保暦間記の文献批判学的研究」(『日本学士院紀要』16巻３号、1958）参照。

⑥『吾妻鏡』治承四年（1180）十二月十二日条

⑦『吾妻鏡』正治元年（1199）五月七日条

⑧『吾妻鏡』文治元年（1187）正月二日条

⑨『吾妻鏡』建保元年（1213）十月一日条

⑩石井進「文献から見た中世都市鎌倉」(『中世都市鎌倉を掘る』(日本エディタースクール出版部、1994)、松尾剛次『中世都市鎌倉の風景』(吉川弘文館、1993）など。

⑪北条氏の邸宅については、秋山哲雄「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」(『史学雑誌』106－９、1997）を参照。

⑫山村亜希「中世鎌倉の都市空間構造」(『史林』80－２、1997)

⑬『吾妻鏡』の史料的性格については五味文彦『増補版吾妻鏡の方法－事実と神話にみる中世』（吉川弘文館、2000）参照。

⑭山田邦明「室町時代の鎌倉」(『中世を考える都市の中世』吉川弘文館　1992)、前掲石井進「文献から見た中世都市鎌倉」参照。

第２章　調査の概要

1. 調査の経過

本遺跡は、六浦道と呼称される現在の県金沢鎌倉線の南側に位置している。本調査地点は大倉幕府周辺遺跡群（県遺跡台帳№49）の一角、鎌倉市雪ノ下四丁目580番10外地点に所在し、南隣して滑川が東から西に向かって流れている。平成11年２月に個人専用住宅建設の事前相談があり、建築計画に地下室の構築を含む案件があったため、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断された。神奈川県藤沢土木事務所との協議の結果、住宅の建設工事は滑川に架かる大倉稲荷橋の架け替え工事を待って実施される話し合いとなった。従って、同橋架け替え工事が完了する平成12年３月末以降に発掘調査を実施することで事業者との具体的な協議は一時中断することになった。しかし、橋の架け替え工事が当初の予定より早く完了することになったため、文化財保護法に基づく手続きを行い、平成12年２月から発掘調査を実施する運びとなった。

本調査は、個人専用住宅の建設に伴う事前調査として、地下室部分にあたる掘削範囲を対象にした。調査面積は約129㎡である。現地調査は平成12年２月１日から同年３月20日にかけて鎌倉市教育委員会により実施された。調査経過については、以下のように日誌抄の抜粋を記しておく。

日　誌　抄

２月１日　調査開始、機材搬入、調査区を設定し重機による表土掘削。
２日　遺構検出作業開始。調査区南端で、近世・近代を主体とした東西方向の落ち込み検出。調査区グリット設定及び原点レベル移動。
３日　近世・近代河川の掘り下げ開始。
７日　近世・近代河川の完掘・写真撮影。
８日　近世・近代河川の平面図実測。
９日　調査区東西両端に沿ってサブトレンチを設定。土丹塊の広がりを確認（上層河床）。
10日　上層河床の検出作業開始。
16日　上層河床の全景写真撮影。平面図実測開始。
19日　平面図終了。調査区東西壁際に先行トレンチ設定、掘り下げ開始。
東壁：Ａトレンチ　西壁：Ｂトレンチ
22日　中層河床の検出作業開始（両トレンチの調査結果から）。
26日　中層河床の平面図実測開始。
29日　中層河床全景写真をラジコンヘリにて空中撮影。調査員による個別写真撮影。
３月３日　下層河床の検出作業開始。調査区東西壁の土層セクション図実測開始。
11日　下層河床の全景・個別写真撮影。平面図実測開始。
14日　下層河床の平面図実測終了。両トレンチ及びＤ軸の南壁に拡張トレンチ設定。縄文時代の自然流木検出作業。
19日　各拡張トレンチ及び縄文時代自然流木の写真撮影・平面実測。
20日　現地調査終了。関係各方面に調査終了の旨を連絡、機材撤収。

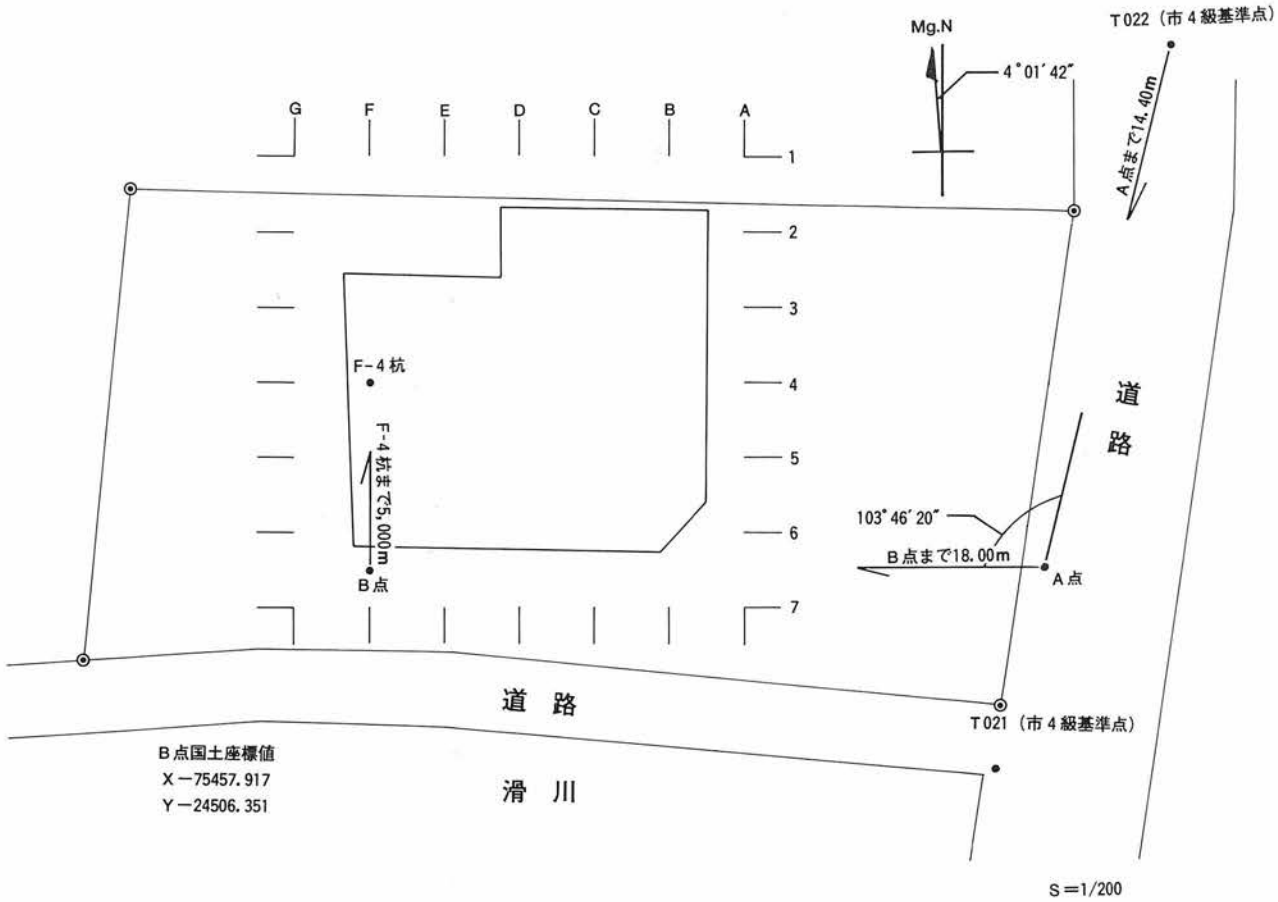


図２　グリット配置図

２．測量設定

グリット設定方法は、県道金沢鎌倉線の主要幹線より南に折れ、大倉稲荷橋に向かう道路沿いに、鎌倉市道路管理課が設置した４級基準点を基点にして行った。図２において示したように調査地点に東隣して走る道路の北方の位置にあたるT022［X－75445.495　Y－24484.163］と、南方の位置（大倉稲荷橋袂）にあたるT021［X－75464.432　Y－24490.140］の２点が確認された。そこで連結する両基準点の軸線上で、T022　４級基準点から南へ距離14.40mに仮原点にあたるA点を設けた。

A点からN－103°46′20″－Wの方位で、距離18.00mの調査区外あたる位置に仮のB点［X－75457.917 Y－24506.351］を設定した。次にB点から調査区の軸線に沿うかたちで北へ距離５m地点に測量基準点（F－４杭）を設けた。このF－４杭を軸交点の基準として、調査区内を２mグリットに区画した。南北方向に北から算用数字を、東西方向に東からアルファベットを付した。また遺物採り上げや遺構位置を示すために北西隅の交点杭を各区画の名称とした。

方位はすべて真北を使用しており、南北軸方位はN－４°1′42″－Eである。

レベル原点については、岐れ路交差点の入口で県道南側歩道にある鎌倉市３級水準点（No 53209＝12.107m）を調査区内に移動した。従って、文章中及び挿図のレベル数値はすべてその海抜高で示している。

第３章　検出遺構と出土遺物

１．近代・近世河川（図３～６）

本調査では、旧河川跡以外に遺構として認定できるものはなかったが、中世から近代までの旧滑川の河道を中心に検出された遺構と土層観察からその概略を述べることにする。調査区は、シートパイルによる土留めが施されていたので重機で近代以降の客土を掘削した後、周囲に土層観察用の縁帯部を設けてその内側を調査範囲とした。以下、試掘結果を参考に遺構検出のため掘り下げを実施した。

調査区西側では、厚さ30～50cm程の近世水田耕作土の上位に宝永火山灰がブロック状に散在していた

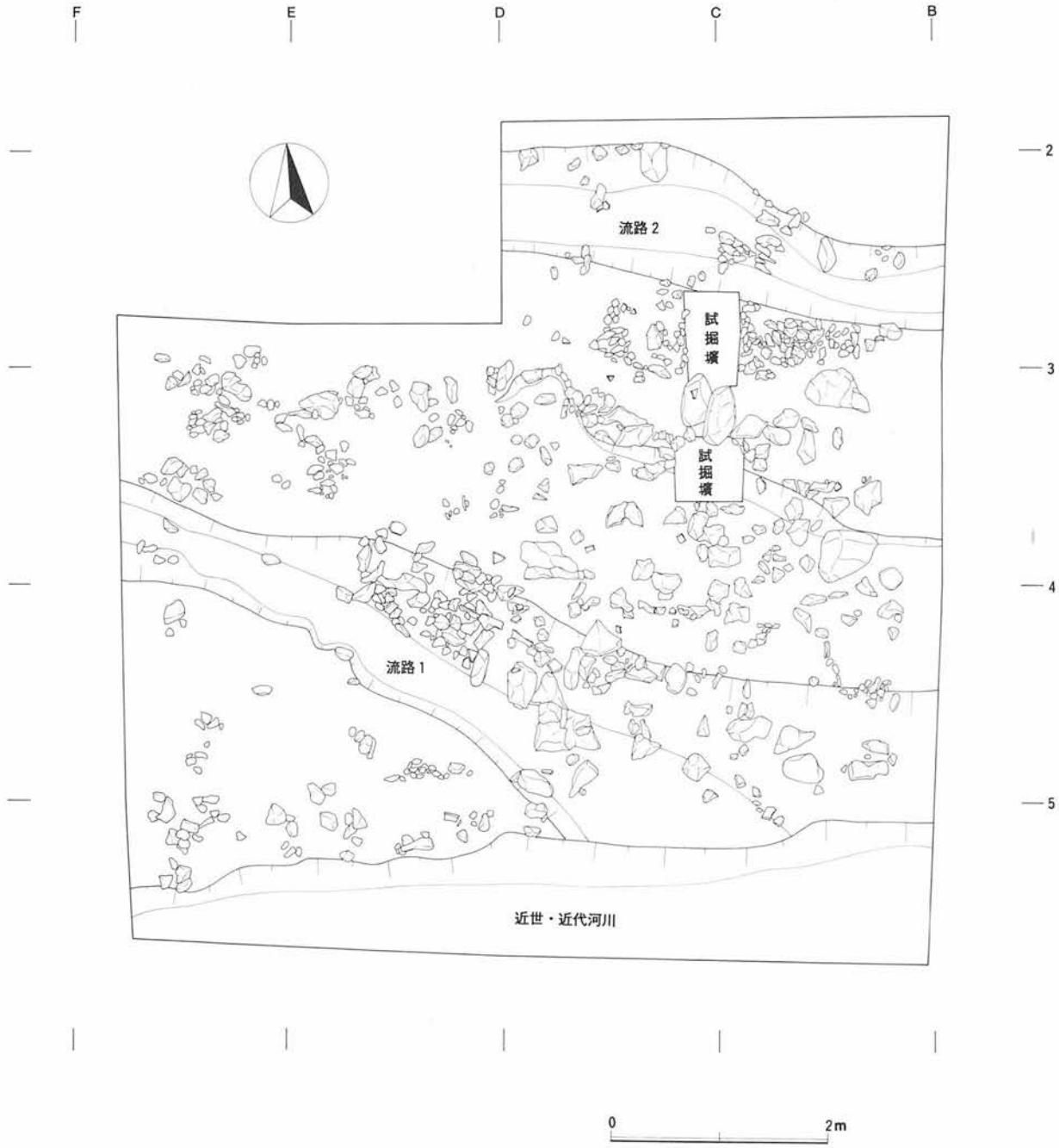


図３　上層河床

のが確認された。宝永火山灰を含んだ耕作土を除去すると、図３に示した近世・近代河川と中世期と考えられる河床が検出された。

ところで宝永火山灰は、宝永４年(1707)11月23日に富士山山腹が噴火した時に多量の火山灰を伴った噴煙が、駿河・相模・武蔵などの国々に降灰し、農作物に多大な被害を与えたことが知られる。鎌倉でも永福寺跡や若宮大路周辺の市街地の発掘調査を中心に良好な状態の宝永火山灰が認められている。本地点の近世・近代河川とした遺構は、この火山灰を含んだ水田耕土よりも新しい時期の河道であることが図17にみられる土層堆積の観察からも伺える。

調査区南壁に沿って東西に走る旧河川跡と考えられる急激な落ち込みを検出した。この旧河川は調査地の南側を流れる現在の滑川に平行しており、出土遺物や土層観察からみて近世から明治期にかけての所産と考えられる旧滑川の北岸を確認したものと推定される。

この旧河川は、調査区ではＢ－５杭付近の東壁際から落ち込みが確認され、５ラインに沿ってやや南に振れながら西壁までの間に検出された。東西側及び南側はともに調査区外に延びており、河川の幅や正確な河床までの深さなどは不明である。規模はＡトレンチ南端拡張部を含めた範囲で把握できたのが幅約2.7m、確認レベルからの深さ約２ｍまでと限定されたものであった。現状での標高は、北岸肩レベルが海抜約7.50m、底面レベルの海抜5.55m前後である。覆土は大別すると、暗褐色粘質土と青灰・灰褐色砂質土の二層から構成されている。後者は遺物をほとんど含んでおらず、粗砂と水磨した土丹・礫を多く含むもので流水における河川堆積土の可能性が高い。それに比べて前者の覆土は、大小土丹塊や多量の陶磁器類、ゴミなど（一部にハマグリやサザエがまとまって出土）を混入したやや締まりのない粘質土の厚い覆土で、下位から上位まで同一土層で構成されており、短期間に堆積した様子が認められた。

従って、現在よりも北に位置していた近世河川の河道を、明治期に入って南側へ寄せる改修工事（現滑川の河道に近い位置）が行われ、その際埋め戻しのためにもたらされた客土であったことが出土遺物の年代観や堆積土の様子から推定されるのである。調査区内に検出された近世河川からは、鎌倉市街地の旧河川で認められている杭打ちによる木組や鎌倉石・土丹塊による石積ような護岸的な施設は認められなっかた。

出土遺物（図４・５）のうち、１～18は瀬戸美濃と肥前系の染付磁器で、18世紀末～19世紀の明治期までを含んだ製品である。１・２・４は盃で２の高台内「禍福」あり、３は湯飲茶碗、５・６はそば猪口で外底蛇の目凹形高台になる。７～11は飯碗である。10は見込みにかなり崩れた「壽」を、11の印版手の底裏には「明治年製」を型紙摺する。12～16は鉢で外底が蛇の目凹形高台(15・16八角鉢）である。13・14には線描きの源氏香文を施す。17は線描き文様の皿で中国の清朝磁器の影響を受けたもの。18は輪花の染錦皿である。22は白磁小壺の蓋、23・24は白磁と青磁の小碗であり、これらの白磁・青磁類も幕末～明治期の所産であろう。

ところで９・11・16は、器面や割れ口の断面に鉛ガラスによる焼継ぎの補修痕が認められた。江戸後期になると欠けた茶碗を接いで回る「焼継師」という商売が流行したという。『武州関口日記』の当時の記録には、「茶碗皿焼継」や「猪口丼焼継」の代金が記載されており、幕末にあたる安政７年(1860)には茶碗１コの修理代24文などとみえる。

19～21・25～33は瀬戸美濃系の陶器類である。19～21は餌喰、25～31は灯火具で26・27が上皿、受け皿（下皿）には28～31が脚台付と、25の脚台無しがある。32・33はそれぞれ馬の目皿と片口鉢である。

この他に土製品の焙烙(34)、石製品の石臼と硯(35・36)、鉄釘や銅製火箸・銭（明治19年半銭）などの金属製品も出土している。

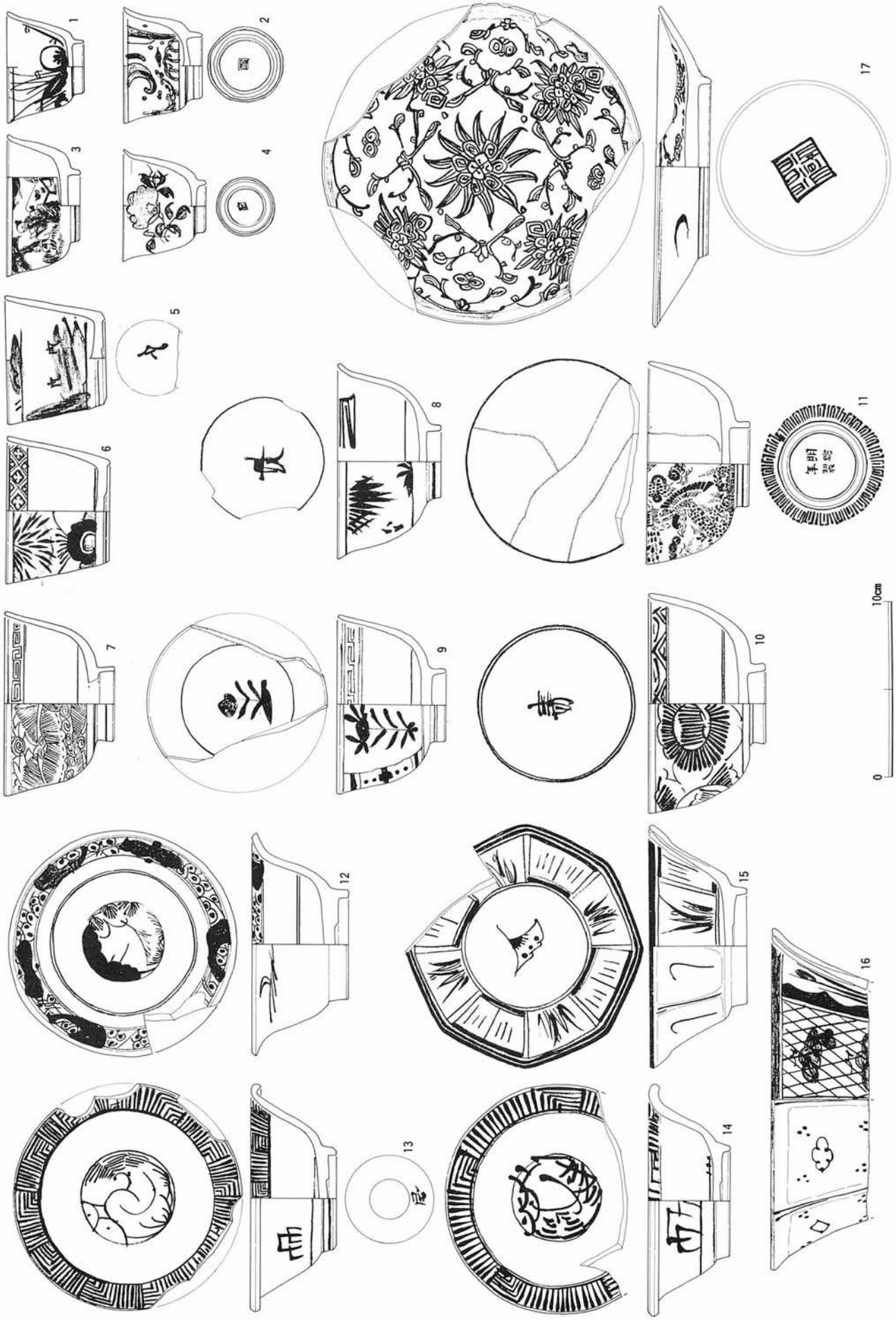


図４　近世・近代河川出土遺物（１）

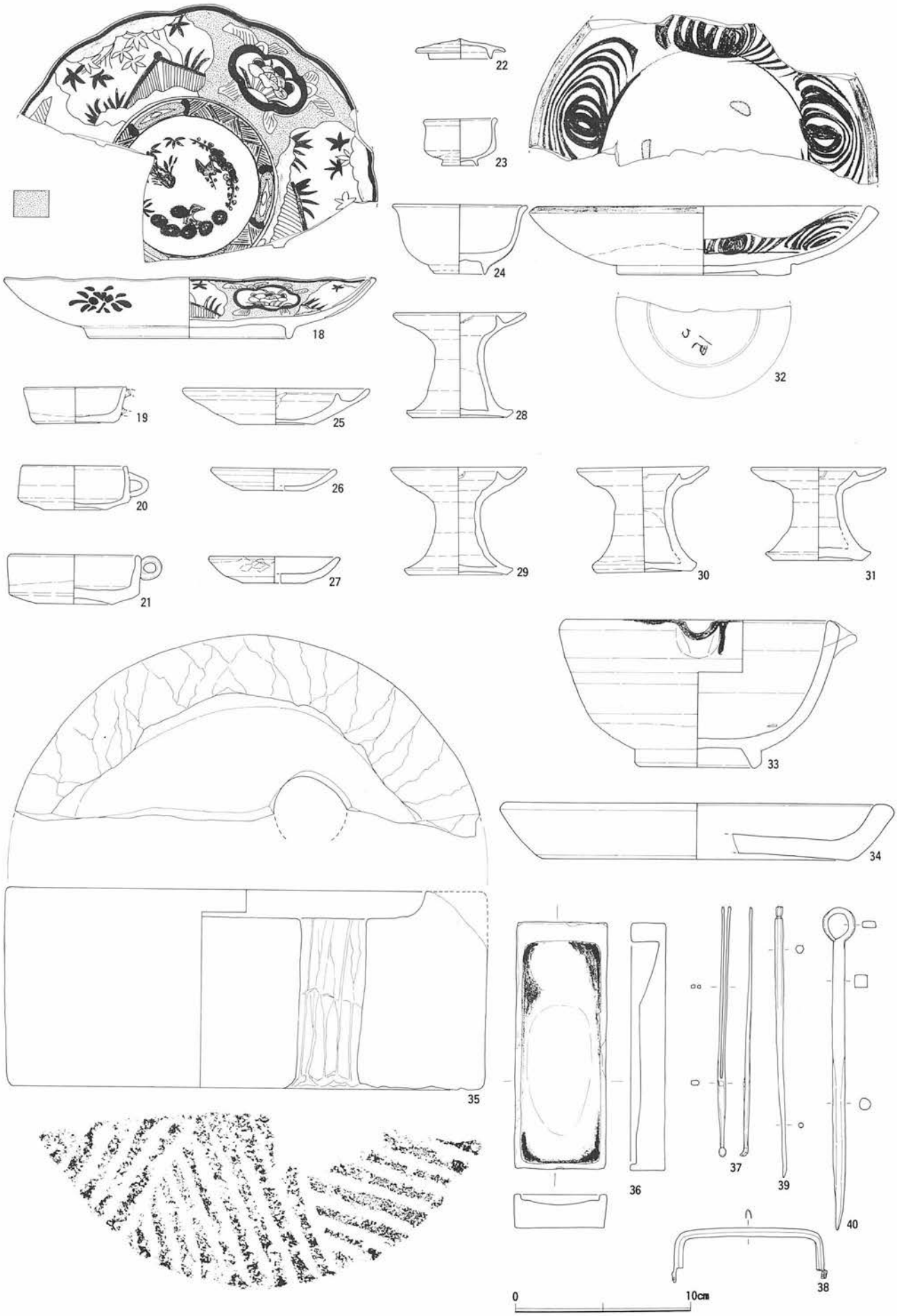


図５　近世・近代河川出土遺物（２）

2．中世河川

a．上層河床（図３・６・７）

近世・近代河川の検出時に北側に拡がっていた覆土は、水田耕作土と思われる砂の多い青灰色・黄褐色砂質土でかわらけ粒以外に遺物は殆ど出土していない。砂質土は約20～40cmの厚さで調査区全面に認められたので、これを精査しながら取り除いていくと、大小土丹塊と遺物が面上に散らばったような状況が確認された。出土した遺物や土丹塊は大半が水磨したものでその隙間には、砂礫や砂利が堆積していて東西方向の流水の痕跡を留めた中世河川と認めることができた。しかし、調査区内からは堤を思わす土盛りや杭・石の護岸施設など両岸ともに検出されておらず、全域が河底と想定されたので、これを上層河床とした。

上層河床の海抜標高を３ライン上でみると、調査区東端が約7.60m、西端が約7.30mで東から西に向かって弱く傾斜していることがわかる。また図17の土層堆積でも知られる様に北から南方向にやや落ち込んでいる。

調査区の北端と南側の二ヶ所で浅く溝状に落ち込んだ東西方向の流路を２条検出した。溝状の落ち込みの中には、河底面の堆積土と同じく粗砂・水磨した土丹粒を主成分とする土が窪んで堆積していたことから、河に水が流れていた当時にはすでに流路として機能していたものと考えられる。流路の西側にこれらの落ち込みを利用して河の護岸施設を支えるようなものではないことは確かであろう。河底の溝状に走る落ち込みは、河が機能していた当時、水量が少ない渇水期になると河床の一部だけを流下した所作で自然流路として溝状に窪んでしまったのであろう。

流路１は、主軸がやや北に振れたものである。Ｃ－５杭からＦ－４杭にかけて浅く溝状に落ち込んだ東西方向の流路で、南東側は近世・近代河川によって削平を受けている。幅は東端で1.7m以上と広くなり、Ｄラインあたりから急に狭くなり西端では１m程で、深さは20～35cmである。

流路２は、Ｃ・Ｄ－２グリットの範囲で流路１にほぼ平行した状況で検出されたもので、東西は調査区外に延びている。幅は約0.8～1.2m、深さ20cmほどである。

出土した遺物（図６・７－１～55）は、１～19がかわらけ、20～22が舶載磁器、23～29が瀬戸・美濃30～41が常滑、42が備前擂鉢、43～45が瓦質製品、46がフイゴ羽口、47～50が瓦類、51が砥石、52が弥生土器、53～55が土師器などである。

かわらけはロクロ成形のものと、少量ながら手捏ね成形もみられた。舶載磁器は龍泉窯系青磁盤または大皿（20・21）と同安窯系青磁櫛描文碗(22)である。瀬戸窯製品は天目茶碗(23)・灰釉平碗(24)・縁釉小皿(25･27～29)・入子(26)などがみられ、常滑窯製品に甕(30～34･40･41)・片口鉢Ⅰ類(38)・片口鉢Ⅱ類（35～37・39）がある。

瓦質製品には、口縁直下に菱形文をスタンプする小型香炉(43)と、手焙り(44・45)で44の外面に菊花文と連珠文を配したものがある。瓦類は永福寺跡創建期の蓮華文鐙瓦(47)・女瓦(48)・男瓦(50)の一群と同寺Ⅱ期所用（寛元・宝治年間）の女瓦で凹面「永福寺」スタンプしたもの。

土師器の53・54は表面の摩耗が著しく成形痕がはっきりしないが、胎土から観察すると後者が高坏で前者が台付甕の一部と考えられる。

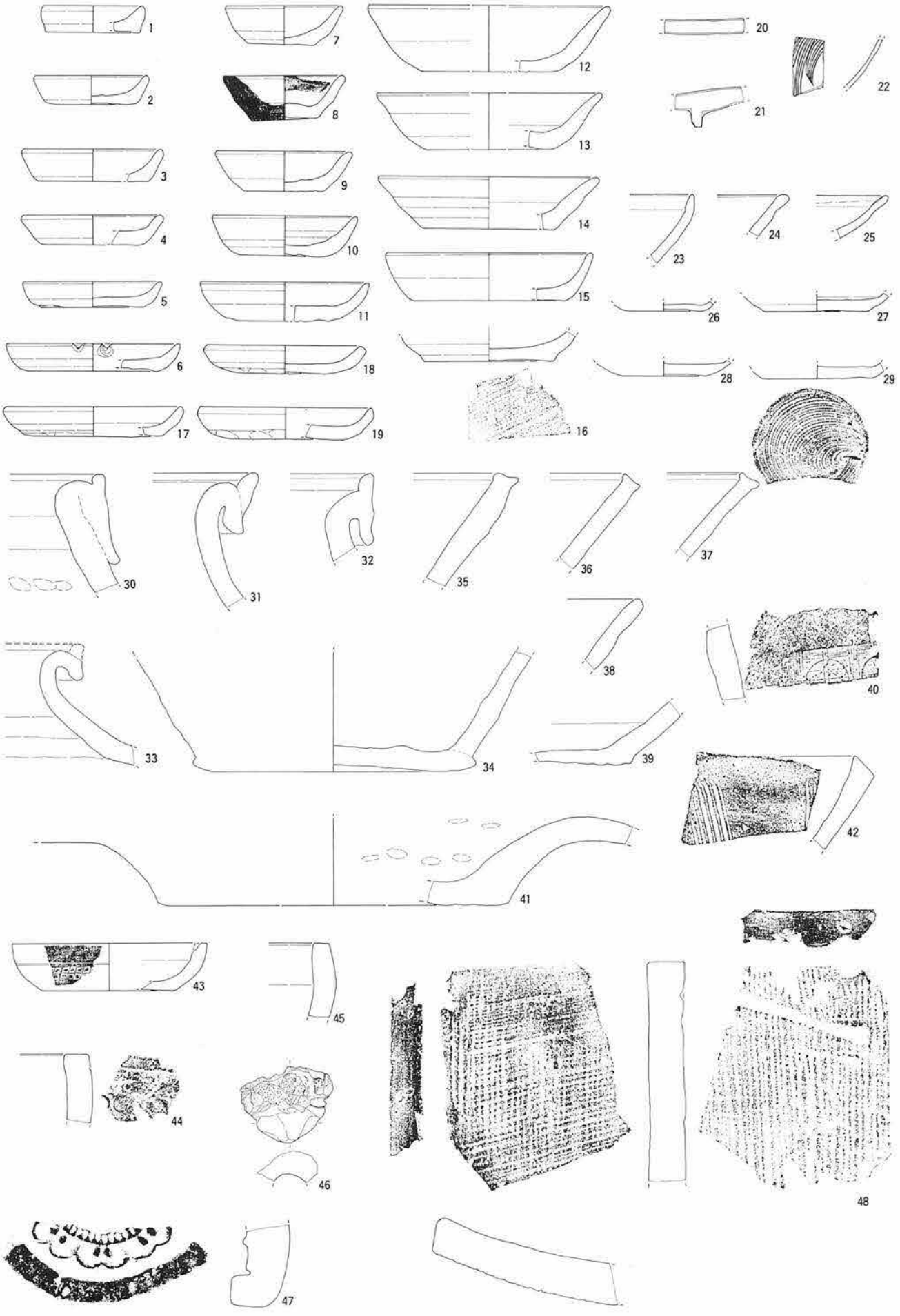


図６　上層河床出土遺物（１）

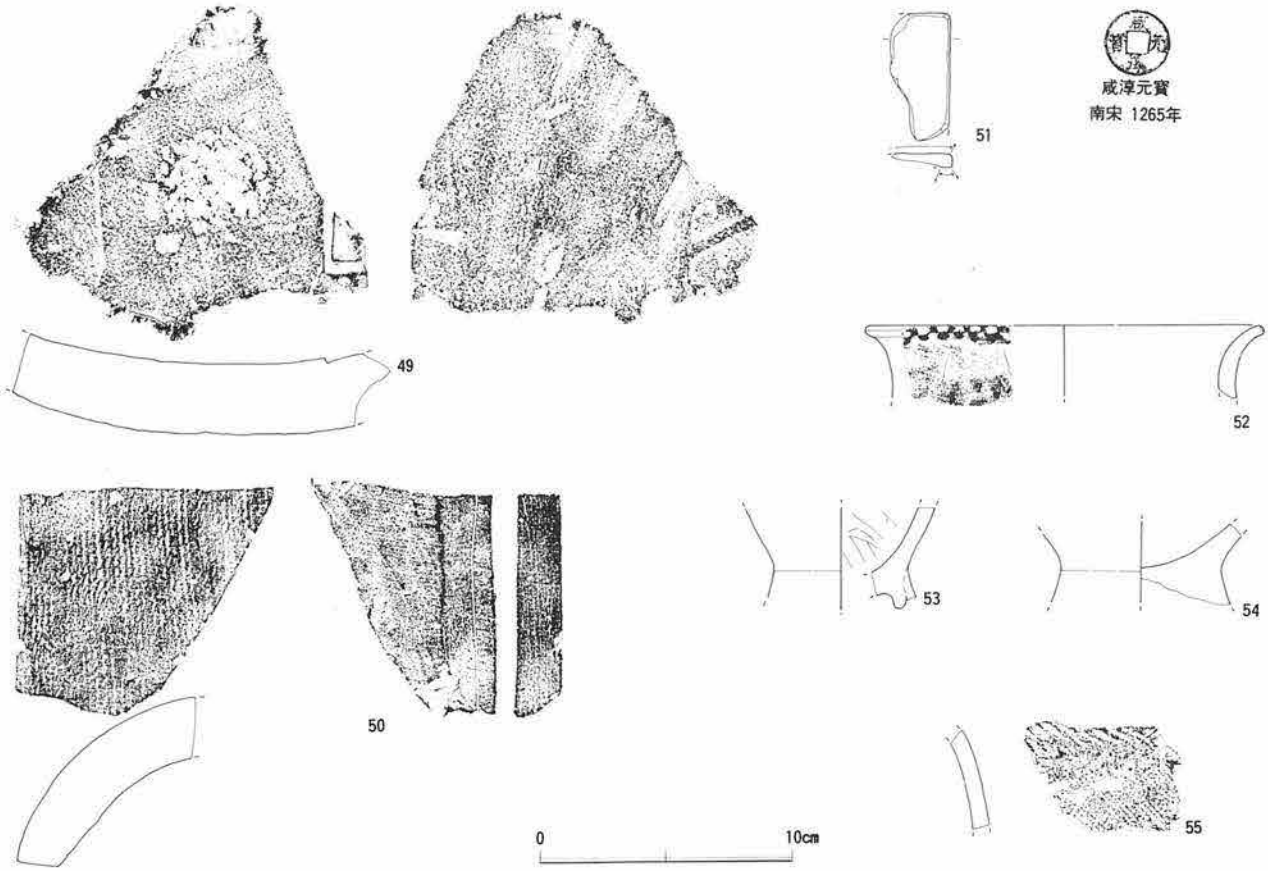


図７　上層河床出土遺物（２）

ｂ．中層河床（図８～15）

上層河床を構成していた大小土丹塊や灰褐色・灰色の厚さ20～30cmの砂礫層を除去すると、調査区全域で上層河床よりもさらに多量の大小土丹塊と砂礫、流下によって水磨した遺物を含んだ旧河川の河床が認められた。これを中層河床として調査した。

調査区南側において流路を思わす東西方向に走る溝状の落ち込みを検出した。流路は上層河床検出のものと同じく北にやや振れた軸方位を示していた。調査区内では東端がＢ－５杭の北隣した位置から落ち込みの北肩が確認され、西端はＦ－４・５杭の間あたりで調査区外に延びていく南側に落ち込む肩を認めることができた。反対側の立ち上がりは近世・近代河川により削平されていた。従って、現況では東端で幅１ｍ以上、深さ60cm程、底面標高が海抜約6.6ｍである。西端では幅1.4ｍ以上、深さ約50cmで底面はほぼ同レベルの標高を示していた。

中層河床の全測図作成と全景写真の撮影を終了した後、調査区東西壁直下に中層河床以下の遺構や堆積土層を確認することを目的としたトレンチを設定した。東端側に設けたのがＡトレンチ、西端側に配置したのをＢトレンチとし、両トレンチは幅60cm程で多量の湧水を伴っていたので排水溝もかねたものとなった。Ａ・Ｂトレンチを掘り下げた結果、深さ50～60cmの間で最下層に貝砂層が認められ、その上に無遺物の黒褐色粘質土および青灰色粘質土がみられ、さらに直上には中世遺物を交えた砂礫層の河川堆積土が全面で確認され、流路を思わす浅く窪んだ溝状の堆積も一部で観察された。

Ａ・Ｂトレンチでの調査結果は、中世河川の下層河床が検出され、さらにそれ以下に認められる貝砂層を含めた無遺物の粘質土が後述する縄文海進期に浅瀬ないし潮間帯で形成された砂層および黒色腐植

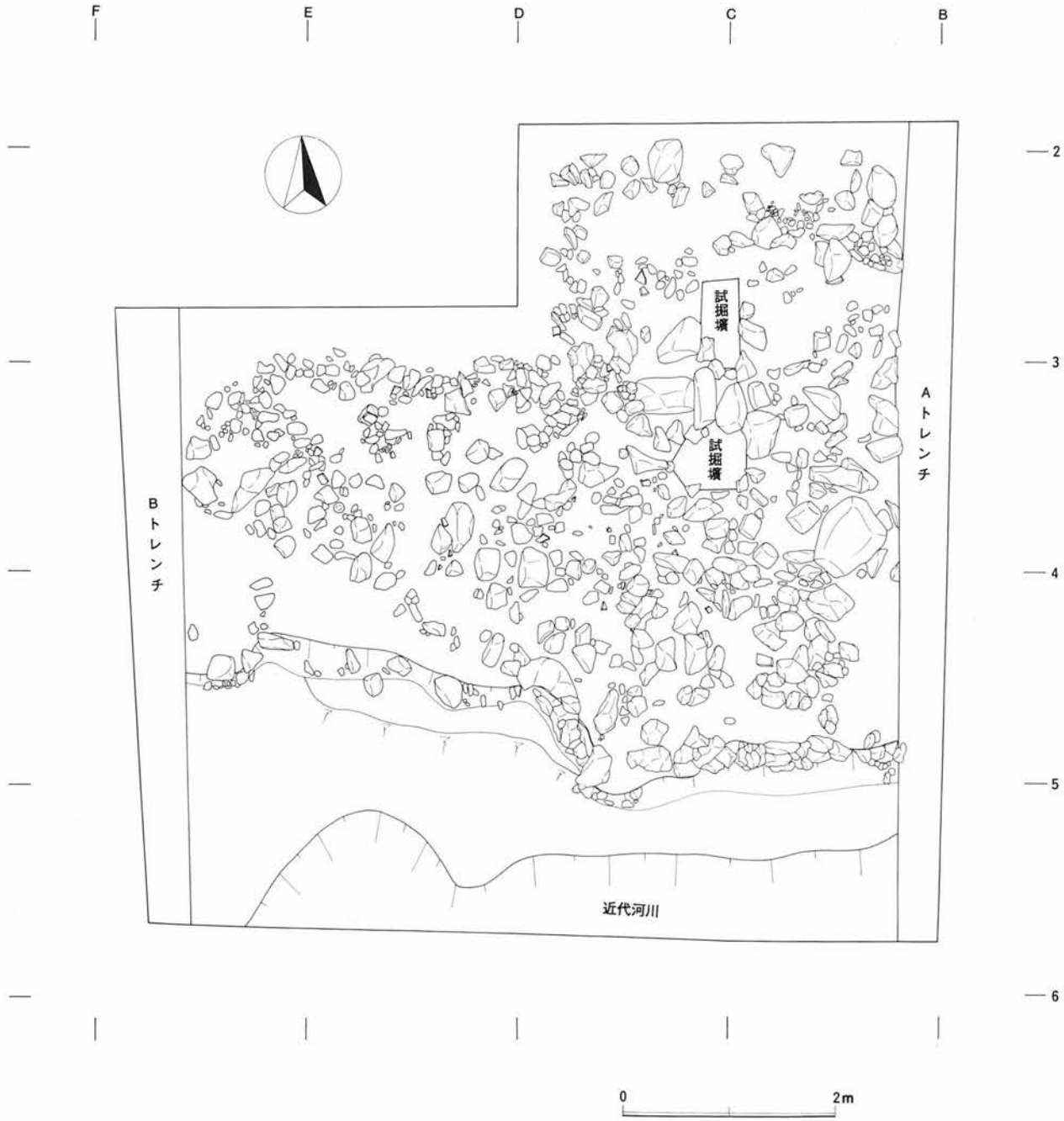


図8　中層河床

土に相当するものと推定された。

出土遺物は、図9・10が中層河床、図11が中層河床流路、図12・13がAトレンチ、図14・15がBトレンチにそれぞれ伴うものである。

図9・10－1～13はかわらけで、1～10はロクロ成形の糸切り底で他は手捏ね成形である。舶載磁器は14が同安窯系の青磁櫛描文碗、15～19は龍泉窯系青磁碗で劃花文・鎬連弁文・無文があった。21は青白磁梅瓶、23～25は白磁の端反碗と口兀皿である。20・22・26～37は瀬戸窯製品であり、26・27は灰釉平碗、28～30は縁釉小皿、31・37は卸し皿、20・32・33折縁皿、34は水注、22・35・36は壺類である。39～45は常滑窯製品、39・40・44は甕で44に加工があり、捏鉢は41・42の片口鉢Ⅱ類と43・45(摺り加工）の片口鉢Ⅰ類である。瓦質製品は46の女瓦と49の手焙り、47は黒縁皿、48鍔釜、50～52は石製品で滑石と砥石、53は須恵器甕である。

図11－1～15はかわらけで、1～11はロクロ成形の糸切り底で他は手捏ね成形である。舶載磁器は16

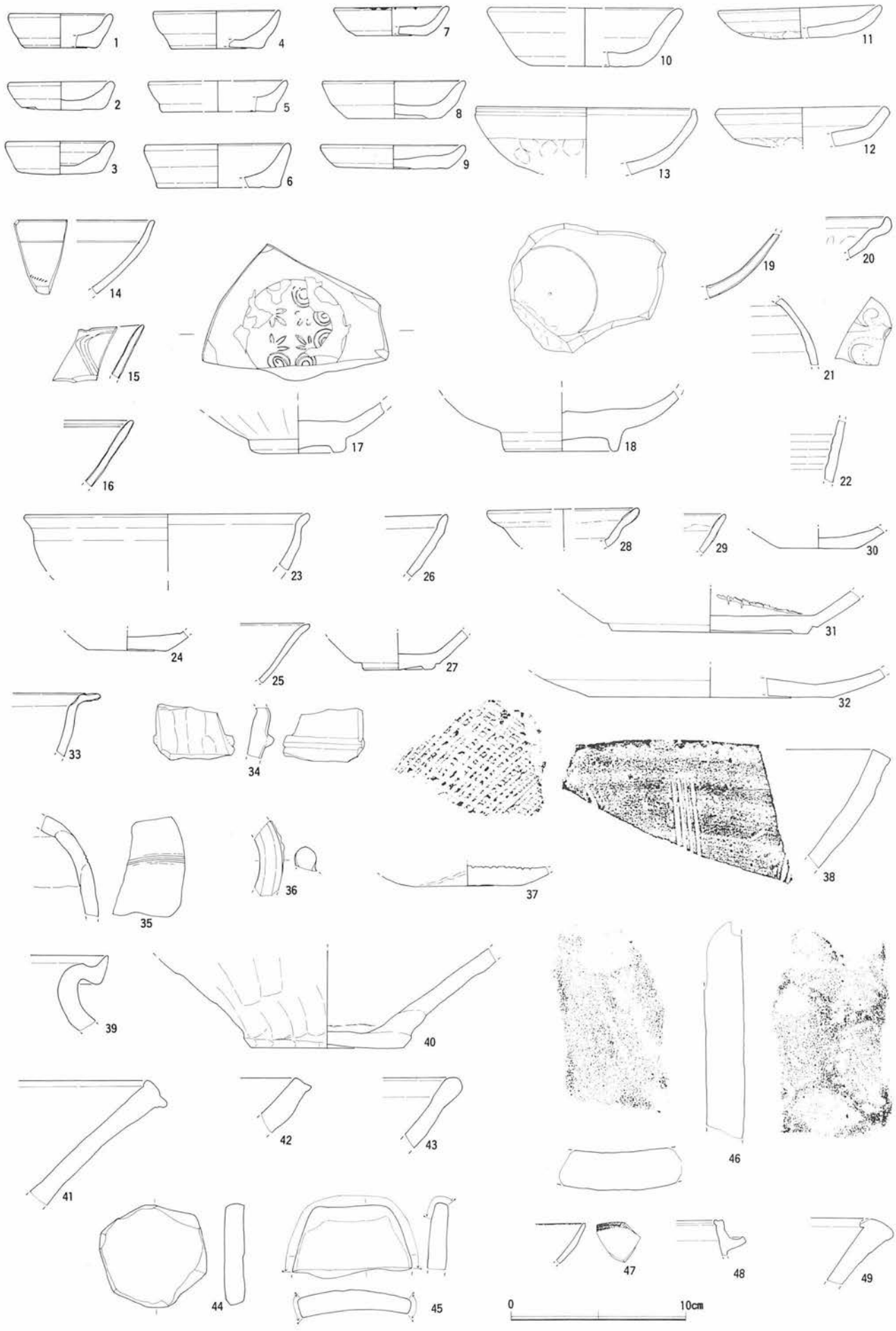


図９　中層河床出土遺物（１）

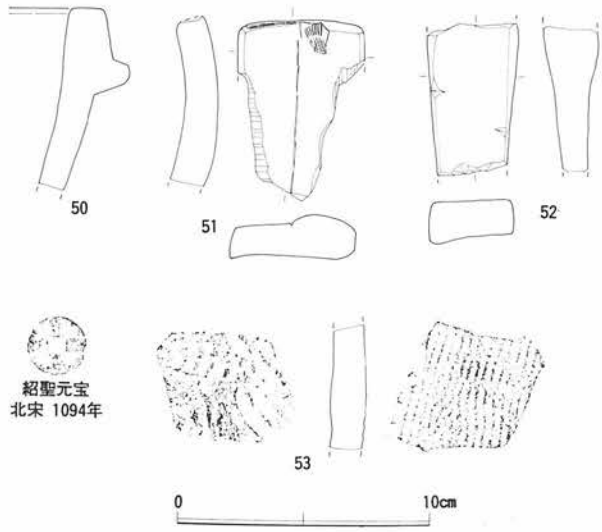


図10　中層河床出土遺物（２）

～22が龍泉窯系青磁で、16～20は劃花文・連弁文・無文碗、21は折縁皿、22は香炉である。23～25は白磁口兀皿、26は青白磁水注である。35は東遠江系所産の山皿である。27は瓶子、28は小壺、29･31･32は灰釉平碗、30は天目茶碗、33は入子、34は縁釉小皿、36・37は折縁皿、38は卸し皿である。39～41は常滑窯の甕と片口捏鉢、42は備前擂鉢、44・45は女瓦、46・47は砥石、48は頂部に耳掻きをもつ銅製笄である。

図12・13－１～17はかわらけで、１～13がロクロ成形で他は手捏ね成形である。18～21は龍泉窯系青磁劃花文碗、22は皿、23は青白磁輪花皿である。24～35は瀬戸窯製品で、天目茶碗・灰釉平碗・縁釉小皿・卸皿・入子・壺類などである。36・39は渥美窯、40～45は常滑窯の壺・甕・片口捏鉢ⅠⅡ類、46は魚住捏鉢、48は瓦質土風呂、49・50は瓦類、52は滑石製温石、53は銅製笄である。

図14・15－１～11はかわらけ、12～17が龍泉窯系青磁の連弁文・無文・劃花文碗であり、15の見込みに「金玉満堂」銘スタンプ。18・19は白磁口兀皿・四耳壺、20は青白磁梅瓶である。21～25は瀬戸窯の灰釉碗・縁釉小皿・折縁皿・入子である。26～28は常滑窯の片口捏鉢Ⅱ類、30は瓦器碗、31～35は瓦類36～38は滑石鍋と砥石、39はかわらけ転用の土製品である。41は縄文式土器、40・42は須恵器と土師器の甕である。

C．下層河床

中層河床の調査終了後に設けたトレンチの土層観察により、Ａトレンチ北端には盛り上がった状態で大小土丹塊が帯状に確認された。その南側は土丹塊がみられず調査区南端に向かって緩やかに傾斜した砂礫層の堆積が認められた。下層河床の調査は、この結果を基に全域を精査しながら掘り下げて行くことにした。調査区北端では、Ｃ・Ｄ－２ライン南側に沿ってはば１ｍ程の範囲に大小土丹塊を敷きつめられたような状況が確認され、隣接して浅い溝状の落ち込みが検出された（流路１）。またＣ・Ｄ－３グリットにも砂礫層の覆土をもつ浅い落ち込みがみられたので、これを流路２とした。

調査区北壁に沿って検出した大小土丹塊は、流水に伴う砂礫層がその上面や隙間に堆積しており、それに混じって多量の遺物も発見されたが、ほとんどの資料が水磨したものであった。

流路１は、主軸がやや南に振れたものである。落ち込みの両肩はＤラインまで確認できるが、それより西側は南肩だけが検出された。規模は幅約１ｍ、深さ20cm前後、底面の標高は東端で海抜約7.0ｍ、西端では6.80ｍ前後と東から西に向かって緩やかに下がっている。流路２は主軸がやや北に振れたもので、規模は長さ3.6ｍ以上、幅約１～1.2ｍ、深さ20cm前後で東側は調査区外に延びている。底面の標高は、中央部で海抜6.80ｍ前後を測る。

調査区周囲には土層観察用の縁帯部を設定していたが、下層河床の調査終了後に近世・近代河川の河底を検出するためにＡ・Ｂトレンチとｄライン南端からシートパイルまでの間にそれぞれ拡張トレンチを入れた。またＡトレンチ底面の貝砂層が自然堆積層なのかを確認する目的で再度掘り下げを行った。南端に近い位置の貝砂層中に東西位の自然木が確認されたが、その詳細は事項に委ねることにする。

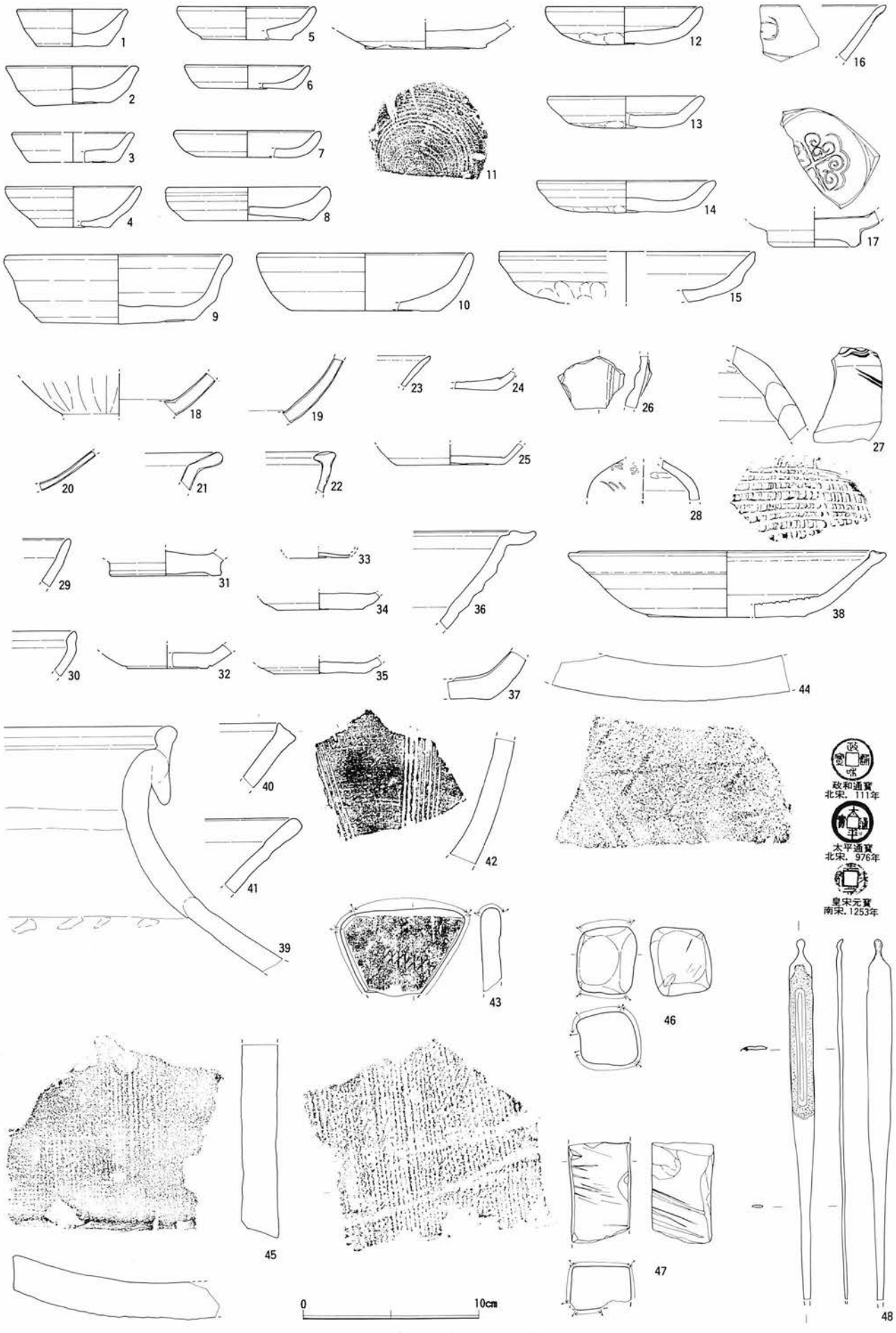


図11　中層河床流路出土遺物

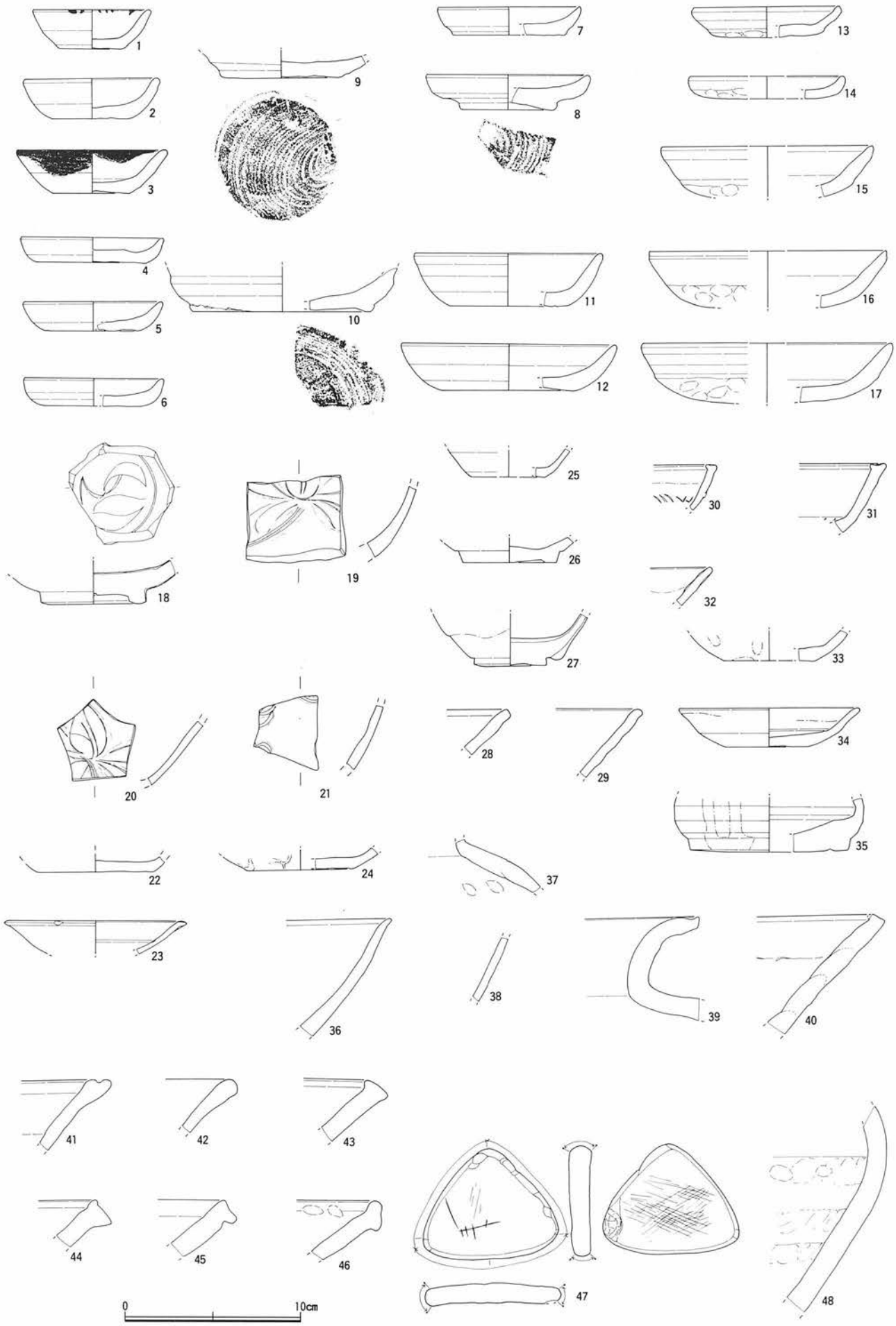


図12　Aトレンチ出土遺物（1）

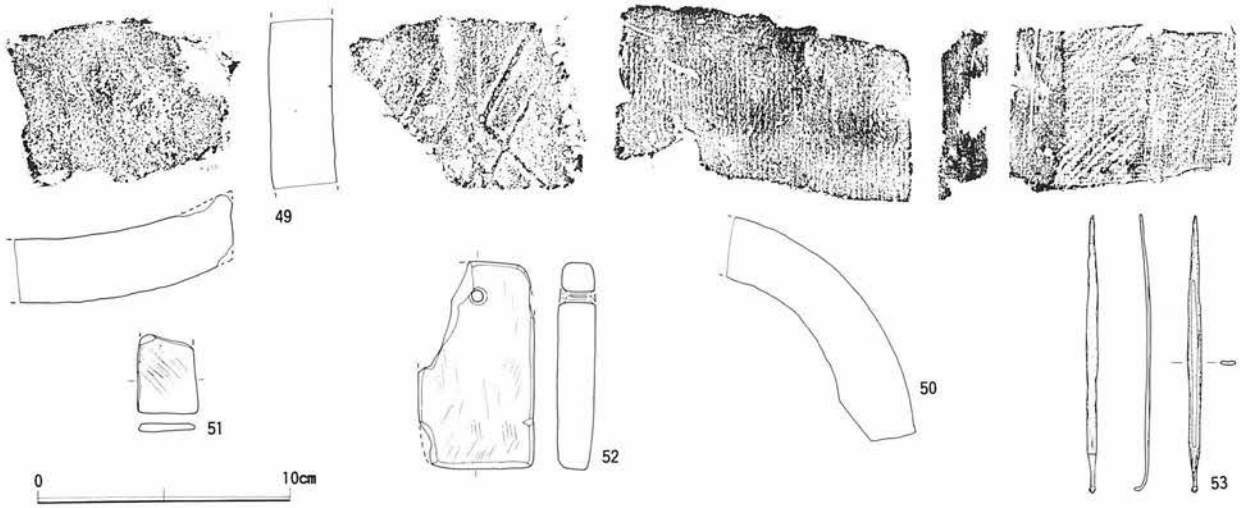


図13　Aトレンチ出土遺物（2）

出土遺物は（18～21）は、図18－1～58はかわらけである。1～48は糸切り底のロクロ成形の資料で11は小型品で底部に穿孔を有する。49～58は手捏ね成形の製品である。

59～62・64～72は舶載陶磁器である。59・60は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗、61は同安窯系青磁櫛描文碗62・64は龍泉窯系青磁連弁文皿、65は龍泉窯系青磁無文皿、66は龍泉窯系青磁酒会壺の蓋である。67～69は白磁で、67・69が口兀皿、68が小皿である。70・71は青白磁梅瓶、72は黄釉盤で内面に鉄絵の文様がみられる。

図18－63・図19－73～84・87～89は瀬戸窯の製品である。74～76は天目茶碗、86は灰釉平碗、77・78は灰釉の縁釉小皿、63・79～84は折縁皿、87は瓶子Ⅱ類、88・89は卸し皿、73は入子、85は荒肌手の南部系山茶碗である。

90～102は常滑窯の製品である。90～94甕、95～100は捏鉢、101・102は甕胴部片転用の擂り常滑である。

図20－103は渥美窯の捏鉢、104は備前の擂鉢、105～113は瓦質手焙りで113が脚部残す。114は土製品の灯明台か。115～120は瓦類で119の男瓦以外すべて女瓦である。

図20－121～125は石製品である。121～123は滑石製鍋と鍋転用した加工品の温石、125は砥石、126・127は鉄釘である。

128～137は中世以前の土器類で、128が須恵器の甕、129～137が土師器類である。129は壺、130・136は台付甕、131～135・137は甕である。

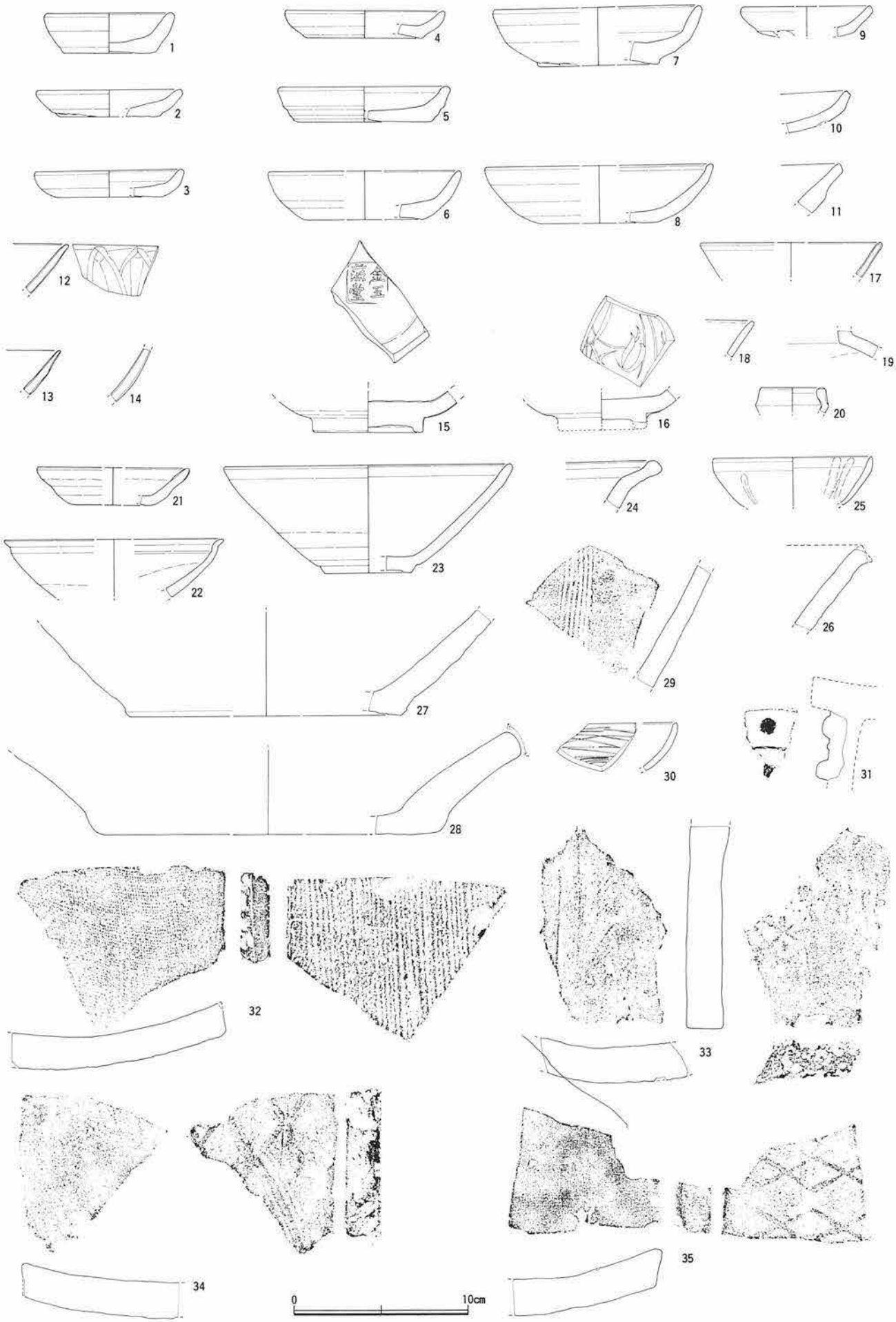


図14　Bトレンチ出土遺物（1）

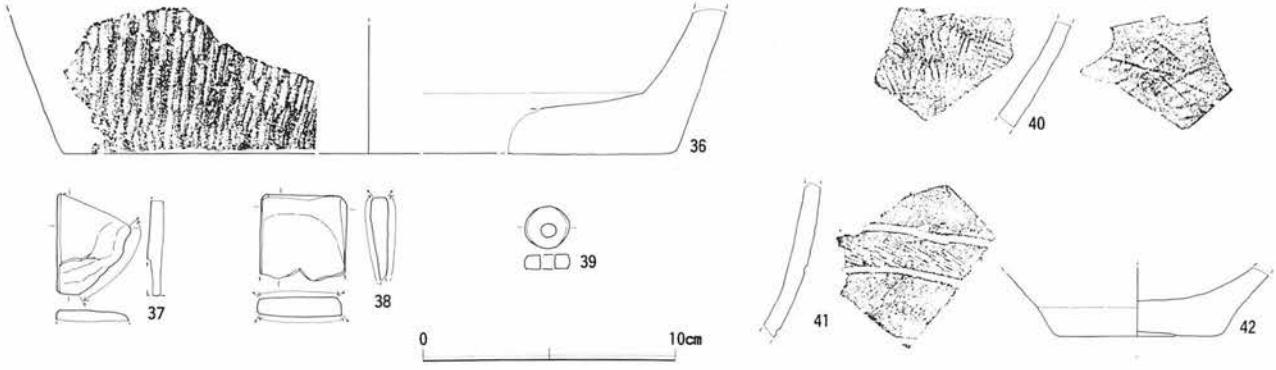


図15　Ｂトレンチ出土遺物（２）

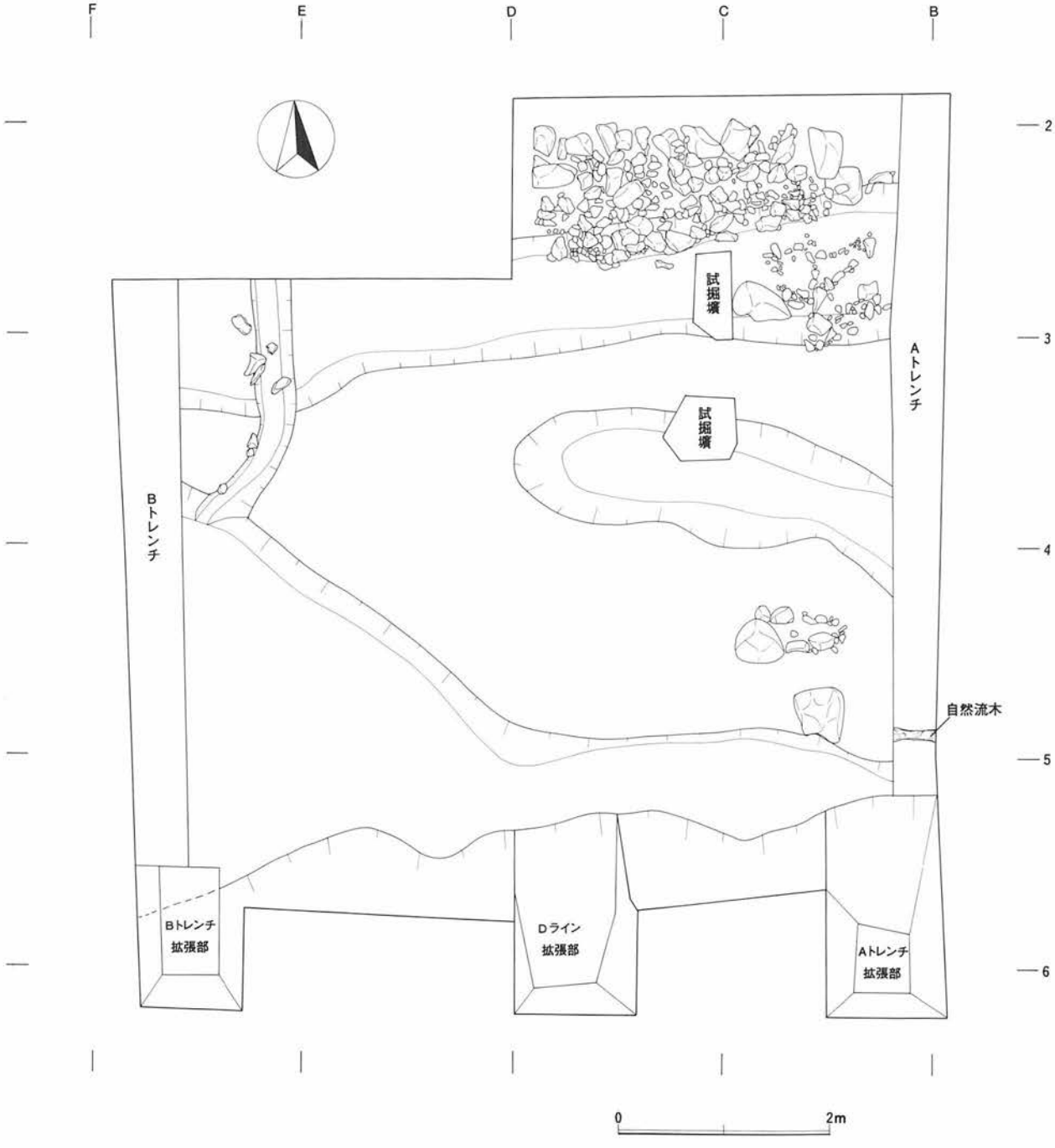
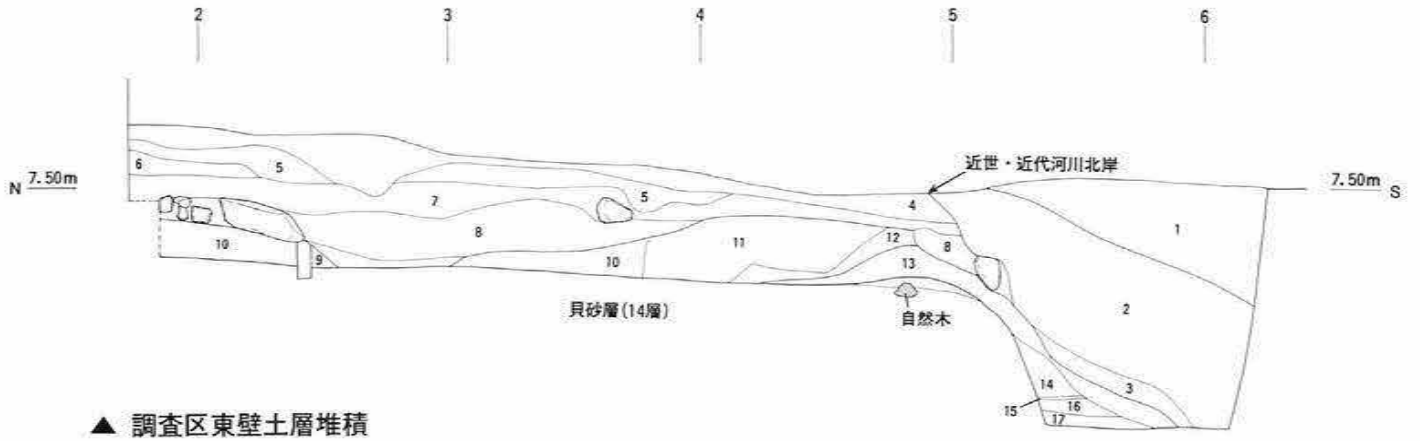
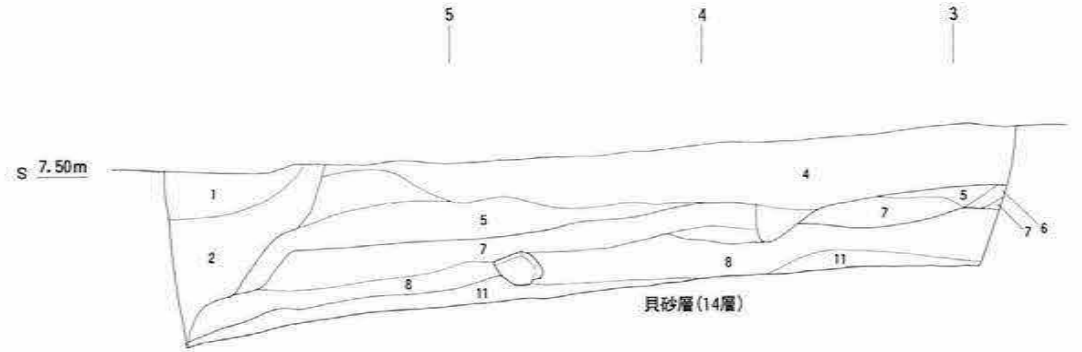


図16　下層河床



▲ 調査区東壁土層堆積

▼ 調査区西壁土層堆積



▲Dライン拡張部東壁土層堆積

土層注記

※土層番号は各壁とも共通する

1.暗褐色粘質土　土丹・小礫・陶磁器類が多く出土。明治期に行われた近世河川埋め立て土か(覆土中から明治29年字銭銅貨出土)。
2.青灰色砂質土　砂が多く、上位に土丹・礫を多量に含む。近世河川の堆積土または埋土か。
3.灰褐色粘質土　礫をまばらに含む。これも近世河川の堆積土または埋土か。
4.灰褐色砂質土　黄褐色粗砂や小礫の多い近世水田耕作土。調査区西壁土層観察から同層上位に法永火山と思われる黒色微砂ブロックが確認できた。
5.灰褐色砂質土　粗砂、拳大～1cm大の土丹、かわらけ松などを多量に含む。
6.灰色砂質土　砂、かわらけ松を含む。
7.灰色砂質土　大小土丹塊の間に砂利・粗砂・土丹松・かわらけ松を多量に含む。
8.暗灰色砂質土　水浸した小土丹塊・かわらけ、土丹松を多量に含む。
9.暗褐色砂質土　砂利・粗砂・土丹松を多量に含む。6層を含めて下層河床の流路と考えられる。
10.黒褐色粘質土　締まりの強いもので中世地山に類似したもの。
11.暗灰色粘質土　還元していると青灰色、締まりの強い無遺物層。
12.灰褐色砂質土　拳大～1cm大の土丹を含む無遺物砂層。
13.灰色砂質土　締まりのやや強いもの。
14.青灰色砂質土　灰褐色粘質土混じりの砂礫層で、貝殻小片を多量に含む。
15.黒褐色粘質土　やや締まりあるシルト質。
16.灰褐色粘質土　貝殻小片をブロック状に含む。

1　2m

図17　土層堆積図

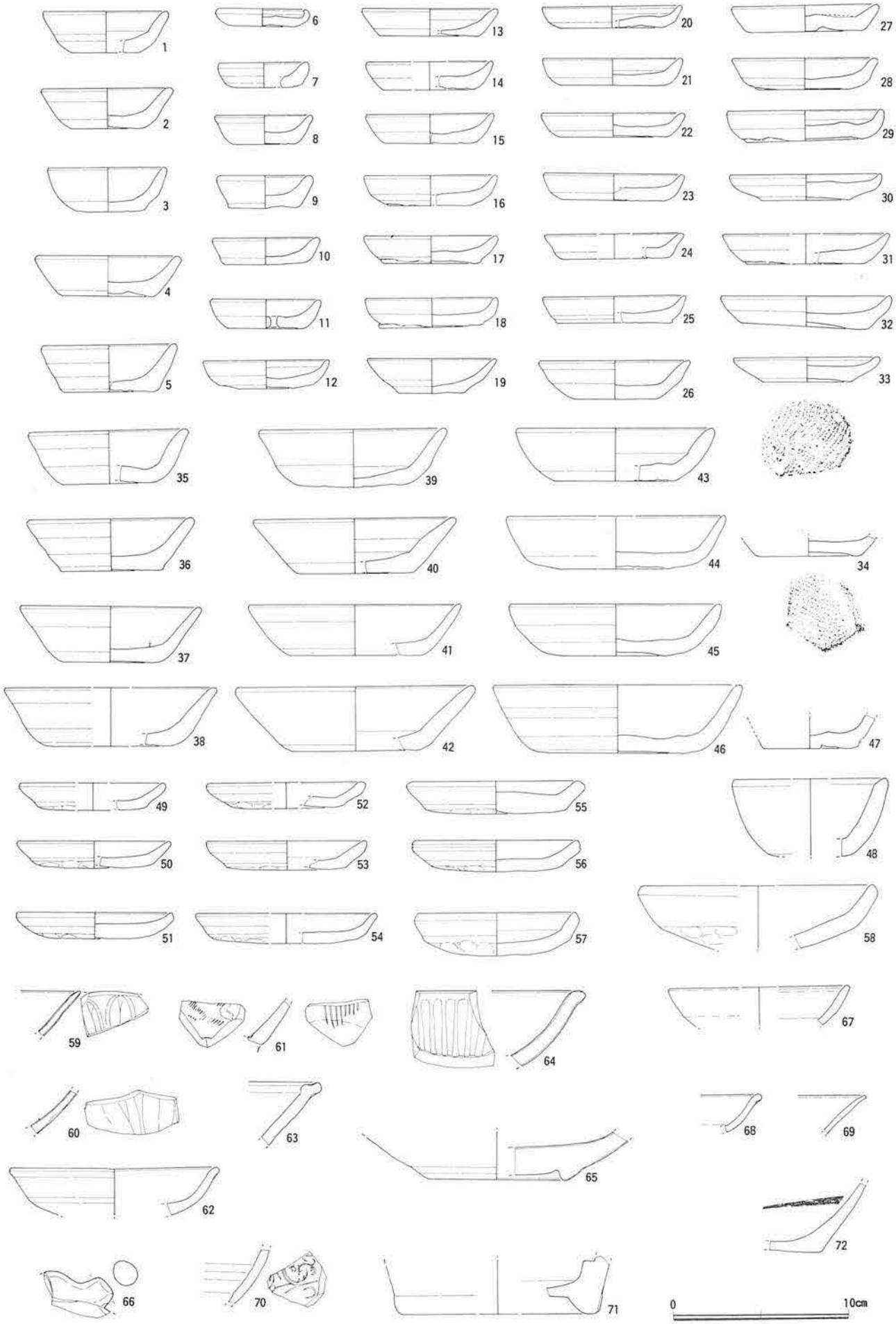


図18　下層河床出土遺物（1）

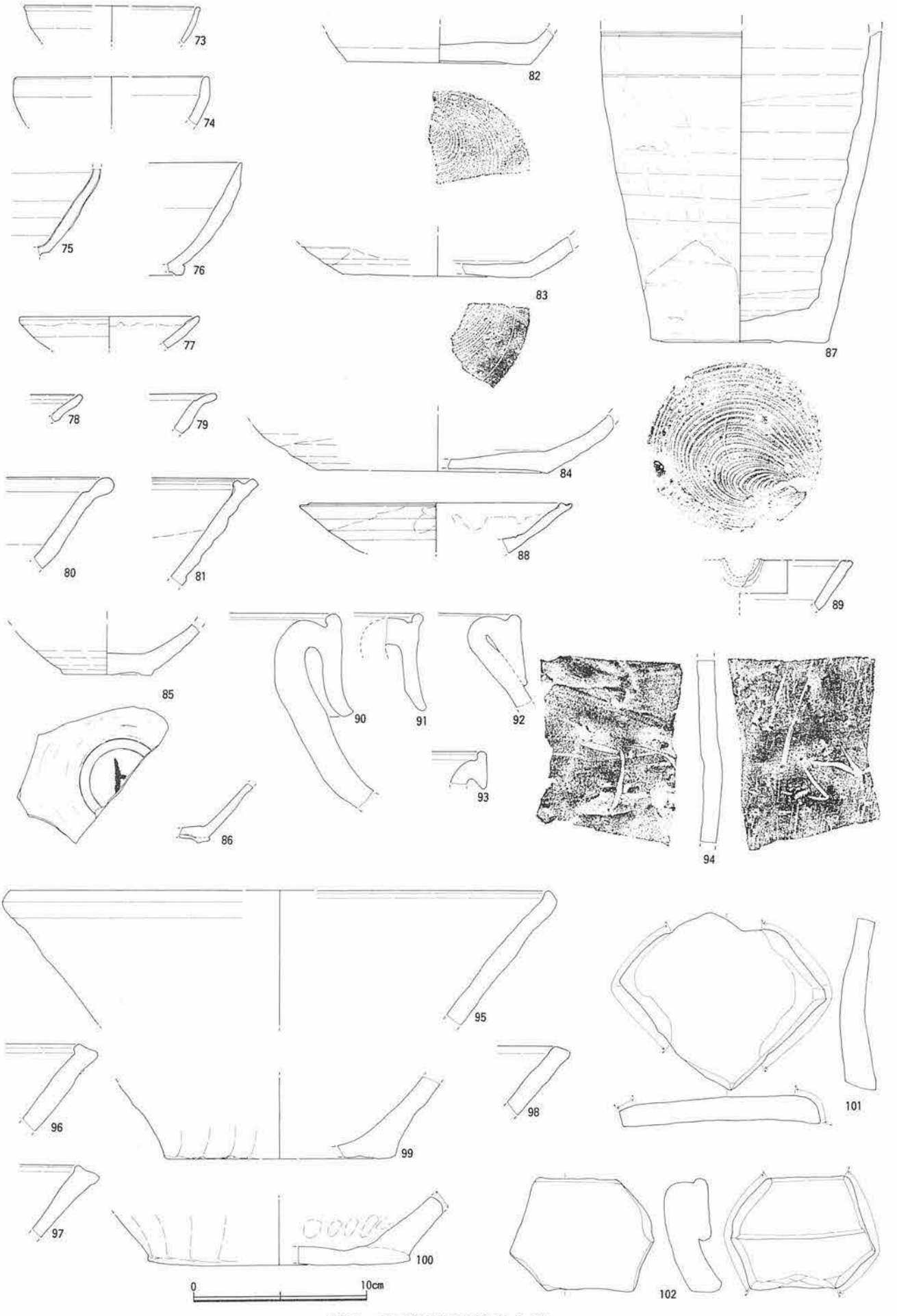


図19　下層河床出土遺物（2）

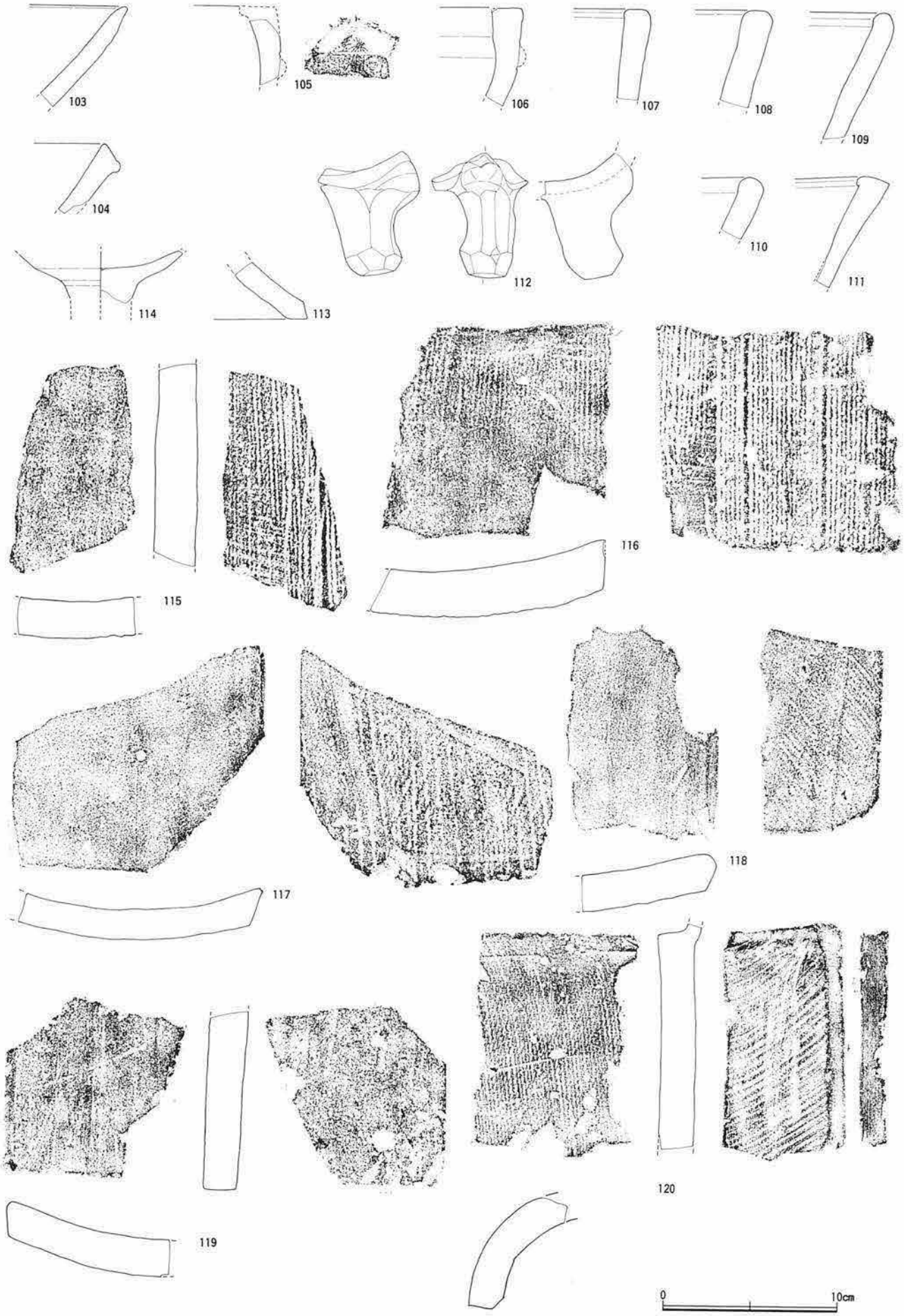


図20　下層河床出土遺物（3）

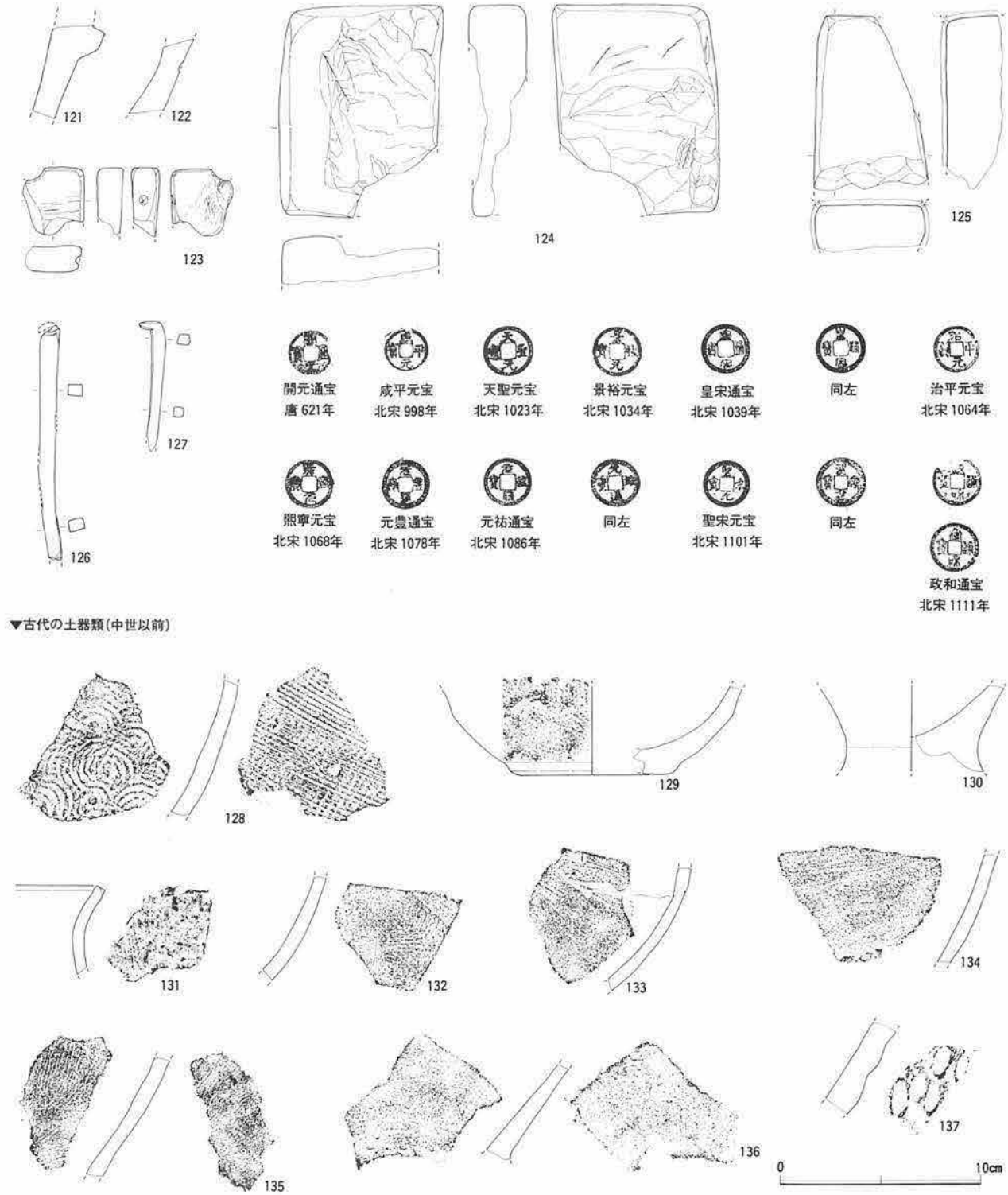


図21　下層河床出土遺物（4）

3．縄文時代

中層河床調査終了後、下層の遺構確認と土層の堆積状況を把握する目的で、調査区東端にAトレンチを設定した。その結果、下から中世河床が検出された。更に海抜約6.80m程の所で、貝混じりで無遺物の砂層を確認し、その砂層中に樹皮のついた自然木が発見された。この自然木は当初、河川の護岸の一部に使用された可能性も考えられたので、下層河床の調査終了後にC－5グリットの東側で、Aトレン

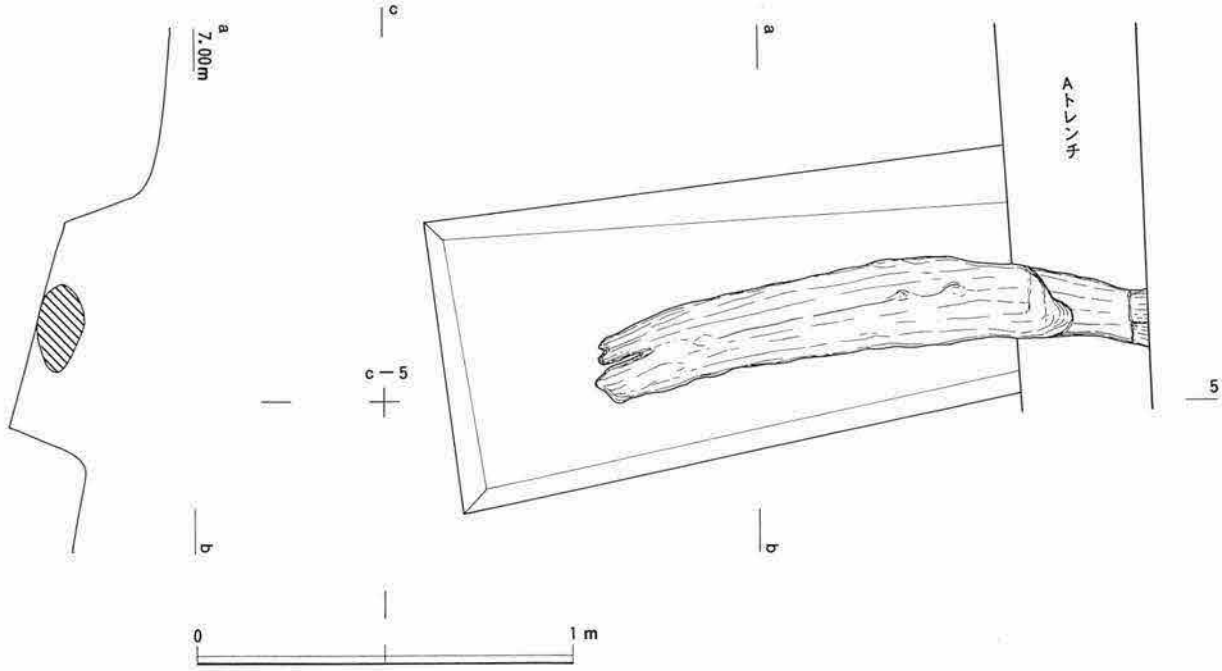


図22　縄文時代の自然流木

チに連結する形のトレンチを設定した。トレンチは東西1.5m、南北0.8m、深さ30cmである。調査の結果、自然木は長さ1.5m以上、幅約20cm、厚さ12cm程で、西側の端は確認されたが、東側は調査区外に伸びていた。護岸等の人為的な痕跡は認められず、流木の可能性が高い。また貝混じり砂層は、Aトレンチ南端の拡張部で土層観察を行ったところ、厚さ1m以上の厚い堆積層で、自然木はこの砂層の上位に位置し、底面レベルは海抜6.60m前後であった。さらに自然木を含む貝混じりの砂層は、縄文海進期に堆積されたものと推定された。そのため花粉分析を依頼した際、自然木のサンプルの分析も同時にお願いした。それによるとこの自然木はコナラで、放射性炭素年代（補正年代）では5,090±100yrsの縄文中期の年代が推定された。詳細については鈴木氏の分析結果報告を参照されたい。

表１：図４　近世・近代河川遺構（１）　　単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	瀬戸　染付 ぐい呑み	口径6.2cm　底径2.5cm　器高4.4cm　呉須　手描きの植物文			
2	肥前系磁器 ぐい呑み	口径6.5cm　底径3.4cm　器高4.5cm　呉須　手描きで海中の文様 高台内　一重方形内に「福」の文字			
3	肥前系磁器 湯呑み碗	口径8.0cm　底径3.8cm　器高4.2cm　手描きの人物文 大日本　泉村　田中常市製			
4	肥前系磁器 ぐい呑み	口径6.3cm　底径2.8cm　器高4.7cm　呉須　椿文			
5	瀬戸　染付 そば猪口	口径7.2cm　底径4.4cm　器高5.7cm　外面　波に帆掛け船　見込みは雁金			
6	肥前系磁器 そば猪口	口径8.2cm　底径5.6cm　器高5.9cm　外面　手描きの花火？ 内面　口縁直下に花菱　見込みにこんにゃく印判の五弁花　蛇の目高台			
7	肥前系磁器 染付碗	口径（10.4cm）　底径（4.0cm）　器高6.3cm　外面　呉須　手描きで葉に渦文 内面　口縁直下に雷文　見込みは不明			
8	染付碗	口径（11.2cm）　底径4.2cm　器高6.0cm　外面　呉須　手描きで葉文 内面　口縁直下に植物文　見込みは不明			
9	肥前系磁器 染付碗	口径10.1cm　底径3.9cm　器高6.3cm　外面　呉須　手描きで植物文 内面　口縁直下に雷文　見込みは草花文			
10	瀬　戸 染付碗	口径12.4cm　底径4.4cm　器高6.7cm　外面　呉須　手描きで椿　見込みに寿			
11	瀬戸　染付	口径11.4cm　底径4.7cm　器高5.8cm　外面　呉須　手描きで植物文			
12	肥前　染付	口径12.4cm　底径6.0cm　器高5.5cm　外面　呉須　手描きで雲に 月内面　口縁部に植物文　見込みに松葉　蛇の目高台			
13	瀬　戸 染付碗	口径12.6cm　底径5.2cm　器高4.9cm　外面　呉須　手描きで源氏香 高台内に墨書			
14	瀬　戸 染付小鉢	口径12.6cm　底径6.2cm　器高4.7cm　外面　呉須　手描きで源氏香			
15	肥前系磁器 八角鉢	口径13.7cm　底径6.6cm　器高5.6cm　外面　呉須　手描きで蕨 内面　菖蒲　幟？　御簾？　見込みに扇　蛇の目高台			
16	肥前系磁器 八角鉢	口径（18.8cm）　外面　呉須　手描きで菱形　雲形 内面　篭目に梅花？　菖蒲？			
17	染付皿	口径18.0cm　底径9.4cm　器高3.1cm　外面　呉須　手描きで植物文？ 内面　植物文？			

表２：図５　近世・近代河川遺構（２）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
18	肥前系磁器 色絵皿	口径（21.2cm）　底径11.4cm　器高3.4cm　外面　呉須　型紙刷り 内面　朱色線描きで屋根、植物文　見込みに型紙刷りの松竹梅　輪花型			

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
19	瀬戸　餌喰	口径5.8cm　底径2.3cm　器高2.1cm　胎土　黄白色　やや緻密 釉薬　緑味灰白色不透明			
20	瀬戸　餌喰	口径5.9cm　底径3.5cm　器高2.1cm　胎土　黄白色　釉薬　黄白色不透明			
21	瀬戸　餌喰	口径7.4cm　底径4.4cm　器高2.8cm　胎土　灰色　釉薬　淡灰緑色（灰釉）			
22	白磁　蓋	口径5.2cm　器高1.2cm　素地　灰白色　釉薬　黄味灰白色不透明　（小壷？）			
23	瀬　戸 白磁　小碗	口径4.1cm　高台径2.1cm　器高2.7cm　素地　灰白色　緻密　光沢有り 釉薬　緑味白色透明			
24	青磁　小碗	口径7.6cm　高台径3.0cm　器高4.0cm　素地　灰白色　微砂　光沢有り 釉薬　薄青灰色不透明　厚手の施釉			
25	瀬戸燈明皿	口径10.7cm　底径4.4cm　器高2.1cm　受径7.0cm　受高1.5cm 胎土　黄白色　釉薬　黄味白色透明			
26	瀬戸　小皿	口径7.0cm　底径3.6cm　器高1.3cm　内面　褐釉			
27	瀬戸　小皿	口径7.4cm　底径3.6cm　器高1.6cm　胎土　淡灰黄色　釉薬　鉄釉			
28	灯明台	口径7.6cm　底径5.4cm　器高5.4cm　胎土　黄白色　釉薬　灰白色透明			
29	灯明台	口径7.6cm　底径5.3cm　器高6.2cm　胎土　黄白色　釉薬　淡灰緑色透明			
30	灯明台	口径7.5cm　底径5.4cm　器高6.1cm　胎土　黄灰白色　釉薬　淡灰白色透明			
31	灯明台	口径7.8cm　底径5.2cm　器高6.4cm　胎土　黄灰白色　釉薬　淡灰白色透明			
32	瀬　戸 鉄絵皿	口径18.9cm　底径9.6cm　器高3.9cm　胎土　灰黄色　釉薬　黄白色半透明 文様　鉄絵　馬の目　高台内に判読不明の墨書有り			
33	瀬戸片口鉢	口径15.2cm　底径6.6cm　器高8.4cm　胎土　淡灰褐色　灰釉　褐釉			
34	炮　烙	口径21.6cm　底径18.0cm　器高3.2cm　胎土　褐色　胎芯　黒褐色			
35	石　臼	最大径27.6cm　高11.3cm　花崗岩製			
36	硯	長さ14.1cm　幅5.2cm　高1.9cm			
37	笄	長さ14.8cm　幅0.4cm　厚さ0.3cm　銅芯部に金メッキを施すもので 銅芯部に金メッキを施すもので、耳掻き部にその残りを留めている			
38	銅　金具	長さ8.8cm　幅0.3cm　厚さ0.8cm　用途不明			
39	銅　火箸	長さ15.5cm　幅0.5cm　厚さ0.5cm			
40	鉄製品	長さ18.4cm　幅0.7cm　厚さ0.7cm			

表３：図６　上層河床出土遺物（１）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	5.6	5.4	1.5	ロクロ（燈明皿）
2	かわらけ	6.4	5.0	1.7	ロクロ
3	かわらけ	7.8	6.4	1.9	ロクロ
4	かわらけ	7.8	5.9	1.7	ロクロ
5	かわらけ	7.8	6.0	1.5	ロクロ
6	かわらけ	9.8	7.5	1.6	ロクロ
7	かわらけ	6.8	3.8	2.2	ロクロ
8	かわらけ	6.9	3.7	2.7	ロクロ

表３：図６　上層河床出土遺物（１）

単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
9	かわらけ	7.6	4.6	2.3	ロクロ
10	かわらけ	8.2	5.1	2.3	ロクロ
11	かわらけ	9.6	6.4	2.3	ロクロ
12	かわらけ	(13.7)	8.0	3.9	ロクロ
13	かわらけ	(12.8)	(7.0)	3.3	ロクロ
14	かわらけ	12.6	7.5	3.0	ロクロ
15	かわらけ	11.8	8.7	2.8	ロクロ
16	かわらけ			7.4	ロクロ
17	かわらけ	10.0	8.8	1.7	手捏ね
18	かわらけ	8.7	7.5	1.6	手捏ね
19	かわらけ	9.4	8.9	1.8	手捏ね
20	青　磁 連弁文鉢	素地　灰白色　釉薬　灰緑色半透明			
21	青　磁 連弁文鉢	素地　灰色　釉薬　暗灰緑色半透明			
22	青白磁碗	素地　灰白色　釉薬　水色透明			
23	瀬戸天目碗	胎土　淡灰褐色　釉薬　黒褐色			
24	瀬戸　平碗	胎土　黄灰色　釉薬　灰釉			
25	瀬　戸 縁釉小皿	胎土　暗橙灰色　釉薬　灰釉			
26	瀬戸　入子	底径4.0cm　胎土　灰白色　内底部　降灰釉			
27	瀬戸　小皿	底径6.0cm　胎土　淡灰橙色			
28	瀬戸　小皿	胎土　淡橙白色			
29	瀬戸小皿	底径6.4cm　胎土　淡灰褐色			
30	常滑　甕	色調　茶色　胎土　褐色　砂粒長石雲母			
31	常滑　甕	口径（49.5cm）　胎土　暗灰色　砂粒雲母長石粒黒色粒　色調　赤褐色			
32	常滑　甕	色調　赤褐色　胎土　灰色　砂粒雲母長石粒			
33	常滑　甕	胎土　灰褐色　砂粒雲母長石粒			
34	常滑　壷	底径14.2cm　胎土　灰色　砂粒雲母　色調　茶灰色			
35	常滑　捏鉢	胎土　赤褐色　砂粒長石粒雲母　色調　褐色			
36	常滑　捏鉢	胎土　赤茶色　砂粒雲母長石粒　色調　赤茶色			
37	常滑　捏鉢	胎土　橙色　砂粒長石粒　色調　橙灰色			
38	常滑　捏鉢	胎土　灰色　砂粒長石粒雲母　色調　茶灰色			
39	常滑　捏鉢	胎土　赤橙色　砂粒雲母長石粒小石粒　色調　橙色			
40	常滑　甕	胎土　灰褐色　砂粒長石粒　色調　赤茶色			
41	常滑　甕	底径（19.0cm）　胎土　茶灰色　砂粒長石粒　色調　茶色			
42	備前　擦鉢	胎土　砂粒長石粒　色調　褐色			

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
43	瓦質　香炉	口径（9.9cm）　底径7.6cm　器高2.7cm　胎土　灰白色　微砂粒 外面口縁部直下に陽刻四ツ菱と沈線を巡らす			
44	手焙り	胎土　淡黄灰色　外面　スタンプ文　界線内に陽刻の六弁花、連珠を巡らす			
45	手焙り	胎土　灰白色　砂粒　色調　暗灰色			
46	鞴の羽口	厚さ1.0cm～1.4cm			
47	宇　瓦	胎土　砂粒雲母　色調　灰色			
48	女　瓦	厚さ2.0cm～2.3cm　凸面　縄目痕　凹面　縦・横ナデ　離れ砂少量 胎土　微砂雲母小石　色調　暗灰色			

表４：図７　上層河床出土遺物（２）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
49	女　瓦	凸面　斜格子の叩き目　凹面　刻印（文字判読不明） 胎土　砂粒石粒　色調　灰色			
50	男　瓦	凹面　2.3cm幅の削り　胎土　砂粒雲母　色調　黒灰色			
51	砥　石	長さ（5.0cm）　幅（2.3cm）　厚さ0.6cm　仕上研			
52	弥生　壷	口径（15.6cm）			
53	土師器 高　坏	胎土　砂粒黒色粒雲母　色調　灰橙色			
54	土師器 台付甕	胎土　砂粒雲母　色調　灰橙色			
55	土師器甕	胎土　砂粒雲母　色調　灰橙色			

表５：図９　中層河床出土遺物（１）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	5.7	4.0	1.9	ロクロ
2	かわらけ	5.8	4.5	1.6	ロクロ
3	かわらけ	6.0	4.8	1.9	ロクロ
4	かわらけ	7.1	5.2	2.5	ロクロ
5	かわらけ	(7.8)	(6.4)	1.8	ロクロ
6	かわらけ	8.0	7.0	2.5	ロクロ
7	かわらけ	6.4	4.1	1.6	ロクロ　燈明皿
8	かわらけ	8.0	5.4	2.2	ロクロ
9	かわらけ	8.1	6.3	1.4	ロクロ
10	かわらけ	(10.8)	(6.6)	3.3	ロクロ
11	かわらけ	9.2	7.0	1.7	手捏ね
12	かわらけ	9.5	7.8		手捏ね
13	かわらけ	12.5	11.4		手捏ね
14	青　磁 櫛描文碗	素地　淡黄灰色　釉薬　オリーブ色透明　内面体部に沈線を巡らす			
15	青磁　碗	素地　暗黄灰色　釉薬　オリーブ色透明　雲型劃花文			

表５：図９　中層河床出土遺物（１）

単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
16	青磁　碗	素地　暗黄灰色　釉薬　明緑灰色透明　連弁文？			
17	青　磁 蓮弁文碗	素地　灰白色　釉薬　オリーブ灰色不透明			
18	青磁　碗	高台径6.4cm　素地　灰白色　黒色微砂　緻密　釉薬　灰緑色半透明　無文			
19	青　磁 蓮弁文碗	素地　淡黄灰色　釉薬　オリーブ灰色透明			
20	瀬戸折縁皿	胎土　淡黄灰色　灰釉			
21	青白磁梅瓶	素地　灰色　釉薬　水色半透明　二次焼成を受けて器表は荒れている			
22	瀬戸褐釉壷	胎土　赤灰色			
23	白磁端反碗	口径16.4cm　素地　淡黄灰白色　黒色微砂　釉薬　淡黄灰白色不透明			
24	白磁口兀皿	底径4.6cm　素地　灰白色　釉薬　灰白色不透　二次焼成を受け失透している			
25	白磁口兀皿	素地　灰白色　釉薬　灰白色半透明			
26	瀬戸　平碗	胎土　灰黄色　灰釉			
27	瀬戸　平碗	底径4.0cm　胎土　淡灰橙色　灰釉			
28	瀬　戸 縁釉小皿	口径（8.8cm）　胎土　淡灰橙色　褐釉			
29	瀬　戸 縁釉小皿	胎土　明灰色　灰釉			
30	瀬戸　小皿	底径4.4cm　胎土　淡赤褐色　外底部　回転糸切り　内外底　無釉			
31	瀬戸　皿	底径11.2cm　胎土　灰色　灰釉刷毛塗り　削りだし高台　内側面に卸し目あり			
32	瀬　戸 折縁皿	底径14.0cm　胎土　黄灰色　灰釉刷毛塗り 外底面　ヘラ削り　外面　回転ヘラ削り			
33	瀬　戸 折縁皿	胎土　淡灰黄色　灰釉			
34	瀬　戸 瓜型水注	胎土　灰白色　胴部に尖帯を張り巡らせ、上下にタテ方向の沈線を刻む			
35	瀬戸　壷	胎土　灰橙色　灰釉			
36	瀬戸双耳壷	胎土　黄灰色　黒褐釉			
37	瀬戸卸し皿	底径6.2cm　胎土　黄灰色　灰釉刷毛塗り　外底部　回転糸切り			
38	備前擂り鉢	胎土　灰色　色調　茶褐色			
39	常滑　甕	胎土　砂粒黒色粒長石粒　色調　茶色			
40	常滑　甕	底径8.8cm　胎土　灰色　砂粒長石粒　色調　明黄褐色			
41	常滑　捏鉢	胎土　褐色　砂粒黒色粒　色調　灰褐色			
42	常滑　捏鉢	胎土　褐色　砂粒長石粒　色調　褐色			
43	山茶碗窯系 捏　鉢	胎土　灰色　砂粒長石粒　色調　灰色			
44	加工常滑	胎土　暗橙色　砂粒長石粒雲母　色調　茶色			
45	摺り常滑	胎土　灰色　砂粒長石粒小石　色調　灰色　山茶碗窯系捏鉢の転用			

表５：図９　中層河床出土遺物（１）　　単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
46	女　瓦	凸面　斜格子　凹面　布目痕　胎土　黒灰色　砂粒白色粒　色調　灰黒色			
47	瓦器質 黒縁皿	胎土　淡桃白色			
48	鍔　釜	色調　桃白色			
49	手焙り	胎土　灰茶色　砂粒雲母　色調　黒灰色　瓦質			

表６：図10　中層河床出土遺物（２）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
50	滑石鍋	小片のため復元不可能　体部厚1.1cm～2.0cm程度			
51	滑　石	鍋転用途中			
52	砥　石	残存長5.9cm　幅3.6cm　厚み2.0cm　中砥			
53	須恵　甕	胎土　灰赤褐色　色調　暗赤褐色			

表７：図11　中層河床流路出土遺物

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	6.2	4.0	2.0	ロクロ
2	かわらけ	7.5	4.2	2.2	ロクロ
3	かわらけ	(6.8)	(5.0)	1.7	ロクロ
4	かわらけ	7.6	4.2	2.3	ロクロ
5	かわらけ	7.8	5.1	1.9	ロクロ
6	かわらけ	7.0	5.4	1.3	ロクロ
7	かわらけ	8.2	5.6	1.5	ロクロ
8	かわらけ	9.0	7.2	1.9	ロクロ
9	かわらけ	12.8	8.7	3.9	ロクロ
10	かわらけ	12.0	8.2	3.2	ロクロ
11	かわらけ		6.8		ロクロ
12	かわらけ	8.8	7.2	2.1	手捏ね
13	かわらけ	8.6	6.4	1.8	手捏ね
14	かわらけ	10.2	8.4	1.8	手捏ね
15	かわらけ	(14.4)	13.0		手捏ね
16	青　磁 劃花文碗	素地　灰白色　釉薬　淡灰緑色			
17	青磁無文碗	底径4.4cm　素地　灰白色　釉薬　灰緑色透明			
18	青　磁 蓮弁文碗	素地　灰白色　釉薬　オリーブ色透明			
19	青磁無文碗	素地　灰白色　微砂粒　釉薬　淡灰緑色			
20	青　磁 蓮弁文碗	素地　灰白色　釉薬　暗灰緑色半透明			
21	青　磁 折縁鉢	素地　灰白色　釉薬　淡灰緑色半透明			

表７：図11　中層河床流路出土遺物　　単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
22	青磁　香炉	素地　灰白色　釉薬　灰緑色			
23	白磁口兀皿	素地　灰白色　釉薬　灰白色半透明			
24	白磁口兀皿	素地　灰白色　釉薬　青白色半透明			
25	白磁口兀皿	底径6.2cm　素地　灰白色　釉薬　灰白色半透明			
26	青白磁水注	素地　灰白色　釉薬　水色透明			
27	瀬戸　瓶子	胎土　淡橙灰色　黒褐釉			
28	瀬戸　小壷	胎土　淡黄灰色　灰釉			
29	瀬戸　平碗	胎土　黄灰色　灰釉			
30	瀬戸天目碗	胎土　灰色　褐釉			
31	瀬戸　平碗	底径6.2cm　胎土　黄灰色　釉薬　灰釉　内面　緑灰色			
32	瀬戸　平碗	底径4.6cm　胎土　黄灰色　灰釉			
33	瀬戸　入子	胎土　淡黄灰色　灰釉			
34	瀬戸　小皿	胎土　黄灰色　灰釉			
35	山　皿	底径7.2cm　色調　黒褐色			
36	瀬戸折縁皿	胎土　黄灰色　灰釉			
37	瀬戸折縁皿	胎土　灰白色　灰釉			
38	瀬戸　卸皿	口径（16.7cm）　底径9.0cm　器高3.8cm　胎土　灰色　微砂粒　灰釉			
39	常滑　甕	胎土　黒灰色　砂粒長石粒　色調　赤茶褐色			
40	常滑　捏鉢	胎土　黒褐色　砂粒長石粒　色調　赤褐色			
41	山茶碗窯系 捏　鉢	胎土　灰色　砂粒長石粒　色調　灰色			
42	備前擂り鉢	胎土　灰赤褐色　砂粒白色粒　色調　黒褐色			
43	摺り常滑	残存長5.9cm　幅7.0cm　厚さ1.2cm　甕体部の転用			
44	女　瓦	凸面　斜格子　凹面　ヘラナデ離れ砂　胎土　灰色　微砂粒　色調　黒灰色			
45	女　瓦	凸面　縄目痕　ヘラ削り　凹面　縄目痕　胎土　微砂粒　色調　黒灰色			
46	砥　石	長さ4.0cm　幅3.3cm　厚さ3.1cm　角がすべて削ってある			
47	砥　石	残存長5.7cm　幅3.5cm　厚さ2.5　上・下面に刃物痕　中砥			
48	銅製品	残存長20.5cm　厚さ0.1～0.3cm　頂部に耳掻き			

表８：図12　Ａトレンチ出土遺物（１）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	6.6	3.5	2.2	ロクロ　燈明皿
2	かわらけ	7.5	4.6	2.3	ロクロ
3	かわらけ	8.4	4.4	2.5	ロクロ　燈明皿
4	かわらけ	8.0	6.2	1.4	ロクロ
5	かわらけ	7.7	5.7	1.7	ロクロ
6	かわらけ	7.8	5.6	1.6	ロクロ
7	かわらけ	(8.1)	(6.4)	1.6	ロクロ
8	かわらけ	9.2	5.2	2.0	ロクロ

表８：図12　Ａトレンチ出土遺物（１）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
9	かわらけ		6.8		ロクロ
10	かわらけ		10.2		ロクロ
11	かわらけ	10.6	6.8	3.0	ロクロ
12	かわらけ	12.2	7.6	2.7	ロクロ
13	かわらけ	8.3	6.5	1.7	手捏ね
14	かわらけ	(8.8)	8.6	1.3	手捏ね
15	かわらけ	(12.0)	9.7	(2.9)	手捏ね
16	かわらけ	(13.4)	11.5	3.1	手捏ね
17	かわらけ	(14.2)	12.7	3.4	手捏ね
18	青　磁 劃花文碗	高台径6.0cm　素地　灰色　釉薬　灰緑色不透明			
19	青　磁 劃花文碗	素地　灰色　堅緻　釉薬　暗オリーブ灰色透明			
20	青　磁 劃花文碗	素地　暗灰色　緻密　釉薬　オリーブ灰色透明			
21	青　磁 劃花文碗	素地　灰色　緻密　釉薬　明オリーブ灰色透明			
22	白磁　皿	素地　灰白色　緻密　釉薬　灰白色半透明			
23	青白磁 輪花皿	口径9.8cm　素地　白色　微砂粒　釉薬　水色透明			
24	瀬　戸 縁釉小皿	胎土　淡橙灰色　灰釉			
25	瀬戸　入子	底径（4.2cm）　胎土　灰色　灰釉			
26	瀬戸　平碗	底径5.4cm　胎土　暗黄白色　灰釉			
27	瀬戸天目碗	高台径4.2cm　胎土　褐色　褐釉			
28	瀬戸　平碗	胎土　灰色　灰釉			
29	瀬戸　平碗	胎土　灰白色　灰釉			
30	瀬戸卸し皿	胎土　淡黄灰色　灰釉			
31	瀬戸卸し皿	胎土　黄灰色　灰釉刷毛塗り			
32	瀬　戸 縁釉小皿	胎土　黄灰色　褐釉			
33	瀬　戸 縁釉小皿	底径5.2cm　胎土　明灰色　黒褐釉			
34	瀬　戸 縁釉小皿	口径10.2cm　底径5.0cm　器高2.2cm　胎土　橙白色　灰釉　失透			
35	瀬戸　袋物	高台径9.0cm　胎土　淡橙灰色　灰釉			
36	渥美　捏鉢	胎土　灰色　微砂粒長石粒　色調　灰色			
37	常滑　壷	胎土　灰色　砂粒長石粒　色調　茶褐色			

表８：図12　Ａトレンチ出土遺物（１）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
38	瀬戸褐釉壷	胎土　黄灰色　砂粒雲母　外面　褐釉　内面　露胎			
39	渥美　甕	胎土　暗灰色　砂粒長石粒　黒褐釉			
40	常滑　捏鉢	胎土　灰色　砂粒長石粒　色調　茶灰色			
41	山茶碗窯系 捏　鉢	胎土　灰色　微砂粒長石粒　色調　灰色			
42	山茶碗窯系 捏　鉢	胎土　灰色　微砂粒長石粒　色調　灰色			
43	山茶碗窯系 捏　鉢	胎土　灰色　砂粒　色調　灰色			
44	山茶碗窯系 捏　鉢	胎土　褐色　砂粒長石粒小石粒　色調　灰色			
45	山茶碗窯系 捏　鉢	胎土　灰色　砂粒長石粒雲母　色調　橙灰色			
46	魚住　捏鉢	色調　暗灰色			
47	摺り常滑	長さ6.3cm　幅7.6cm　厚さ1.2cm　色調　赤橙色			
48	土風呂	胎土　灰白色　砂粒　色調　黒色			

表９：図13　Ａトレンチ出土遺物（２）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
49	女　瓦	残存長7.0cm　残存幅8.8cm　厚さ2.5cm　胎土　灰白色　砂粒小石粒 凸面　斜格子　凹面　ヘラナデ　離れ砂少量　色調　黒灰色			
50	男　瓦	厚さ2.4　凸面　縄目痕　凹面　布目痕　胎土　砂粒赤色粒　色調　灰色			
51	砥　石	残存長3.1cm　幅2.4cm　厚さ0.3cm　色調　黄白色　仕上砥			
52	滑石製温石	長さ4.5cm　幅8.2cm　厚さ1.5cm　径0.6cmの穿孔　滑石鍋からの転用			
53	銅製耳掻き	長さ11.1cm　幅0.5cm　厚さ0.2cm　片端に耳掻き部を作る 裏側中央に浅い凹みをもつ　上端は尖るもの			

表10：図14　Ｂトレンチ出土遺物（１）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	7.0	5.4	2.3	ロクロ
2	かわらけ	8.2	5.7	1.6	ロクロ
3	かわらけ	8.4	6.0	1.5	ロクロ
4	かわらけ	9.0	6.6	1.6	ロクロ
5	かわらけ	9.6	7.7	2.0	ロクロ
6	かわらけ	(11.0)	(6.8)	2.8	ロクロ
7	かわらけ	(11.8)	(6.6)	3.3	ロクロ
8	かわらけ	(13.0)	(6.7)	3.3	ロクロ
9	かわらけ	(7.3)	(5.6)		手捏ね
10	かわらけ	小片のため計測不可			手捏ね
11	かわらけ	小片のため計測不可			手捏ね

表10：図14　Bトレンチ出土遺物（1）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
12	青　磁 蓮弁文碗	素地　灰色　堅緻　釉薬　淡灰緑色透明			
13	青　磁 蓮弁文碗	素地　灰白色　釉薬　灰緑色半透明			
14	青　磁 蓮弁文碗	素地　灰白色　釉薬　灰緑色半透明			
15	青　磁 無文碗	底径6.2cm　素地　灰色　黒色微砂　釉薬　薄灰緑色透明 見込みに「金玉満堂」銘をスタンプ			
16	青　磁 劃花文碗	高台径（5.0cm）　素地　灰褐色　釉薬　暗緑灰色透明			
17	青磁無文碗	口径（10.2cm）　素地　灰色　釉薬　淡灰緑色不透明			
18	白磁口兀皿	素地　灰白色　釉薬　薄水色透明			
19	白磁四耳壺	素地　灰白色　堅緻　釉薬　薄水色透明			
20	青白磁梅瓶	口径3.7cm　素地　灰白色　釉薬　緑白色半透明			
21	瀬　戸 縁釉小皿	口径（8.6cm）　底径（4.9cm）　器高2.2cm　胎土　黄白色　灰釉			
22	瀬戸　碗	口径（12.4cm）　胎土　暗灰色　灰釉			
23	瀬戸　平碗	口径16.4cm　底径2.5cm　器高6.2cm　胎土　灰黄色　灰釉　削りだし高台			
24	瀬戸折縁皿	胎土　黄灰色　灰釉			
25	瀬戸　入子	口径9.0cm　胎土灰白色　胴部下半　ヘラを中に向かって押しつけ輪花状にし 指頭で成形する　6弁と推定			
26	常滑　捏鉢	胎土　黄灰色　砂粒長石粒雲母　色調			
27	常滑　捏鉢	底径（15.6cm）　胎土　褐色　砂粒長石粒小石粒雲母　色調　暗橙色			
28	常滑　捏鉢	底径（20.0cm）　胎土　暗灰色　砂粒長石粒雲母　色調　褐色			
29	備前擂り鉢	胎土　赤褐色　色調　褐色			
30	瓦器　碗	胎土　灰白色　表面　黒灰色　内面　暗文			
31	宇　瓦	胎土　灰色　微砂粒雲母　色調　黒灰色　巴文のまわりに連珠を巡らす			
32	女　瓦	凸面　縄目叩き　凹面　布目痕　胎土　黒灰色　砂粒雲母　色調　黒灰色			
33	女　瓦	凸面　花菱文　離れ砂　凹面　布目痕　離れ砂　胎土　灰色砂粒小石粒 色調　暗灰色			
34	女　瓦	凸面　斜格子叩き文　離れ砂　凹面　離れ砂　胎土　赤灰色　砂粒赤色粒 白色粒　色調　赤灰色			
35	女　瓦	凸面　斜格子叩き目　凹面　ヘラナデ　胎土・色調　暗灰色			

表11：図15　Bトレンチ出土遺物（2）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
36	滑石鍋	底径（24.2cm）			
37	硯　石	残存長4.0cm　残存幅2.8cm　厚さ0.4cm　砥石として使用か？			
38	砥　石	残存長3.3cm　幅3.4cm　幅0.7cm　色調　黄白色　仕上げ砥			

表11：図15　Bトレンチ出土遺物（2）　単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
39	土製品	径1.7cm　内径0.6cm　厚さ0.6cm　色調　淡赤褐色　かわらけの転用品			
40	須恵器　甕	胎土　灰褐色　内外面に叩き文			
41	縄文　甕	胎土　灰色　砂粒雲母　色調　灰黄色			
42	土師器　甕	底径6.6cm　胎土　砂粒白針雲母　色調　灰褐色			

表12：図18　下層河床出土遺物（1）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
1	かわらけ	6.9	3.7	2.4	ロクロ
2	かわらけ	7.2	4.2	2.3	ロクロ
3	かわらけ	6.7	3.8	2.5	ロクロ
4	かわらけ	8.0	5.2	2.3	ロクロ
5	かわらけ	7.6	5.2	2.6	ロクロ
6	かわらけ	4.9	3.8	1.0	ロクロ
7	かわらけ	5.0	4.0	1.4	ロクロ
8	かわらけ	(5.4)	(3.3)	1.7	ロクロ
9	かわらけ	5.0	4.0	1.9	ロクロ
10	かわらけ	5.9	4.6	1.5	ロクロ
11	かわらけ	6.1	4.1	1.7	ロクロ　穿孔
12	かわらけ	7.1	5.4	1.6	ロクロ
13	かわらけ	7.6	5.6	1.5	ロクロ
14	かわらけ	7.1	4.8	1.6	ロクロ
15	かわらけ	7.2	5.2	1.7	ロクロ
16	かわらけ	7.5	4.7	1.7	ロクロ
17	かわらけ	7.6	5.2	1.6	ロクロ
18	かわらけ	7.0	5.9	1.7	ロクロ
19	かわらけ	7.2	3.8	2.0	ロクロ
20	かわらけ	7.8	6.0	1.2	ロクロ
21	かわらけ	7.8	6.2	1.5	ロクロ
22	かわらけ	8.0	6.0	1.4	ロクロ
23	かわらけ	7.8	5.8	1.5	ロクロ
24	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.4	ロクロ
25	かわらけ	8.1	6.6	1.5	ロクロ
26	かわらけ	8.5	4.6	3.2	ロクロ
27	かわらけ	8.2	6.3	1.5	ロクロ
28	かわらけ	8.1	5.4	1.8	ロクロ
29	かわらけ	8.8	6.6	1.7	ロクロ
30	かわらけ	6.7	3.8	2.5	ロクロ
31	かわらけ	(9.6)	(6.6)	1.7	ロクロ
32	かわらけ	9.6	7.2	1.7	ロクロ

表12：図18　河床出土遺物（1）　　単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
33	かわらけ	8.3	5.1	1.4	ロクロ
34	かわらけ		5.6		ロクロ
35	かわらけ	8.7	5.2	3.0	ロクロ
36	かわらけ	9.2	5.8	3.0	ロクロ
37	かわらけ	10.2	5.8	3.2	ロクロ
38	かわらけ	(9.8)	(5.3)	2.9	ロクロ
39	かわらけ	10.5	6.5	3.3	ロクロ
40	かわらけ	11.4	6.8	3.2	ロクロ
41	かわらけ	12.0	7.6	2.9	ロクロ
42	かわらけ	13.4	7.2	3.7	ロクロ
43	かわらけ	11.1	7.0	3.0	ロクロ
44	かわらけ	(12.6)	(7.2)	3.0	ロクロ
45	かわらけ	11.9	7.9	3.0	ロクロ
46	かわらけ	14.3	8.0	3.9	ロクロ
47	かわらけ		5.4		ロクロ
48	かわらけ	(8.6)	(4.9)	4.4	ロクロ
49	かわらけ	8.2	(6.2)	1.6	手捏ね
50	かわらけ	8.6	7.0	1.6	手捏ね
51	かわらけ	8.8	6.8	1.5	手捏ね
52	かわらけ	(8.8)	(6.8)	1.5	手捏ね
53	かわらけ	9.0	6.9	1.7	手捏ね
54	かわらけ	10.2	8.4	1.7	手捏ね
55	かわらけ	9.6	8.0	1.8	手捏ね
56	かわらけ	9.2	7.6	1.8	手捏ね
57	かわらけ	9.0	8.2	2.4	手捏ね
58	かわらけ	13.8	11.5		手捏ね
59	青　磁 蓮弁文碗	素地　灰色　釉薬　オリーブ色透明			
60	青　磁 蓮弁文碗	素地　灰色　釉薬　淡灰緑色透明			
61	青　磁 櫛描文碗	素地　灰色　釉薬　淡緑灰色透明			
62	青磁　皿	口径12.0cm　素地　暗灰色　釉薬　緑灰色透明			
63	瀬戸折縁皿	胎土　灰黄色　灰釉			
64	青磁　皿	素地　灰白色　緻密　釉薬　灰緑色半透明　内面に連弁文			
65	青　磁 無文皿	底径7.6cm　素地　灰色　微砂粒　堅緻　釉薬　灰緑色半透明			

表12：図18　下層河床出土遺物（1）　　単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
66	青　磁 酒会壺　蓋	素地　灰白色　堅緻　釉薬　緑灰色半透明			
67	白磁口兀皿	口径（10.2cm）　素地　灰白色　釉薬　無色半透明			
68	白磁　皿	素地　灰白色　釉薬　灰白色半透明			
69	白磁口兀皿	素地　灰白色　釉薬　淡青白色不透明			
70	青白磁梅瓶	素地　灰白色　釉薬　水色不透明			
71	青白磁梅瓶	底径（11.0cm）　素地　灰白色　釉薬　水色透明			
72	黄釉盤	胎土　灰色　砂粒微砂粒　内面　黄釉　文様不詳の鉄絵　外面　露胎			

表13：図19　下層河床出土遺物（2）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
73	瀬戸　入子	口径（10.0cm）　胎土　灰色　降灰釉			
74	瀬戸天目碗	口径（11.0cm）　胎土　黄灰色　微砂粒　褐釉			
75	瀬戸天目碗	胎土　黄白色　内外面　施釉　外面体部下位は赤茶色　中・上位は黒褐釉			
76	瀬戸天目碗	胎土　灰白色　微砂粒　褐釉　外面　体部下位から高台にかけて露胎			
77	瀬　戸 縁釉小皿	口径10.3cm　胎土　灰黄色　灰釉			
78	瀬戸　小皿	胎土　黄灰色　灰釉			
79	瀬戸折縁皿	胎土　淡灰褐色　微砂粒　灰釉			
80	瀬戸折縁皿	胎土　黄灰色　白色微砂粒　灰釉			
81	瀬戸折縁皿	胎土　黄白色　灰釉			
82	瀬戸折縁皿	底径10.8cm　胎土　黄白色　灰釉　行平鍋か？			
83	瀬戸折縁皿	底径11.0cm　胎土　黄白色　灰釉			
84	瀬戸折縁皿	底径13.5cm　胎土　黄味灰白色　灰釉			
85	南部系 山茶碗	胎土　砂粒長石粒　色調　灰色			
86	北部系 山茶碗	胎土　灰白色　降灰釉			
87	瀬　戸 瓶　子	底径　10.4cm　胴部系　16.4cm　胎土　黄灰白色　灰釉 輪積みで胴部上位に二条以上の凹線がめぐる　外底は糸切り			
88	瀬戸卸し皿	口径14.6cm　胎土　黄白色　灰釉			
89	瀬　戸 卸し皿	胎土　灰色　灰釉　注水口付き			
90	常滑　甕	胎土　灰褐色　砂粒長石粒　色調　茶色			
91	常滑　甕	胎土　黒灰色　砂粒長石粒　色調　茶色			
92	常滑　甕	胎土　暗橙色　砂粒長石粒　色調　赤茶色			
93	常滑　甕	胎土　暗灰色　微砂粒雲母　降灰			
94	常滑　甕	色調　灰色			
95	常滑　捏鉢	口径31.4cm　胎土　灰色　砂粒長石粒雲母小石　色調　赤茶色			

表13：図19　下層河床出土遺物（2）　　単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
96	常滑　捏鉢	胎土　砂粒長石粒雲母　色調　灰褐色			
97	常滑　捏鉢	胎土　砂粒長石粒　色調　褐色			
98	常滑　捏鉢	胎土　砂粒長石粒　色調　褐色			
99	常滑　捏鉢	底径（12.8cm）　胎土　砂粒長石粒　色調　明褐色			
100	常滑　捏鉢	底径（15.2cm）　胎土　明褐色　砂粒長石粒　色調　橙色			
101	摺り常滑	色調　明茶色　甕胴部の転用品			
102	摺り常滑	胎土　灰色　砂粒長石粒雲母　色調　褐色　甕口縁部より転用			

表14：図20　下層河床出土遺物（3）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
103	渥美　捏鉢	胎土　砂粒長石粒　色調　暗灰色			
104	備前擂り鉢	胎土　赤褐色　色調　灰褐色			
105	瓦質手焙り	胎土　赤茶色　色調　灰赤橙色　胴部，口縁直下に陰刻菊花文、貼り付け連珠文			
106	瓦　質 手焙り	胎土　灰白色　砂粒赤色粒　色調　黒灰色　口縁直下に陰刻菊花文を巡らす その下に貼り付け連珠文			
107	瓦質手焙り	胎土　灰白色　砂粒石粒　色調　黒色			
108	瓦質手焙り	胎土　微砂粒雲母　色調　灰赤色			
109	瓦質手焙り	胎土　微砂粒　色調　灰白色　胎芯　黒灰色			
110	瓦質手焙り	胎土　砂粒石粒　色調　赤灰色			
111	手焙り	胎土　灰色　砂粒赤色粒雲母　色調　黒灰色			
112	瓦質手焙り	胎土　砂粒長石粒　色調　赤白色			
113	瓦器（脚）	胎土　灰白色　微砂粒　色調　黒色　復元推定30.0cm前後			
114	土製品	胎土　微砂粒雲母白針　色調　橙色　かわらけ質灯明台か？			
115	女　瓦	凸面　縄目痕　離れ砂　凹面　離れ砂　胎土　黒灰色　砂粒　硬質			
116	女　瓦	凸面　縄目痕　凹面　布目痕　ヘラナデ　離れ砂　胎土　灰色　砂粒白色粒			
117	女　瓦	凸面　縄目痕　ヘラナデ　凹面　縦横のヘラナデ　離れ砂　胎土　灰色			
118	女　瓦	凸面　離れ砂　凹面　布目痕　ヘラナデ　胎土　灰色　砂粒雲母			
119	女　瓦	凹面　離れ砂　ヘラナデ　胎土　淡赤橙色　砂粒雲母赤色粒色調　赤橙色			
120	男　瓦	凸面　縄目痕　凹面　布目痕　胎土　灰色　砂粒雲母　色調　黒灰色			

表15：図21　下層河床出土遺物（4）

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
121	滑石鍋	小片の為、法量計測不可			
122	滑石鍋	小片の為、法量計測不可			
123	滑石製品	厚さ1.3cm　鍋転用			
124	加工滑石	長さ10.5cm　幅8.0cm　厚さ2.9cm　温石に転用中			
125	砥　石	残存長8.7cm　残存幅5.7cm　厚さ2.4cm　色調暗灰色			
126	鉄　釘	残存長11.4cm　幅0.7cm　厚さ0.6cm			
127	鉄　釘	残存長（6.5cm）　幅0.7cm　厚さ0.6cm			
128	須恵　甕	胎土　黒灰色　砂粒長石粒　色調　黒灰色			

表15：図21　下層河床出土遺物（4）　　単位はcm

番号	器種・種別	口径	底径	器高	成　　形
129	土師　壷	底径8.2cm　胎土　砂粒雲母多量　色調　灰褐色			
130	土師台付甕	胎土　砂粒雲母白針小石　色調灰褐色			
131	土師　甕	胎土　灰褐色砂粒雲母白針　色調　外面　黒灰色　内面　暗橙色			
132	土師　甕	胎土　砂粒雲母白針　色調　黄灰色			
133	土師器	胎土　微砂粒雲母白針　色調　灰茶色			
134	土師　甕	胎土　砂粒雲母白針　色調　灰茶色			
135	土師　甕	小片の為、計測不可			
136	土師台付甕	胎土　砂粒雲母白針　色調　灰茶色			
137	土師　甕	胎土　砂粒雲母　色調　淡橙色　胎芯　黒灰色			

4．大倉幕府周辺遺跡群の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

鎌倉市雪ノ下四丁目580番10外で行われた大倉幕府周辺遺跡群の発掘調査で最下層より縄文海進期のものとみられる貝混じりの砂層が検出された。また、調査区南側にはこの貝混じり砂層を削り取った？跡を埋積するかたちで有機質土が認められた。以下にはこの有機質土を中心に行った花粉分析の結果・考察を示し、本地点周辺の縄文時代における古植生について検討した。

1．試料

試料を採取した地点Aを中心とした調査区南側の土層断面図を図1に示した。各層について、試料1～3層は砂の多い青灰色砂質粘土で、上部25cmは褐灰色が強くなっている。本層は近世河川の埋土で、上位は近代河川埋土（土丹やレキの多い黒褐色砂質粘土）である。試料4層はレキが散在する褐灰色砂質粘土で、本層も近世河川埋土である。試料5層は褐灰色粘土混じりの青灰色砂レキ層で、貝小片が多く認められる。試料6層はややかたい黒褐色粘土で、やや泥炭質あるいはシルト質となっている。試料7,8層は褐灰色シルト質粘土で、貝殻小片が小塊状に点在している。また上部6cmには貝殻小片や砂が多く混入している。

上記地点Aより北へ約6.2mの地点Bにおいて、最下部の縄文海進期とみられる貝混じり砂層の上位に40cm弱の黒褐色砂質粘土層（砂は斑状）が認められ、本層についてもほぼ等間隔に4試料（上部より試料番号9～12）を採取し、分析を行った。また縄文海進期とみられる貝混じり砂層中に流木？（コナラ属コナラ亜属コナラ節）が認められ(図1)、放射性炭素年代(補正年代)5,090±100yrsBP(PLD－612)が得られている。

2．分析方法

上記した12試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約3～5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分

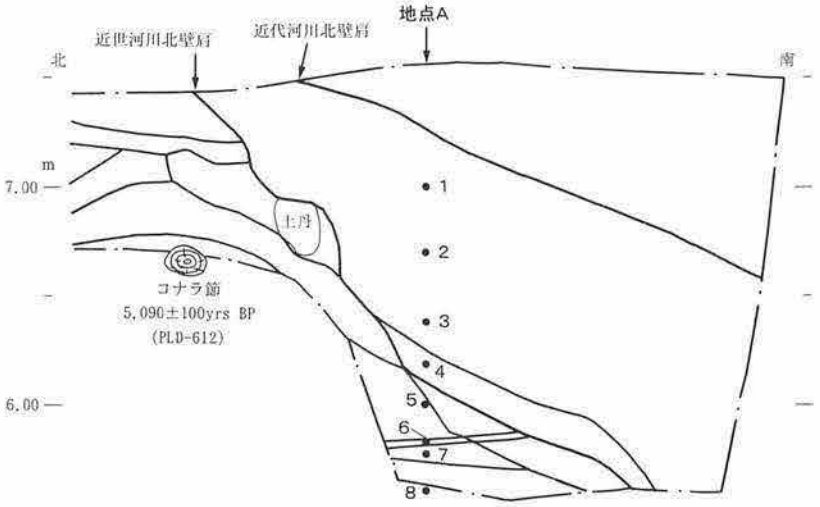


図1　試料採取地点A付近の土層断面図

離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

３．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉46、草本花粉19、形態分類を含むシダ植物胞子３、藻類１の総計69である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に、それらの分布を図２（地点Ａ）に示した。しかしながら地点Ｂの４試料について、プレパラート作成時点において花粉化石がほとんど認められなかったことから最下部の試料12を除き予察程度の観察に止め、よって分布図としては示していない。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検境の結果、地点Ａにおいては樹木花粉の産出傾向から花粉化石群集帯Ⅰ，Ⅱを設定した。

花粉帯Ⅰ（試料５～８）はニレ属－ケヤキ属とエノキ属－ムクノキ属の比較的高い出現で特徴づけられ、ニレ属－ケヤキ属は試料６で35%、エノキ属－ムクノキ属は上部２試料で20%弱を示している。また下部の２試料ではコナラ属アカガシ亜属が25%前後の出現率を示して最も多く検出されている。その他、クマシデ属－アサダ属は10%前後と安定して得られ、スギ，コナラ属コナラ亜属，クリ属，シイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す），カエデ属が５%前後を示している。草本類は全体に少なく、最も多いイネ科においても出現率は５%前後である。

花粉帯Ⅱ（試料１～４）はマツ属複維管束亜属（アカマツ，クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）とスギの優占で特徴づけられる。なお、試料１～３は花粉化石の検出数が少なく分布図としては示せなかったが、少ないながらこれら分類群が３試料よりほぼ連続して検出されていることなどから、試料４と同じⅡ帯とした。次いでイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）が多いが、出現率は約６%と低く、Ⅰ帯で優占していたニレ属－ケヤキ属，エノキ属－ムクノキ属，アカガシ亜属，クマシデ属－アサダ属は５%に達していない。草本類はⅠに比べ多少多く得られており、イネ科は10%を越えている。その他、カヤツリグサ科，イタドリ節，アブラナ科，ヨモギ属，タンポポ亜科がやっと１%を越える出現率を示している。

地点Ｂ試料12における観察の結果（表１）、得られた花粉化石数は少なく、特に樹木花粉はわずかであった。そのなかではコナラ亜属，アカガシ亜属，クリ属，ニレ属－ケヤキ属などが得られている。草本類ではヨモギ属が最も多く、次いでイネ科となっており、タンポポ亜科も比較的多く検出されている。また、その他の３試料においても予察的ではあるが同様の傾向がみられた。

４．遺跡周辺の古植生環境

１）各試料の時代について

先にも記したが貝殻混じり砂層中に認められた流木？の年代測定結果5,090±100yrs. BPから、この貝殻混じり砂層のトップは縄文時代の前期終末から中期初頃と推測される。よって、試料５～８はこの貝殻混じり砂層を切って堆積している土層？より採取していることから、これら試料の時代としては縄文時代前期終末から中期初よりやや新しい時代、すなわち中期頃ではないかと思われる。

試料１～４は近世河川の埋土であることから近世であり、よって試料４と５の間には不整合の存在が考えられる。すなわち古代や中世などの堆積物はあったとしても近世河川により削り取られてしまった。

と推測される。

2）遺跡周辺の古植生

地点Aの花粉分析結果より示された花粉化石帯をもとに遺跡周辺の古植生について示す。

花粉帯Ⅰ期（縄文時代中期？頃）の遺跡周辺丘陵部においては稜線部を中心にアカガシ亜属やシイ類の照葉樹林が広く成立しており、これらに交じるように落葉広葉樹のニレ属－ケヤキ属が生育していた。一方、丘陵部斜面から低地部にかけてはエノキ属－ムクノキ属を中心にクマシデ属－アサダ属，コナラ亜属，クリ属，カエデ属，ムクロジ属などの落葉広葉樹林が優勢であった。また一部にはスギ林が成立していた。

ほぼ同様の年代と推測される地点Bにおける観察の結果、多くの植物遺体小片や有機物片が認められるにもかかわらずわずかな花粉化石が得られたのみであった。これは植物遺体小片などが認められていることから本地点に供給された花粉化石は紫外線による酸化分解やバクテリアなどの食害などをうけ消失してしまったと推測される。よって、地点B付近はこうした影響をうける環境、すなわち乾陸化していたものと推測され、そうしたところにヨモギ属やタンポポ亜科，イネ科などが生育していたものと思われる。

ここで鎌倉に近い横浜市の柏尾川低地（横浜市栄区金井町）における花粉分析結果（清永　1990）をみると、5,500年前～4,700年前の時期に限ってエノキ属－ムクノキ属，クマシデ属－アサダ属が高率出現しており、コナラ亜属の多産とともにアカガシ亜属も増加・多産している。また、スギはこの時期以降増加しており、約2,600年前から約1,000年前にかけて優勢であった。ここ鎌倉においても少なくとも縄文時代後・晩期から中世にかかる頃までスギは優勢であったことが示されており（鈴木　1993)、スギが少ない花粉帯Ⅰ期はそれ以前と考えられる。このようにスギの出現傾向やエノキ属－ムクノキ属，クマシデ属－アサダ属の高率出現などから花粉帯Ⅰ期は柏尾川低地の5,500年前～4,700年前と同様の頃と推察され、上記の推定年代をほぼ支持するものと考える。

花粉帯Ⅱ期（近世）の遺跡周辺ではニヨウマツ類の二次林や植林と推測されるスギ林が優勢であった。このうち鎌倉のニヨウマツ類は13世紀の中頃以降に急増したことが解かってきており、これはそれまで優勢であったスギ林や照葉樹林が破壊され、跡地にニヨウマツ類の二次林が形成されたことによるものである（鈴木1999)。また、一度激減したスギ林は近世になって増加したものと思われ、その様相は永福寺跡の花粉分析結果に示されている（吉川　1990)。

引用文献

清永丈太（1990）横浜市南西部，柏尾川低地で得られた完新世堆積物の花粉分析．第四紀研究,29, p.351－360.

鈴木　茂（1993）鎌倉市佐助ヶ谷遺跡の花粉化石．佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書－第1分冊－，佐助ヶ谷遺跡発掘調査団，p.407－430.

鈴木　茂（1999）神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊．国立歴史民俗博物館研究報告第81集, p.131－139.

吉川昌伸（1990）史跡永福寺跡における花粉化石．永福寺跡　国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成元年度－，鎌倉市教育委員会，p.20－34.

表1　産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	12
樹木										
モミ属	*Abies*	-	-	2	3	2	3	2	2	-
ツガ属	*Tsuga*	-	1	-	1	2	2	6	8	-
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	2	-	-	3	1	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	1	-	1	-	1	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	-	1	69	2	-	3	1	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	1	2	2	20	4	-	3	-	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	1	1	-	-	-	-	-
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	3	-	10	51	8	4	14	10	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	-	4	12	3	5	2	2	-
ペカン属	*Carya*	-	-	-	-	-	-	2	-	-
クルミ属	*Juglans*	-	-	1	-	7	1	2	1	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	-	2	6	26	29	20	26	1
ハシバミ属	*Corylus*	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カバノキ属	*Betula*	-	-	-	1	1	-	3	1	-
ハンノキ属	*Alnus*	3	1	1	5	1	1	3	2	2
ブナ	*Fagus crenata* Blume	2	2	-	1	2	-	1	1	-
イヌブナ	*Fagus japonica* Maxim.	-	-	-	-	3	1	1	1	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	-	8	6	17	5	9	9	4
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	3	6	5	10	28	22	49	59	2
クリ属	*Castanea*	-	-	-	4	11	4	8	9	2
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	1	1	-	3	6	3	10	12	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	-	1	3	22	83	29	24	2
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	5	40	44	23	31	1
フウ属	*Liquidamber*	1	-	1	-	-	-	-	1	1
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	1	3	1	-	4	-
キハダ属	*Phellodendron*	-	-	-	-	4	-	-	1	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	-	-	2	3	1	1	-
アカメガシワ属	*Mallotus*	-	-	-	1	1	1	1	1	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	3	-	2	1	-
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	6	13	4	6	-
トチノキ属	*Aesculus*	-	-	-	-	-	1	1	-	-
ムクロジ属	*Sapindus*	-	-	-	-	3	-	2	4	1
ブドウ属	*Vitis*	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ツタ属	*Parthenocissus*	-	-	-	-	-	1	1	-	-
マタタビ属	*Actinidia*	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ツバキ属	*Camellia*	-	-	-	1	-	-	1	-	-
サカキ属－ヒサカキ属近似種	cf. *Cleyera-Eurya*	-	-	-	-	-	1	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	1	-	-	-	-	1	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	1	3	1	1	-
ミズキ属	*Cornus*	-	-	-	-	1	-	1	-	-
エゴノキ属	*Styrax*	-	-	-	-	2	-	-	-	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	1	-	-	-	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	-	-	-	2	-	1	-
ティカカズラ属	*Trachelospermum*	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ニワトコ属近似種	cf. *Sambucus*	-	-	-	-	1	1	2	2	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	1	-	3	-
草本										
ガマ属	*Typha*	-	-	2	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	4	4	13	34	7	7	14	6	24
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	-	2	9	1	4	-	1	-
クワ科	Moraceae	-	-	-	1	-	-	1	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	-	-	-	1	-	-	-
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	5	-	-	-	1	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	1	2	-	-	-	-	1
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	-	-	1	-	-	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	2	1	-	-	-	-
タケニグサ属	*Macleaya*	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	2	-	6	6	-	-	-	-	2
ユキノシタ科	Saxifragaceae	-	-	-	-	1	-	-	-	-
バラ科	Rosaceae	-	-	-	1	1	1	2	1	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	1	1	2	2	2	-
キツネノマゴ属	*Justicia*	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	-	-	2	4	2	1	2	-	43
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	1	-	-	-	-	-	-	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	-	9	4	-	-	-	1	6
シダ植物										
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	2	-	7	4	-	-	1	1	2
単条型胞子	Monolete spore	34	6	73	53	14	19	28	13	4
三条型胞子	Trilete spore	-	2	1	2	-	-	1	1	1
緑藻類										
クンショウモ属	*Pediastrum*	-	-	-	1	-	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	16	13	41	207	214	235	211	231	17
草本花粉	Nonarboreal pollen	9	5	35	71	15	17	21	12	79
シダ植物胞子	Spores	36	8	81	59	14	19	30	15	7
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	61	26	157	337	243	271	262	258	103
不明花粉	Unknown pollen	5	2	7	8	24	10	9	17	13

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

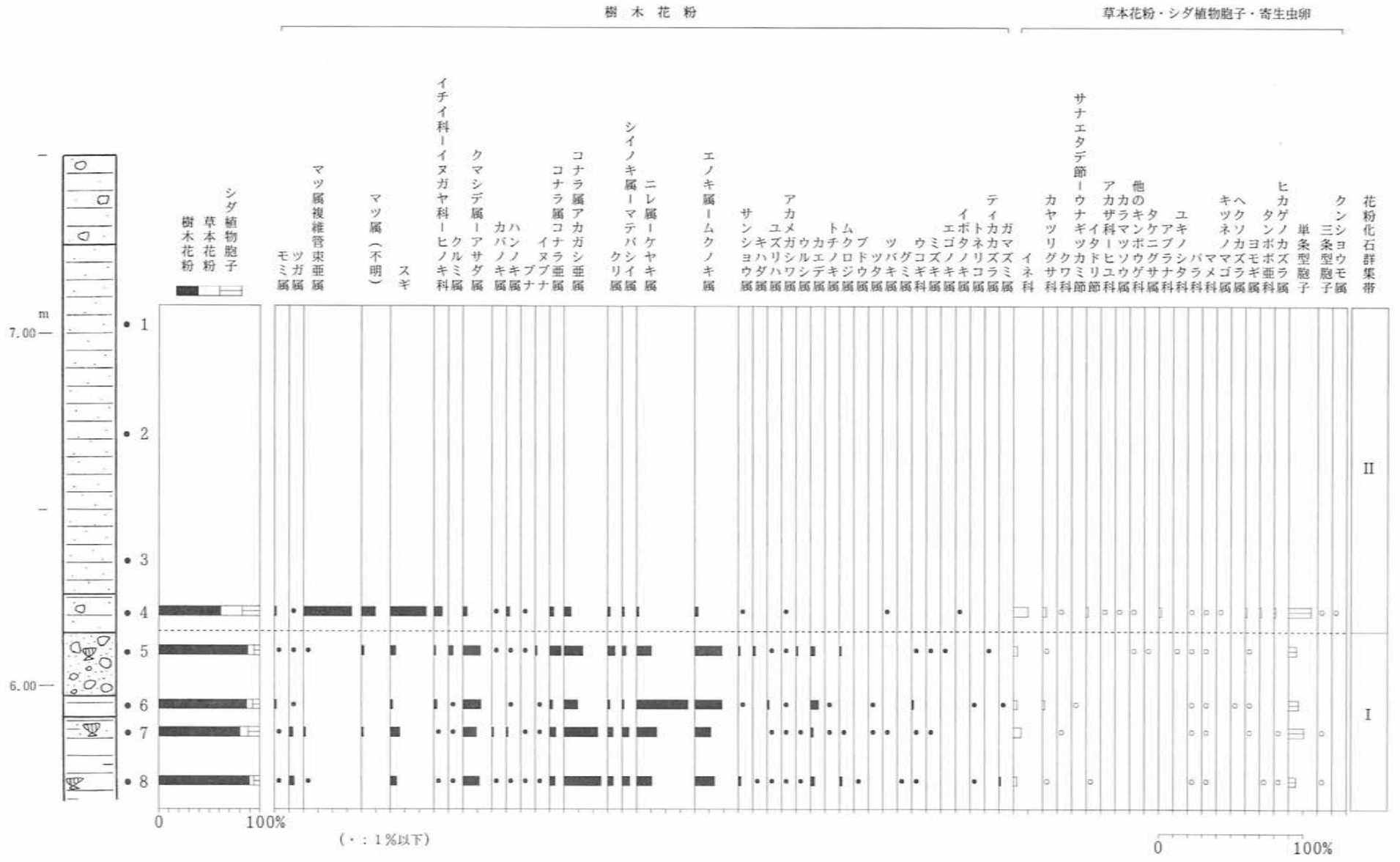
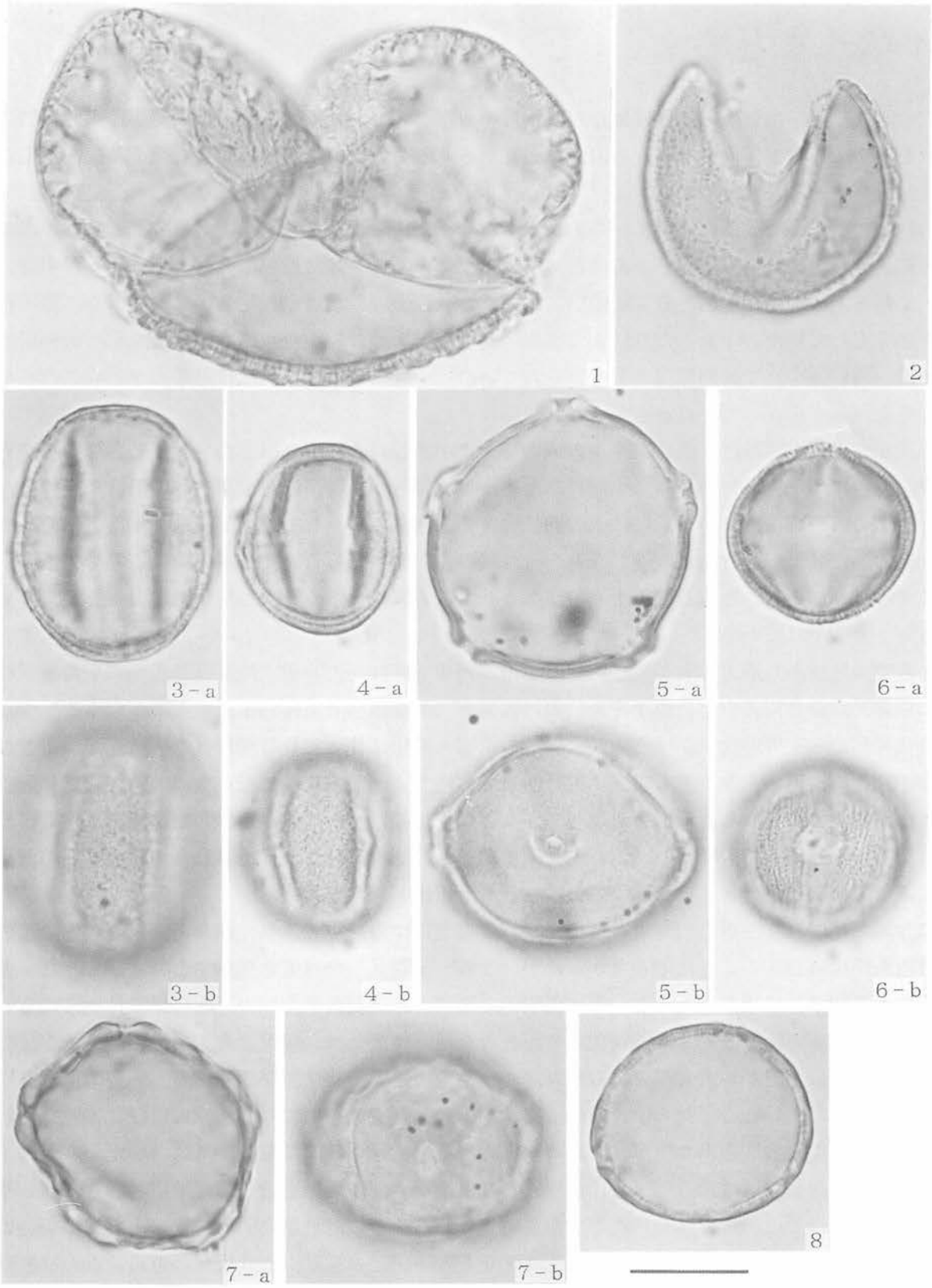


図２　地点の主要花分化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）



図版　大倉幕府周辺遺跡群の花粉化石（scale bar：20μm）

1：マツ属複維管束亜属　PLC.SS　2896　試料4
2：スギ　PLC.SS　2895　試料4
3：コナラ属コナラ亜属　PLC.SS　2899　試料6
4：コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS　2901　試料8
5：クマシデ属－アサダ属　PLC.SS　2900　試料8
6：カエデ属　PLC.SS　2902　試料8
7：ニレ属－ケヤキ属　PLC.SS　2898　試料6
8：エノキ属－ムクノキ属　PLC.SS　2897　試料6

第4章　まとめ

今回の調査では、中世から近代にわたる河川跡の河床と河道が検出された。この河川跡は時期によって流れを変えているが位置や方向から旧滑川と推測される。ここでは発掘調査の成果を基に旧滑川の変遷を概観してまとめに変えたい。

鎌倉地域の河川で直接海に注いでいるのは、滑川・稲瀬川・豆腐川の三条の河川である。この中で鎌倉中心部を含む広い範囲を流域とする滑川は、鎌倉東端の朝比奈峠付近を源とし、十二所・浄明寺・雪ノ下・小町・大町・由比ヶ浜を経て相模湾に注いでおり、その距離は全長約7kmにも達する。場所によって別名を有していた。上流あたりは太刀洗川・胡桃川といわれ、中流域に至ると夷堂川・炭売川になり、下流（河口近く）では閻魔川とも呼称されていた。中世には河口東側域に氾濫源が形成され、扇状地のような湿地が広がっていたとも考えられる。

本遺跡が位置した地域は、朝比奈を主源流として大小の谷戸から流れ出した各支流と合流しながら水量を増した滑川の中流域にあたる。上流にあたる十二所付近から滑川は金沢鎌倉線に沿うように流れ、杉本寺門前の犬懸橋あたりで、急激に南方向に大きく迂回する。そして雪ノ下の歌ノ橋、大御堂橋を経て岐れ路のあたりまで蛇行を繰り返しながら流れていく。さらに岐れ路から本調査地点際である大倉稲荷橋に至る入り口でも、西流していたものがもう一度南方向に大きく迂回して山裾に河道をかえて東勝寺橋方面へと流下していく。

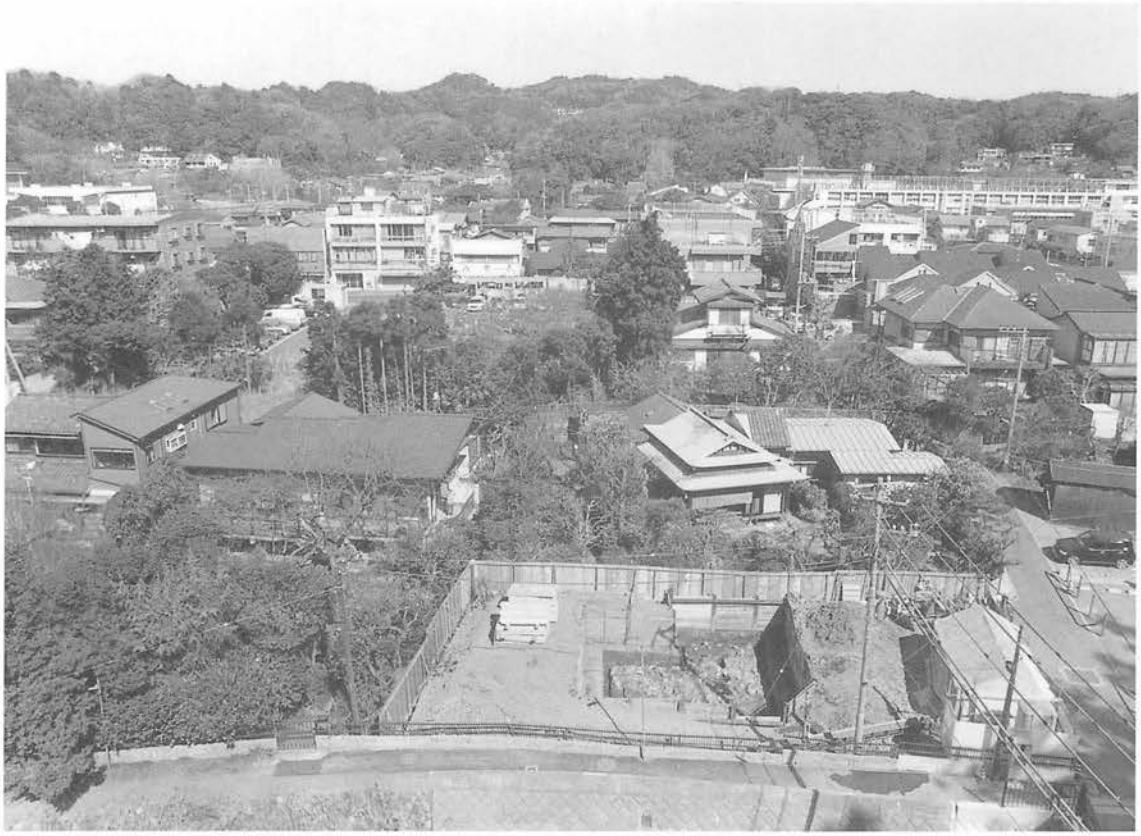
ところで犬懸橋から南方に大きく迂回する滑川の西側地域にあたる現二階堂運動広場の一角と、杉本寺前に位置した鎌倉市青少年会館予定地における調査（調査担当者馬渕和雄氏のご教示による）では、鎌倉時代初期から室町時代にかけての武家屋敷の遺構・遺物に伴って数時期に亘る生活面が検出されており、中世期の滑川は少なくとも現在に近い河道であったことが推測された。今回の調査地点付近は、滑川が南側に大きく迂回した地形を形成しており、調査当初は上記地点と類似した様相を示すものと予想された。しかし先章でも触れたとおり中世期の生活面は認められず、検出されたのは中世期の旧滑川と推定される河床と、近世・近代に位置付けられる河川跡の一部であった。

次に今回発見された滑川の旧河川跡と推定される遺構について少し述べてみたい。調査区内では中世期の滑川両岸は確認することはできなかったが、上層～下層とした河床を発見することができた。それに伴う出土遺物の年代観からみると、中世前期から後期の15世紀前半までの時期に位置付けられるものであった。遺跡地の北方を走る県道金沢鎌倉線と調査地点付近とは、現況でも3m近い標高差が認められ、この標高差は県道から大倉稲荷橋方面に向かう路地の途中で急傾斜がはじまる。周辺の宅地も同じような地形を示していることから中世期の滑川は、少なくとも現在のよりも北側に位置していたことは確かであろう。推測の域を出ないが、当時の北岸も現地形に近い位置にあるのではないだろうか。

さらに江戸時代後期には、近世・近代河川とした遺構が中世期河川を壊して現滑川と同じ方向でやや北に寄った位置にその河道を移動したことが判明している。この河道は、明治時代に入って平坦地拡大を意図とした河道変更に伴い大型の土丹塊やゴミなどの造成土の埋立により現在の滑川に近い位置に流路が移ったと思われる。滑川の南側を走る田楽辻子からの道は、現在大御堂橋の手前を通り延びるが、その先は迂回した滑川に阻まれて西御門川と合流する地点まで分断されている。『としよりのはなし』（鎌倉市教育委員会）の記録によると、この道は宝戒寺橋まで山裾を通って続いていたようである。調査成果にみられた明治期の河川埋立は、この時期に河道改変が行われた可能性を裏付けるものであろう。

写　真　図　版

図版 1



◀手前が滑川で大倉幕府方面を望む

▲A．調査地点遠景（南から）

◀上は滑川に架る大倉稲荷橋

▲B．調査地点近景（北から）

図版 2

▲A．近世・近代河川

▶C・Dライン拡張部

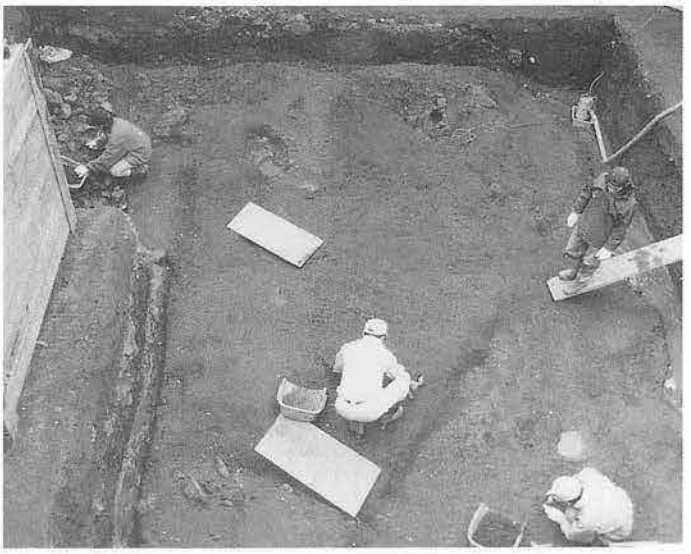
▲D．Dライン拡張部

▼B．Aトレンチ拡張部

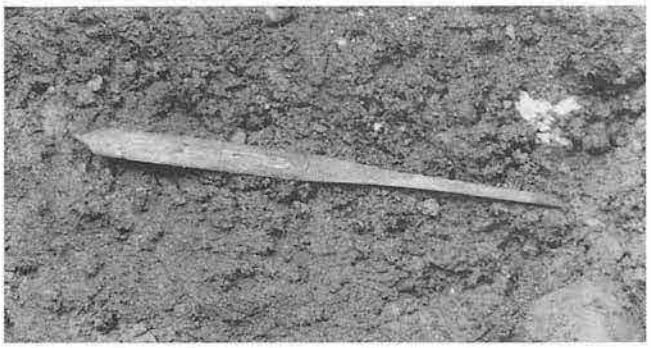
▶A．下層河床全景（東から）

▼B．下層河床北側

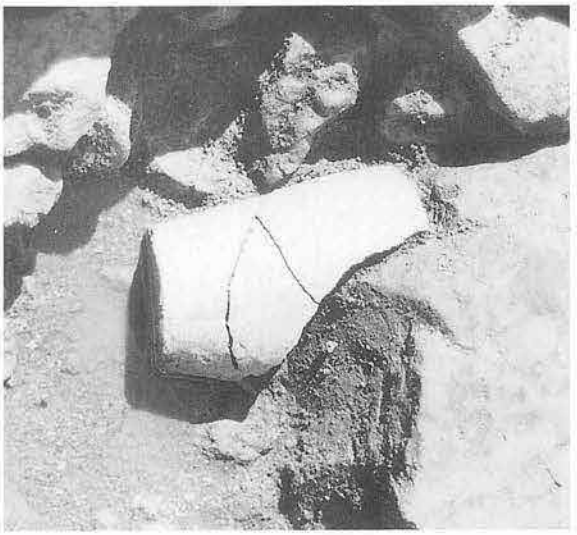
▼C．中層河床検出状況



▼D．中層河床河床流路出土の銅製笄



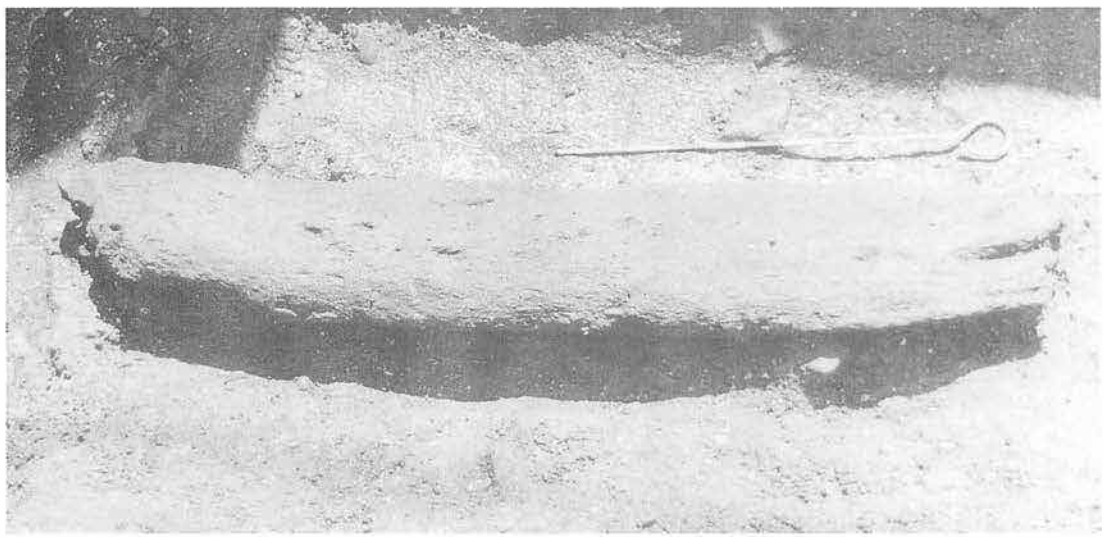
▼E．瀬戸瓶子出土状況



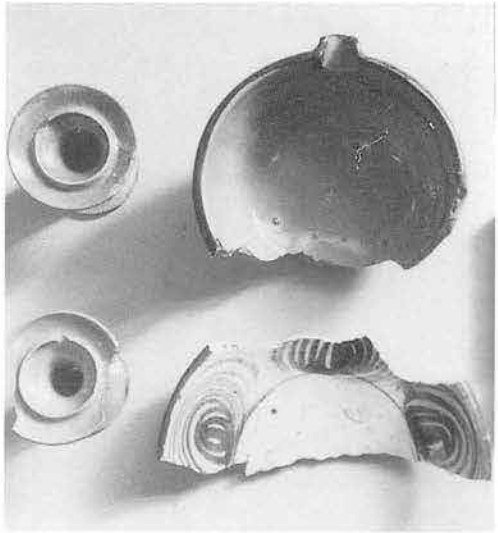
図版 4

◀A. 下層河床北側（土丹塊等を削除した状況）

▶B. 調査区東壁土層堆積
（南端部分、△は縄文期自然流木の続き）



◀C. 縄文時代の自然流木



▲A．近世・近代河川（左：染付、右：瀬戸・美濃系）

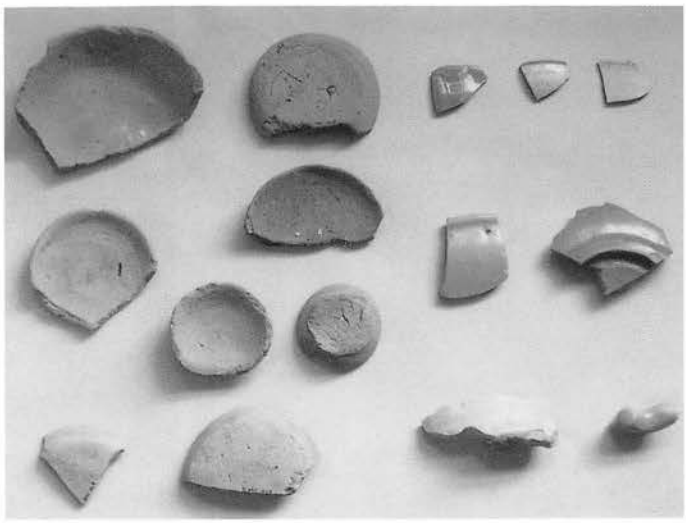
▲B．上層河床

▲C．中層河床

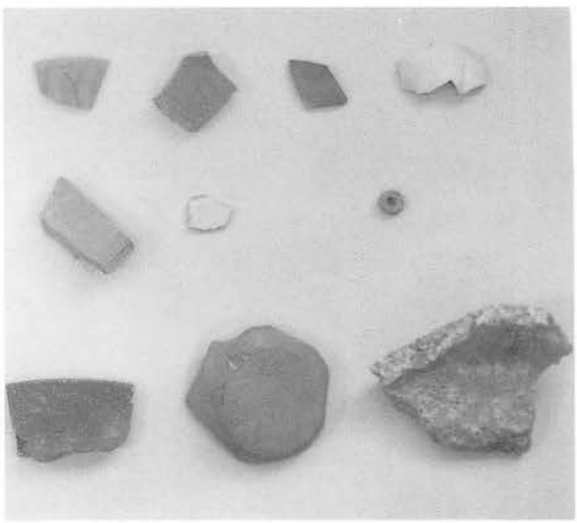
◀D．中層河床の流路内

図版 6

▲A．トレンチ

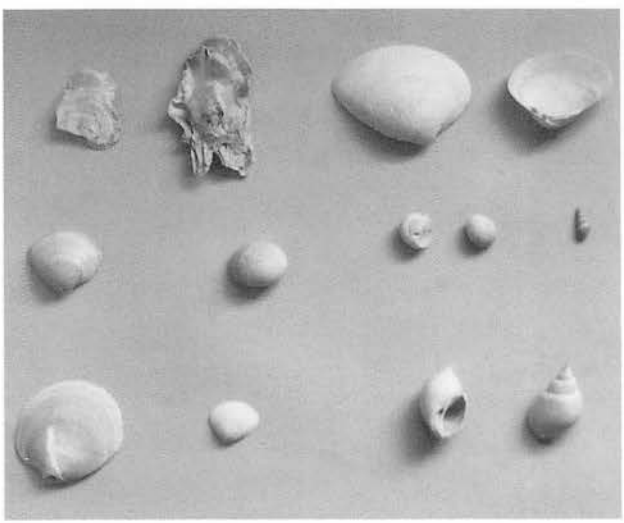


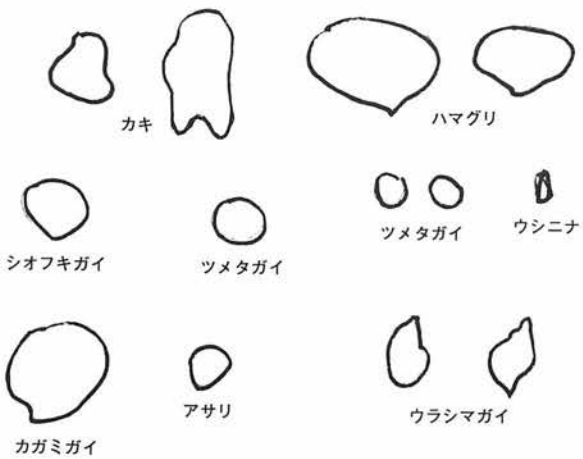
▲
C．下層河床
▼



▲B．トレンチ

▼D．貝類（縄文期砂層出土）





報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成12年度発掘調査報告
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	原　廣志
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦　2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大倉幕府 周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 雪ノ下四丁目 580番10外	204	49	35° 19′ 10″	139° 33′ 49″	20000201 ～ 20000320	129.08	個人専用住宅 （地下室）

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大倉幕府 周辺遺跡群	都市	近代・近世 中世 原始	河川 その他	・かわらけ ・常滑窯製品 ・瀬戸窯製品・ ・舶載陶磁器 ・土製品 ・骨角製品 ・木製品	現在より北側に位置し、方向の異なる中世期滑川の河床を検出。滑川が現河道に近い位置に移動したのは近世期以降である。また中世河床下から縄文海進期に浅瀬又は潮間帯で形成された貝砂層・黒色腐植土を確認した。貝砂層中にコナラを発見、その放射性炭素年代約5,000年前が得られた

武蔵大路周辺遺跡（No. 194）

扇ガ谷三丁目397番地点

例　　言

1．本書は、政所跡遺跡内の神奈川県鎌倉市扇ガ谷三丁目397番地点における個人事業としての賃貸住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、平成12年３月６日より同年同月31日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査に当たっては以下のごとく体制を編成した。

担　当　者　　宗臺秀明
調　査　員　　太田美知子
調査補助員　　加藤菜穂子・谷口清香・篠原秀幸（鶴見大学文化財学科学生）
調査協力者　　有田政夫・中須洋二（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

4．本書作成に当たっては、遺構図の合成・トレースを宗臺秀明が、遺物実測・トレースを小野和代、馬瀬直子と宗臺富貴子が行ったうえ、遺構関係を宗臺秀明が、遺物関係を宗臺富貴子が執筆し、両者で編集した。

5．出土遺物の詳細については、小野和代が作成した本編後段の遺物観察表を参照されたい。

6．本書に使用した写真のうち、遺構関係を宗臺秀明が、遺物は宗臺富貴子と小野和代が撮影した。

7．本書の遺構と遺物の挿図の縮尺は次の通りである。
遺構全測図：１／120、個別遺構図：１／60、遺物実測図：１／３
なお、各挿図には縮尺を表示している。

8．発掘調査に際しては、近隣住民の方々を始め、本田家の方々に様々な御援助を戴いた。ここに、あらためて御礼申し上げます。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……280
第２章　調査の経緯 ……284
　第１節　調査の経緯 ……284
　第２節　確認調査 ……284
第３章　発見された遺構と遺物 ……286
　第１節　調査地内基本土層層序 ……286
　第２節　第２面 ……288
　第３節　第１面 ……290
　第４節　近世面 ……294
第４章　調査成果のまとめ ……303

挿　図　目　次

図１　遺跡地位置図 ……281
図２　調査地点位置図 ……282
図３　調査地点絵図 ……283
図４　調査区設定図 ……284
図５　確認調査成果 ……285
図６　確認調査出土遺物 ……285
図７　第２面全測図 ……287
図８　第２面下トレンチ ……287
図９　第２面下トレンチ出土遺物 ……288
図10　第２面建物 ……289
図11　第２面建物（ピット17）出土遺物 ……289
図12　第２面その他の遺構出土遺物 ……289
図13　第２面上出土遺物 ……290
図14　第１面全測図 ……290
図15　第１面下段平面図 ……291
図16　第１面その他の遺構出土遺物 ……291
図17　第１面下出土遺物 ……292
図18　第１面上出土遺物 ……293
図19　近世（宝永）面全測図 ……294
図20　近世（宝永）面溝１・２・３ ……295
図21　近世（宝永）面下出土遺物 ……296
図22　表土層出土遺物 ……298

図　版　目　次

図版1a.発掘前調査地全景（南東より北東の丘陵を望む）　b.調査地より東宝の丘陵を望む　c.第２面下トレンチ（北より） ……307
図版2a.第２面Ⅰ区全景(北より)b. 第２面Ⅱ区全景(北寄り)c.第２面Ⅱ区版築土中かわらけ …308
図版3a.第１面Ⅰ区全景(北より）b. 第１面Ⅱ区全景（西より）c.Ⅱ区近世面全景(北より）309
図版４　出土遺物 ……310
図版５　出土遺物 ……311
図版６　出土遺物 ……312

表　目　次

表１　遺物観察表（１） ……299
表１　〃　（２） ……300
表１　遺物観察表（３） ……301
表１　〃　（４） ……302

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

神奈川県遺跡台帳に指定されている武蔵大路周辺遺跡は、鎌倉市旧市街地の北方、鶴ケ岡八幡宮前面にて若宮大路と接する赤橋から西方へ、寿福寺前から北へ亀ケ谷辻を経て化粧坂に至る武蔵大路と推定される扇が谷二丁目から三丁目周辺に位置する。また、鶴岡八幡宮の北西方、山ノ内の庄から旧鎌倉市街に至る巨福呂坂が仁治元年に開鑿される以前には、鎌倉に入る道は山ノ内道から亀ケ谷坂を通って亀ケ谷辻に抜けていたものと思われる。そのため、亀ケ谷辻は繁華な場所であった、と『鎌倉市史』では推定している。なお、鎌倉市街と外との接点に当たる化粧坂上が繁華な商業地域であり、娼家が並び遊女のたむろする場であると同時に刑場と葬送の地である複層の性格を持っていた、と石井進氏は指摘している。いずれにしても、武蔵大路は鎌倉市街と梶原や弥勒寺の相模、武蔵地方とを結ぶ重要な道であったことが推測される。

武蔵大路周辺遺跡とされる一帯には、寿福寺の北側に隣接する英勝寺当りを扇の要として、いくつもの谷戸が北から南に扇のように展開する扇ヶ谷の地名が中世以来残されている。この扇が谷には、各小谷戸からの小川をあわせる扇が谷川が、北西の海蔵寺方面より南流し、化粧坂下から寿福寺前までほぼ武蔵大路に沿って流れている。今回報告する発掘調査は、扇が谷川の東に、南西に開口した谷戸内で行われた。この谷戸内には「扇ノ井」と呼ばれる井戸が残されており、扇ヶ谷の地名のにちなむものとして注意される。調査地点の谷は、北側の亀が谷と南の泉が谷を分かつ峯の先端部分を小さく抉る小谷戸である。

亀が谷の支谷である勝縁寺が谷には、かつて貞治年間の初め頃までには建立されていた勝因寺という禅宗の寺があったと『鎌倉廃寺事典』は述べている。また、谷戸の中央部に位置する「泉の井」にちなむ泉が谷には、推定寺域の丘陵に覚賢塔が遺存する多宝寺がかつて建立されとされ、また「泉の井戸」の南には建長三年創建の律宗の浄光明寺（現：真言宗）が現在も残る。多宝寺は、弘長二年頃、開山に忍性を迎えた律宗寺院である。鎌倉中期から後期にかけては、浄光明寺とともに泉が谷は律宗の主要な拠点であったことが窺われる。

このように、調査地点の小谷戸を取り巻く谷戸には、現在までその命脈を保つもの、また廃絶してしまった寺院も多く建立された。他方、多くの寺院に囲まれた調査地点の小谷戸内には、現在寺院や社はなく、また廃寺の伝承もない。しかしながら、扇が谷川の西に位置する智岸寺跡・化粧坂下・海蔵寺境内周辺、さらに扇が谷東側に遺る新清涼寺跡・法泉寺跡・勝因寺跡のほか多宝寺周辺に数多くの「やぐら」が造営され、残されている。そして、調査地点のある小谷戸内にもやはり「やぐら」を確認でき、調査地点も周辺の寺院と関連した寺域に含まれていた可能性が考えられる。

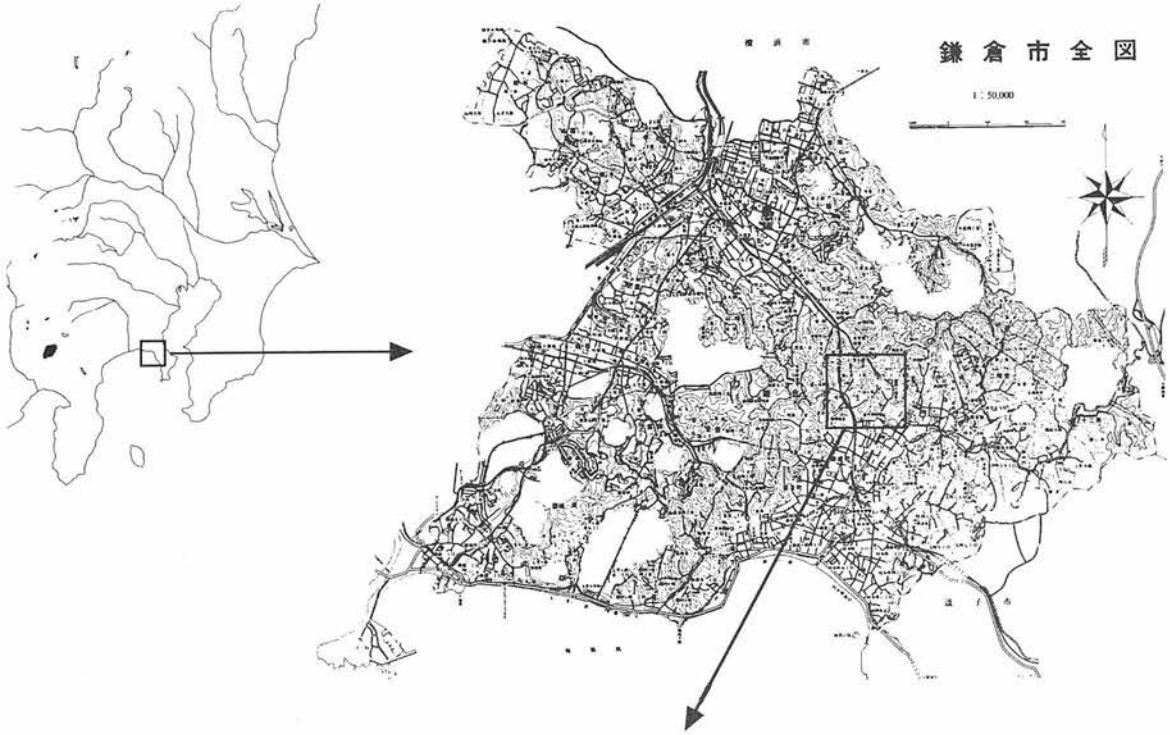
参考・引用文献

高柳光寿　1959『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館

貫　達人・川副武胤　1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂

菊川英政　1993「多宝寺跡　扇ケ谷二丁目250番６外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告　９』第３分冊、69～101頁、鎌倉市教育委員会

玉林美男・菊川英政　1996『化粧坂周辺詳細分布調査報告書（国指定史跡化粧坂・日野俊基墓周辺の鎌倉街道上ノ道に係わる街道・城郭遺構等の詳細分布調査報告書）』鎌倉市教育委員会



昭和二年測量図

図1　遺跡地位地図

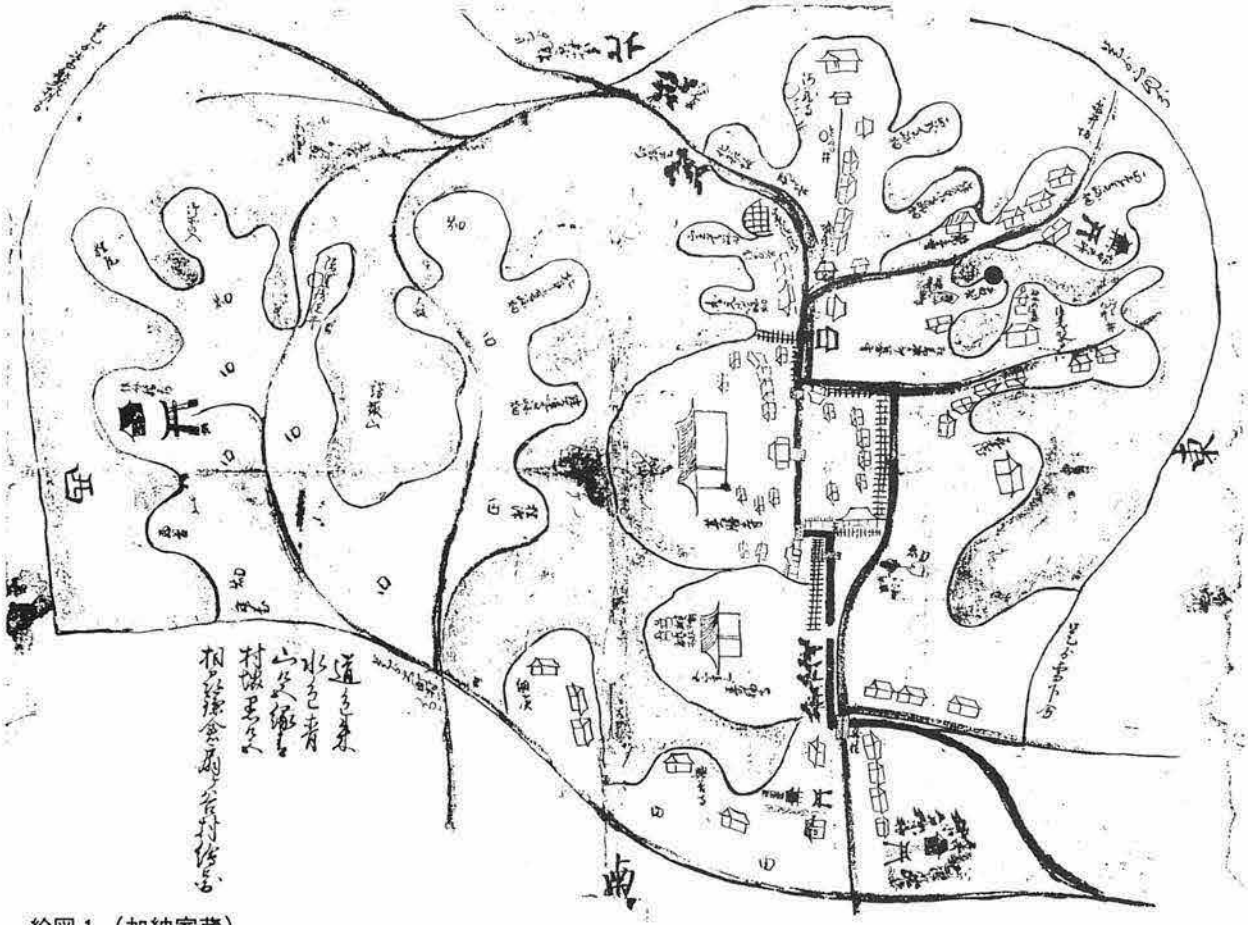
1．覚賢塔

2．浄光明寺境内遺跡

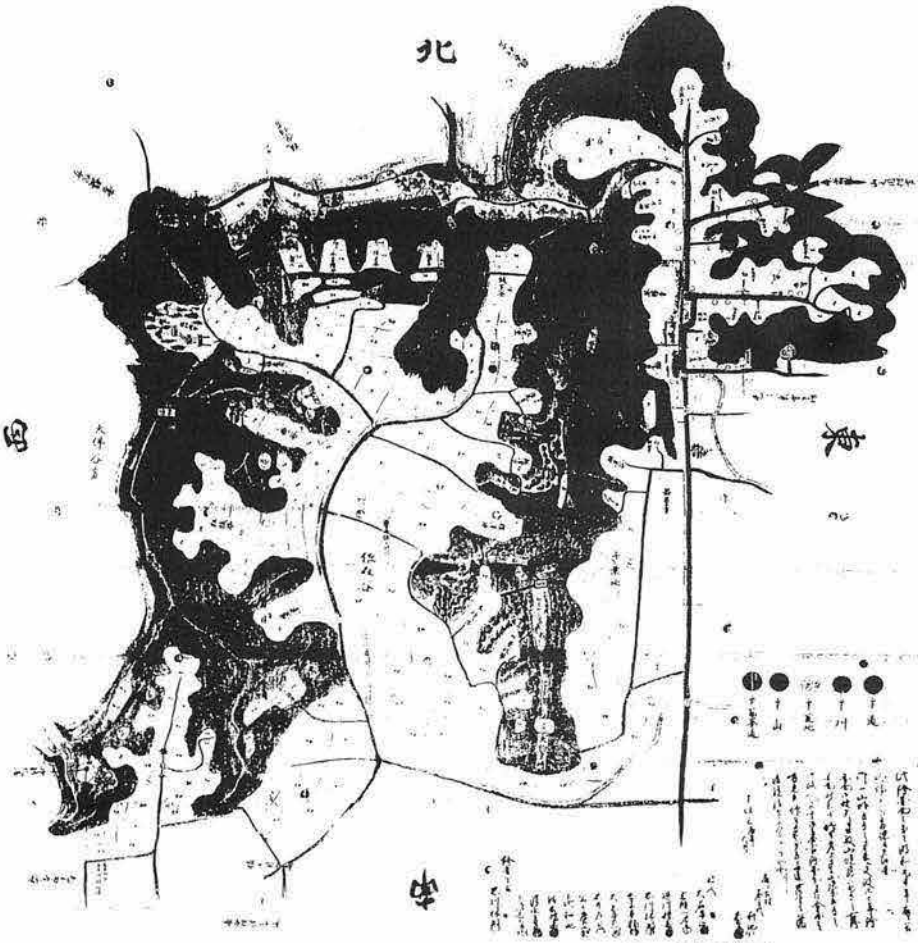
3．智岸寺遺跡

4．智岸寺遺跡

図2　調査地点位置図



絵図１（加納家蔵）



絵図２（大仏家蔵）

扇ヶ谷村絵図

《扇ヶ谷村絵図》
隣接する他村との境界を明確にするため描かれた図で、現在二面が残されている。絵図１は宝永七年（一七一〇）頃、絵図２は天保三年（一八三二）に作図されたものである。
北・東・西の三方尾根筋を村境とし、亀ヶ谷坂・仮粧坂の他に寺社・支谷名を記すが、絵図２では化粧坂から派生する大小の尾根路や山稜上に散在する畑・荒地までも描き入れている。
鎌倉国宝館図録　第十六集『鎌倉の古絵図Ⅱ』
鎌倉市教育委員会／鎌倉国宝館　平成五年再版

図３　調査地点絵図

第２章　調査の経緯

第１節　調査の経緯（図５・６、図版１）

調査は、平成11年に、鎌倉市扇が谷三丁目397番地点における個人事業としての二階建て賃貸住宅新築の申請があり、同年11月25・26日に鎌倉市教育委員会文化財課は建設予定地にて、確認調査を行なった。その結果、谷戸内緩斜面地である建設予定地内にて建物基礎工事によって削平される前に発掘調査が必要と判断した。それを受けて、個人事業に相当する本件は、国庫補助事業として発掘調査を行なうこととなった。確認調査の成果については、後掲の本章第２節を参照されたい。

発掘調査は、対象面積を建物面積の67.02㎡、調査深度を基礎工事の及ぶ現地表下115cmまでとした。調査の実施は平成12年３月６日より同年同月31日まで行なった。調査に当たっては、調査時に発生する残土を場内にて処理する方法が用いられたため、調査範囲を二分割して、敷地の北東半分を第Ⅰ区、南西半分を第Ⅱ区として、第Ⅰ区より行なった。

なお、発掘調査実施に当たって、遺構測量のために調査区内に２ｍ単位の方眼を組んだ。方眼の軸線は、調査地の東に面する市道に設置された４級基準点を起点にして、振り込まれた。東西軸線にアラビア数字を南北軸線にアルファベットを付した。また、測量方眼の南北軸線は、磁北に対して31°47′31.5″東に傾き、そのＤ－４交点は国土座標値：Ｘ＝－75.412.172、Ｙ＝－24.863.831である。なお、Ｄ－４交点は北緯35°19′23″、東経139°33′13″に当たる。

第２節　確認調査

建築申請予定地内での発掘調査の必要性の有無を確認するために、鎌倉市教育委員会によって確認調査が行われた。確認調査は、申請地内に２×３ｍの長方形の試し掘り区画を設定して、平均して基礎工事の及ぶ現地表下115cmまで、一部で現地表下150cmまでの掘り下げを行なった。調査では、ほぼ現在の敷地内に見られる北東から南西に向けて緩やかに傾斜する地形に沿うように、現地表下70cmと90cm、140cmに中世の生活面を確認している。また、さらに下方の黒褐色粘質土中からは７世紀代の土師式土器の

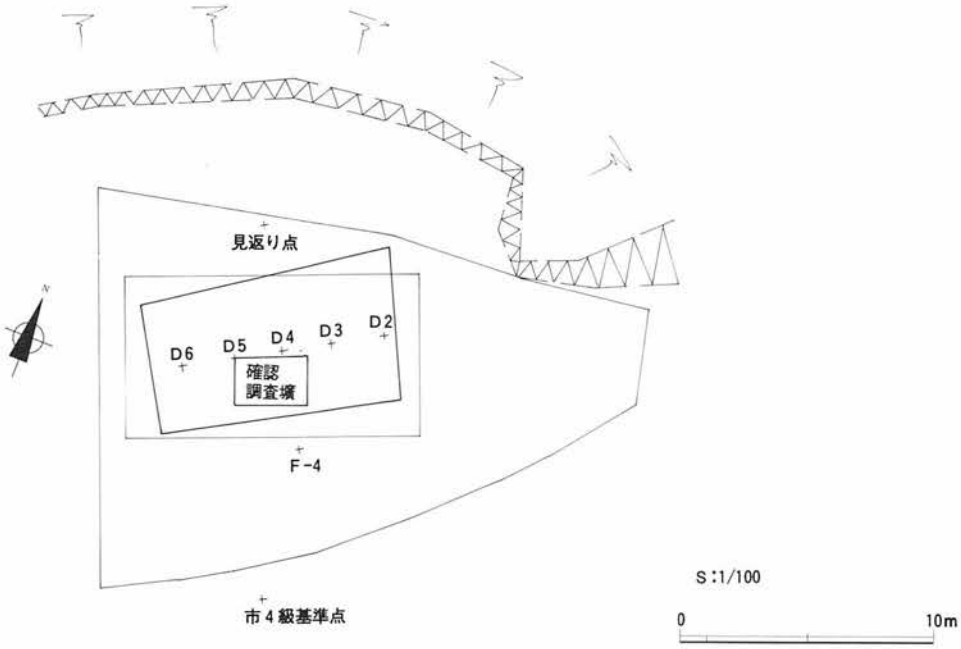


図４　調査区設定図

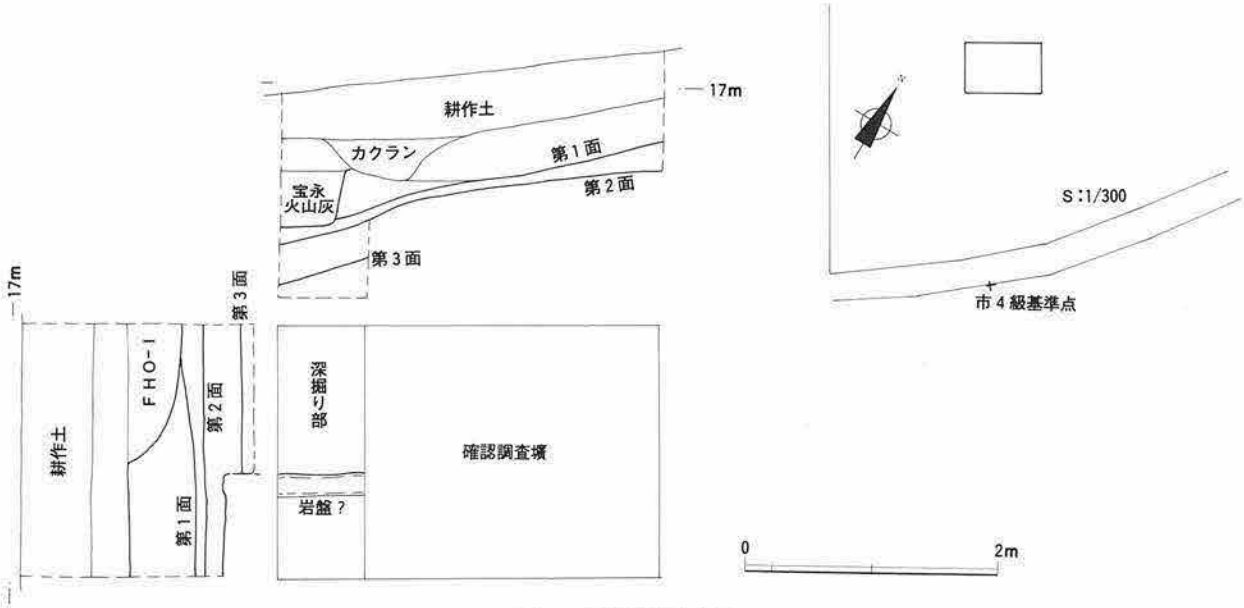


図5　確認調査成果

長胴甕の破片が出土した。

狭い確認調査壙の中であったため、中世の生活面上に柱穴などの構築物跡は発見されていないが、泥岩を多く交えた地業面土層が2枚確認された他、現地表下140cmでは上述の土師式土器を含む黒褐色粘質土の上面がそのまま中世の地山として使われていたと考えられ、その上層からは中世に使われたかわらけが多く出土している。この中世地山を確認した確認調査壙の南西隅に、切石の木口が顔をのぞかせているような状況で砂質泥岩が発見されている。後の発掘調査では、これは谷戸内の地山である岩盤の一部であることを確認した。すなわち、中世の第3面は、遺跡地周辺の地盤を構成する砂質泥岩の窪みやその上に堆積した黒褐色粘質土を部分的にほぼ平坦に削平して築かれていたと考えられる。以上の中世と考えられる生活面を上層より第1面から第3面として認識し、報告された。

申請建物の基礎工事の及ぶ範囲が、予定建物と同じであり、また深さは現地表下115cmであるため、確認調査で確認された中世第2面までの発掘調査が、工事に先立って行われる必要を指摘され、発掘調査が行われることとなった。

第3節　確認調査での出土遺物（図6）

図6—1～2は長胴甕。1は口頸部下が屈曲し、口頸部はやや開きながら立ち上がる。器表の摩滅が著しく調整痕は不明瞭だが、内外面ともに指頭押さえの後、横方向のナデ調整がなされる。焼成は良好。2は口頸部下が屈曲し、口頸部は直立気味である。外面は指頭押さえの後、横方向のナデ調整、胴部は

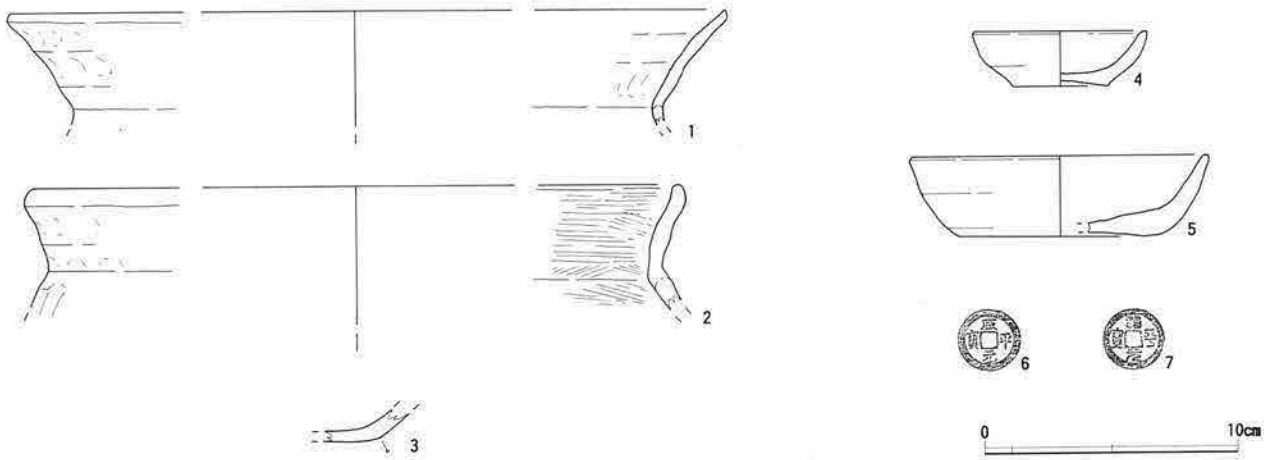


図6　確認調査出土遺物

ケズリ調整がなされる。内面は粗いハケによる調整。焼成は良好。3は相模型坏の底部片。内面はナデ。外面はケズリにより調整される。いずれも9世紀中頃～10世紀前半のものと思われる。
4～5はかわらけ。4は口径が小さめで、側面観椀型を呈する。5は混入物の多い胎土で、内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がる。
6～7は銭。6は998年初鋳の「咸平元寳」、7は1064年初鋳の篆書の「治平元寳」である。

第3章　発見された遺構と遺物

以下では、確認調査の成果を受けて、平成12年3月に行われた発掘調査の成果を報告する。報告にあたっては、発掘調査範囲全体を見通した遺跡地の土層堆積層序を記した後、時期の古い下層より時間を下るように上層へ向けて調査成果を述べる順序とする。なお、発掘調査は基礎工事の及ぶ深さ内に確認されている中世第2面までであることを、ここで確認しておく。

第1節　調査地内基本土層層序（図7）

遺構と遺物の説明に先立って、調査地における基本的土層堆積層序を述べる。調査では、上層より宝永四年（1707）の火山灰を確認できる近世面から中世第2面の13世紀に至る生活の跡を発見した。

中世第2面の下方には、確認調査で確認されていた黒褐色粘質土層を確認調査壙の壁に再確認できる（第1層）。この黒褐色粘質土中より確認調査では土師式土器が出土しており、第1層が堆積する以前の調査地に住居址が残されているか、もしくは堆積中の時期に調査区周辺の高台に人々が生活していた可能性が考えられる。しかしながら、この土層までの調査を行なわないことで、土地所有者の了承を得ていたために、第1層中およびその下層の状況については、不明である。

第1層上には、拳大の泥岩と中世のかわらけを交えた茶褐色粘質土が堆積する（第2層）。この状況より、第1層上面は中世の地山生活面と思われる。第1層と第2層は確認調査でのみ認められたが、第2層と同様の拳大の泥岩を多量に交えた暗茶褐色土が第3層にも認められる。この第2層と第3層の堆積する海抜高は異なり、第3層が調査区の東で高く、途中より段を形成するように下方へと下がっているため、両土層は同時期に高低差をもって人為的に積み足された土層と考えられる。また、第3層の上面では、泥岩が突き固められた版築層が一部で確認され（第4層）、丁寧な生活面の作出が行われている。これら泥岩を多量に用いている第2層から第4層の上面が、中世第2面を構成し、今回の発掘調査で調査を行ないえた最下層の生活面をなすひな壇状の敷地になった。しかし、第1面のこの段は、後に第8層による埋め立て造成によってなくなる。これによって、調査地内はほぼ平坦な敷地に更新された。この第8層上面を第1'面とする。

第1面および第1'面の上には、かわらけの細片と泥岩の小塊をを交える第9層の黄褐色の弱粘質土が厚く堆積する。厚い部分では、25cmにも及ぶ。この第9層は、全体に締まりがなく、人為的な地業層とは考えられず、調査地における人々の活発な活動が停止した時期の丘陵地侵食風化土の堆積と思われた。自然堆積層と考えられる第9層上に粘性の弱い茶褐色土である第10層が、厚さ20cm前後堆積する。この土層からは近世の陶磁器が数多く出土し、中世遺物はあまり見られない。また、第10層上面からは、宝永七年噴火の富士山宝永火山灰を充填した溝が発見されていることや土質から、この第10層は近世での耕作土と考えられた。また、調査区の東側では、この第10層を掘り上げて人頭大の荒い泥岩礫を埋め

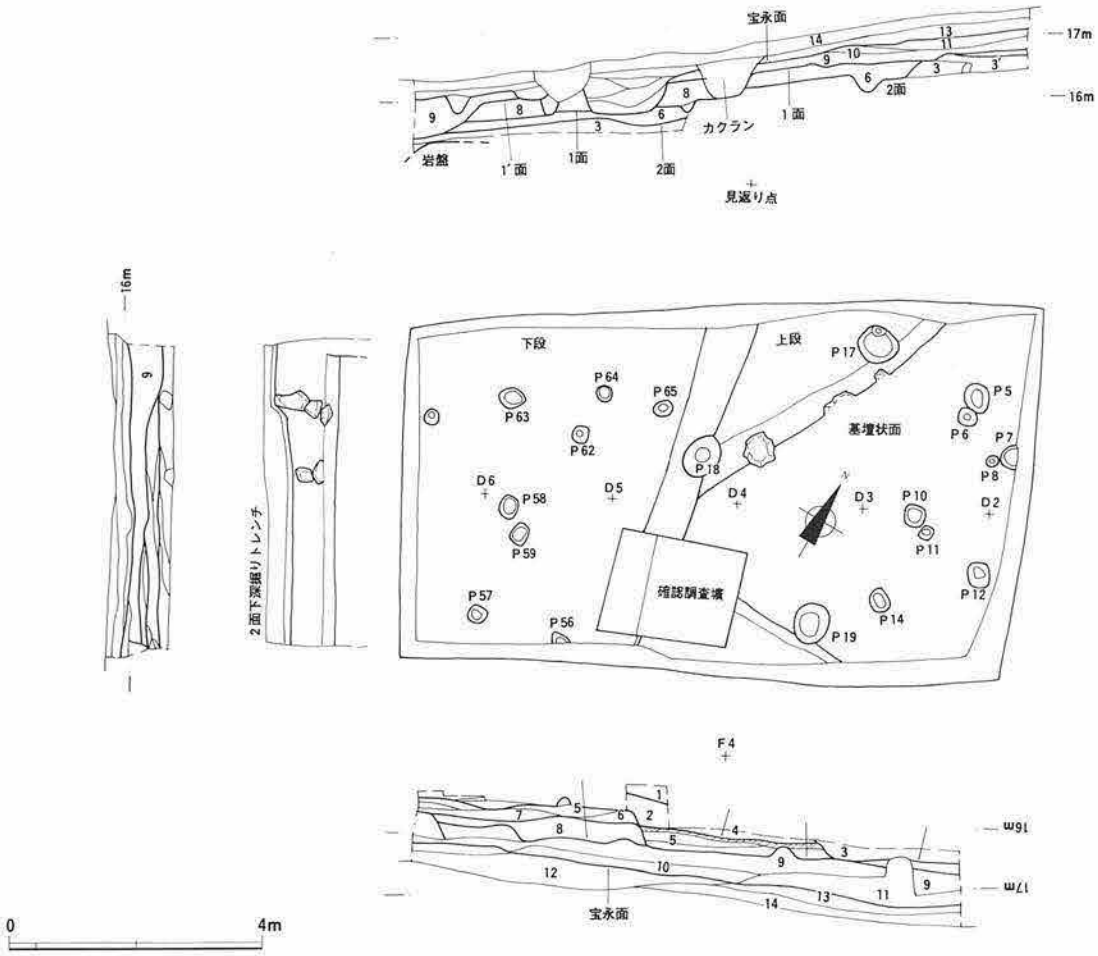


図7　第2面全測図

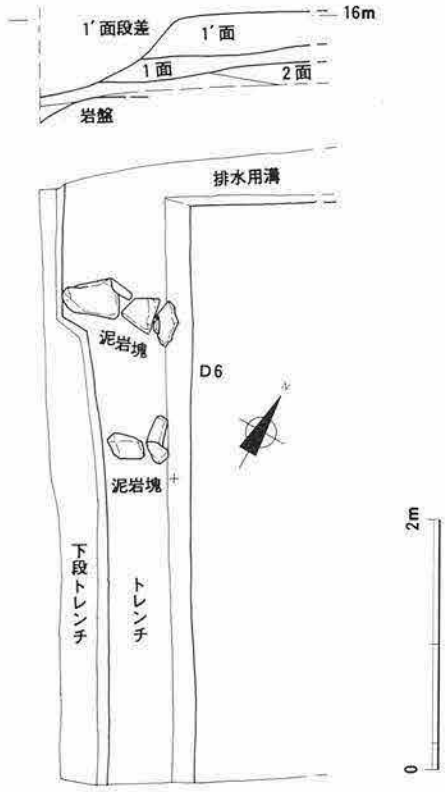


図8　第2面下トレンチ

込んだ第11層がある。第11層中には、柱穴の痕跡も確認できるため、調査区西側に広がる耕作地に付随した作業小屋などがあったものの、取り壊された後に泥岩で整地したものと考えられる。この第10層と11層の上面を近世面としてとらえた。

近世面の上には、非常に柔らかい黒茶色土の第12層から黒色の第13層、泥岩礫を若干交える黒色土の第14層までの堆積層を確認した。このうちの第13層は、調査前まで行われていた畠作の耕作土であり、第14層はその東に建てられていた小屋の整地層である。第12層も、その土質から近代の耕作土と考えられる。

以上のように、調査地に堆積する文化層は、部分的に確認できた第三紀層の南西へと傾斜する岩盤面上に堆積した黒色粘質土堆積中に、調査地が初めて7世紀代の人々の生活領域に入ったことを示すものの、調査では面的にその生活の様相を確認できなかった。この後、中世に至り、調査地の斜面地形を泥岩礫を用いてひな壇状に整地することで、建物構築を伴う生活領域

に改変されたものと考えられる。しかし、中世第１面の後の近世には、中世に行われた整地作業による平坦面を利用した耕作地へと変遷し、その状況は現在に至ることを堆積土層が示している。

第２節　第２面（図７・８、図版２）

第２面は、傾斜地に泥岩を部分的に版築地業して、三段のひな壇状に整地した生活面である。最上段下に建物跡らしき柱穴配置を認めた。その他にも、最上段と下段にピット穴を発見しているが、明瞭な建物跡らしき配置を認めることはできなかった。中段には、全く遺構が発見されていない。

なお、調査区の西端では、発掘調査深度内にて第２面が遺存していたため、調査深度限界までの深掘トレンチを設定して、第２面下を探った。

２面下トレンチ

調査区の西端に、南北に設定したトレンチは、調査深度にしたがって、まず幅２ｍで調査を行い、その後、最も第２面が現地表から浅い最西端で幅１ｍの掘り下げを行った。すなわち、トレンチは２段に設定して行った。ただし、トレンチはそれぞれ深さは10cmほどの非常に浅いものである。

調査では、２段のトレンチ内に茶褐色の弱粘質土が堆積するのみで、事業面などの生活面は確認できなかった。しかし、調査区の北西隅に第三紀層の岩盤面が第２面下14cmに存在し、それが南西に向けて下がっていることを確認した。そして、確認された岩盤面の南方１ｍと２ｍに大小さまざまな泥岩を東西に連ねて堆積土層中に配置している状況も発見された。泥岩の配置されている地点では、トレンチ内に岩盤面は確認されず、長さ１ｍのボーリング棒による探査でも岩盤の存在を確かめられなかった。

こうした第２面下深掘トレンチ調査の状況は、次のことを示している。調査区内の北西隅に発見された第三紀層の岩盤面は北東から南西に向けて傾斜し、その傾斜面を茶褐色弱粘質土を用いて盛り土して第２面を造成している。造成に当たっては、盛り土の境目に大小の泥岩礫を斜面にたいして直角に配置し、盛り土の流れ落ちを防いだ。

しかしながら、確認調査で認められている７世紀代の土師器を混入する土層がトレンチを設定した地点でどれ程まで下層に堆積しているのかは、確認できなかった。また、確認調査壙の南半分に発見されている第三紀層の岩盤がその西方では、どのような位置と標高にあるのかも確認できていない。このため、調査区内での第２面下の堆積層の状況や岩盤面自体の存在状況は不明とせざるを得ないが、基本的に北東から南西へ傾斜する谷戸の北側斜面の中に小さな谷筋が入り組む地形でなかったかと思われる。そのような地形に土師器を混入する自然堆積土上に第２面下の盛り土造成が行われたものと考えられる。その造成の際に、泥岩礫で盛り土の目を作っている。

第２面下出土遺物（図９）

図９―１はかわらけ。器壁は内弯気味に立ち上がり、体部外面上位よりやや外反する。

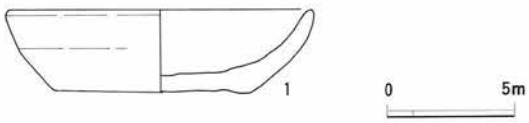


図９　第２面下トレンチ出土遺物

建物（図10）

調査区東部の雛壇、最上段の縁に３口の柱穴が発見された。ピット17・18・19である。３口だけのピットであるが、ともに最上段を形成する泥岩版築面の切れ目に位置することから、版築面を基壇とする建物の柱穴と考えた。基壇上にも小さく、浅いピットがいくつか残されているが、上述の柱穴とは規模が異なり、床束跡の可能性があるものの、明確な床下材を支えた並びを認められなかった。

ピット17・18・19は、調査区内に認められた三角形状の最上段版築面の角と二辺に一口づつ残されている。各柱穴の間隔は、芯々で320cmを測り、各柱穴の版築面下からの深さは、それぞれピット17が32

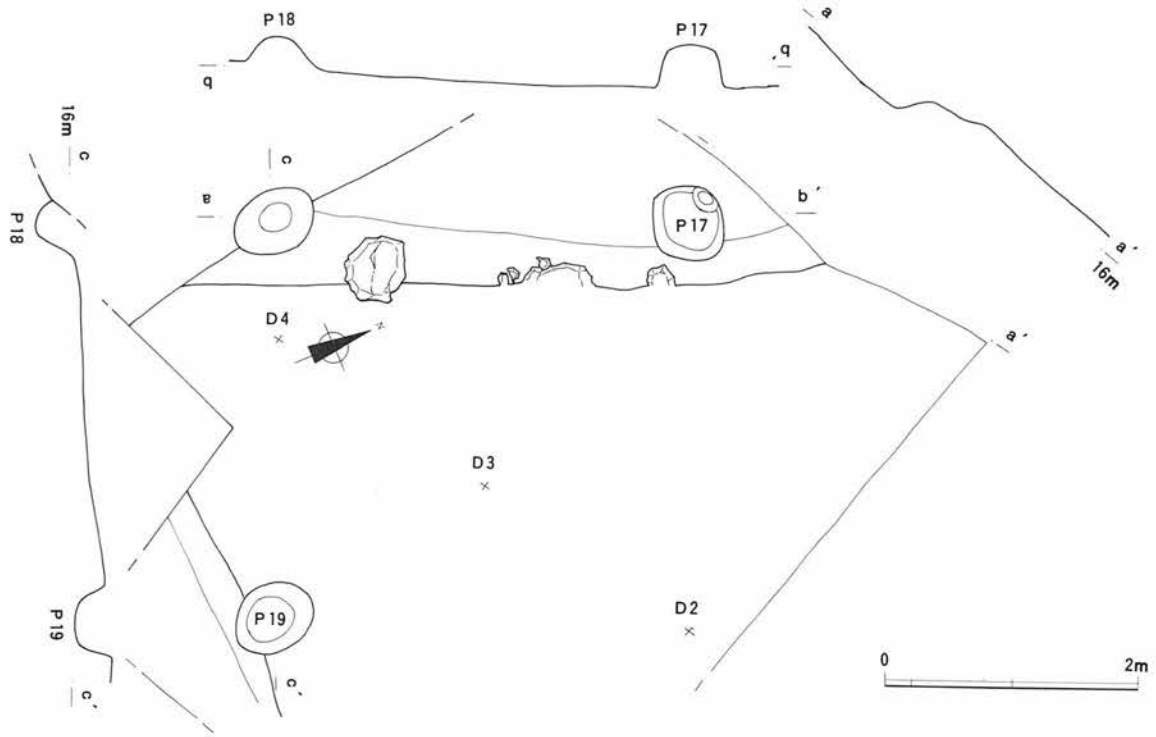


図10　第２面建物

cm、ピット18が31cm、ピット19が33cmのほぼ一定であるが、海抜高は一致しない。柱穴断面図を見れば、版築面および版築面下の生活面自体が北東から南西へと10cmほど傾斜しているため、柱穴底面海抜高の不一致は建築材の過不足を補うためであったのではないかと思われる。

建物の南北軸線方位は、N－23°－Eを示す。

第２面建物出土遺物（図11）

図11―１～５は建物を構成するピット17より出土したかわらけである。１～４の胎土はいずれも黒色微砂を多く混じえる淡茶～橙色粉質土。２と３は内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がる。４は内弯気味に立ち上がり側面観椀型を呈する。５は混入物の少ない橙色粉質精良土で、口径が小さく、器壁は薄い、いわゆる「薄手丸深」型である。

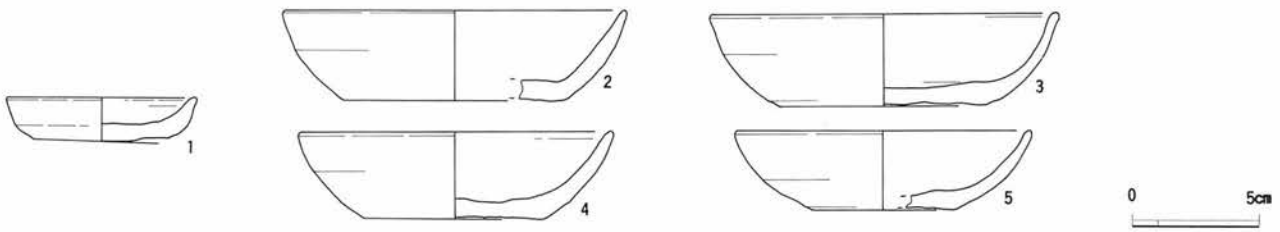


図11　第２面建物（ピット17）出土遺物

第２面その他の遺構出土遺物（図12）

図12―１は基壇上面のピット６より出土したかわらけ。黒色微砂を多く混じえる橙色粉質土。器壁は薄く、側面観椀型を呈する。

図12―２は下段のピット57より出土したかわらけ。器壁は開きながら立ち上がり、口唇部は大きく外反する。

図12　第２面その他の遺構出土遺物

第２面上出土遺物（図13）

図13—１～２は第２面直上より出土したかわらけである。胎土はいずれも黒色微砂を多く混じえる淡橙色粉質土。１の器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部付近で外反する。２は開きながら立ち上がり、側面観椀型に近い。

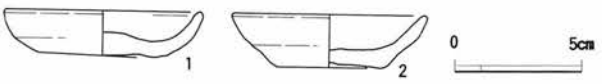


図13　第２面上出土遺物

第３節　第１面（図14、図版３）

第１面では、調査地の雛壇造成が明瞭になる。第２面において建物基壇を担っていた上段は、その南部が南西方向へと張り出し、調査区のほぼ中央に段を持つ２段構成になる。ただし、調査区西端では上層の第１'面時の段が掘り込まれており、第１面時にこのあたりに３段目の落ち込みがあった可能性も残されているが、その点は確認できない。図中に書き入れてある落ち込み線は、第１'面のものである。

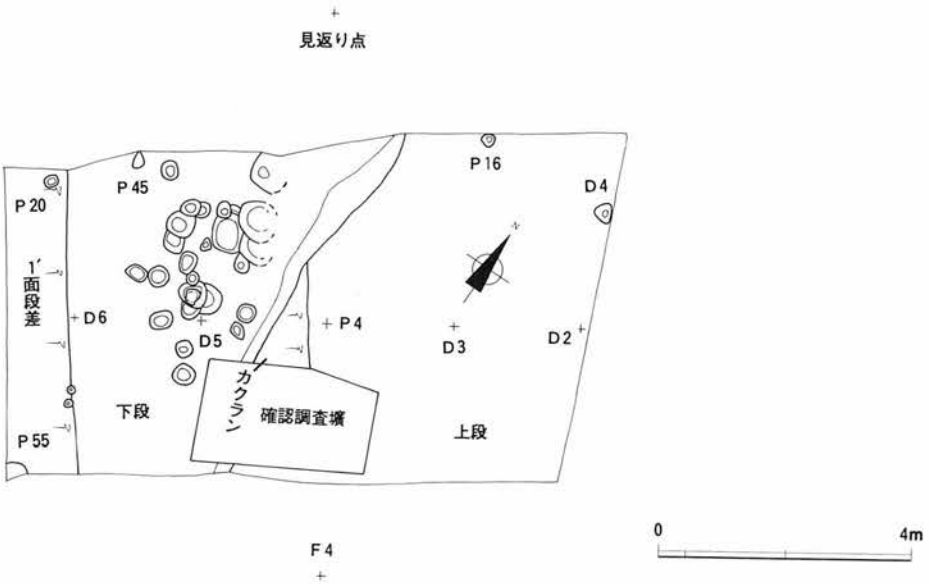


図14　第１面全測図

第２面の泥岩版築面を拡張した上段は、平坦な地業面を形成しているものの、そこから掘り込まれた遺構は２口の小さなピットのみであった。第２面にあった建物の継続は、認められなかった。第２面基壇下に残されていた炭層から想定できる火災によって失われたと思われる建物は、再建されなかったか、もしくは調査区の外へと移転したかもしれない。

他方、第１面では下段に多くのピットが発見されている。しかしながら、それらのピットはみな浅く、また明確な柱並びも認められない。一部のピットには、礎石に用いられた凝灰岩礫も残されていることもあり、何らかの建物を構成していたと想定できなくもない。

下段（図15）

多くのピットが発見されたが、明瞭な柱並びを確認することはできなかった。ピットの多くは測量方眼の５ラインに沿うように位置する他、１次調査区との境付近に浅い土壙状の窪みが発見された。ピットと土壙の多くは20cmに満たない浅いものであるが、ピット31の底面には不整形ながらも砂質凝灰岩の切石が礎石として設置されている。しかしながら、ほかに礎石や礎板を設置したピットもなく、またピット31と一定の柱間をもって位置するピットもないため、簡易な建物の能性は高いが、建物の形状と規模は不祥である。

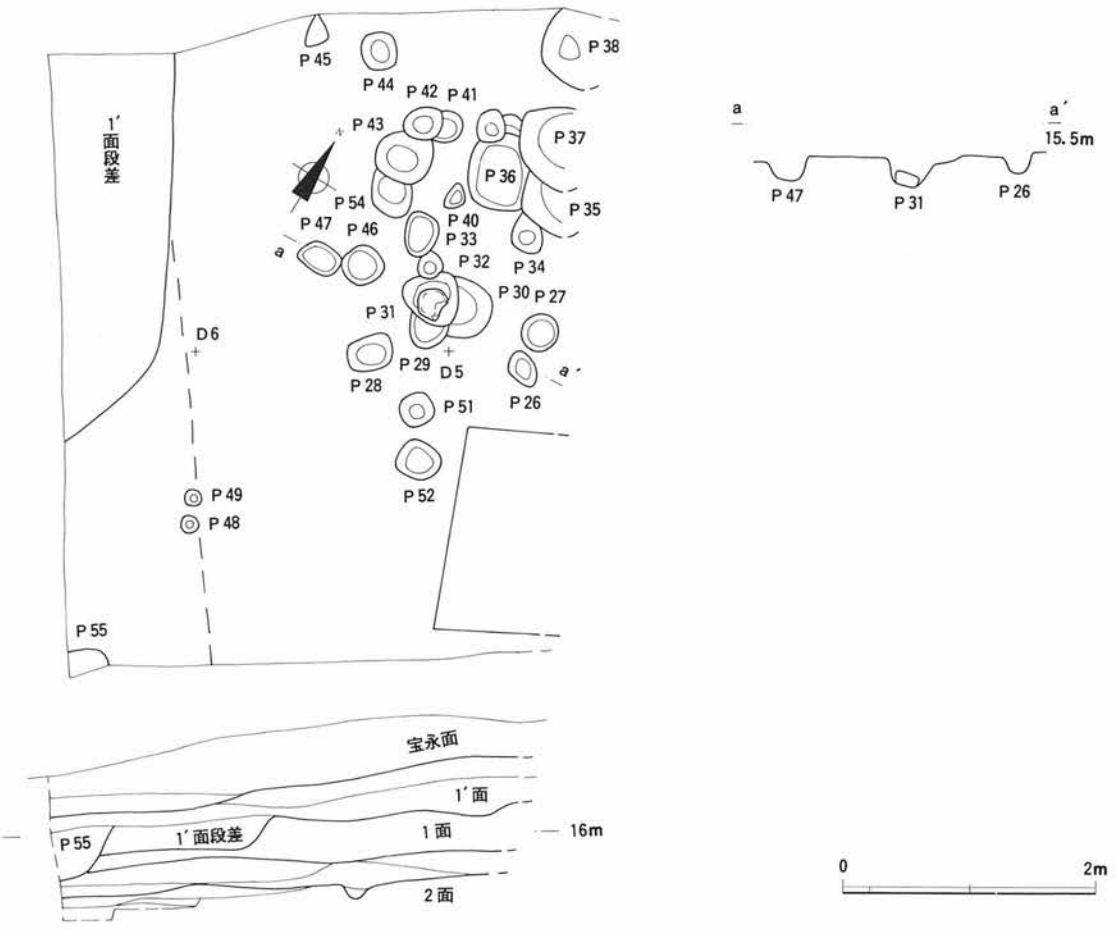


図15　第1面下段平面図

第1面その他の遺構出土遺物（図16）

図16—1～2は下段のピット36より出土したかわらけ。1は黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱砂質土。器壁は開きながら立ち上がり、口縁部付近より外反する。2は混入物少なめの淡橙色粉質精良土である。口径は小さく、器壁は薄く、内弯気味に立ち上がる、いわゆる「薄手丸深」型である。

図16—3は下段のピット54より出土したかわらけ。黒色微砂、雲母片を混じえる淡橙色弱砂質土。器壁は内弯気味に立ち上がり、口縁部付近で外反する。1と同形である。

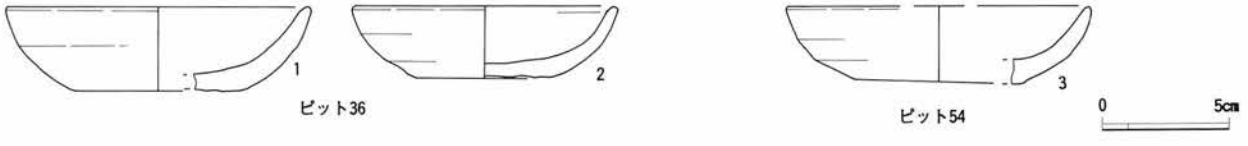


図16　第1面その他の遺構出土遺物

第1面下出土遺物（図17）

図17—1～16はかわらけ。1～6は弱砂質胎土、7～8は黒色微砂を多く混じえる粉質胎土で、器形はいずれも内底面が広めで、器壁は開きながら立ち上がる。9は粉質精良胎土で、口径は小さく、器壁は薄いが、埦型を呈しきれていない。10～16は精良胎土のものは無く、器壁は開きながら立ち上がり、口縁部付近で外反するものと内弯気味に立ち上がるものとに分類できよう。17は瓦質輪花型火鉢の口縁部片である。内外面ともに剥離が著しく、調整痕は不明。体部外面上位に菊花スタンプが押印される。

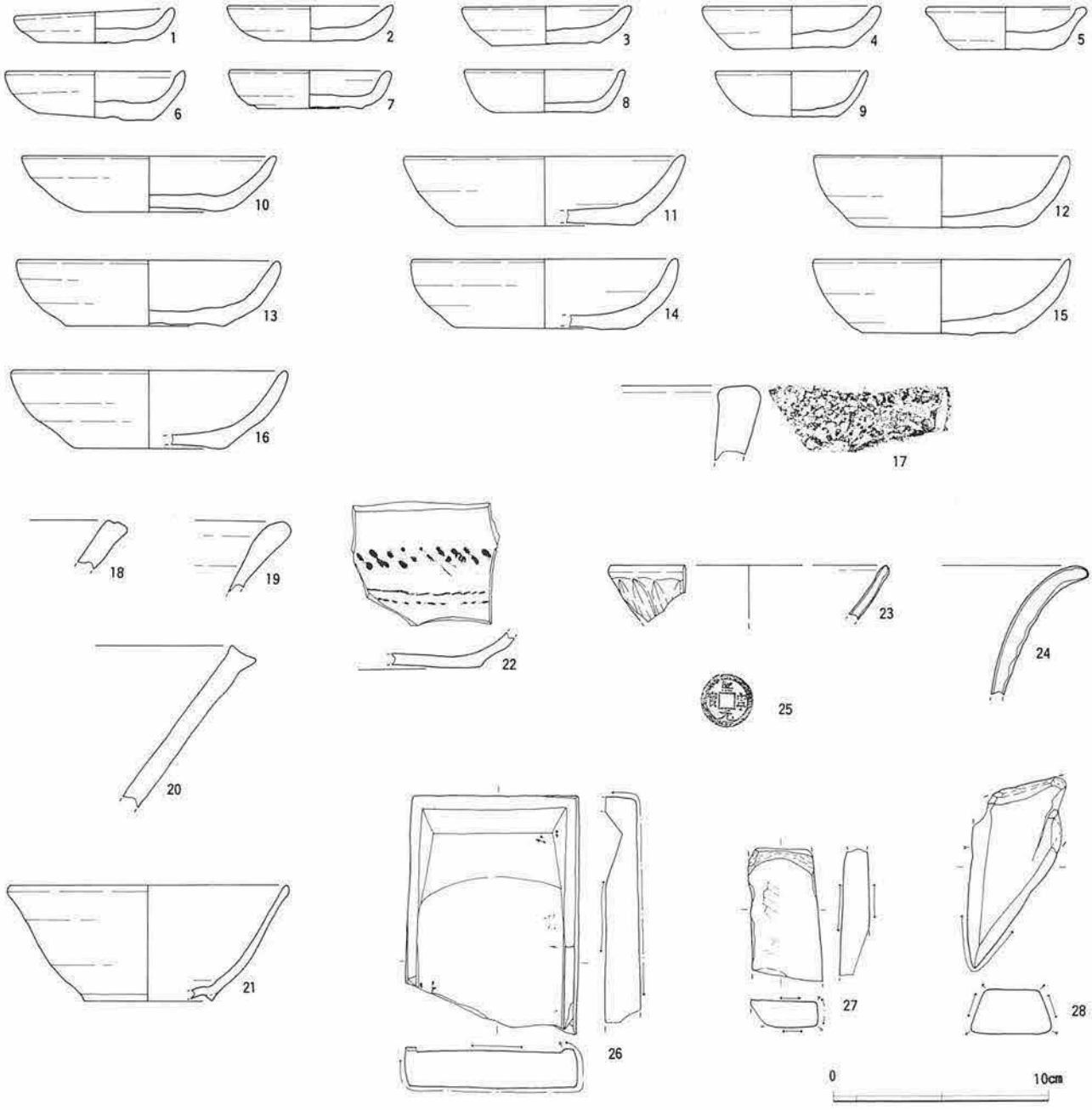


図17　第１面下出土遺物

18～19は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。18の口唇部には浅い沈線が残る。口縁部片のため、使用による摩滅痕は確認できなかった。20は常滑の鉢口縁部片である。口縁部付近は強い横方向のナデ調整、体部外面上位から下方は指頭押さえによる調整がなされる。小片のため、使用による摩滅痕は確認できなかった。21は明和期の東濃型山茶碗。使用による摩滅痕は見られない。

22は舶載黄釉盤の底部片である。外面は露胎。23は青磁蓮弁文碗。施釉は厚くなされ、蓮弁文はやや不明瞭である。24は青磁花瓶の口縁部片。灰味暗青緑色を呈する釉はとても厚く施釉される。

25は1068年初鋳の「熙寧元寶」である。

26は丹波・鳴滝山系産の硯。石材の質は悪いが、丁寧に成形される。わずかに墨痕が残る。27は鳴滝産の淡黄色を呈する流紋岩質細粒凝灰岩製の仕上げ砥。28は瓦質平瓦転用砥石。砥面はかなり使い込まれている。

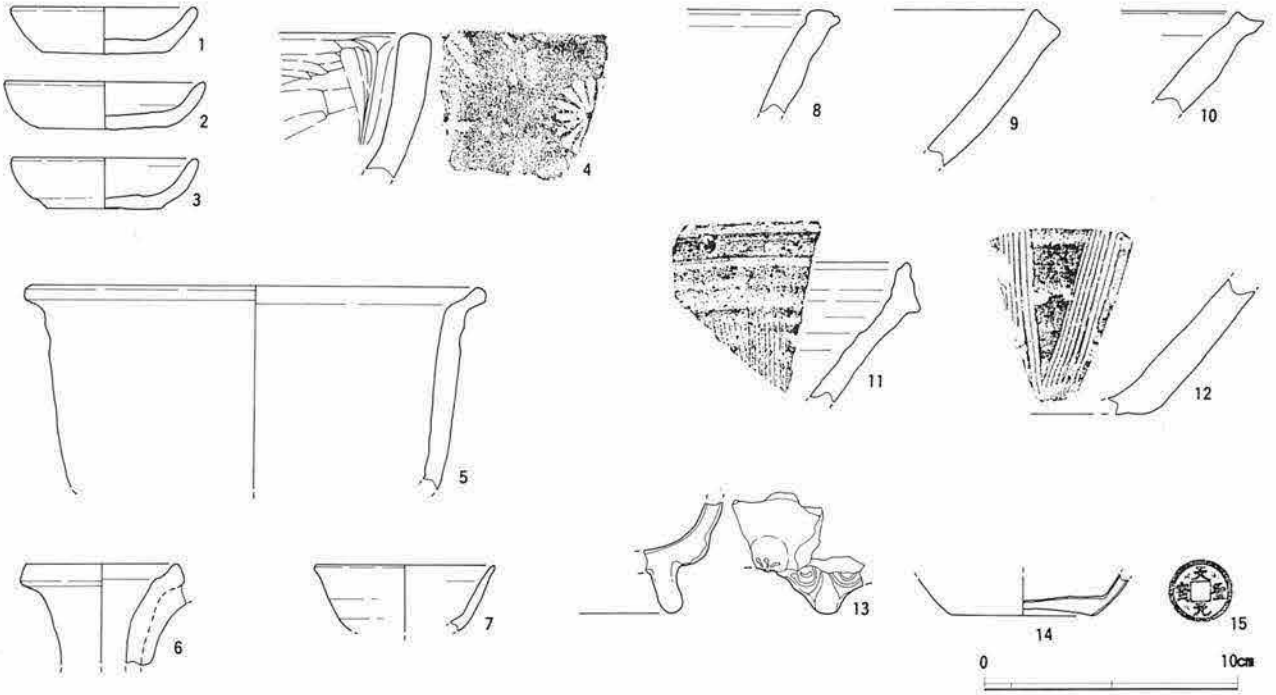


図18　第１面上出土遺物

第１面上出土遺物（図18）

図18―１～３はかわらけ。器壁は開きながら立ち上がるものと内弯気味に立ち上がるものが見られる。４は瓦質輪花型火鉢の口縁部片。体部外面は菊花スタンプが押印される。内面は横方向のミガキ痕が残る。５は古瀬戸中期の灰釉柄付片口。６は中期前半の瀬戸灰釉水注頸部。外面は強い二次焼成を受ける。７は瀬戸碗型入子。使用による摩滅痕などは小片のため確認できなかった。８～10は常滑鉢の口縁部片。いずれも口縁部下は横方向の強いナデで調整される。小片のため、使用による摩滅痕は確認できなかった。11は信楽系の擂鉢口縁部片。縁帯部には２本の浅い沈線が巡る。小片のため、使用による摩滅痕は確認できなかった。12は備前の擂鉢底部片。体部内面は使用による摩滅痕がわずかに残る。

13は青磁香炉の底～脚部片。体部外面には雷文が貼り付けられ、脚部は彫りによる渦巻き状の文様が施文される。灰味青緑色を呈する釉は脚部にも厚く施釉される。内外面ともに使用によるキズは見られない。14は白磁口兀皿。

15は1023年初鋳の「天聖元寶」。

第１'面（図15）

第１面下段を埋め立てて、調査区内の上段域を南西へと広げ、調査区の西端に下段との段差を作る生活面である。なお、第１'面の上段か下段への段差は、第１'面へに掘り下げ作業中に確認できず、生活面精査時に気づいたために土層図からの復元を行った。

この第１'面では、ピット45と55を確認したが、他にはなんら発見できなかった。この時期、調査区内の段差は今回新築される建物の南北軸にほぼ一致し、それはとりもなおさず現在の調査地および調査地周辺の地割に従う方向である。このことは、この第１'面の時期に現在見られるような谷戸地の造成開発が行われたことを示しており、第２面から第１面における土地利用とは異なっていたことを示唆している。さらに、第２面での基壇建物を土地利用変遷の視点に置けば、第１面での不明瞭な建物しか残されていない第１面時よりすでに土地利用に変化が起きていたとも言えよう。

第４節　近世面（図19、図版３）

第１'面上に丘陵地の侵食風化土が堆積した後、近世の陶磁器が数多く出土する粘性の弱い茶褐色土が厚さ20cmほどにわたって、調査区の西半分に見られる。畠作の耕作土と思われるこの土層は、調査区の東半分にはなく、調査地内が耕作地と耕作地以外に分別されていたと考えられた。

調査区の東半分には泥岩礫が乱雑に投げ入れられたように堆積し、地業面と言えるものではなかったため、第１次調査においては出土遺物を層位別に分類しながら、より下層の第１面まで掘り下げを行ってしまった。そのため、調査区東半分における近世面は平面的に確認したものではない。しかしながら、掘り下げ中においてなんら遺構覆土と思われる土の堆積を確認していない。

他方、調査区の西側では、粘性の弱い茶褐色土上に黒色火山灰の厚い堆積が認められた。面の精査を続けると、この厚い火山灰堆積は遺構内の覆土であり、灰の質感から江戸宝永年間の富士山火山灰と判明した。

溝（図20）

調査区西半分に確認された宝永火山灰が厚く堆積した遺構は、すべて溝であった。発見された溝は３条あり、いずれも調査区の南北軸よりやや西に傾いた南北方向に長軸を持つ。また３条ともに調査区の北外にまで広がっているが、うち２条については大方の規模の把握ができた。

溝１

長軸の３ｍ50cmをを確認し、20～30cmほどが調査区北外まで延びると思われる。最大幅は73cm、深さ48cm、底部に丸味を持つ断面箱形を呈する。長軸の南北軸は、Ｎ－25°－Ｗ。

溝２

長軸の３ｍ85cmをを確認し、10cmほどが調査区北外まで延びると思われる。最大幅は103cm、深さ32cm、断面箱形を呈する。長軸の南北軸は、Ｎ－20°－Ｗ。

溝３

長軸の４ｍ50cmをを確認し、調査区北外１ｍ程に位置するゴミ穴底でも溝３の延長部を確認できいる。全長は不明である。最大幅は125cm、深さ58cm、断面箱形を呈する。長軸の南北軸は、Ｎ－21°－Ｗ。

３条の溝の覆土は、いずれも下層に火山灰と火山礫を含み、上層ほど火山灰の比率が高くなる。また、

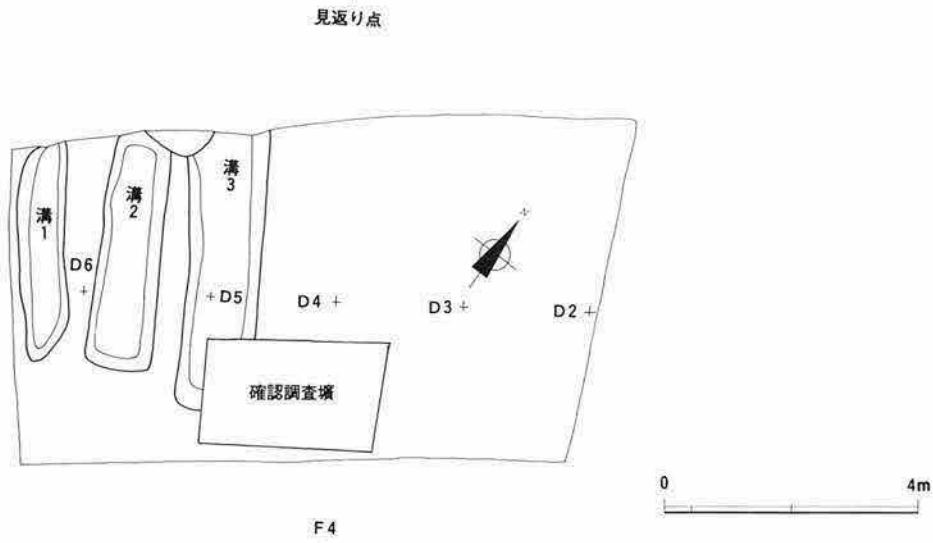
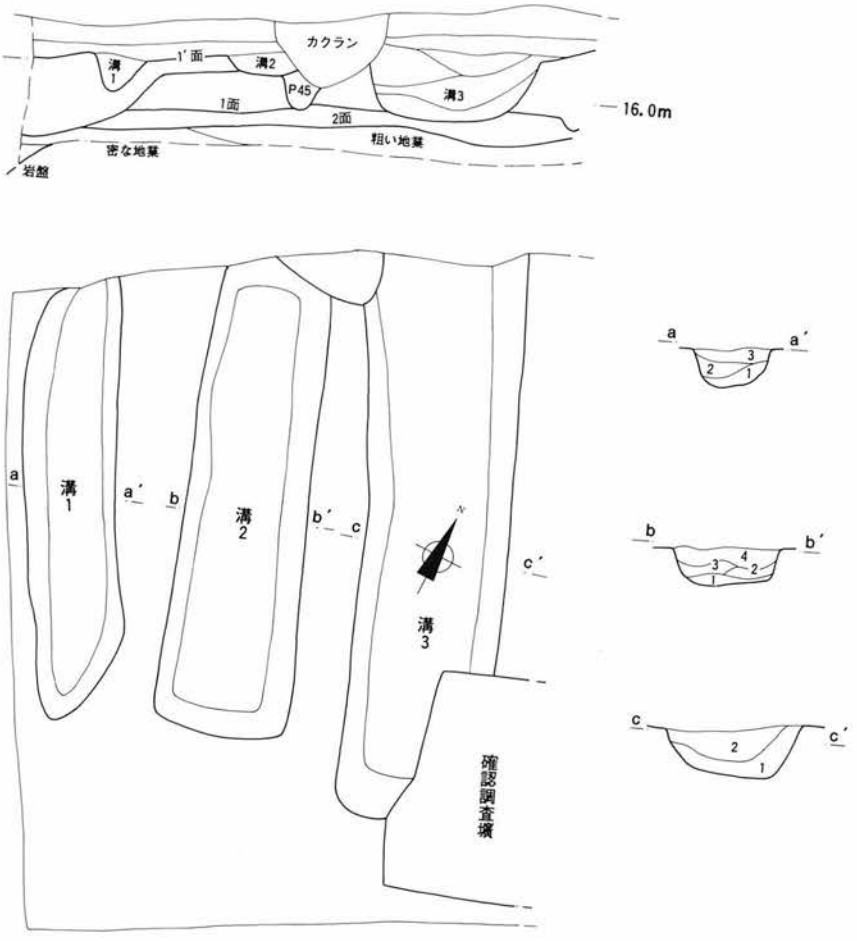


図19　近世（宝永）面全測図



土層注記

溝 1
1. 黒色粒火山灰
2. 黒色粒火山灰に茶色小火山煤を混じえる。
3. 黒色粒火山灰に茶色弱粘質の耕作土を混じえる。

溝 2
1. 茶色小火山煤
2. 黒色粒火山灰に茶色小火山煤を混じえる。
3. 黒色粒火山灰
4. 黒色粒火山灰に茶色弱粘質の耕作土を混じえる。

溝 3
1. 黒色粒火山灰に茶色小火山煤を混じえる。
2. 黒色粒火山灰に茶色弱粘質の耕作土を混じえる。

図20　近世（宝永）面溝１・２・３

覆土中には陶磁器などの人為物や周辺丘陵部を形成する泥岩礫をほとんど含まないため、宝永山噴火後に遺跡地周辺に降り積もった火山灰を溝状に掘り込んだ穴にまとめて片づけたものと考えられる。調査区東側に全く火山灰を認めることができなかったのは、こうした火山灰の片づけ行為によるものであった。調査区西側に広がる畠地の一角に火山灰を片づける一方、傾斜面の上方であり、また耕作土である茶褐色土の代わりに泥岩礫を詰め込み火山灰が片づけられた調査区東側には作業小屋などの施設があったのではないかと思われる。

近世（宝永）面下出土遺物（図21）

調査区西側で確認された、宝永四年（1703）に爆発した富士山の火山灰が薄く乗った近世面の下層より出土した遺物を図示した。鎌倉市街地遺跡では数少ない、いわゆる「宝永の火山灰」でパックされた資料である。

図21―１～７はかわらけ。１は器壁が底部厚に対して薄く、内弯気味に立ち上がり、口縁部付近で外反する。２～７のかわらけよりも年代的に遡るものと思われる。２～７は器壁はおおむね厚く、大きく開きながら立ち上がる。内底面のナデ調整はなされない。８は瓦質火鉢。器壁は開きながら立ち上がる

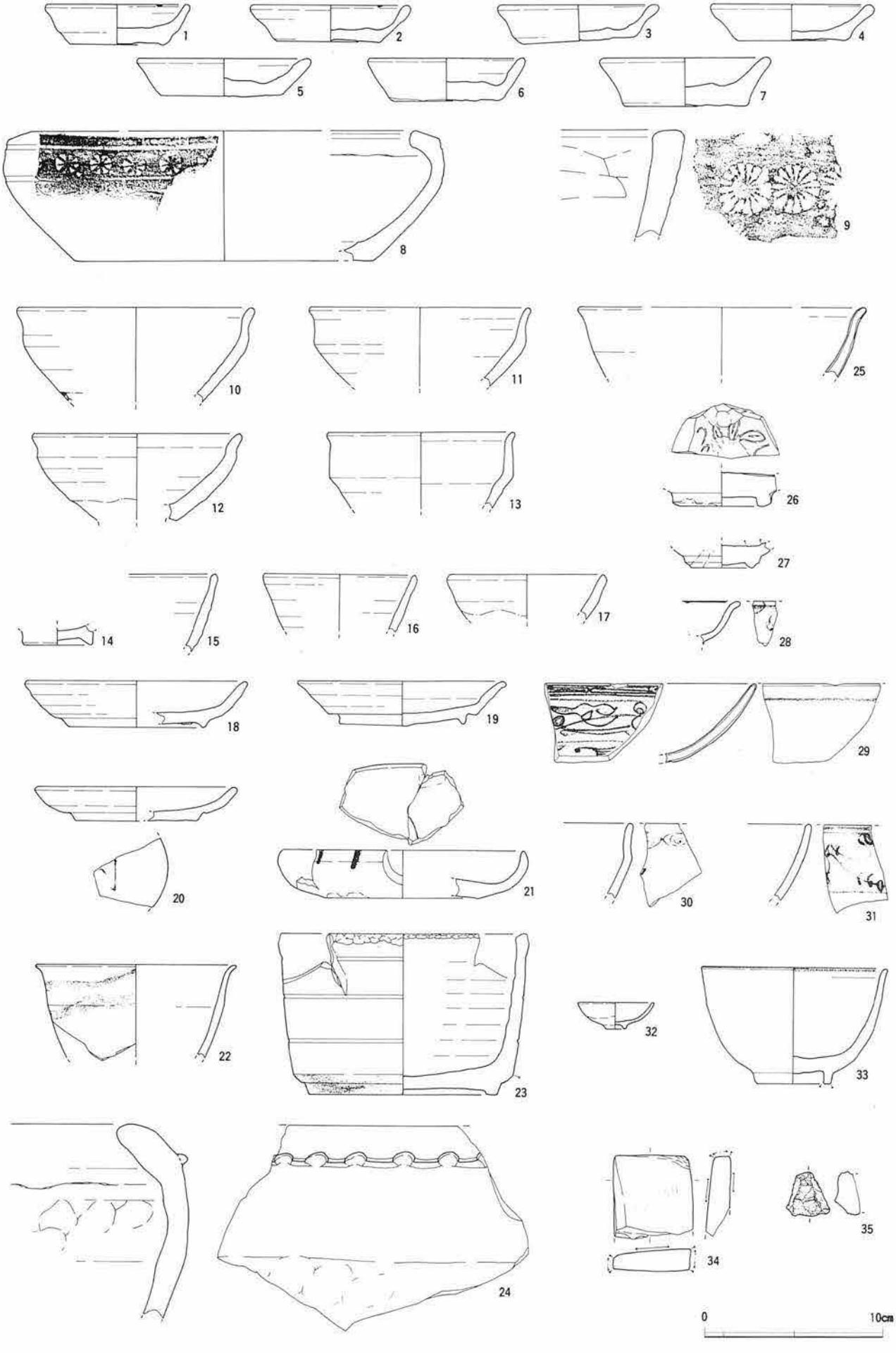


図21　近世（宝永）面下出土遺物

が、口縁部付近で大きく内側に折れ込む。外面はヘラミガキにより黒色を呈するが、雑である。体部上位にはかなり簡略化された菊花スタンプが押印される。内面は指頭による横方向のナデ調整がなされる。9は瓦質輪花型火鉢の口縁部片である。外面から内面上位にかけては横方向のヘラミガキ痕が明瞭に残り、外面上位には菊花スタンプが押印される。内面上位より下方は指頭による横方向のナデで調整される。

10～14は17世紀中頃～18世紀初頭までの瀬戸天目茶碗。10～12と14は鉄釉、13は長石釉が施釉される。10の体部外面下位付近の露胎部には黒色漆が付着する。11と13は内外面ともに、14は内底面に二次焼成を受ける。15は美濃の長石釉碗の口縁部片。16～17は瀬戸か美濃の鉄釉小碗。16の外面はわずかに二次焼成を受ける。18は瀬戸か美濃の灰釉皿。釉は内外面ともに濃黄色、内底面は濃緑色を呈する。19は17世紀中頃の美濃灰釉皿。20は17世紀中頃～18世紀前半にかけての美濃長石釉丸皿。底裏には判読不能の墨書が見られる。21は1590～1610年代の肥前絵唐津変形皿。体部外面最下位から下方は露胎。内底面と口縁部周辺に線文様が手描きされる。22は17世紀第２～３四半期の肥前内野山銅緑釉流し掛け碗。胎土は乳白色弱粉質精良土で、器壁は薄く、口縁部は大きく外反する。銅緑釉はやや白濁気味の緑青色を呈する。鎌倉市街地遺跡でもよく出土する銅緑釉と透明釉の掛け分け皿よりも年代的に先行する製品である。23は瀬戸か美濃の灰釉香炉か火入れ。口縁部周辺は打痕が残る。釉は内外面ともに強い二次焼成を受け白濁する。体部外面最下位から底裏にかけては煤が付着する。24は常滑甕の口縁部片。口縁部は大きく内側に倒れ込む。体部外面上位付近は丁寧な横方向のナデ、上位より下方は横方向のナデの後、指頭押さえ、体部内面は横方向のナデと指頭押さえにより調整される。口縁部付近には凸帯が貼り付けられ、指頭押圧によりヒダ状の施文がなされる。

25～26は青磁碗。25の口縁部は大きく外反する。施釉は厚い。26の見込みには牡丹文が押印される。釉は内外面ともに強い二次焼成を受け白濁、剥落が目立つ。27は15～16世紀代の白磁皿。高台は雑な削り出しによる。内底面は蛇ノ目状に釉ハギされる。内底面全体にかすかに紅が付着する。28は16世紀代の景徳鎮窯系染付皿。透明釉は鉄発色し全体に赤みを帯びる。染付はくすんだ藍色を呈し、外面は不明文、内面は輪文が手描きされる。29は1590～1630年代の漳州窯染付皿。黒っぽい素地を隠すため化粧掛けの上に染付文様を描いているのが断面から観察できる。透明釉は厚く、雑に施釉される。内面はわずかに二次焼成を受け白濁気味。30・31は1610～40年代の肥前染付碗。30は体部外面中位に強い稜を持ち、外反する天目碗のような形態を呈する。外面は強い二次焼成を受け、透明釉は白濁する。破損した状態で被火した可能性がある。31は30と同様に外面のみ強い二次焼成を受け、透明釉は白濁する。破損した状態で被火した可能性がある。32は17世紀後半～18世紀前半の肥前白磁ミニチュア紅皿か猪口。成形は型押しによる。33は1640～50年代の肥前白磁碗。高台畳付は工具を用いて雑に釉を剥いでいる様子が見てとれる。口縁部には暗茶色を呈する口錆が巡る。

34は鳴滝菖蒲ヶ谷産の淡紅色流紋岩質細粒凝灰岩製の仕上げ砥。表面下側と左側は著しく摩滅する。35はチャート製の火打石。表面にのみ打ち痕が多く残る。

表土層出土遺物（図22）

図22―１～４はかわらけ。１は内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がる。２～４は黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱粉質土。２と４は背高で、器壁は内弯気味に立ち上がる側面観椀型を呈する。３は器壁が厚く、口縁部付近で大きく外反する。また、外底面の糸切り痕を指頭によりナデ消している。５は白かわらけの口縁部片。器壁は薄く成形され、口縁部付近はとても丁寧に調整されている。６はかわらけ質の浅鉢型火鉢の口縁部片。遺存部は内外面ともに横方向のナデで丁寧に調整される。内面上位付

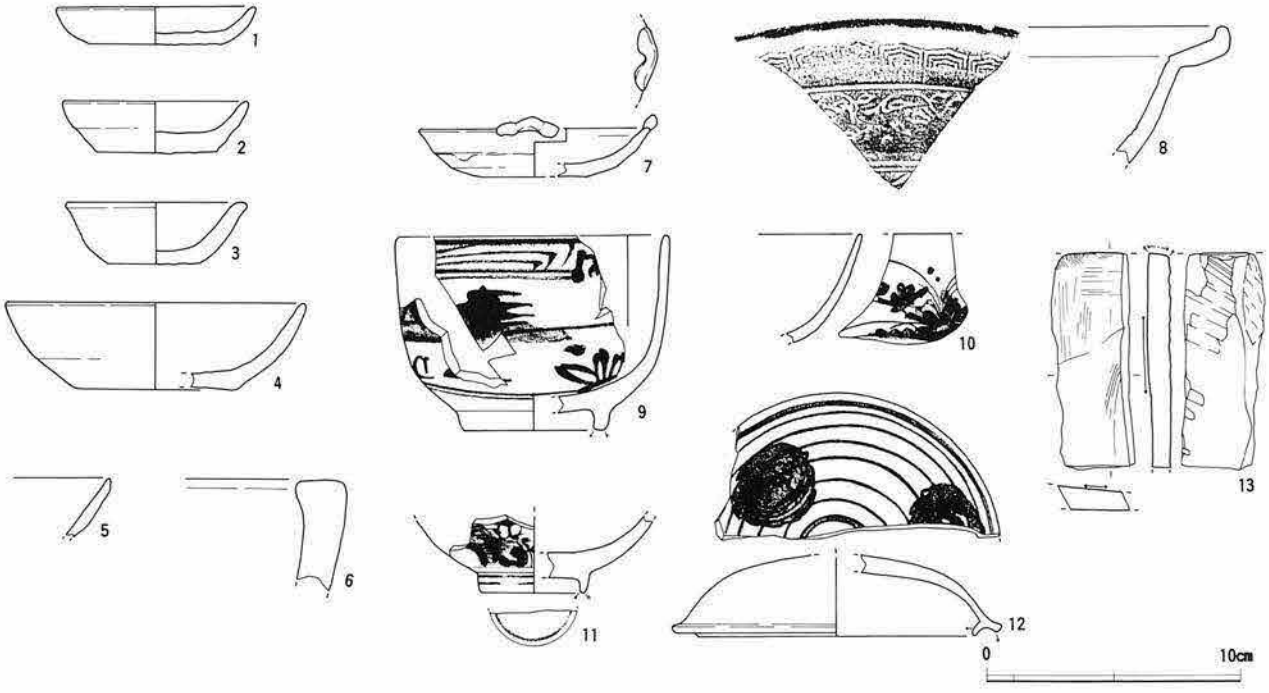


図22　表土層出土遺物

近はわずかに煤が付着する。

7は18世紀初頭前後の瀬戸飴釉耳付き灯明皿。耳はつぶれた感じで貼り付けられる。釉は内外面ともに弱い二次焼成を受け白濁気味である。8は17世紀後半～18世紀前半の肥前唐津三島手皿。象嵌はかなり浅くなっている。

9は1610～40年代の肥前染付碗。手描きの染付文様はラフで、滲みが見られる。外面は一部、軽い二次焼成を受け透明釉はわずかに白濁する。10は1680年～18世紀初頭の肥前有田染付碗の口縁部片である。素地はやや粘質味を帯び、緻密である。器壁はとても薄く成形され、手描きによる施文も丁寧に描かれる。また、描かれた草花文には手描きとともに「墨弾き」技法が使われているが、鮮明ではないものの、たいへん細い線で表現されており、素地の水簸や成形とともに肥前中心窯の技術の高さが窺える。使用によるキズはごくわずかである。11は18世紀前半の肥前染付碗。施文はかなりラフになっている。内底面中心付近は使用によるキズが著しく残る。12は1690年～18世紀初めの肥前染付蓋物の蓋。コンニャク印判による不明瞭な鳳凰文を押印の後、手描きによる線文で施文がなされる。

13は鳴滝向田産の黄土色流紋岩質細粒凝灰岩製の仕上げ砥。表面上端は縦方向の細かい摩滅痕、上側は縦横方向、下側は放射線状の摩滅痕が残る。右側面と裏面にはノミ状工具痕が残ることから再成形の可能性がある。

表1　遺物観察表（1）

図版	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
6	1	試掘	長胴甕	28.40	／	／	胎土は多めの黒色砂粒・赤褐色砂粒、白色砂粒を混じえる淡橙色土
6	2	試掘	長胴甕	25.60	／	／	胎土は黒色砂粒、雲母を多く混じえる橙色土
6	3	試掘	相模型坏	／	／	／	胎土は白色砂粒をわずかに混じえる淡橙色粉質土
6	4	試掘	かわらけ	6.80	3.80	2.20	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙～橙色弱粉質土
6	5	試掘	かわらけ	11.80	8.20	3.20	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒、白針を多く混じえる暗橙色弱砂質土
6	6	試掘	銭	／	／	／	「咸平元寳」
6	7	試掘	銭	／	／	／	「治平元寳」
9	1	2面下トレンチ	かわらけ	12.20	7.80	3.30	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
11	1	2面建物ピット12	かわらけ	7.40	5.40	1.70	胎土はやや多めの黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
11	2	2面建物ピット12	かわらけ	13.60	9.00	3.60	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
11	3	2面建物ピット12	かわらけ	13.80	8.20	3.65	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土
11	4	2面建物ピット12	かわらけ	12.40	7.40	3.45	胎土はやや多めの黒色微砂、土丹粒、雲母を混じえる淡茶色弱粉質土
11	5	2面建物ピット12	かわらけ	11.60	5.60	3.10	胎土は黒色微砂、雲母をわずかに混じえる橙色弱粉質精良土
12	1	2面ピット6	かわらけ	7.40	3.90	2.30	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
12	2	2面ピット57	かわらけ	7.40	5.10	1.70	胎土は雲母、黒色微砂を混じえる淡橙色弱砂質土
13	1	2面上	かわらけ	7.80	4.80	1.70	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
13	2	2面上	かわらけ	7.60	4.20	2.10	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
16	1	1面ピット36	かわらけ	12.00	6.60	3.30	胎土は多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
16	2	1面ピット36	かわらけ	10.40	5.60	2.85	胎土は黒色微砂をわずかに混じえる淡橙色弱粉質精良土
16	3	1面ピット54	かわらけ	(12.0)	(6.80)	3.00	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
17	1	1面下	かわらけ	7.30	5.00	1.40	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡橙色弱砂質土
17	2	1面下	かわらけ	7.60	4.40	1.65	胎土は黒色微砂、白色微砂、白針を混じえる淡橙～橙色弱砂質土
17	3	1面下	かわらけ	7.80	5.10	1.80	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる明淡茶色弱砂質土
17	4	1面下	かわらけ	8.20	5.20	2.00	胎土は黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
17	5	1面下	かわらけ	7.30	4.50	2.00	胎土は多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
17	6	1面下	かわらけ	8.20	5.30	2.15	胎土は黒色微砂、土丹粒、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
17	7	1面下	かわらけ	7.30	4.80	1.70	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
17	8	1面下	かわらけ	7.40	4.70	2.00	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
17	9	1面下	かわらけ	7.00	4.00	2.10	胎土は黒色微砂、雲母をわずかに混じえる淡橙色弱粉質精良土
17	10	1面下	かわらけ	11.70	6.30	2.60	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
17	11	1面下	かわらけ	13.00	8.50	3.25	胎土は多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱砂質土

表1　遺物観察表（2）

図版	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
17	12	1面下	かわらけ	11.80	7.60	3.35	胎土はやや多めの黒色微砂、土丹粒、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
17	13	1面下	かわらけ	12.20	7.40	3.10	胎土は黒色微砂、白針、雲母を混じえる淡橙～橙色弱砂質土
17	14	1面下	かわらけ	12.20	8.50	3.25	胎土は黒色微砂、土丹粒、雲母、白針を混じえる淡茶色弱砂質土
17	15	1面下	かわらけ	12.00	7.20	3.40	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱粉質土
17	16	1面下	かわらけ	12.60	7.00	3.60	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
17	17	1面下	瓦質輪花型火鉢	／	／	／	胎土は黒色微砂、小石粒を混じえる白灰色土
17	18	1面下	山茶碗窯系こね鉢	／	／	／	胎土は黒色微砂、白色微粒、白色微石を混じえる灰色土
17	19	1面下	山茶碗窯系こね鉢	／	／	／	胎土は黒色微砂、白色微砂、白色細石を混じえる灰色土
17	20	1面下	常滑鉢	／	／	／	胎土は白色微粒、白色細石を多く混じえる黒灰色土　器表は暗灰橙色
17	21	1面下	山茶碗	13.20	6.10	5.40	東濃型　胎土は灰色強粘質緻密土
17	22	1面下	舶載黄釉盤	／	／	／	胎土はやや多めの黒色微砂、白色微粒を混じえる灰色～淡黄色粘質土　釉は淡黄土色　淡茶～濃茶色の鉄絵
17	23	1面下	青磁蓮弁文碗	13.20	／	／	素地は黒色微砂を混じえる灰色粘質緻密土　釉は灰味暗青緑色
17	24	1面下	青磁花瓶	／	／	／	素地は黒色微砂を混じえる灰白色粘質土　釉は灰味暗青緑色
17	25	1面下	銭				「熙寧元寶」
17	26	1面下	硯	遺存長11.0幅8.0厚1.7			丹波・鳴滝山系産
17	27	1面下	鳴滝仕上砥	遺存長6.1幅3.3厚1.3			淡黄色流紋岩質細粒凝灰岩
17	28	1面下	瓦質平瓦転用砥石	全長8.0幅4.2厚2.0			胎土は黒色微砂、白色微粒、雲母を混じえる灰色土
18	1	1面上	かわらけ	7.20	4.90	1.95	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
18	2	1面上	かわらけ	7.80	5.10	1.95	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡茶色弱粉質土
18	3	1面上	かわらけ	7.20	4.60	2.00	胎土は黒色微砂、雲母、土丹粒を混じえる淡橙色弱砂質土
18	4	1面上	瓦質輪花型火鉢	／	／	／	胎土は雲母、黒色微砂、白色微粒を混じえる淡橙色土
18	5	1面上	瀬戸灰釉柄付片口	17.70	／	／	胎土は白色微粒を混じえる黄味灰色弱粘質土　釉は黄味淡緑色
18	6	1面上	瀬戸灰釉水注	6.00	／	／	胎土は白色微粒をわずかに混じえる黄味灰色弱粘質土　釉は黄緑色　二次焼成
18	7	1面上	瀬戸碗型入子	7.20	／	／	胎土は黒色微粒をわずかに混じえる灰色弱粘質土
18	8	1面上	常滑鉢	／	／	／	胎土は白色微粒、白色微石をやや多く混じえる淡橙色土　器表は黄味茶色
18	9	1面上	常滑鉢	／	／	／	胎土は白色微粒、白色小石粒をやや多く混じえる暗灰～橙色土　器表は暗灰～橙色
18	10	1面上	常滑鉢	／	／	／	胎土は白色微粒、白色微石、小石粒をやや多く混じえる黒灰色土　器表は茶褐色
18	11	1面上	信楽系擂鉢	／	／	／	胎土は白色微粒、白色微石をやや多く混じえる淡茶色弱粘質土
18	12	1面上	備前擂鉢	／	／	／	胎土は白色微粒、白色細石を混じえる暗灰～暗茶色粘質土
18	13	1面上	青磁香炉	／	／	／	素地は白色粒を混じえる白色強粘質緻密土　釉は灰味青緑色
18	14	1面上	白磁口兀皿	／	5.60	／	素地は淡紅～灰白色弱粘質土
18	15	1面上	銭				「天聖元寶」
21	1	近世面下	かわらけ	8.00	5.30	2.30	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土　煤付着
21	2	近世面下	かわらけ	8.70	5.70	2.05	胎土は雲母、黒色微砂を混じえる暗淡茶色弱粉質土　煤付着
21	3	近世面下	かわらけ	8.90	6.40	2.00	胎土は雲母、白針を混じえる暗橙～赤褐色弱粉質土
21	4	近世面下	かわらけ	8.90	6.00	2.10	胎土は雲母、白色微砂、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
21	5	近世面下	かわらけ	9.60	6.80	2.10	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる暗淡橙色弱粉質土

表1　遺物観察表（3）

図版	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
21	6	近世面下	かわらけ	8.60	6.00	2.40	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙～橙色弱粉質土
21	7	近世面下	かわらけ	9.20	6.90	2.70	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
21	8	近世面下	瓦質火鉢	21.80	17.00	7.30	胎土は黒色微砂を混じえる淡紅～明灰色土
21	9	近世面下	瓦質輪花型火鉢	／	／	／	胎土は黒色微砂、雲母、白色微粒を混じえる淡紅色土
21	10	近世面下	瀬戸天目茶碗	(13.1)	／	／	胎土は白色小石粒を多く混じえる黄灰色弱粉質土　釉は暗茶色　煤付着
21	11	近世面下	瀬戸天目茶碗	(12.3)	／	／	胎土は淡黄色弱粉質緻密土　釉は茶～黒褐色　二次焼成
21	12	近世面下	瀬戸天目茶碗	11.70	／	／	胎土は黄味灰白色弱粉質緻密土　釉は明茶～黒褐色
21	13	近世面下	瀬戸天目茶碗	10.50	／	／	胎土は白色微粒を混じえる明灰色土　釉は緑味乳白色　二次焼成
21	14	近世面下	瀬戸天目茶碗	／	3.90	／	胎土は明灰色弱粉質緻密土　釉は黒褐色
21	15	近世面下	美濃長石釉碗	／	／	／	胎土は白色小石粒を混じえる黄味灰色土　釉は乳白色
21	16	近世面下	瀬戸か美濃鉄釉小碗	8.50	／	／	胎土は白色微粒、白色小石粒を混じえる明灰色弱粉質土　釉は暗茶色不透明　二次焼成
21	17	近世面下	瀬戸か美濃鉄釉小碗	8.65	／	／	胎土は白色微粒をわずかに混じえる明灰色弱粉質土　釉は暗茶色不透明
21	18	近世面下	瀬戸か美濃灰釉皿	12.40	7.80	2.60	胎土は黒色微砂をわずかに混じえる淡黄白色弱粘質土　釉は淡黄色透明
21	19	近世面下	美濃灰釉皿	11.60	7.20	2.50	胎土は白色微粒を混じえる明灰色粘質土　釉は淡灰緑色透明
21	20	近世面下	美濃長石釉丸皿	11.00	6.90	1.90	胎土は白色小石粒を多く混じえる黄味灰色土　釉は乳白色　判読不能墨書
21	21	近世面下	肥前絵唐津変形皿	13.60	8.60	2.70	胎土は黒色微砂、白色微粒をわずかに混じえる灰色～淡茶色粘質土　釉は灰色
21	22	近世面下	肥前内野山銅緑釉流し掛け碗	11.20	／	／	胎土は乳白色弱粉質土　釉は明緑青色
21	23	近世面下	瀬戸か美濃香炉か火入れ	／	8.00	／	胎土は黒色微砂を混じえる淡黄色弱粘質土　釉は淡黄色
21	24	近世面下	常滑甕	／	／	／	胎土は白色微粒、白色微石、灰色小石粒を混じえる橙色土　器表は茶褐色
21	25	近世面下	青磁碗	(16.0)	／	／	素地は黒色微粒をわずかに混じえる灰白色粘質土　釉は灰緑色
21	26	近世面下	青磁碗	／	5.60	／	素地は黒色微粒を混じえる灰色粘質土　釉は灰味暗青緑色
21	27	近世面下	白磁皿	／	4.20	／	素地は乳白色粘質土　釉は乳白色不透明
21	28	近世面下	景徳鎮窯系染付皿	／	／	／	素地は灰白色粘質土　染付は藍色　文様は小片のため不明
21	29	近世面下	漳州窯染付皿	／	／	／	素地は黒色微粒を多く混じえる淡橙～橙色粘質土　染付は明灰青色　文様は手描き雷文帯、唐草文
21	30	近世面下	肥前染付碗	／	／	／	素地は白色弱粘質土　文様は灰青色の手描き渦巻き文　二次焼成
21	31	近世面下	肥前染付碗	／	／	／	素地は白色粒を混じえる白色弱粘質土　文様は灰青色の手描き花唐草文　二次焼成
21	32	近世面下	肥前白磁ミニチュア紅皿か猪口	4.40	1.20	1.50	素地は白色粘質土　釉はやや青味を帯びた透明
21	33	近世面下	肥前白磁碗	10.40	4.20	6.50	素地は白色粘質土　釉はやや青味を帯びた白色不透明　口銹
21	34	近世面下	鳴滝菖蒲ケ谷仕上砥	遺存長4.7幅4.4厚1.2			淡紅色流紋岩質細粒凝灰岩
21	35	近世面下	火打ち石	長2.5幅2.3遺存厚0.9			チャート製
22	1	表土層	かわらけ	7.80	5.20	1.50	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
22	2	表土層	かわらけ	7.20	4.80	2.10	胎土は雲母、やや多めの黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
22	3	表土層	かわらけ	7.10	3.70	2.50	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土

表1　遺物観察表（4）

図版	No.	出土地	種別	口径	底径	器高	備考
22	4	表土層	かわらけ	11.80	6.20	3.40	胎土はやや多めの黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土
22	5	表土層	白かわらけ	／	／	／	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡黄白色弱粉質土
22	6	表土層	かわらけ質 浅鉢型火鉢	／	／	／	胎土は雲母、黒色微砂を混じえる淡橙色土　内面に煤付着
22	7	表土層	瀬戸飴釉 耳付き灯明皿	9.00	4.20	1.90	胎土は乳白色弱粉質土　釉は黄味茶色
22	8	表土層	肥前唐津 三島手皿	／	／	／	胎土は暗茶褐色粘質土
22	9	表土層	肥前染付碗	10.70	5.60	7.70	素地は白色弱粘質土　文様は淡灰青～濃灰青色の手描き帆掛け舟、山水、雷文帯
22	10	表土層	肥前有田 染付碗	／		／	素地は白色弱粘質土　文様は淡灰青～濃灰青色の手描き植物文　墨弾き
22	11	表土層	肥前染付碗	／	4.10	／	素地は白色弱粘質土　文様は淡灰青～濃灰青色の手描き山水植物文
22	12	表土層	肥前染付 蓋物の蓋	12.80	／	／	素地は白色粘質土　文様は淡青～青色の手描き線文にコンニャク印判
22	13	表土層	鳴滝向田 仕上砥	遺存長8.5幅2.5厚0.9			黄土色流紋岩質細粒凝灰岩

第４章　調査成果のまとめ

今回の調査で発見された遺構は、谷戸内傾斜面を主に泥岩礫を用いてひな壇状に造成した第２面と、そのひな壇上段をより西方へと拡張していく第１面と第１'面、それに耕作地に宝永火山灰を片づけた近世面であった。

第２面における泥岩地業造成では、周囲の丘陵を削り取って行われたと思われるが、こうした丘陵部の切り崩しと、土の持ち出しには何らかの権力が介在したはずである。泥岩版築面上に発見された不明瞭な基壇建物の存在は、調査地が寺院関連施設の一画であったことを窺わせるが、この建物が寺院関連施設だったことを積極的に示唆する遺物は出土していない。屋敷跡の一画であったかもしれない。

第２面より出土した遺物はごくわずかであったが、その中でかわらけが多くを占めている。版築上に発見された建物のピットから出土したかわらけにはいわゆる「薄手丸深」型が混じっていること、そして図示できなかった細破片を見渡しても手づくねかわらけは全く出土しておらず、口径が大、中、小に分化していたことから、これらの施設は13世紀後半以降に建てられたものと思われる。

第１面に始まり、第１'面において明確化する土地利用の変化は、調査地が第２面とは異なる性格を持ち始めたことを示している。第１面のピットから出土したかわらけは、細破片を加えてみても第２面の様相と大きく変わらないことから、第２面との年代幅は大きくないものと思われる。そのため、かなり早い時期から調査地の性格が変化したと考えられる。

谷戸内の土地利用の変化は第１'面において明瞭だが、この時期以降、調査地には耕作を生活の中心にした空間が広がり、近世から調査直前の時期まで畠地として利用された。

近世面下として図示した遺物は前述の通り、宝永の火山灰によりパックされたものである。細破片も含め、出土した遺物のすべてが18世紀初頭までに収まる製品であった。この中には瀬戸窯の天目茶碗が多く出土していることや鎌倉市街地遺跡では出土数がごくわずかである絵唐津変形皿も混じっていること、16世紀～18世紀初頭の中国、あるいは肥前の染付製品が多いことなどを考え合わせると、第１面以降建物は見られなくなるが、鎌倉幕府崩壊後もある程度の権力を保持し続けた権門勢家の領域であったことを示唆している。

当調査地にある谷戸に、廃寺の存在はこれまで推定されていないが、周辺には南に多宝寺、北に勝因寺、東に智岸寺などががつて存在していたと考えられている。遺跡地のある谷戸には「やぐら」が数多く残されており、調査地がいずれかの寺域であった可能性も高い。ただし、今回発見の基壇建物そのものが不明瞭であることもあり、ここでは調査地を寺域と断定して、それを管理する寺院の推定は控えることとし、今後の当谷戸内での調査成果を待ちたい。

なお、鎌倉市街地遺跡において、宝永の火山灰でパックされた資料はほとんど報告されていない。今後、こうした資料が蓄積されていけば、鎌倉における18世紀初頭までの様相が明瞭に把握されていくものと思われる。

引用・参考文献

高柳光寿　1959『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館

貫　達人・川副武胤　1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂

菊川英政　1993「多宝寺跡　扇ケ谷二丁目250番６外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告　９』第３分冊、69～101頁、鎌倉市教育委員会

玉林美男・菊川英政　1996『化粧坂周辺詳細分布調査報告書（国指定史跡化粧坂・日野俊基墓周辺の鎌倉街道上ノ道に係わる街道・城郭遺構等の詳細分布調査報告書）』鎌倉市教育委員会

馬淵和雄　1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』№10、17－24頁

報告書抄録

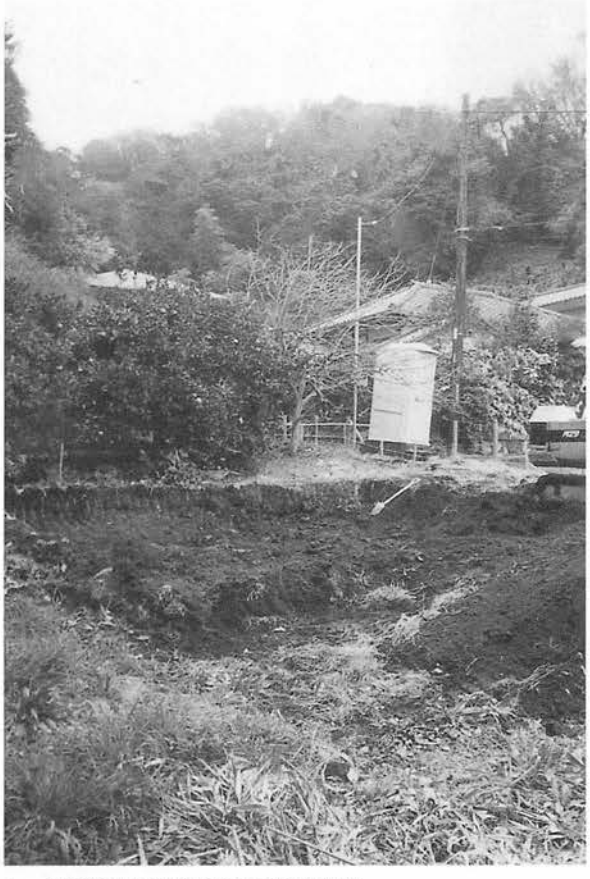
ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成12年度発掘調査報告
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宗臺秀明・宗臺富貴子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むさしおおじ しゅうへんいせき 武蔵大路周辺遺跡	かながわけん かまくらしおおぎ がやつさんちょうめ 神奈川県鎌倉市扇が谷三丁目397番	204	194	35° 19′ 23″	139° 33′ 13″	2000.03.06 ～ 2000.03.31	67	賃貸住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武蔵大路周辺遺跡	中世都市遺跡	中世前期 近世	基壇建物 ピット 溝	かわらけ 瀬戸 舶載磁器 国産近世陶磁器	

写　真　図　版

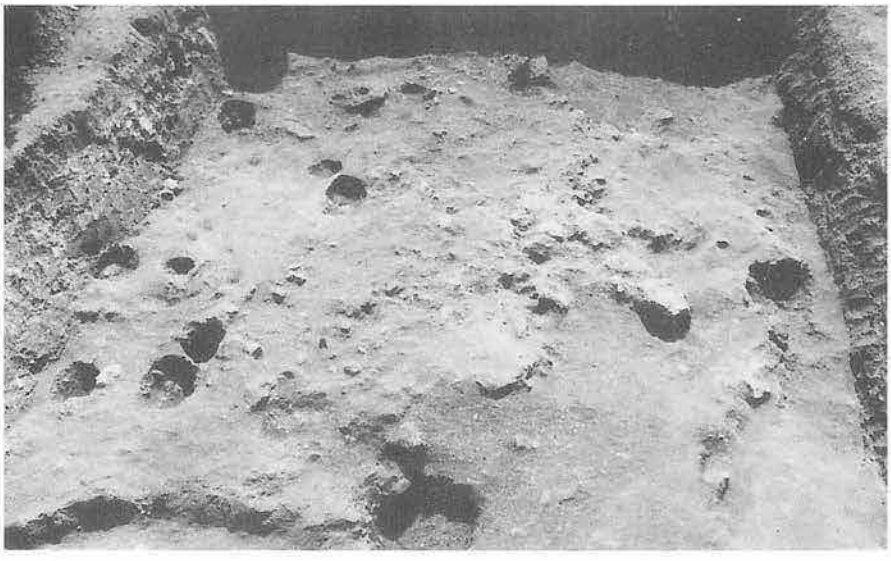
a．発掘前調査地全景（南東より北東の丘陵を望む）



b．調査地より東方の丘陵を望む

C．第２面下トレンチ（北より）

図版 2



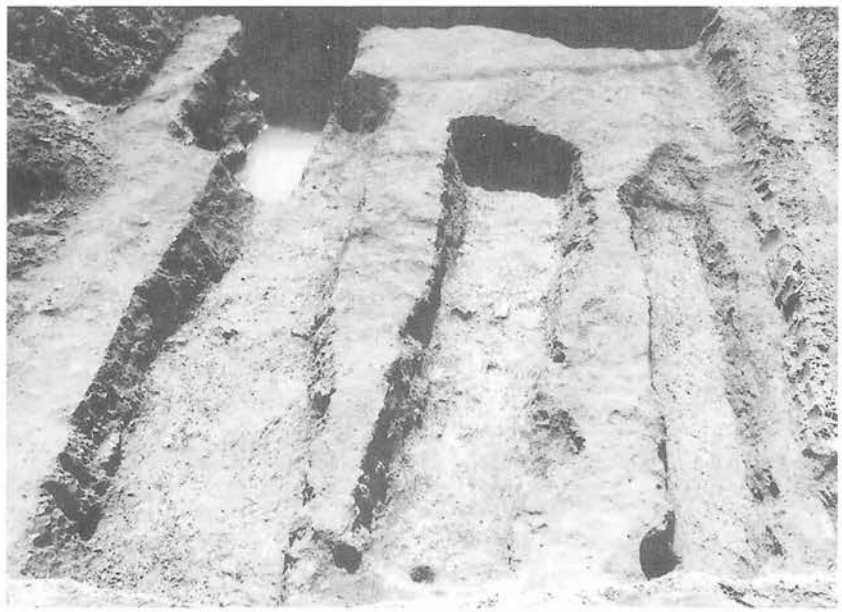
a．第２面Ⅰ区全景（北より）

b．第２面Ⅱ区全景（北より）

C．第２面Ⅱ区版築土中かわらけ

a．第1面Ⅰ区全景（北より）

b．第1面Ⅱ区全景（西より）



C．Ⅱ区近世面全景（北より）

図版 4

18－2

21－1

17－13

17－6

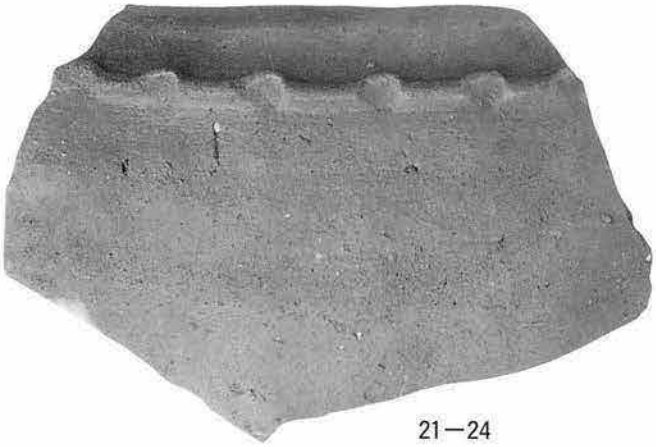
21－4

11－3

17－1

21－2

かわらけ


21－24

常滑

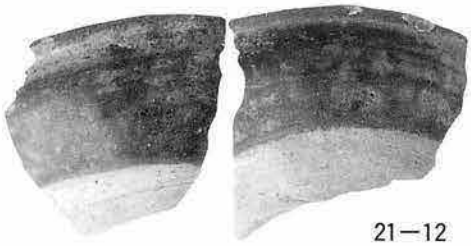
21－10

21－11

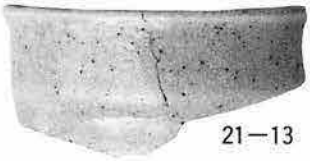
18－6

18－5

瀬戸灰釉


21－12

瀬戸天目


21－13

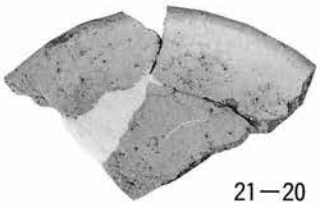
瀬戸もしくは美濃白天目

21－6

21－17

瀬戸？鉄釉

21－15

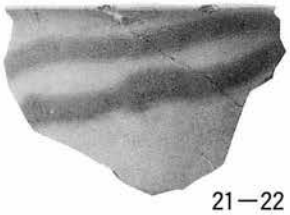


21－20

美濃長石釉

21－19

美濃灰釉



21－22

22－ 8

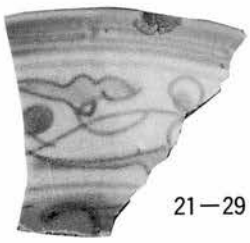
肥前陶器

22－12

21－33

肥前陶器

17－22



21－29

搬入陶磁器

図版 6

硯　17－26

21－34

22－13

17－28

17－27

砥石

台山遺跡（No. 29）

だいやま い せき

鎌倉市台字西ノ台1718番３地点

例　　言

1．本書は鎌倉市台山（№29）遺跡として包括される地域のうち、鎌倉市台字西ノ台1718番３に於ける発掘調査の報告である。

2．発掘調査は個人住宅新築に伴い、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会によって平成12(2000)年３月24日～４月24日にかけて実施された。調査面積は134㎡である。

3．発掘調査団の編成は以下のとおりである。

調査主体：鎌倉市教育委員会

調査担当者：継　実

調査員：松山敬一朗、土屋浩美、若松美智子

調査補助員：岩崎卓治、牛迫こまち

調査協力：荻野勲、杉浦永章、多田徳蔵、照井三喜（以上、(社)鎌倉市シルバー人材センター）、㈱斉藤建設

4．報告書作成メンバーと担当分野は以下のとおりである。

原稿執筆及び編集：継　実

資料整理及び図版作成：継　実、松山敬一朗

遺物写真撮影：継　実

5．出土遺物及び図面・写真等の記録類は鎌倉市教育委員会で保管している。

6．発掘調査及び本書の作成に際し、下記の諸氏･諸機関からご教示、ご協力を賜った。記して深く感謝致します。（順不同・敬称略）

小林康幸（鎌倉市教育委員会）、宗臺秀明、宗臺富貴子

凡　　例

1．遺構実測図中のレベル数値は海抜高である。縮尺は図版中のスケールを参照されたい。

2．遺物実測図の縮尺はすべて３分の１である。

3．遺物観察表中の法量単位はcmである（カッコ付は復元値）。

本文目次

第１章　遺跡の諸環境 ……317
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 ……317
　第２節　遺跡の歴史的環境（周辺の調査事例から） ……317
第２章　調査に至る経緯・調査経過 ……320
　第１節　調査に至る経緯 ……320
　第２節　調査経過 ……320
第３章　調査成果 ……322
　第１節　土層堆積と調査区の微地形 ……322
　第２節　検出遺構 ……324
　第３節　出土遺物 ……324
第４章　まとめ ……328

挿図目次

第１図　台山遺跡調査地点一覧 ……320
第２図　調査区及びトレンチ設定図 ……323
第３図　Ⅰ区土層堆積図 ……324
第４図　Ⅱ区土層堆積図 ……325
第５図　ピット ……324
第６図　出土遺物（弥生・古墳） ……324
第７図　出土遺物（中世） ……325

写真図版

図版１　Ⅰ区全景／検出されたピット／出土遺物／土層堆積状況 ……331
図版２　Ⅱ区全景／南壁の土層堆積と出土した弥生土器／南西隅で露呈した岩盤／西壁土層堆積状況 ……332
図版３　出土遺物 ……333

第１章　遺跡の諸環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

本調査地点はＪＲ横須賀線北鎌倉駅の西方約500ｍに位置する。当該地のある鎌倉市域中央部は多摩丘陵の延長にあたり、発達した丘陵と複雑に入り組んだ谷により構成される地勢を呈している。この丘陵に源を発する小袋谷川沿いには大規模な谷（小袋谷）が開析され、谷の開口部はそのまま柏尾川流域に形成される広範な沖積低地へと連なる。現在、ＪＲ大船駅を中心に市街地が展開するこの低地部は、縄文海進時には海水が浸入し入江が形成され（大船入江[1]）、小袋谷内は湿泥地であったものと考えられている（赤星1967）。本調査地点はこの谷を北側に臨む標高46ｍの山の中腹に位置する。本調査地点のある丘陵は「台峯」と呼ばれ、標高90ｍ台を頂とする尾根が連なるが、丘陵北側山腹の傾斜は比較的緩やかで、標高50ｍ前後には帯状に台地状の地形が見られる。また、小袋谷内の標高は20ｍ前後を測る。地質的には、後期鮮新世から第四紀前期更新世に堆積した凝灰質砂岩を主とする浦郷層・野島層を基盤としている。

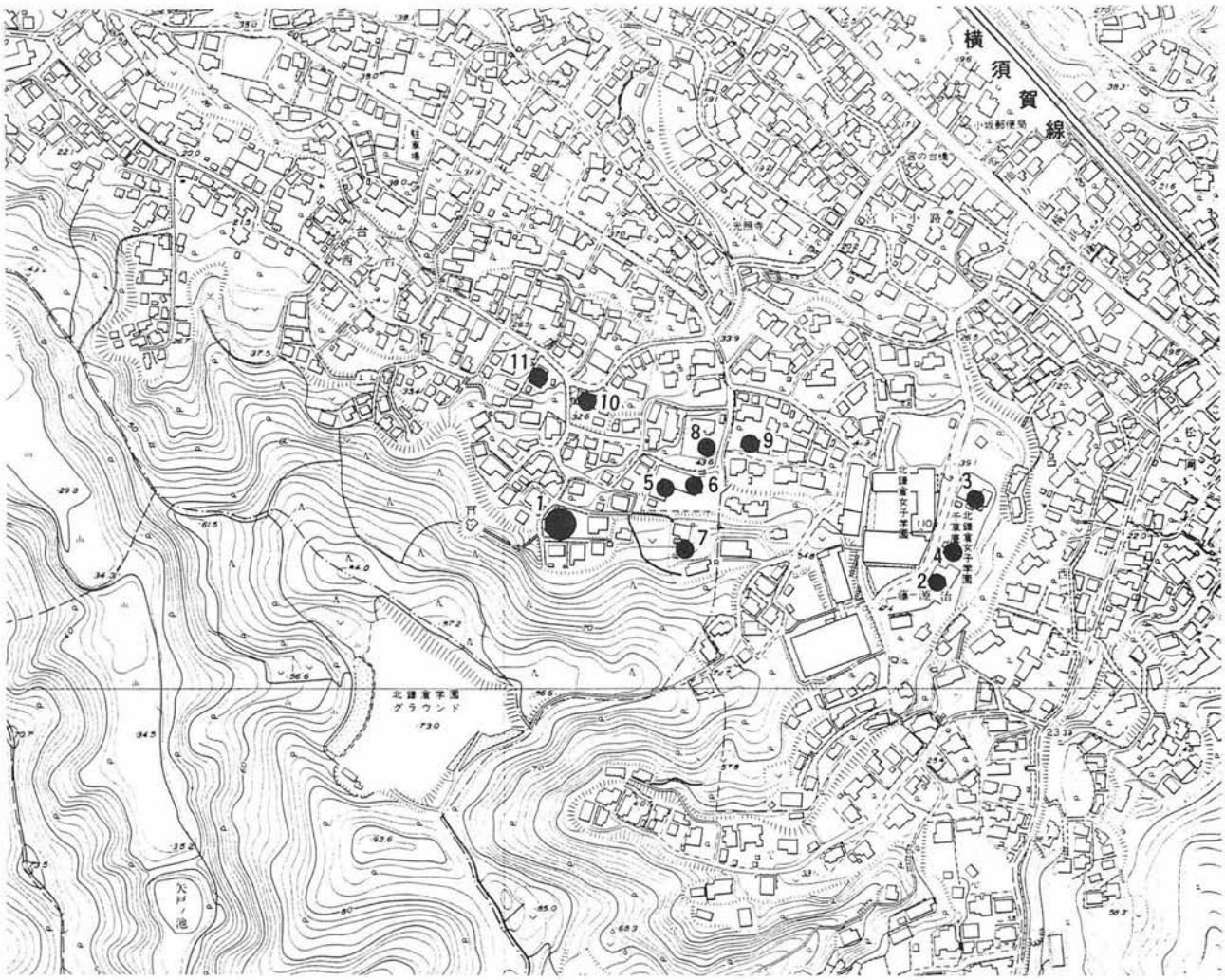
第２節　歴史的環境（周辺の調査事例から）

現在の台山地区は頂部付近は未だ緑に覆われているものの、小袋谷に至る斜面及び小袋谷内、加えて樹枝状に形成された小谷内は個人住宅の密集する地域となっている。当該地区一帯は「台山遺跡（神奈川県遺跡台帳№29）」として登録されており、『鎌倉市史』考古編（赤星1967）では弥生時代中期後半（宮ノ台式期）から古墳時代にかけての遺跡として紹介されている。

遺跡範囲内ではこれまでに10件の発掘調査が実施されてきた（第１図）。調査の端緒を切ったのは1970年に実施された東京大学教養学部によるもので、弥生時代後期の竪穴住居址１軒、古墳時代後期の竪穴住居址１軒、帰属時期不明の竪穴住居址１軒などの遺構と遺物、縄文時代の石鏃などが発見された。この調査は学術目的によるもので、台山遺跡の実体を初めて明らかにしたという点で評価される調査であった。1980年代以降になると、個人住宅や学校施設の新・改築により破壊を免れない遺跡の記録保存という目的ではあったが、遺跡内各所において活発に調査が実施されるようになった。当該地域では主たる開発要因が個人住宅の建築に係るものであるため、調査が比較的狭小な面積を対象とされることが多かったが、その中で学校法人北鎌倉女子学園地内では1983、90、92年の三次にわたり、合計1750㎡とまとまった面積を対象に調査が実施され、弥生時代中期後半（宮ノ台式期）に出現した集落が奈良時代の空白期をはさみ平安時代前期まで存続することが確認された。この他の調査は台地縁辺部にある北鎌倉女子学園に対し、やや奥まった地点で実施されている。これらのうち、第１図－５～９は台地上、10、11は小谷内での調査である。最近実施された５、６地点の調査は北鎌倉女子学園地に次ぐ面積（合計約400㎡）が調査され、弥生時代中期後半（宮ノ台式期）より奈良時代の竪穴住居址を主体とする遺構群が発見され、特に－５地点では古墳時代後期の掘立柱建物址が地区で発見されている。

このように、台山遺跡では台地上には弥生時代に集落が出現して以降、継続的に集落造営地として機能する状況が明らかとなりつつあるが、一方の谷内の状況はどうであろうか。前述したように谷内での調査事例はわずかに２例を数えるのみである。台地上に見られた先史～古代の遺構は姿を消す一方、中世（今のところ14世紀代）を上限とする比較的新しい時代の遺構の造営が活発で、11の地点では谷筋に並行する溝（道路？）により区画された岩盤削平面上にピットが多数確認され、建物や柵などの一部である可能性が示唆されている（野本1997）。中世の遺構は北鎌倉女子学園地内でも道路状遺構、中世から

近代にわたる地業の痕跡(第1図－2地点)、段切り状の切り岸や柵列(第1図－4地点) などが検出されている。特に4の地点では柵列を構成するピットのうち一つから密教系法具である銅製の六器が出土し、報告者は中世地業のあり方や周辺の社寺との関連から、寺院関連施設の存在を示唆している(宗臺1993)。当該地区より東側、山ノ内地域は中世鎌倉の北の境界として機能し、鎌倉幕府滅亡までは北条氏の私領、その後は山内上杉氏の居館が置かれたほか、数多くの寺院が建立されている。台山の東を限る「瓜ヶ谷」には多くのやぐらがみられ、谷の入口には円覚寺の堂である十王堂があったことが「十王堂橋」の地名から読める。台山の東麓には藤沢清浄光寺の末である光照寺が今も残る。光照寺は山号を西台山英月院光照寺といい開山は一向、開基は不明である。この他に、付近にはかつて臨済宗箱根早雲寺の末である徳蔵山東渓院があったらしい。東渓院は、延宝八(1680)年豊後国大野郡原城主中川久清が娘の供養のために建てた位牌堂で、本尊に阿弥陀如来を祀る。明治五(1872)年に廃絶し、本尊の阿弥陀如来は山ノ内光照寺に移された。光照寺山門も東渓院より移したものと伝わる。また、本調査地点の前にある稲荷社は台上町の鎮守で受気母知命を祭る。勧請年月は不明である。このほか、台山の東のはずれ、北鎌倉女子学園がある一帯は「藤源治」という字名が付され、『相模国鎌倉郡村誌』によれば、字名の由来につい



1　本調査地点
2　台山藤源治(1次)　**文献** 手塚ほか1985
3　台山藤源治(2次)　**文献** 大河内1996
4　台山藤源治(3次)　**文献** 宗臺1993
5　台字西ノ台1733番3地点　**文献** 若松1999
6　台字西ノ台1733番1地点　**文献** 若松1998
7　台字西ノ台1737番地点　**文献** 丑野1974
8　台字西ノ台1730・1732番1地点　**文献** 玉林・新国1988
9　山ノ内字藤源治874番2地点　**文献** 斉木・宗臺1985
10　台字西ノ台1624番3外地点　**文献** 大上1988
11　台字西ノ台1627番地点　**文献** 野本1997

第1図　台山遺跡調査地点一覧（S＝1／2500）

ては「古刀銘尽大全」から引いて肥前の鍛冶助直（＝東源治）が正元元(1259)年～文永五(1268)年まで住した処とされる。なお、小字名「藤源治」は「藤源次」・「東願寺」と充てられることもあったようだ。後者の「寺」に着目すると、かつて山ノ内には東現寺という寺があったことが『風土記稿』に見え[2]、「藤源治」の由来について何か関わりがあるのかも知れない。

註

1）赤星直忠氏による（赤星1967.3頁）。

2）『鎌倉廃寺事典』(貫達人・川副武胤1980.173頁)

参考文献

赤星直忠　1967『鎌倉市史』考古編（再版）　鎌倉市
丑野毅　1974「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告」『人物科学紀要第59輯』東京大学教養学部人文科学科
大上周三　1992「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8　鎌倉市教育委員会
大河内勉　1996『台山藤源治遺跡－第二次調査報告－』台山藤源治遺跡発掘調査団
斉木秀雄・宗臺秀明　1985「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1　鎌倉市教育委員会
宗臺秀明　1993『台山藤源治遺跡－第三次調査報告－』台山藤源治遺跡発掘調査団
高柳光寿・貫達人ほか　1979『鎌倉市史』社寺編（4版）　鎌倉市
玉林美男・新国哲也　1988「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4　鎌倉市教育委員会
手塚直樹ほか　1985『台山藤源治遺跡』台山藤源治遺跡発掘調査団
貫達人・川副武胤　1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
野本賢二　1997「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13　第1分冊　鎌倉市教育委員会
若松美智子　1998『台山遺跡』東国歴史考古学研究所調査研究報告第17集　台山遺跡埋蔵文化財発掘調査団
若松美智子　1999「台山遺跡(No.29)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15　第2分冊　鎌倉市教育委員会

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

今回の調査は個人住宅の建て替えに伴うものである。当該地は「台山遺跡（鎌倉市No.29）」として登録される遺跡包蔵地に属していることから、まず、平成12（2000）年１月20日、21日の２日にわたり確認調査が実施された。確認調査はトレンチによる遺構確認という方法を採り、住宅建築範囲内に２×３ｍのトレンチを１ヶ所設定し調査を行った。その結果、現地表下80～140cmに中世遺物包含層の堆積を発見、その下にもやはり中世遺物を包含する土層の水平堆積を確認した。更に下層には古代～先史時代の遺物包含層も確認され、遺構の発見には至らなかったものの、遺跡地一帯に先史～中世にわたる幅広い時代の遺構が存在する可能性高しとの報告がなされた。住宅の建築にあたっては建物基礎として鋼管杭を６ｍほど打ち込むという建築方法が採られるため、遺構が存在した場合、破壊は不可避という判断から本格調査の実施が決定された。調査は建物部分約134㎡を対象とし、平成12（2000）年３月24日から実働30日という調査期間が設定された。また、発掘調査により生ずる廃土は場内処理するという事であったので、調査は「Ｌ」字状の調査区を二分して行うことにした。

第２節　調査経過

以上のように、調査は３月24日に着手することが決定されたので、それに先立つ３月22日には現地に調査機材を搬入した。前述のように二分割した調査区は、便宜上東側を「Ⅰ区」、西側を「Ⅱ区」との調査区名称を付し、Ⅰ区より調査を開始した。

第Ⅰ区の調査

確認調査によって現地表から80cmは無遺物層であることがわかっていたので、この部分は重機（バック･ホー）を用いて除去した。更にその下に堆積する中世遺物包含層も遺構が発見される可能性が認められなかったため、調査期間との兼ね合いからやはりバック･ホーを用い掘削した。掘削は出土遺物に注意を払いながら慎重に行い、遺構の発見が予想される現地表下140cmの水平堆積土層を露呈させた。土層表面は人力により精査を行ったが遺構は発見されず、また、土層そのものも人為的地業面ではなく自然堆積の所為であることが判明したため、人力により更に掘り進めることにした。調査は素掘りということであったので掘削深度は安全上の見地から現地表より２ｍまでとし、そこまで人力により掘り下げたが、結局遺構の発見には至らず、中世遺物包含層がこの深度まで厚く堆積することを確認するに留まった。

台山遺跡ではこれまで中世よりもむしろ弥生時代を中心とする遺構群（主に竪穴住居址）が多数発見されており、本調査地点でも該期の状況を幾らかでも把握しておきたいという見地から調査区中央に十字にトレンチを設定し掘り下げた。その結果、古墳時代の遺物包含層及び当該期のピット２穴を検出し調査を終えた。

第Ⅱ区の調査

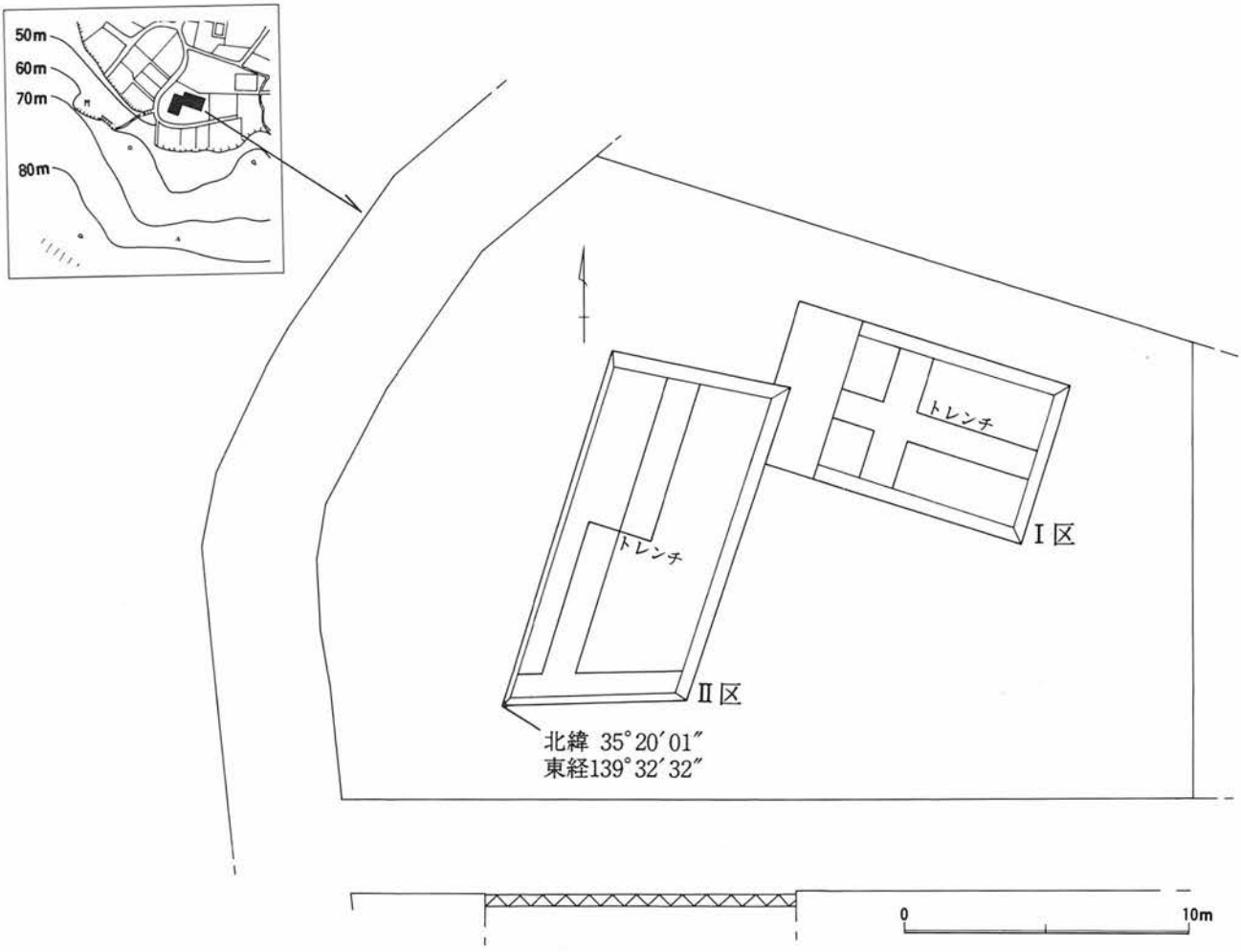
Ⅰ区同様、無遺物層及び中世遺物包含層を重機を用いて除去した。その後は人力で掘削及び遺構確認作業を続けたが、Ⅱ区では弥生～古墳時代、中世の遺物包含層の堆積を確認したのみで遺構は発見できなかった。ちなみに調査区南西隅では岩盤を確認している。

調査はやはり現地表下２ｍまで調査区全面を対象に行い、その後調査区中央にＴ字にトレンチを設定し掘り下げた。最後に国土座標を調査区内に振り込む作業を行い、調査開始からちょうど一月目の４月24日に調査を終了、機材の撤収を終えた。以下に調査の大まかな日程を記しておく。

調査日程

3月22日（火）　調査機材搬入。
3月24日（金）　第Ⅰ区調査開始。重機により土層掘削開始。
3月28日（火）　重機による掘削終了。人力による遺構確認作業開始。
4月3日（月）　トレンチ調査開始。
4月5日（水）　雨天中止。
4月6日（木）　第Ⅰ区全景写真撮影。第Ⅰ区調査終了。
4月7日（金）～8日（土）　第Ⅰ区埋め戻し。
4月10日（月）　第Ⅱ区調査開始。重機により土層掘削開始。
4月12日（水）　重機による掘削終了。人力による遺構確認作業開始。
4月17日（月）　トレンチ調査開始。
4月19日（水）　第Ⅱ区全景写真撮影。
4月20日（木）～21日（金）　雨天中止。
4月24日（月）　国土座標移動、機材撤収。調査終了。

結果的に本調査で発見した遺構はⅠ区で検出した古墳時代のピット2穴のみであった。また、両調査区あわせた出土遺物の総量はテンバコ1箱弱である。



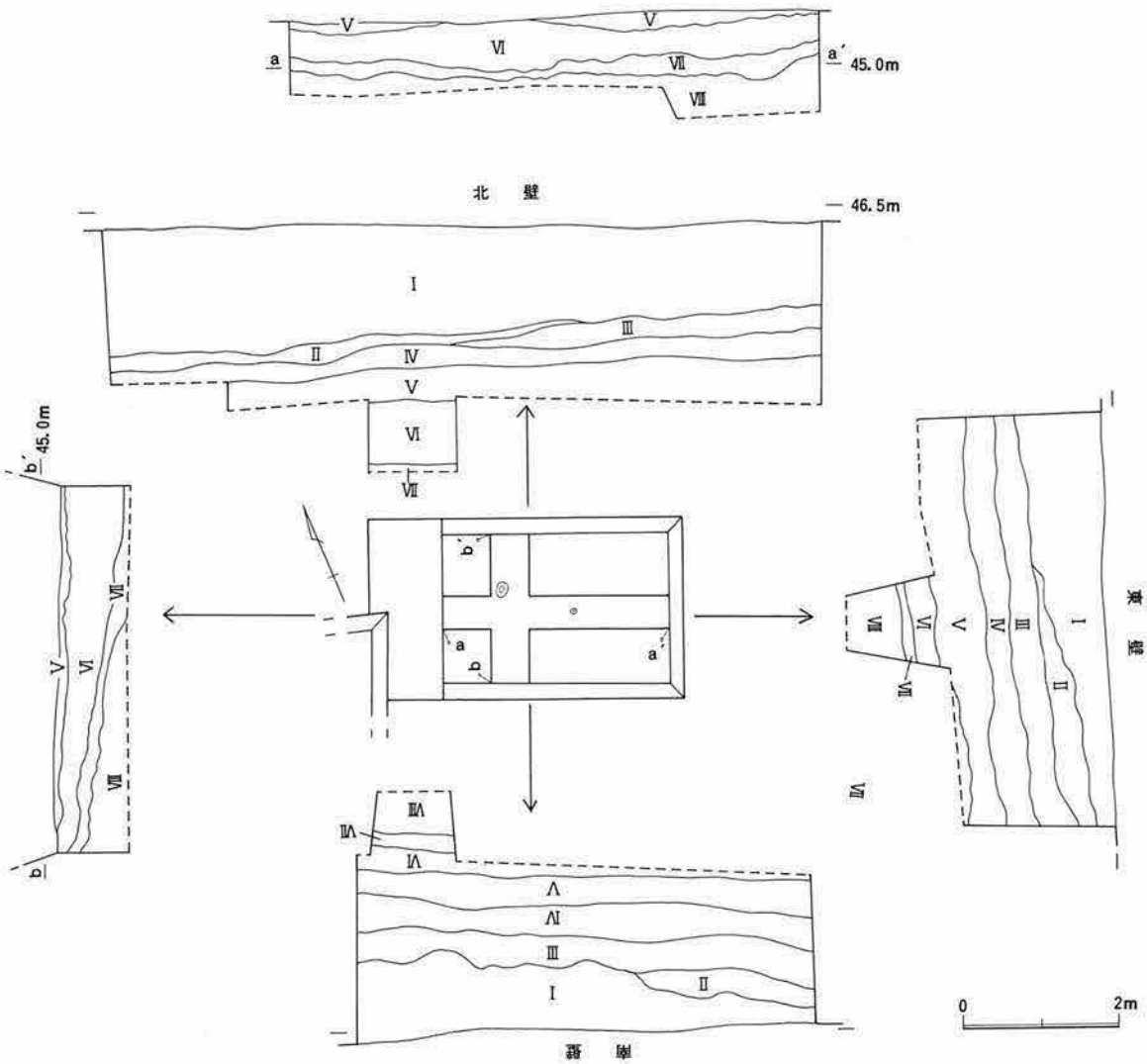
第2図　調査区及びトレンチ設定図（S＝1／250）

第３章　調査成果

前章で述べたように発掘調査で発見された遺構はピット２穴のみであるが、後述する先史時代の出土遺物の中には周辺に遺構の存在を窺わせるものが存在する。よって本章では検出した遺構、遺物の説明を述べると共に、堆積土層と調査地点の微地形について若干の説明を加える。

第１節　土層堆積と調査区の微地形

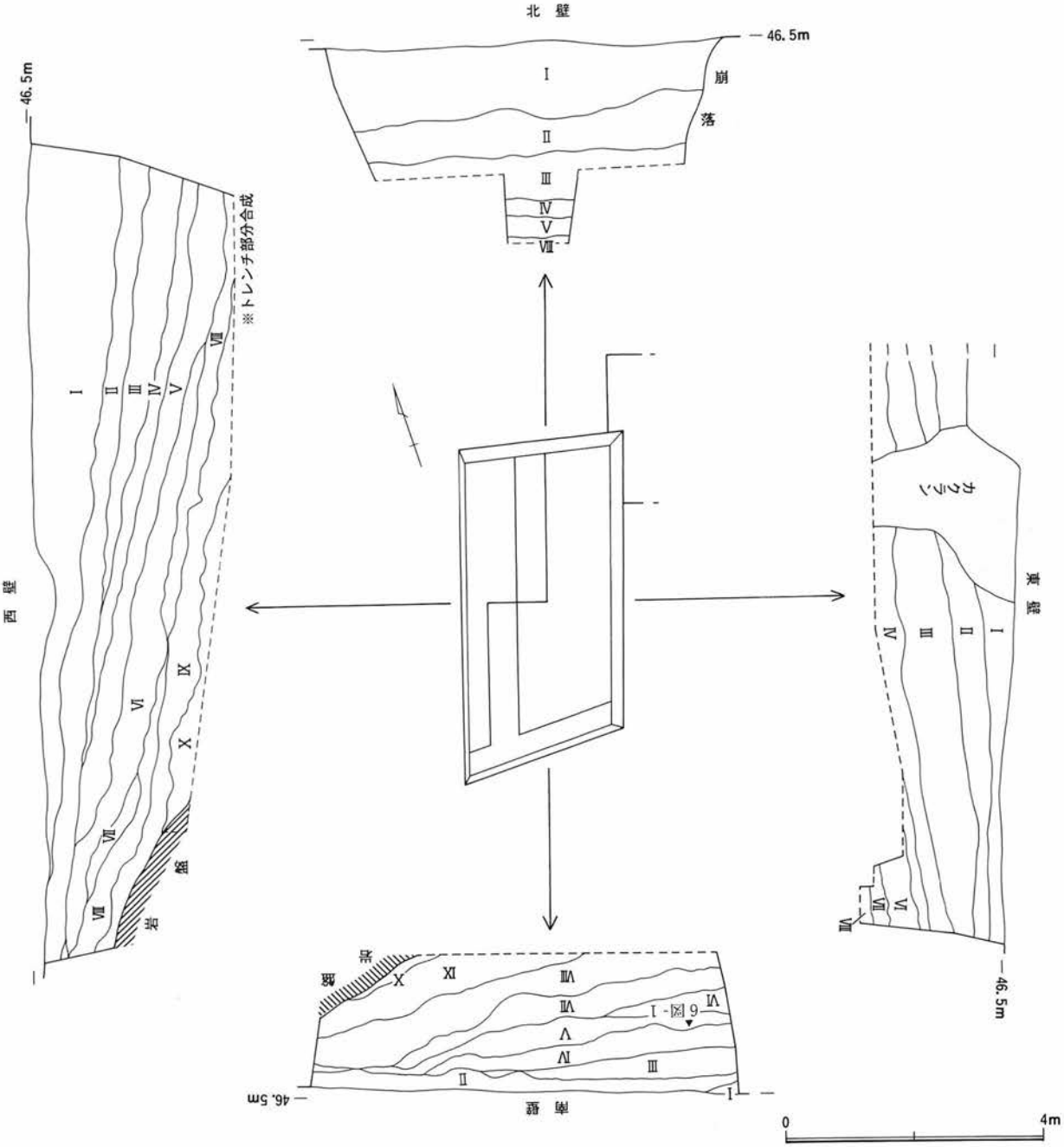
調査地点は標高約44.7mに位置し、平坦な宅地となっている。周辺にも個人住宅が建ち並ぶが、原地形が山腹斜面であるのでそれぞれ雛壇状に地業がなされた上に住宅が建てられている。堆積土層のうち、Ⅰ層としたガラス片や近代もしくは現代の陶器片が混入する暗黄褐色砂質土がその際の盛土と思われる。その堆積幅は調査区南側で10cm前後、北側では最大80cmになり、住宅建築にあたって南側は削平した上に盛土、北側は斜面に厚く盛土をし敷地を確保している。この土層は当初、より厚い堆積土として捉えていたが、観察の結果、若干のしまりや粘性の違いに加え、決め手となった包含遺物の違いから２層に分層した。



第３図　Ⅰ区土層堆積図（S＝１／100）

Ⅱ層からⅥ層は中世遺物を主とする遺物包含層で、南北(斜面)方向に平均7°、東西方向はⅠ区で平均3°、Ⅱ区では平均9°の傾斜角をもって緩やかに波打つように堆積する。土質はⅡ層のみ砂質土（色調は暗黄褐色)で、Ⅲ層以下は粘質土(色調は暗黒褐色、暗茶褐色、茶褐色)である。いずれの土層も橙色スコリア、基盤層である泥岩の塊や粒子などを含み強くしまる。土層の堆積幅はそれぞれ20～50cm前後を測り、傾斜がきつくなるⅡ区では西側(上方)に向かって堆積幅を減ずる。遺物はⅠ区、特にⅤ層に集中して検出され、Ⅵ層では急激に減少する。中世遺物のほかには、弥生時代中期後半～古墳時代の遺物の混入が見られる。

Ⅶ層は古墳時代の遺物包含層である。土層の傾斜はⅠ区では南北方向に平均7°の傾斜、東西方向はⅠ区ではほぼ水平堆積を見せるが、Ⅱ区では平均9°とはっきりとした傾斜を見せる。色調暗褐色を呈する粘質土で、橙色スコリア、泥岩粒子、灰白色微粒子などの含有物を少量含む。なお、土層中に含ま



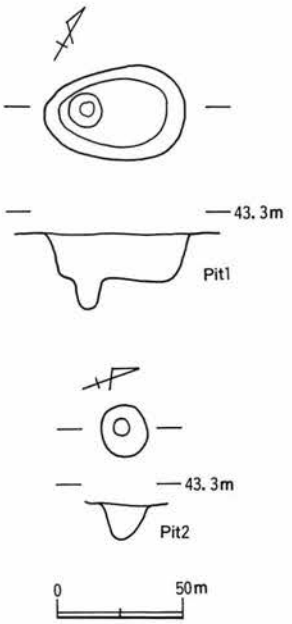
第4図　Ⅱ区土層堆積図（S＝1／100）

れる遺物量はわずかである。

Ⅷ層～Ⅹ層は無遺物層である。土層の傾斜は南北（斜面）方向に平均９°、東西方向はⅠ区がほぼ水平、Ⅱ区ではⅧ層が約10°、Ⅸ層が20°弱、Ⅹ層では約30°とより傾斜を強め、全体的に細かく波打つように堆積する。土層は色調暗茶褐色を呈する粘質土で、橙色スコリア、泥岩粒子、灰白色微粒子などを含み、その含有量は下層に行くに従い減少する。Ⅱ区北西隅ではⅧ層下（現地表下約1.5m）で岩盤面が露出、その傾斜角はやはり約30°前後であり、土層の堆積が岩盤にほぼ並行することが判明した。なお、Ⅰ区で検出された２基のピットはⅧ層上で発見されている。

第２節　検出遺構

本調査で検出した遺構はピット２基のみで、いずれもⅠ区中央で発見された。検出層位はⅧ層上で、覆土はⅦ層を基本とするものである。ピット１は長円形平面を呈し、規模は長軸58cm、短軸38cm、確認面からの深さは20cmを測る。床面には更に直径12cm、深さ15cmのピットが確認された。ピット２は円形平面を呈し、規模は直径20cm、確認面からの深さは15cmを測る。周囲に床面などは確認されなかったため、竪穴住居に伴うものではない。また、規模の点から掘立柱建物址とも考え難く、性格は不明である。ピット１は古墳時代中期以降の所産と思われ、覆土中から該期の甕片や、弥生時代後期～古墳時代前期の壺または甕胴部片が出土した。ピット２からは遺物は出土しなかったが、覆土と検出層位から見て、ピット１と同時期の所産と思われる。



第５図　ピット

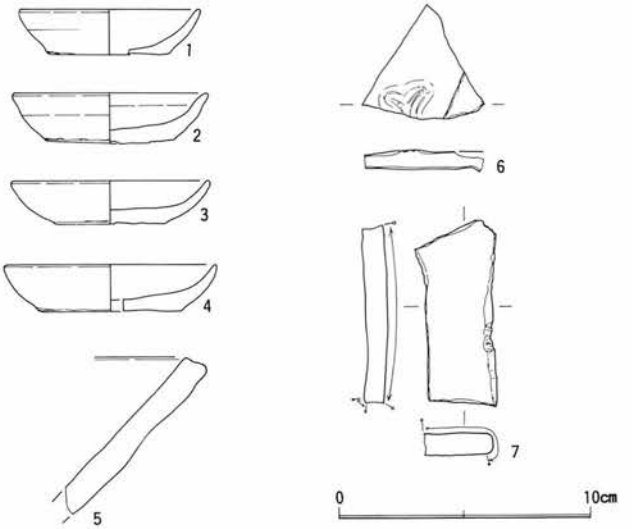
第３節　出土遺物

中世（第６図、表１、図版３）

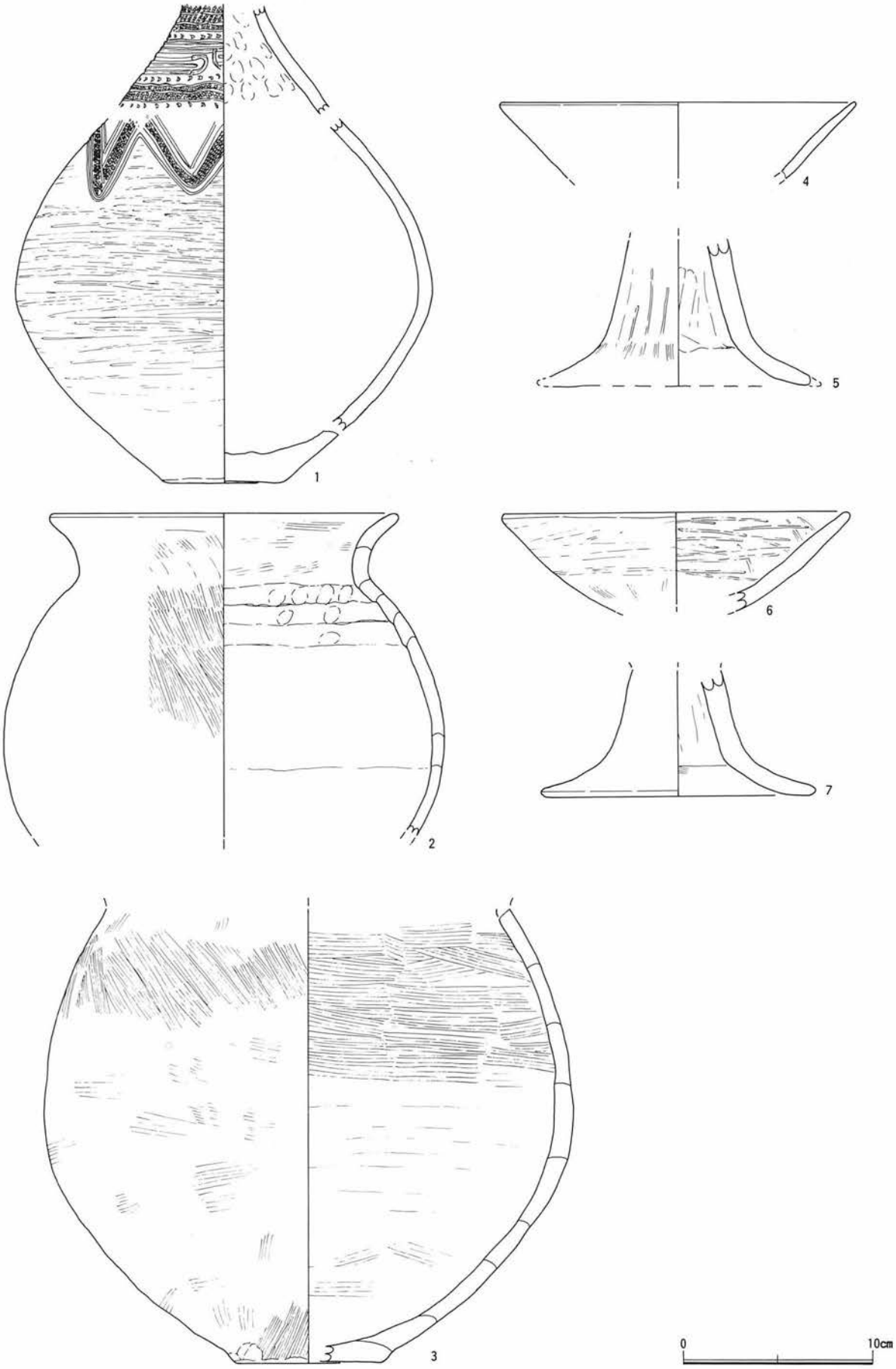
中世遺物は殆どが第Ⅰ区から出土した。出土層位はⅡ～Ⅵ層で、特にⅤ層中に集中して認められ、Ⅵ層では急激に減少する。遺物組成は95%（破片数529点）がかわらけ、次いで常滑甕３%（破片数19点）、瀬戸製品（入子，袋物）１%（破片数６点）、青磁（碗，盤）0.5%（破片数３点）、山茶碗0.1%（破片数２点）、瓦質製品0.1%（破片数1点）の順となる。完形品はなく、すべて破片資料である。

第６図－１～４はかわらけである。時期的には13世紀後半から14世紀前半代のものと思われるが、図示し得たのは小型品のみであることと、堆積土からの出土ということなどから、かわらけ全体の組成から時期的な詳細を追うことはできなかった。ちなみに本遺跡では手づくねかわらけはまったく出土していない。胎土としては砂質のものと粉質のものの二種類がある。

かわらけ以外では第６図－５～７に示した青磁盤状製品、常滑片があるのみで、瀬戸製品、山茶碗などに図示し得る物はない。６の青磁は内面に魚の尾ヒレが確認でき、恐らく双魚文が削り出されている



第６図　出土遺物（中世）（S＝１／３）



第７図　出土遺物（弥生・古墳）（Ｓ＝１／３）

ものと思われる。5の鉢は内面に使用による磨滅は特に認められなかった。7は甕片を転用した、いわゆる磨り常滑である。

古墳時代（第7図、表1、図版3）

古墳時代の遺物はⅥ・Ⅶ層を主体としてⅤ層からも出土している。時期的には該期を通して遺物が見られるが、単純に破片数で比較するならば、それらの内の半分は弥生時代後期末～古墳時代前期のものが占め、次いで後期、中期の順となる。図示し得た中～後期の遺物6点以外はすべて小片で占められ、出土量としても破片数は70点程度と少量である。遺物はその殆どが土師器であり、須恵器は後期の甕の破片がわずかに3点出土したに留まる。

弥生時代（第7図、表1、図版3）

弥生時代の遺物はⅥ・Ⅶ層から出土した。時期的にはⅡ区で出土した中期後半(宮ノ台式期)の壺1個体を除いてはすべて後期末～古墳時代前期のもの(前述したもの)で占められる。第7図－1は前述した宮ノ台式期の壺である。頸部、胴部、底部それぞれに接点が無く、一応の復元図を提示した。施文のモチーフには疑流水文や沈線区画の縄文帯などが用いられており、時期的には宮ノ台式期中盤と思われる。

表１　出土遺物観察表（中世）

第６図	器　種	観　察　内　容
－1	かわらけ	法量　口径(7.0)　底径(4.8)　器高1.8　残存率　1／5　せいけい　ロクロ成形　内底面は指頭ナデ　胎土　橙色粉質土　赤色酸化粒子やや多し，角閃石，黒色微砂など微量含む　出土位置　Ⅰ区Ⅴ層中
－2	かわらけ	法量　口径7.8　底径5.2　器高2.0　残存率　1／3　せいけい　ロクロ成形　外底面にスノコ状圧痕　内底面は指頭ナデ　胎土　淡橙色粉質緻密土　黒色微砂やや多し，角閃石，赤色酸化粒子など微量含む　出土位置　Ⅰ区Ⅴ層中
－3	かわらけ	法量　口径7.8　底径4.2　器高1.7　残存率　1／4　せいけい　ロクロ成形　外底面にスノコ状圧痕　内底面は指頭ナデ　胎土橙色粉質土　赤色酸化粒子やや多し，角閃石，黒色微砂など微量含む　出土位置　Ⅰ区Ⅴ層中
－4	かわらけ	法量　口径8.1　底径5.6　器高1.9　残存率　1／4　せいけい　ロクロ成形　外底面にスノコ状圧痕　内底面は指頭ナデ　胎土　赤褐色弱砂質土　白色針状物，黒色微砂，角閃石など微量含む　出土位置　Ⅰ区Ⅴ層中
－5	常滑　鉢	胎土　暗灰～茶色　白色微粒，小石など多く含む　出土位置　Ⅰ区Ⅴ層中
－6	スリ常滑	胎土　暗灰色土　白色微粒を含む　出土位置　Ⅰ区Ⅴ層中
－7	青磁　鉢	残存率　底部小片　素地　黒色微砂を少量混じえる灰白色粘質土　出土位置　Ⅰ区Ⅳ～Ⅴ層中

表２　出土遺物観察表（弥生・古墳時代）

第７図	器　種	観　察　内　容
－1	壺	法量　底径6.4　胴部最大径(22.0)　残存率　頸部～底部１／３　装飾　外面頸部に細縄文ＬＲ→波状沈線３条，半裁竹管による刺突を上下に配した３条一単位の疑流水文,2重のヘラ描き沈線に区画された細縄文ＬＲ　せいけい　外面－ヨコヘラミガキ，ナデ　内面－ナデ　胎土　砂質緻密土　黒色微砂，粒子状泥岩白色針状物などやや多く含む，角閃石少量含む　焼成　良好色調　黄橙色　出土位置　Ⅱ区Ⅴ層中
－2	土師器 甕	法量　口径(18.0)　胴部最大径（23.2）　残存率　口縁～胴部上半１／３　せいけい　外面－口唇部ナデ，口頸部～胴部タテハケ内面－口頸部ハケ→ナデ，胴部ヘラナデ，ナデ　胎土　砂質緻密土　白色針状物，黒色微砂，角閃石，灰白色微粒子，粒子状泥岩などやや多く含む　焼成　良好　色調　暗褐色　出土位置　Ⅰ区深掘トレンチ№.1
－3	土師器 甕	法量　底径(8.0)　胴部最大径(28.0)　残存率　胴部～底部１／４　せいけい　外面－ナデ，粗いハケ　内面－ナデ，粗いハケ胎土　砂質緻密土　黒色微砂，粒子状泥岩など多く、白色針状物，角閃石など少量含む　焼成　良好　色調暗黄橙色　出土位置　Ⅰ区深掘トレンチ№.1
－4	土師器 高坏	法量　口径（18.6）　残存率　坏部１／３　せいけい　外面－ナデ　内面－ナデ　胎土　砂質緻密土　白色針状物，黒色微砂，角閃石など含む　焼成　良好　色調　淡橙色　出土位置　Ⅰ区深掘トレンチ№.1
－5	土師器 高坏	残存率　脚部１／３　せいけい　外面－ナデ，ヘラナデ，柱状部下端のみハケ　内面－ハケ，ヘラナデ　胎土　砂質緻密土　白色針状物，黒色微砂，角閃石など含む　焼成　良好　色調　淡橙色　出土位置　Ⅰ区深掘トレンチ№.1　備考　4と同一個体か
－6	土師器 高坏	法量　口径(18.0)　残存率　坏部２／３　せいけい　外面－上半粗いナデ，下半粗いハケ，ナデ　内面－ナデ→ヘラミガキ　胎土　粉質緻密土　白色針状物，角閃石，黒色微砂など含む　焼成　良好　色調　橙色　出土位置　Ⅰ区深掘トレンチ№.1
－7	土師器 高坏	法量　底径(14.0)　残存率　脚部１／２　せいけい　表面磨耗により不明　胎土　粉質緻密土　白色針状物，角閃石，黒色微砂など含む　焼成　良好　色調　橙色　出土位置　Ⅰ区深掘トレンチ№.1　備考　6と同一個体か

第4章　まとめ

今回の調査では遺構としては古墳時代のピット2基を検出したに留まる。しかしながら堆積土中には弥生時代から中世に至る幅広い時代の遺物が含まれており、調査地点一帯が人々の生活と密接に関わる場所であった事が推察される。遺構の検出面は現地表から2m以上の深さにあり、安全上範囲を拡大できず、その性格については残念ながら不明とせざるを得ない。但し、本文中にも触れたように、検出されたピットは、竪穴住居や掘立柱建物などとは無関係のようである。

台山遺跡に於けるこれまでの調査は遺跡範囲の東側部分に集中している。調査地点の地形としては、今回の調査を含むこれまでの全11件の調査例のうち9件が丘陵部、2件が小谷部となる。丘陵部では弥生時代、古墳時代を主体とする集落が発見されているのに比べ、谷部の調査では中世の溝が確認されたのみである。現状では総調査面積の格差が大きく、対比し得る段階ではないが、前述集落の展開を考究する上で示唆的な成果である。ともあれ今回の調査は、台山遺跡の集落の西側への広がりを予感させる成果を提示したという点で評価されよう。柏尾川及びその支流を眼下に望む丘陵上には他にも岩瀬上耕地遺跡、山崎倉久保遺跡などが知られ[1]、それぞれ弥生時代中期後半、古墳時代前期より集落が営まれている状況が確認されている。これらの集落では、丘陵上の平場のみならず傾斜角30°を越えるような急斜面にも竪穴住居が構築されているが、このような地形条件の悪い場所に住居が構築される背景には、集落の占地に足る良好な土地が確保できないといった地理的制約だけでなく、周囲の環境からもたらされる集落経営に関わる様々な収益性（例えば食料生産）といったものが考えられよう。いずれにせよ現状では仮説の域を出るものではなく、今後は遺構の調査のみならず、地形の細かな観察や土壌に含まれる自然遺物の科学的分析などの充実により集落を中心とする遺跡の成立要因の解明が期待される。

1）岩瀬上耕地遺跡

継　実　1991「岩瀬上耕地遺跡の調査」『第1回鎌倉市遺跡調査・研究発表会』発表要旨

山崎倉久保遺跡

継　実　1996「倉久保遺跡（№226）」『鎌倉市緊急調査報告書』12　第2分冊　鎌倉市教育委員会にそれぞれ所収。

写　真　図　版

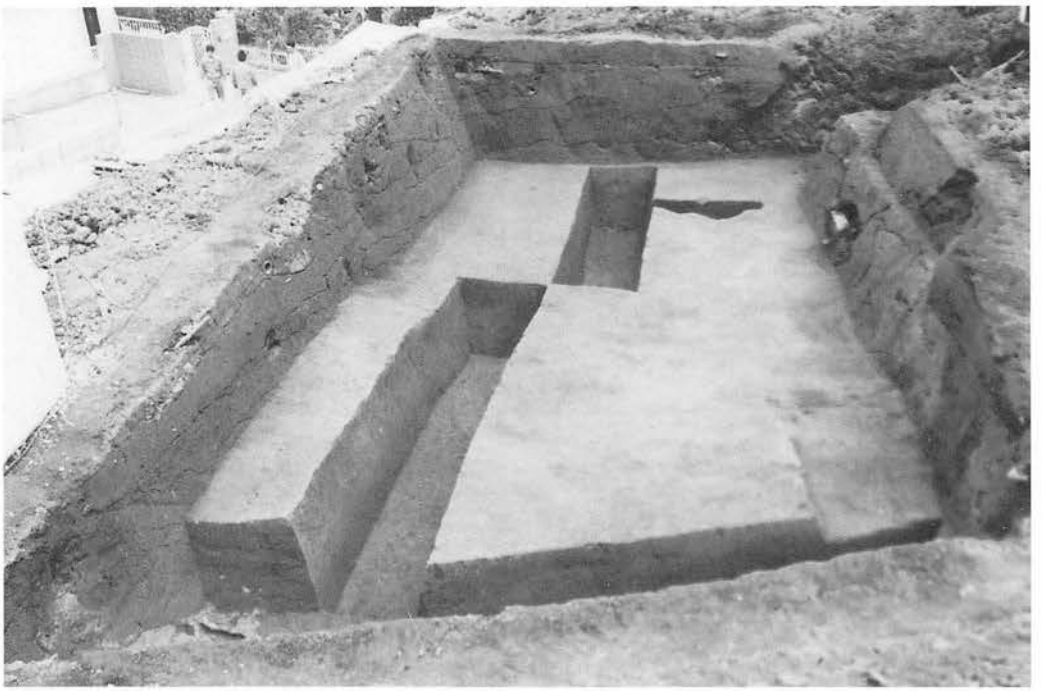
Ⅰ区全景（西から）

検出されたピット

出土遺物（6図2－7）

土層堆積状況

図版 2

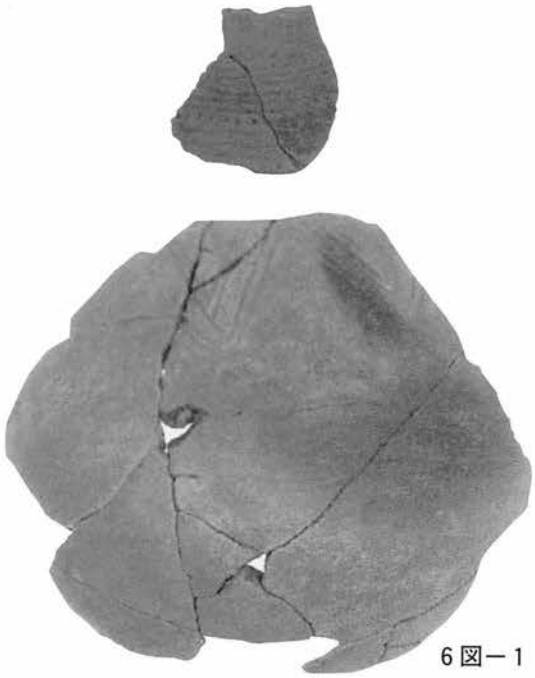


Ⅱ区全景（南から）

南壁の土層堆積と出土した弥生土器（6図－1）

南西隅で露呈した岩盤

西壁土層堆積状況



6 図－1

6 図－2

6 図－4

6 図－6

6 図－5

6 図－7

7 図－1

7 図－3

7 図－7

7 図－4

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成12年度発掘調査報告
巻次	17
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	継　実
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号　☎0467－23－3000
発行年月日	2000年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
台山遺跡（だいやまいせき）	神奈川県鎌倉市 台字西ノ台 1718番3	14204	29	35° 20′ 01″	139° 32′ 32″	20000324 ～ 20000424	134㎡	個人住宅の建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
台山遺跡	遺物包蔵地	弥生時代中期 後半 古墳時代中期 鎌倉時代 戦国時代	ピット2穴	弥生式土器 土師器 かわらけ 常滑 瀬戸 舶載青磁	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　17

平成12年度発掘調査報告（第２分冊）

発 行 日　平成13年３月31日

編　　集
発　　行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　神奈川印刷株式会社